

阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査報告 1

山王川原遺跡

2001年 3月

福島県教育委員会
財団法人 福島県文化センター
建設省東北地方建設局福島工事事務所

阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査報告 1

さん のう がわ ら い せき
山王川原遺跡



口絵1 山王川原遺跡全景（北東より）



口絵2 調査3区遺構群全景（北東より）

序 文

「阿武隈川平成の大改修」は、阿武隈川の河川整備率を向上させ、洪水に対して安全な地域をつくるために、総合的な河川改修と改良型災害復旧事業を短期間で集中的に実施する国土交通省の事業です。

この事業実施区間には、先人が残した数多くの文化遺産が埋蔵されており、本宮町内では山王川原遺跡・北ノ脇遺跡・高木遺跡・百目木遺跡・原遺跡の5遺跡が確認されています。これら貴重な文化財を後世に伝えることは、今日に生きる私たちの大きな責務であります。

福島県教育委員会では、東北地方整備局福島工事事務所と埋蔵文化財の保護について協議を重ね、平成10年度から現状保存が困難な遺跡について記録保存のための発掘調査を実施してきました。

本報告書は、平成11年度に行った山王川原遺跡の調査の成果をまとめたものです。

今後、この報告書が県民の皆様に文化財に対するご理解を深めていただき、さらに地域の歴史を解明するための資料や生涯学習等におきましても広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に、この調査にご協力いただいた東北地方整備局福島工事事務所、本宮町教育委員会及び地元の方々に感謝の意を表しますとともに、調査を行った財団法人福島県文化センターのご尽力に心から感謝いたします。

平成13年3月

福島県教育委員会

教育長 高 城 俊 春

あいさつ

近年、開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査は年々増加の一途をたどっております。当文化センターは、昭和52年より福島県教育委員会の委託を受け、大規模開発に関連する埋蔵文化財の調査を行い、貴重な文化遺産の記録保存に努めてまいりました。阿武隈川平成の大改修工事にかかる本宮町の阿武隈川右岸築堤工事に伴う埋蔵文化財発掘調査につきましては、平成11年から実施しており、多くの成果を上げることができました。なお、現地の発掘調査は、平成12年度に終了しております。

阿武隈川右岸築堤関連遺跡の報告書は、平成12年度に「Ⅱ期工区」に所在する1遺跡について、平成13年度以降に「Ⅰ・Ⅲ期工区」に所在する2遺跡について『阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査報告1～3』に収録し、刊行する予定です。

本報告書はその第一冊目として、「Ⅱ期工区」に所在する山王川原遺跡を『阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査報告1』としてまとめたものであります。山王川原遺跡では、古墳時代終末期の集落跡が発見され、土師器・須恵器を主体とする貴重な遺物が数多く出土し、古墳時代から奈良時代へと移り変わろうとしている時期の集落のあり方や、人々の生活の実態を考える上で貴重な資料を得ることができました。

本書を、県民の皆様が地域を知るうえでの参考資料として、また、歴史研究の資料としても活用していただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行まで御指導・御協力いただきました関係諸機関ならびに多くの方々に、心より感謝申し上げます。

平成13年3月

財団法人 福島県文化センター

館長 杉原陸夫

緒 言

1. 本書は、平成11年度に実施した阿武隈川右岸築堤Ⅱ期工区関連遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書には、福島県安達郡本宮町に所在する、山王川原（さんのうがわら）遺跡の調査成果を収録した。
3. 本事業は、福島県教育委員会が建設省東北地方建設局福島工事事務所の委託により実施し、調査は財団法人福島県文化センターに委託した。
4. 財団法人福島県文化センターでは、事業第二部遺跡調査課の次の職員を配し調査を実施した。
文化財主査 安田 稔 文化財副主査 成田 有策 文化財主事 小暮 伸之
文化財主事 大河原 勉 文化財主事 堀川 雄二
5. 本書の執筆は、調査を担当した調査員が分担して行い、各原稿の文末に文責を明記した。
6. 本書掲載の自然科学的な分析・考察は、次の機関に協力いただいた。
鉄滓の成分分析……………川鉄テクノリサーチ株式会社埋蔵文化財調査研究室
動物遺存体（骨）の鑑定…パリノ・サーヴェイ株式会社
7. 本書に使用した地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分の1地形図を複製使用した。「(承認番号) 平12東複第 514号」
8. 引用・参考文献は、巻末に敬称を略して掲載した。
9. 本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
10. 発掘調査から本書作成まで、次の機関から御指導・御助言をいただいた。
本宮町教育委員会 本宮町町立歴史民俗資料館

用 例

1. 本文中、もしくは挿図中で使用した略号は次の通りである。

MM ; 本宮町 SNG ; 山王川原遺跡 L ; 遺構外の堆積土 l ; 遺構内の堆積土
SI ; 竪穴住居跡 SB ; 掘立柱建物跡 SK ; 土坑 SG ; 焼土遺構
SWK ; 鍛冶遺構 SD ; 溝跡 P ; 柱穴・ピット (小穴) T ; トレンチ

2. 本書の遺構図の用例は次の通りである。

- (1)挿図中の方位表示は、グリッドを示す「+」印で代用した。その南北方位は真北を示す。
- (2)水系レベルは海拔標高を表す。
- (3)縮尺率は、掲載する遺構の大きさと性格により適宜決定した。選択した縮尺率については、スケールの脇に表示した。原則として、竪穴住居跡は $1/50 \cdot 1/60 \cdot 1/80$ 、掘立柱建物跡は $1/40 \cdot 1/50 \cdot 1/80$ 、土坑は $1/40$ 、焼土遺構は $1/20 \cdot 1/40$ 、鍛冶遺構は $1/50$ 、溝跡は $1/200$ 、ピット群は $1/60$ の縮尺率とした。
- (4)ケバは原則として遺構内の傾斜部は、TTT で表示したが、相対的に緩傾斜の部分はㄱㄱ で表示している。また、後世の攪乱については、ㄱㄱ で表示している。
- (5)挿図中の網かけ等については、その用例を同図中に表示した。

3. 遺物実測図の用例は次の通りである。

- (1)縮尺率は掲載する遺物の大きさと性格により適宜決定した。選択した縮尺率については、スケールの脇に表示した。原則的に縄文土器・弥生土器は $1/3$ 、土師器・須恵器は $1/3 \cdot 1/4$ 、土製品は $1/2 \cdot 1/3 \cdot 1/4$ 、石器・石製品・鉄製品は $1/2 \cdot 1/3$ の縮尺率とした。
- (2)土師器・須恵器
 - a. 黒色処理は実測図に網点で表示した。
 - b. 須恵器の断面は墨染とした。
 - c. 計測値は実測図の下に表示し、推定値は()内、遺存値は< >内に表示した。
 - d. 粘土紐の積み上げ痕は、断面に一点鎖線を入れて表示した。
 - e. その他の網かけ等については、その用例を同図中に表示した。

4. 文章中の遺物の点数は破片点数である。しかし、復元資料は1点として数えている。

5. 挿図中の遺物番号は、「写真」図版中の個々の遺物に付けた番号と一致する。

目 次

第1章	調 査 経 過	1	
第1節	事業の概要と調査経過	1	
第2節	位置と地形	5	
第3節	歴史的環境	7	
第4節	調査・整理方法	12	
第5節	遺構分布と基本土層	13	
第2章	遺 構 と 遺 物	17	
第1節	竪穴住居跡	17	
1号住居跡 (17)	2号住居跡 (19)	3号住居跡 (24)	4号住居跡 (26)
5号住居跡 (32)	6号住居跡 (36)	7号住居跡 (41)	8号住居跡 (45)
9号住居跡 (51)	10号住居跡 (54)	11号住居跡 (56)	12号住居跡 (58)
13号住居跡 (62)	14号住居跡 (69)	15号住居跡 (72)	16号住居跡 (75)
17号住居跡 (78)	18号住居跡 (82)	19号住居跡 (87)	20号住居跡 (94)
21号住居跡 (97)	22号住居跡 (98)	23号住居跡 (101)	24号住居跡 (105)
25号住居跡 (107)	26号住居跡 (110)	27号住居跡 (113)	28号住居跡 (116)
29号住居跡 (119)	30号住居跡 (123)	31号住居跡 (125)	32号住居跡 (126)
33号住居跡 (130)	34号住居跡 (131)	35号住居跡 (134)	36号住居跡 (138)
37号住居跡 (141)			
第2節	掘立柱建物跡	145	
1号建物跡 (145)	2号建物跡 (147)	3号建物跡 (149)	4号建物跡 (151)
第3節	土 坑	152	
1号土坑 (152)	2号土坑 (152)	3号土坑 (154)	4号土坑 (154)
5号土坑 (154)	6号土坑 (156)	7号土坑 (156)	8号土坑 (157)
9号土坑 (157)	10号土坑 (158)	11号土坑 (158)	12号土坑 (158)
13号土坑 (160)	14号土坑 (160)	15号土坑 (161)	16号土坑 (161)
17号土坑 (163)	18号土坑 (163)		
第4節	鍛冶遺構	165	
1号鍛冶遺構 (165)			
第5節	焼土遺構	169	
1号焼土遺構 (169)	2号焼土遺構 (171)		
第6節	溝 跡	171	
1号溝跡 (171)			
第7節	ピット群	175	
R13-7・8・17・18グリッドのピット群 (175)	R13-39・40グリッドのピット群 (177)		
S11-100, S12-10・11, T11-91, T12-1・11グリッドのピット群 (178)			

第8節 遺構外出土遺物	178
第3章 考察	201
第1節 遺物について	201
第2節 遺構について	210
第3節 総括	217
付編1 山王川原遺跡の動物遺存体鑑定	223
付編2 山王川原遺跡出土鉄滓の分析・調査	225

挿 図 目 次

図 1	阿武隈川右岸築堤事業位置図	1	図 52	16号住居跡	76
図 2	工事計画図	4	図 53	16号住居跡出土遺物 (1)	77
図 3	遺跡周辺地形図	6	図 54	16号住居跡出土遺物 (2)	78
図 4	周辺の遺跡	8	図 55	17号住居跡	79
図 5	山王川原遺跡グリッド配置図	12	図 56	17号住居跡カマド	80
図 6	遺構分布	15	図 57	17号住居跡出土遺物	82
図 7	基本土層	16	図 58	18号住居跡	83
図 8	1号住居跡と出土遺物	18	図 59	18号住居跡カマド	84
図 9	1号住居跡カマド	19	図 60	18号住居跡出土遺物 (1)	85
図 10	2号住居跡	20	図 61	18号住居跡出土遺物 (2)	86
図 11	2号住居跡出土遺物 (1)	22	図 62	19号住居跡	88
図 12	2号住居跡出土遺物 (2)	23	図 63	19号住居跡出土遺物 (1)	90
図 13	3号住居跡	25	図 64	19号住居跡出土遺物 (2)	91
図 14	3号住居跡出土遺物	26	図 65	19号住居跡出土遺物 (3)	92
図 15	4号住居跡	27	図 66	19号住居跡出土遺物 (4)	93
図 16	4号住居跡カマド	28	図 67	20号住居跡と出土遺物	95
図 17	4号住居跡出土遺物 (1)	30	図 68	20号住居跡カマド	96
図 18	4号住居跡出土遺物 (2)	31	図 69	21号住居跡	98
図 19	5号住居跡	33	図 70	22号住居跡	99
図 20	5号住居跡カマド	34	図 71	22号住居跡カマド	100
図 21	5号住居跡出土遺物	35	図 72	22号住居跡出土遺物	101
図 22	6号住居跡	37	図 73	23号住居跡 (1)	102
図 23	6号住居跡カマド	38	図 74	23号住居跡 (2)	103
図 24	6号住居跡出土遺物 (1)	39	図 75	23号住居跡出土遺物	104
図 25	6号住居跡出土遺物 (2)	40	図 76	24号住居跡	105
図 26	7号住居跡	42	図 77	24号住居跡カマド	106
図 27	7号住居跡カマド	43	図 78	24号住居跡出土遺物	107
図 28	7号住居跡出土遺物	44	図 79	25号住居跡	108
図 29	8号住居跡	46	図 80	25号住居跡カマド	109
図 30	8号住居跡カマド	47	図 81	25号住居跡出土遺物	110
図 31	8号住居跡出土遺物 (1)	48	図 82	26号住居跡	111
図 32	8号住居跡出土遺物 (2)	49	図 83	26号住居跡カマド	112
図 33	8号住居跡出土遺物 (3)	50	図 84	26号住居跡出土遺物	113
図 34	9号住居跡	52	図 85	27号住居跡	114
図 35	9号住居跡出土遺物	53	図 86	27号住居跡カマド	115
図 36	10号住居跡	54	図 87	27号住居跡出土遺物	116
図 37	10号住居跡出土遺物	55	図 88	28号住居跡	117
図 38	11号住居跡	56	図 89	28号住居跡カマド	118
図 39	11号住居跡カマドと出土遺物	57	図 90	28号住居跡出土遺物	119
図 40	12号住居跡	59	図 91	29号住居跡 (1)	120
図 41	12号住居跡出土遺物	61	図 92	29号住居跡 (2)	121
図 42	13号住居跡 (1)	63	図 93	29号住居跡カマド	122
図 43	13号住居跡 (2)	64	図 94	29号住居跡出土遺物	123
図 44	13号住居跡カマド	65	図 95	30号住居跡	124
図 45	13号住居跡出土遺物 (1)	66	図 96	30号住居跡出土遺物	125
図 46	13号住居跡出土遺物 (2)	67	図 97	31号住居跡	126
図 47	13号住居跡出土遺物 (3)	68	図 98	32号住居跡	127
図 48	14号住居跡と出土遺物	70	図 99	32号住居跡カマド	128
図 49	14号住居跡カマド	71	図100	32号住居跡出土遺物	129
図 50	15号住居跡	73	図101	33号住居跡	131
図 51	15号住居跡出土遺物	74	図102	34号住居跡	132

図103	34号住居跡出土遺物	133	図133	R13-39・40グリッドのピット	177
図104	35号住居跡	135	図134	S11-100, S12-10・11, T11-91, T12-1・11グリッドのピット	179
図105	35号住居跡カマド	136	図135	遺構外出土遺物分布図(1)	181
図106	35号住居跡出土遺物	137	図136	遺構外出土遺物分布図(2)	182
図107	36号住居跡	139	図137	遺構外出土遺物(1)	183
図108	36号住居跡カマド	140	図138	遺構外出土遺物(2)	184
図109	36号住居跡出土遺物	141	図139	遺構外出土遺物(3)	185
図110	37号住居跡カマド	142	図140	遺構外出土遺物(4)	186
図111	37号住居跡出土遺物(1)	143	図141	遺構外出土遺物(5)	187
図112	37号住居跡出土遺物(2)	144	図142	遺構外出土遺物(6)	188
図113	1号建物跡と出土遺物	146	図143	遺構外出土遺物(7)	190
図114	2号建物跡	148	図144	遺構外出土遺物(8)	191
図115	3号建物跡	149	図145	遺構外出土遺物(9)	192
図116	3号建物跡出土遺物	150	図146	遺構外出土遺物(10)	194
図117	4号建物跡	151	図147	遺構外出土遺物(11)	195
図118	1・2・4号土坑	153	図148	遺構外出土遺物(12)	196
図119	3・5・6号土坑	155	図149	遺構外出土遺物(13)	198
図120	7~11号土坑	159	図150	遺構外出土遺物(14)	199
図121	12~16号土坑	162	図151	土師器の変遷(1)	203
図122	17・18号土坑	163	図152	土師器の変遷(2)	204
図123	12・18号土坑出土遺物	164	図153	土師器の変遷(3)	206
図124	1号鍛冶遺構(1)	166	図154	土師器の変遷(4)	207
図125	1号鍛冶遺構(2)	167	図155	山王川原遺跡出土須恵器(1)	209
図126	1号鍛冶遺構出土遺物	168	図156	山王川原遺跡出土須恵器(2)	210
図127	1・2号焼土遺構と出土遺物	170	図157	竪穴住居跡の規模	211
図128	2号焼土遺構	171	図158	集落変遷図(1)	212
図129	1号溝跡(1)	172	図159	集落変遷図(2)	214
図130	1号溝跡(2)	173	図160	集落変遷図(3)	216
図131	1号溝跡出土遺物	174	付図1	山王川原遺跡遺構配置図	
図132	R13-7・8・17・18グリッドのピット	176			

写真目次

1	調査3区全景(北より)	251	20	8号住居跡細部	260
2	調査3区全景(上空より)	251	21	9号住居跡(西より)	261
3	調査3区近景(北より)	252	22	9号住居跡細部	261
4	調査3区近景(北より)	252	23	10号住居跡(東より)	262
5	調査3区南側基本土層全景(東より)	253	24	10号住居跡細部	262
6	調査3区南側基本土層全景(南より)	253	25	11号住居跡(南より)	263
7	1号住居跡(東より)	254	26	11号住居跡細部	263
8	1号住居跡細部	254	27	12号住居跡(東より)	264
9	2号住居跡(東より)	255	28	12号住居跡細部	264
10	2号住居跡細部	255	29	13号住居跡(北より)	265
11	4号住居跡(南より)	256	30	13号住居跡細部	265
12	4号住居跡細部	256	31	14号住居跡(南より)	266
13	5号住居跡(南より)	257	32	14号住居跡細部	266
14	5号住居跡細部	257	33	15号住居跡(南より)	267
15	6号住居跡(東より)	258	34	15号住居跡細部	267
16	6号住居跡細部	258	35	16号住居跡(東より)	268
17	7号住居跡(東より)	259	36	16号住居跡細部	268
18	7号住居跡細部	259	37	17号住居跡(北より)	269
19	8号住居跡(南より)	260	38	17号住居跡細部	269

39	18号住居跡（東より）	270	78	1号建物跡細部	289
40	18号住居跡細部	270	79	2号建物跡（南東より）	290
41	19号住居跡（東より）	271	80	2号建物跡細部	290
42	19号住居跡細部	271	81	3号建物跡（南より）	291
43	20号住居跡（東より）	272	82	4号建物跡（東より）	291
44	20号住居跡細部	272	83	1号鍛冶遺構（南より）	292
45	21号住居跡（東より）	273	84	1号鍛冶遺構細部	292
46	21号住居跡細部	273	85	1～6号土坑	293
47	22号住居跡（南より）	274	86	7～12号土坑	294
48	22号住居跡細部	274	87	13～18号土坑	295
49	23号住居跡（南より）	275	88	1号溝跡（南より）	296
50	23号住居跡細部	275	89	1・2号焼土遺構	296
51	24号住居跡（南より）	276	90	調査風景	296
52	24号住居跡細部	276	91	2号住居跡出土遺物	297
53	25号住居跡（南より）	277	92	2・3・4号住居跡出土遺物	298
54	25号住居跡細部	277	93	4・5号住居跡出土遺物	299
55	26号住居跡（南より）	278	94	5・6号住居跡出土遺物	300
56	26号住居跡細部	278	95	6号住居跡出土遺物	301
57	27号住居跡（南より）	279	96	7・8号住居跡出土遺物	302
58	27号住居跡細部	279	97	8号住居跡出土遺物	303
59	28号住居跡（南より）	280	98	2・8号住居跡出土遺物	304
60	28号住居跡細部	280	99	12号住居跡出土遺物	305
61	29号住居跡（南より）	281	100	13号住居跡出土遺物	306
62	29号住居跡細部	281	101	13号住居跡出土遺物	307
63	30号住居跡（西より）	282	102	16号住居跡出土遺物	308
64	30号住居跡細部	282	103	16・17号住居跡出土遺物	309
65	31号住居跡（南西より）	283	104	17・18・19号住居跡出土遺物	310
66	33号住居跡（南より）	283	105	19号住居跡出土遺物	311
67	32号住居跡（西より）	284	106	19・23号住居跡出土遺物	312
68	32号住居跡細部	284	107	23・24・28号住居跡出土遺物	313
69	34号住居跡（北より）	285	108	27号住居跡出土遺物	313
70	34号住居跡細部	285	109	29・30・32・35号住居跡出土遺物	314
71	35号住居跡（南より）	286	110	35～37号住居跡，1号建物跡出土遺物	315
72	35号住居跡細部	286	111	3号住居跡，12・18号土坑，1号溝跡出土遺物	316
73	36号住居跡（南より）	287	112	1号鍛冶遺構，遺構外出土遺物	317
74	36号住居跡細部	287	113	遺構外出土遺物	318
75	37号住居跡（西より）	288	114	遺構外出土遺物	319
76	37号住居跡細部	288	115	遺構外出土遺物	320
77	1号建物跡（西より）	289			

表 目 次

表1	周辺の遺跡一覧（1）	9
表2	周辺の遺跡一覧（2）	10

付 編 表 目 次

付編1・表1	骨同定結果	224
--------	-------	-----

第1章 調査経過

第1節 事業の概要と調査経過

1 本宮町阿武隈川右岸築堤事業の概要

阿武隈川は福島県中通り地方を南から北へと貫流する一級河川であり、福島県にとっては欠くことのできない水資源である。しかし河川整備率の低さから、たびたび洪水による被害を引き起こしており、近年の昭和61年8月5日洪水、平成10年8月末洪水などでも広範な地域で甚大な浸水被害に見舞われている。それらのことにより水害に対する安全な地域づくりは被災地住民の強い願望の一つとなっている。本宮町阿武隈川右岸築堤事業はそのことを受けた建設省直轄の治水事業であり、「一級河川阿武隈川上流改修本宮右岸築堤事業」として昭和61年度からの用地買収を端緒に事業がすすめられている。ただし、築堤工事については、本宮町内の右岸全長2.8kmについて4つの工事区に区分し、阿武隈川下流より築堤するという計画であったが、予算の関係で平成8年度に第I期工事区の100mについて施工したに止まっていた。

そんな中で上記平成10年の洪水に見舞われ、右岸地区は17.4haが浸水した。このため建設省は阿武隈川について総合的な河川改修と改良型災害普及事業を短期的に集中的に行う「阿武隈川平成の大改修」を計画し、本宮町についても強い要請である右岸築堤事業をその一環として早期完成を目指すこととなったのである。なお「阿武隈川平成の大改修」は、南は須賀川市から北は梁川町にか

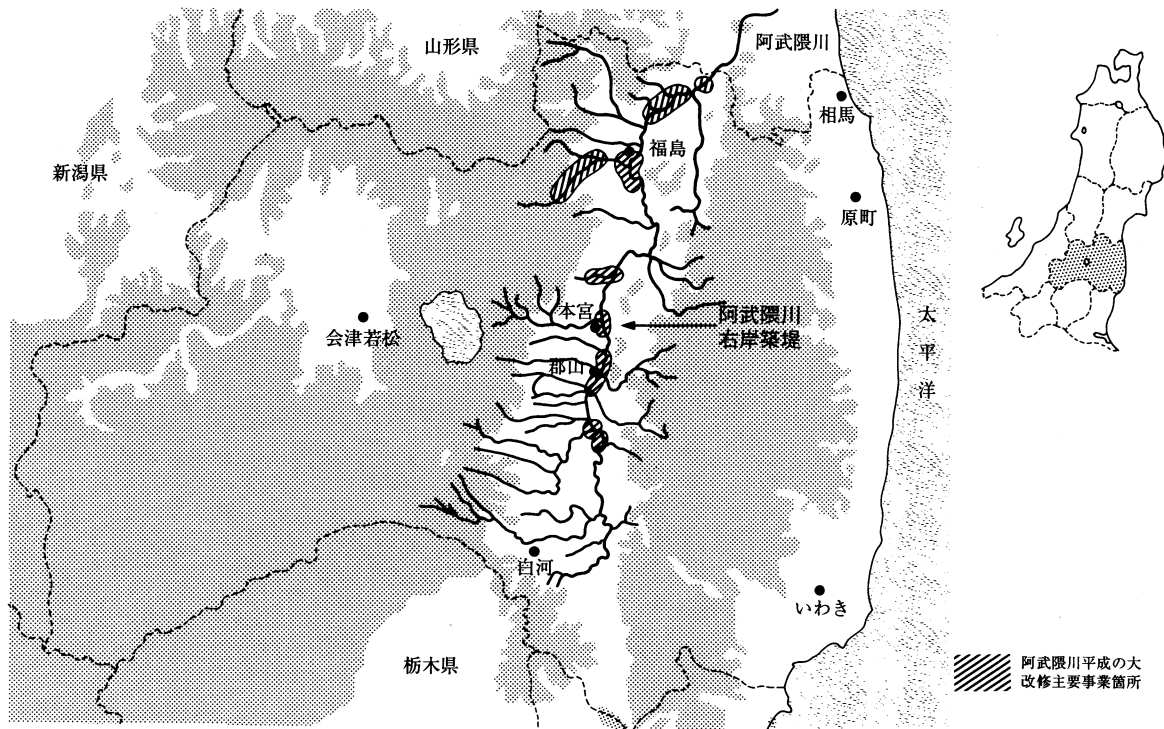


図1 阿武隈川右岸築堤事業位置図

第1章 調査経過

けての要所に、築堤・堤防強化・護岸強化などを施工するもので、全体事業費約800億円を見込み、平成12年度末概成を目標としている。

2 平成11年度調査に至る経過

本宮町阿武隈川右岸築堤事業における埋蔵文化財の取り扱い、昭和61・62年度の2か年に渡って実施された遺跡詳細分布調査（試掘調査）に始まっている。この調査は本宮町教育委員会が保存協議の資料を得るために、国の補助を受けてなされたもので、限られた調査範囲ではあったが原遺跡・渡場遺跡（百目木遺跡）・高木遺跡・北ノ協遺跡・山王川原遺跡の5遺跡についてトレンチ調査を実施している。その結果、右岸地区の自然堤防上のほとんどが遺跡範囲であり、その総面積は約104,000㎡、文化層が複数存在することが確認されている。

発掘調査は、分布調査の結果を基に63年度から本宮町教育委員会が築堤事業の施工に先立ち順次実施していくのであるが、当初は工事計画に明確な方向性がなく単発的な調査となっていた。そこで平成3年度には建設省・福島県教育庁文化課・本宮町の三者協議が持たれ、第Ⅰ期工区の堤防敷部分の調査を先行することで調整がなされ、平成4年度から平成10年度の発掘調査はその計画に基づいて継続実施されている。ただ、広範な調査面積なため今後も多くの調査期間が必要であり、そのことが緊急性を要する事業とのバランスの悪さとして懸念される部分であった。

そのような推移の中で上記の「阿武隈川平成の大改修」計画が持ち上がり、新たな埋蔵文化財への対応が必要となる。この計画にかかわる埋蔵文化財の扱いは、東北地方建設局福島工事事務所と福島県教育委員会における平成10年12月の協議が最初である。ただしこの協議での工事事務所の提示内容は埋蔵文化財保護の実際に沿うとは言い難いものであったことから、継続協議によって対応策を検討するものとされ、1月以降の協議でも、調査対象面積の確認などが行われたものの、不確定要素が多く、条件整備も整わないという状況であった。しかし、この事業が災害復旧にかかる重要で緊急性の高いものであることを重視し、問題が生じた場合はその都度協議することとして調整を計り、福島県と本宮町の教育委員会が特別の調査体制を策定して調査にあたることとしたのである。この過程において、今回の大規模発掘調査事業は一般の市町村が単独で実施するには不相当と判断され、福島県教育委員会はその一部を支援することとしたのである。そして調査を進める上で建設省と文化財保護側の調整・協議の場として「阿武隈川右岸築堤連絡調整会」を設置した。

3 平成11年度の調査経過

福島県教育委員会は、平成11年度より財団法人福島県文化センターに本宮町阿武隈川右岸築堤工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務を委託した。なお、本宮町も建設省から発掘調査を受託しており、当年度から同一事業で二つの機関が発掘調査を実施することとなった。工事行程によれば、平成11年11月までに49,500㎡の遺跡調査を実施完了することが必要とされており、その面積を上記協議において県調査分面積としてⅠ・Ⅲ期工区21,000㎡（高木・北ノ協遺跡）、Ⅱ期工区8,500㎡（山王川原

遺跡), 町調査分面積としてⅠ・Ⅲ期工区3,500㎡(百目木遺跡), Ⅱ期工区16,500㎡(北ノ脇・山王川原遺跡)に案分している。

財団法人福島県文化センターでは当事業に10名の調査員を配置し, 当初計画としてⅠ・Ⅲ期工区の高木・北ノ脇遺跡に1班, Ⅱ期工区の山王川原遺跡に1班の2班体制で調査にあたることとした。

調査開始にあたり4月12日には第1回目の「阿武隈川右岸築堤連絡調整会」を開き, 調査当初計画・年間計画の確認, 調査に関わる問題事項の確認と対応方法の検討を行った。この時点における問題点は, 排土置き場の不足, 立木伐採と伐採木の撤去, 電柱の撤去, 町道の廃道手続き, 産業廃棄物の撤去, 水位観測所及び周辺施設の撤去, 調査範囲の明示等があげられたが, 解決にはそれぞれに時間を要することがらであることから, 支障の少ない部分から調査を実施し順次調査範囲を広げていくことで対応していくこととした。

4月中旬から重機による表土はぎを開始したが, 山王川原遺跡が全体の8割方調査面積が確保できたのに対し, 高木・北ノ脇遺跡は未解決問題が多く5月に入っても2~3割の表土はぎに止まっている状態であった。6月には高木・北ノ脇遺跡も5割の調査面積が確保され遺構精査作業も進んだが, 現調査面の下層から新たな文化層が確認され, その取り扱いについて以後対応を迫られることとなる。

7月中には高木・北ノ脇遺跡の表土はぎも8割方終了したが, 精査部分では遺構密度が極めて高いことが知られ, 調査期間の不足が懸念される状況であった。

8月初めの連絡調整会では調査範囲の変更という大きな動きがあった。それは7月によりやく提示された築堤部の盛土厚と標準断面によって, 暫定堤防であることと盛土が2m以下であることが明らかとなり, この点を踏まえた文化庁との協議で, 築堤部については発掘調査の対象から除外することとなったのである。このことによって高木・北ノ脇遺跡では調査面積が平面的には大きく減じられることとなったが, 山王川原遺跡についてはすでに築堤部分の調査が進行中であることからそのまま継続調査することとした。

8月末には山王川原遺跡の調査が終了し, 調査員は高木・北ノ脇遺跡に合流した。このことにより高木・北ノ脇遺跡の調査も大幅な進展が見られるようになり, 9月には上層面の調査についての先行きが見通せるような状況となった。ただし調査区北端の北ノ脇遺跡部分の表土はぎができたのは9月に入ってからであり, 検出された遺構も他地区同様密度が高かったことから, 調査期間の延長が必要であると予想された。

10月には高木・北ノ脇遺跡の下層面の取り扱いが明確となり, 調査区北半については今年度中に調査を終了し, 南半の下層面は次年度調査とすることで調整がなされた。11月は高木遺跡下層面の調査が主たる作業であったが, 北ノ脇遺跡は上層面の調査であった。

12月後半には高木遺跡の今年度分調査は終了したが, 北ノ脇遺跡下層面については終了が困難であった。そこで, 今後を見通した協議がなされたが, 残り面積が少なく, 遺構密度がこれまでほど高くはない部分であることから, 冬期対策を施した後, 年度内作業を継続し終了することとした。

4 平成11年度山王川原遺跡の調査経過

平成11年度県調査分の山王川原遺跡はⅡ期工区8,500㎡の部分である。山王川原遺跡は昭和61年度に試掘調査、昭和63年度には第1次の発掘調査が実施されており、両調査では縄文時代の包含層と古墳時代から平安時代にかけての竪穴住居跡が確認されている。したがって今回の調査区にも同様の遺構が広がっているものと予想され、発掘調査はそれらの予想の下に平成11年4月14日から上記面積を対象を開始した。

調査当初は条件整備が必ずしも完全ではなかったが、全体の8割程度の調査面積は確保されたことから、上流側から重機による表土はぎを開始した。表土は耕作土であるが50～70cm平均の層厚を有し、すべての表土を置きさけるだけの置き場を調査区外に確保できなかったことから、一部を調査区北端に積み上げることでとりあえず対応した。4月21日からは作業員による精査作業へと徐々に移行し、比較的安定しているⅢ黒褐色土面で住居跡を中心とした多くの遺構を確認することができた。

5月の連休明けから順次遺構の掘り込みを進めたところ、良好な形で遺物が出土する住居跡が見られるようになり、それらからすると当調査区の遺構は7世紀頃を中心としたものであると判断されるようになった。6・7月は遺構調査の最盛期であったが、特にまとまった雨が2度ほどあり遺

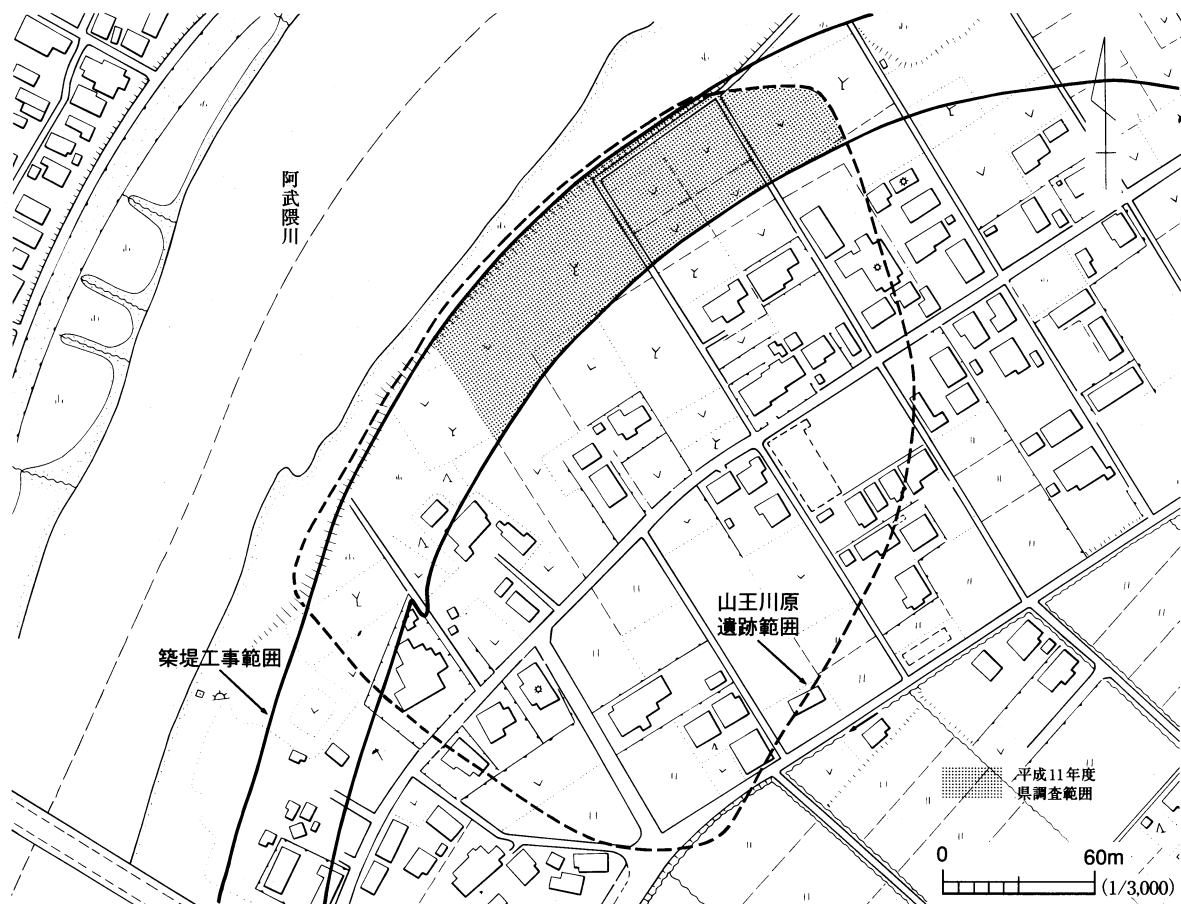


図2 工事計画図

構面の1 m下まで川の水位が上がるという場面があった。また、この時期に本宮町内の小学校の遺跡見学が複数回あり、出土資料を中心に説明を行った。

7月下旬には調査区南端の仮置き表土の処理が問題となったが、調査区外に運び出す方策を採ることができず、やむを得ず南側の調査終了箇所表土を押し戻すことで解決を図った。ただし、北端の500㎡には砂利業者による川砂が積まれており、その部分の調査については調整を待って先送りすることとした。

調査終盤の8月には、築堤部分については発掘調査の対象から除外するという調査方針の変更があったのであるが、前記のようにすでに築堤部分の調査が進行中であることからそのまま継続調査を実施した。そのこととあわせて、当遺跡についても下層における文化層の確認が必要となり、調査終了部にトレンチを設定して約1,000㎡の下層調査を行った。調査では縄文土器が微量出土したものの遺構が確認できなかったことから、調査の必要な文化面はないと判断された。

8月末日には調査区北端の川砂の置かれた部分を除く8,000㎡の調査を終了し、9月6日の文化課による現場引き渡しに立ち会いを行った。残された500㎡については11月末日から12月上旬にかけて調査を実施したが、この部分においては掘削される川前部分についてのみ全面調査を実施し、築堤部分についてはトレンチによる確認調査で終了した。(安田)

第2節 位置と地形

山王川原遺跡は、福島県安達郡本宮町大字高木字山王川原に所在している。本宮町は福島県中通り地方のほぼ中央部、北緯37度31分、東経140度23分に位置する。周囲は郡山市、大玉村、白沢村と接しており、面積は39.5km²で福島県の中では中規模の町である。気候は温帯夏高温気候区に区分されており、年間平均気温は11.4度、年間平均降水量は1,028.5mmである。

遺跡はJR東北本線本宮駅から本宮市街地を抜け、北東方向に約1.0km離れた地点にある。遺跡の2km程西には国道4号が南北方向に走っている。

本遺跡が所在する本宮町周辺は、奥羽山脈と阿武隈高地に挟まれた郡山盆地の北端にあたっており、町の東端を阿武隈川が北流する。それに西方の奥羽山脈から東流する五百川、瀬戸川、安達太良川、百日川が合流している。そのため、河川の浸食や堆積作用によって形成された台地、扇状地、谷底平野がよく見られる。阿武隈川の右岸には、こうした河川の運搬作用によって形成された氾濫原が開け、自然堤防もよく発達している。この自然堤防は、阿武隈川に平行して北は長畑から南は原までの2.1kmに渡って続いており、現在、この上には北ノ脇、高木、原などの集落が営まれ、宅地化が進んでいる。また、自然堤防東側の後背地は、水田・畑として利用されている。

今回調査の対象となった場所は、阿武隈川のすぐ東側であったため、調査区は自然堤防と後背地の一部を含む格好で設定されることになった。自然堤防は阿武隈川に沿って、南西から北東に向かって延びている。自然堤防の頂部は標高207.4~207.6mで、北から南に向かって緩傾斜する平坦面を

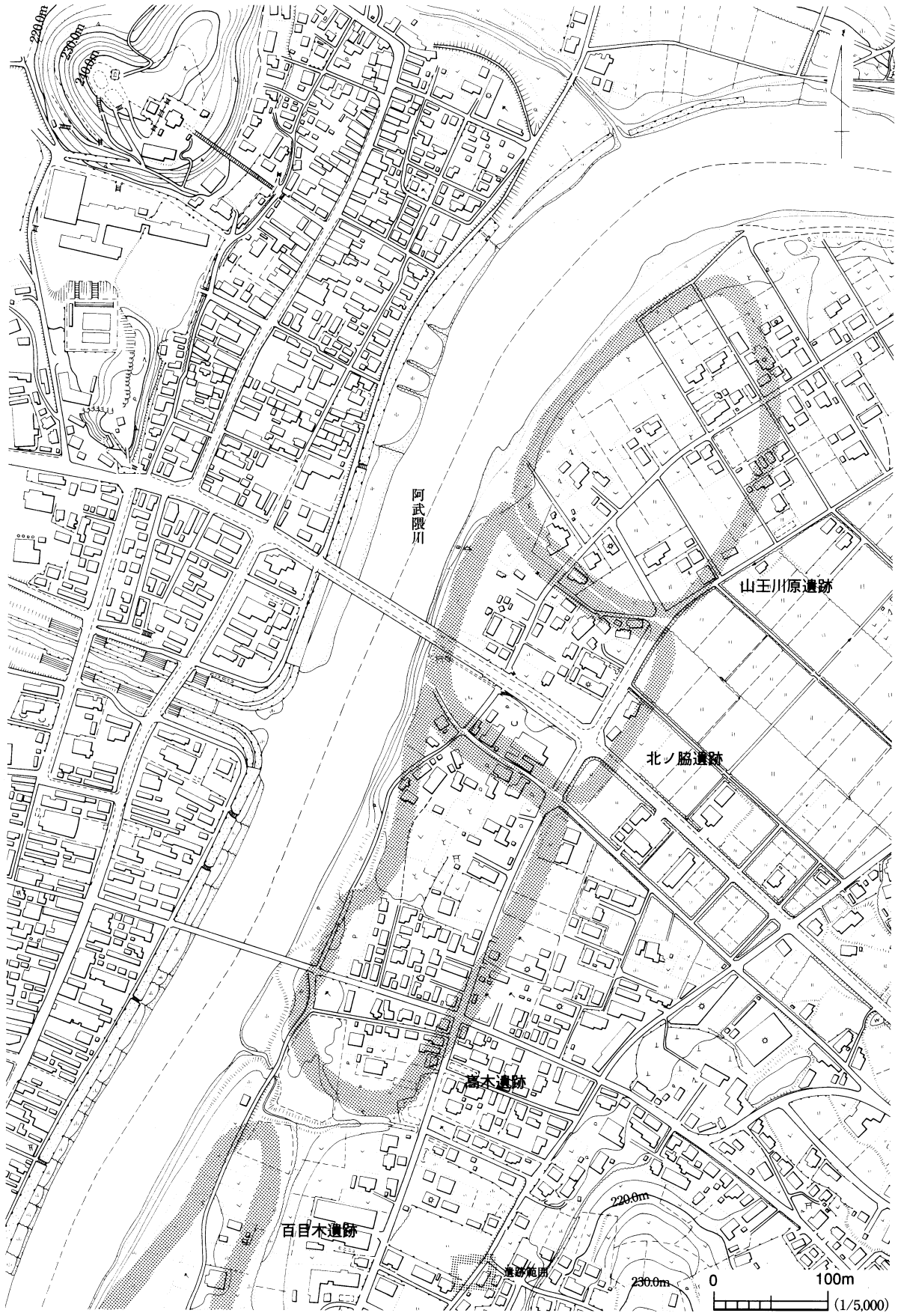


図3 遺跡周辺地形図

形成し、その規模は幅約30m、全長約170mの広さを有する。本遺跡の主体を占める古墳時代から奈良時代にかけての遺構が多数検出されたのは、この帯状の平坦面である。自然堤防の北西側は、急傾斜で阿武隈川に達している。頂部平坦面と阿武隈川との比高差は最大で約6mである。一方、平坦面の南東側は緩やかな斜面がそのまま畑まで続いており、調査区の南東際は、少し雨が降ると冠水し、水がなかなか引かない湿地性の地形になっている。この自然堤防ができた後、阿武隈川の流路が変わったらしく、調査区中央付近には小さな谷地形が形成されており、自然堤防を南北に分断している。奈良時代になると、この谷地形の南側斜面を利用して鍛冶遺構が造られ、操業が行われていた。

遺跡から周囲を眺望すると、西方には標高1,699mの安達太良山とその山麓が一望でき、眼下には北流する阿武隈川が見える。南方には北ノ脇遺跡や高木遺跡が立地する自然堤防、東方には阿武隈高地の西端にあたる低位丘陵が眼前に迫ってきている。

調査開始前の現況は畑で、遺跡が立地する自然堤防の大半で遺物の表採ができた。(小暮)

第3節 歴史的環境

山王川原遺跡の所在する本宮町では、『本宮町史』編纂や『福島県遺跡地図』作成のための表面調査等により遺跡台帳が整備され、遺跡の分布状況が把握されている。以下、当地域の歴史的な環境について、遺跡分布を中心に概要を述べたい。『福島県遺跡地図』には本宮町内で99箇所の遺跡が登録されている。その内訳は、縄文時代の散布地2箇所、弥生時代の散布地3箇所、古墳時代の散布地1箇所、古墳8箇所、奈良・平安時代の散布地14箇所、中世の城館跡17箇所、中世の石造物33箇所、中・近世の石造物1箇所、奈良・平安時代から近世の塚5箇所、時期不明の窯跡1箇所、その他には時代が2時期以上に渡る複合遺跡である。時期別及び種別では、古墳を含めた古墳・奈良・平安時代の散布地の分布が多く、安達太良山南麓から伸びる丘陵地帯や五百川・阿武隈川・安達太良川流域の丘陵・台地・自然堤防上に立地している。また、中世の石造物が仁井田・荒井地区を中心に数多く分布している。

本宮町では旧石器時代の遺跡は現在まで確認されていないが、近隣の郡山市熱海町中ノ沢遺跡でスクレイパーやチャッピングツールが出土し、大玉村中皿久保遺跡からは彫刻刀形石器・石刃などが出土している。なお、青田原台地や阿武隈川右岸の高木大学付近等では洪積台地が広がっており、当地域にも旧石器時代の遺跡が残されている可能性は高い。

縄文時代になると、五百川・阿武隈川・安達太良川の流域に人々が生活を営んだ痕跡がみられるようになる。山王川原遺跡(本遺跡、図4-1)では、前期の大木1~2式の土器片が少量出土しており、高木遺跡(3)からは早期中葉の田戸下層式と思われる資料が出土している。中期になると上原遺跡、恵畑遺跡、寺下遺跡等と遺跡の数も増加してくる。中でも、五百川北岸の河岸段丘上にある上原遺跡は、花積下層式・大木2b式の土器片や石組炉・複式炉をもつ住居跡が検出され、本

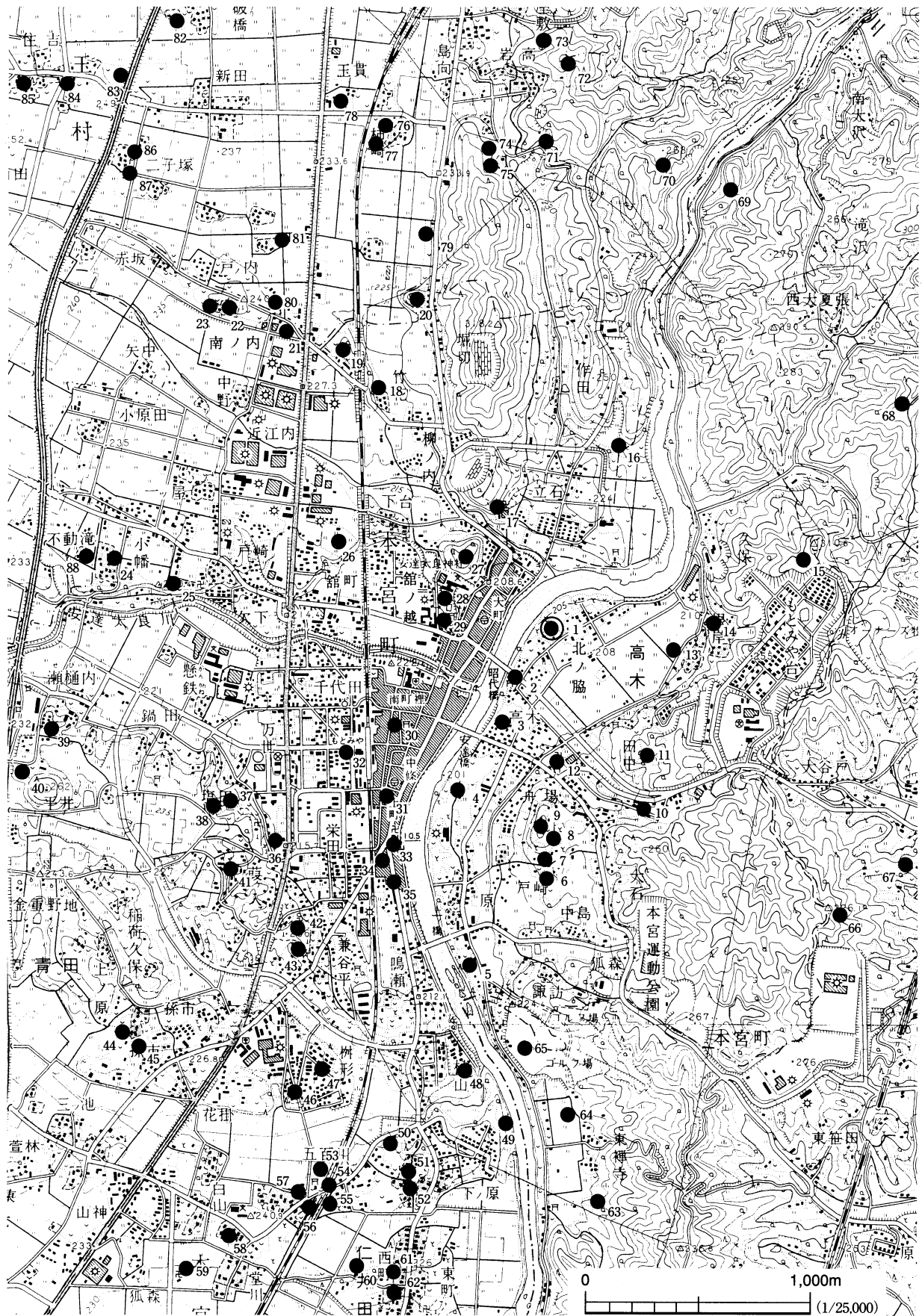


図4 周辺の遺跡

表1 周辺の遺跡一覧(1)

No	遺跡名	所在地	遺跡の概要
1	山王川原遺跡	本宮町大字高木字山王川原	縄文～近世の散布地・集落跡 本報告
2	北ノ脇遺跡	高木字北ノ脇	縄文～近世の散布地・集落跡
3	高木遺跡	高木字高木・舟場	縄文～近世の散布地・集落跡
4	百目木遺跡	高木字百目木・長瀬	縄文～近世の散布地・集落跡
5	原遺跡	高木字原	古墳～近世の散布地
6	戸崎供養塔	高木字戸崎	中世の石造物
7	辻向供養塔群	高木字辻向	中世の石造物
8	大学遺跡	高木字大学・辻向	弥生時代の散布地
9	大学館跡	高木字大学・辻向	中世の城館跡
10	上人壇遺跡	高木字滝ノ入	中世・近世の塚
11	高木田中館跡	高木字館・田中	中世の城館跡
12	高木寺供養塔	高木字舟場	中世の石造物
13	長畑古墳群	高木字長畑	古墳
14	根岸古墳群	高木字久保	古墳
15	問答山古墳群	高木字問答	古墳
16	大榎遺跡	字大榎	奈良・平安時代の散布地
17	石雲寺供養塔	字坊屋敷	中世の石造物
18	名郷館跡	字竹ノ花	中世の城館跡
19	庚申壇古墳	字竹ノ花	古墳
20	堀切遺跡	字堀切	中世・近世の塚
21	地藏堂遺跡	字地藏堂	古墳
22	天王壇古墳	字南ノ内	古墳
23	南ノ内遺跡	字南ノ内	古墳時代の散布地
24	小幡供養塔	字小幡	中世の石造物
25	小幡遺跡	字小幡	奈良・平安時代の散布地
26	中台遺跡	字中台	弥生・奈良・平安時代の散布地
27	菅森館跡	字館ノ越	中世の城館跡
28	愛宕館跡	字館ノ越	中世の城館跡
29	愛宕山古墳	字館ノ越	古墳
30	南町裡供養塔	字南町裡	中世・近世の石造物
31	九縄供養塔	字上町下	中世の石造物
32	本宮田中館跡	字万世・千代田	中世の城館跡
33	太郎丸観音堂 供養塔群	字太郎丸	中世の石造物
34	太郎丸供養塔	字太郎丸	中世の石造物
35	太郎丸掃部館跡	字太郎丸	中世の城館跡
36	栄田遺跡	字栄田	縄文・奈良・平安時代の散布地
37	塩田遺跡	字塩田入	弥生・平安時代の散布地
38	塩田館跡	字塩田入	中世の城館跡
39	天ヶ遺跡	字天ヶ	弥生時代の散布地
40	平井供養塔	字平井	中世の石造物
41	葎ヶ入供養塔	字葎ヶ入	中世の石造物
42	日輪寺供養塔	字山田	中世の石造物
43	山田遺跡	字山田	奈良・平安時代の散布地
44	東万風遺跡	字東万風	奈良・平安時代の散布地
45	孫市遺跡	大字青田字孫市	奈良・平安時代の散布地
46	榊形遺跡	仁井田字榊形	中世・近世の塚
47	瀬戸川館遺跡	仁井田字榊形	中世の城館跡
48	吹上遺跡	仁井田字村山	近世の塚
49	下ノ原遺跡	仁井田字下ノ原	奈良・平安時代の散布地
50	申供養塔群 C	仁井田字申	中世の石造物

表2 周辺の遺跡一覧(2)

No.	遺跡名	所在地	遺跡の概要
51	申供養塔群 B	本宮町大字仁井田字申	中世の石造物
52	申供養塔群 A	仁井田字申	中世の石造物
53	小坂供養塔群	仁井田字一本	中世の石造物
54	八雲神社供養塔	仁井田字一本	中世の石造物
55	五百川供養塔 C	仁井田字五百川	中世の石造物
56	五百川供養塔 A	仁井田字五百川	中世の石造物
57	五百川供養塔 B	仁井田字五百川	中世の石造物
58	白山供養塔群	荒井字白山	中世の石造物
59	荒川観音堂 供養塔群	荒井字五百川	中世の石造物
60	下四合田供養塔	仁井田字下四合田	中世の石造物
61	西町供養塔 A	仁井田字西町	中世の石造物
62	西町供養塔 B	仁井田字西町	中世の石造物
63	東禅寺赤木遺跡	白沢村大字糠沢字赤木・東禅寺	古墳～平安時代の散布地
64	東禅寺古墳	糠沢字赤木・東禅寺	古墳
65	東禅寺館跡	糠沢字赤木	中世の城館跡
66	経塚山経塚	糠沢字礼堂	塚
67	礼堂館跡	糠沢字礼堂	中世の城館跡
68	和田十三仏 古墳群	和田字大夏張	古墳
69	古館跡	和田字滝ノ沢・古館	中世・近世の城館跡
70	大川端遺跡	大玉村大字大山字大川端	縄文～古墳時代の散布地
71	前山小作田山	大山字山王	縄文・弥生時代の散布地
72	傾城壇古墳	大山字愛宕	古墳
73	堂ヶ久保古墳群	大山字鬼松	古墳
74	鍛冶内遺跡	大山字鍛冶内	中世の城館跡
75	向山古墳群	大山字向山	古墳
76	毘沙門天王遺跡	大山字柿崎	弥生・古墳時代の散布地
77	勘解由館跡	大山字諸田	中世の城館跡
78	玉貫遺跡	大山字玉貫	弥生・古墳時代の散布地
79	諸田向古墳	大山字諸田向	古墳
80	金山古墳	大山字宮ノ下	古墳
81	弓矢地館跡	大山字弓矢地	中世の城館跡
82	下高野遺跡	大山字下高野	弥生・古墳時代の散布地
83	上高野遺跡	大山字上高野	古墳・奈良時代の散布地
84	住吉 B 遺跡	大山字住吉	古墳～平安時代の散布地
85	住吉遺跡	大山字住吉	古墳・奈良時代の散布地
86	二子塚遺跡	大山字小次郎内	古墳時代の散布地
87	二子塚古墳	大山字小次郎内	古墳
88	袋内遺跡	玉井字袋内	奈良時代の散布地

宮町を代表する遺跡となっている。晩期の資料はほとんどないが、北ノ脇遺跡(2)からは大洞B-C式に比定される注口土器が1点出土している。

弥生時代の遺跡としては、天ヶ遺跡(39)、陣場遺跡が知られている。両遺跡は、弥生中期に位置づけられており、天ヶ遺跡では桜井式の土器が、陣場遺跡では土坑墓群とともに陣場式の土器が出土している。また、高木遺跡の3次調査では弥生時代初頭の資料が出土している。塩田遺跡(37)、中台遺跡(26)、関畑遺跡、新介遺跡などからも、弥生時代中期の土器片が出土しており、低地を臨む段丘・台地上に当時の遺構が存在すると推定できる。

古墳時代になると、当地域においても数多くの古墳が築造されるようになり、地方豪族の出現がうかがい知ることができる。特に、本宮町北端から大玉村にかけて広がる南ノ内丘陵地帯に所在する天王壇古墳(22)、二子塚古墳(87)を含む「七ツ坦古墳群」が著名である。天王壇古墳は5世紀後半に築造された直径38mの造り出しつき円墳で、動物埴輪・巫女埴輪・甲冑形埴輪・円筒埴輪等数多くの埴輪が出土しており、東北地方の古墳時代中期文化を解明する上で注目されている。他に、庚申壇古墳(19)、愛后山古墳(29)、傾城壇古墳(72)、金山古墳(80)などがあり、根岸古墳群(14)からは圭頭大刀や多くの装身具が出土している。また、このころになると、本遺跡を含め、阿武隈川右岸の自然堤防上に継続的に集落が営まれるようになる。

奈良・平安時代になると遺跡の数は飛躍的に増大する。『延喜式』によると、「安達郡」は、延喜6年(906)に安積郡から「安達、入野、佐戸」の3郷を分離して建郡したと記されている。その「安達郷」の中心が現在の本宮町・大玉村と考えられており、この時期の遺跡数の増加はこの記述と期を一にしている。本遺跡の北々西約4.6kmの二本松市杉田には、安達郡の郡衙の擬定地として知られる郡山台遺跡が所在する。郡山台遺跡では、安達郡建郡以前に遡る建物跡群も確認されており、奈良時代の段階から官衙的な機能を有していた可能性が指摘されている。また、郡山台遺跡より出土した九葉素弁蓮華文軒丸瓦に近似した素弁蓮華文軒丸瓦が本宮町内の小幡遺跡(25)で表採されており、律令時代における当地との関係も推測される。この時期の代表的な遺跡としては、他に関畑遺跡、中台遺跡、長者ヶ峰遺跡、高木遺跡、金重谷地遺跡などがあげられ、集落遺跡の性格も、律令制的な色彩の強いもの、山間の尾根部に小規模で営まれるもの、多数の住居跡から構成されるもの、といった具合に多様化してくる。

中世の遺跡としては館跡が17箇所確認され、瀬戸川館跡(47)、塩田館跡(38)、高木田中館跡(11)などが調査されている。なお、瀬戸川館跡は瀬戸川氏(国分氏)の居館であったが、天正13年(1585)に佐竹氏などの連合軍と伊達政宗軍とが戦った時に伊達成実が布陣したことで知られる。館跡の他に、供養塔などの石造物が仁井田、荒井地区を中心に多数確認されている。

本宮町周辺には安達太良神社をはじめとして、大山の神原田神社、長屋の長屋神社、稲沢の春日神社、五百川の帳付神社などの古い神社が多く、信仰を集めてきた。また、この地域には阿弥陀三尊供養塔が多く見られることから浄土真宗が広まっていたと考えられる。

天正13年11月16日、会津街道の人取橋付近で芦名・佐竹連合軍2万人と伊達政宗軍5千人とが激突した。翌年、摺上原の戦いで芦名氏が滅ぶことにより本宮地方は伊達領となる。その後、蒲生、上杉、加藤氏の支配を受け、江戸期になってからは二本松丹羽氏の支配が幕末まで続くこととなる。慶長8年(1603)江戸に幕府が開府され、江戸を中心に五街道を幹線として、その他の脇街道も逐次整備されていった。奥州街道も全面的に改修されて、現在の県道須賀川・二本松線の道筋になった。18世紀に入ると、本宮は奥州街道と会津街道との分岐点に位置するため宿場町として繁栄し、旅館30軒、茶屋12軒、湯屋6軒が立ち並び、文政7年(1824)には本宮は郡山とともに御城下格の格式を与えられた。南町・北町にはそれぞれ40匹の伝馬と人足が置かれ賑わった。また、本宮は火

事の多い宿場町でもあったようで、町の大半を消失するほどの大火が延享1年(1744)・安永9年(1780)・文化3年(1806)・文化7年(1810)の計4回発生している。また、水害も度々発生する地域で、明治23年(1890)・大正2年(1913)・昭和16年(1941)には増水が8~10mにも及ぶ大洪水が発生している。(成田)

第4節 調査・整理方法

山王川原遺跡の発掘調査は、阿武隈川右岸築堤事業に伴って、現状の変更が余儀なくされる部分について実施された。県教育委員会が担当した調査区は、山王川原遺跡範囲の北側部分にあたり、阿武隈川に沿う幅約60mの東西に長い帯状になっている。

基準杭の設定は、調査区のはぼ中央に位置する国土座標(X=168,360・Y=51,160)を起点として行った。この起点から、東西方向・南北方向の基準線を引き、調査区全体に40m四方の大グリッドを設定した。この大グリッドの中は、さらに4m四方の小グリッドで100区画に分割し、遺構図の作成や遺構外遺物の取り上げができるようにした。大グリッドの番号は、東西方向にアルファベットの大文字、南北方向に算用数字を付し、「S11グリッド」などと呼んだ。この番号は、開発地区

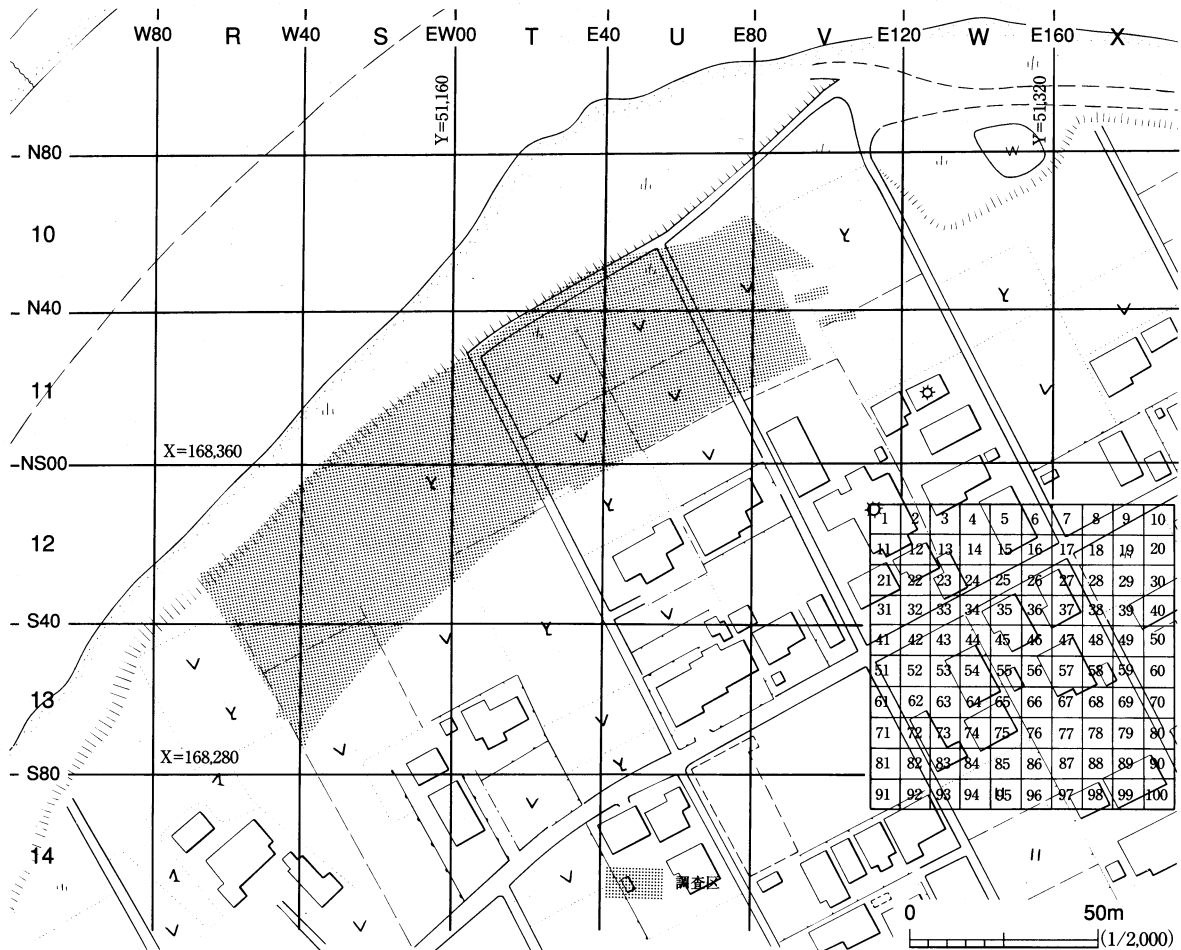


図5 山王川原遺跡グリッド配置図

全体をカバーできるように配慮して付けられたため、今年度の県担当調査区は、東西方向がR～V、南北方向が10～13に該当している。小グリッド番号は、大グリッドの北西隅から南東隅に向かって、1～100までの番号を振った。実際に遺構図を作成したり、遺物を取り上げる際には、この大グリッドと小グリッドの番号を組み合わせて、「S11-98グリッド」などと表記した。

実際の調査にあたっては、まず、重機を使用して表土を除去し、検出面を丁寧に削って、遺構の輪郭を確認した。山王川原遺跡は、阿武隈川の度重なる氾濫により埋没していたため、遺構検出面までがかなり深い場所もあった。そうした部分の調査は、土砂の崩落や足場の確保に配慮し、十分に安全を確認しながら進めた。遺構の掘り込みは、竪穴住居跡や鍛冶遺構など、大きいものは4分割法、土坑・焼土遺構・ピットなど、小さいものは2分割法を基本にして、手掘りで行った。さらに、カマドや柱穴など、遺構本体に付属する施設を掘り込む場合や、重複する遺構の新旧関係を見極める場合は、土層観察用のベルトを適宜に設定した。遺構の記録については、4m四方に設定した小グリッドをもとに、1m四方、50cm四方の方眼を適宜に設定し、1/20縮尺を基本に平面図・断面図を作成した。また、遺物の出土状況やカマドなど、遺構の細部を記録する場合は、1/10縮尺で図化した。なお、地形図は平板やトータルステーションを使用し、1/200の縮尺で作成した。写真撮影には、35mmと6×4.5cm版の中型カメラを併用し、同一被写体を同一コマ数撮影した。フィルムはモノクロームとカラーリバーサルを使用している。また、遺跡全体の様子や臨場感を記録するために、ローリングタワーなどを使って、高角度からの撮影も実施した。

発掘調査時に作成した各種図面は、報告書作成の便宜として、1枚ずつに遺構図用の整理スタンプを押し、市町村名、遺跡名、遺構名、図面の種別、断面図の測定標高、縮尺、実測年月日、実測者を銘記した。報告書作成後の遺物は、報告書に実測図を掲載したものについては、一点ずつ挿図番号を記入した後、遺跡名、報告書名、挿図番号を銘記した整理箱に挿図ごとにまとめて収納した。写真については、被写体、撮影方向、撮影日、フィルム番号を記入した写真台帳を作成した。現像されたモノクロ写真は、フィルムと一緒にネガアルバムに収納し、カラーリバーサル写真は、マウント部分に被写体、撮影方向を記入してから、スライドファイルに収納した。

発掘調査で得られた、これらの遺物、図面、写真などは、福島県文化センターの収蔵施設に保管している。

(堀川)

第5節 遺構分布と基本土層

本節では山王川原遺跡で確認された遺構の分布状況と基本土層の概要を述べる。

本遺跡から検出された遺構は、竪穴住居跡37軒、掘立柱建物跡4棟、土坑18基、焼土遺構2基、鍛冶遺構1基、溝跡1条、ピット群3箇所である。これらの遺構は、そのほとんどが古墳時代後期から奈良時代に時期比定されるものと考えられる。図6には遺構の分布状況の概略を示した。これを見ると、竪穴住居跡は自然堤防の頂部平坦面から、後背地に面する南側緩斜面にかけて分布して

いる状況がうかがえる。特に調査区中央に入る谷地形より南西側の平坦面上に住居跡が密集している。一方、北東側の平坦面にある住居跡は数少なく、しかも、周壁や床面が流出しているなど遺存状態の悪いものが目立つ。これは、ここが南西側の平坦面に比べて、標高が少し低くなっているため、河川の氾濫などによって水没、流失しやすかったことを示しているものと推定される。鍛冶遺構は谷地形の南向き斜面に構築されていた。ここは傾斜がきつい急斜面である。排出される鉄滓の処理、風向きや日当たりなど操業条件が整った場所を選んで構築されたようである。1～3号建物跡は、その性格や機能に関連してか、南西側平坦面のほぼ中央、比較的標高の高い場所を選んで構築されている。土坑・焼土遺構は堅穴住居跡と同様の分布傾向を示している。これらの遺構は、第3章で述べるように大きく5段階の変遷過程をたどることが判った。

山王川原遺跡は、阿武隈川の自然堤防上に立地しているため、基本土層は砂質土を基調としており、大きくLⅠ～Ⅴに5区分した。各層中には暗褐色のシルト層が波状に形成されていたが、これは遺構内外を問わず、調査区全体で確認されており、基本土層を区分する目安にはならなかった。5区分した基本土層は、色調・土質・層中の混入物などから、さらに細分した。この細分された各層のあり方については、広範囲に安定して堆積する場合と部分的に堆積する場合の2通りが存在することを確認した。次に本遺跡の基本土層について説明する。

LⅠは、調査区全域で確認された現表土である。締まりのない、黒褐色砂質土(10YR2/2)で、層厚は5～20cmを測る。畑の耕作土であるため、層中には植物の根が多数見受けられた。

LⅡは、調査区北東側の自然堤防頂部や谷地形で確認された堆積土である。色調・層中の混入物などから、さらに3層に細分した。自然堤防上の一部の堅穴住居跡は、本層から掘り込まれている。

LⅡa；自然堤防頂部で主に確認された層である。締まりのない、暗褐色砂質土(10YR3/4)で、層厚は15～30cmを計測した。

LⅡb；主に谷地形で確認された堆積土である。締まりのない、褐色砂質土(10YR4/4)で構成される。層中には炭化物粒が少量含まれていた。層厚は5～30cmを測る

LⅡc；主に谷地形の谷底に堆積していた。締まりのない、黒褐色砂質土(10YR2/3)である。層厚は、最も深い谷底で約50cmあった。

LⅢは黒褐色砂質土(10YR2/2)で、調査区全体で確認された。調査区南西側の自然堤防上で発見された堅穴住居跡の遺構検出面は、本層上面である。層厚は約30cmを計測した。

古墳時代後期から奈良時代にかけての文化層は、このLⅢまでである。これより下層では、土師器や須恵器は出土せず、縄文時代の遺物のみが出土している。この縄文時代の調査は、図7に示したようなトレンチ調査であったため、各層の全体的な広がりをとらえるにはいたらなかった。

LⅣは調査区南西側の自然堤防上でのみ確認された堆積土である。にぶい黄褐色(10YR4/3)をした砂質土で、層厚は約20cmを測った。

LⅤは黒褐色砂質土(10YR2/2)で、縄文時代後期の遺物包含層になっている。層厚は50～60cmと比較的厚い。本層より下は無遺物層である。

(小 暮)

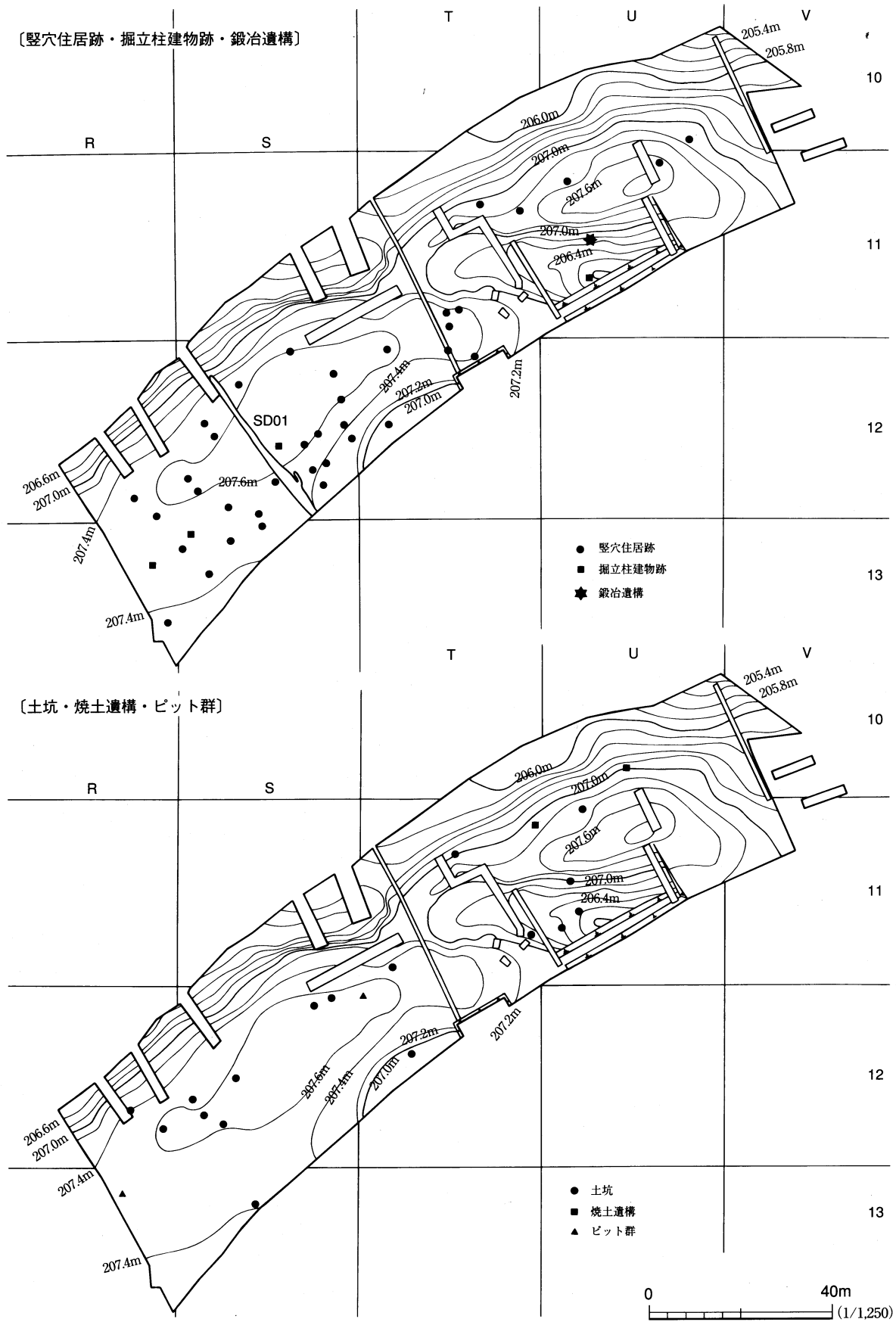
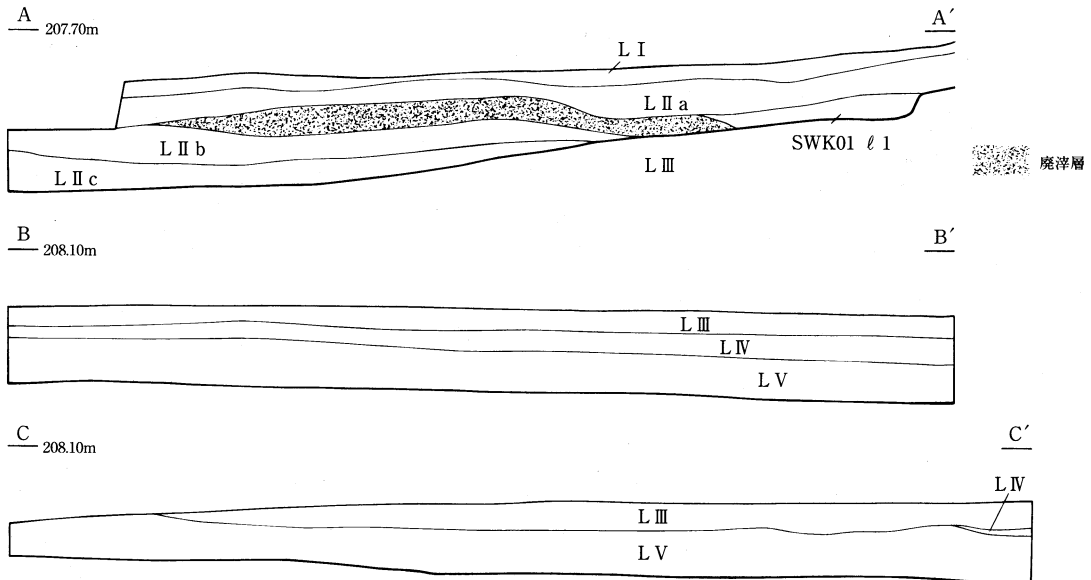
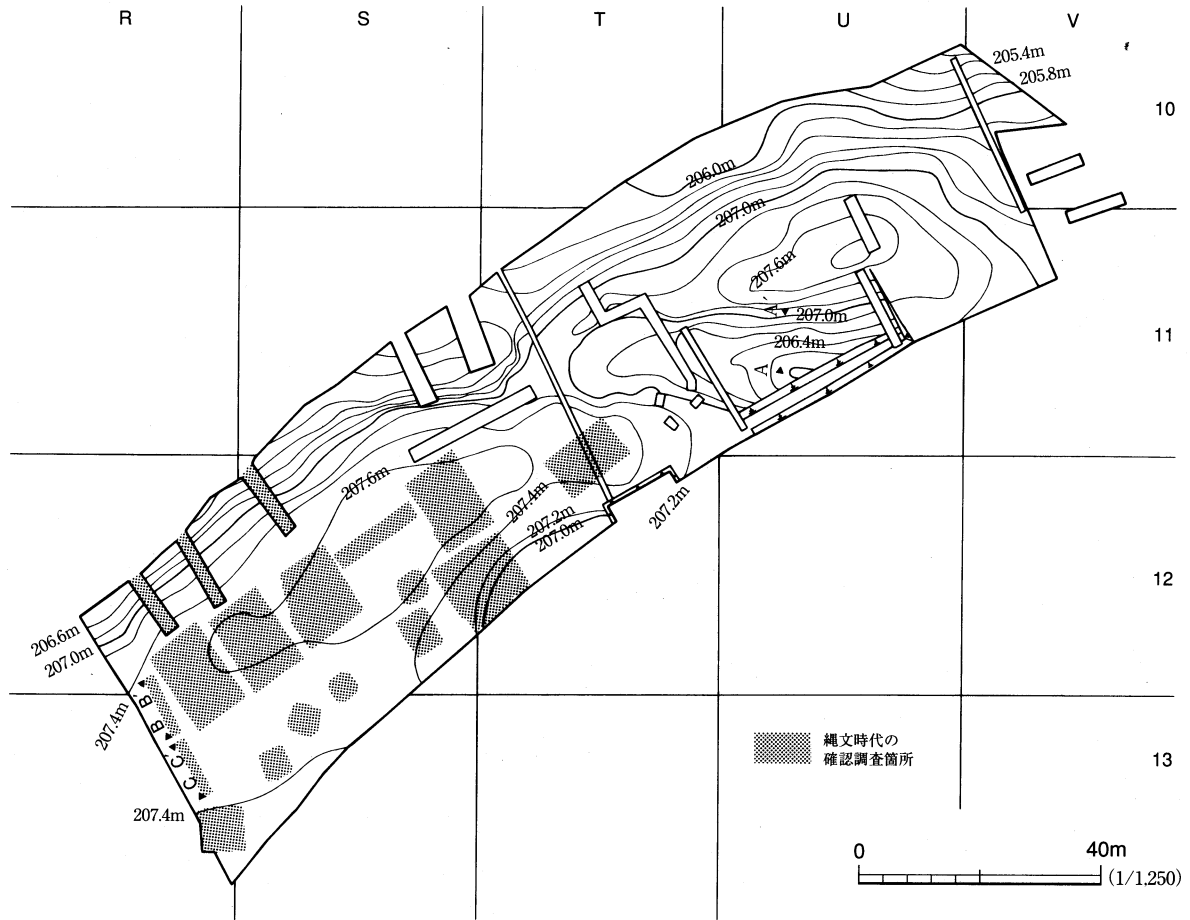


図6 遺構分布

第1章 調査経過



基本土層					
L I	10 Y R 2/2	黒褐色砂質土	L III	10 Y R 2/2	黒褐色砂質土
L II a	10 Y R 3/4	暗褐色砂質土	L IV	10 Y R 4/3	にぶい黄褐色砂質土
L II b	10 Y R 4/4	褐色砂質土	L V	10 Y R 2/2	黒褐色砂質土
		(炭化物粒を少量含む)			(縄文時代後期遺物包含層)
L II c	10 Y R 2/3	黒褐色砂質土			



図7 基本土層

第2章 遺構と遺物

今回の調査では、竪穴住居跡37軒、掘立柱建物跡4棟、土坑18基、焼土遺構2基、鍛冶遺構1基、溝跡1条、ピット群3箇所が確認された。出土した遺物は、縄文土器699点、弥生土器8点、土師器64,187点、須恵器1,516点、土製品230点、石器18点、羽口415点、陶磁器164点、石製品27点、鉄製品78点、鉄滓91.8kg、鍛造剥片200g、銃弾1点である。

第1節 竪穴住居跡

今回の調査では37軒の竪穴住居跡が検出された。そのうち、一辺が6mを越える大型の竪穴住居跡を含む34軒が調査区南西側の自然堤防頂部付近の平坦面に集中している。平面形の大きさや主軸方向などによる配列の規則性は確認できなかった。

1号住居跡 S I 01

遺 構 (図8・9, 写真7・8)

本住居跡は調査区南西寄りのS12グリッドに位置している。ほぼ平坦な地形上にあり、重複する遺構はない。周囲には、北西方向約1mに3号住居跡、南約2.2mに2号住居跡、南東約2.4mに11・21号住居跡が隣接している。

検出面はLⅢの黒褐色砂質土上面である。遺構内堆積土は2層に分層した。堆積土のほとんどを占める①が褐色砂質土の自然流入土、壁際に三角堆積する②がLⅢの黒褐色砂質土を多量に含むことから周壁からの崩落土と考えられる。

住居跡の平面形は、東西にやや長い長方形を呈し、北東コーナーが排水溝による攪乱を受けている。平面規模は南北の軸長が4.0m、東西の軸長が4.6mで、カマドを通る軸線はN15°Eを示している。周壁は床面から60~70°の角度で立ち上がり、周壁の高さは8~10cmと低い。床面は、ほぼ水平に整地されているが、踏み締めや貼床は認められなかった。

カマドは、北壁のほぼ中央部分に位置し、褐色を基調とする砂質土で構築している。形態は住居プラン内に燃焼部を持つ両袖タイプのもので、両袖によって確保された燃焼部の規模は、下端ラインで焚口幅約30cm、奥行き約65cmを測り、袖の高さは14cmまで遺存している。燃焼部の側壁から袖の上面にかけて厚さ3cm程度の弱い酸化面が確認された。煙道部は削平により確認できなかった。

ピットは床面上から5個確認された。P1~4は住居プランのほぼ対角線上中央寄りに約1.5mの等間隔で配列されており、支柱穴と考えられる。その規模や平面形は、P1が直径約20cmの円形、P2が長径63cm、短径48cmの楕円形、P3が直径約32cmの円形、P4が長径32cm、短径25cmの楕円

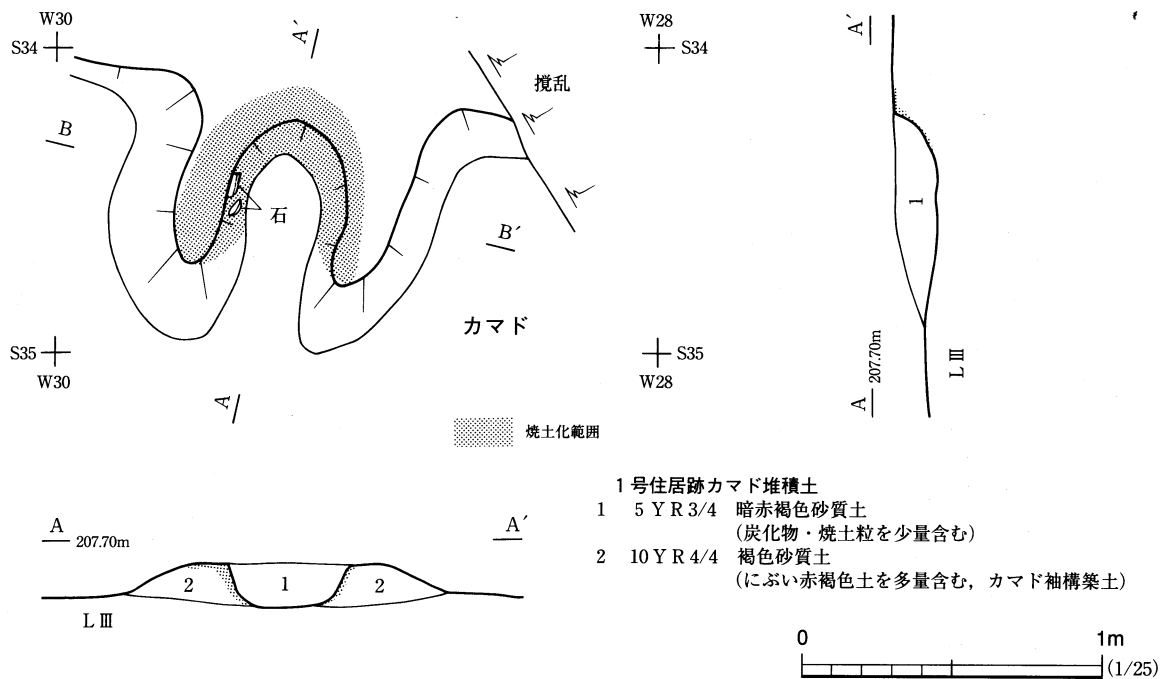


図9 1号住居跡カマド

形を呈している。床面からの深さは56～61cmを測る。堆積土は暗褐色を基調とする砂質土で、柱痕は確認できなかった。P 5は北東隅のカマド近くに位置するが、その中央部分を現代の排水溝によって削平されている。遺存する長径75cm、短径70cm、床面からの深さ約20cmを測り、楕円形を呈すると思われる。堆積土は褐色及び暗褐色の砂質土の2層に区分したが、レンズ状の堆積状況を呈することから自然堆積と判断した。その位置や規模から貯蔵穴ではないかと考えている。

遺物 (図8)

本遺構からは、土師器片58点が堆積土及び床面から出土している。図8-1～3は土師器甕の底部破片である。1は床面から出土しており、器面調整は内・外面ともヘラナデが施され、底部周縁には粘土紐の積み上げ痕が観察される。2はやや内湾ぎみに開いて立ち上がる底部資料である。調整は、内・外面ともにヘラナデが観察される。3は、外面にハケメ、内面にはヘラナデが施されており、底部には木葉痕が観察される。

まとめ

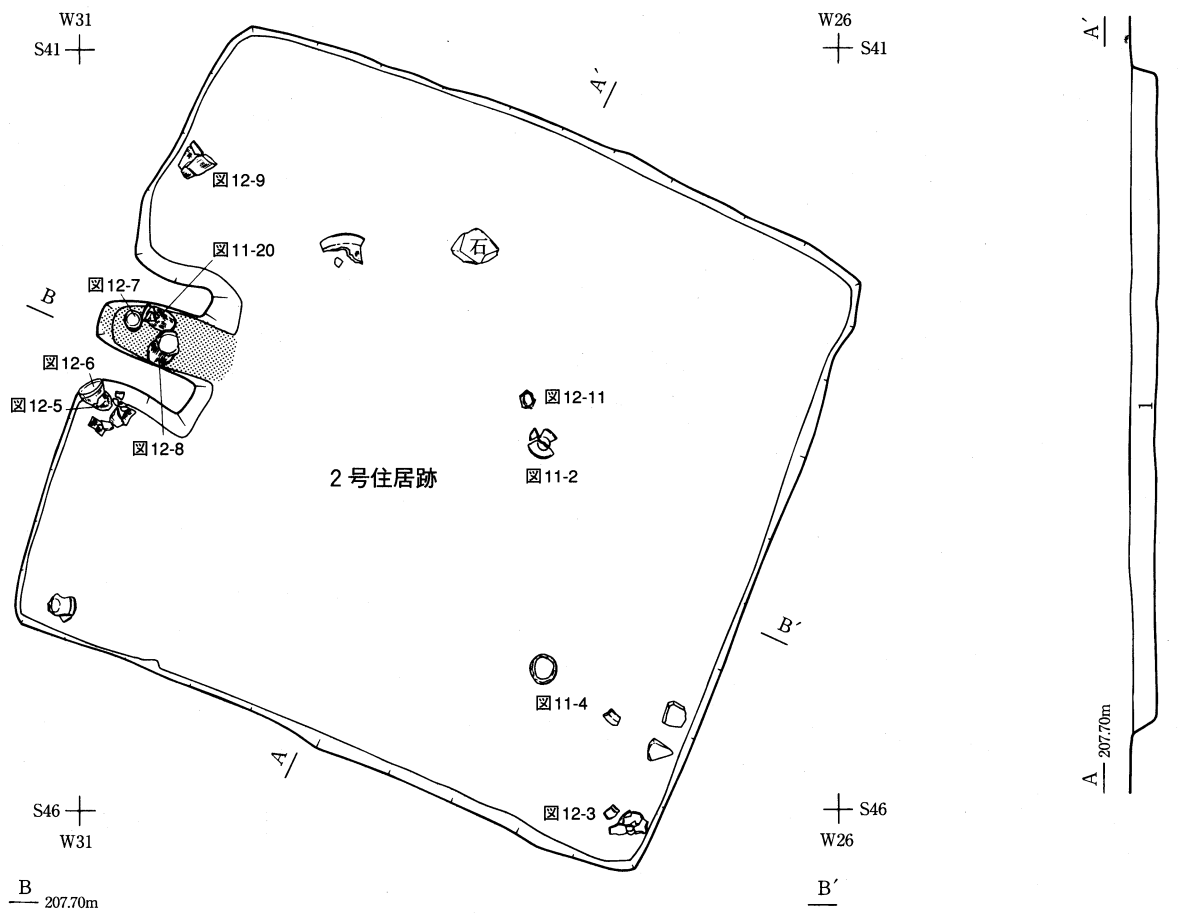
本遺構は4本の支柱穴と貯蔵穴と考えられるピットを有し、中型の部類に属する住居跡である。出土遺物の特徴から、所属時期は6世紀後半から7世紀後半にかけてと考えている。(成田)

2号住居跡 S I 02

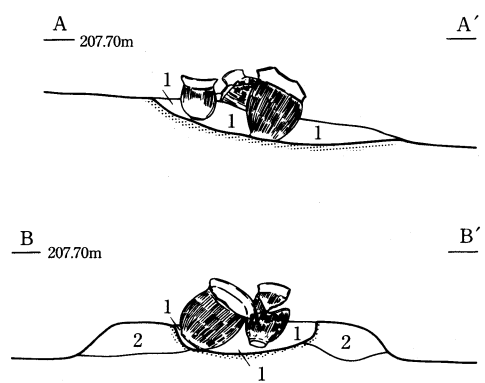
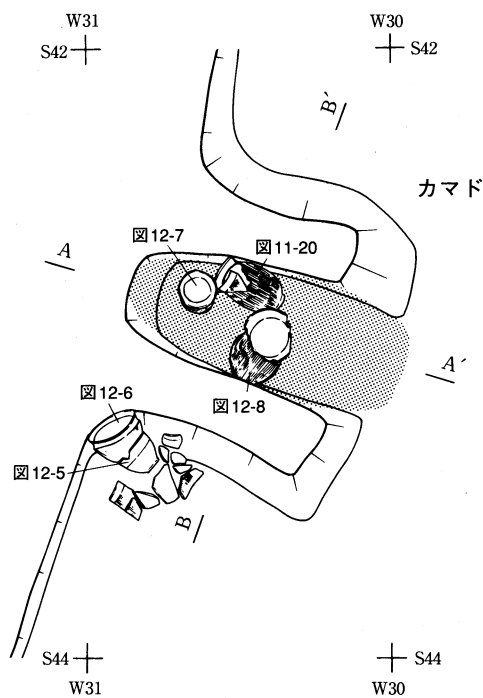
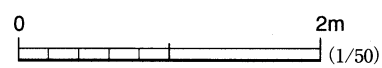
遺構 (図10, 写真9・10)

本住居跡は、調査区南西部のS13-3・4・13・14グリッドに位置している。付近は標高207.4m前後のほぼ平坦な場所になっている。重複関係にある遺構はないが、北方約2mの地点には1号住居跡、北東約3mの地点には11・21号住居跡が位置している。

第2章 遺構と遺物



2号住居跡堆積土
 1 10 Y R 3/3 暗褐色砂質土
 (雲母を多量, 炭化物粒を少量含む)



2号住居跡カマド堆積土
 1 10 Y R 3/4 暗褐色砂質土
 (焼土・焼土粒を含む)
 2 10 Y R 3/4 暗褐色砂質土
 (明黄褐色砂質土を少量含む)

焼土化範囲

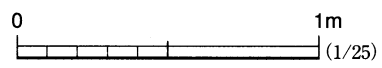


図10 2号住居跡

検出面はLⅢ上面である。遺構内堆積土は少量の炭化物を含むものの、乱されたような状況は認められなかったため、自然堆積土と判断した。

本住居跡は、一辺が4.4m前後のほぼ方形を呈し、カマドを通る主軸線は、N70°Wである。周壁は床面からやや急な角度で立ち上がり、周壁の高さは13～23cmを測る。床面はほぼ平坦に整地されているが、踏み締めや貼床は確認されなかった。柱穴や壁溝も検出されなかった。床面からは多数の遺物が出土した。

カマドは、西壁のほぼ中央で1基検出された。形態は竪穴プラン内に燃焼部を持ち、「ハ」の字に張り出した両袖をもつもので強い火熱を受けている。燃焼部の底面から側壁にかけては、厚さ約4cmの酸化面が確認された。両袖によって確保された燃焼部の規模は、下端ラインで焚口幅約35cm、奥行約80cmを測り、袖は床面から7～18cm程度の高さまで遺存していた。カマドの堆積土は2層に区分される。ℓ1は燃焼部の天井部が崩落して堆積した層であると考えられ、ℓ2はカマド袖の構築土である。燃焼部中央から土師器の甕3点がまとまって出土した。カマド周辺からも多くの土師器が出土している。なお、煙道は流失しており、確認できなかった。

遺物 (図11・12, 写真91・92)

本住居跡から出土した遺物は、土師器982点、須恵器12点、鉄製品1点である。図11-1～14、図12-2・4は、土師器の杯である。図11-1～10・12～14は有段丸底の杯で、口縁部形態には外反するものと内湾するものの2種類がある。頸部には、器面をえぐるような強いナデによって、段や稜が形成されている。外面は口縁部がヨコナデ、底部がヘラナデ・ヘラケズリによって仕上げられている。内面には、黒色処理・ヘラミガキが施されている。14は底部の外面にまで、ヘラミガキが及んでいる。11は頸部に段を形成しない杯で、底部のヘラケズリ調整は口縁部にまで達していた。図12-2・4は、厚みを持つ底部から外反する口縁部が立ち上がる器形を有している。形はあまり整っておらず、口縁部にはゆがみが見られる。器面は、ナデ調整によって整えられている。手擦れの痕跡が認められないため、儀礼などで使用された非実用品の可能性はある。

図11-15～19は土師器の高杯である。杯部は有段丸底を呈している。脚部は短く、ラッパを伏せたように裾が広がっている。外面調整は、口縁部がヨコナデ、杯底部から脚部にかけてがヘラナデ・ハケメ、脚部の裾がヨコナデである。

図12-1は土師器の小壺である。体部は底部から外傾して立ち上がり、肩部で内側に屈曲してから、口縁部が外側に開いている。調整は外面が口縁部ヨコナデ、体部ハケメ、内面が口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデである。頸部には1対の小孔が開けられている。

図12-3は土師器の鉢である。口縁部は外傾し、体部は内湾する器形を有している。底部は小さい平底で、厚めに作られている。外面の調整は、口縁部がヨコナデ、体部がまばらなヘラミガキで仕上げられている。体部には、ヘラミガキ調整を施す前に、ハケメやヘラナデによる調整が行われている。内面もヘラミガキで仕上げられているが、まばらである。

図12-5～7は土師器の甕である。法量的には、5が小型、6が中型、7が大型に分類される。

第2章 遺構と遺物

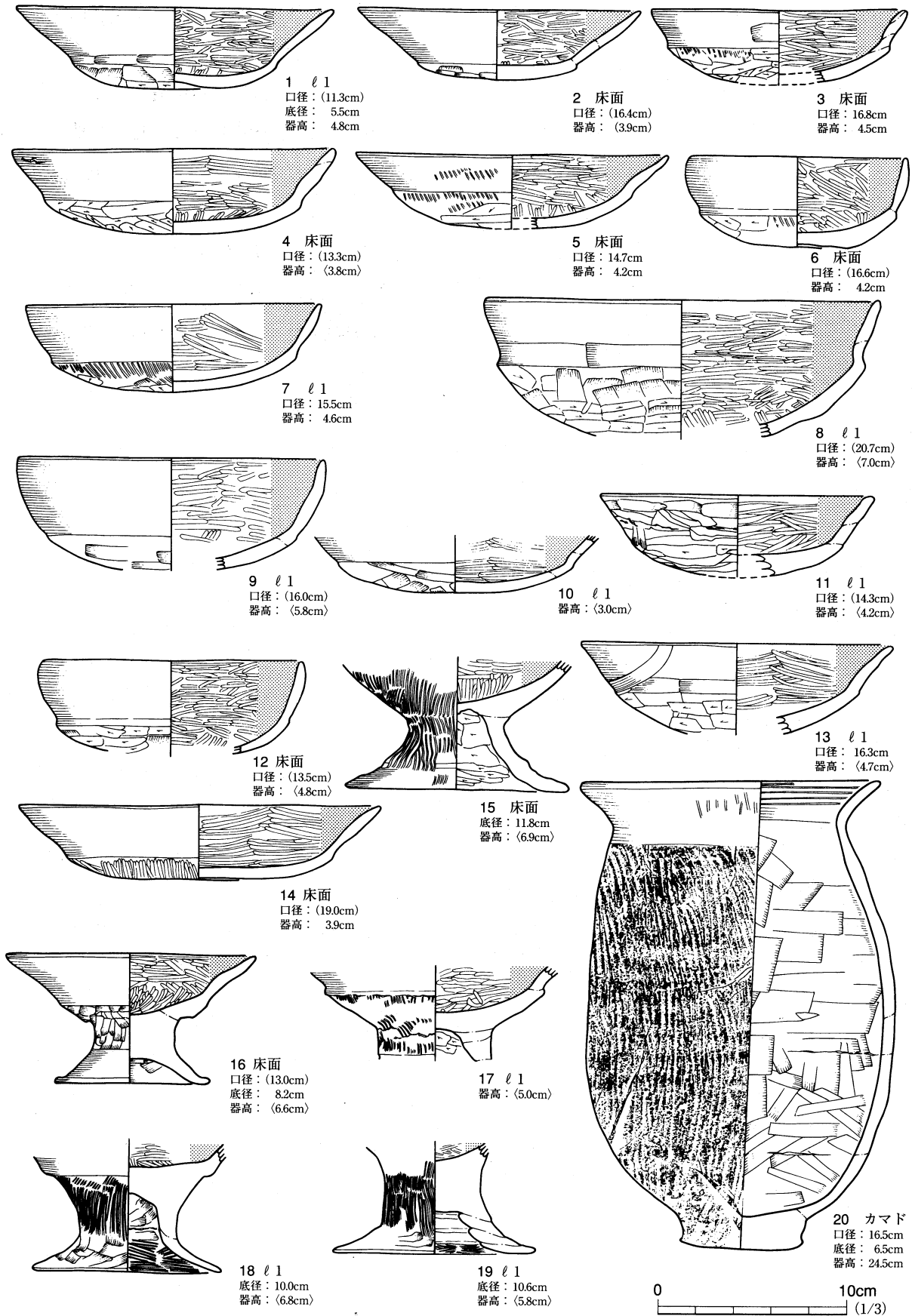


図11 2号住居跡出土遺物(1)

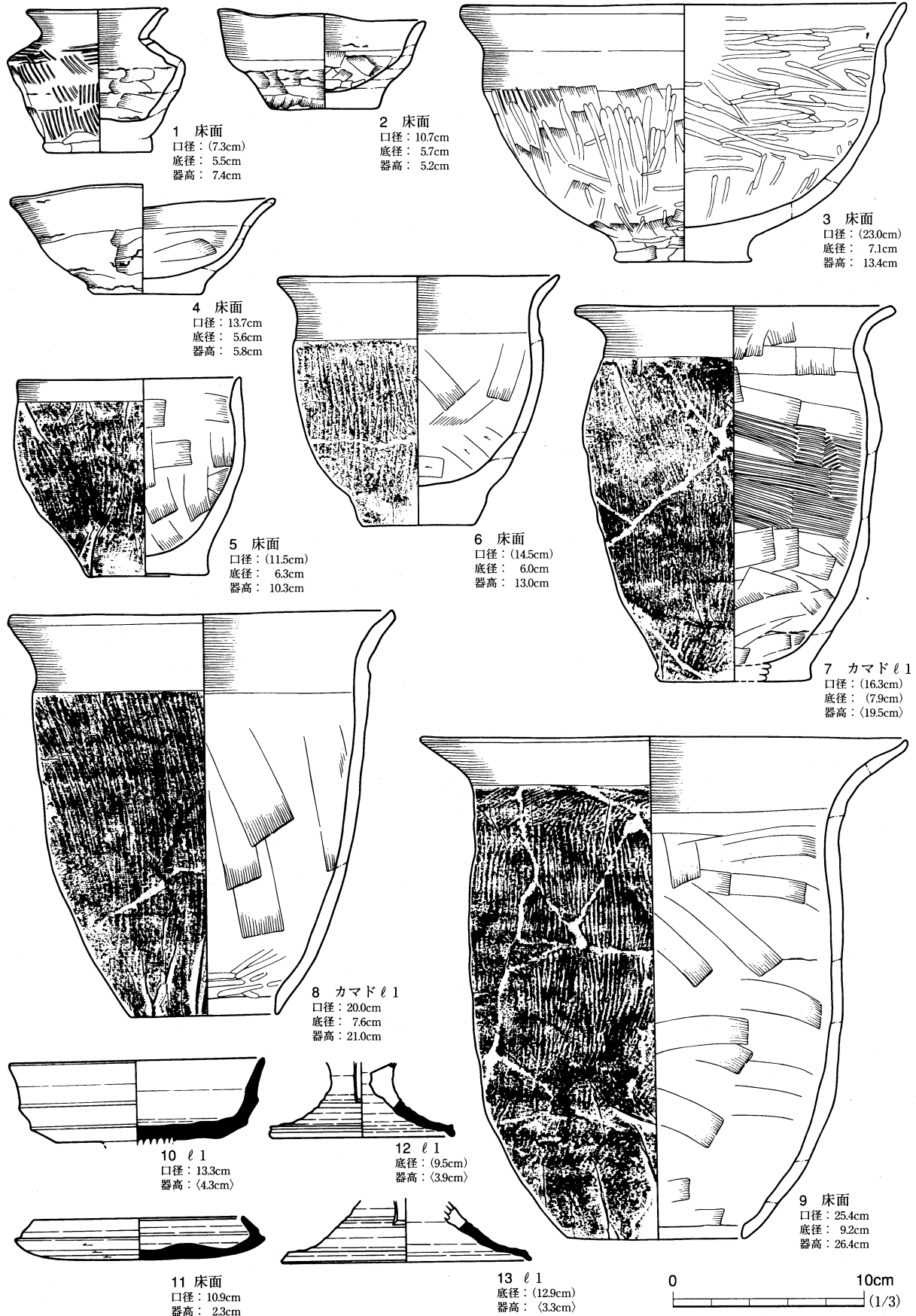


図12 2号住居跡出土遺物(2)

第2章 遺構と遺物

5は口縁部が短く直立し、胴部が少し膨らむ器形、6・7は口縁部が外反し、胴部が少し膨らむ器形を有している。調整は外面が口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ、内面が口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ・ハケメである。

図12-8・9は土師器の無底甑である。口縁部は外反し、胴部はあまり膨らまず、底部ですぼまっている。器面調整は、外面が口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ、内面が口縁部ヨコナデ、胴部ハケメである。

図12-10・12・13に須恵器の高杯を示した。10が杯部、12・13が脚部である。杯部は口縁部が外反気味に立ち上がる形態で、器面に装飾などは認められない。脚部は、長方形の透かしを有し、裾部がラッパを伏せたように広がっている。また、脚端部は若干下方に折れている。

図12-11は須恵器の杯である。口径に対して器高が低いため、全体的に扁平な感じがする。口縁部は頸部で強く屈曲して、内傾している。

まとめ

本遺構は、中型の部類に属する竪穴住居跡である。カマドの燃焼部内や左袖脇には、土師器の甕・甑が並べて置かれている状況であった。所属時期は出土した土師器・須恵器の年代観から、7世紀中頃と考えられる。

(堀川)

3号住居跡 S I 03

遺構 (図13)

本住居跡は調査区南西寄りのS12グリッドに位置し、自然堤防頂部のほぼ平坦な地形上に構築されている。4号住居跡と重複しており、本住居跡の方が古い。周囲には、北に18号土坑が接しており、南西約3.4mに6号住居跡、南方約2mに1号建物跡、南東約1mに1号住居跡、東方約2mに1号土坑が近接している。

検出面はLⅢ上面であるが、プランを検出した時点で床面まで露出しており、掘り込み部は東壁及び南壁に沿うと考えられる壁溝が確認できる程度であった。

住居跡の平面規模は、壁溝の残存する北東コーナーから南東コーナーまでの遺存値が6.5m、壁溝の南東コーナーから検出プランの南西隅までが約6.8mを測り、平面プランは正方形を呈すると推測される。東辺を基準とした南北軸は、N10°Wの方向を示している。

本住居跡に伴う施設として壁溝、ピットを確認した。壁溝は、東辺中央部から北東コーナーを巡り北辺で4号住居跡に切られるものと、東辺南東コーナーから南辺を巡る2条が確認された。堆積土は、炭化物粒を少量含む暗褐色砂質土である。壁溝の幅は8~50cm、深さは床面から3~25cmを測る。床面はほぼ平坦で、締めりはやや緩く、貼床も確認できなかった。床面を精査したところ、東辺中央部において長径63cm、短径48cmの楕円形を呈する酸化面が確認され、カマド燃焼部の痕跡と考えている。酸化面から北に約50cmの壁溝際では、ピット1個を確認した。ピットの平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸1m、短軸75cm、床面からの深さが39cmを測る。堆積土はにぶい黄褐

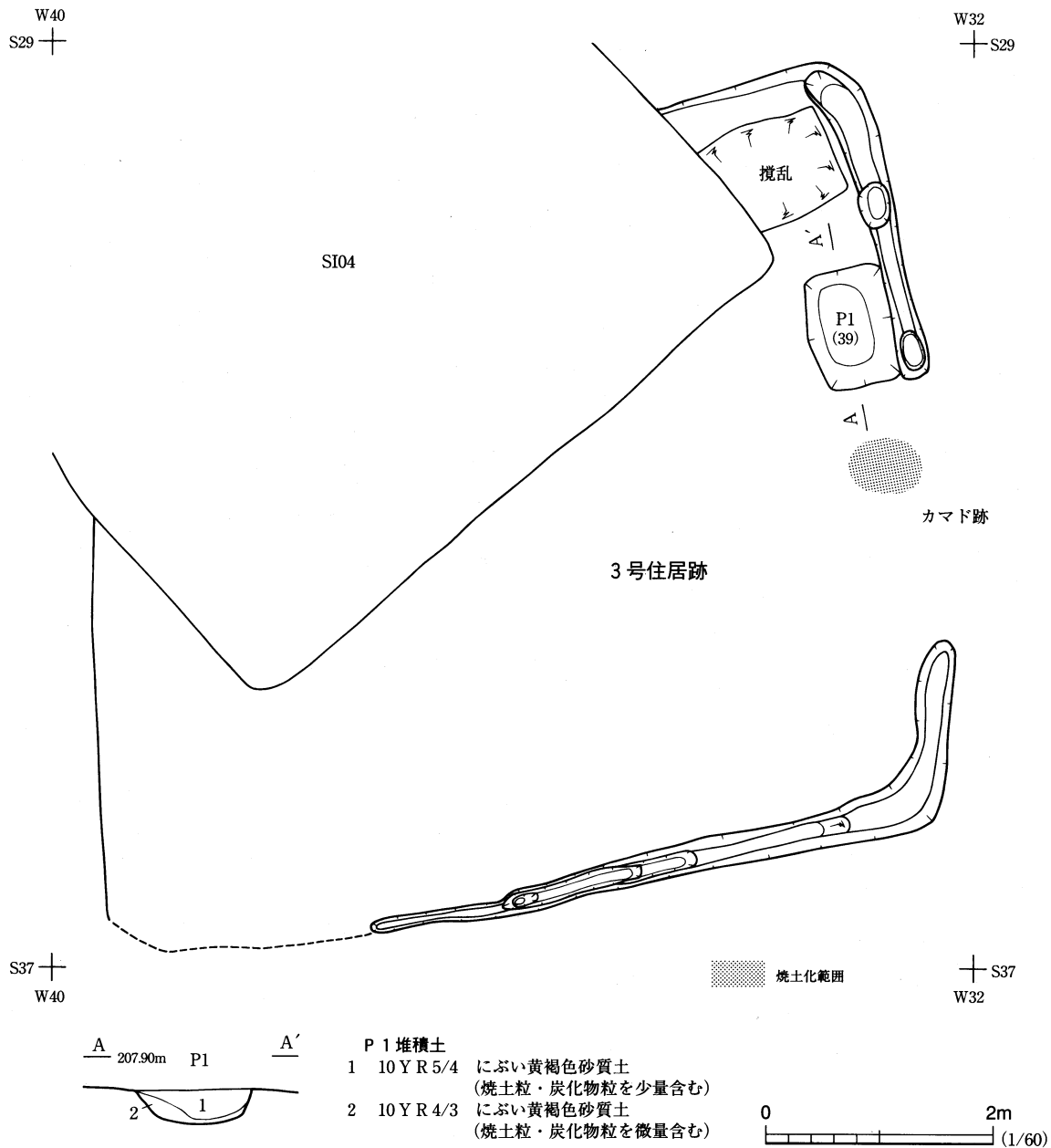


図13 3号住居跡

色砂質土で、堆積状況から自然流入と判断した。その位置や規模から、貯蔵穴と考えている。

遺物 (図14, 写真92)

本遺構からは、土師器片206点、須恵器片1点、石製品1点が堆積土から出土している。図14-1・2は土師器甕の底部破片である。1は、外面にハケメ、内面にヘラナデが施されている。2は、外面にヘラナデ、内面には幅の広いヘラナデが施されており、内面には、粘土紐積み上げ痕が観察される。

図14-3は口縁部に最大径を持つ無底の土師器甕である。底部より口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、頸部に段を持ち、口縁部が外反して立ち上がる器形を呈する。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、胴部にハケメが施されている。口縁部内面は、横方向のハケメと一部にヘラナデが施さ

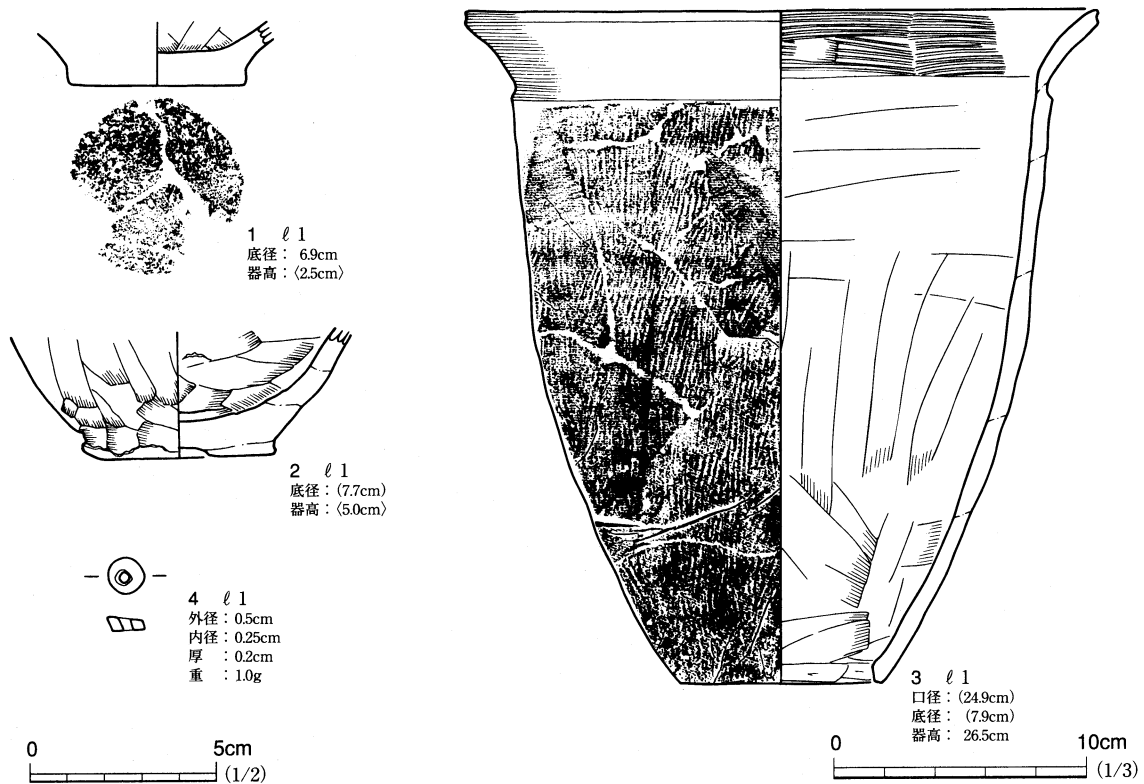


図14 3号住居跡出土遺物

れている。胴部内面には縦方向のヘラナデが施され、底部周縁は横方向のヘラケズリで調整されている。

図14-4は石製の小玉である。

まとめ

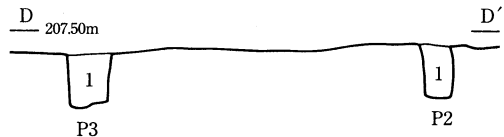
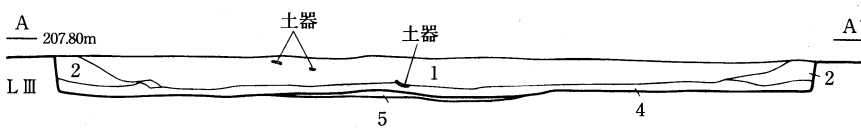
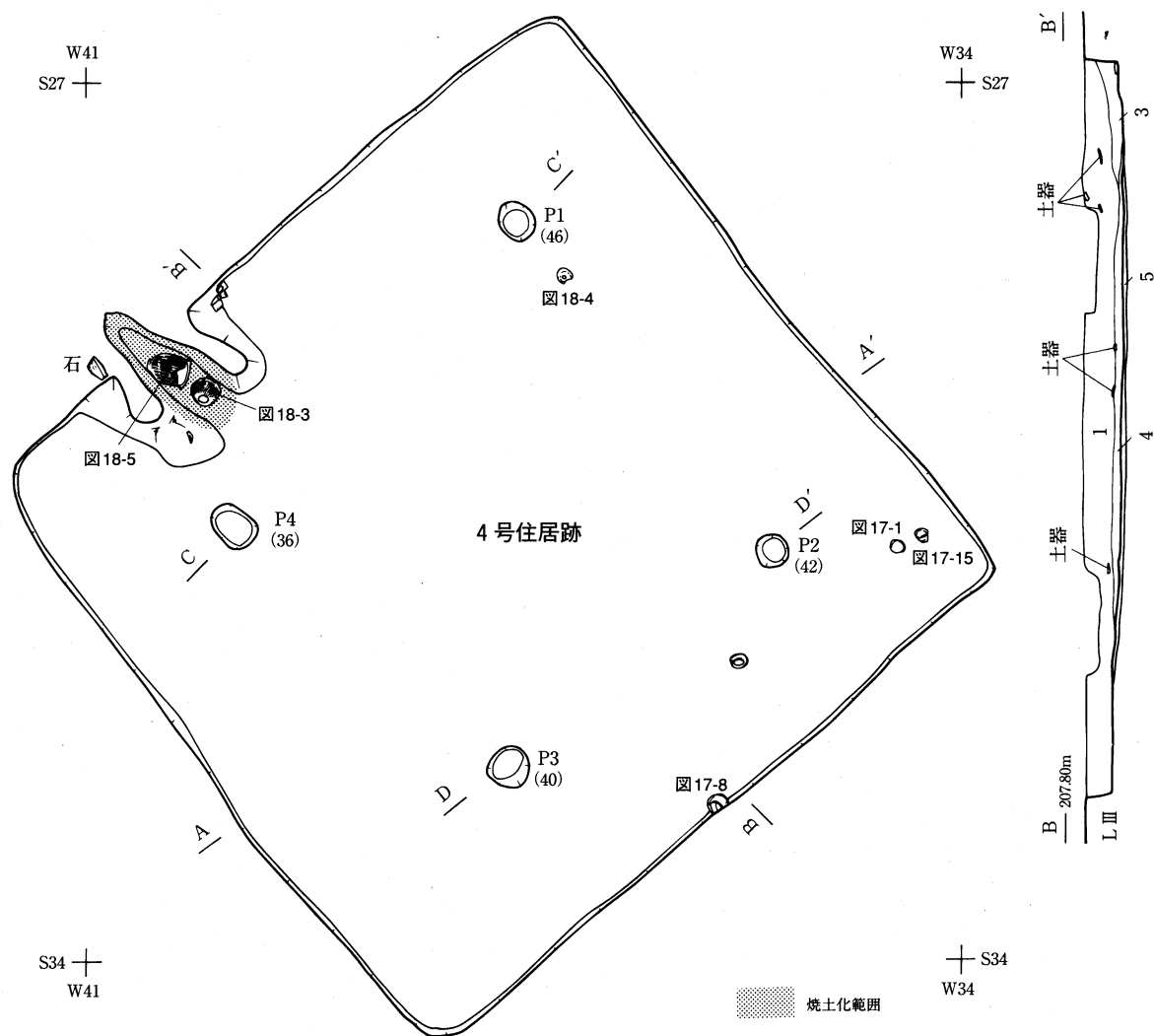
本遺構は、床面と壁溝の一部が残存するのみで遺存状態の悪い竪穴住居跡である。床面からは貯蔵穴と考えられるピット1個と、カマドの痕跡と推測される酸化面が検出された。出土した遺物の特徴から、所属時期は6世紀後半から7世紀後半にかけてと考えている。(成田)

4号住居跡 S I 04

遺構 (図15・16, 写真11・12)

本住居跡は調査区南西部のR・S12グリッドに位置している。周囲の地形はほぼ平坦で、調査区の中では最も高い標高207.6mの自然堤防頂部付近に構築されている。3号住居跡と重複しており、本住居跡の方が新しい。周囲には、東に18号土坑が隣接し、北東2mに12号住居跡、西方1.6mに13号土坑が近接している。

検出面はLⅢ上面である。遺構内堆積土は5層に区分した。ℓ1・2はLⅡbに近似する褐色砂質土で、ℓ1には炭化物粒・焼土粒を微量に含んでいる。ℓ3・4はLⅢに近似する黒褐色砂質土を少量含む暗褐色系の砂質土である。ℓ1～4は、堆積状況から自然流入と考えられる。ℓ5はにぶい黄橙色砂質土の貼床である。



- 4号住居跡堆積土**
- 1 10 Y R 4/4 褐色砂質土
(焼土粒を微量, 炭化物粒を少量含む)
 - 2 10 Y R 4/6 褐色砂質土
 - 3 10 Y R 4/6 にぶい黄褐色砂質土
(炭化物粒を微量, 黒褐色土を少量含む)
 - 4 10 Y R 3/4 暗褐色砂質土
(炭化物粒を微量, 黒褐色土を少量含む)
 - 5 10 Y R 6/4 にぶい黄橙色砂質土
(貼床土)
- P 1 堆積土**
- 1 10 Y R 4/3 にぶい黄褐色砂質土
(焼土粒を微量, 炭化物粒を少量含む)
- P 2~4 堆積土**
- 1 10 Y R 3/4 暗褐色砂質土 (しまりなし)

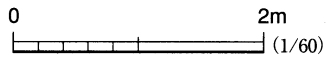


図15 4号住居跡

住居跡平面形は1辺約5.8mのはば正方形を呈し、カマドを通る軸線はN35°Wを示している。周壁は80~85°と急角度で立ち上がり、遺存高は20~32cmを測る。壁溝・壁柱は検出されなかった。床面は中央付近がややくぼんでおり、2~5cm程度の薄い貼床が施されている。

カマドは、北西壁の中央より北西隅に寄った位置に設置されている。両袖とも地山を掘り残した上に黄褐色の砂質土を貼り付けて構築している。両袖によって確保された燃焼部の規模は、下端ラインで焚口幅約30cm、煙道へ移行するまでの奥行き約90cmを測り、袖の高さは25cm程遺存している。燃焼部から緩やかに上る煙道は、10~20cmの下端幅でカマド奥から約30cm伸びた部分までしか確認できなかった。燃焼部の底面は3~5cmの厚さで赤く焼け、壁面から煙道にかけても1cm程度の酸化面が確認された。カマド内の堆積土は4層に区分した。①はカマド天井部崩落後の流入土、②は天井部の崩落土とみられる。③は天井部崩落前の流入土および燃焼部や天井部から一部崩落した焼土であろう。④はLⅢに近似する黒褐色土を含んだ黄褐色砂質土で、カマド袖構築土である。なお、燃焼部から土師器の甕2個体が放置されたような状態で出土した。

ピットは床面上から住居跡対角線上に4個確認され、主柱穴と考えている。平面形は円形基調で、径25~42cm、床面からの深さ36~46cmを測る。堆積土はP1が炭化物粒・焼土粒を含むにぶい黄褐色砂質土、P2~4が暗褐色砂質土で、いずれも柱痕は確認できなかった。各主柱穴間の距離は、2.8~3.3mを測り、これらを結ぶと方形基調となる。

遺物 (図17・18, 写真92・93)

本遺構から土師器片1,243点、須恵器片4点、縄文土器片1点、土製品5点、鉄製品3点が出土

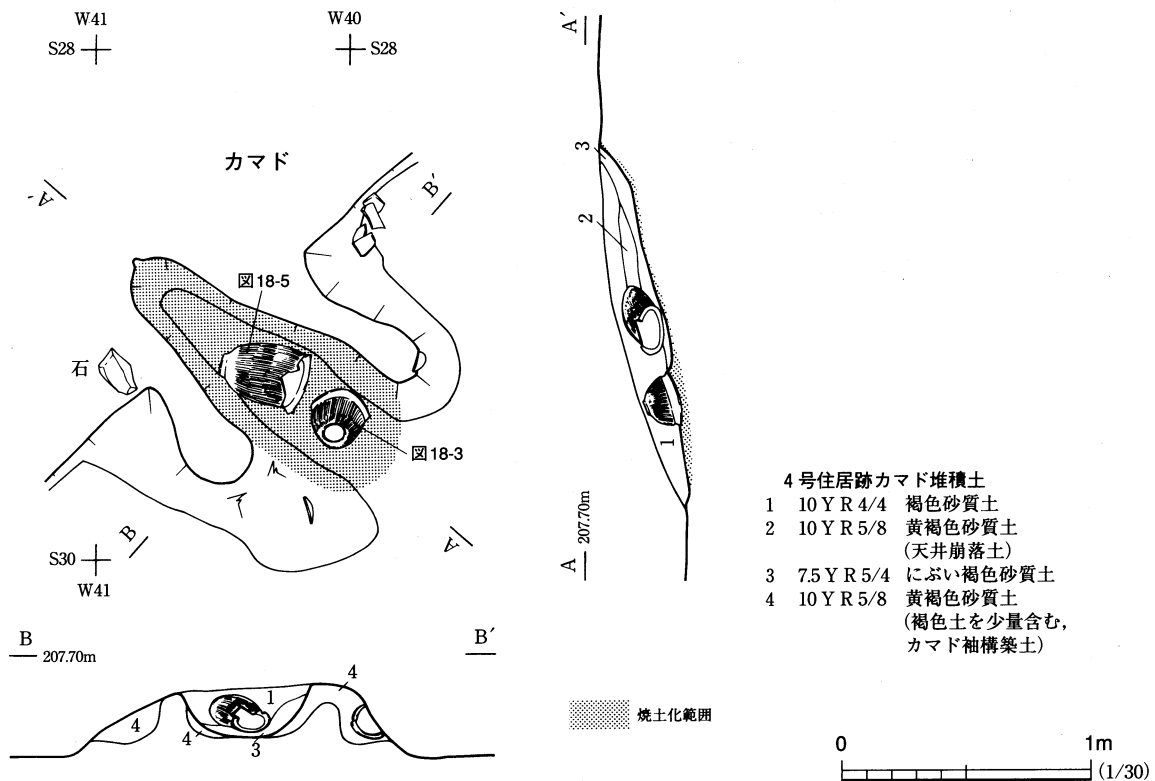


図16 4号住居跡カマド

している。図17-1~10は土師器杯で、8・9・10を除いて内面にはヘラミガキの後に黒色処理が施されている。1の外面は、口縁部にヨコナデとヘラナデが施され、体部がヘラケズリ後にヘラナデが加えられている。粘土紐の積み上げ痕も観察される。2は口縁部外面にヘラミガキ、下半にヘラナデ、体部から底部にかけてヘラケズリが施されている。3・4・6は、有段丸底で口縁部がほぼ直線的に外傾する器形を呈する。3の外面は、口縁部にヨコナデとヘラナデ、体部から底部にかけてヘラケズリが施されている。4の外面は、口縁部にヨコナデ、体部から底部にかけてヘラケズリ後にヘラナデが施されている。6の外面は、口縁部にヨコナデ、体部から底部にヘラナデが施されている。5・7は口縁部と体部の境に沈線による段を持つ器形である。5は口縁部外面にヨコナデが施され、体部から底部にかけてヘラケズリ後にヘラナデが加えられている。7の外面は、口縁部にヨコナデ、体部から底部にかけてヘラケズリが施されている。8は口縁部と体部の境に明瞭な段を有し、口縁部はやや内湾ぎみに立ち上がる。外面調整は、口縁部にヨコナデ、下半から底部周縁にかけてヘラケズリが施されている。内面には、丁寧なヘラナデが施されている。9は口縁部と体部の境に緩やかな段を持つ。外面調整は、口縁部にヨコナデ、下半にヘラナデ、体部から底部にかけてはヘラナデとヘラケズリが施されており、粘土紐積み上げ痕も観察される。内面にはヘラミガキが施されている。10は体部でやや膨らみを持ち、口縁部で内湾する小型の杯である。体部外面にヘラケズリ、内面にヘラミガキが施されている。

図17-11は土師器の椀で、丸底から内湾ぎみに立ち上がり、体部から口縁部にかけて明瞭な段を有する器形を呈する。外面調整は、口縁部にヨコナデとヘラナデ、体部から底部にかけてヘラケズリが施されており、粘土紐の積み上げ痕も確認される。内面はヘラミガキ後に黒色処理が施されている。

図17-12・14・15は手捏ね土器である。12は平底の底部から半球状の胴部形を呈し、頸部がすぼまり、口縁部が直に立ち上がる器形である。調整は、外面にはヘラナデ後にハケメが加えられ、内面はヘラナデが施されている。底部には木葉痕が観察される。14・15は平底の底部から外傾して立ち上がり口縁部まで連続する器形を呈する。調整は、内・外面ともにヘラナデが施されており、胴部外面には粘土紐の積み上げ痕が数段観察される。15の底部にはヘラケズリが観察される。

図17-13・16は小型の土師器甕で、口縁部から胴部の破片である。13は球胴状の胴部を呈し、遺存する口縁部が外傾する器形である。外面調整は、口縁部にヨコナデ、胴部にハケメが施されている。胴部内面にはヘラナデが観察される。16は胴部が内湾ぎみに外傾し、胴部と口縁部の境に緩やかな段を持ち、口縁部で外反する器形を呈する。外面調整は、口縁部にヨコナデ、胴部に縦方向のヘラナデが施されている。内面は、口縁部に横方向のヘラナデ、胴部に縦方向のヘラナデが観察される。

図17-17・18、図18-1・2は土師器甕の底部破片である。図17-17は外面にヘラナデ、内面にヘラミガキが施されている。18は内・外面ともにヘラナデが施されており、底部には木葉痕が観察される。図18-1は外面にハケメ、内面にヘラナデが施されている。2は偏平な底を呈しており、

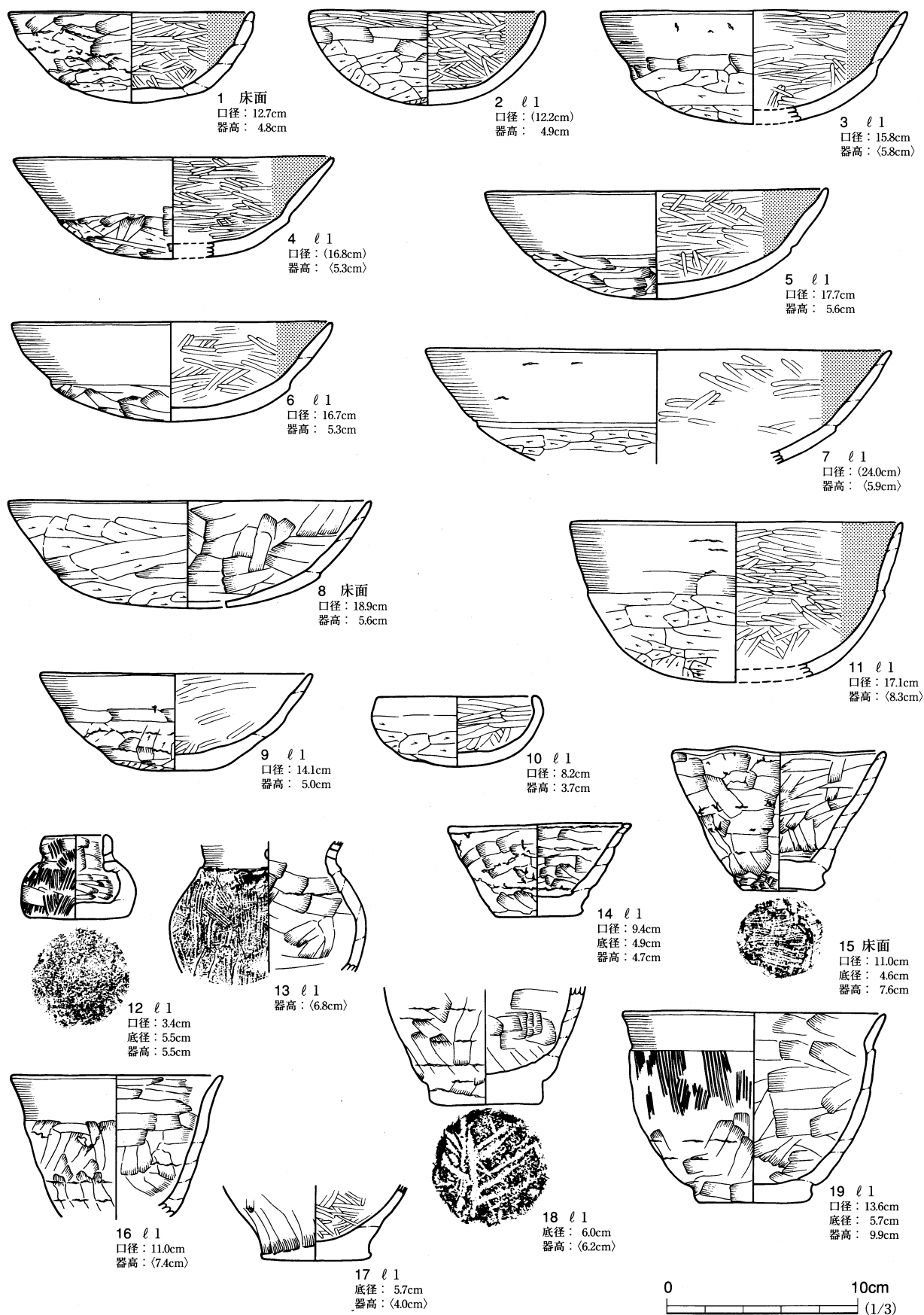


図17 4号住居跡出土遺物(1)

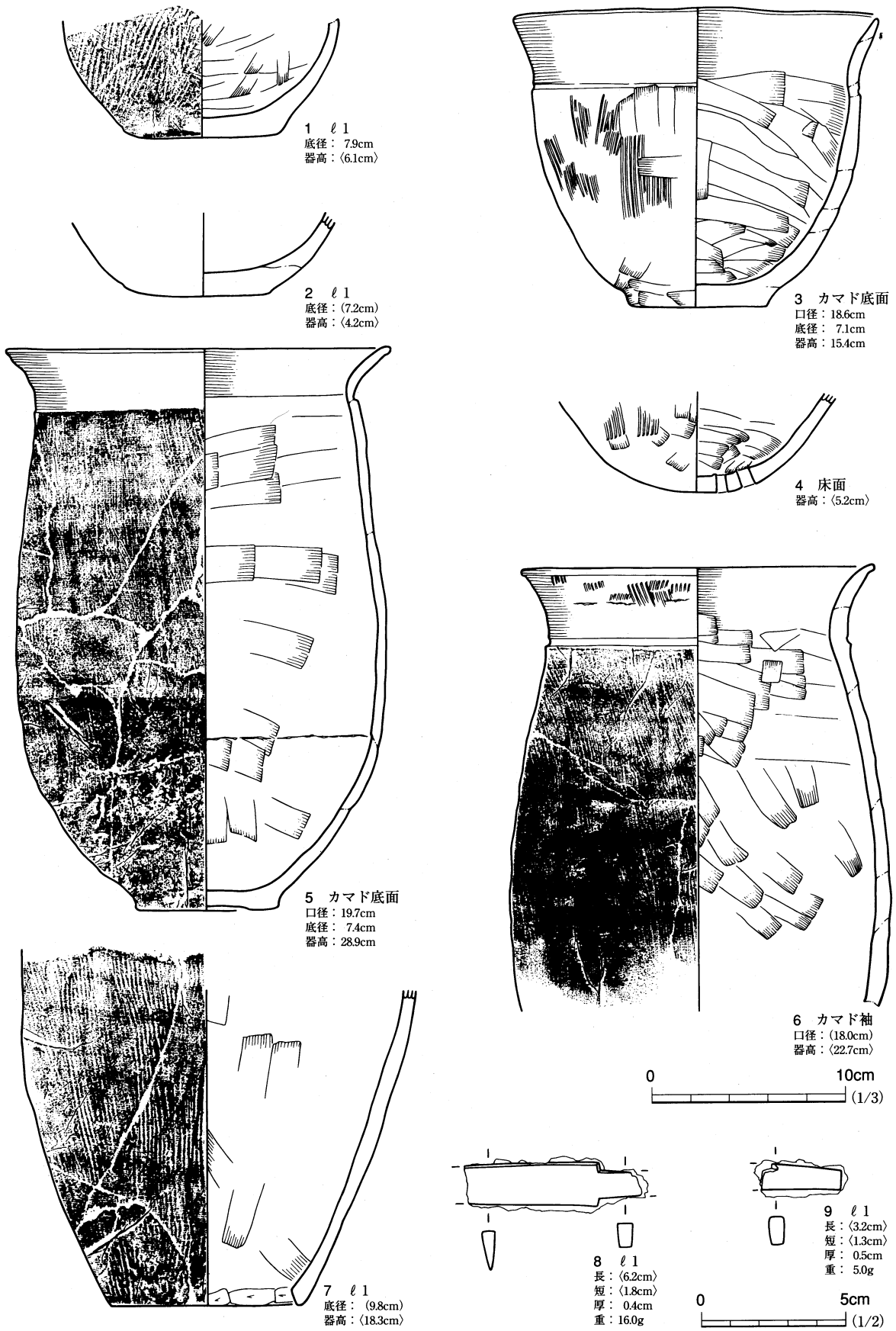


図18 4号住居跡出土遺物(2)

摩滅が激しいため器面調整は確認できなかった。

図17-19は中型の土師器甕である。底部から緩やかに内湾して立ち上がり、胴部と口縁部の境に明瞭な段を持ち、口縁部で外反する。外面調整は、口縁部にヨコナデ、胴部上半にハケメ、胴部下半から底部にかけてヘラナデが施されており、胴部には粘土紐の積み上げ痕が観察される。内面は、ヘラナデが施されている。

図18-3はカマド底面から下向き状態で出土した土師器甕で、口縁部の一部を欠損している。底部から緩く内湾しながら口縁部へと続き、胴部と口縁部の境に沈線による段を持ち、口縁部で緩やかに外反する。最大径は口縁部に有する。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、胴部にハケメの後にヘラナデ、底部にヘラナデが施されている。内面は、口縁部にヨコナデ、胴部から底部にかけてヘラナデが施されている。

図18-4は多孔式の土師器甕の底部破片である。外面にはハケメとヘラナデ、内面にはヘラナデが施されている。

図18-5は、カマド奥側から口縁部を焚口側に向けて横向きの状態で出土した土師器の長胴甕である。口縁部に最大径を有し、平底から内湾して立ち上がり、胴部下半で緩やかに膨らんで頸部へと続き、頸部には明瞭な段を持ち、口縁部は「く」の字に外反する器形を呈する。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、胴部から底部にかけてハケメが施されている。内面は、口縁部にヨコナデ、胴部にヘラナデが施されており、粘土紐の積み上げ痕も観察される。なお、胴部下半から底部周縁には火を受けた痕跡が認められる。

図18-6はカマド袖から出土した土師器の長胴甕で、胴部下半から底部を欠損している。頸部には沈線が回り、最大径は胴部中位に有すると推測される。外面の調整は、口縁部にヨコナデ後に一部ハケメが加えられ、胴部にハケメが施されている。内面は、口縁部にヨコナデ、口縁部下位から胴部にヘラナデが施されている。粘土紐の積み上げ痕も数段観察される。

図18-7は無底の土師器甕で、口縁部を欠損している。器面調整は、胴部外面にハケメ、胴部内面にヘラナデが施され、底部内面はヘラケズリで調整している。胴部の外面は、一部著しく摩滅している。

図18-8・9は、鉄製の刀子である。

まとめ

本遺構は、支柱穴とカマドを有し、1辺5.8m前後の正方形を呈するやや大型規模の竪穴住居跡である。堆積土及び床面から多数の遺物が出土しており、その特徴から所属時期は7世紀後半から8世紀前半にかけてと考えている。 (成田)

5号住居跡 S I 05

遺構 (図19・20, 写真13・14)

本住居跡は調査区南西部のR12グリッドに位置し、自然堤防頂部付近のほぼ平坦な地形に構築さ

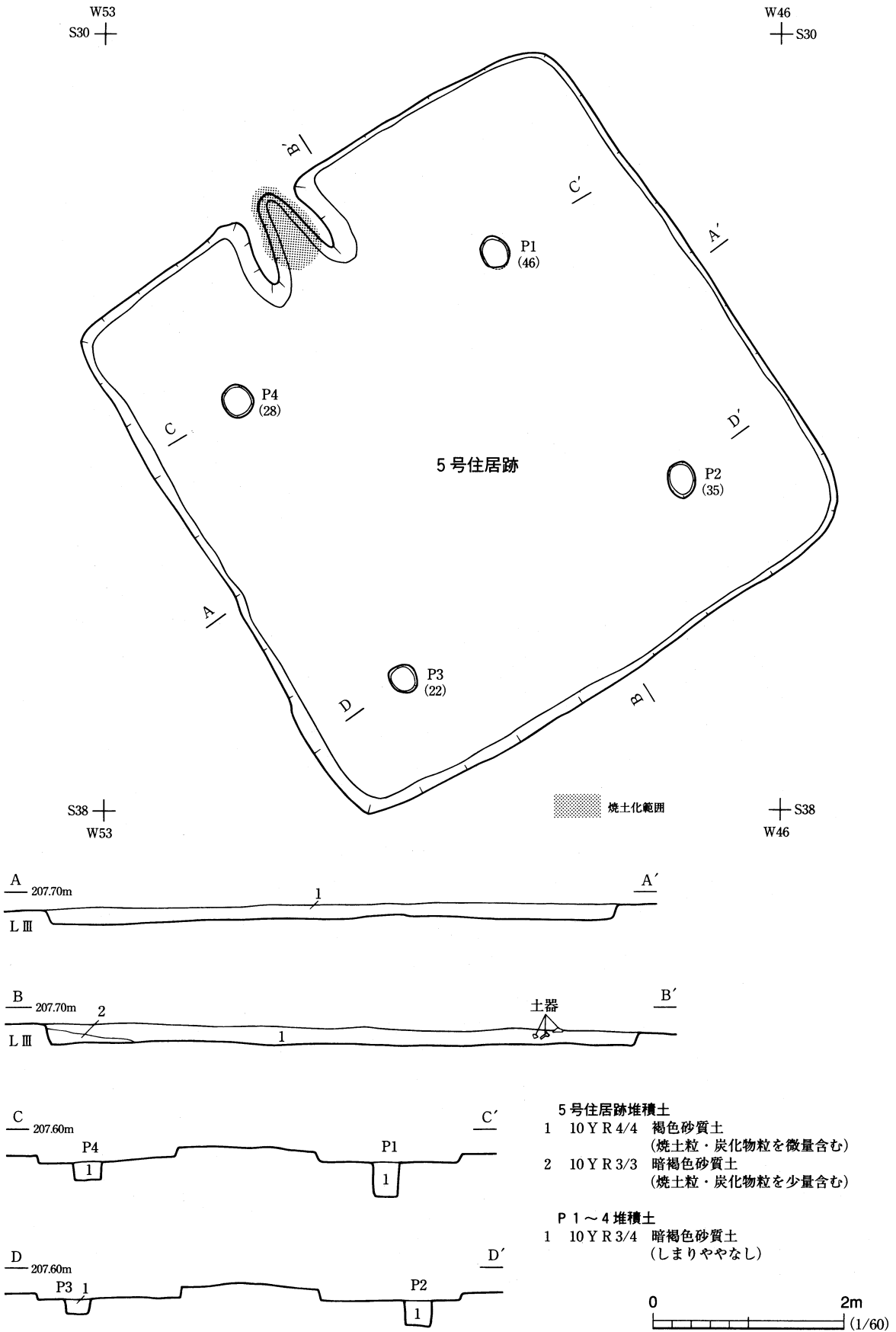


図19 5号住居跡

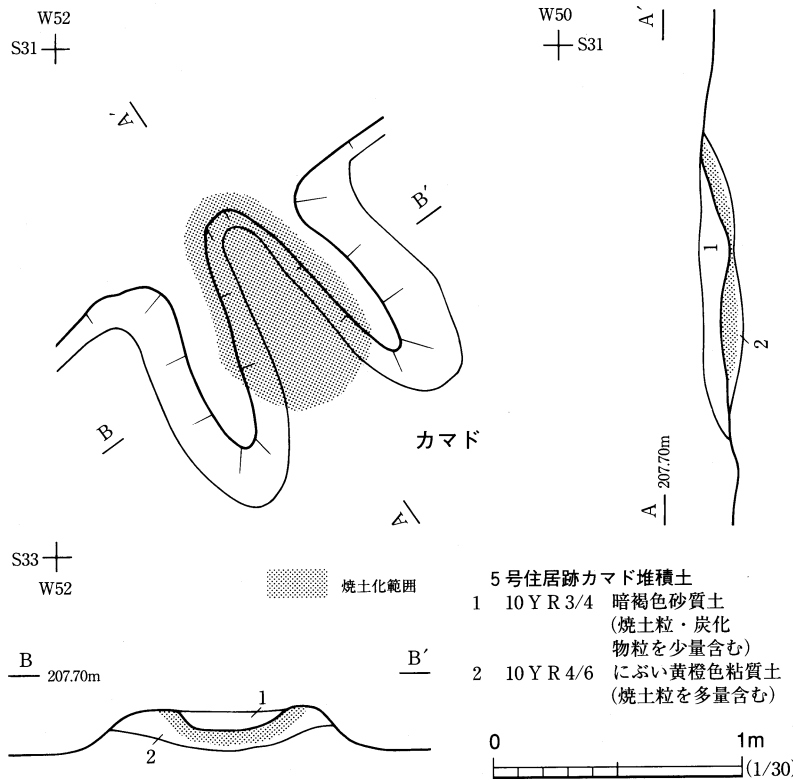


図20 5号住居跡カマド

いる。周壁は床面から60~70°とやや急に立ち上がり、遺存高は13~20cmを測る。壁溝・壁柱は検出されなかった。床面はほぼ平坦に整地されており、貼床も踏み締まりも認められなかった。

カマドは北西壁の中央よりやや西寄りの位置に設置されている。住居プラン内に燃焼部を持つ両袖タイプのもので、両袖が「ハ」の字に張り出している。両袖とも地山を10cmほど掘り残した上ににぶい黄橙色の粘質土を貼り付けて構築している。両袖によって確保された燃焼部の規模は、下端ラインで焚口幅約70cm、奥壁までの長さ約90cmを測り、袖の高さは15cmほど遺存している。煙道部は確認できなかったが、おそらく後世の浸食などにより失われたと考えられる。燃焼部の底面から側壁にかけては約10cmの厚さで酸化している。カマドの堆積土は2層に区分した。l 1は炭化物粒・焼土粒を含む暗褐色土で、自然流入したものと考えられる。l 2はにぶい黄橙色粘質土で、カマド袖および底面の構築土で、焼土粒を多量に含んでいる。

ピットは床面上部では確認できなかったが、床面を10cm程掘り下げたところ4個が確認された。住居跡対角線上に3.0~3.5mのほぼ等間隔で配列されており、主柱穴と考えられる。平面形は円形基調で、径28~32cm、検出面からの深さ22~46cmを測る。堆積土はいずれも混入物の認められない暗褐色砂質土で、柱痕は確認できなかった。

遺物 (図21, 写真93・94)

本遺構から土師器片245点、須恵器片1点、縄文土器片1点、弥生土器片1点、土製品1点が出土している。図21-1・7は土師器の杯である。1は有段丸底の器形を呈し、内面にはヘラミガキ後に黒色処理が施されている。外面調整は、口縁部にはヨコナデ、体部から底部にかけてヘラケズ

れている。6号住居跡と重複しており、本住居跡の方が新しい。周囲には、北方3.0mに2号土坑、北東3.4mに13号土坑が近接している。

検出面はLⅢ上面である。遺構内堆積土は2層に区分した。l 1は褐色砂質土、l 2はLⅢに近似する黒褐色砂質土を含む暗褐色砂質土である。いずれも炭化物粒・焼土粒を含み、堆積状況から自然流入と判断した。

平面プランは1辺約6mのほぼ正方形を呈し、カマドを通る軸線はN35°Wを示して

リが施されている。7は平底からほぼ直線的に外傾して立ち上がり、口縁部でやや外反する器形を呈する。器面調整は、内・外面ともにヘラナデが施され、外面には粘土紐の積み上げ痕、底部には木葉痕が観察される。

図21-2・5は土師器高杯の脚部である。2の器面調整は、上半部外面にヘラケズリ、下半部外面にヘラナデ、下半部内面にヘラナデが施されている。5は、内・外面ともにヘラナデが施され、内面には粘土紐の積み上げ痕が数段観察される。

図21-3は土師器の小壺で、口縁部を欠損している。器形は丸底から球胴状を呈し、調整は内・外面ともにヘラナデが施されている。

図21-4はほぼ完形の手捏ね土器である。平底の底部が器厚が最も厚く、口縁部に向かって薄くなる。器面調整は、内・外面ともにヘラナデが施されている。

図21-6は土師器の壺と思われる底部破片で、胴部は球胴状を呈すると推測される。外面調整は、胴部下半から底部にかけてヘラケズリ、内面にはヘラナデが施されている。

図21-8・9は、小型の土師器甕である。8の外面調整は、口縁部にヨコナデ、胴部上縁にハケメ、胴部から底部にかけてヘラナデが施されている。内面は、ヘラナデが施されている。9は口縁

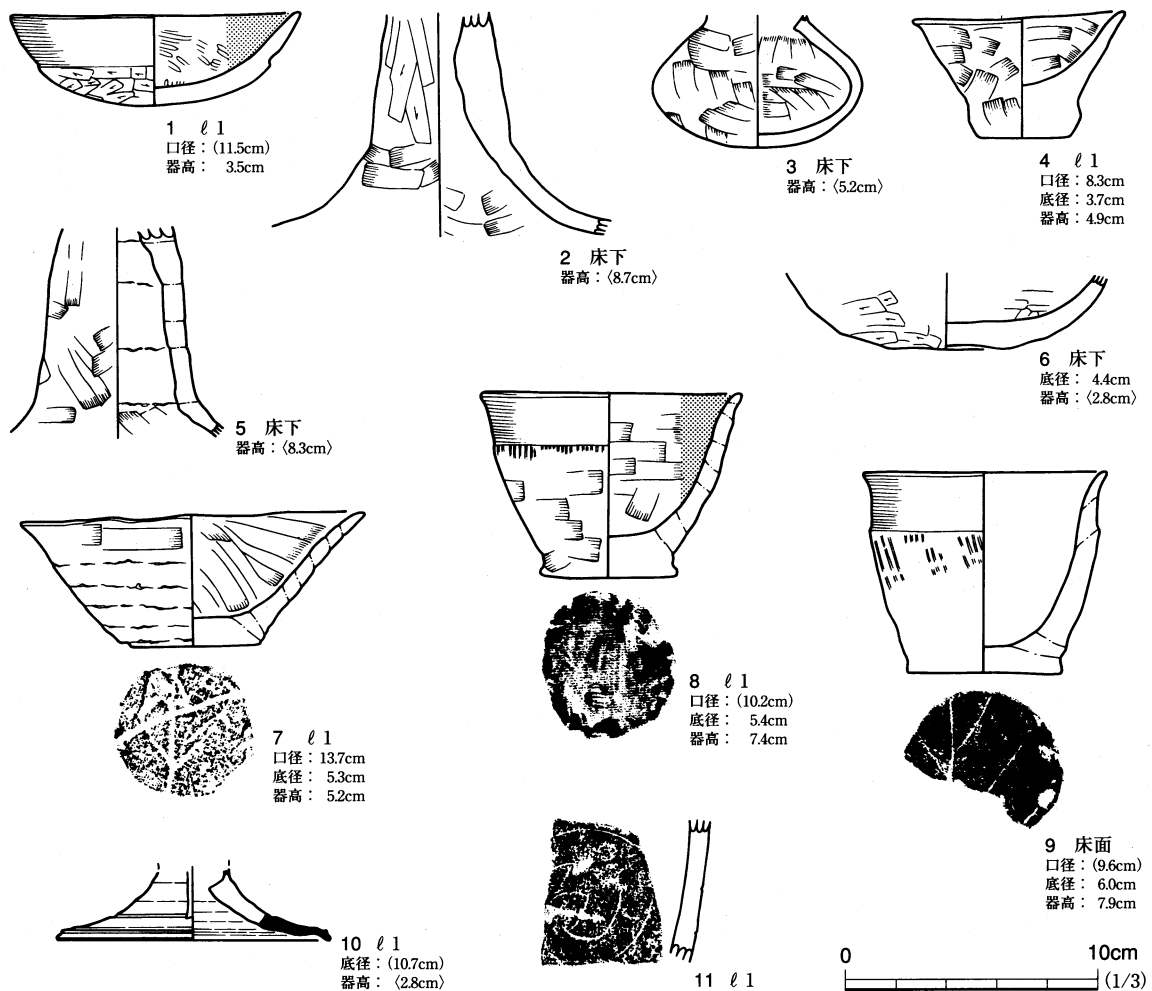


図21 5号住居跡出土遺物

部外面にヨコナデ、胴部上半にハケメが施されている。内面は摩滅が著しく調整は確認できないが、底部には木葉痕が観察される。

図21-10は須恵器高杯の脚部で、3方透かしの2方が認められる。外反しながら広がる脚部は、端部下端で下方に折り返している。器面調整は、内外面ともにロクロナデが施されている。

図21-11は、弥生土器の破片である。

まとめ

本遺構は、支柱穴とカマドを有し、1辺約6mの正方形を呈する大型規模の竪穴住居跡である。出土した遺物の特徴から、6世紀後半から7世紀後半にかけての所産と考えている。(成田)

6号住居跡 S I 06

遺構 (図22・23, 写真15・16)

本住居跡は調査区南西部のR12・13グリッドに位置し、自然堤防頂部付近のほぼ平坦な地形に構築されている。5号住居跡、1号建物跡と重複しており、どちらよりも本住居跡の方が古い。周囲には、北東3.0mに3号住居跡、南東2.2mに7号住居跡が近接している。

検出面はLⅢ上面である。遺構内堆積土は2層に区分した。ℓ1は炭化物粒を微量に含む褐色砂質土、ℓ2は炭化物粒・焼土粒を微量に含む暗褐色砂質土で、堆積状況から自然流入土と判断した。ℓ2に含まれる焼土粒は、カマドからの崩落土であろう。

平面プランは北西コーナーを5号住居跡によって切られているが、ほぼ正方形を呈する。規模は、南北軸で8.2m、東西軸で8.4mを測る大型の住居跡である。カマドを通る軸線はS80°Wを示している。周壁は東壁で50°と緩やかに立ち上がっている他は、60~70°でやや急に立ち上がっている。周壁の遺存高は7~10cmと低く、壁溝・壁柱は検出されなかった。床面はほぼ平坦に整地されているが、貼床も踏み締まりも認められなかった。

カマドは西壁のほぼ中央部に設置されている。形態は住居プラン内に燃焼部を持つ両袖タイプのもので、燃焼部の中央から奥壁にかけて攪乱を受けている。両袖とも地山を10cmほど掘り残し、燃焼部の内壁側に褐色砂質土を貼り付けて構築している。両袖によって確保された燃焼部の規模は、下端ラインで焚口幅約50cm、奥壁までの推定長約70cmで、袖の高さは10cmほど遺存している。煙道部は確認できなかった。燃焼部の底面から側壁にかけては3cm程度の厚さで酸化している。カマドの堆積土は3層に区分した。ℓ1は焼土粒を含む暗褐色土で、自然流入土と考えられる。ℓ2は褐色砂質土で、カマド袖の構築土である。ℓ3は焼土を多量に含む褐色砂質土で掘形内の堆積土と考えている。なお、カマド付近の床面上及び堆積土からは土師器甕がつぶれた状態で出土している。また、ℓ1からは板状の土製品(図25-2)や土製勾玉(図25-3・4)、鉄製品(図25-6)が出土している。

ピットは床面から6個が確認された。P1は不整な楕円形を呈し、長径160cm、短径60cm、床面からの深さが30cmを測る。堆積土は暗褐色砂質土で、レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えてい

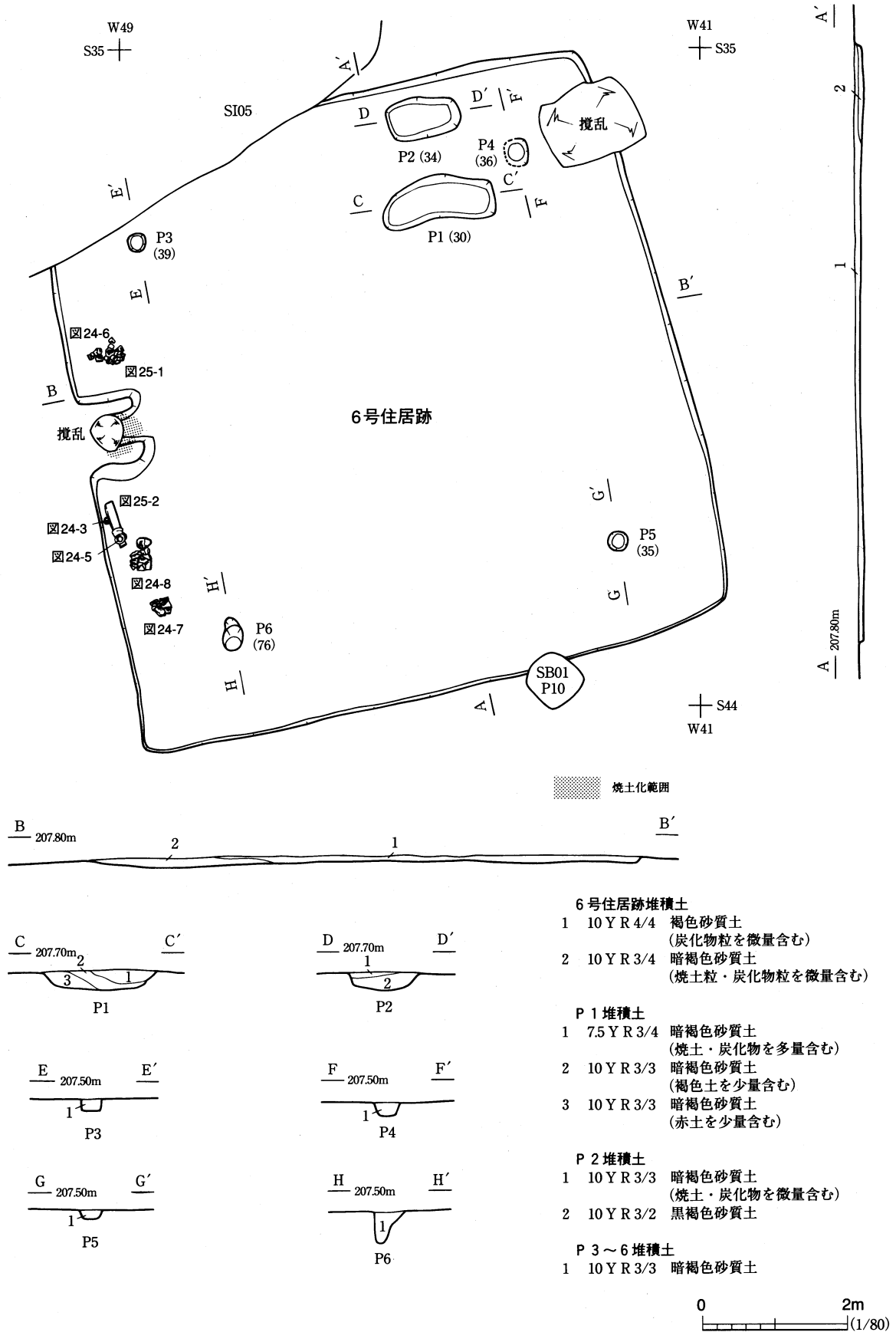


図22 6号住居跡

る。P 2は隅丸方形を呈し、長辺100cm、短辺55cm、床面からの深さが34cmを測る。P 1・2の性格については不明である。住居跡対角線上にはほぼ等間隔で配列されるP 3～6は、支柱穴と考えられる。平面形はおおむね円形基調で、直径25～40cmと平面規模にはまとまりがある。床面からの深さはP 3～5が40cm程度、P 6がやや深く76cmを測る。堆積土はいずれも暗褐色砂質土で、柱痕は確認できなかった。各柱穴間の間隔はほぼ5.5mで、住居構築時の計画性の高さを示している。

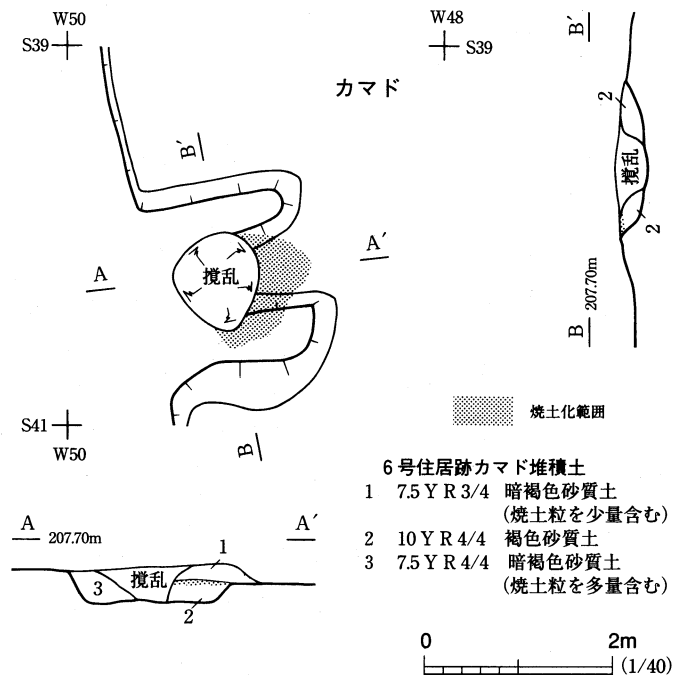


図23 6号住居跡カマド

遺物 (図24・25, 写真94・95)

本遺構から土師器706点、須恵器片3点、縄文土器2点、土製品5点、鉄製品3点が出土している。図24-1・3は土師器の杯である。1は有段丸底の器形を呈し、内面にはヘラミガキ後に黒色処理が施されている。外面の調整は、口縁部上半にヨコナデ、口縁部下半に縦方向のハケメ、口縁部と体部の境の段の部分にヨコナデ、体部に縦方向のハケメ、底部周縁にヘラケズリが施されている。3は、カマド南側の堆積土から板状の土製品と一緒に出土した。器形は、厚めの平底から内湾ぎみに立ち上がり口縁部にいたる。器面調整は、内・外面ともにヘラナデが施されている。

図24-2は土師器の碗で、丸底から半球状に内湾して、口縁部が短く外反する器形を呈する。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、胴部下半にヘラケズリが施されている。内面は、口縁部にヨコナデ、胴部にヘラナデが施されている。

図24-4～6は、最大径を口縁部に有する中型の土師器甕である。4は平底から緩やかに内湾して立ち上がり、胴部と口縁部の境に明瞭な段を持ち、口縁部は緩やかに外傾する器形を呈する。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、胴部にハケメが施されている。内面は、口縁部から胴部上半にかけてハケメとヘラナデ、胴部下半にヘラナデが施されている。5は、4よりも胴部にやや張りがあり、口縁部で強く外反する。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、胴部にハケメが施されている。内面は、口縁部にハケメ、胴部にヘラナデが施されている。6は、カマド北側の床面からつぶれた状態で出土しており、全体的に火を受けてもろくなっている。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、胴部にハケメが施されている。内面は、ヘラナデで調整されている。4～6のいずれの底部にも木葉痕が観察される。

図24-7・8は無底の土師器甕で、カマド南側の堆積土からつぶれた状態で出土した。どちらも口縁部に最大径を有する器形を呈する。7は、底部から緩やかに内湾して立ち上がり頸部へ続き、

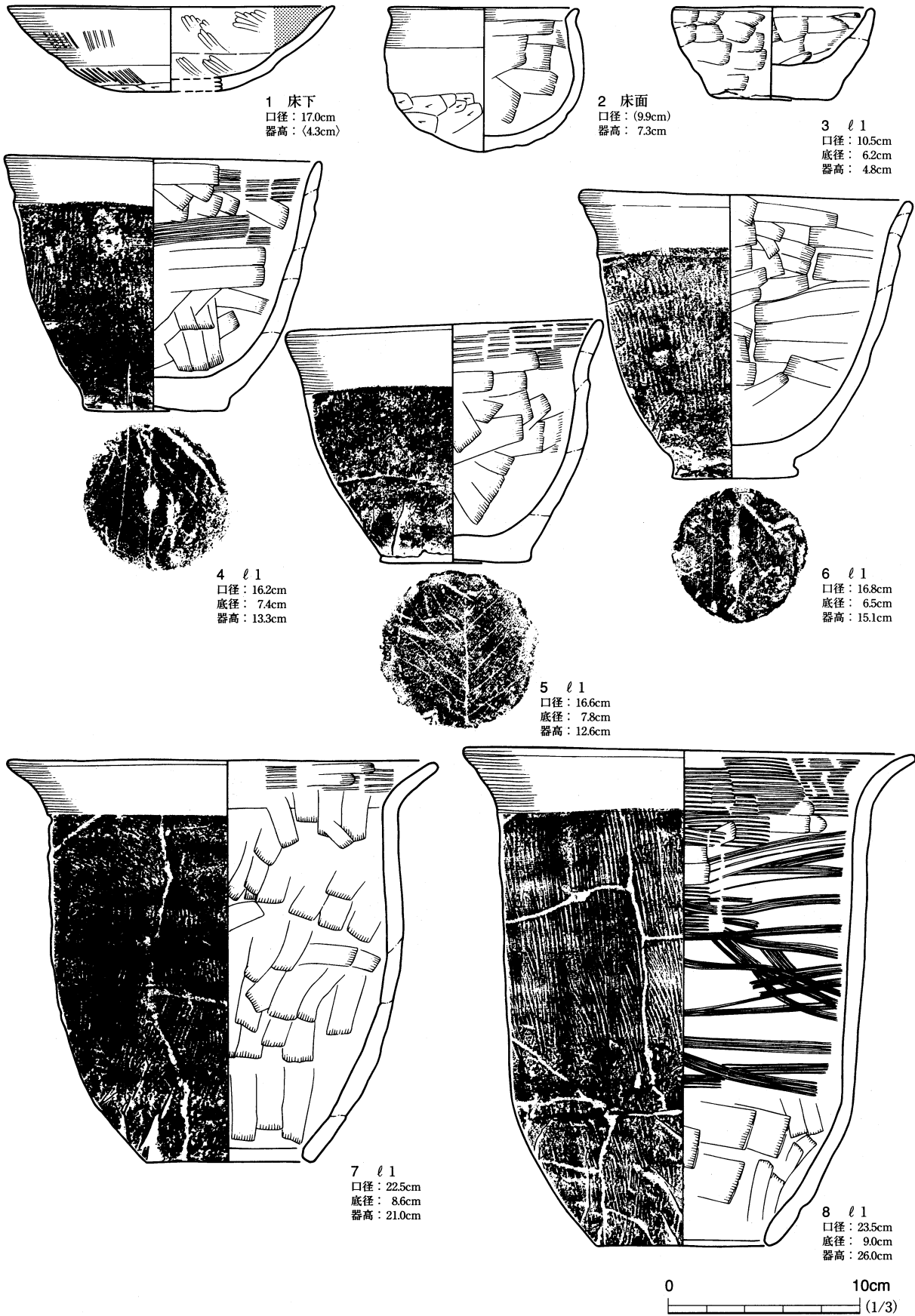


图24 6号住居跡出土遺物 (1)

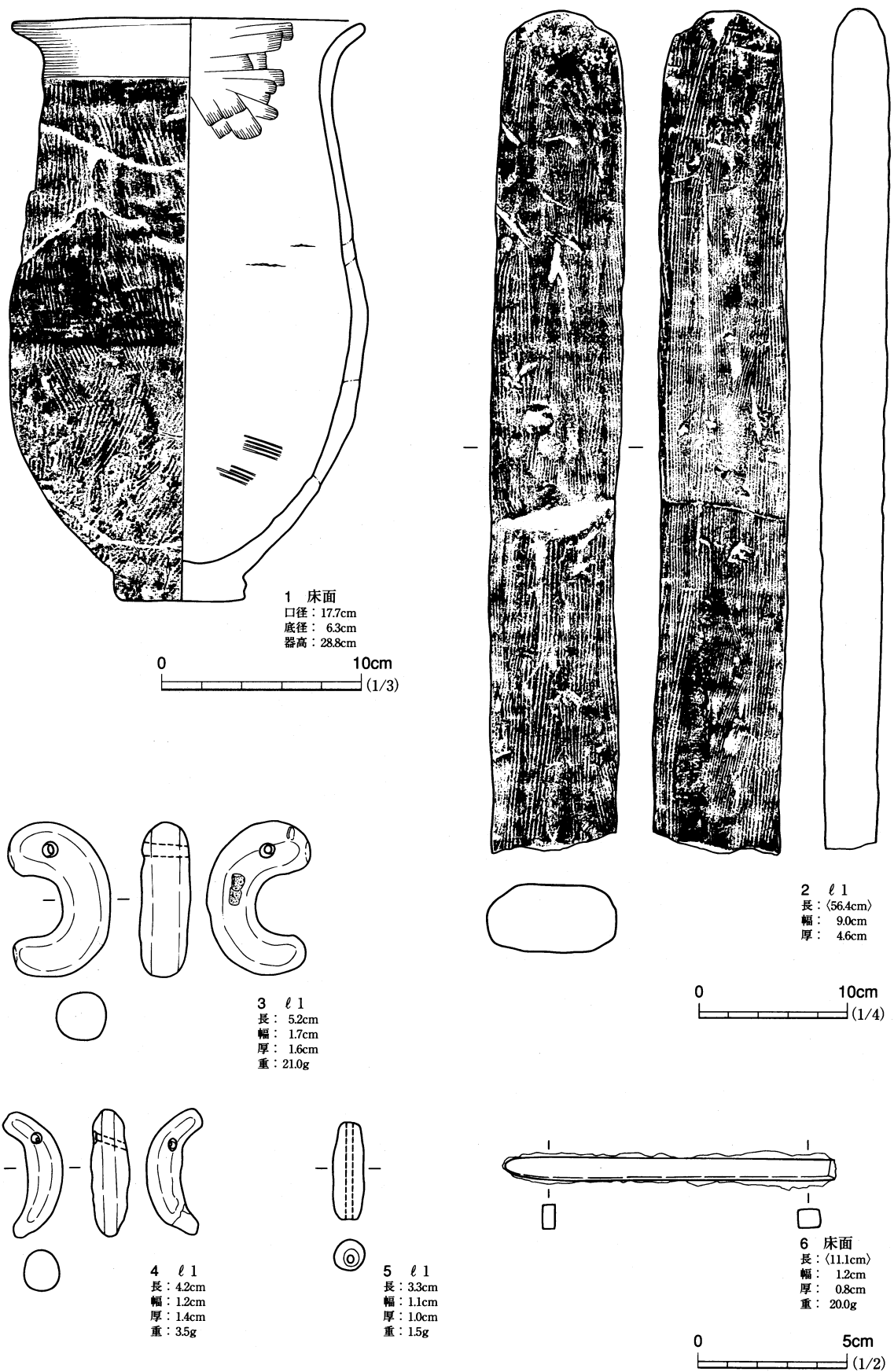


図25 6号住居跡出土遺物(2)

口縁部で強く外反する。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、胴部にハケメが施されている。内面は、口縁部にハケメとヘラナデ、胴部にヘラナデが施されている。8は胴部上半がほぼ直立して頸部にいたる。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、胴部にハケメが施されている。内面は、口縁部にハケメ、胴部下半にヘラナデが施されている。

図25-1は、カマド北側の床面からつぶれた状態で出土した土師器の長胴甕である。平底の底部から内湾して立ち上がり胴部中で最大径を有し、緩やかに内湾して頸部に至り、口縁部で外反する。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、胴部にハケメが施されている。内面は、口縁部にヘラナデ、胴部下半にハケメが施されている。

図25-2は、カマド南側の堆積土から出土した板状の土製品で、カマドに関係して使用されていたものと推測される。全面に縦方向のハケメ調整が施されている。

図25-3・4は、完形の土製勾玉である。3は「コ」の字状に湾曲する形状を呈しており、表面の仕上がりも丁寧である。4は、3よりも小型で緩やかに湾曲する。中央部で厚く、先端部で細くなる形状を呈する。

図25-5は筒型の土製品で、中央部が太く先端部でやや細くなる形状を呈しており、土錐と思われる。

図25-6は棒状の鉄製品である。

まとめ

本遺構は、1辺約8mの正方形を呈する大型の竪穴住居跡である。カマドと支柱穴及び性格不明のピットが確認された。遺物はカマド周辺を中心にまとまって出土しており、その特徴から7世紀中頃の所産と考えられる。

(成田)

7号住居跡 S I 07

遺構 (図26・27, 写真17・18)

本住居跡は調査区南西部のR13・S13グリッドに位置し、ほぼ平坦な地形上に構築されている。1号建物跡と重複関係にあり、本住居跡の方が古い。周囲には、北西2.2mに6号住居跡、西方約1mに2号建物跡、南東1.2mに8号住居跡が隣接している。

検出面はLⅢ上面である。遺構内堆積土は4層に分層した。ℓ1が褐色砂質土、ℓ2が暗褐色砂質土で、自然堆積土と考えられる。ℓ3は炭化物粒・焼土粒を含む暗褐色砂質土で、カマドからの流入土である。ℓ4は住居跡の南東壁側だけに認められる掘形内の堆積土である。

住居跡の平面形は、1辺が6.8m前後のほぼ正方形を呈し、カマドを通る軸線はN40°Wの方向を示す。周壁は床面から60~65°の角度で立ち上がり、周壁の高さは20~23cmを測る。床面はほぼ水平に整地されているが、踏み締まりや貼床は確認されなかった。南東壁際には、下端ラインで幅50~150cmの範囲で、床面からの深さ25cm前後の掘形が検出された。掘形の堆積土は、炭化物粒・焼土粒を含む暗褐色砂質土である。

カマドは、北西壁のほぼ中央部分に位置し、にぶい黄褐色の砂質土で両袖を構築している。両袖によって確保された燃焼部の規模は、下端ラインで焚口幅約50cm、奥行き約100cmを測り、袖の高さは25cm程度遺存している。煙道部は削平により確認できなかった。燃焼部の底面から側壁にかけて厚さ2～7cmの酸化面が確認された。カマドの堆積土は3層に区分した。ℓ1は天井崩落後の流入土、ℓ2が天井崩落土、ℓ3が袖構築土である。

ピットは床面上から5個確認された。P1は長径60cm、短径45cmの楕円形を呈し、床面からの深さが約15cmを測る。カマドに隣接して構築されており、貯蔵穴と考えている。P2～5は住居跡プランの対角線上にほぼ等間隔で配列されており、支柱穴と考えられる。その平面形や規模は、P3

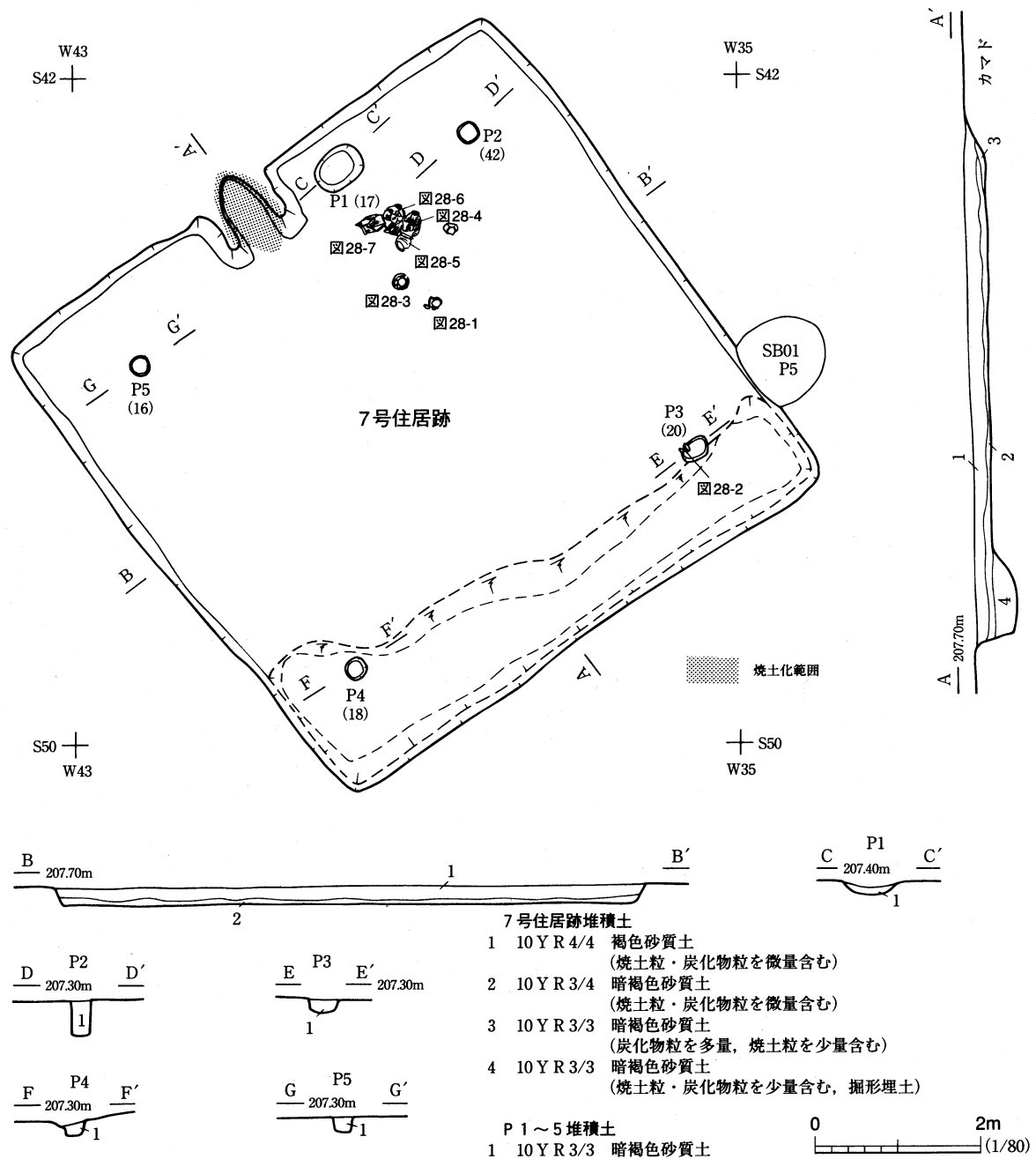


図26 7号住居跡

が長径35cm、短径25cmの楕円形を呈する。P 2・4・5は直径約25cmの円形でまとまっている。床面からの深さは、P 2が42cmとやや深く、P 3～5が20cm前後である。堆積土は暗褐色の砂質土で、柱痕は確認できなかった。なお、カマドとP 1付近の床面からは土師器の甕や杯がまとまって出土している。

遺物 (図28, 写真96)

本遺構から土師器2, 291点, 須恵器15点, 縄文土器7点, 土製品3点, 鉄製品1点が出土している。図28-1は有段

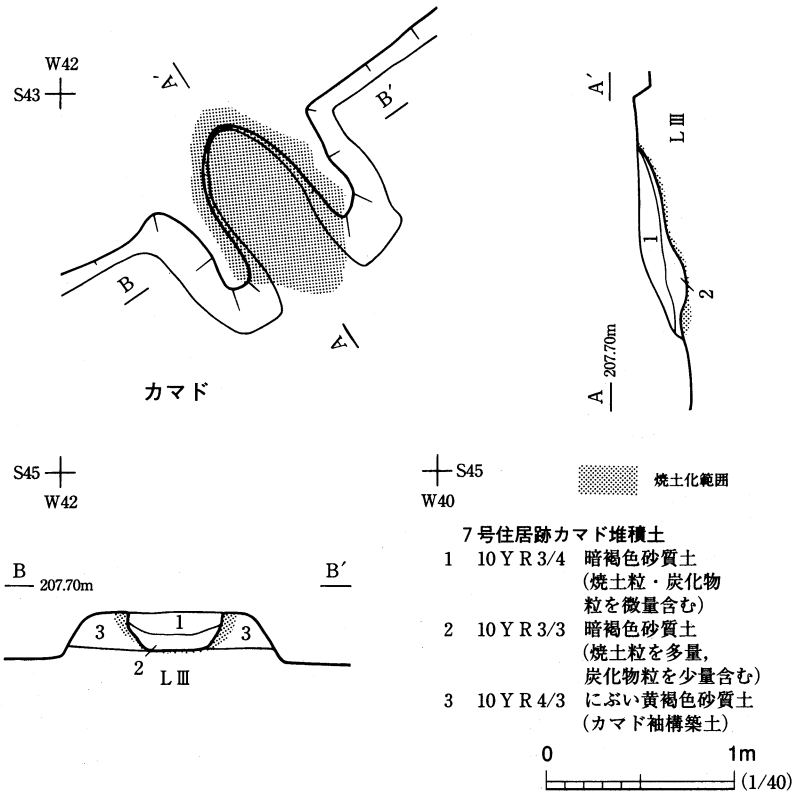


図27 7号住居跡カマド

丸底の土師器杯で、カマドから2 m程南東の床面から出土した。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、体部から底部にヘラケズリが施されている。内面は、ヘラミガキ後に黒色処理が施されている。

図28-2はカマドから1.5 m程南東の床面から出土した土師器高杯の脚部である。杯部の内面には黒色処理が施されている。脚部上半部にはヘラケズリ、脚部下半部と底部内面にはヘラナデが施されている。

図28-3は多孔式の土師器甕で、胴部上半から口縁部を欠損している。カマドから1.7 m程東の床面から横向きの状態で出土した。底部から緩やかに外傾して立ち上がる器形を呈する。外面の摩耗が激しいが、胴部にハケメ、底部周縁にヘラケズリが施されている。内面は、ヘラナデ調整がなされている。

図28-4・6・7は、カマド東側の床面からつぶれた状態で出土した土師器の長胴甕である。4は、口縁部に最大径を有し、胴部が比較的短く、底部から胴部に丸い膨らみを持ちながら口縁下部に続き、その後外反する。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、胴部にハケメが施されている。内面は、口縁部にハケメ、胴部にヘラナデが施されている。6・7は、器形・調整ともに類似する。器形は、胴部中位に最大径を有し、底部から緩やかに内湾して口縁部に続き、その後外反する。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、胴部にハケメが施されている。内面は、口縁部と胴部上半にハケメ、胴部にヘラナデが施されている。

図28-5は、カマド東側の床面から横向きの状態で出土した土師器の球胴甕である。外面の調整は、口縁部にヨコナデ後にハケメ、胴部にハケメが施されている。内面は、口縁部にヨコナデ、頸

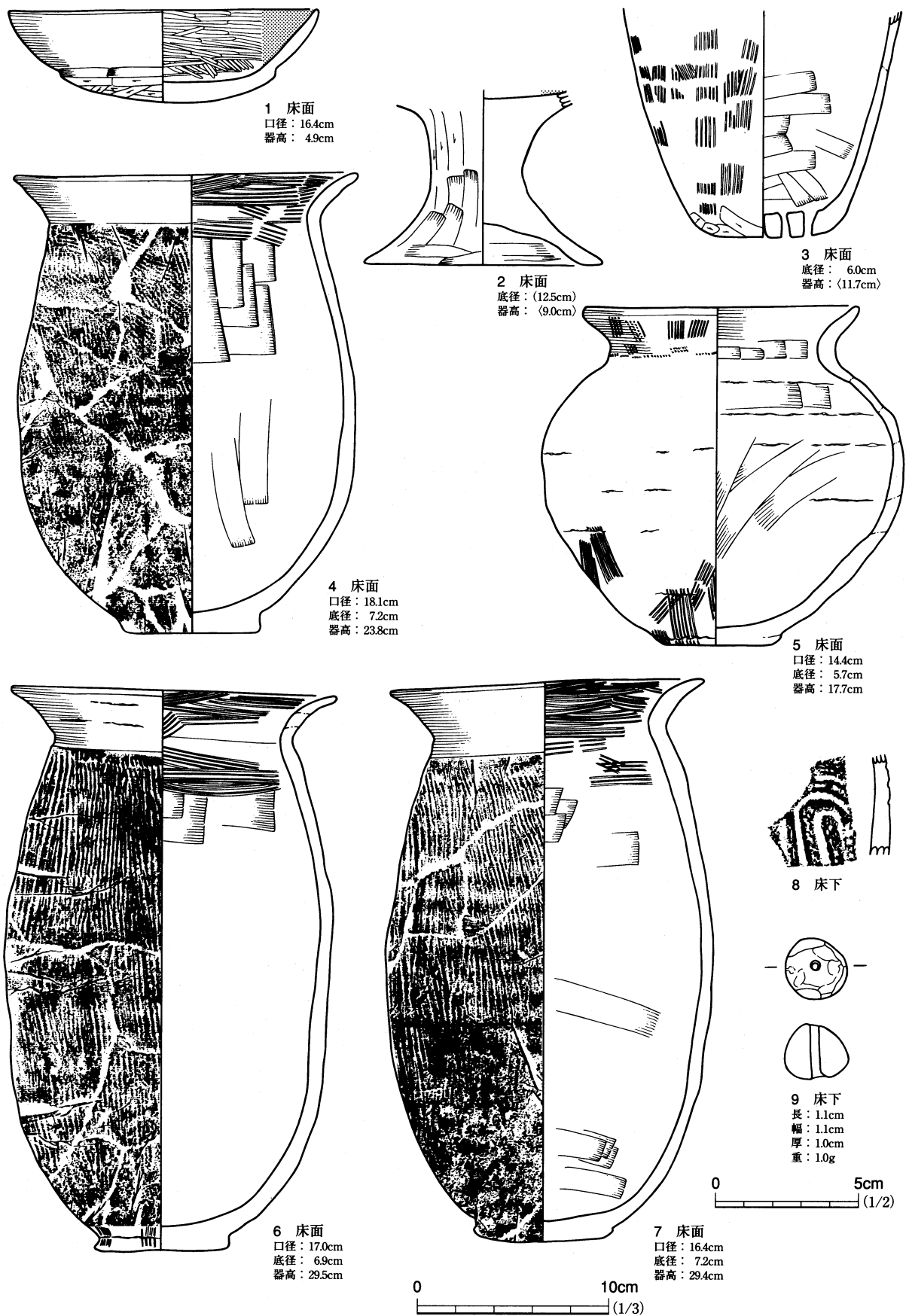


図28 7号住居跡出土遺物

部から胴部にヘラナデが施され、粘土紐の積み上げ痕が観察される。

図28-9は床下から出土した土玉で、表面にはヘラミガキ調整が施されている。

図28-8は床下から出土した縄文土器で、縄文の地文に太い沈線の模様が観察される。

まとめ

本遺構は、1辺約7mの正方形を呈する比較的大型の部類に属する竪穴住居跡である。カマド及び支柱穴、貯蔵穴を有する。出土した遺物の特徴から、所属時期は6世紀後半から7世紀後半にかけてと考えている。 (成田)

8号住居跡 S I 08

遺構 (図29・30, 写真19・20)

本住居跡は調査区南西部のS13-22・23・32・33グリッドに位置し、付近は標高207.4m前後のほぼ平坦な場所となっている。本遺構の周囲には、7号住居跡、1号建物跡がある。

検出面はLⅢ上面である。遺構内堆積土は2層からなる。本住居跡の南東から流れ込んだような堆積状況を示すことから、自然流入土と判断した。

本住居跡は、一辺が5m程のほぼ方形を呈し、カマドを通る主軸線はN40°Wで西に傾いている。周壁は床面からやや急な角度で立ち上がり、周壁の高さは14~21cmを測る。床面はほぼ平らに整地されているが、踏み締まりと考えられる硬化面や貼床は確認されなかった。床面からは、多数の遺物が出土した。

カマドは、北壁のほぼ中央部で1基検出された。形態は竪穴内に燃焼部を持ち、「ハ」の字に開く両袖タイプのもので、火をよく受けている。燃焼部の底面から側壁にかけて2cmの深さまで酸化面が確認された。両袖によって確保された燃焼部の規模は、下端ラインで焚口幅約40cm、奥行き約60cmを測り、袖の高さは20~35cm程度である。カマドの堆積土は2層に区分される。ℓ1は天井部が崩落して形成されたもので、ℓ2はカマドの構築土である。右袖の先端には、構築材に転用された土師器甕が埋め込まれていた。また左袖の脇からは正位に置かれた状態で土師器の甕が出土している。煙道は流失しており、確認できなかった。ピットは5個確認されている。そのうち円形または楕円形を呈した大型のものP1~4は、住居跡の対角線上に約2mの等間隔で配列されているため支柱穴と考えられる。規模は長軸45~55cm、短軸38~50cm、床面からの深さ14~24cmを測る。住居跡の北西コーナーとカマドの間には、楕円形を呈したピットが1個が確認されている。規模と土器の出土状況から貯蔵穴ではないかと考えられる。規模は長軸110cm、短軸70cm、床面からの深さ約30cmを測る。ピット内の堆積土はいずれも自然流入土と考えられる。

遺物 (図31~33, 写真96~98)

本住居跡から出土した遺物は、縄文土器7点、土師器992点、須恵器9点、土製品4点、鉄製品2点、鉄滓0.1kgである。その中で、実測可能な土師器27点、須恵器2点を図示した。

図31-1・3~9・11・13は、土師器の有段丸底杯である。口縁部は外反・外傾して開くものが

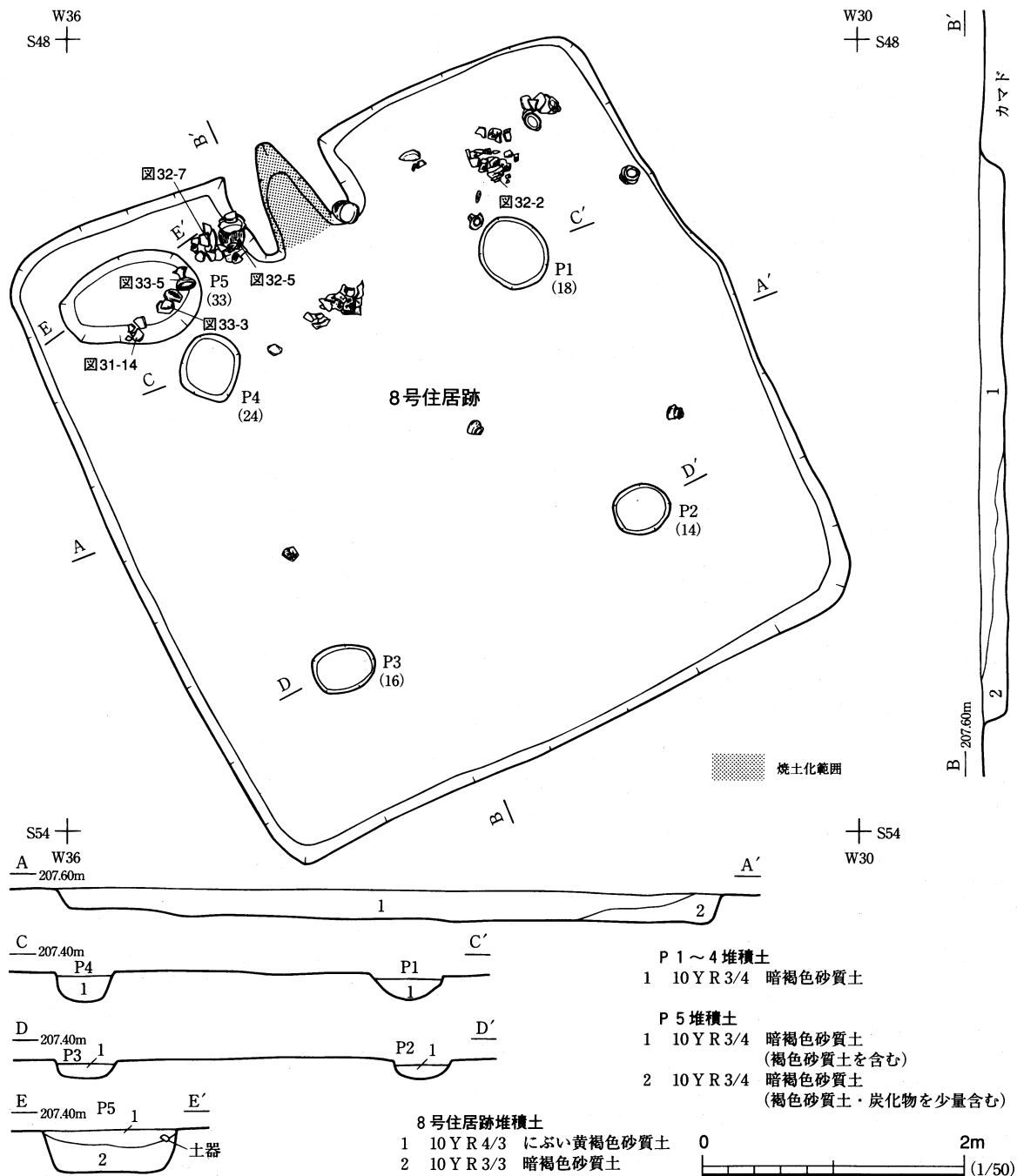


図29 8号住居跡

多く、底部との境界には、強いナデ調整によって明瞭に段が作り出されている。外面は口縁部がヨコナデ、底部がヘラケズリによって、調整が仕上げられている。内面には黒色処理とヘラミガキが施されている。

図31-2・15・16は、土師器の高杯である。杯部は2のように内湾したり、15のように有段丸底になるようである。脚部は短く、ラッパを伏せたような形をしている。器面調整は、外面がヨコナデ・ヘラナデ・ハケメ・ヘラケズリで整えられ、内面がヘラミガキ・黒色処理で仕上げられている。

図31-10・12は、有段丸底杯の口径を横に広げたような、土師器の鉢である。口縁部は外傾し、

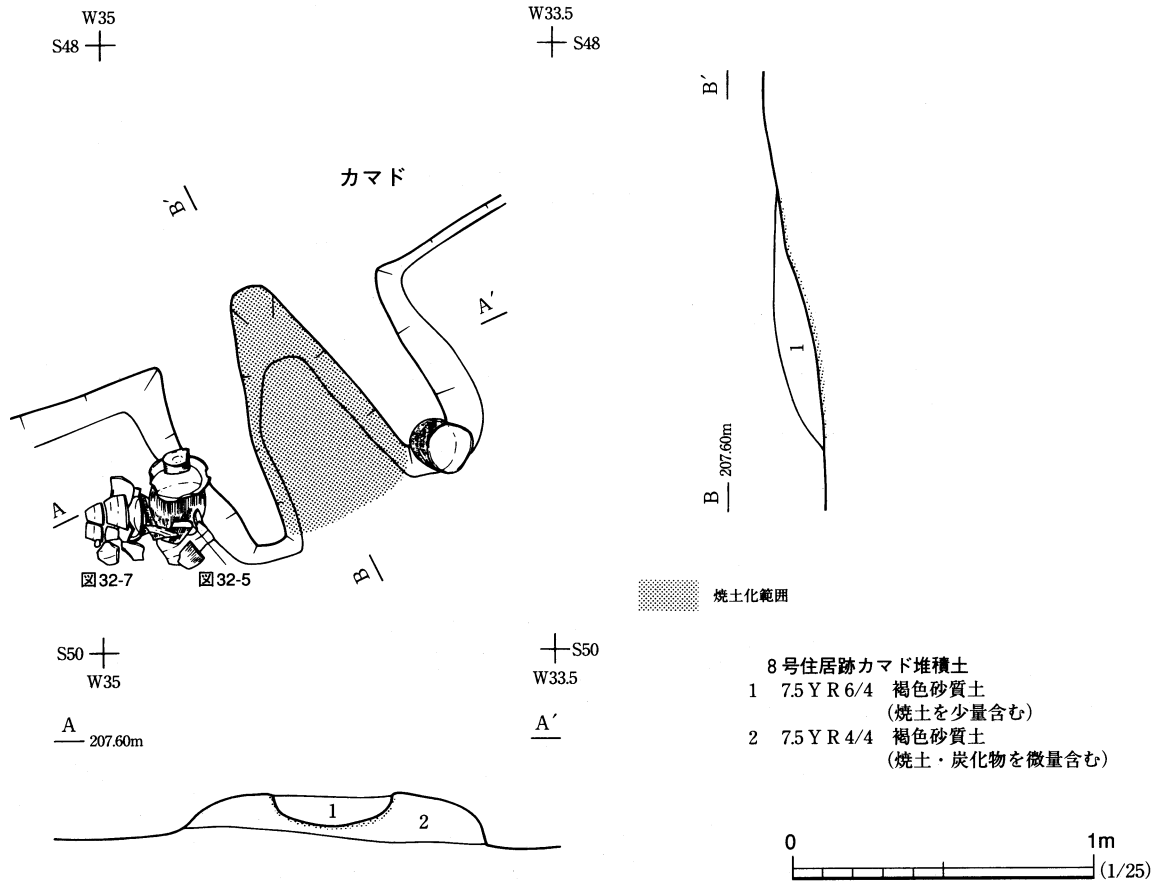


図30 8号住居跡カマド

底部は丸く作られている。ともに口縁部外面はヨコナデされ、内面はヘラミガキ・黒色処理されるが、底部外面の調整は、10がヘラナデ、12がヘラケズリによって仕上げられている。

図31-14は、土師器の球胴甕の底部付近の資料と思われる。外面はハケメ・ヘラナデ、内面はヘラナデによって、器面が整えられている。

図32-1・3~7, 図33-1・2に、土師器の甕を示した。図32-1・3・4は中型の甕, 図32-5~7, 図33-1・2は大型の甕である。口縁部が外反し、胴部の下半部が膨らむ形態が多い。器面調整は外面が口縁部ヨコナデ・胴部ハケメ、内面が口縁部ヨコナデ・胴部ヘラナデに統一されている。

図32-2, 図33-3は無底の土師器甕である。口縁部形態・調整技法などは甕と変わらず、胴部があまり膨らまない点の特徴である。

図33-5・6は、須恵器高杯である。杯部は蓋受けを有し、口縁部が内傾している。脚部は5が長脚の3方2段透かし、4が3方1段透かしで、端部が外側に延びている。

まとめ

本遺跡の中では、中型の規模に属する竪穴住居跡である。上屋は規則的に配置された4本の支柱によって支えられた、しっかりとした構造物だったと推察される。所属時期は、床面から出土した土師器や須恵器の特徴から判断すると、6世紀後半~7世紀後半である。(堀川)

第2章 遺構と遺物

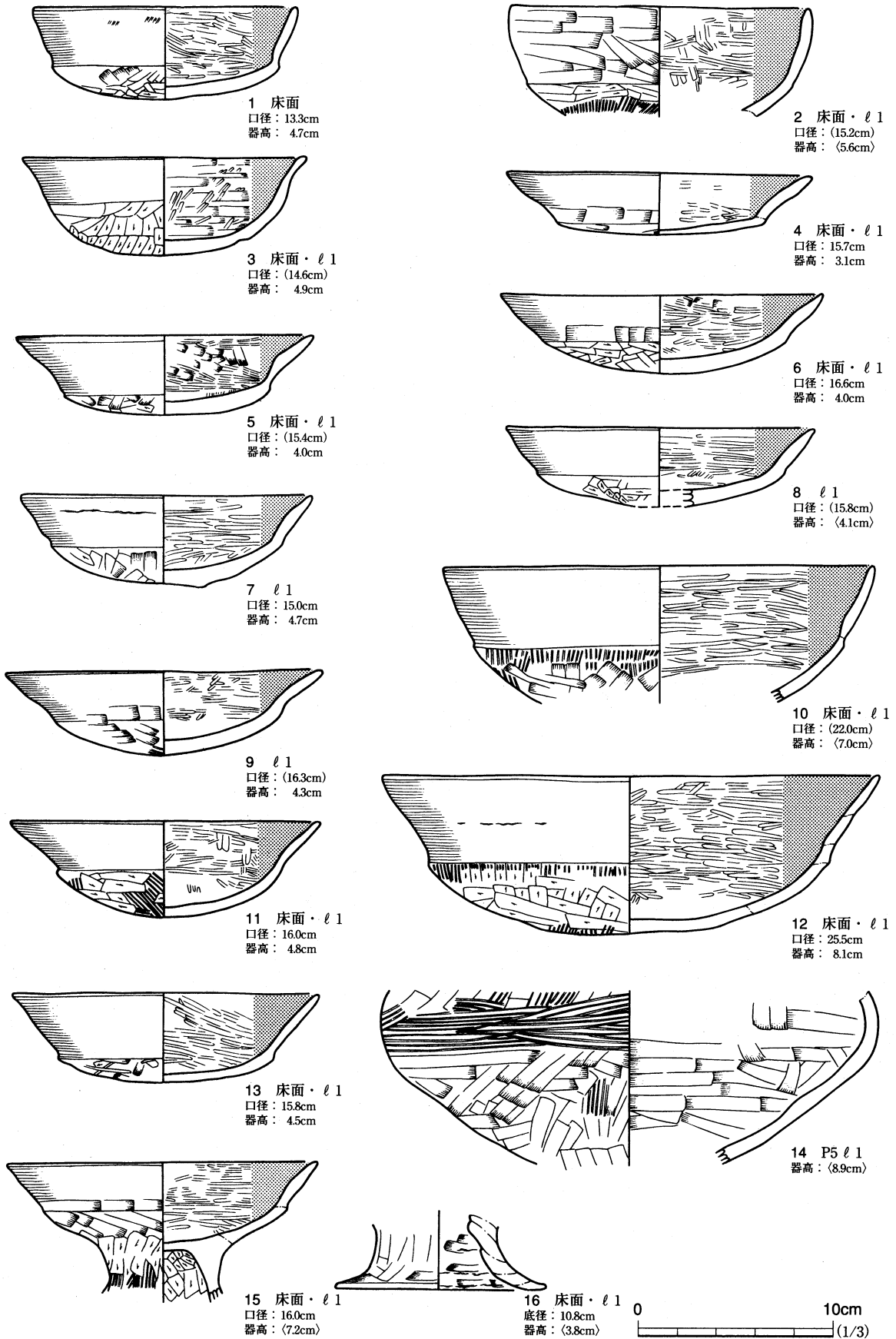


図31 8号住居跡出土遺物 (1)

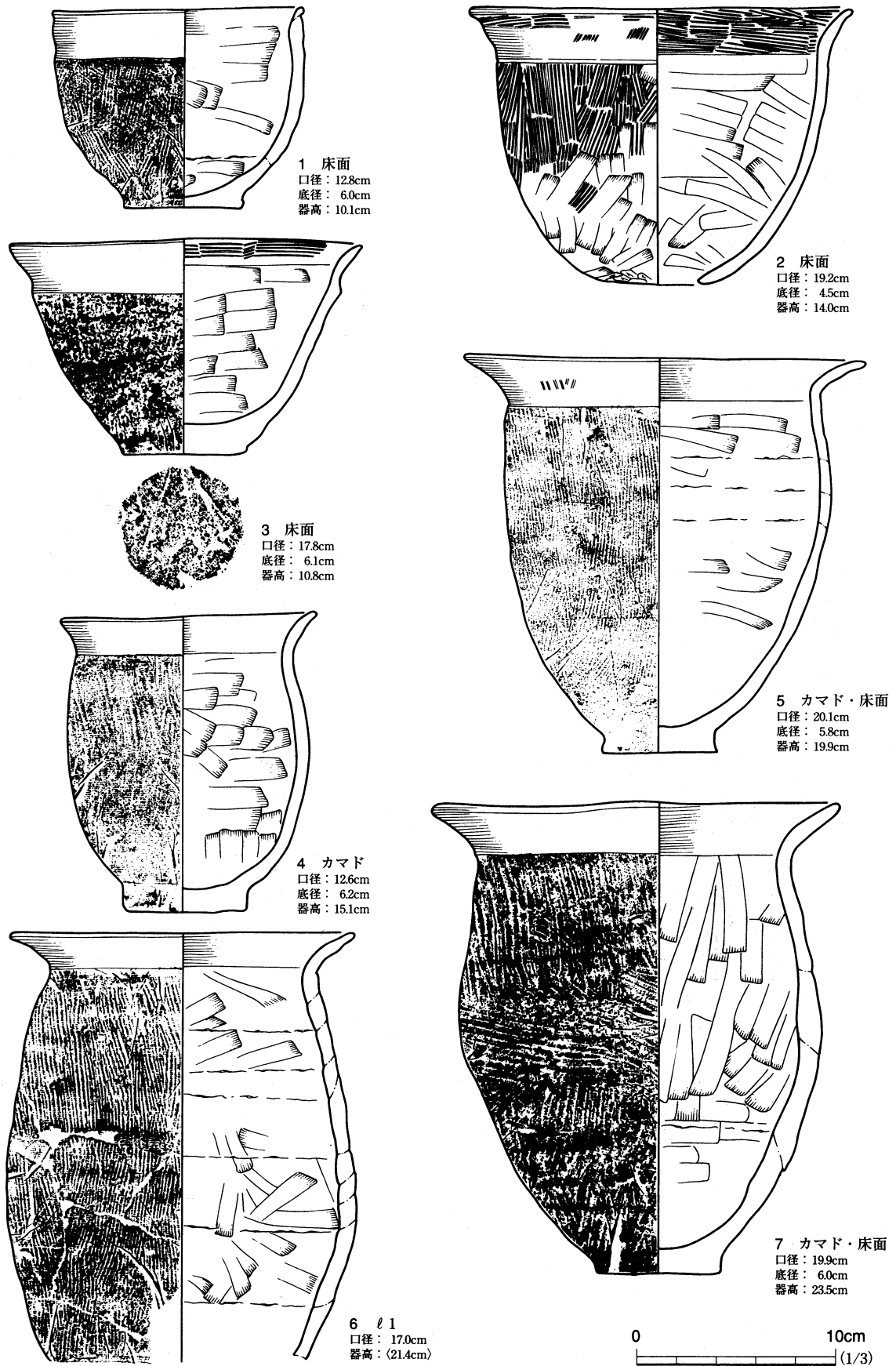
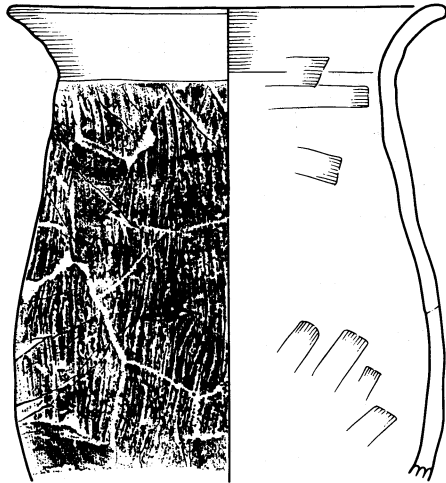
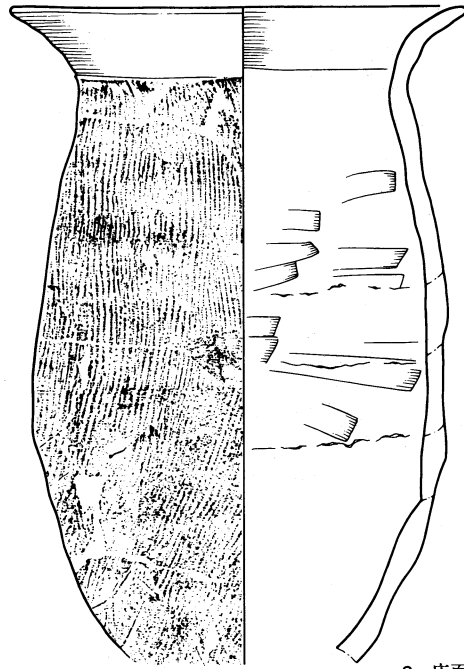


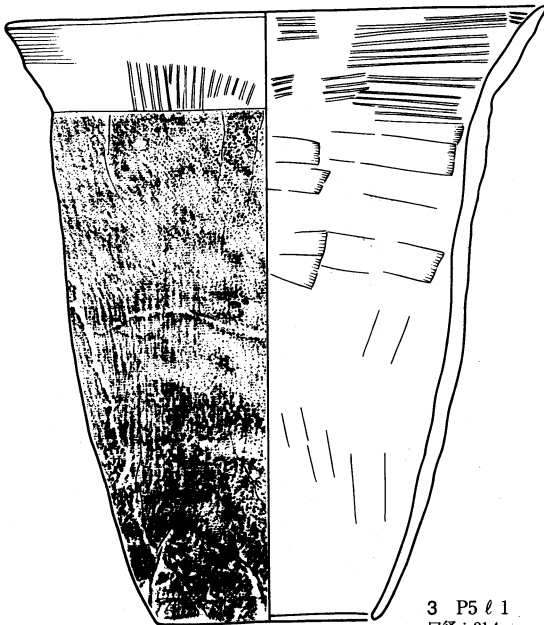
図32 8号住居跡出土遺物(2)



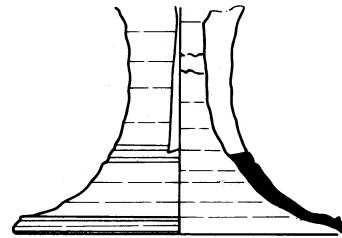
1 床面
口径：17.5cm
器高：(18.6cm)



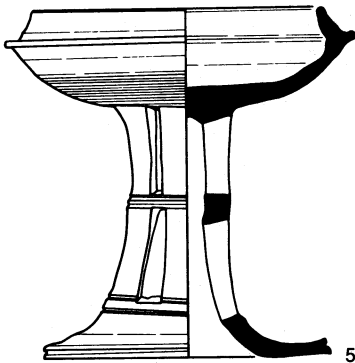
2 床面
口径：18.1cm
器高：(25.8cm)



3 P5 l 1
口径：21.4cm
底径：8.4cm
器高：24.1cm



4 l 1
底径：(13.0cm)
器高：(8.9cm)



5 P5 l 1
口径：11.3cm
底径：11.3cm
器高：13.8cm

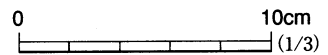


図33 8号住居跡出土遺物(3)

9号住居跡 S I 09

遺 構 (図34, 写真21・22)

調査区のはぼ中央に位置するS12-6・7・16・17グリッドで検出された竪穴住居跡である。遺構が構築された場所は、阿武隈川に沿って形成された自然堤防の頂部平坦面である。本住居跡から南西に約6m離れた地点に10号住居跡、南東に約4m離れた地点に14号住居跡がある。検出面はLⅢ上面であり、暗黄褐色土で検出した。本住居跡と重複関係にある遺構はない。

遺構内堆積土はLⅡとLⅢが混じり合ったような黒褐色土や暗黄褐色土で、2層確認した。堆積状況から本住居跡の廃絶後に流入堆積したものと考えられ、自然埋没状態と判断している。

平面形は東西方向に若干長い方形を呈する。規模は現況の上端で東西長6.3m、南北長6.1mを測る。カマド跡と南壁を結ぶ南北方向の主軸は、真北より西に7°傾いている。床面は純粋なLⅢで形成されているため、堅固で安定しており、凹凸はほとんど見られない。壁は急峻に立ち上がっている。床面よりの壁の遺存高は、最大で29cmである。

カマドは北壁の中央やや西寄り確認された。遺存状態が悪く、燃焼部の底面と思われる長軸約70cm、短軸約50cmの淡い赤褐色の焼土化範囲が不整楕円形状に残っているだけであった。断ち割りの結果、被熱範囲の厚さは最大で3cmを計測した。全体にわたって熱変化を受けているが、焼土化の状態は弱い。焼土下に掘形は確認されず、カマドは床面上に直接造られていたことが推察される。

ピットは計8個確認された。床面に対し垂直に掘り込まれていることから、全て柱穴と思われる。平面形は不整な円形や楕円形で、断面形はいずれもU字状を呈している。ピット内堆積土は黄褐色土や黒褐色土で、遺構内堆積土のⅡ・Ⅲに近似している。P1・P2・P4・P6は、ほぼ正方形に配置されていることから支柱穴と判断した。口径は28~50cm、深さは29~56cmを測り、P1-P2間は350cm、P2-P4間は380cm、P4-P6間は360cm、P6-P1間は350cmである。その他のピットは口径26~54cm、深さ32~38cmを測り、壁際や支柱穴の間に位置していることから支柱穴と考えられる。

遺 物 (図35)

出土した遺物は、縄文土器76点、土師器585点、土製品6点、鉄製品2点、鉄滓0.1kgで、そのうち土師器6点を図示した。

図35-1・2は杯である。1は口縁部がわずかに外反して立ち上がる有段丸底の杯で、内面には黒色処理とヘラミガキが施されている。外面の調整は、口縁部がヨコナデ、底部がヘラケズリである。2は口縁部が外傾する杯で、口縁部下端にはヘラナデで段が作り出され、底部は厚く、少し上げ底になっている。内面はヘラナデ後にヘラミガキが加えられ、黒色処理が施されている。外面調整は、口縁部がヨコナデ、体部がヘラナデである。

図35-3~6は甕である。3は小型の甕で、胴部下半から口縁部にかけて内湾する器形を有している。内面は全面ヘラナデ、外面は口縁部が横方向のヘラナデ、体部がハケメによって調整されて

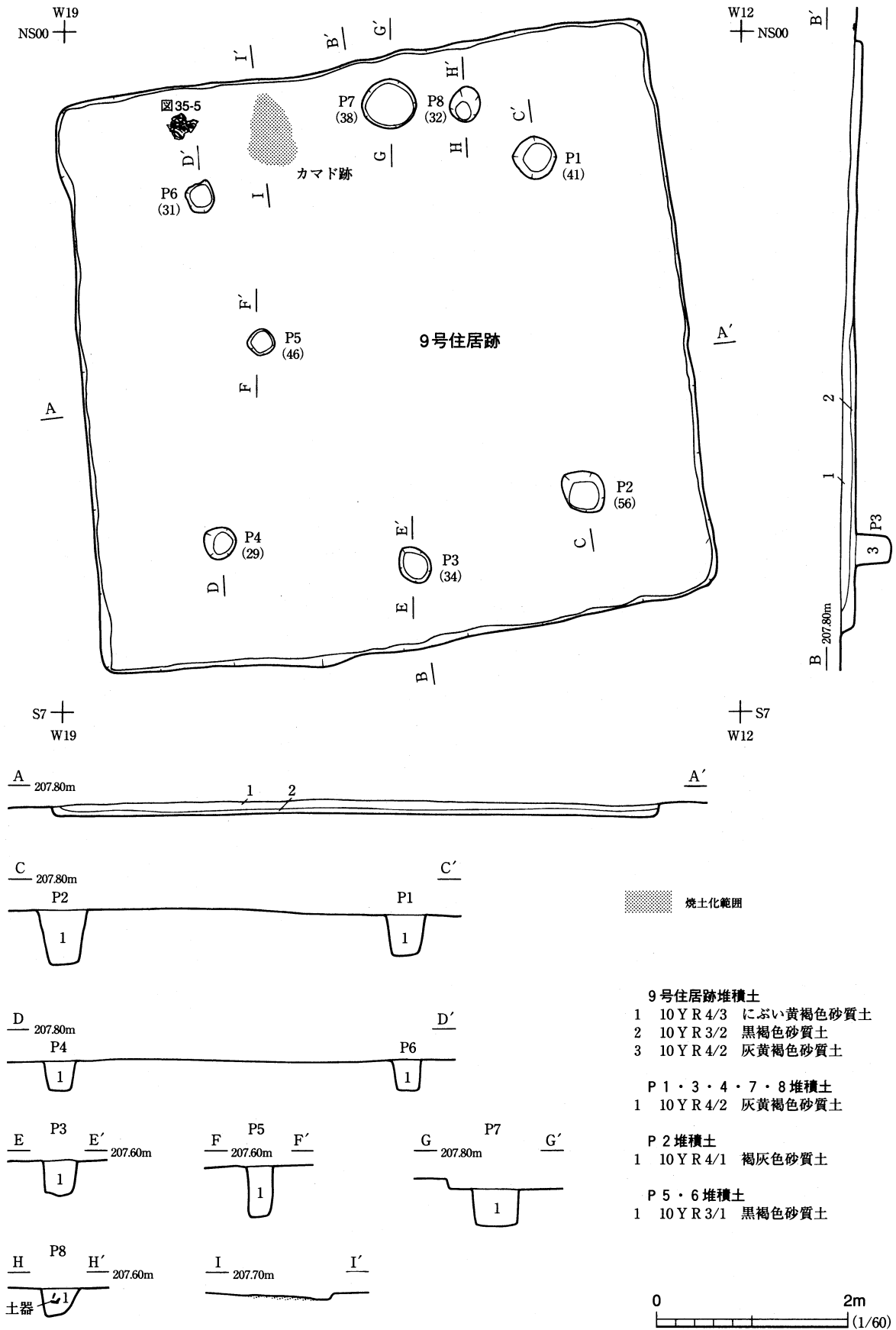


図34 9号住居跡

いる。4は中型の甕で、最大径は胴部中位にあり、頸部がすぼまって、口縁部が外反する器形を有している。内面は口縁部から頸部にかけてがハケメ、それより下がヘラナデによって調整されている。外面調整は口縁部がヨコナデ、胴部がハケメである。底部付近は欠損している。5・6はともに、口径17cmを越える大型の甕で、底部は欠損していた。5は胴部が円筒形を呈し、頸部で屈曲してから、口縁部が外側に開く器形をもつ。調整は内面が胴部ヘラナデ、外面が口縁部ヨコナデ、胴部ハケメである。6は最大径が胴部中位にあり、頸部がすぼまって、口縁部が外反する器形をもつ。内面は口縁部がヨコナデ、胴部がヘラナデ、外面は口縁部がヨコナデ、胴部がハケメによって調整されている。

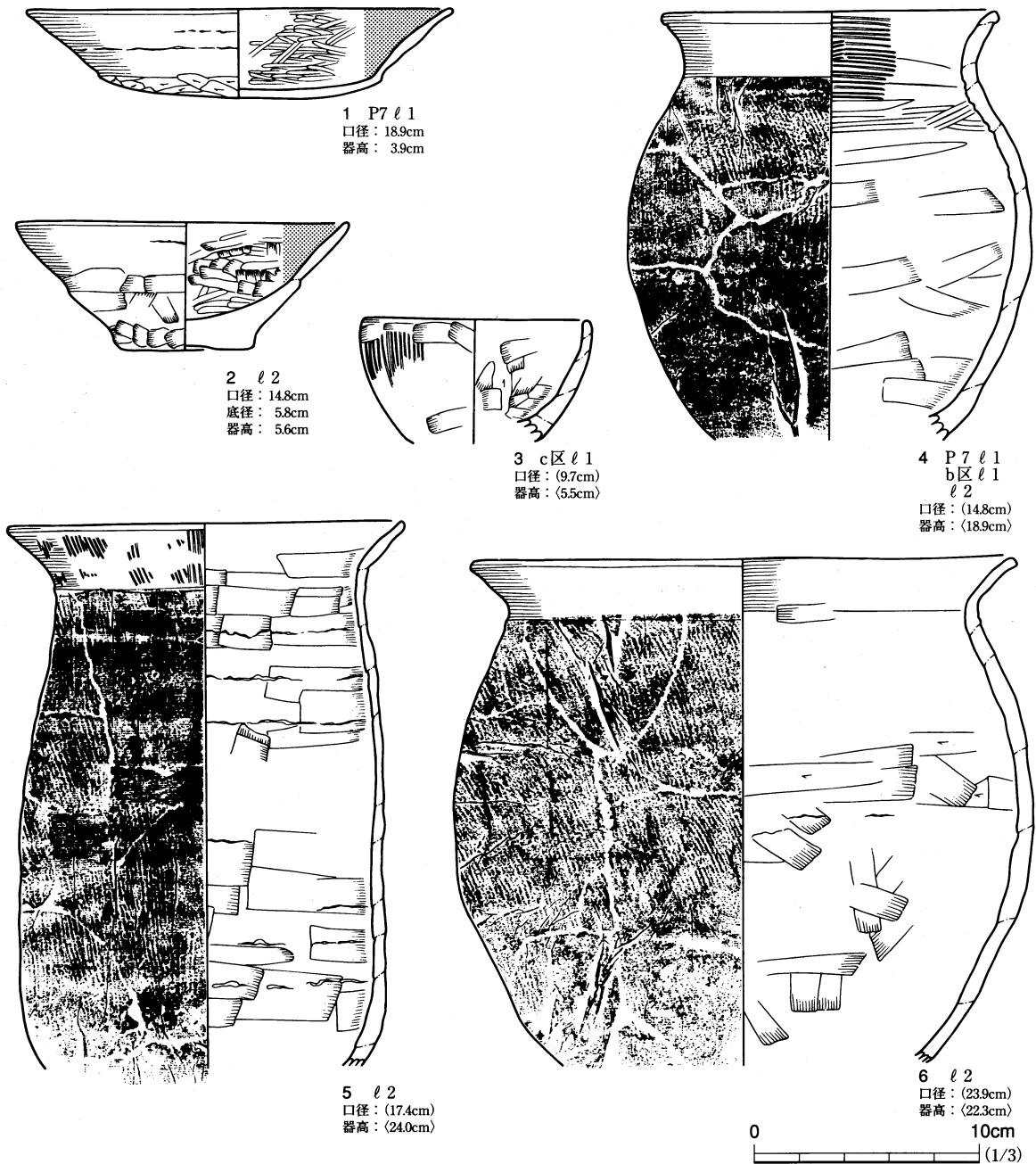


図35 9号住居跡出土遺物

まとめ

本遺跡の中では、やや大型の部類に属する竪穴住居跡である。4本の支柱穴が方形に配置され、北壁にはカマドが構築されていたと思われる。所属時期は、出土した土師器の特徴から、6世紀後半から7世紀後半と考えられる。 (小 暮)

10号住居跡 S I 10

遺 構 (図36, 写真23・24)

本住居跡は、調査区の中央やや西寄りのS12-13・14・23・24・33・34グリッドにわたって検出

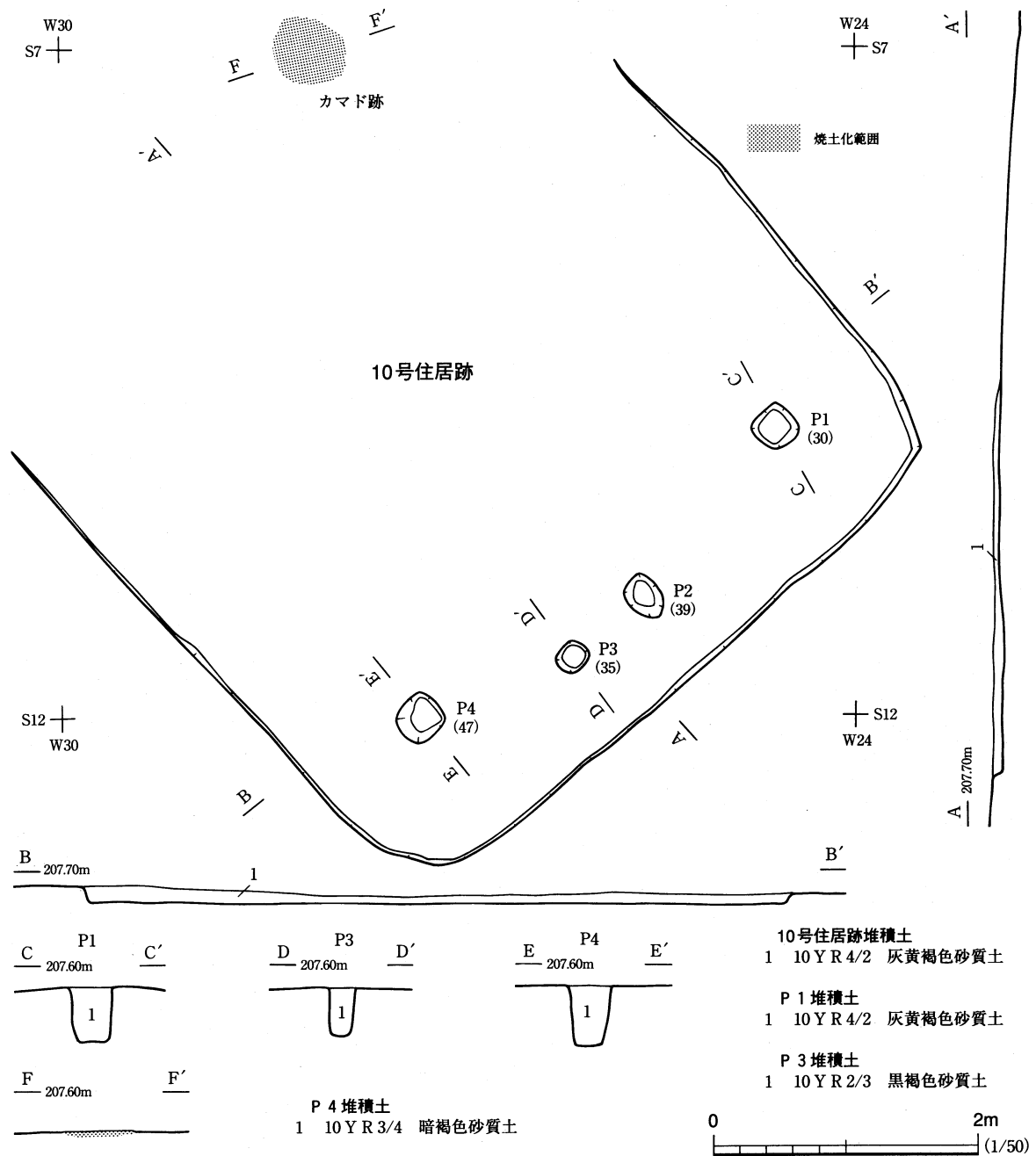


図36 10号住居跡

された。本住居跡が立地する地点は、標高207m前後の自然堤防上である。検出面はLⅢ上面で、灰黄褐色土で埋没した落ち込みとして検出された。本住居跡の南西約4mには12号住居跡、北東約6mには9号住居跡が位置している。本住居跡に直接重複する遺構はない。

遺構内には、LⅡに該当する灰黄褐色系の層が堆積している。このℓ1はごく少量の砂を含むものの、均質な単層であることから自然埋没状態と思われる。

北西部分が流失しているため、平面形は不明であるが、おおよそ不整な方形を呈するものと推察される。カマド跡と南壁を結ぶ主軸は、真北から西に37°傾いている。住居跡の規模は現況の上端で東西長5.3m、南北遺存長4.6mである。住居跡の床面はLⅢで形成されている。若干凹凸があるものの、ほぼ平坦である。床面全体が堅固で安定している。遺存する壁はいずれも床面から急角度で立ち上がり、壁面の状態は堅固である。現況の壁高は南壁で最大15cmを測り、東・西壁は北側が流失している。

カマドの痕跡を遺構の北側部分で検出した。遺存状態は悪く、燃焼部の底面と思われる長軸約60cm、短軸約50cmの淡い赤褐色の焼土化範囲が、不整楕円形状に見られた。断ち割りの結果、被熱範囲の厚さは最大で4cmを計測した。全体にわたって熱変化を受けているが、焼土化の状態は弱い。焼土面下からは掘形のようなくぼみは発見されず、カマドを床面上に直接造っていたことが判明した。

ピットが4個確認された。検出された位置は南壁の付近である。直径は18~34cmで、比較的細いものが多い。いずれも床面から垂直に掘り込まれており、底面は平坦で、深さは床面から30~47cmを測る。このような状況から、全て柱穴と判断した。ピット内の堆積土は遺構内堆積土のℓ1に近似した灰黄褐色土やLⅡに相当する暗褐色土である。

遺物 (図37)

本住居跡から出土した遺物は、縄文土器3点、土師器235点である。そのうち、実測可能な土師器1点を図示した。

図37-1は大型の甕である。器形は最大径を胴部中位にもつ卵形で、頸部がすぼまり、口縁部が外傾して立ち上がる。調整は内面が口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ、外面が口縁部ヨコナデ、胴部ハケメである。

まとめ

本遺構は現状の規模から考えると、やや大型の部類に属する住居跡と言える。遺構の北西部分が流失し、カマドの遺存状態も悪いため、全容は不明である。所属時期は、出土した土師器の年代観から、6世紀後半から7世紀後半と判断している。(小暮)

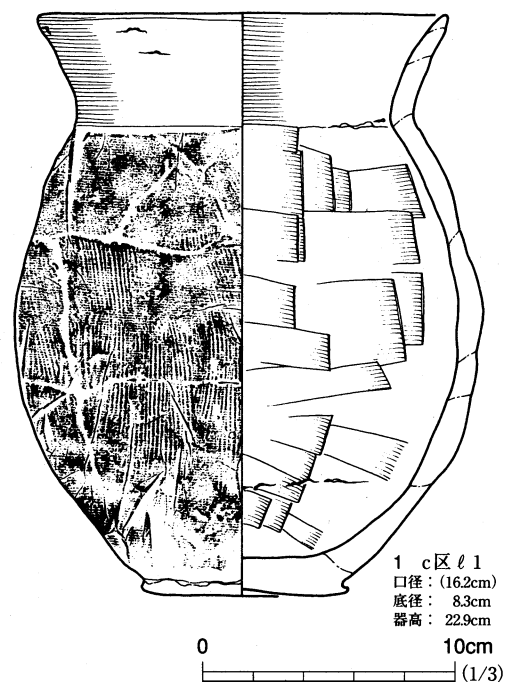
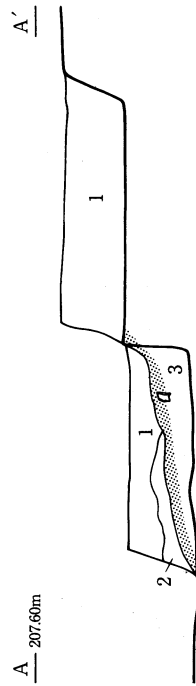
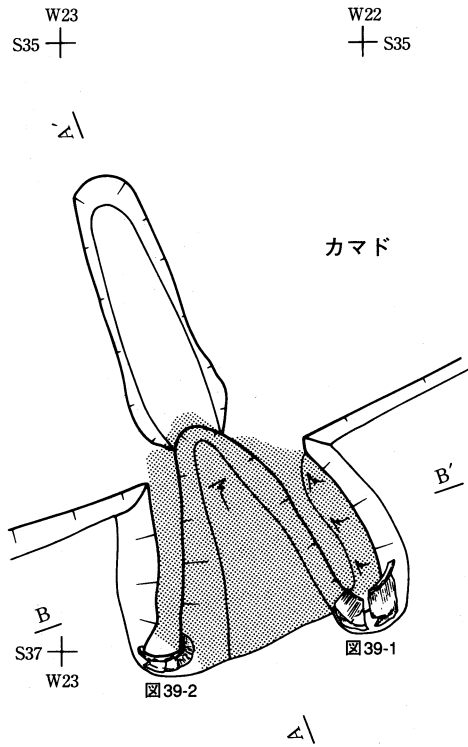
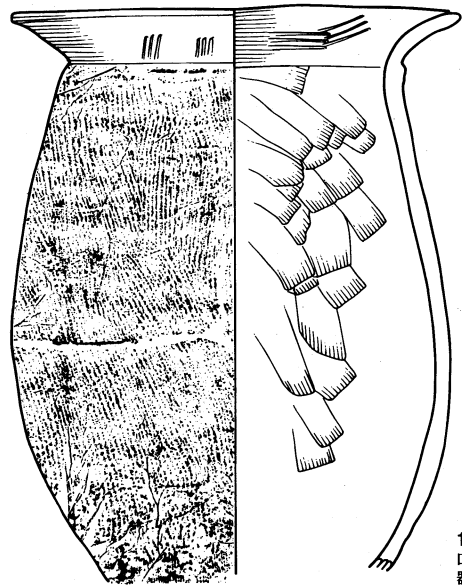
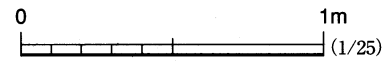
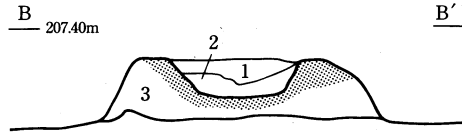


図37 10号住居跡出土遺物

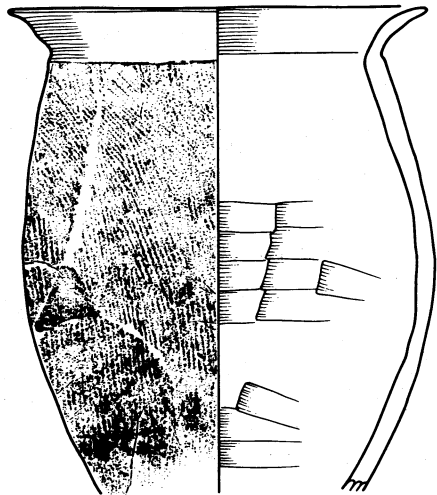


- 11号住居跡カマド堆積土
- 1 10 Y R 3/3 暗褐色砂質土 (焼土粒を少量含む)
 - 2 10 Y R 3/4 暗褐色砂質土 (焼土粒を少量含む)
 - 3 10 Y R 4/4 褐色砂質土 (焼土を少量含む)

焼土化範囲



1 カマド袖
口径：17.8cm
器高：(22.3cm)



2 カマド袖
口径：26.5cm
器高：(19.0cm)

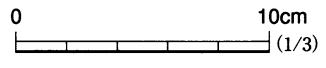


図39 11号住居跡カマドと出土遺物

第2章 遺構と遺物

る。周壁は床面から、ほぼ垂直な角度で立ち上がり、周壁の高さは約50cmを測る。床面はほぼ平坦に整地されている。踏み締まりと考えられる硬化面はないが、貼床を確認する事ができた。この貼床は床面の中央から南側にかけて認められ、その範囲は東西1.8m、南北1.5mで不整な三角形を呈していた。掘形の深さは15cm程度であった。底面の状態は凸凹した荒掘りされた状態であった。

カマドは、北壁のほぼ中央部で1基検出された。形態は竪穴プラン内に燃焼部を持ち、「ハ」の字に張り出した両袖を有するタイプのもので火をよく受けている。燃焼部の底面から側壁にかけて深さ5～20cm程度の酸化面が確認された。両袖によって確保された燃焼部の規模は、下端ラインで焚口幅約35cm、奥行き約70cmを測り、袖の長さは約60cm、高さは約20cmである。カマド内堆積土は3層に区分される。ℓ1は天井崩落後、煙道から流入堆積した層である。ℓ2は天井部からの崩落土である。ℓ3はカマド袖構築土で、燃焼による酸化範囲が見られた。なお、カマドの両袖の先端部には土師器の甕が埋め込まれているが、これは焚口部の補強材もしくは構築材として再利用されたものと考えられる。煙道は半地下式で、幅は下端で約20cmを測り、カマド奥壁から80cm屋外に向かって延びている。ピットは4個確認されている。この円形を呈したP1～4は、住居跡対角線上に等間隔で配列されているため支柱穴と考えられる。規模は長軸30～54cm、短軸24～42cm、床面からの深さ27～37cmを測る。支柱穴はいずれも自然流入土で埋没している。

遺物 (図39)

本住居跡から出土した遺物は、縄文土器2点、土師器368点、須恵器2点、鉄滓0.1kgである。そのうち、実測可能な土師器2点を図示した。

図39-1・2は、土師器の甕である。器形は口縁部が外反し、胴部下半が膨らんでいる。器面調整は、外面が口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ、内面が口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデで仕上げられている。

まとめ

本遺構は、小型の部類に属する竪穴住居跡である。21号住居跡の大半を壊して構築されていた。柱穴の配置には規格性が認められ、カマドもしっかりした構造であることから、往時は長期間の居住にも耐えられる構築物であったと思われる。所属時期は、カマドの袖材として転用されていた土師器甕の特徴から、7世紀中頃と推測される。(堀川)

12号住居跡 S I 12

遺構 (図40, 写真27・28)

本遺構は調査区の南西側、S12-41～43・51～53グリッドに位置する竪穴住居跡である。検出された場所は自然堤防上の平坦面で、周囲には竪穴住居跡が密集している。24号住居跡や6号土坑と重複関係にあり、新旧関係では、本遺構が最も古い。検出当初は暗黄橙色土で埋まった不整形のくぼみとして確認された。

遺構内堆積土は3層に区分される。ℓ1・2は暗黄橙色土と暗褐色土が攪はんされたように混り

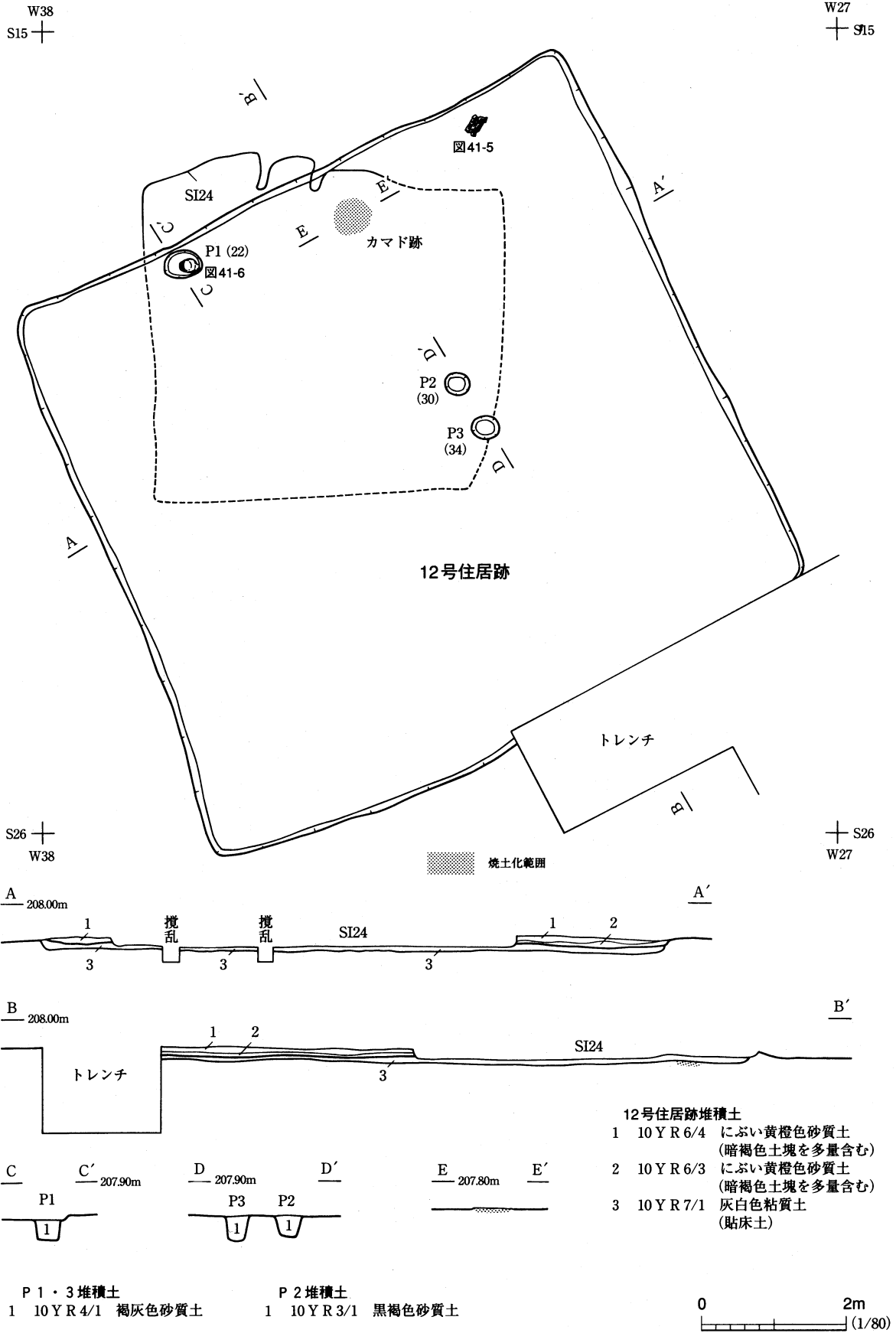


図40 12号住居跡

合う層であることから、人為的な埋没土と思われる。ℓ3は灰白色の貼床土で、層の下部は鉄分が赤く錆びたような色調を呈していた。床面は、このℓ3の上面に形成されている。

本遺構の南側は試掘調査時のトレンチによって破壊されているものの、ほぼ全体形を把握することができた。平面形は、東西方向に少し長い不整な方形を呈する。東壁の主軸方向は、真北から西に25°傾いている。規模は現況の上端で東西長8.6m、南北長8.4mを測る。壁は緩やかに外傾して立ち上がる部分と直立する部分とがあり、一定していない。壁高は、最大で約20cmを計測した。床面には多少のくぼみがあり、全体的に北に向かって下り傾斜している。

カマドの痕跡と思われる焼土化範囲を、住居跡の北壁中央付近で確認している。おそらく、燃焼部の底面にあたる部分と考えられる。床面が被熱して、直径50cmの不整円形の範囲が赤褐色に色調変化していた。断ち割りの結果、被熱範囲の厚さは最大で4cmを計測した。全体にわたって熱変化を受けているが、焼土化の状態は弱い。

床面からはピットが3個検出された。P1はカマドの西方で、北壁に接するように設けられていた。平面形は不整な楕円形で、規模は長軸50cm、短軸37cm、深さ22cmである。この中からは、土師器の甕が1個体、底面に置かれた状態で出土している。このことから、P1は貯蔵穴の可能性のあるものと考えられる。P2・3は床面のほぼ中央から検出された。平面形は円形で、規模は直径が約30cm、深さが約30cmを測る。床面から垂直に掘られていることから、柱穴と判断している。

遺物 (図41, 写真99)

本住居跡から出土した遺物は、縄文土器2点、土師器1,528点、須恵器11点、陶磁器1点である。そのうち、土師器6点、須恵器2点を図示した。

図41-1~3は土師器の杯である。1は口縁部が外反して立ち上がる小型の丸底杯で、口縁部と底部の境界は稜をなしている。器面調整は内面がヘラナデ、外面が口縁部ヘラナデ、底部ヘラケズリである。2は口縁部が外傾して立ち上がる有段丸底の杯で、内面には黒色処理とヘラミガキが施されている。外面調整は、口縁部がヨコナデ、底部がヘラナデである。3は口縁部が短く外反して立ち上がり、口縁部の内面に稜を形成する小型の椀形杯である。内面調整はヘラナデ、外面調整はヘラケズリとヘラナデによって仕上げられている。

図41-4・5は口径18cmを越える土師器の大型甕である。4は頸部で強く屈曲して外反する口縁部と卵形の胴部をもっている。内面は口縁部ハケメ、胴部ヘラナデ、外面は口縁部ヨコナデ、胴部ハケメによって調整されている。5は胴部が円筒形を呈し、口縁部が外側に開く器形である。調整は内面が口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ、外面が口縁部ヨコナデ・ヘラナデ、胴部ハケメである。

図41-6は土師器の無底の大型甕である。胴部があまり膨らまず、屈曲する頸部から口縁部が大きく開く器形を持っている。内面は口縁部がヨコナデ、胴部がヘラナデで調整されている。外面は口縁部ヨコナデ、胴部ハケメによる調整が施され、口縁部と胴部の境界には段が形成されている。

図41-7は須恵器高杯の杯部である。全体の1/3程度が遺存している。器形は器高が比較的低く、扁平な感じがする。口縁部は直立気味に立ち上がり、底部との境界には軽い稜が形成されている。

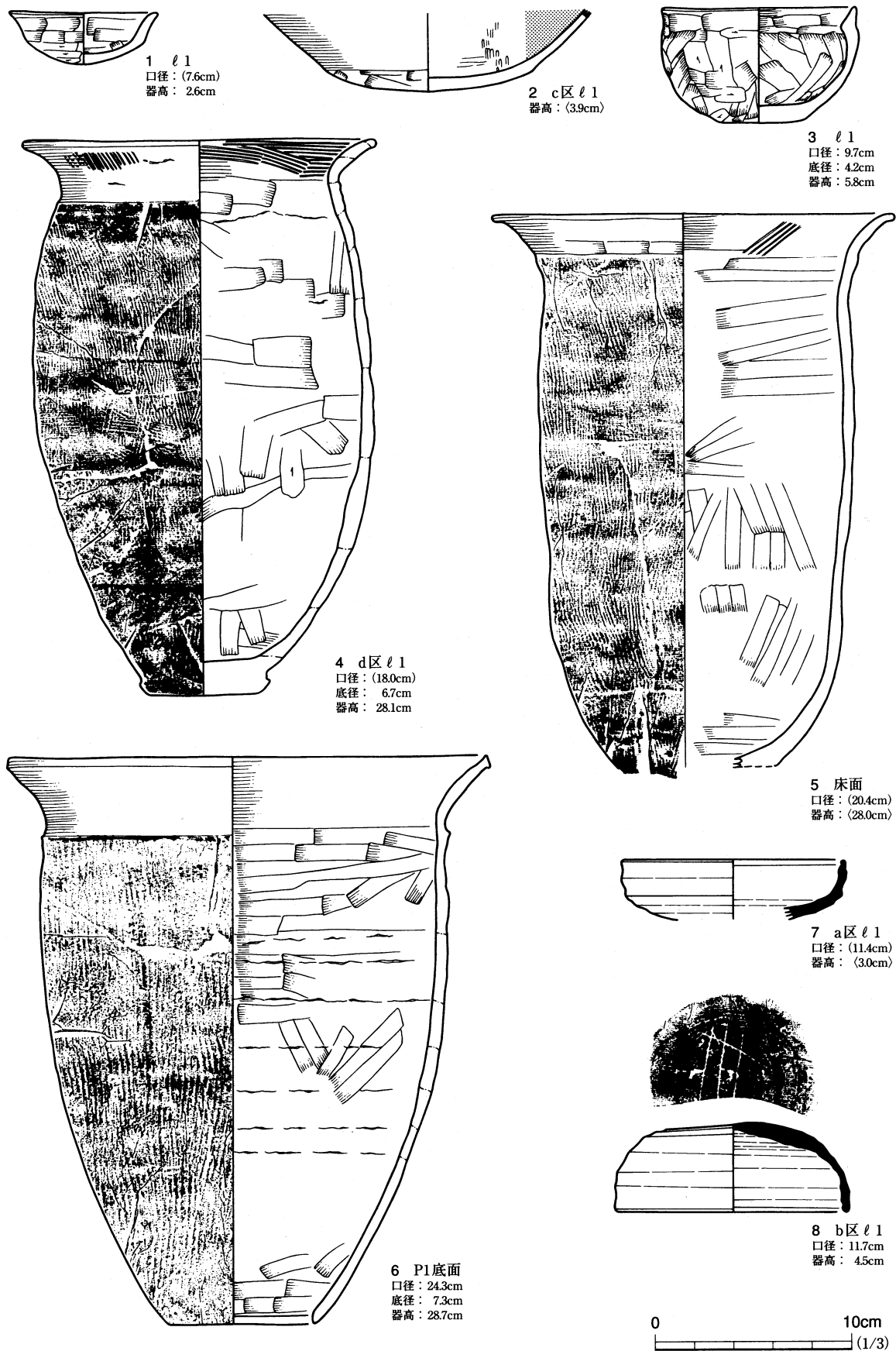


图41 12号住居跡出土遺物

口縁端部は丸く仕上げられ、内面には1本の凹線が見られる。底部の調整は、2/3程が回転ヘラケズリである。

図41-8は須恵器杯の蓋である。全体の1/2強が遺存している。器形は口縁部が長いため、天井部が比較的高くなっている。口縁部は、端部付近がほぼ直立しており、天井部との境界が不明瞭である。口縁端部は丸く仕上げられ、内面には1本の浅い凹線が認められる。天井部の調整は、回転ヘラケズリで行われ、4本の線刻が加えられている。窯印の可能性はある。

まとめ

本遺構は床面の中央に2個の柱穴を持ち、北壁にカマドを設けた大型の竪穴住居跡である。堆積土や床面から出土した土師器や須恵器の年代観から、本住居跡の所属時期は6世紀後半から7世紀後半と考えられる。 (小 暮)

13号住居跡 S I 13

遺 構 (図42~44, 写真29・30)

調査区中央の自然堤防上に位置するT11-91~93グリッド、T12-1~3・11~13グリッドで検出された竪穴住居跡である。本住居跡の東方約6mの地点には29号住居跡、西方約8mの地点には14号住居跡がある。本住居跡に直接重複する遺構はない。検出面はLⅢ上面であり、灰黄褐色土で検出した。

遺構内堆積土は6層に分層できた。主に遺構中央部に堆積する ℓ 1~4には、部分的に焼土粒や炭化物粒の混入が認められた。堆積状況は自然埋没状態を示している。 ℓ 5は壁際に三角堆積していることから、壁の崩落土と考えられる。 ℓ 6は床下のピットや溝を埋める土で、本住居跡の床面は本層とLⅢの上面に形成されている。

平面形は方形を呈する。カマドと東壁を結ぶ東西方向の主軸は、真北より西に105°傾いている。規模は現況の上端で東西長8.0m、南北長8.0mを測る。床面は大部分が基盤層のLⅢで形成されているため、堅固で安定していた。床面の状態は、若干凹凸があるものの、ほぼ平坦である。壁は床面から急峻に立ち上がり、遺存高は約30cmを計測した。

カマドは西壁のやや北に偏った位置において検出された。ほぼ同じ位置で作り替えが行われており、新旧の2つがある。旧カマドは煙道部のみ遺存している。新カマドの左袖に接する位置にあることから、新カマドを構築した際、旧カマドの燃焼部は壊されたものと考えている。旧カマド煙道部の遺存長は77cm、上端の幅は30cmであり、堆積土中には少量の焼土が含まれていた。

新カマドは旧カマドの北側に位置し、遺存状態は良好であった。燃焼部は、暗黄橙色の粘土を積み上げて構築されていた。袖部の遺存長は西壁から約85cmあり、床面からの遺存高は約15cmを測る。燃焼部の規模は、焚口幅61cm、奥行き82cmで、奥壁に向かって幅が狭くなっている。燃焼部の内面は強く焼けており、赤褐色の被熱痕跡は底面、袖部とも約10cmの深さにまで達していた。底面は焚口から奥壁に向かって緩やかに上り傾斜している。燃焼部に堆積した土は、天井崩落土と流入土で、

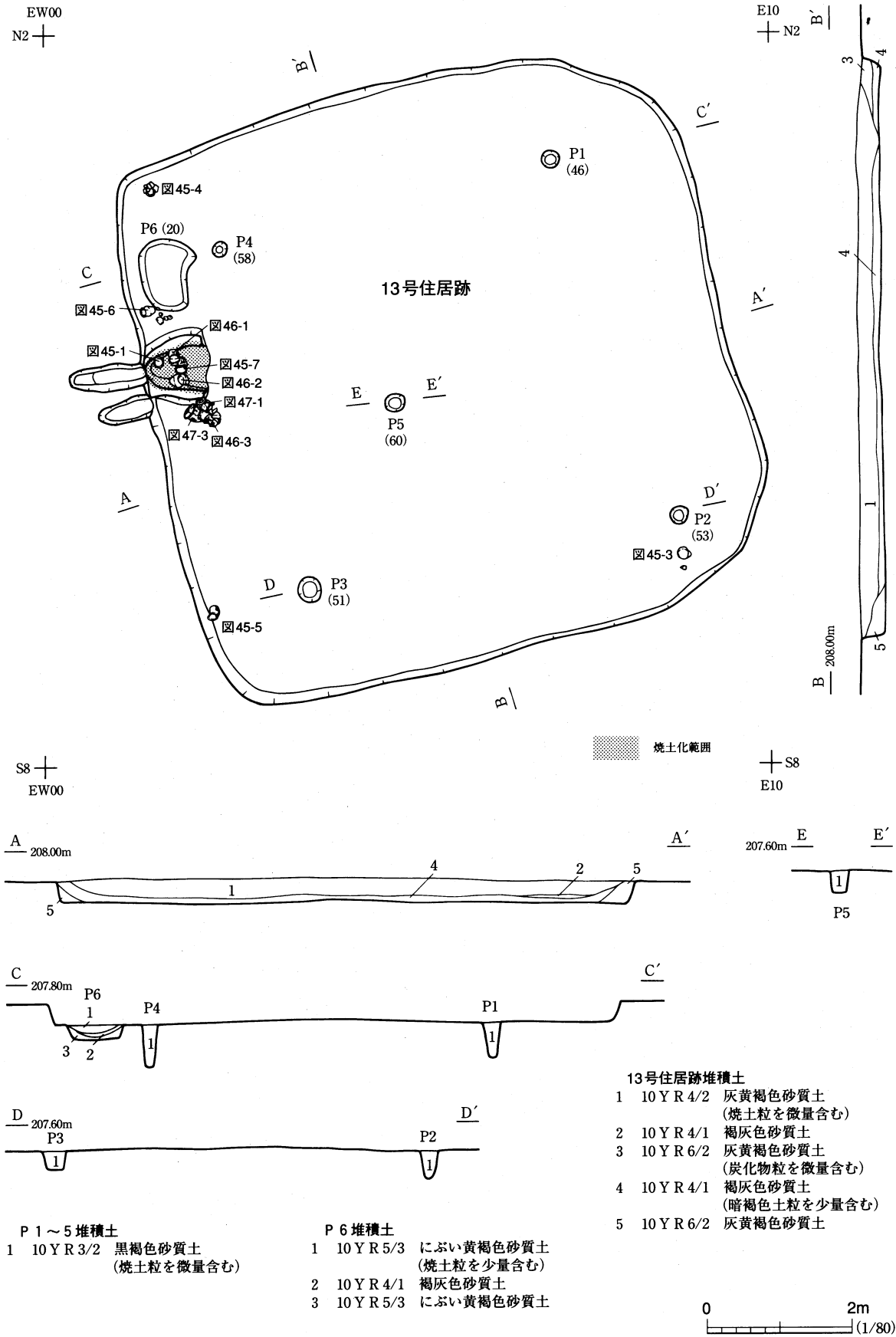


図42 13号住居跡 (1)

焼土塊を含んでいた。煙道部は、燃焼部の奥壁から屋外に向かって約110cmのびる。煙道の上端の幅は36cmを計測した。煙出し口は緩やかに立ち上がっている。新カマドの燃焼部からは、土師器の甕が3個並んだ状態で、土師器の杯が1個正位に置かれた状態で出土した。その他、カマドの左袖前面からは、土師器の甕や甑が3個横倒しのつぶれた状態で出土している。

本住居跡の床面上では、ピットが6個検出された。P1～5は形態や規模、配置の状況から、柱穴と考えられる。床面に対して垂直に掘られ、平面形は直径約20cmの円形を呈し、断面形は深さ46～60cmのU字状を呈している。P1～4は方形状に配置されていることから、支柱穴と思われる。P1～P2間は552cm、P2～P3間は520cm、P3～P4間は504cm、P4～P1間は472cmを測る。

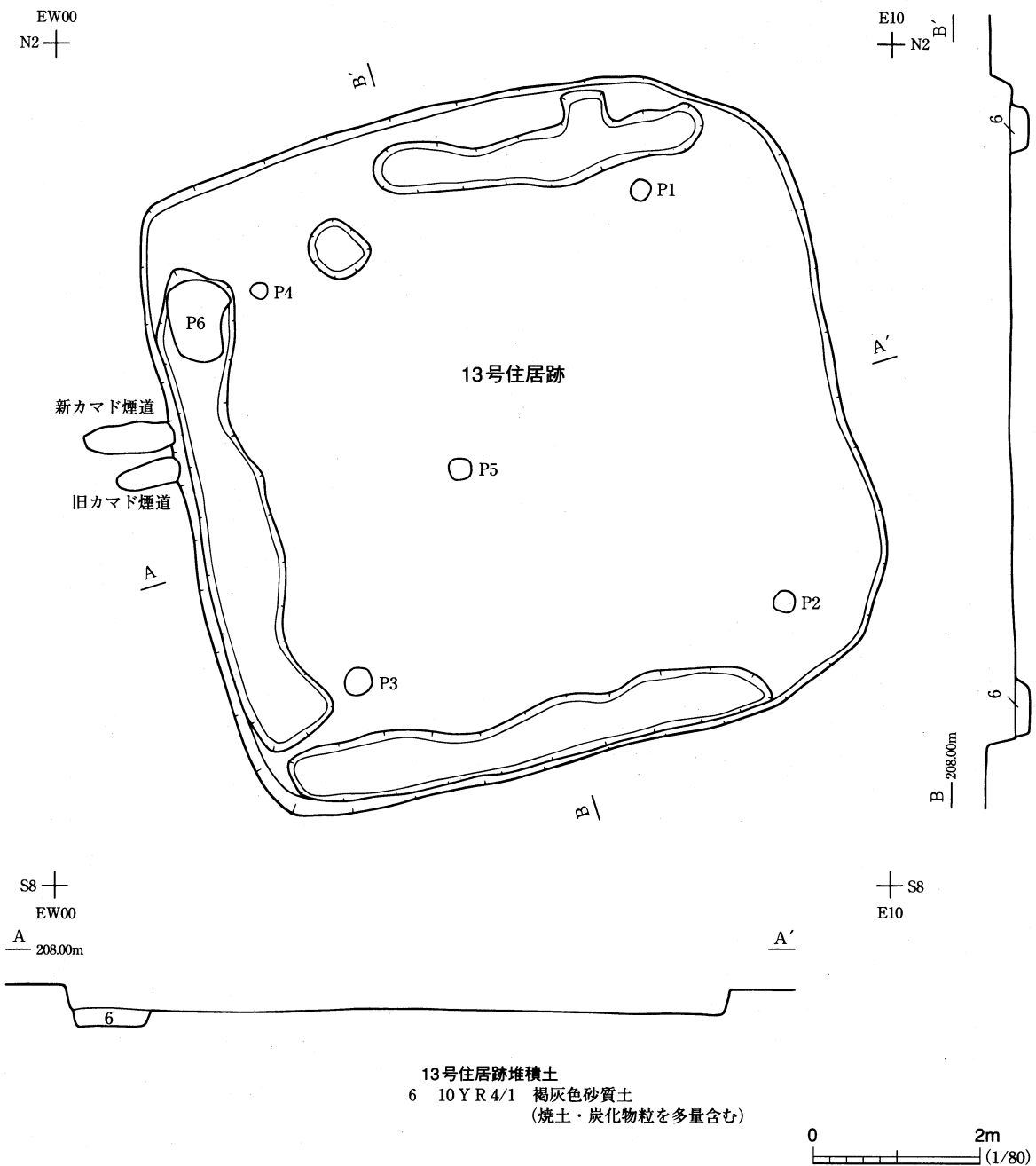


図43 13号住居跡 (2)

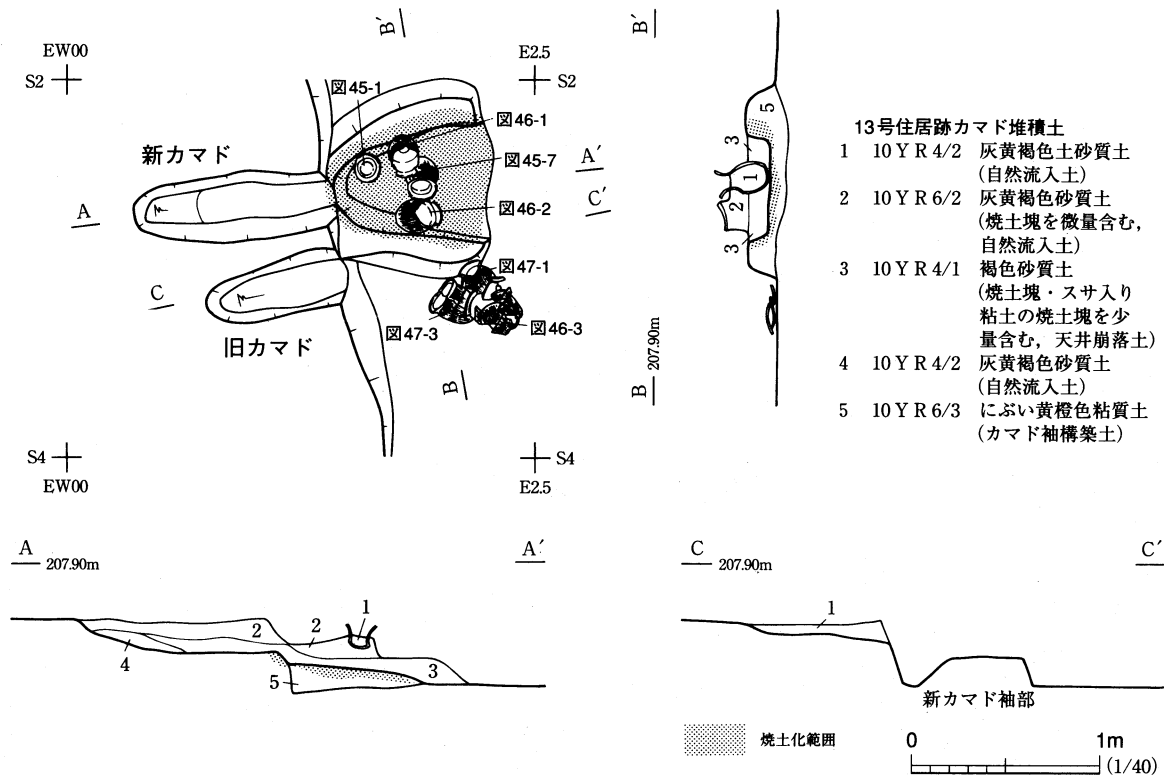


図44 13号住居跡カマド

P 5はP 1～4を結んでできる方形の中央に位置しており、柱穴の中では最も太い。カマドの北脇で検出されたP 6は、平面形が南北方向に長い不整な長方形を呈し、規模が東西長60cm、南北長100cm、深さ20cmである。カマドとの位置関係や規模から推測すると、貯蔵穴の可能性が高い。

なお、本住居跡の床下からは溝3条、ピット1個が検出されている。溝の一部がカマドの下から見つかっているため、これらは本住居跡が使用される前に掘られたものと考えられる。溝は北壁・西壁・南壁に沿って検出された。幅は45～95cm、深さは20～33cmを測る。ピットは遺構の北西部分にあり、平面形は直径80cmの不整円形、断面形は深さ30cmのU字状を呈している。これらは、その中に炭化物粒や焼土粒を多量に含む褐灰色土で満たされているため、共通の目的で設けられたものと思われる。しかし、具体的な用途については不明である。

遺物 (図45～47, 写真100・101)

出土した遺物は、縄文土器1点、土師器1,551点、須恵器48点、鉄製品1点、鉄滓0.1kgである。そのうち、土師器14点を図示した。

図45-1は杯である。口縁部が外反して立ち上がる有段丸底の杯で、内面には黒色処理とヘラミガキが施されている。外面調整は口縁部がヨコナデ、底部がヘラケズリである。

図45-2は杯を横に大きくしたような器形の有段丸底の鉢である。内面には黒色処理とヘラミガキが施され、外面には口縁部にヨコナデ、底部にヘラケズリが施されている。

図45-3, 図47-3は無底の小型甔である。図45-3は、口縁部が緩やかに外反し、胴部が底部に向かって急にすぼまる摺り鉢状の器形を有している。器面調整は外面が口縁部ヨコナデ、胴部ハ

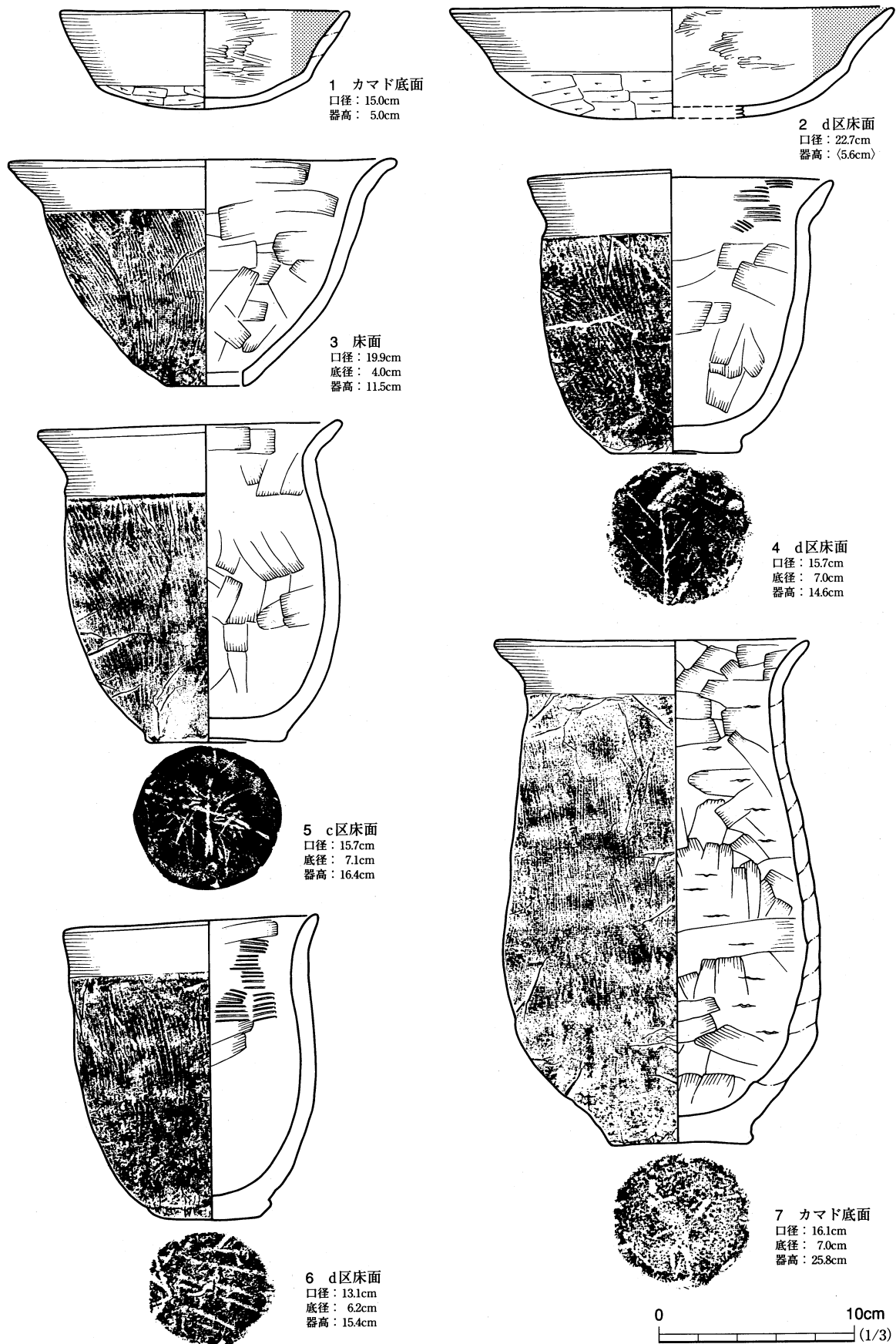
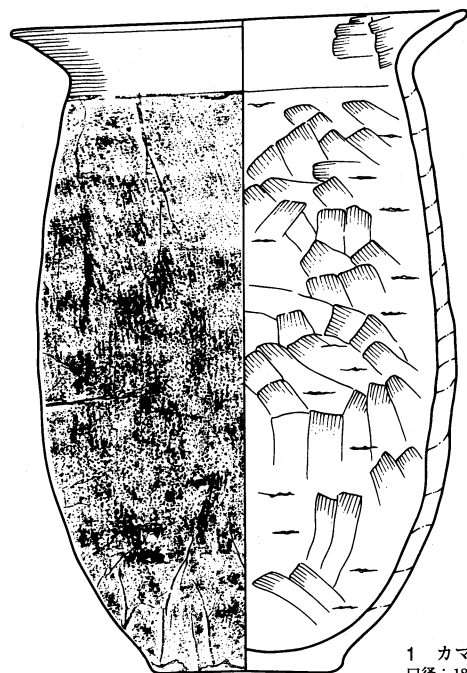
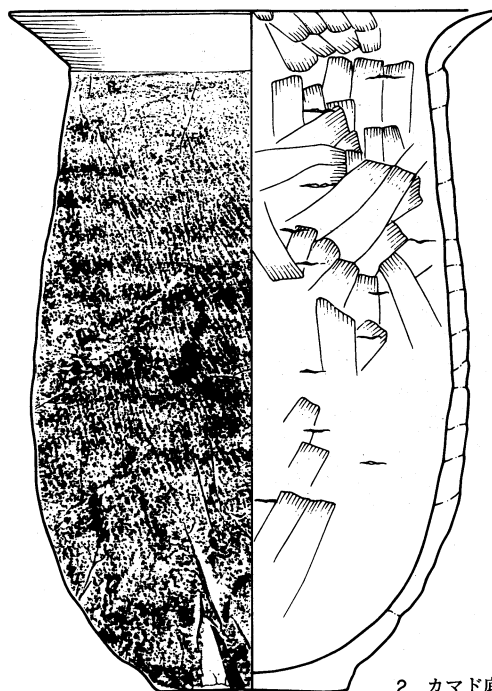


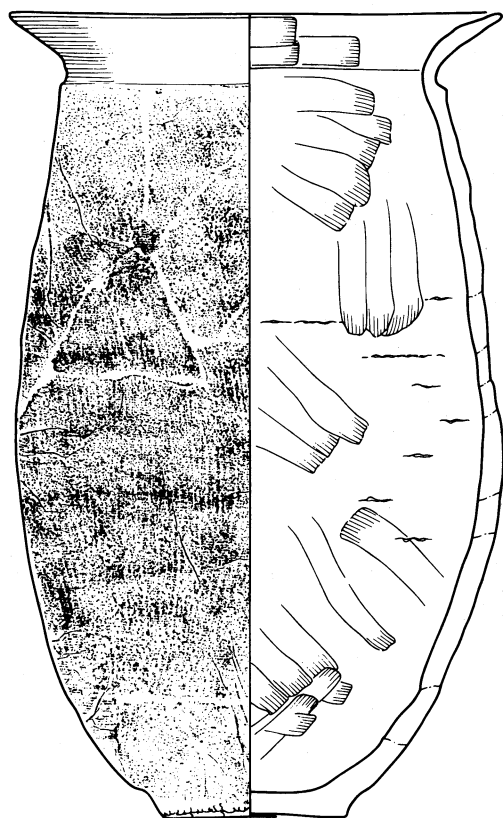
図45 13号住居跡出土遺物 (1)



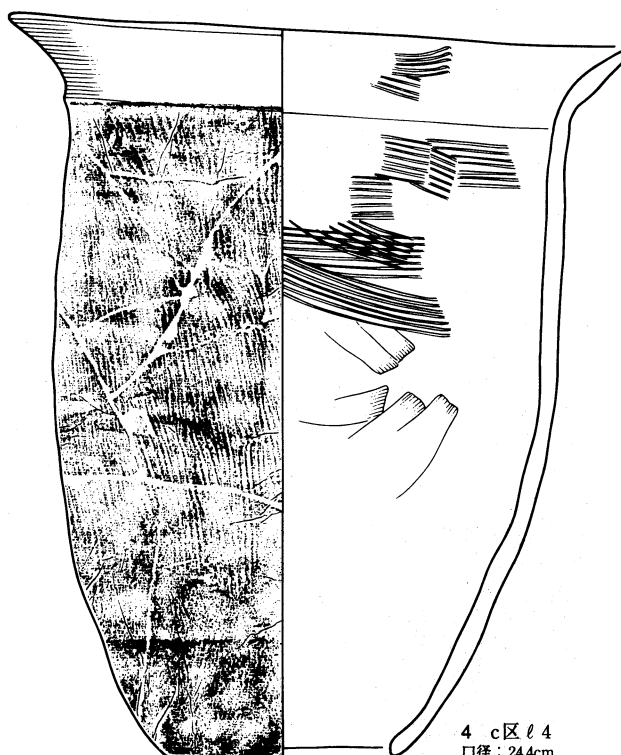
1 カマド底面
口径：18.0cm
底径：7.4cm
器高：26.0cm



2 カマド底面
口径：(19.0cm)
底径：7.6cm
器高：26.8cm



3 床面
口径：19.4cm
底径：7.0cm
器高：31.6cm



4 c区 l 4
口径：24.4cm
底径：8.8cm
器高：29.4cm



0 10cm
(1/3)

図46 13号住居跡出土遺物(2)

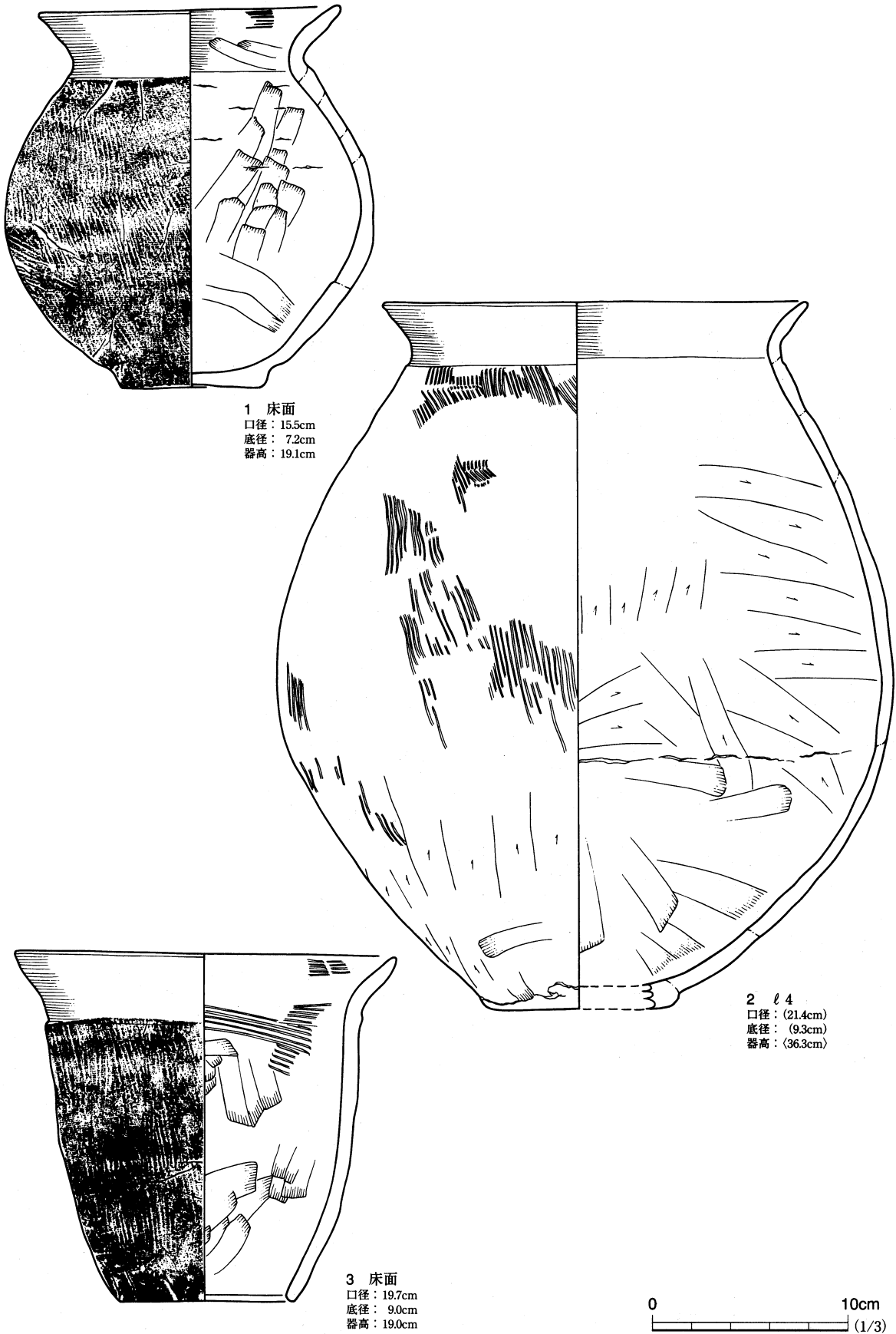


図47 13号住居跡出土遺物 (3)

ケメ、内面が全面ヘラナデである。図47-3は、ちょうど中型甕の底を抜いたような器形である。口縁部は緩やかに外傾し、胴部は膨らまない。外面の調整は、口縁部ヨコナデ、胴部ハケメで仕上げられ、頸部には段が作り出されている。内面には、ハケメとヘラナデが観察される。図46-4は無底の大型甕である。口縁部は緩やかに外反し、胴部はあまり膨らまない。器面調整は、外面が口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ、内面がハケメとヘラナデである。

図45-4～6は中型の甕である。口縁部は外反し、胴部は少し膨らむ。器面調整はいずれも、外面が口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ、内面がハケメとヘラナデである。図47-1は、口縁部が外反する中型の球胴甕である。外面は口縁部がヨコナデ、胴部がハケメ、内面はヘラナデによって調整が仕上げられている。大型の長胴甕は、図45-7、図46-1～3の4点が出土している。いずれも口縁部が外反し、胴部下半に膨らみをもつ器形を有している。調整は外面が口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ、内面がヘラナデである。図47-2は、卵形の胴部と外反する口縁部を有する大型の球胴甕である。外面は口縁部がヨコナデ、胴部上半がハケメ、胴部下半がヘラケズリによって調整されている。内面の調整は、口縁部がヨコナデ、胴部上半がヘラケズリ、胴部下半がヘラナデである。

まとめ

本遺構は、西壁にカマドを有する大型の竪穴住居跡である。カマドが一度造り替えられていることから、長期間にわたって居住が行われていたものと推測される。上屋は方形に配置された4本の支柱と、その中央に設けられた1本の柱によって支えられていたものと考えられる。土師器の甕類はカマドの周辺や壁際の床面上から横倒しの状態で多く出土している。年代は、6世紀後半から7世紀後半と思われる。 (小 暮)

14号住居跡 S I 14

遺 構 (図48・49, 写真31・32)

遺構が集中して発見された調査区中央の自然堤防上に立地する竪穴住居跡で、S12-19・29グリッドに位置している。本住居跡の南方約1mには15号住居跡がある。本住居跡に直接重複する遺構はない。検出面はLⅢ上面であった。暗黄褐色土で検出した。

遺構内堆積土は、6層に分層することができた。ℓ1～3はLⅡに近似した暗褐色系の土を基調とする層で、中央が少しくぼんだレンズ状の堆積状況を示すことから、自然流入土と思われる。ℓ4・5はカマド内堆積土である。ℓ6は掘形を埋める貼床土で、北側の床面は本層の上面に形成されていた。

本住居跡は遺存状態が良好で、ほぼ全体形を把握することができた。平面形は不整な方形を呈しており、カマドと南壁を結んだ主軸は、真北から西に10°傾いている。規模は現況の上端で東西長、南北長とも約3.9mを測る。床面は北半分がℓ6上面、南半分がLⅢに形成されており、堅固である。この床面は若干凹凸があるものの、おおむね平坦な状態であった。掘形は床面の中央から北側にかけて認められた。床面から掘形底面までの深さは、約10cmを計測し、底面の状況は凹凸が目立

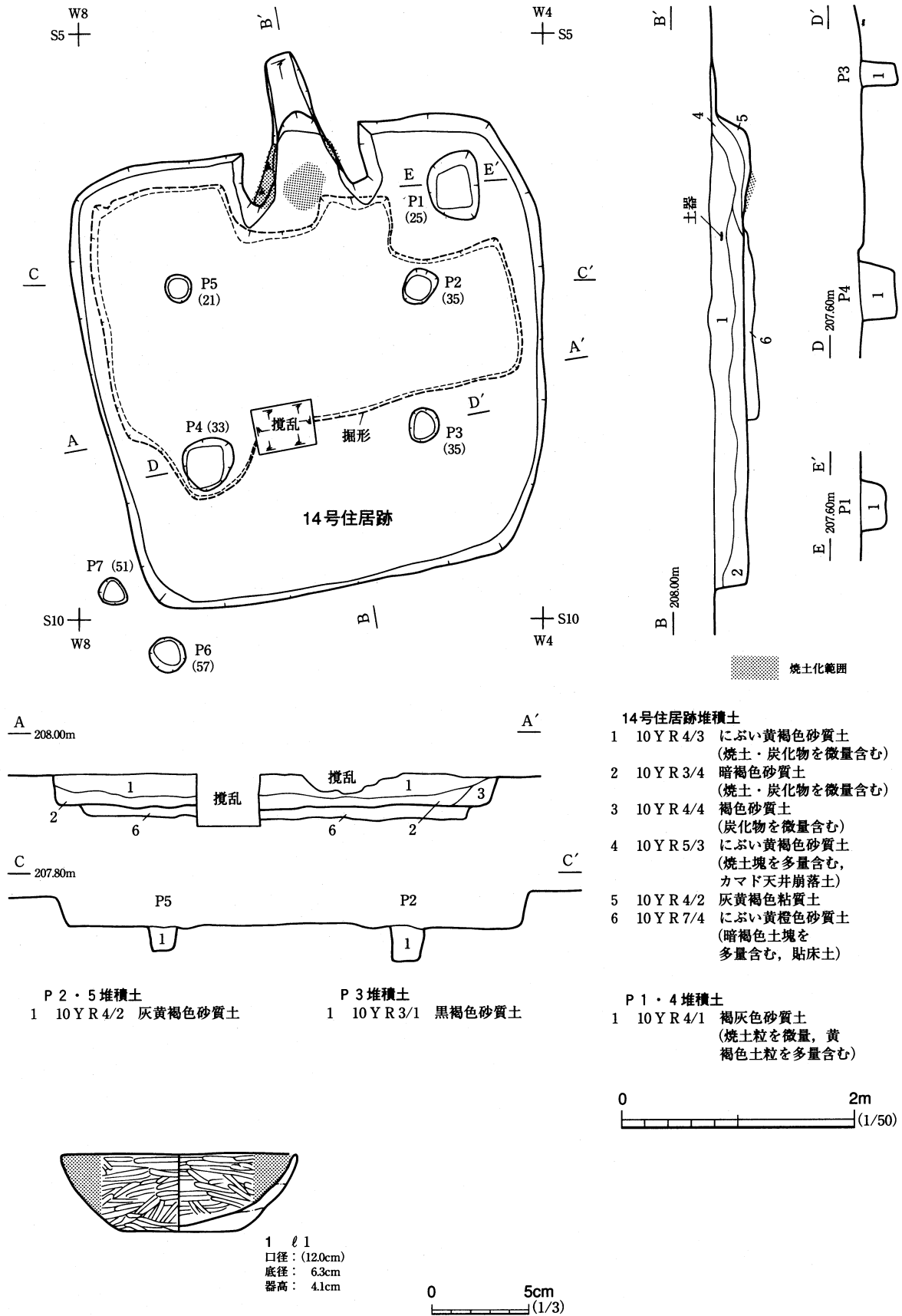


図48 14号住居跡と出土遺物

つ荒掘りされた状態であった。壁は床面から急峻に立ち上がっており、壁面の状態は硬い。壁高は約30cmである。

カマドは北壁のほぼ中央に付設され、両袖・燃焼部・煙道が遺存していた。袖部は、LⅢを掘り残して芯にし、その上に明黄褐色系の土を張り付けて造られている。規模は左袖65cm、右袖70cmの長さを測り、床面からの遺存高はともに約30cmである。燃焼部は、この両袖に挟まれた位置に認められ、焚口幅110cm、奥行90cmの平面三角形を呈している。燃焼部の底面と内壁は、部分的に強く焼土化し、赤変硬化していた。焼土化した部分の厚さは最大で10cmに及んでいることが、断ち割りによって確認された。燃焼部の奥壁はほぼ直立して、煙道につながっている。煙道は短く、北壁から50cmの長さを測るのみである。幅は煙道の中央で34cmあり、深さは最大10cmを計測した。南から北に向かって緩やかな傾斜をもって検出面にいたっており、先端には明瞭な立ち上がりは認められない。カマド内の堆積土は3層に分かれる。①は燃焼部から煙道にかけて堆積していた暗黄褐色土で、焼土粒が微量に含まれていた。②は主に燃焼部に堆積していた暗黄褐色を呈する砂質土で、多量の焼土塊を含んでいたため、天井の崩落土と思われる。この②の下には、煙道から流入したと思われる灰黄褐色土の薄層が認められた。

ピットは床面から5個検出され、これらをP1～5とした。北東コーナー部に設けられたP1は、不整な長方形を呈しており、長軸60cm、短軸40cm、床面からの深さ25cmを測る。カマドのちょうど右脇に位置していることなどから、貯蔵穴の可能性が高い。P2～5は上屋を支える支柱穴と考えられる。直径20～44cmの不整な円形ピットで、床面からの深さは21～35cmを計測した。それぞれを結ぶ線が方形になるように配置されている。P2-P3間は116cm、P3-P4間は192cm、P4-P5間は132cm、P5-P1間は208cmを計測した。P6・7は屋外で検出されたが、半截の結果、内部の堆積土が屋内のピットと同じであるため、本住居跡に付属するものと判断した。ピットの直径は20～30cmと細い。掘り込み面からの深さはP6が57cm、P7が51cmである。

遺物(図48)

本住居跡から出土した遺物は、縄文土器13点、土師器208点、須恵器3点、陶磁器1点である。そのうち、土師

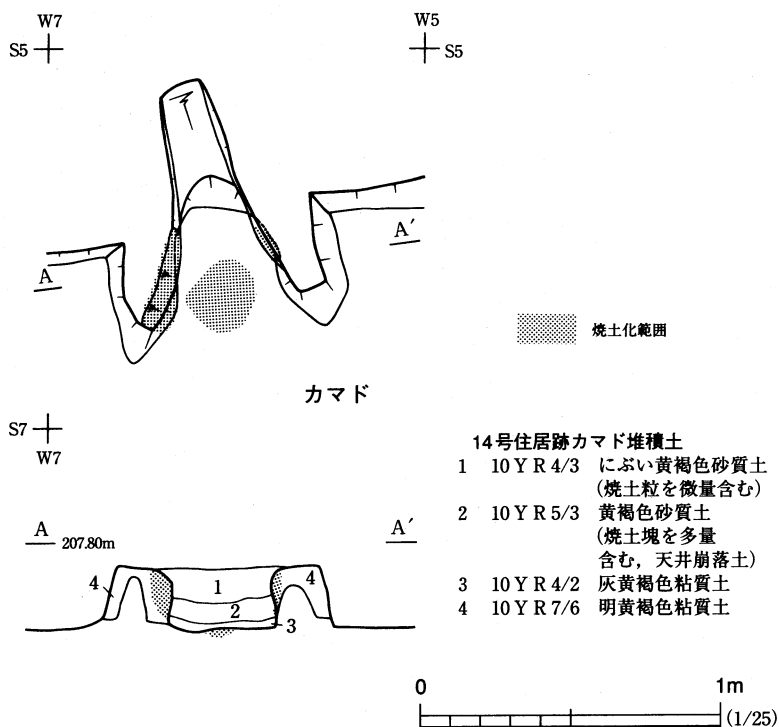


図49 14号住居跡カマド

器1点を図示した。

図48-1は底部を平らにした杯である。口縁部は緩やかに内湾している。内外面ともに黒色処理と丁寧なヘラミガキが施されており、光沢がある。金属器の影響を受けているものと思われる。

まとめ

本遺跡の中では、中型の部類に属する竪穴住居跡である。上屋は、方形に配置された4本の支柱によって支えられた、しっかりとした構造物だったと推察される。カマドは北壁に付設されており、燃焼部の被熱具合から、長期間使用されたものと思われる。所属年代は出土した土師器の特徴から、7世紀後半から8世紀後半と思われる。 (小 暮)

15号住居跡 S I 15

遺 構 (図50, 写真33・34)

本住居跡は調査区中央のS12-29・30・39・40グリッドにわたって検出された。本住居跡が立地する地点は、標高207.6mの自然堤防上である。検出面はLⅢ上面で、褐色土で埋没した落ち込みとして確認された。すぐ南側には26号住居跡が位置している。本住居跡が完全に埋没する前に構築されたらしく、26号住居跡の煙道の先端部が本住居跡の堆積土を切っていた。

遺構内堆積土は3層確認された。LⅡに相当すると思われる褐色系の層であり、周囲から流れ込んだようなレンズ状の堆積をしていることから、自然埋没状態と思われる。

本住居跡は、攪乱で壁や床面の一部を破壊されているものの、ほぼ全体形を把握することができた。平面形は東西方向にやや長い不整な方形を呈している。カマドと南壁を結ぶ主軸は、真北に対して34°西に傾いている。規模は現況の上端で、東西長5.1m、南北長4.8mを測る。床面は全面にわたって基盤層のLⅢで形成されており、堅固で安定している。この床面は、凹凸がほとんどない平坦な状態であった。壁は床面から急峻に立ち上がっており、壁面の状態は硬い。壁高は、北壁・東壁・西壁で約40cmを計測した。南壁は上部が攪乱を受けているため、床面から約5cmの高さまで遺存しているにすぎない。

カマドは住居跡の北壁中央に付設され、両袖・燃焼部・煙道が遺存していた。燃焼部には、焼土や炭化物を含む天井崩落土 ℓ 2が堆積し、その上に煙道から流入した暗褐色土が被っている。袖部と燃焼部は、住居跡の床面に暗黄橙色土を盛り上げて造られていた。袖部の長さは、左袖で約70cm、右袖で約60cmを計測した。床面からの遺存高は、左袖が31cm、右袖が28cmである。焚口付近の左袖先端には、袖材に転用した土師器甕が口縁部を下にした逆位の状態で埋め込まれていた。燃焼部は、この両袖の内側に造られた平面台形の範囲で、規模は焚口幅60cm、奥行70cm、奥壁幅30cmを測る。燃焼部の内面は、強い火熱を受けて焼土化しており、その被熱範囲は約15cmの深さにまで達していた。燃焼部底面は焚口から奥壁に向かって緩やかに上り傾斜しており、煙道に続いている。煙道は燃焼部の奥壁から外へトンネル状に掘られ、全長は110cmある。幅は煙道の中央で30cmを測り、掘り込み面からの深さは20cmを計測した。

床面から柱穴と思われるピットを5個検出し、P1～5とした。いずれも直径約40cmの円形ピットで、床面から垂直に掘られている。断面形はU字状を呈し、深さは34～49cmを計測した。床面の中央を取り囲むように規則的に配置されており、それぞれのピットを結んだ線の平面形は西辺が長い台形になる。P1－P2間は60cm、P2－P3間は150cm、P3－P4間は300cm、P4－P5間は250cm、P5－P1間は230cmを計測した。

遺物 (図51)

本住居跡から出土した遺物は、土師器341点、須恵器8点、土製品1点である。そのうち、土師器5点を図示した。

図51-1・2は有段丸底の杯である。1はやや外反する口縁部をもち、2は外傾する口縁部を有している。両方とも、内面は黒色処理と丁寧なヘラミガキ、外面は口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリによって調整が仕上げられている。1の口縁部下端には、器面を浅くえぐるようなヘラナデが施されており、より明瞭に段を作り出している。図51-5はロクロ整形された杯である。底部は平らに作られ、口縁部は内湾して立ち上がっている。内面には黒色処理とヘラミガキが施されている。外面の底部付近は回転ヘラケズリによって形が整えられている。

図51-3・4は大型の長胴甕である。胴部下半に膨らみを有しており、3の口縁部は緩やかに外反するようである。器面調整は外面が口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ、内面が口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ・ハケメである。4の底面には木葉痕が認められた。

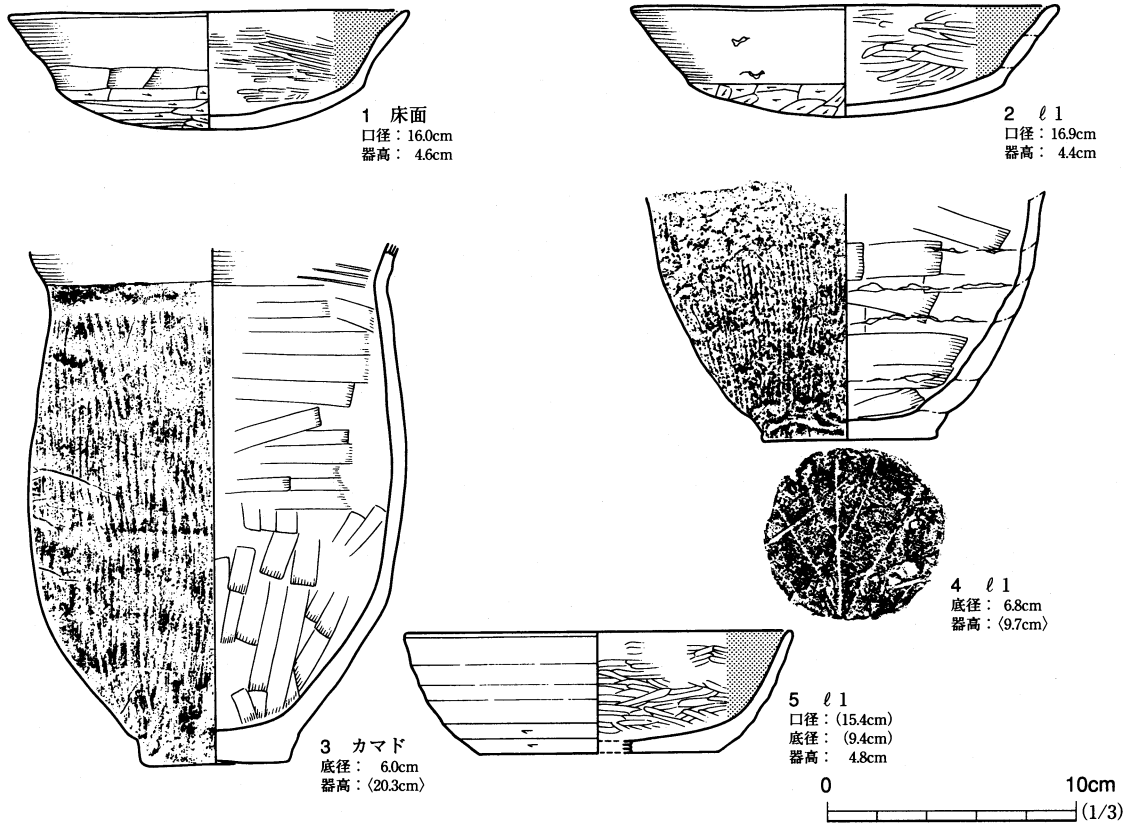


図51 15号住居跡出土遺物

まとめ

本遺構は、規模的に中型の部類に属する竪穴住居跡である。上屋は規則的に配置された太い支柱穴によって支えられていたと考えられ、カマドは強い被熱痕跡を残していることから、長期間の居住に耐え得る構造物であったと推察される。本住居跡の年代は、出土した土師器の特徴から判断すると、6世紀後半から7世紀後半である。(小 暮)

16号住居跡 S I 16

遺 構 (図52, 写真35・36)

本住居跡は、調査区北部の東側T11-27グリッドに位置する。地形的には、阿武隈川右岸沿いに形成された自然堤防の狭い平坦部上に立地している。遺構はLⅡ上面で検出したが、遺存状況は極めて悪く、検出作業の段階で既に削平されてしまい確認できたのはカマドと柱穴と考えられるピットだけである。他の遺構との重複関係は認められず、住居跡西側に5号土坑が位置している。

遺存するカマドは、検出状況から住居跡の北壁に位置していたと考えられる。カマドの袖は暗褐色土を用いて構築され、南側に80cmほど張り出していた。袖の最大幅は西側、東側ともに30cmを測る。両袖に挟まれた燃焼部は最大長80cm、最大幅は50cmを測る。燃焼部底面は、検出面から約10cm掘りくぼめられ、8cm程焼土化していた。また、燃焼部中央西寄り土製支脚を検出した。

カマド内堆積土は、3層に区分した。①はカマド天井崩落後の堆積土、②については、焼土塊を多量に含むことから天井崩落土と考えている。また、③は焼土粒、炭化物粒を多量に含むことから、カマド使用時の堆積土と考えている。

また、カマド南側で、ピット2個を検出した。堆積土は、1層で暗褐色砂質土が堆積していた。ピットの平面形は直径約30cmの円形を呈し、深さはP1で31cm、P2が26cmを測る。ピットは、検出状況や位置などから住居跡に伴う柱穴と判断した。

遺 物 (図53・54, 写真102・103)

遺物は、カマド内とカマド周辺の床面からまとまって出土した。この中で図54-1・3の甕はカマド内②から出土したものである。これらの遺物はいずれも天井崩落土②内に破片で混入していたことから、カマド上部あるいはカマドに設置されていた甕が天井と一緒に崩れ落ちたものと思われる。図53-6の甕は西袖脇の床面から出土している。この甕は、T11-27・47・57から出土した破片と接合関係にあった。図53-1・2の甕は東袖脇、図54-2の甕はカマド東側の床面から出土している。出土遺物の内訳は、土師器片229点、須恵器片18点、土製支脚1点である。土師器は、いずれも非クロ整形である。器面の調整にあたっては、口縁部内外面にヨコナデ、体部に細かい条線のハケメ、体部内面にはヘラナデが施されるものが多い。

図53-1・2は小型の甕である。いずれも底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる器形となる。1の底面には木葉痕が認められる。図53-3・4は中型の甕で、胴部がほぼ球形で口縁部が「く」字状に屈曲する器形となる。3の体部下半には円形状にはげた痕跡、4の底部周辺にヘラケズリが

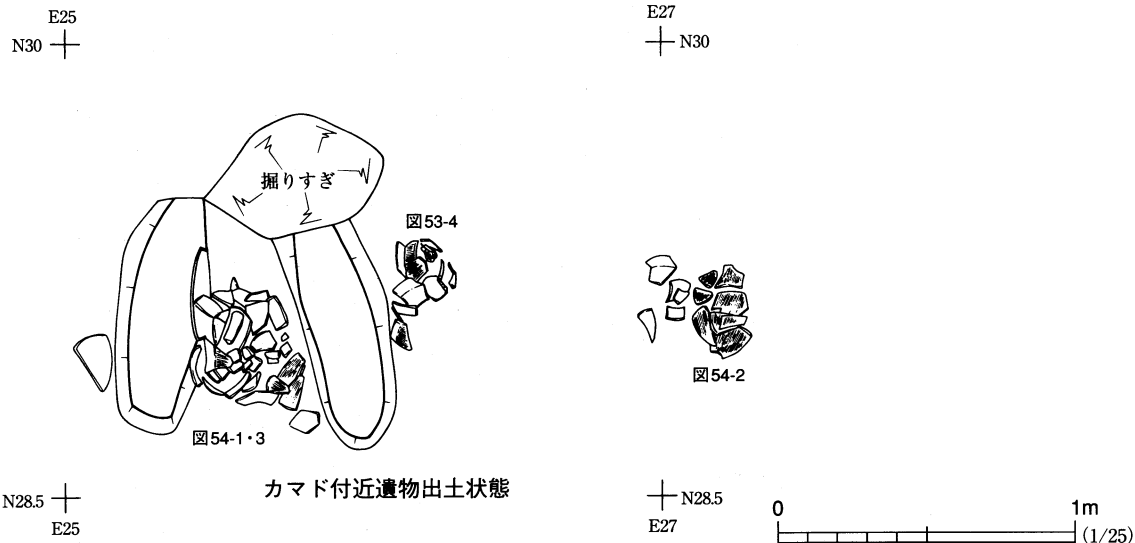
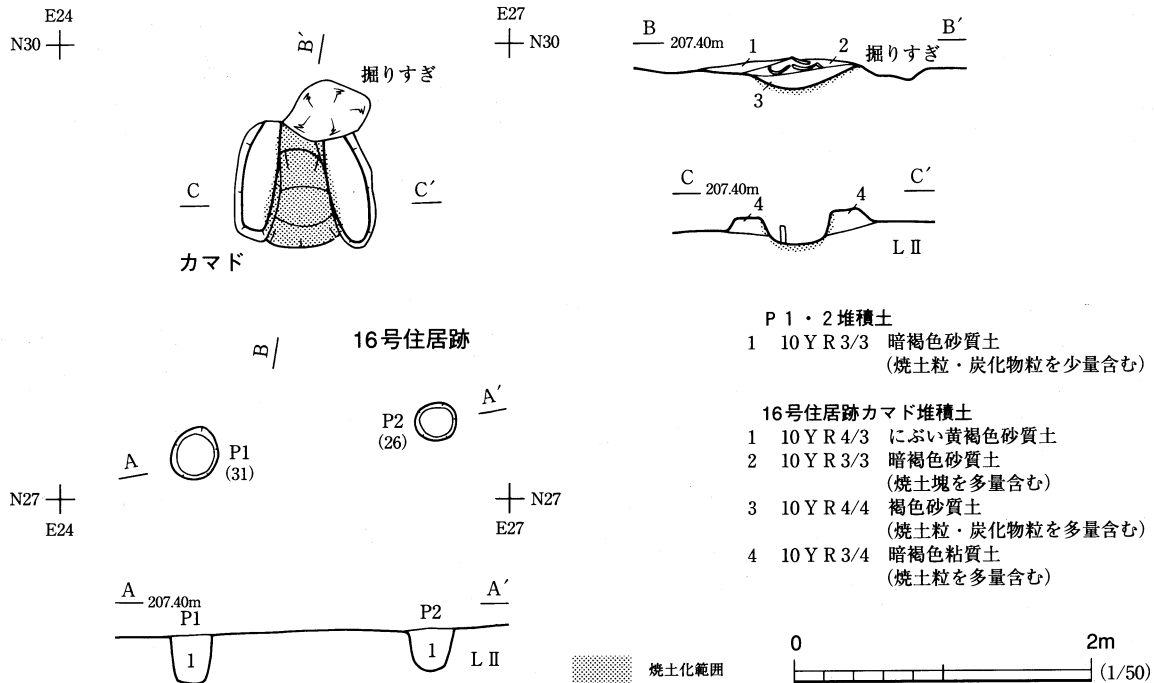


図52 16号住居跡

認められる。図53-5, 図54-1・3は大型の甕である。図53-5, 図54-3は胴部中央から下半にかけて膨らみを持ち、口縁部が「く」字状に屈曲する器形となる。図54-1は底部付近に膨らみを持ち、口縁部が緩やかに外反する器形である。図53-6, 図54-2は甑である。図53-6は、底部付近が丸みを帯びてすぼまり、胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる器形となる。図54-2は、胴部上半に膨らみを持ち、口縁部が大きく外反する器形となる。図54-4は土製支脚で、外面にヘラケズリ、指オサエが認められる。

まとめ

本住居跡は、遺存状況が悪く、検出できたのはカマドと柱穴と考えられるピットだけである。本

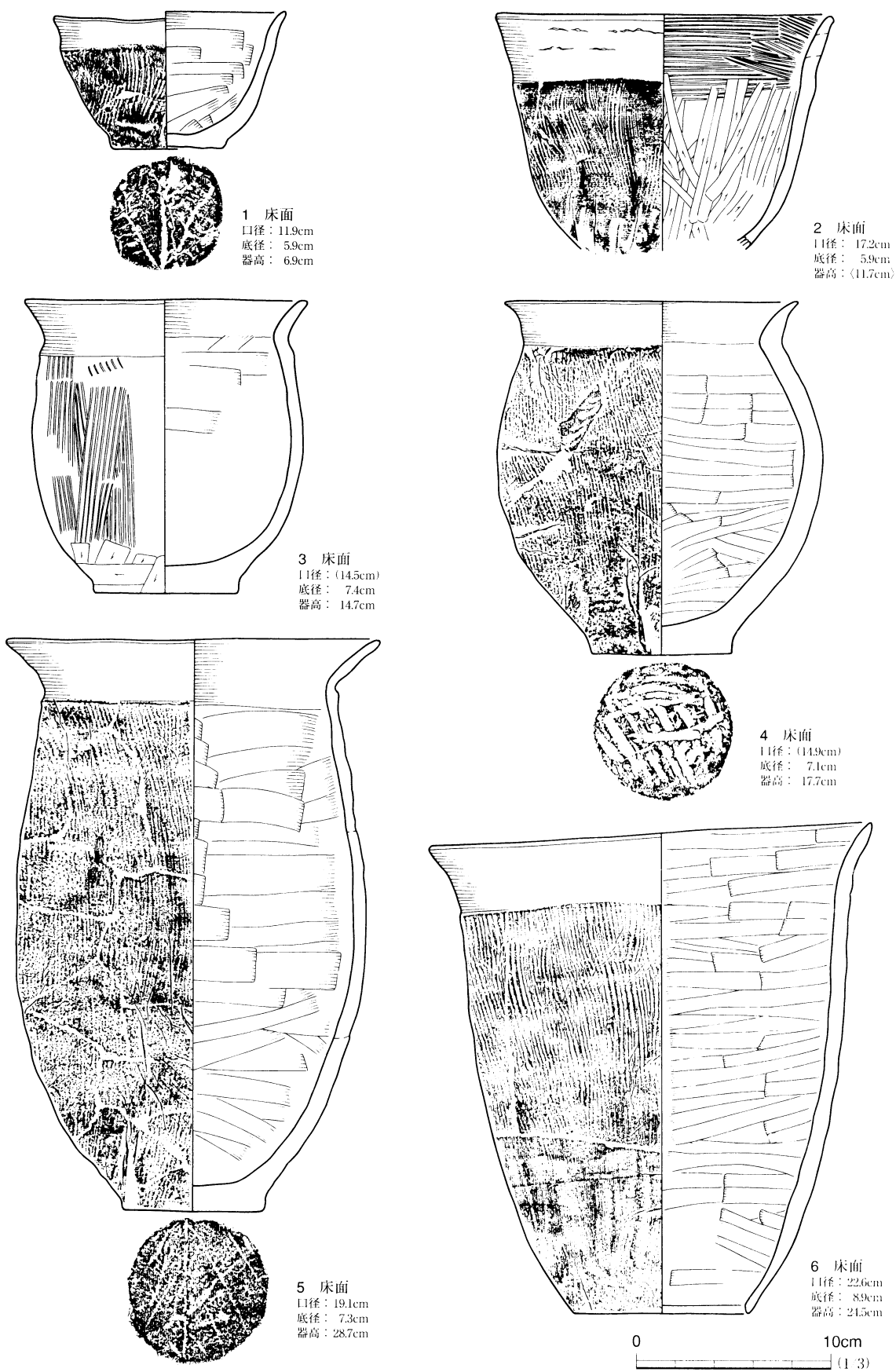


图53 16号住居跡出土遺物（1）

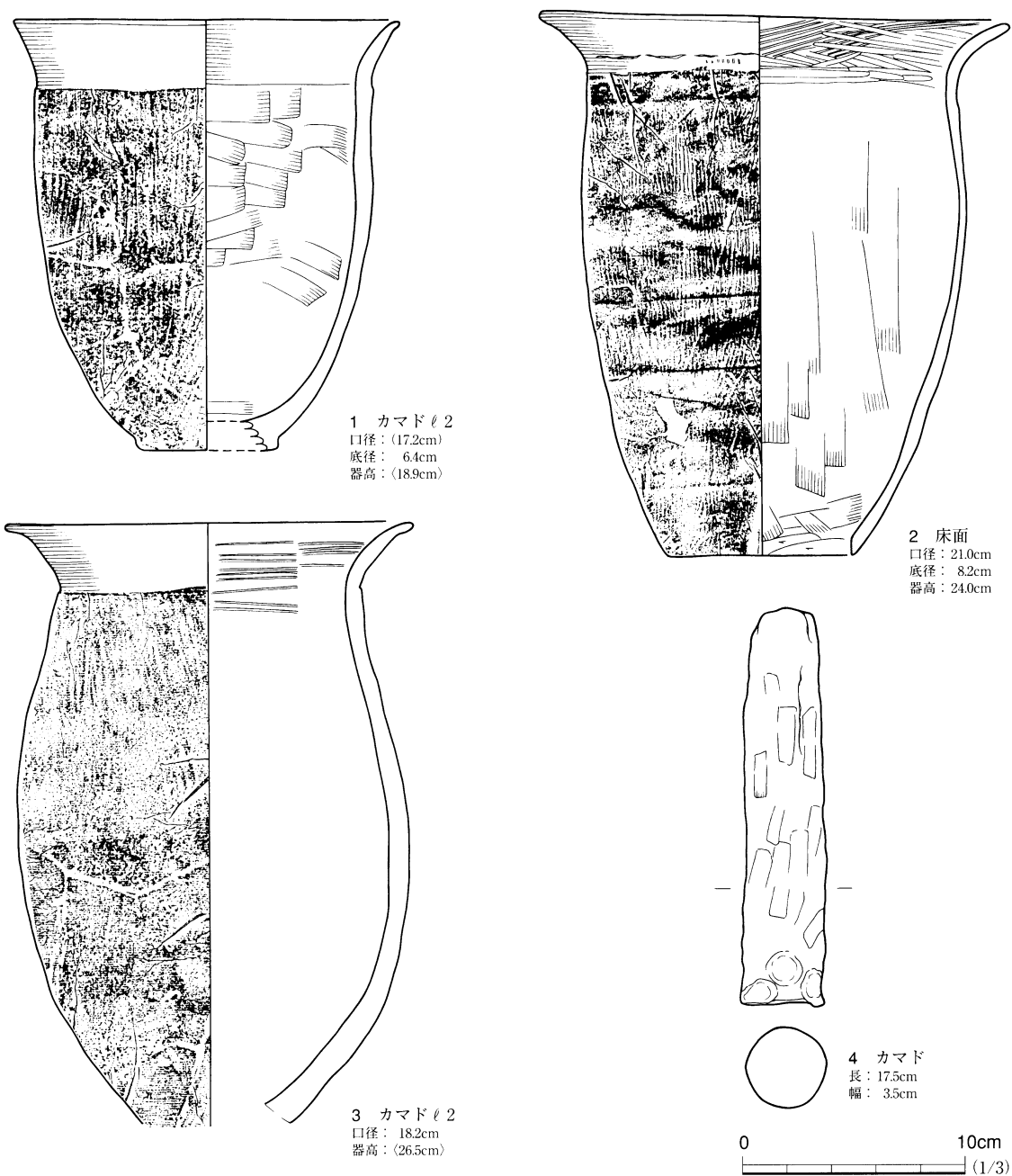


図54 16号住居跡出土遺物 (2)

住居跡の所属時期は、カマドの中や床面から出土した遺物の年代観などから、6世紀後半～7世紀後半と考えている。(大河原)

17号住居跡 S I 17

遺 構 (図55・56, 写真37・38)

本住居跡は、調査区北部の東側T11-29グリッドに位置する。地形的には、阿武隈川右岸沿いに形成された自然堤防の狭い平坦部に立地している。遺構はL II上面で検出したが、遺存状況は悪く、検出できたのはカマドと床面およびピットだけである。他の遺構との重複関係は認められなかつ

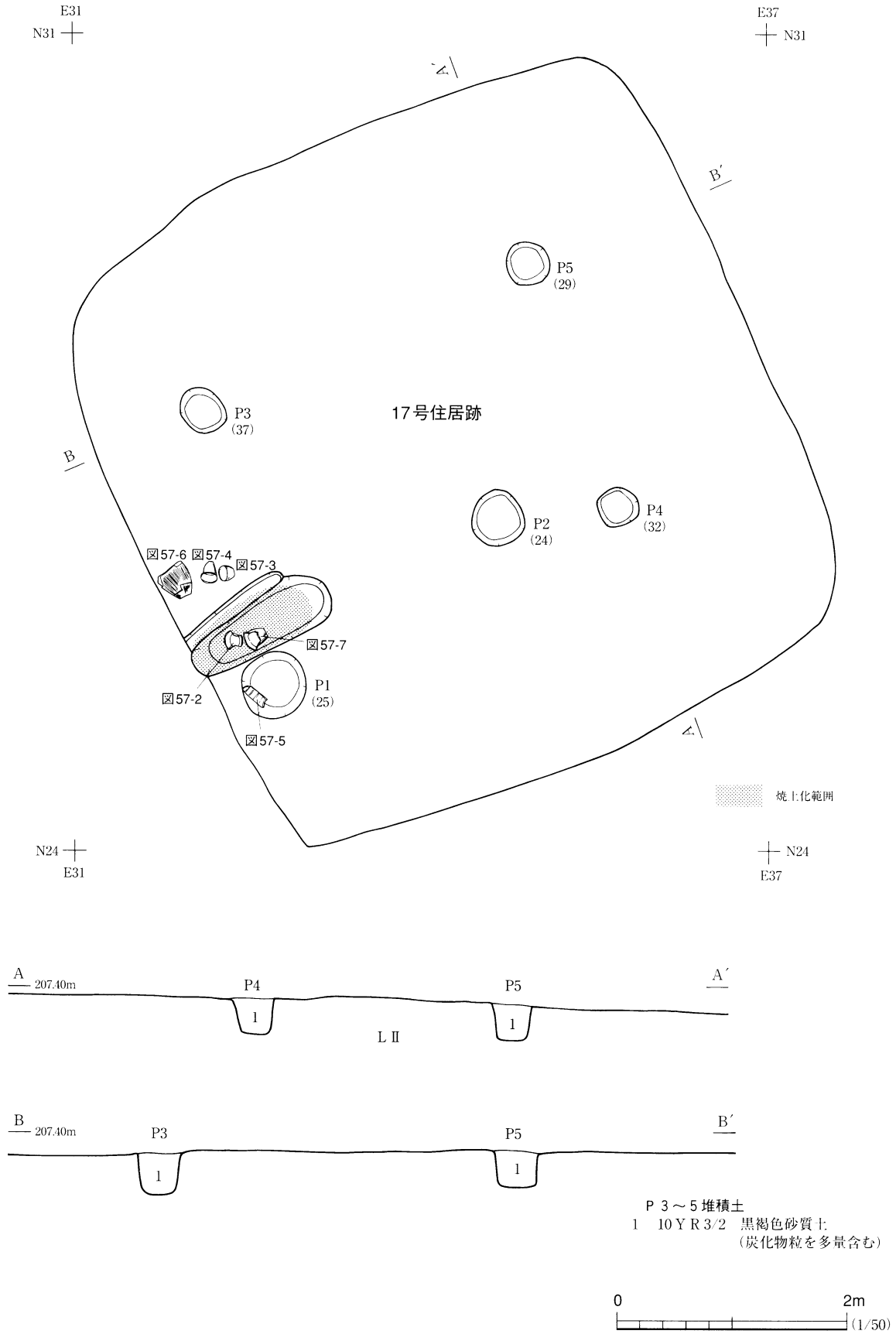


図55 17号住居跡

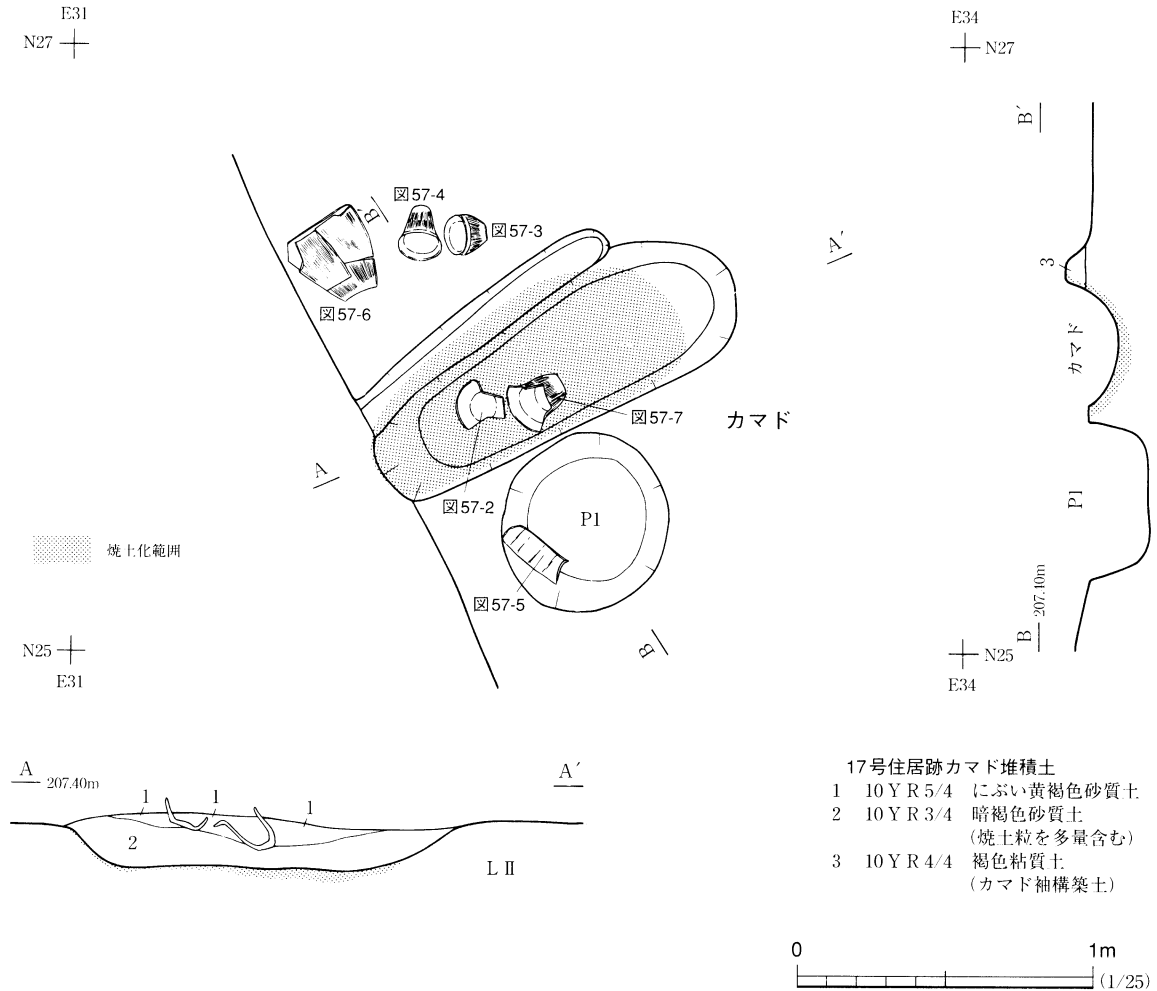


図56 17号住居跡カマド

たが、住居跡西側に16号住居跡、東側に19号住居跡が位置している。

本住居跡の平面形は、遺存する床面から、方形を呈していたと考えられる。遺存する床面の規模は、南北が約5.7m、東西約5.6mを測る。床面はほぼ平坦に造られていたが、細かな凹凸が認められた。また、踏み締めや貼床などは認められなかった。

住居内施設として、カマドとピット5個を検出した。カマドは住居跡の西壁中央やや南寄りで検出した。遺存状況は悪く、北側の袖と燃焼部のみを検出した。袖は褐色土を用いて構築され、東側に1m程張り出していた。袖の最大幅は15cmを測る。燃焼部は最大長1.35m、最大幅は約50cmを測る。燃焼部底面は、検出面から約10cmほど掘りくぼめられ、5cmほど焼土化していた。

カマド内堆積土は2層に区分した。①は流入土、②は焼土粒を多量に含むことから天井崩落土に起因するものと考えている。また、②の上面で杯(図57-2)と甕(図57-7)が出土している。

ピットは、5個検出した。P1はカマドに隣接して検出された。平面形は、直径約60cmの円形を呈している。深さは、25cmを測る。堆積土は1層で、焼土粒や炭化物を含む黒褐色砂質土が堆積していた。また西壁から底面にかけて円筒形土製品(図57-5)が出土している。P1は規模や、位

置などから貯蔵穴と考えられる。また、P 1 とカマド南側の袖との関係を考えると P 1 の北側は袖下に位置する。このことから、P 1 は機能時には南側のみが開口していたと思われる。P 2 は、住居跡床面のほぼ中央に位置する。平面形は、直径45cmのゆがんだ円形を呈している。堆積土は、1層で黒褐色砂質土が堆積していた。また、床面の北側西寄りではP 3、東寄りではP 5、床面南側東寄りではP 4を検出した。平面形は直径36～40cmのゆがんだ円形を呈している。ピットの深さは、29～37cmを測る。堆積土は、いずれも黒褐色砂質土が流入していた。これらピットについては、P 3 と P 5、P 4 と P 5 でそれぞれ位置的に対応関係にあり、堆積土や規模なども類似することから、上屋を支えた支柱穴と考えられる。

遺物 (図57, 写真103・104)

遺物は、主にカマド内とカマド北側の床面から出土した。この内、図57-2の杯、図57-7の甕はカマド内 2 上面からほぼ完形で出土している。これらの遺物はカマドの堆積土の観察や出土状況から判断して、カマド崩壊後に置かれたものと考えている。図57-3の甕、図57-4・6の甗は、カマド脇の床面から出土したものである。また、燃焼部中央の底面付近では、土製の支脚が倒れた状態で出土した。出土遺物の内訳は、土師器片228点、土製支脚1点である。出土した土師器はいずれも非ロクロ整形である。図57-1・2は杯である。いずれも底部をケズリ調整で丸底に仕上げているが、1は体部下半に、2は体部上半にケズリ調整による段が形成されている。また、内面には黒色処理とヘラミガキが施されている。

図57-5は、円筒形土製品である。底部付近から口縁部まではほぼ直線的に立ち上がる。外面にヘラナデとヘラケズリ、内面にはヘラナデが施されているが、輪積み痕が残る。また、底面には木葉痕が認められる。

図57-3は小型の甕で、胴部上半に膨らみを持ち、口縁部が内傾する器形となる。図57-7は、中型の甕である。胴部上半にかけて膨らみを持ち、口縁部が緩やかに外反する。3・7いずれも甕の内外面にはヘラナデが施され、底部はやや上げ底になる。

図57-4・6は甗である。大きさに違いがあるものの、底部付近から口縁部にかけて緩やかに外反しながら、直線的に立ち上がる器形となる。いずれも外面には細かい条線のハケメが、内面には、ヘラナデが施されている。また4の外面にはヘラナデ、6の内面の底部周縁にはヘラケズリが認められる。

図57-8は、断面形が円形を呈する土製支脚である。外面にヘラケズリ、指オサエが認められる。

まとめ

本住居跡は、遺存状況が悪く、検出できたのは住居跡床面だけであった。平面形は遺存状況から、方形を呈していたと考えられる。また、住居跡の内部施設としてカマドと柱穴、貯蔵穴を検出した。遺物は、カマド内とカマド周辺から比較的まとまって出土した。特にカマド内から出土した杯と甕については、カマド廃棄後の儀礼行為に伴う遺物としてとらえておきたい。

本住居跡の所属時期は、カマド内や床面から出土した遺物などから、6世紀後半～7世紀後半と

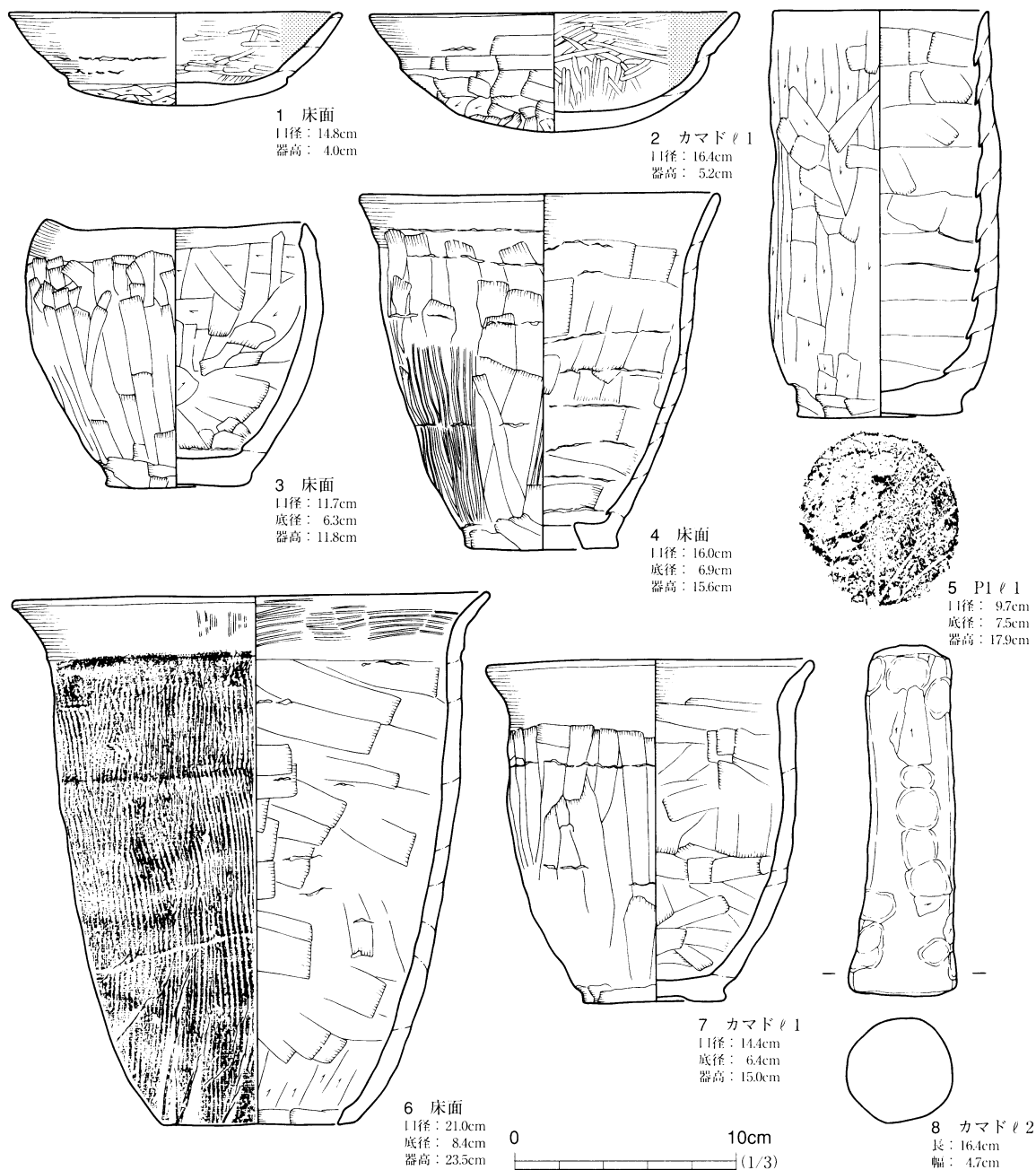


図57 17号住居跡出土遺物

考えている。

(大河原)

18号住居跡 S I 18

遺 構 (図58・59, 写真39・40)

本住居跡は調査区南西部のR13・S13グリッドに位置し、調査区全体の中で最も南端に立地する遺構である。標高207.4m前後のほぼ平坦な地形上に構築されている。重複関係にある遺構はないが、周囲には、北方7.2mに2号建物跡、北東6mに8号住居跡が隣接している。

検出面はLⅢ上面である。遺構内堆積土は6層に区分した。ℓ1はにぶい黄褐色砂質土、ℓ2が

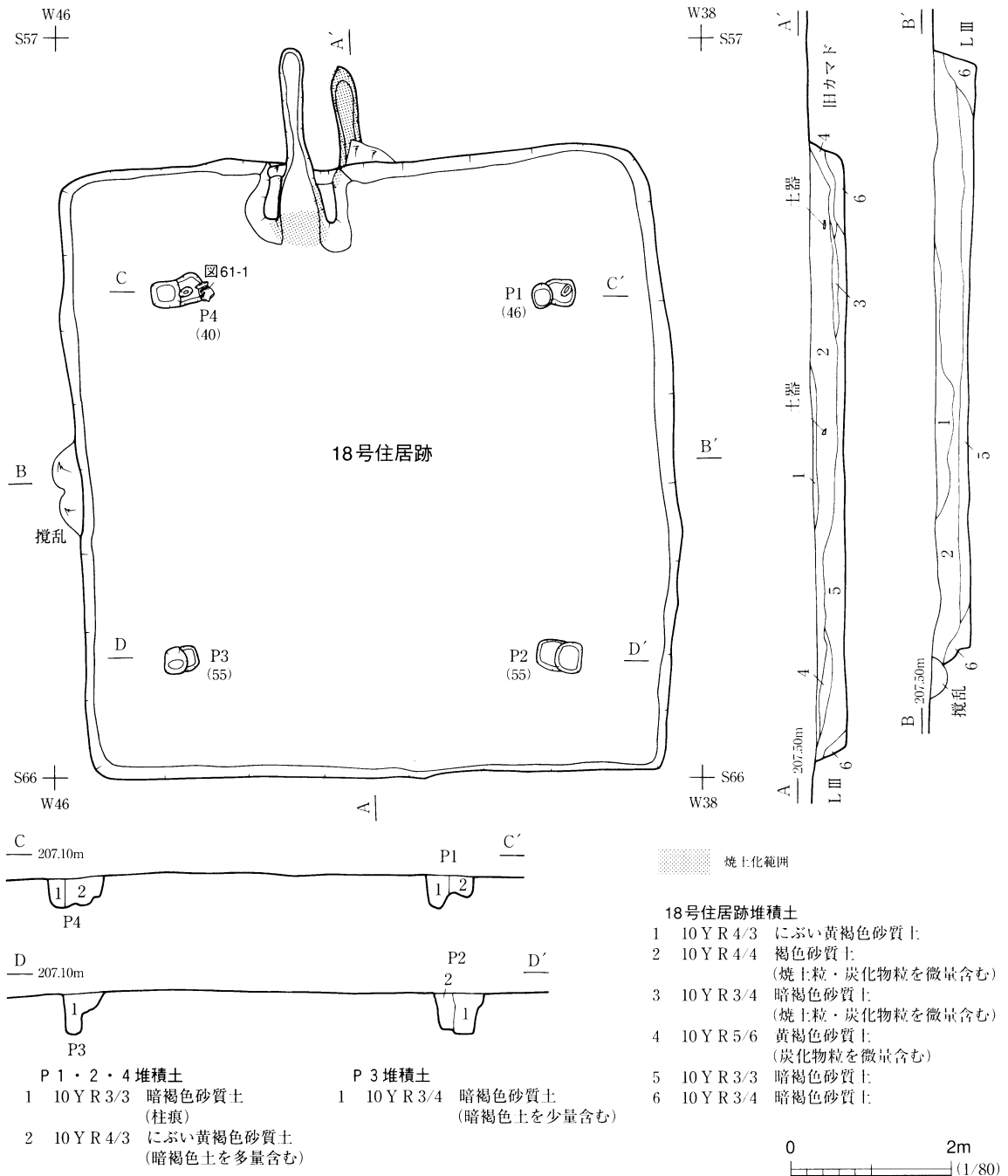


図58 18号住居跡

褐色砂質土， ℓ 5が暗褐色砂質土で，レンズ状の堆積を示す。 ℓ 3は暗褐色砂質土， ℓ 4は黄褐色砂質土で，どちらも炭化物粒・焼土粒を微量に含み，壁側からの流入状態を示している。三角堆積を示す ℓ 6は周壁からの崩落土であろう。堆積状態からいずれも自然堆積と判断した。

住居跡の平面形・規模は，1辺が7.8m前後のほぼ正方形を呈し，カマドを通る軸線はN10°Wとほぼ真北を示している。周壁は床面から60~70°の角度で立ち上がり，周壁の高さは35~50cmを測る。床面はほぼ水平に整地されており，中央付近を中心に踏み締まりが認められた。壁柱や壁溝は検出されなかった。

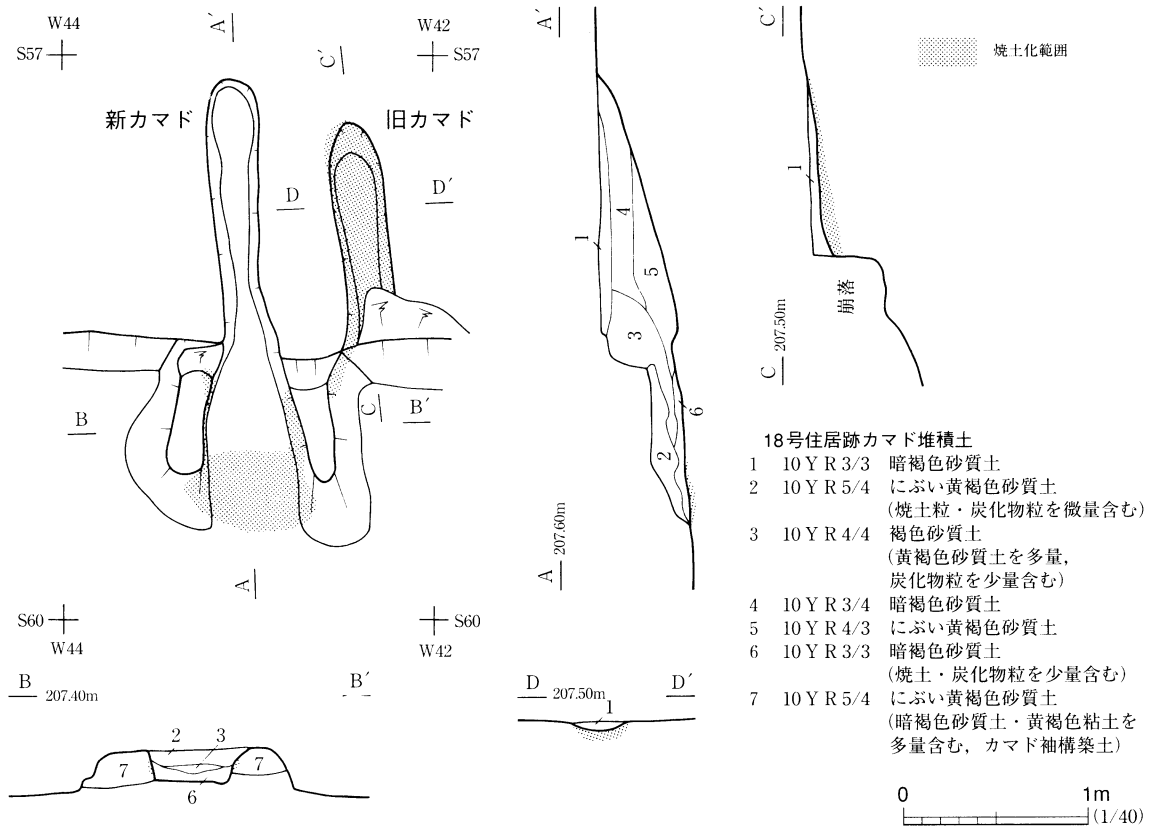


図59 18号住居跡カマド

カマドは、北壁のほぼ中央部より新旧2基検出された。新カマドは、北壁中央部よりやや西側に位置し、形態は住居プラン内に燃焼部を持つ両袖タイプのものである。両袖によって確保された燃焼部の規模は、下端ラインで焚口幅約50cm、奥行き約90cmを測り、袖の高さは20cm程度遺存している。燃焼部底面から緩やかに上る煙道は地下式で、20~25cmの幅で住居跡北壁より約1.4m外方へ向かって伸びている。燃焼部の底面から側壁にかけて2~5cmの酸化面が確認された。カマドの堆積土は7層に区分した。l 1・2は天井崩落後の流入土、l 3が天井崩落土、l 4~6が天井崩落前の流入土である。l 7はにぶい黄褐色土を基調とし、LⅢの地山に近似する暗褐色砂質土と黄褐色粘土を多量に含む袖構築土である。旧カマドは、新カマドより約40cm東側に煙道だけが遺存している。形態は地下式と考えられ、25~30cmの幅で北壁より約1.2m外方に向かって伸びている。底面から側壁にかけて、厚さ10cm程度の酸化範囲が確認された。

床面上ではピット等は確認できなかったが、床面から10cm程度掘り下げたレベルで4個のピットを検出した。住居プランの対角線上に、約4.5mの等間隔で配列されており、主柱穴と考えられる。平面形は長方形基調を呈し、規模は長軸45~60cm、短軸30~35cm、床面からの深さ40~55cmを測る。P 1・2・4には柱痕が認められ、太さ20~25cmの材を使用していたと考えられる。掘形の堆積土は地山の黒褐色土を多量に含む黄褐色砂質土である。

遺物 (図60・61, 写真104)

本遺構から土師器1,630点, 須恵器9点, 縄文土器3点, 陶磁器2点が出土している。図60-1

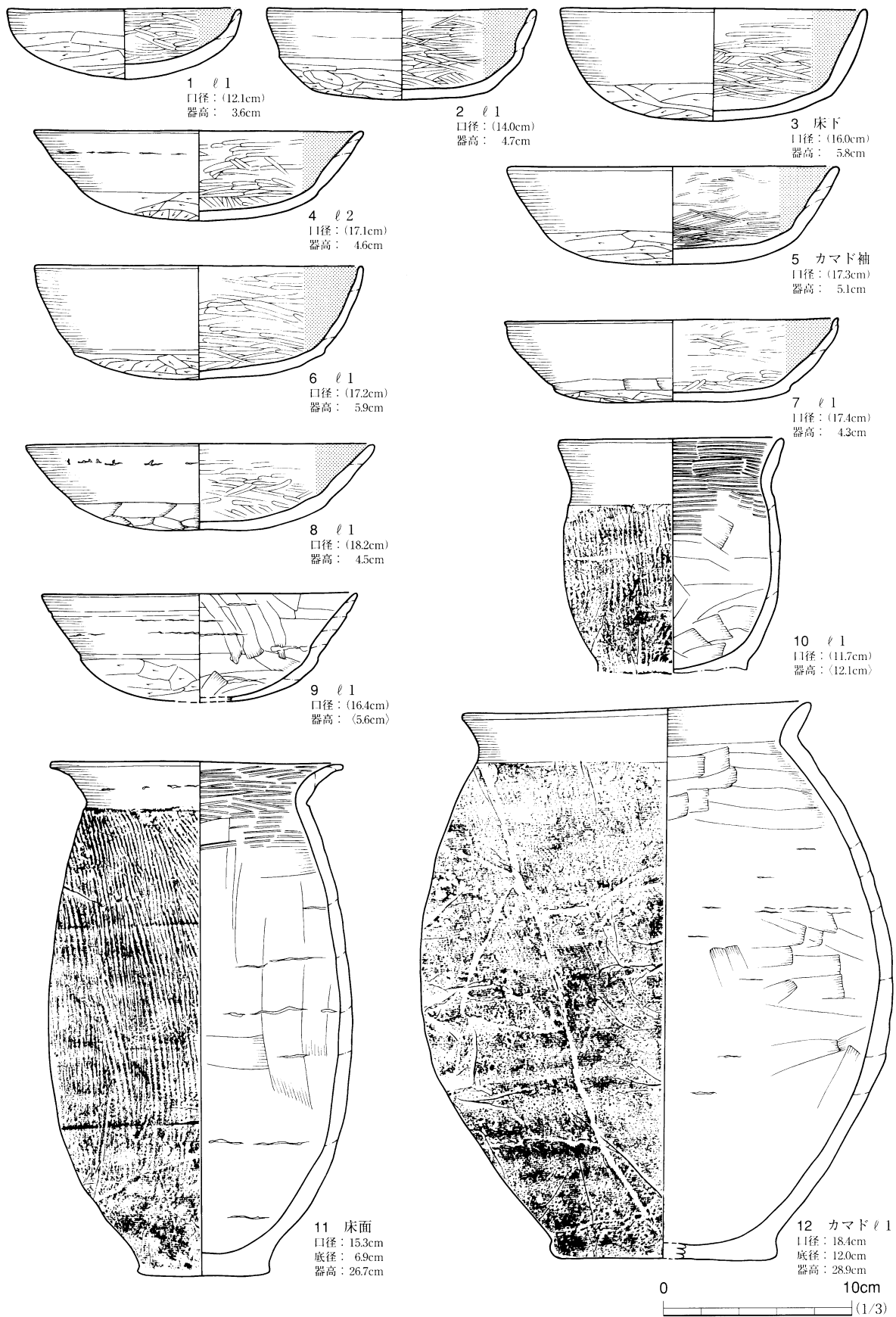
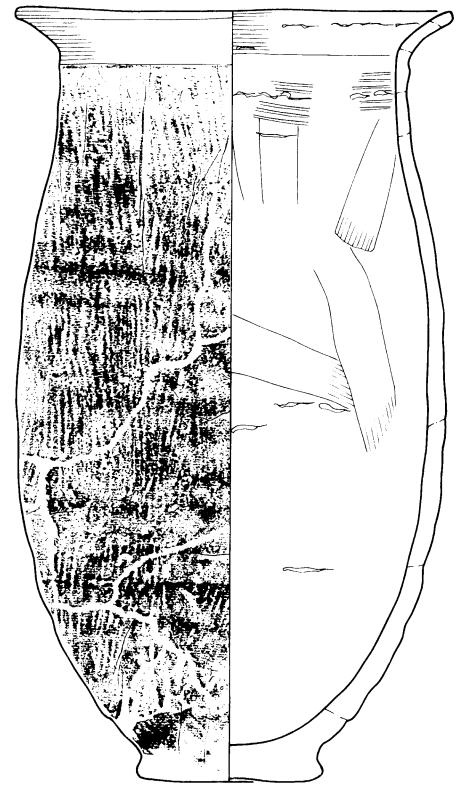


図60 18号住居跡出土遺物 (1)

～9は土師器杯で、9を除いて内面にはヘラミガキ後に黒色処理が施されている。1は丸底から緩やかに立ち上がり、口縁部が短くわずかに内傾する。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施されている。2は丸底に近似する平底から内湾して立ち上がり、口縁部と体部の境に段を持ち、口縁部が内湾する。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施され、口縁部には粘土紐の積み上げ痕が観察される。3は丸底から内湾ぎみに立ち上がり、口縁部と体部の境にごく緩やかな段を持ち、口縁部で緩やかに内傾する。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施されている。4は丸底で、口縁部と体部の境に緩い段を持ち、口縁部で外傾する。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施されており、口縁部には粘土紐の積み上げ痕が観察される。5は丸底気味の平底から内湾気味に立ち上がり、口縁部で外傾する。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施されている。6は丸底から内湾ぎみに立ち上がり、口縁部下端と体部の境に沈線が施され、口縁部は緩やかに内湾する。外面の調整は、口縁部にヨコナデとヘラケズリ、体部にヘラケズリが施されている。7は平底で体部下半に明瞭な段を持ち、口縁部上半で直立気味に立ち上がる。外面の調整は、口縁部にヨコナデ後にヘラナデ、底部にヘラケズリが施されている。8は丸底で、口縁部と体部の境にわずかな段を持ち、口縁部で緩やかに外傾する。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、体部にヘラナデが施されており、口縁部上半に粘土紐の積み上げ痕が観察される。9は丸底から内湾して立ち上がり、口縁部と体部の境に緩やかな段を持ち、口縁部で内湾ぎみに外傾する。器面調整は、口縁部外面にヨコナデ、体部外面にヘラケズリ、内面にヘラナデが施されており、内外面ともに粘土紐の積み上げ痕が観察される。

図60-10～12, 図61-1は土師器の甕である。10は口縁部に最大径を有する中型の甕で、器形は平底から緩やかに内湾して頸部にいたり、口縁部が緩く外反する。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、胴部にハケメが施されている。内面は、口縁部から胴部上半にハケメ、胴部にヘラナデが施されている。図60-11, 図61-1は、胴部中央に最大径を有する大型の長胴甕である。11は平底から緩やかに内湾して頸部に至り、頸部に沈線による段を有し、口縁部が強く外反する。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、胴部にハケメが施されている。内面は、口縁



1 ㊦ 1
口径：(17.3cm)
底径：7.3cm
器高：30.4cm



2 ㊦ 1
口径：(10.8cm)
器高：(2.8cm)

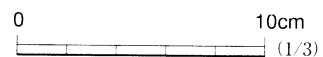


図61 18号住居跡出土遺物(2)

部から胴部上半にハケメ、胴部にヘラナデが施されており、粘土紐の積み上げ痕が数段観察される。図61-1は、図60-11に比して胴部の張りが弱く、胴部上半から直立気味に立ち上がって頸部に至る。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、胴部にハケメ、内面は、口縁部にヨコナデ、胴部上半にハケメ、胴部中央にヘラナデが施されている。口縁部と胴部の内面には粘土紐の積み上げ痕、底部には木葉痕が観察される。図60-12は球胴状の胴部を呈する大型の甕で、カマドの堆積土から出土した。平底から内湾して頸部に至り、口縁部が「く」の字に外反する。外面の調整は、口縁部にヨコナデとヘラナデ、胴部にハケメが施されている。内面は、口縁部にヨコナデとヘラナデ、胴部にヘラナデが施され、粘土紐の積み上げ痕が観察される。

図61-2は須恵器杯身の破片である。立ち上がりが低く、いったん内傾して立ち上がる器形を呈する。器面調整は、内外面ともにロクロナデが施され、ケズリ等は確認できなかった。

まとめ

本遺構は、1辺約8mを測る大型の竪穴住居跡である。カマド新旧2基と支柱穴を有し、周壁の高さも最大で50cmと深く、遺存状態が良好である。出土した遺物の特徴から、所属時期は7世紀後半から8世紀前半にかけてと考えている。 (成田)

19号住居跡 S I 19

遺構 (図62, 写真41・42)

本住居跡は、調査区北部の東側U11-1・2・21・22・31・32グリッドに位置する。地形的には、阿武隈川右岸沿いに形成された自然堤防の狭い平坦部上に立地している。遺構はL II上面で検出したが、北側の壁と西側の壁の一部は遺存していない。他の遺構との重複関係は認められなかったが、住居跡西側に17号住居跡、1号焼土遺構、東側には10号土坑が位置している。

遺構内堆積土は3層に区分した。壁際から流入し、レンズ状に堆積する①1・2は、自然堆積土と判断した。床面を覆う③は、焼土粒、炭化物粒を含むものの、自然堆積土と考えている。

本住居跡の平面形は遺存状況から、隅丸方形を呈していたと考えられる。規模は、遺存する南壁で約4.5m、東壁で約4.7mを測る。遺存する壁は、東側の壁でやや急に立ち上がるものの、それ以外は比較的緩やかに立ち上がっている。床面からの高さは、残りの良い南側の壁で20cmを測る。床面はほぼ平坦に造られていたが、北側の床面で細かな凹凸が認められた。また、踏み締まりや貼床などは認められなかった。

住居内施設として、カマドとピット1個を検出した。カマドは住居跡の西壁中央やや南寄りに位置している。カマドの袖は暗褐色土を用い構築されていた。また、両袖先端部には半割りにした甕を補強材として用いていた。この両袖の補強材として用いられた甕(図65-2)は接合関係にあった。復元を試みた結果、口縁部が欠損していることから、割れた甕を補強材として転用したものと考えられる。カマドの袖は東側に110cm程張り出していた。袖の最大幅は北側で32cm、南側で30cmを測る。両袖に挟まれた燃焼部は最大長100cm、最大幅は55cmを測る。燃焼部底面は、検出面から

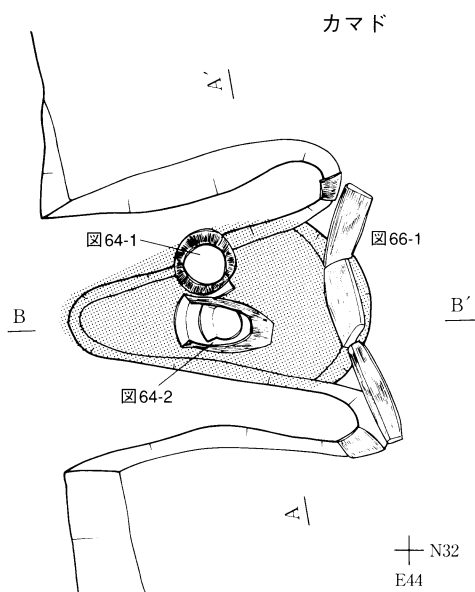
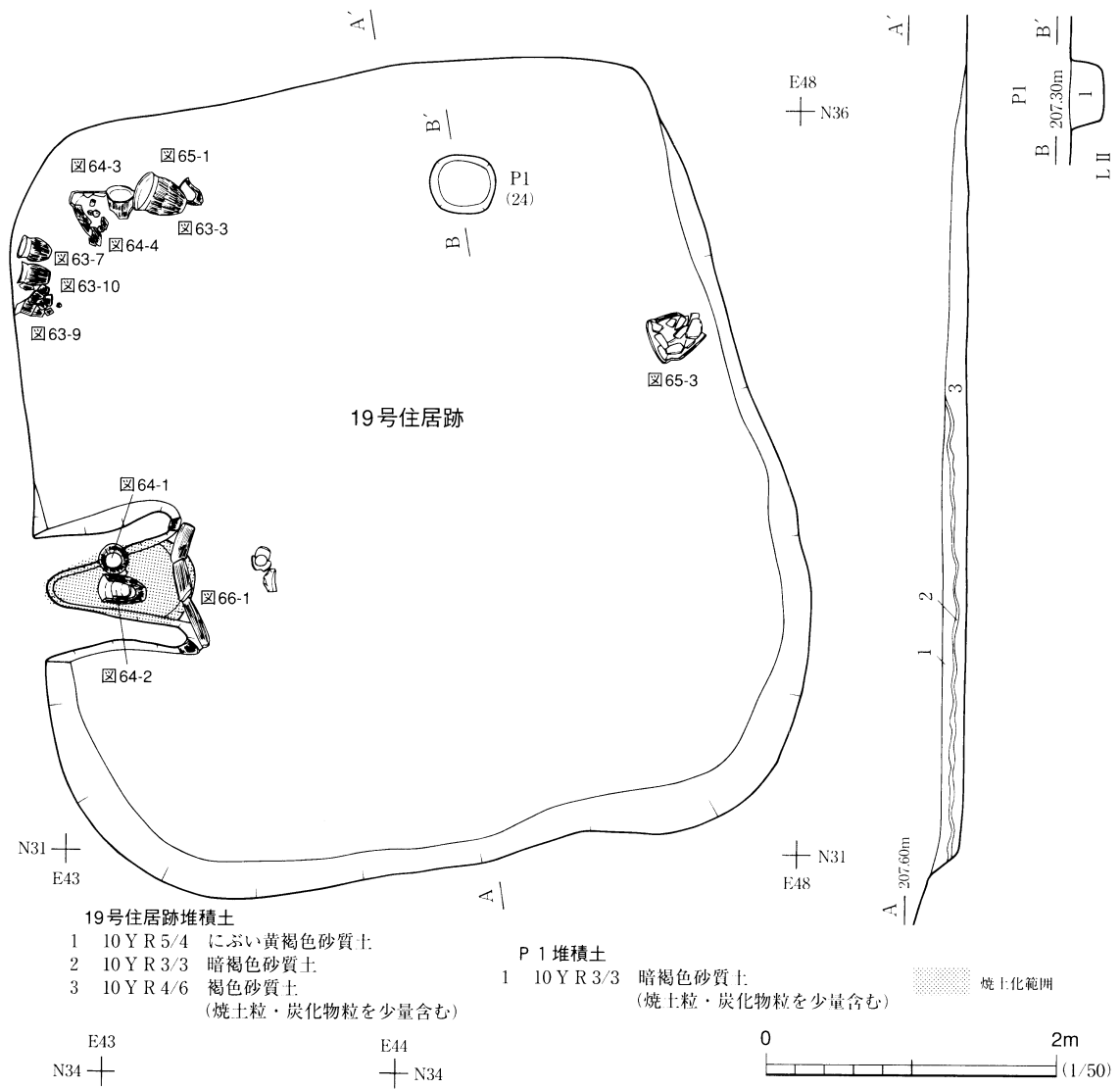


図62 19号住居跡

約5cm掘りくぼめられ、3cm程焼土化していた。

カマド内堆積土は3層に区分した。カマド上方から流入する $\ell 1$ は、色調や土質などから住居内堆積土 $\ell 3$ に相当するものと考えている。 $\ell 3$ は、焼土塊や炭化物を多量に含むことから、天井崩落土と判断した。また、燃焼部を閉ざすように $\ell 3$ 上面で板状土製品(図66-1)が出土した。堆積土の観察や出土状況から、この土製品は、カマドの天井を構築するための補強材と判断した。

また、 $\ell 2$ については、基本的にはカマド崩壊後の堆積土と判断している。 $\ell 2$ 内からは、甕が据え置かれた状態で3個出土(図63-4, 図64-1・2)している。土層観察の結果、甕に伴う掘形などは確認されず、甕内部にも同様の土が堆積していた。このことから、 $\ell 2$ については天井崩壊後の儀礼行為に伴う埋土の可能性も考えておきたい。

床面北側で、ピット1個を検出した。堆積土は、1層で暗褐色砂質土が堆積していた。ピットの平面形は楕円形を呈し、規模は長径48cm, 短径が40cm, 深さは24cmを測る。ピットは、検出状況や位置などから住居跡に伴う施設と判断したが、性格については不明である。

遺物(図63~66, 写真104~106)

遺物は、カマド内と北西隅の床面からまとまって出土した。図63-4の小甕, 図64-1・2の大甕は、カマド $\ell 2$ 内からほぼ完形で出土している。この内、図63-4の小甕は、図64-2の大甕の内部から入れ子状態で出土している。これらの遺物はカマドの堆積土の観察や出土状況から判断して、カマド崩壊後に据え置かれたと推察される。図63-3・7~10, 図64-3・4の甕, 図65-1の甕は、北西隅の床面から出土したものである。図65-3の甕は、東壁中央の床面から出土している。また、図63-5の小型甕は、カマド正面の床面からの出土である。

出土遺物の内訳は、縄文土器片3点, 土師器片1,725点, 須恵器片1点, 板状土製品1点である。出土した土師器はいずれも非ロクロ整形である。図63-1・2は杯である。底部が丸底で、口縁部が直線的に立ち上がる器形となる。内面には黒色処理とヘラミガキが施されている。また、1は体部下半に、2は体部中央にケズリ調整による段が形成されている。2の底部には、「十」字の線刻が認められる。

図63-3~5は、小型の甕である。口縁部内外面には、ヨコナデとハケメ, 体部外面に縦方向のハケメと横方向のナデとヘラケズリ, 体部内面にヨコナデが施されている。また、3の底面には木葉痕が、4の口縁部内面には黒班が巡っている。この内4と5は、4がカマド内, 5は4と対じするようにカマド正面に正位に置かれていたことから、この小型甕については実用品ではなくカマド儀礼に伴う土器と思われる。

図63-6~10は中型の甕である。全体の器形が分かるものは、7・9・10である。7は膨らんだ胴部に直線的立ち上がる口縁部, 9は膨らんだ胴部に外反する口縁部, 10は直線的に立ち上がる胴部と外反する口縁部となる。器面の調整は、口縁部内外面にはナデ, 体部外面にはハケ状工具による縦方向のハケメ, 体部内面にヨコナデとハケメが施されている。また、底部は上底で6・10の底面には木葉痕が認められる。

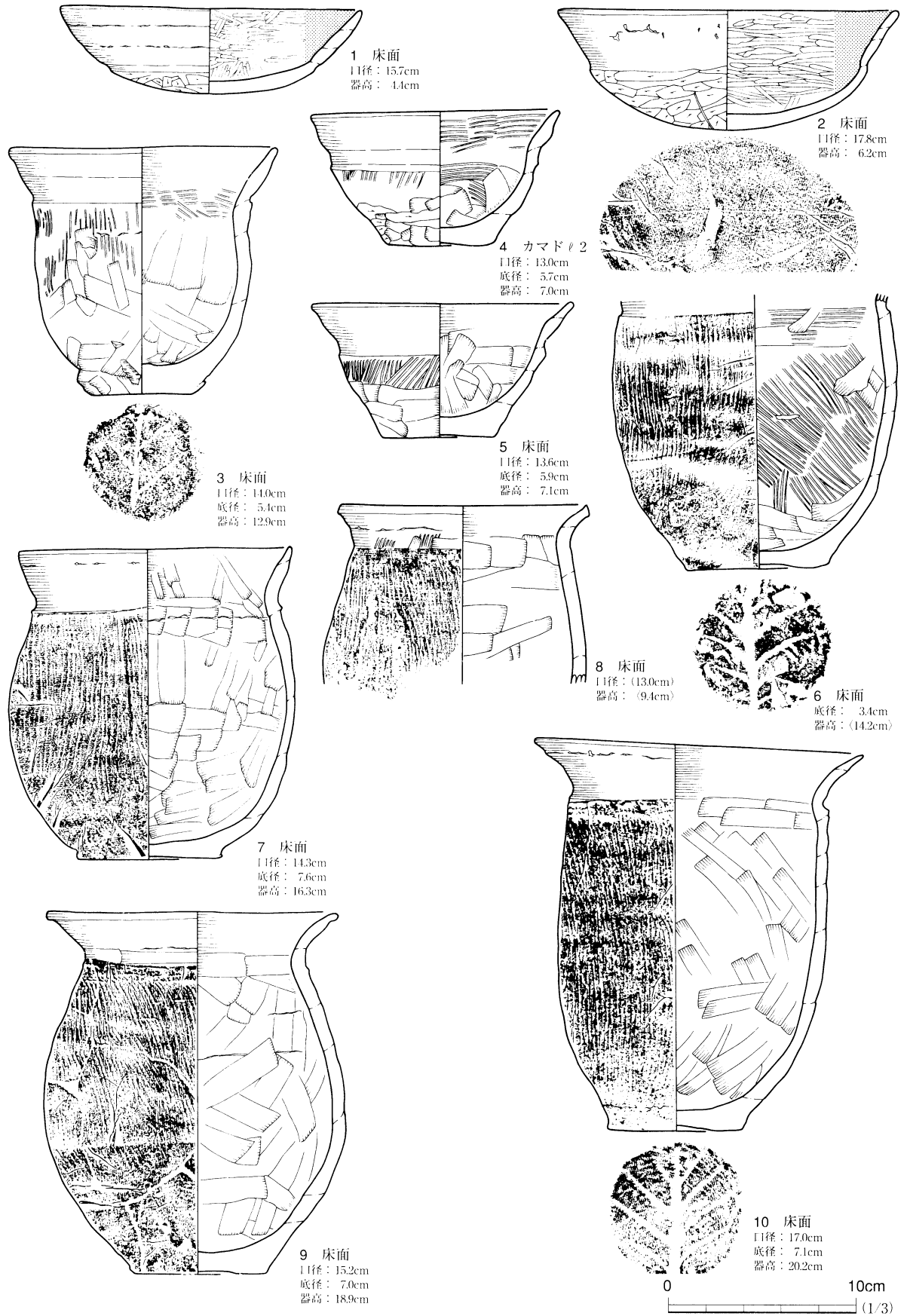
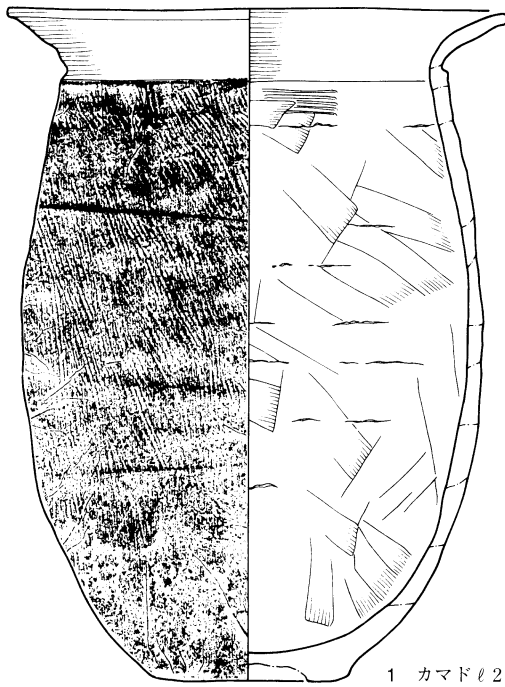
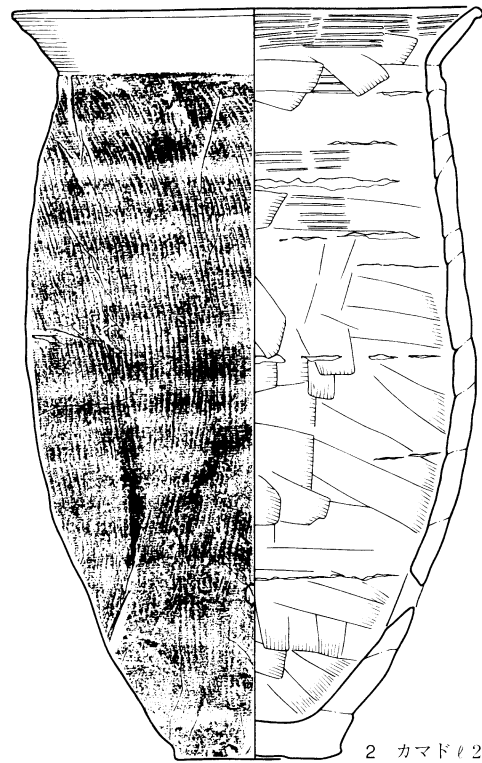


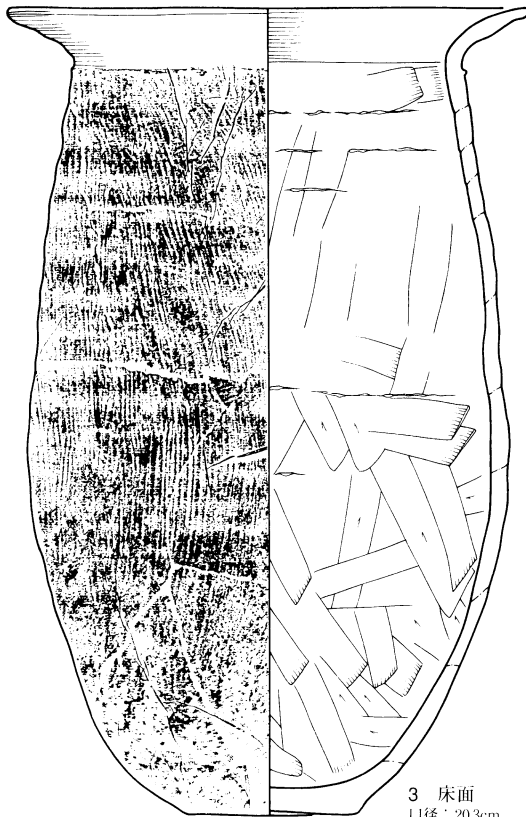
図63 19号住居跡出土遺物（1）



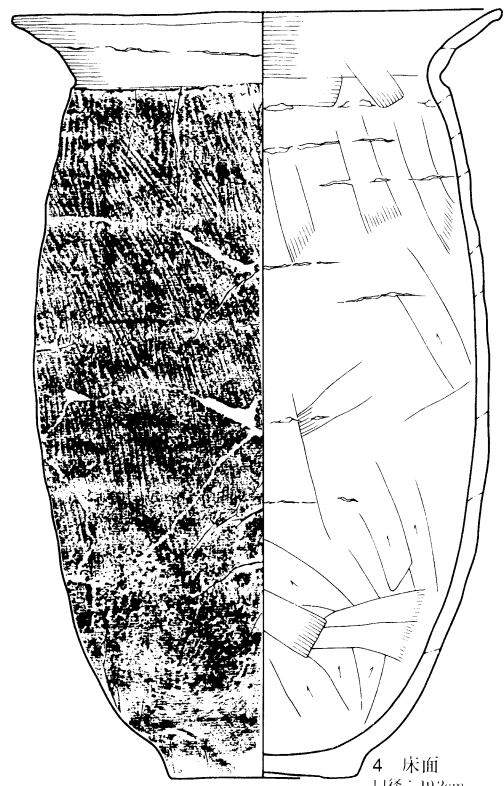
1 カマド#2
口径：19.4cm
底径：7.6cm
器高：26.0cm



2 カマド#2
口径：18.1cm
底径：6.5cm
器高：29.2cm



3 床面
口径：20.3cm
底径：6.6cm
器高：31.2cm



4 床面
口径：19.2cm
底径：7.3cm
器高：29.6cm

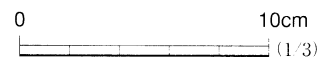


図64 19号住居跡出土遺物(2)

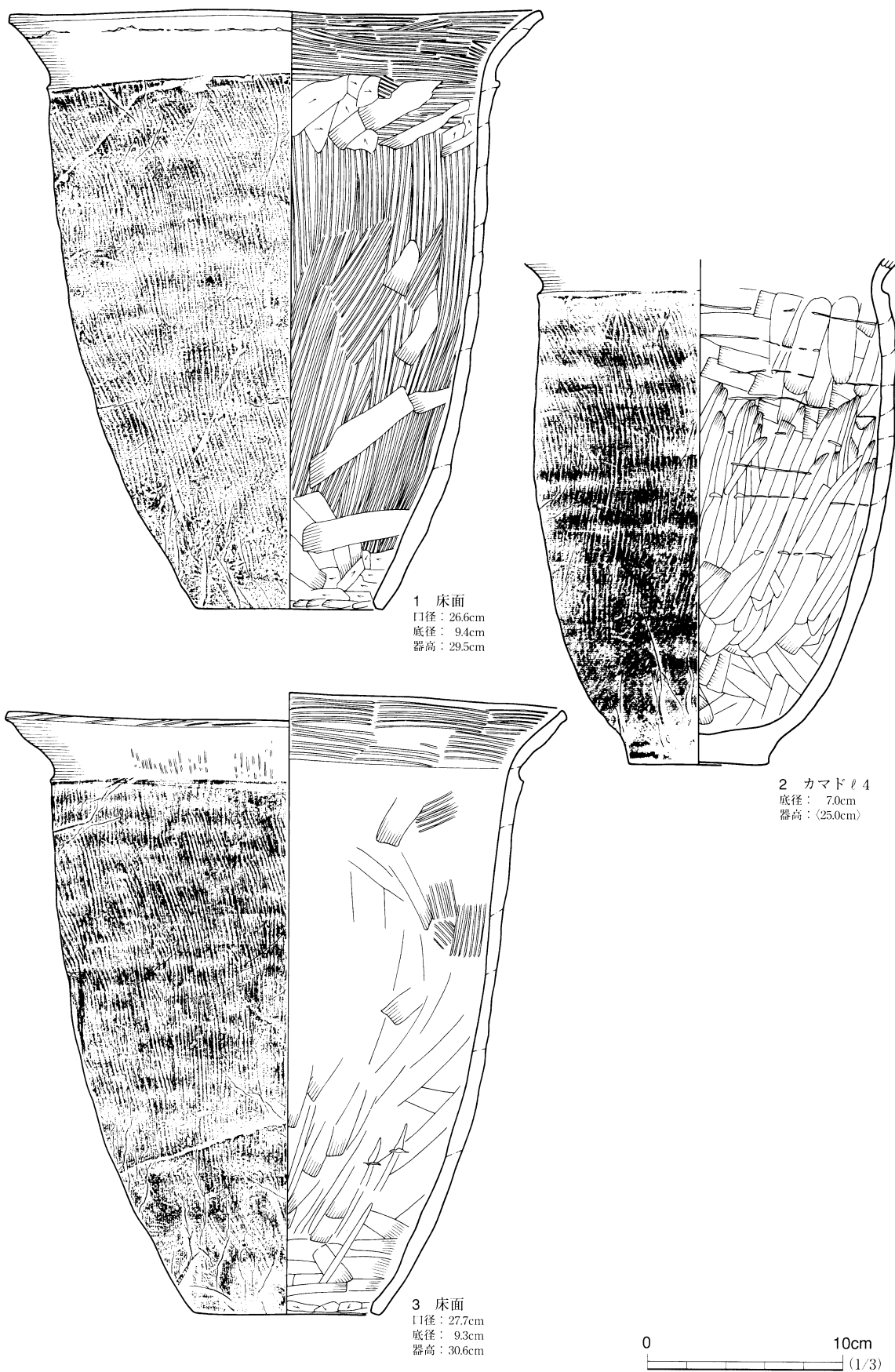


図65 19号住居跡出土遺物 (3)



図66 19号住居跡出土遺物（4）

第2章 遺構と遺物

図64, 図65-2は, 大型の甕である。器形的には, 図64-1・3・4の胴部中央から下半にかけて膨らみを持ち口縁部が外反するものと, 図64-2, 図65-2の胴部上半に膨らみを持ち口縁部が外反するものが認められる。器面の調整は, 口縁部内外面にはナデとハケメ, 体部外面にはハケ状工具による縦方向の細かいハケメ, 体部内面にヨコナデが施されるものが多い。底部は, いずれも上底となる。図64-2の胴部下半には, 内部から打ち欠いて小孔を設けている。また, 出土状況などから, 図64-1・2はカマド儀礼に伴う土器, 図65-2はカマド袖の構築材と考えられる。

図65-1・3は甕である。底部から口縁部に向け緩やかに外反しながら, 直線的に立ち上がる器形である。口縁部に緩やかな段を持つ。いずれも, 内外面には細かい条線のハケメが, 内面にはヘラナデが施され, 底部周縁に横方向のヘラケズリが認められる。

図66は板状土製品である。出土状況などから, カマド天井の構築材と思われる。棒状に延ばした粘土紐を4本並べ, 周囲に粘土を施し, ハケ状工具で器面を整え, 板状に仕上げている。

まとめ

本住居跡は, 遺存状況から南北に長い隅丸方形を呈していたと考えられる。住居内施設としてカマドとピットを検出した。遺物は, カマド内と北西隅の床面からまとまって出土した。特にカマドから入れ子状態で出土した甕については, カマド廃棄後の儀礼行為に伴う遺物としてとらえておきたい。また, カマド天井構築材として用いられた板状土製品や, 袖の補強材の甕などは当時のカマド構築を知る上で興味深い。本住居跡の所属時期は, カマド内や床面から出土遺物などから, 6世紀後半～7世紀後半と考えている。 (大河原)

20号住居跡 S I 20

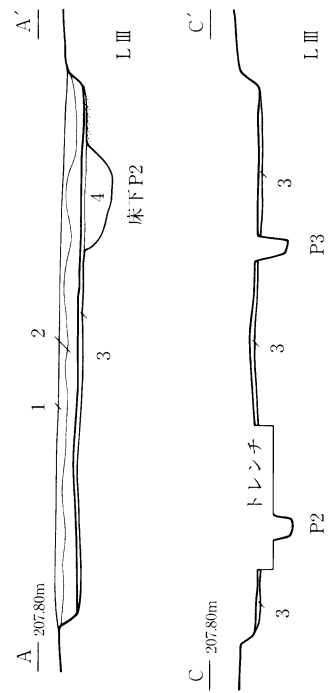
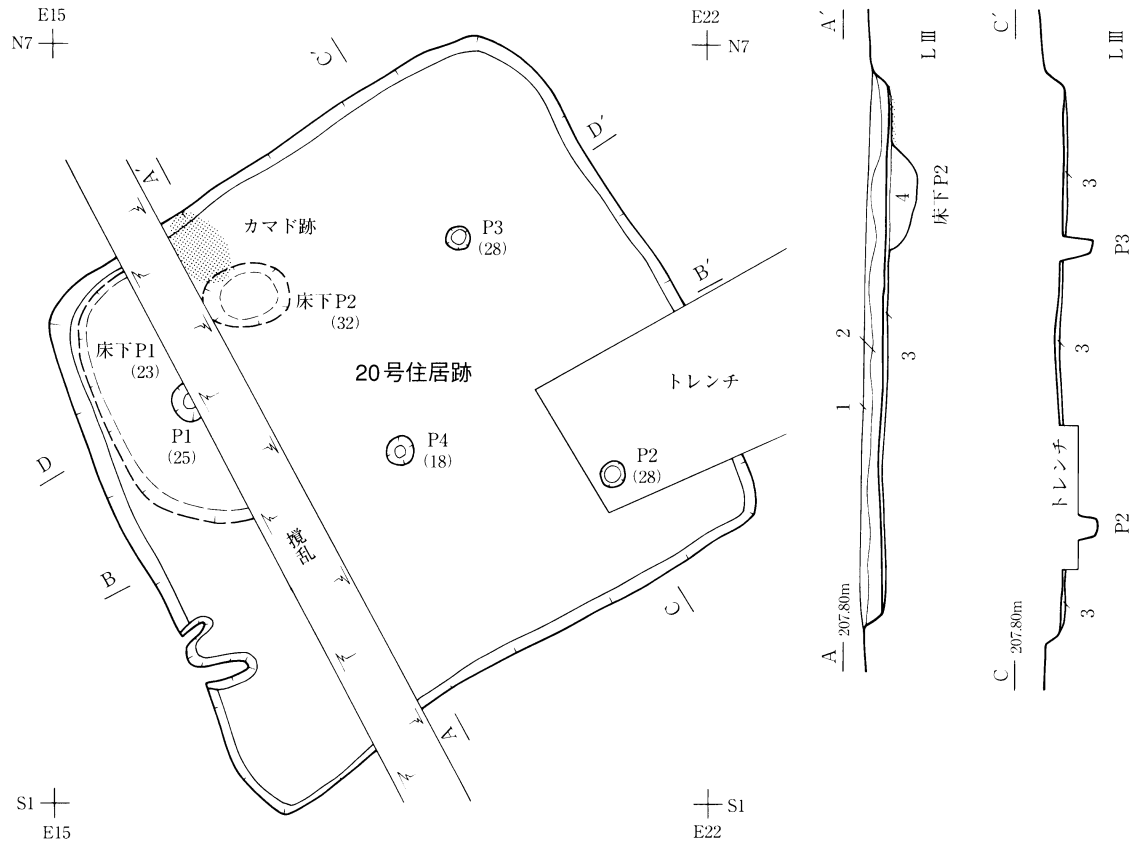
遺 構 (図67・68, 写真43・44)

本住居跡は, 調査区のほぼ中央T12-5, T11-95・96グリッドに位置する。地形的には, 阿武隈川右岸沿いに形成された自然堤防の狭い平坦部に立地している。遺構はLⅢ上面で検出したが, 住居跡西側床面と南北壁の一部は下水管で, 東側の壁の一部はトレンチで削平を受け, 遺存していない。また, 29・31・32号住居跡と重複関係にあり, 本住居跡は29号住居跡より古く, 31・32号住居跡より新しい。

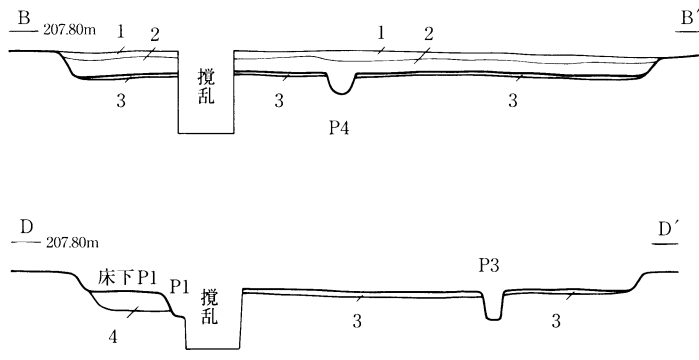
遺構内堆積土は, 掘形埋土を加えると3層に区分できる。壁際から流入状態を示すℓ1・2については, 自然堆積土と判断した。ℓ3は, 掘形埋土である。方形に掘り込んだ竪穴の底面を, 黒褐色砂質土に黄褐色粘土を少量混入して埋め戻し, 住居の床を構築している。

本住居跡の平面形は遺存状況から, ゆがんだ方形を呈していたと考えられる。規模は, 西側の壁で約3.7m, 北側の壁で約3.5mを測る。壁は, いずれもやや急に立ち上がっている。床面からの高さは, 12～20cmを測る。床面は凹凸が激しく, 全体的に踏み締まっていた。

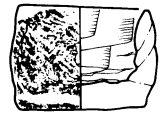
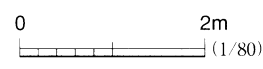
住居内施設として, カマドとピット4個, 焼土跡を検出した。カマドは住居跡の西壁中央やや南寄りに作られていた。カマドの袖は暗褐色土を用い構築されていた。カマドの袖は北側の袖で30cm,



焼土化範囲



- 20号住居跡堆積土
- 1 10 Y R 3/1 黒褐色砂質土
(にぶい黄褐色砂粒を少量含む)
 - 2 10 Y R 2/2 黒褐色砂質土
(炭化物粒を少量含む)
 - 3 10 Y R 3/2 黒褐色砂質土
(黄褐色粘土・炭化物粒を少量含む、貼床上)
 - 4 10 Y R 3/1 黒褐色砂質土
(炭化物粒を少量含む、床下P1・2埋土)



1 貼床上
口径：5.3cm
底径：5.1cm
器高：4.1cm



図67 20号住居跡と出土遺物

南側の袖で60cm程住居内部に張り出していた。袖の最大幅は北側で18cm，南側で36cmを測る。両袖に挟まれた燃焼部は最大長50cm，最大幅は50cmを測る。燃焼部底面は，カマド構築前の床面をそのまま燃焼面として使用している。カマドの袖や燃焼部底面には，焼けた痕跡は認められなかった。

カマド内堆積土は3層に区分した。ℓ 1・2は，色調や土質などから，それぞれ住居内堆積土ℓ 1・2に相当するものと考えている。ℓ 3については，カマド崩壊後の流入土と思われる。

焼土跡は，北壁のやや西寄りで見出した。平面形は，南北94cm，東西56cmの南北に長い楕円形を呈している。北壁と床の一部が4cmほど焼土化していた。この，焼土跡については，西壁で見出されたカマドが長く使用された形跡が認められないことや，位置や規模などから，本住居跡のカマド跡と思われる。

ピットは，住居跡北側の西壁付近でP 1，東壁付近でP 3，南側の東壁付近でP 2，住居跡ほぼ中央でP 4の4個を検出した。ピット内の堆積土は，1層でいずれも暗褐色砂質土が堆積していた。ピットの平面形は円形を呈し，規模は直径22cm～40cm，深さは18cm～28cmを測る。この内P 1～3は，ほぼ住居跡各隅の対角線上に位置し，一辺が2m前後の間隔で配置されていることから，上屋を支える柱穴と考えられる。また，P 4についても，住居跡中央に位置することや，各ピット間との間隔がいずれも1.5mと等間隔で配置されていることから，P 1～3同様に柱穴と考えている。

また，貼床除去後に北壁の西隅で床下P 1，床下P 1東側で床下P 2を検出した。床下P 1の平面形は，遺存状況から南北に長い楕円形を呈していたと思われる。規模は遺存長で南北3m，東西1m，深さ25cmを測る。床下P 2の平面形は，東西に長い楕円形を呈している。規模は，東西98cm，

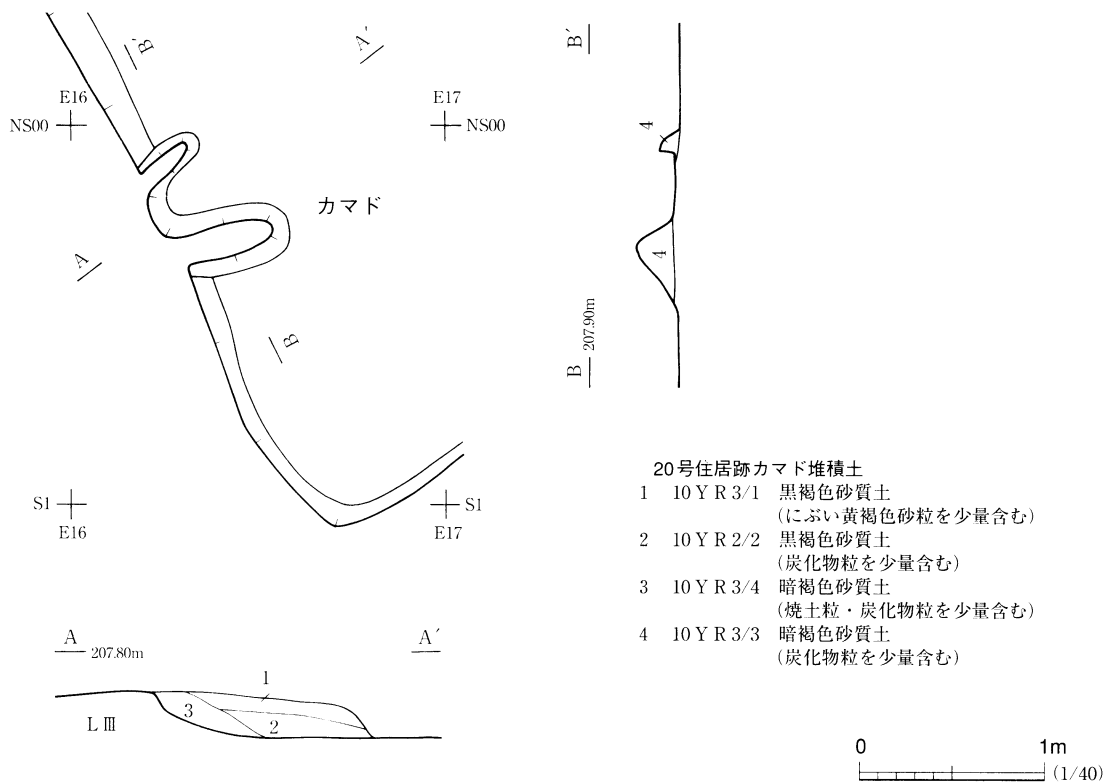


図68 20号住居跡カマド

南北64cm、深さ32cmを測る。これらの床下ピットは、いずれもカマド跡と考えられる焼土跡付近に位置することから、除湿を目的としたものと考えられる。

遺物 (図67)

遺物は、堆積土内と貼床土から土器片が散在的に出土している。内訳は、土師器片675点、須恵器片1点、土製品3点、鉄製品1点である。この内、図示できたものは図67-1の手捏ね土器だけである。内面にヘラナデ、外面には指オサエの痕跡が認められる。

まとめ

本住居跡の平面形は、東西に長い方形を呈している。住居内施設としてカマドと焼土跡、ピットを検出した。この内焼土跡については、北側の壁から床面にかけて検出されていることなどから、本住居跡の旧カマドと考えている。本住居跡の所属時期は、他遺構との切り合い関係や貼床土から出土した土器などから判断して、8世紀前葉と考えている。 (大河原)

21号住居跡 S I 21

遺構 (図69, 写真45・46)

本住居跡は調査区南西部のS12-95とS13-5グリッドに位置している。付近は標高207.4m前後のほぼ平坦な場所である。11号住居跡と重複関係にあり、新旧関係では本住居跡の方が古い。周囲には、北に35号住居跡、西に1・2号住居跡が位置している。

検出面はLⅢ上面である。遺構内堆積土は4層からなる。レンズ状堆積であることから、自然埋没状態と思われる。

本住居跡の平面形と規模は、遺構の大部分が11号住居跡によって破壊されているため不明である。遺存する周壁から推測すると、長軸約5m、短軸約4mのほぼ長方形を呈すると推測される。周壁は、床面からほぼ垂直な角度で立ち上がり、周壁の高さは18~35cmを測る。床面はほぼ平坦に整地されている。踏み締まりのような硬化面はなかった。カマドは11号住居跡により破壊されたためだろうか、確認されなかった。

ピットが3個確認されている。この円形を呈するP1~3は、等間隔で配列されているため、主柱穴と考えられる。規模は直径24~28cm、床面からの深さ9~14cmを測る。ピット内の堆積土は、いずれも自然流入土と考えられる。

遺物

本住居跡からは、土師器43点が出土している。11号住居跡によって大半が破壊されているためだろうか、図示できる資料は出土しなかった。

まとめ

本住居跡は11号住居跡によって大半が破壊されているため、詳細は不明である。辛うじて柱穴が確認されたことにより、竪穴住居跡として認定できた。所属時期は、11号住居跡との重複関係を考慮すると、6世紀後半~7世紀後半であろう。 (堀川)

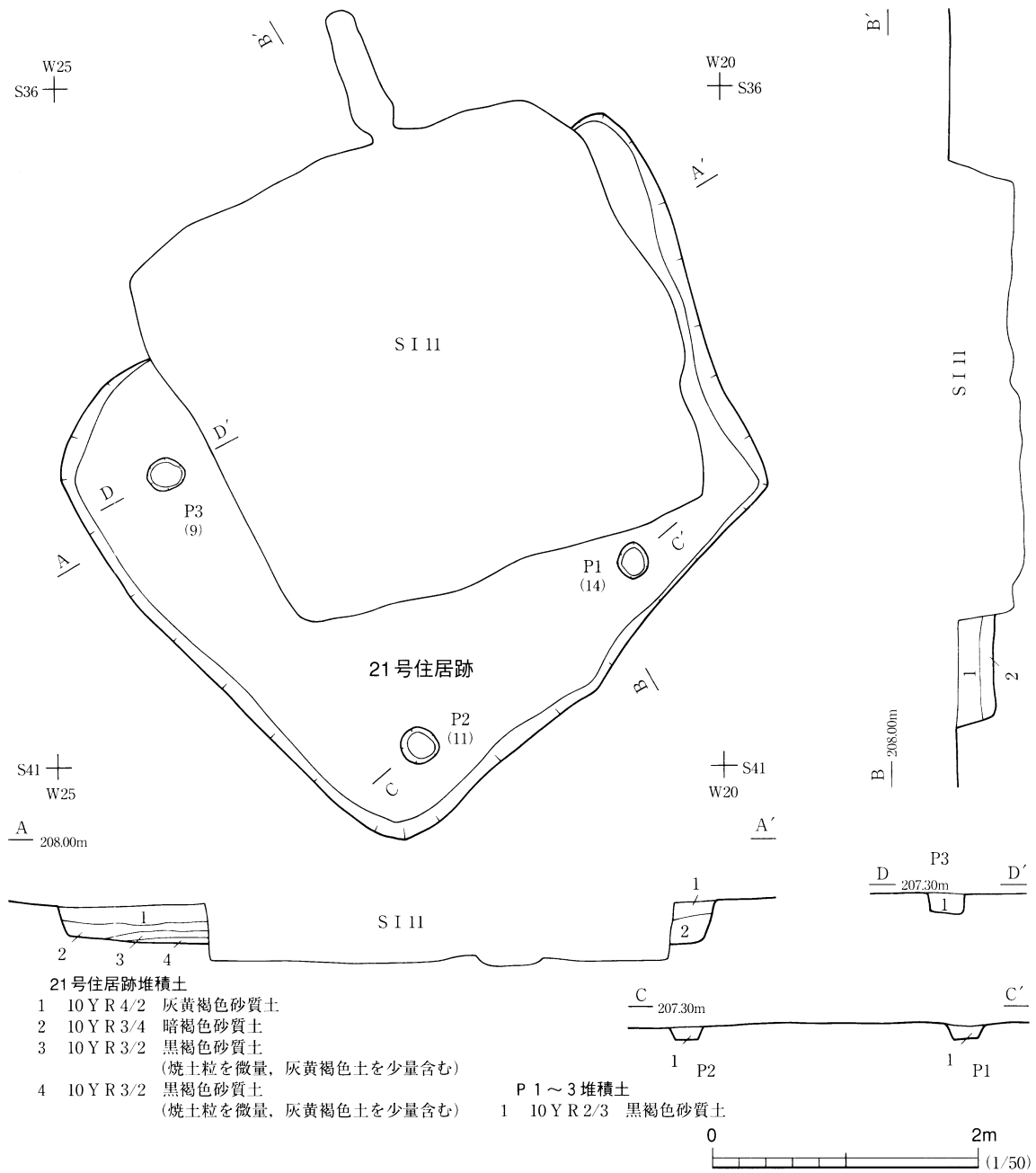


図69 21号住居跡

22号住居跡 S I 22

遺 構 (図70・71, 写真47・48)

本住居跡は、調査区の南側 S 12-78・79・88・89 グリッドに位置する。地形的には、阿武隈川右岸沿いに形成された自然堤防の狭い平坦部上に立地している。遺構は L III 上面で検出した。本住居跡は、23・33号住居跡と重複関係にあり、本住居跡が最も新しい。

遺構内堆積土は、掘形埋土を加えると3層に区分できる。遺構内堆積土 ①・②いずれも、壁際からの流入状態を示すため、自然堆積土と判断した。③は、掘形埋土である。方形状に掘り込ん

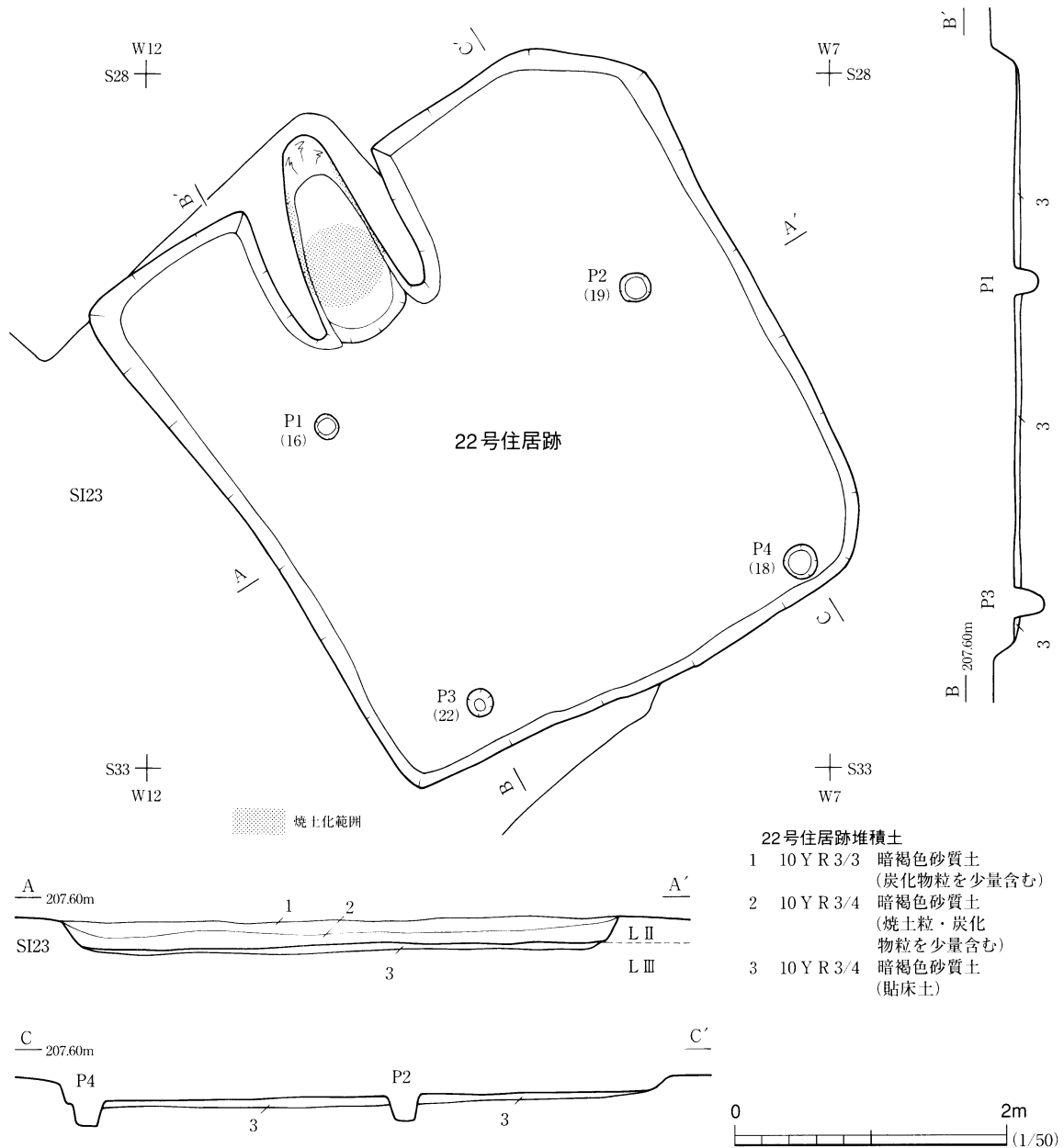


図70 22号住居跡

だ竪穴の底面を暗褐色砂質土で埋め戻し、住居の床を整えている。

本住居跡の平面形は、ゆがんだ方形を呈している。規模は南北で約4.2m，東西で約3.9mを測る。壁は、東側の一部で緩やかに立ち上がるものの、他の壁はいずれも急角度で立ち上がっている。検出面から床面までの深さは、10~18cmを測る。床面は細かな凹凸が認められ、全体的に踏み締まっていた。

住居内施設として、カマドとピット4個を検出した。カマドは住居跡の北壁やや西寄りに造られていた。カマドの袖はにぶい黄色褐色粘土を混ぜた暗褐色砂質土を用いて構築されていた。カマドの両袖は住居内部に1.2m程張り出していた。袖の最大幅はいずれも40cmを測る。両袖に挟まれた燃焼部は最大長1.56m，最大幅は56cmを測る。燃焼部底面は、床面から約6cmほど掘りくぼめられ

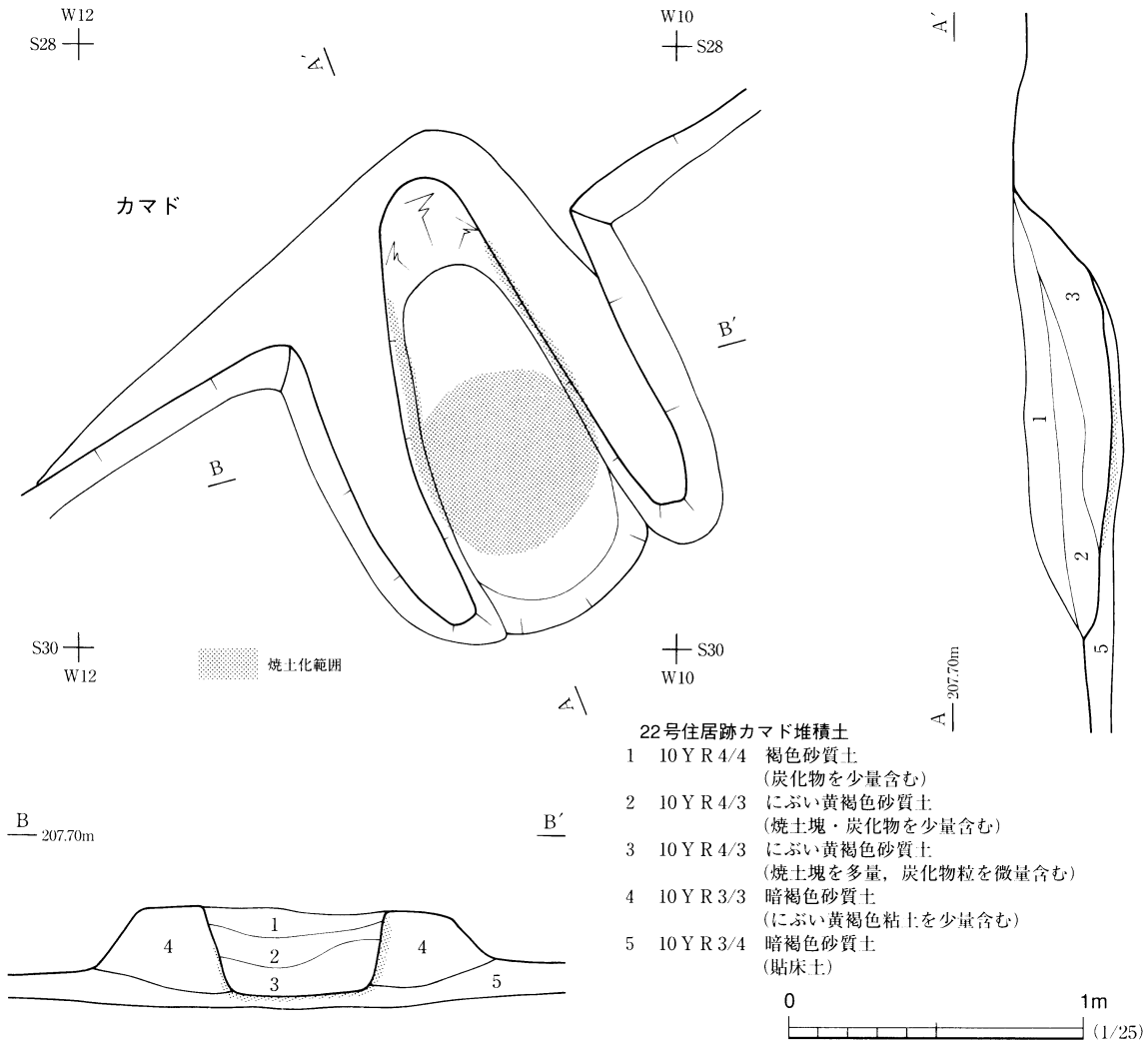


図71 22号住居跡カマド

造られていた。また、両袖の内側と燃焼部底面中央で、4 cmほど焼土化していた。カマド内堆積土は3層に区分した。いずれの堆積土も、カマド崩壊後のカマド上方からの流入土と思われる。

ピットは、4個を検出した。ピット内の堆積土は、暗褐色砂質土が堆積していた。ピットの平面形は円形を呈し、規模が直径18cm~25cm、深さは16cm~22cmを測る。これらのピットは、ほぼ住居跡各隅の対角線上に位置し、東西に並ぶP1とP2、P3とP4の間がほぼ2.5m、南北に並ぶP1とP3、P2とP4の間で2.3m前後の間隔で方形に配置されていることから、上屋を支える柱穴と判断した。

遺物 (図72)

遺物は、土師器片570点、須恵器片12点、石製品1点、鉄製品7点が出土している。図72-1は非ロクロの土師器杯である。外面の口縁部周辺にヘラナデ、底部にはヘラケズリ、内面には黒色処理とヘラミガキが施されている。図72-2は口縁部が欠損した甕である。底部がやや上底で、胴部中央に膨らみを持つ器形になる。図72-3は、石製品である。各平坦面に擦痕が認められることから、砥石として、使われたと思われる。図72-4は、鉄製品である。錆化が激しく、全体形は把握

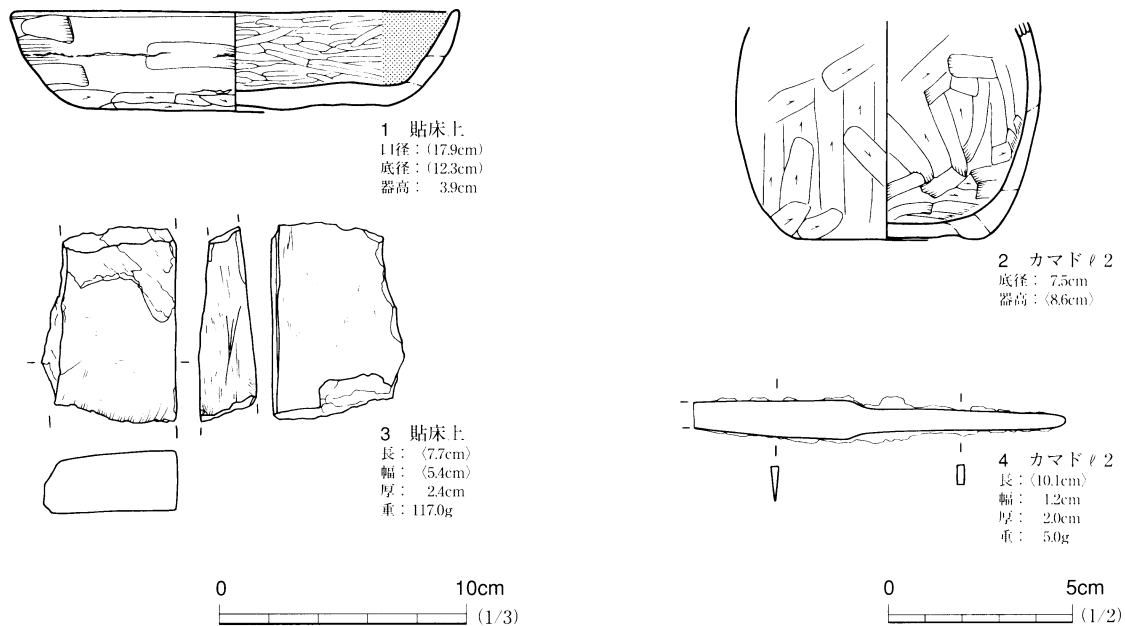


図72 22号住居跡出土遺物

出来ないが、形状から刀子と考えられる。

まとめ

本住居跡の平面形は、南北に長い方形を呈している。住居内施設としてカマドとピットを検出した。カマドは北壁に付随する。ピットは、位置と規模から柱穴と判断した。本住居跡の所属時期は、貼床土から出土した土器などから判断して、8世紀後葉と考えている。(大河原)

23号住居跡 S I 23

遺 構 (図73・74, 写真49・50)

本住居跡は、調査区南端S 12-67・68・77・78グリッドに位置する。地形的には、阿武隈川右岸沿いに形成された自然堤防の狭い平坦部上に立地している。遺構はL III上面で検出した。また、22号住居跡と重複関係にあり、本住居跡が古く位置付けられる。

遺構内堆積土は、掘形埋土を加えると6層に区分できる。ℓ 1～4については、いずれも北側の壁際からの流入状態を示すが、不自然な混入物などが堆積土中に認められないことから、自然堆積土と判断した。ℓ 5は、壁溝堆積土である。ℓ 6は、掘形埋土である。竪穴を方形状に掘り込み、暗褐色砂質土に黄褐色粘土を少量混入して、掘形底面の凹凸を埋め戻し住居の床を整えている。

本住居跡の平面形は遺存状況から、方形を呈していたと考えられる。規模は、西側の壁で約4.6m、北側の壁で約4.5mを測る。遺存する壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面からの高さはいずれも30cmを測る。床面はほぼ平坦に造られ、全体的に踏み締まっていた。

住居内施設として、新・旧カマドとピット、壁溝、床下ピットなどを検出した。新カマドは住居跡の北壁の西寄りに位置している。カマドの袖は褐色砂質土を用い構築されていた。また、北側のカマドの袖は旧カマド燃焼部にあたり、旧カマドの堆積土の上部に褐色砂質土を積み上げカマドを

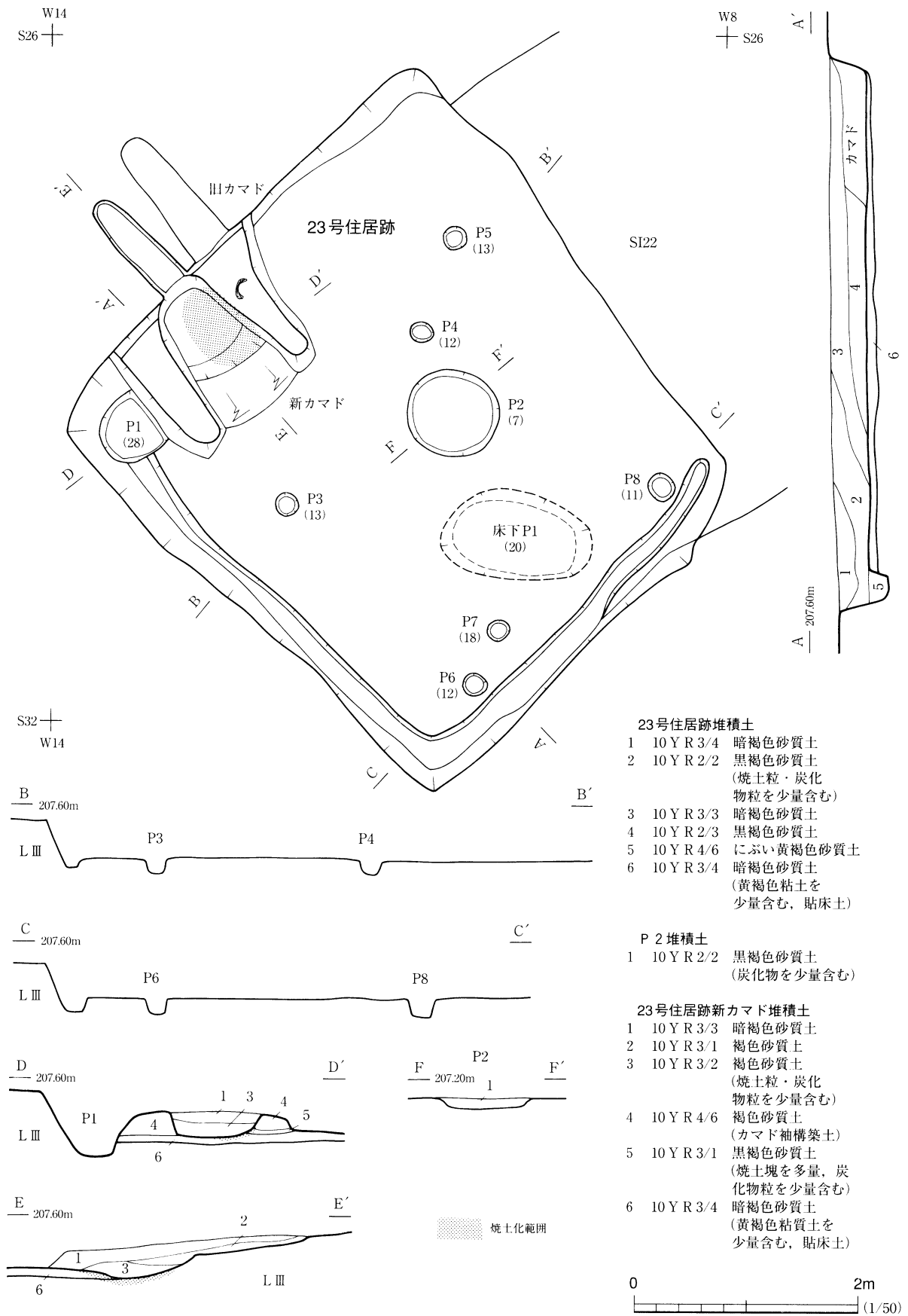


図73 23号住居跡 (1)

構築している。この際、図75-1の杯と図75-2の甌が重なって、図75-3の甕が正立の状態で袖構築土内部に入れられていた。出土状況から、これらの遺物は袖構築材としてではなく、旧カマドに対する儀礼行為の為の土器と考えている。袖の長さは東側で1.34m、西側の袖で1.28m、最大幅は東側で70cm、南側で55cmを測る。

燃焼部は最大長1.36m、最大幅は80cmを測る。燃焼部底面は、床面を5cmほど掘りくぼめ使用している。燃焼部底面と東側の袖の一部が最大で8cmほど焼土化していた。煙道部は燃焼部奥壁から北側に1m程張り出していた。煙道部の最大幅は30cm、深さは5~10cmを測る。

カマド内堆積土は3層に区分した。①・②はいずれも煙道部からの流入土で、この内①は色調や土質などから、住居跡内堆積土③に相当するものと考えている。③については、カマド使用時の堆積土と思われる。

旧カマド跡は新カマドの東側に位置し、新カマドと重複しているため、検出されたのは煙道部と燃焼部底面と考えられる焼土跡である。煙道部は住居跡北壁から北側に1.20mほど張り出していた。煙道部の最大幅は40cm、深さは5~15cmを測る。焼土跡は、床面から煙道部にかけて検出された。平面形は、南北に長いゆがんだ楕円形を呈していた。規模は南北95cm、東西52cmを測る。焼土範囲を断ち割った結果、焼土化は認められなかった。焼土跡の遺存状況から、旧カマドの燃焼部は構築前の住居跡床面をそのまま使用していたと考えられる。

ピットは、全部で8個検出した。この内、カマド西側の北西壁隅に位置するP1については、位置と規模から貯蔵穴と考えている。床面ほぼ中央に位置するP2については、位置や規模などから貯蔵穴と考えられるが、貯蔵穴としては比較的浅すぎるため、その性格は不明である。また、P3~8については、規模や深さなどから、本住居跡の上屋を支える柱穴と判断した。このうちP3・5・6・8は、ほぼ住居跡各隅の対角線上に位置し、ほぼ方形に配置されていることから、支柱穴と考えている。

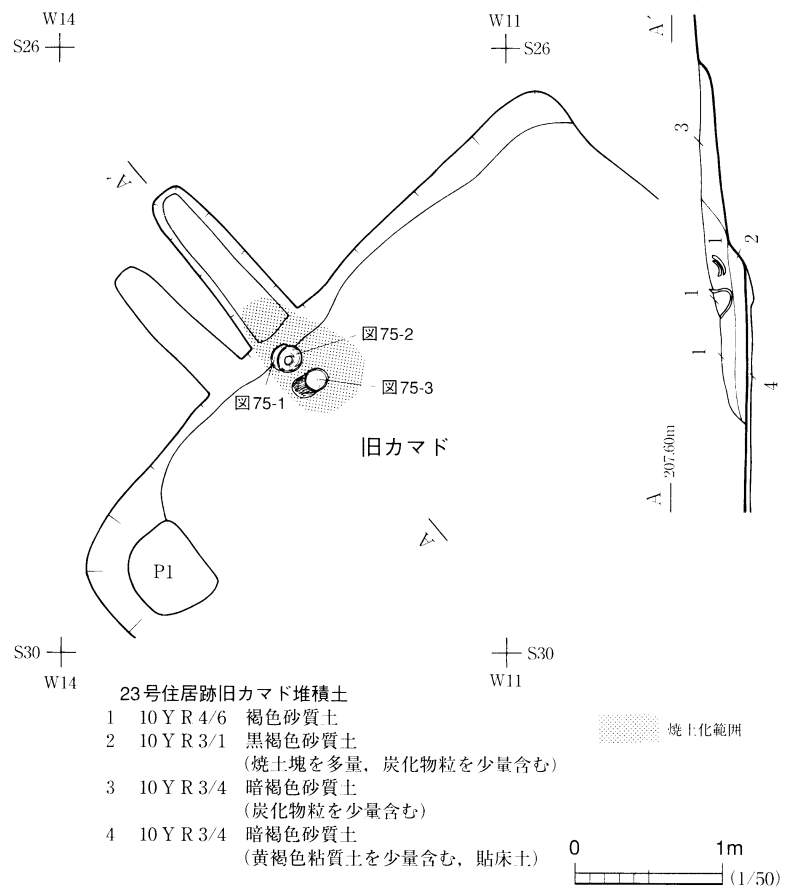


図74 23号住居跡(2)

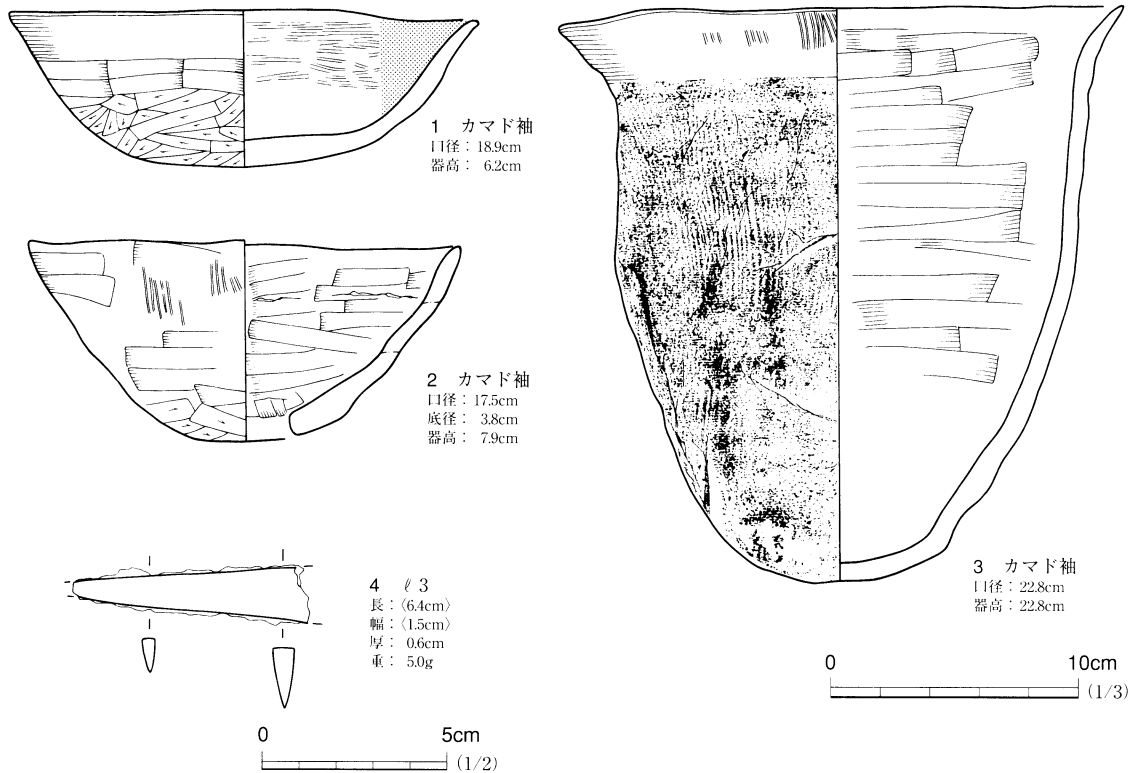


図75 23号住居跡出土遺物

壁溝は南・西壁の床面で検出した。規模は幅15～30cm、床面からの深さ5～12cmである。本住居の壁溝については、壁溝に付随して住居外に延びる溝なども検出されなかったことから、排水の目的よりも除湿あるいは壁の崩落を防ぐ土止め機能を目的とした施設と考えている。

貼床除去後に床面の南壁寄りで床下P1を検出した。床下P1の平面形は、南北に長いゆがんだ楕円形を呈している。規模は南北1.35m、東西0.8m、深さ20cmを測る。

遺物 (図75, 写真106・107)

遺物は土師器片174点、鉄製品2点が出土している。図75-1は非ロクロ整形の土師器杯で、底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる器形となる。外面の口縁部周辺にヨコナデ、底部にはヘラケズリ、内面には黒色処理とヘラミガキが施されている。図75-2は非ロクロ整形の小型の甑である。内・外面にヘラナデ、外面の底部周縁にはヘラケズリが施される。図75-3は非ロクロ整形の大型甕である。胴部中央に膨らみを持ち、口縁部が緩やかに外反する器形である。底部は丸底である。口縁部外面周辺にヨコナデと縦方向のハケメ、体部外面には縦方向に条線状のハケメ、内面はヨコナデが施される。図75-4は鉄製品である。錆化が著しくどのような製品かは判断できないが、断面を観察すると、鉄板を数回折り曲げて製作されている。このため、中心部は空洞になっている。

まとめ

本住居跡は平面形が南北に長い方形を呈している。屋内施設としてカマドの造り替えによる新・旧カマド、柱穴と考えられるピットと壁溝がある。所属時期は、カマド袖から出土した土器や22号住居跡との重複関係などから判断して、7世紀後半～8世紀前半と判断している。(大河原)

24号住居跡 S I 24

遺 構 (図76・77, 写真51・52)

本住居跡は調査区南側のS12-42・52グリッドにわたって検出された。本住居跡が立地する地点は、標高207.5mの自然堤防上である。竪穴の掘り込み面は、大部分が12号住居跡の堆積土上面で、北西コーナー部だけがLⅢの上面であった。12号住居跡の上に重複し、新旧関係では本住居跡の方が新しい。

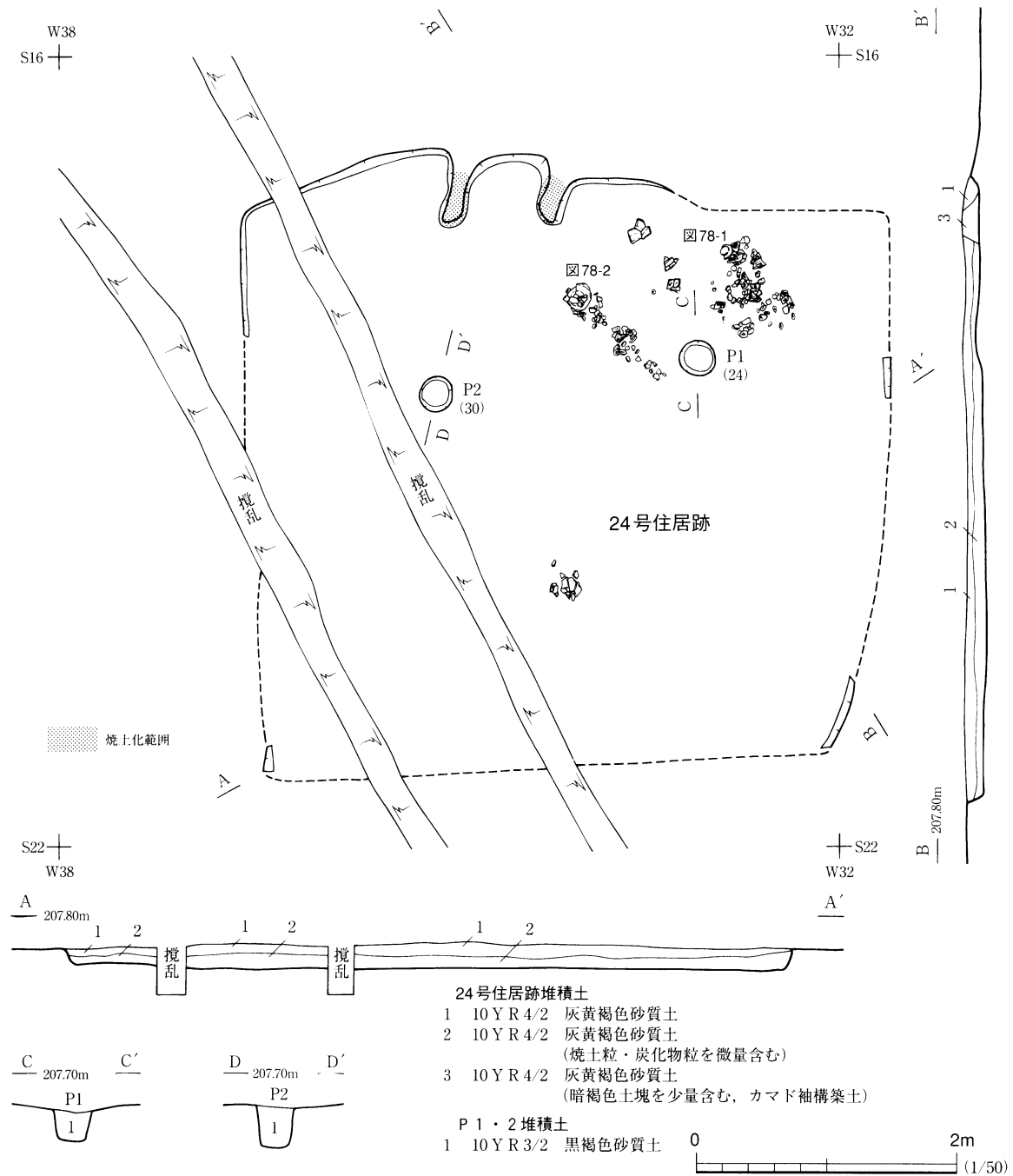


図76 24号住居跡

第2章 遺構と遺物

遺構内堆積土は2層に分層できた。L IIに該当する灰黄褐色系の層で、レンズ状堆積の状況を呈することから、自然埋没状態と推察される。

本住居跡は、12号住居跡の調査中に土層断面の観察によって発見された。その存在に気が付いて調査に着手した時点では、すでに堆積土の大半がなくなり、周壁も一部しか遺存していない状況であった。そのため、住居跡本来の平面形は不明であるが、辛うじて遺存した周壁から推定すると、不整な方形であった可能性が高い。規模は現況の上端で、東西長4.6 mを測る。12号住居跡の堆積土に形成された床面は、踏み締まりもなく軟調である。その状態は若干の凹凸が見られるものの、おおむね平坦である。遺存する壁は床面から急峻に立ち上がっており、壁高は約10cmを測る。

カマドは北壁に付設されていた。遺存状態は悪く、両袖・燃焼部が残っていたものの、煙道は完全に流失している。両袖は、床面に灰黄褐色の構築土を盛り上げて造られており、床面からの遺存高は約10cmを計測する。北壁からの長さは、左袖が60cm、右袖が40cmであった。燃焼部は、両袖に挟まれた不整楕円形のくぼみとして確認され、その規模は長軸60cm、短軸50cmである。燃焼部の内壁には火熱を受けた痕跡が認められ、焼土化した部分は6 cmの深さにまで達していた。燃焼部の底面は、焚口から奥壁に向かって緩やかに上り傾斜している。

柱穴と考えられるピットが2個ある。直径約25cmの円形ピットで、断面形はU字状を呈し、深さは24~30cmを測る。カマド前方の床面中央部に位置し、約2 m離れて掘られていた。

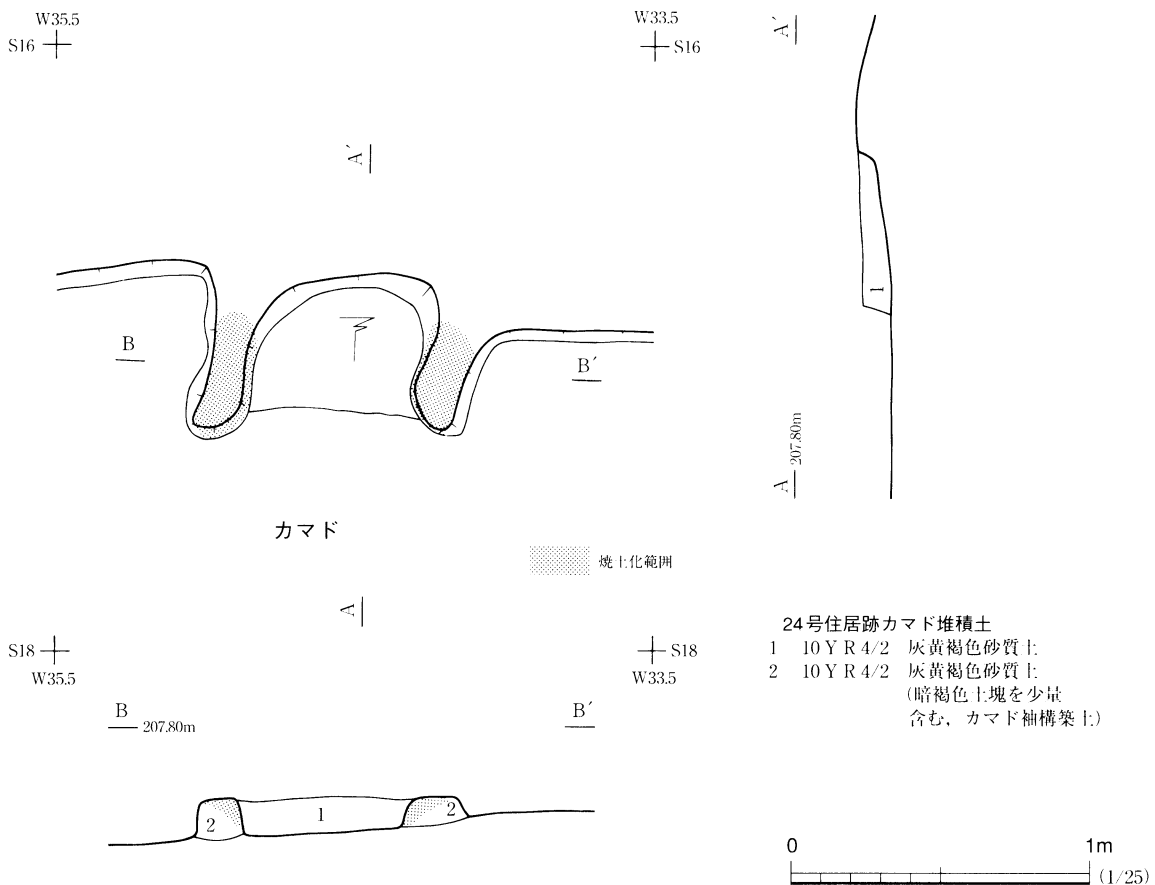


図77 24号住居跡カマド

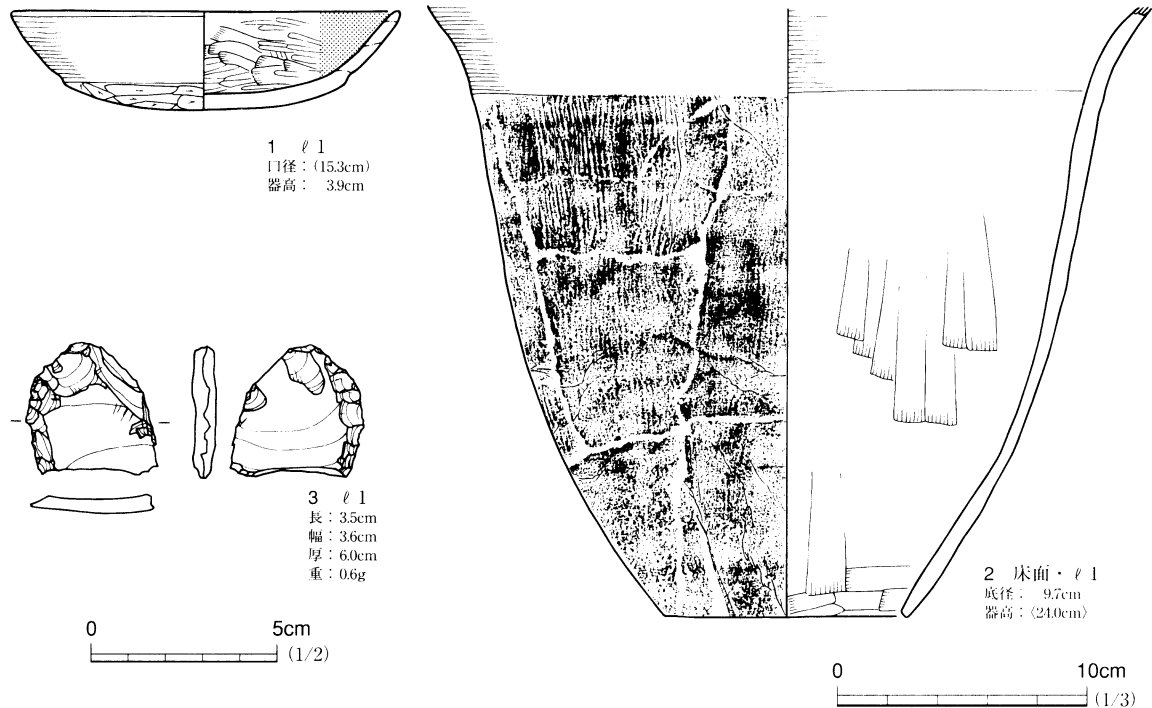


図78 24号住居跡出土遺物

カマド右脇の床面からは、故意に壊されたような状態の土師器が、まとまって出土している。

遺物 (図78, 写真107)

本住居跡から出土した遺物は、縄文土器1点、土師器446点、石器1点である。そのうち、土師器2点、石器1点を図示した。

図78-1は内湾しながら開く口縁部形態の杯で、全体のプロポーシヨンが半円形になる。内面は黒色処理とヘラミガキ、外面は口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリによって調整が仕上げられている。

図78-2は無底の大型甕である。口縁部は緩やかに外反し、胴部に膨らみはなく、底部に向かってすぼまる器形である。外面は口縁部がヨコナデ、胴部がハケメ、内面は口縁部がヨコナデ、胴部がヘラナデによって調整されている。

図78-3は微細な剥離痕をもつ剥片である。縦長の剥片を素材にして、左側縁に押圧剥離を施している。

まとめ

本遺構は遺存状態が悪く、不明な部分も多いが、中規模の竪穴住居跡と考えられる。所属時期は出土した土師器の年代観から、7世紀後半から8世紀前半と判断している。(小 暮)

25号住居跡 S I 25

遺構 (図79・80, 写真53・54)

調査区のほぼ中央に位置するS12-49・50・59・60グリッドで検出された竪穴住居跡である。遺構が構築された場所は、阿武隈川に沿って形成された自然堤防の頂部から後背地に移行する南向き

緩斜面である。検出面はLⅢ上面である。灰黄褐色土で検出した。本住居跡は26号住居跡と重複し、新旧関係では本住居跡の方が古い。

遺構内堆積土は黄褐色系の砂質土で、2層確認した。堆積状況から本住居跡の廃絶後に流入堆積したものと考えられ、自然埋没状態と判断している。

本住居跡は攪乱を受けており、南壁の大半と東壁の上部が削平されている。遺存した周壁から平面形を推測すると、東西方向に長い長方形が考えられる。規模は現況の上端で東西長6.4m、南北長5.6mを測る。カマドを通り、東壁・西壁に平行する主軸線の方角は、真北から30°西に振れている。床面の大半は、LⅢで形成されている。凹凸は少なく、おおむね平坦な状態であった。壁は急峻に立ち上がっている。床面よりの壁の遺存高は、北壁が最も高く、最大で44cmを計測した。

カマドは北壁のほぼ中央で確認された。煙道と燃焼部の一部は、攪乱によって破壊されている。両袖は明黄褐色土を積み上げて構築されていた。両袖の遺存長は、左袖が35cm、右袖が42cmある。床面からの遺存高は、ともに約25cmを計測した。燃焼部の規模は、焚口幅75cm、奥行き100cmで、奥壁に向かって幅が狭くなっている。燃焼部の内面は、焚口付近が強く焼けており、赤褐色の被熱痕跡は底面、袖部とも約5cmの深さにまで達していた。底面は焚口から奥壁へ向かって、緩やかに上り傾斜している。燃焼部に堆積した土は、天井崩落土と流入土で、焼土や炭化物を含んでいた。

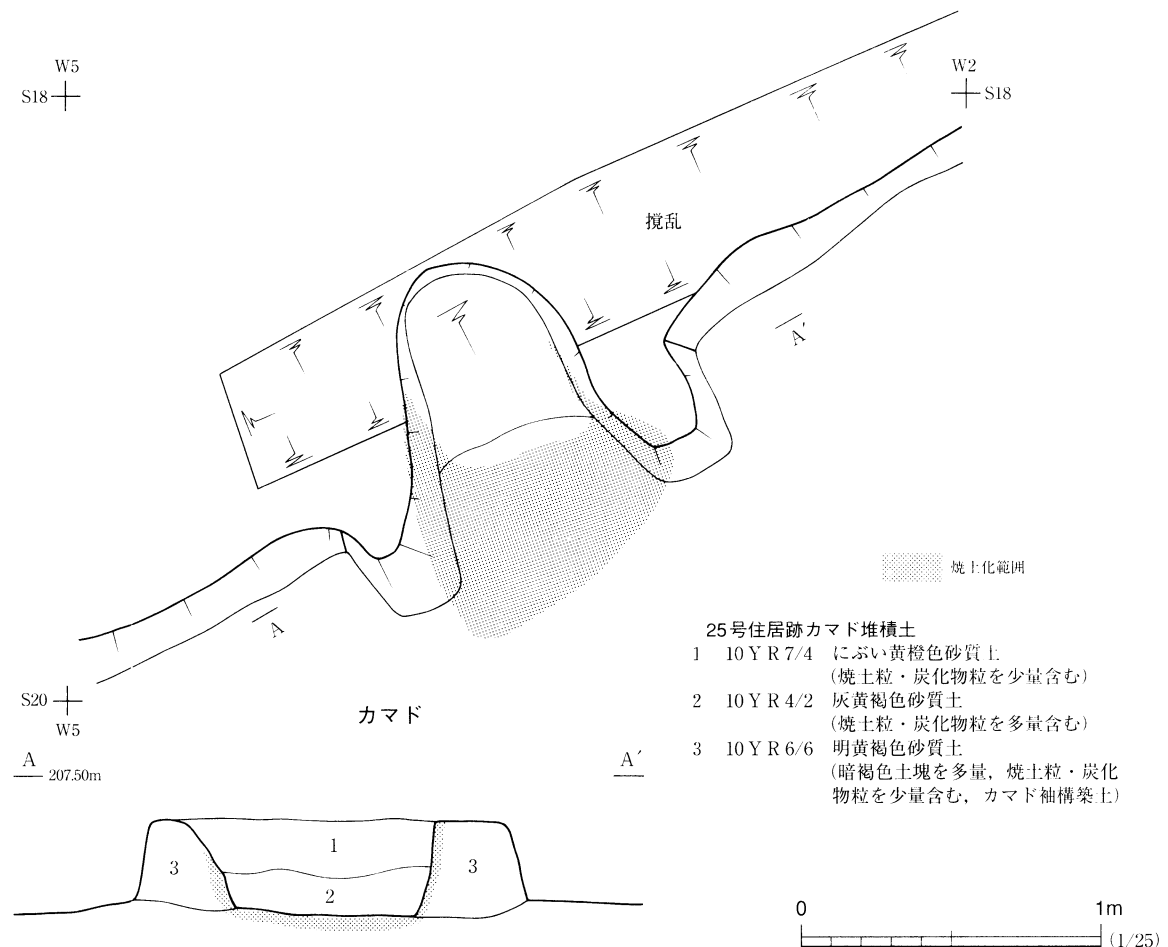


図80 25号住居跡カマド

ピットが3個確認され、その配置は床面の東側を中心としている。いずれも床面から垂直に掘り込まれており、平面形は円形を呈し、断面形は底面が平坦なU字状になっている。直径は22~38cmで、深さは37~48cmである。ピットの堆積土は、遺構内堆積土のⅡ1に近似している。このような状況から、ピットはすべて柱穴と判断した。

遺物 (図81)

本住居跡から出土した遺物は、土師器714点、須恵器14点、土製品4点である。そのうち、土師器1点、土製品支脚1点を図示した。

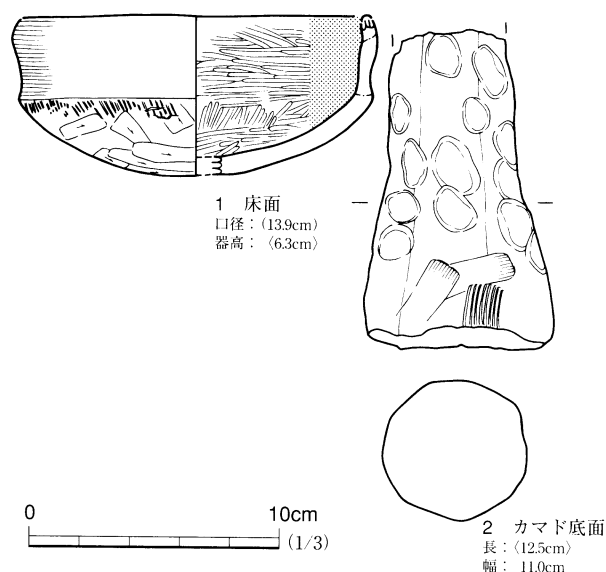


図81 25号住居跡出土遺物

図81-1は有段丸底の土師器杯である。口縁部は直立し、端部が若干内湾している。外面は口縁部がヨコナデ、底部がヘラケズリで仕上げられ、ハケメがわずかに観察される。内面には黑色処理と丁寧なヘラミガキが施されている。

図81-2はカマドで使用されていた支脚である。全体的に強い火熱を受けているため、器面はもろく、剥落した部分が多く見られる。外面には指頭圧痕が多数認められた。

まとめ

本遺構は一部削平を受けているものの、やや大型の部類に属する竪穴住居跡と考えられる。所属時期は出土した遺物の年代観から、6世紀後半~7世紀後半と考えられる。(小暮)

26号住居跡 S I 26

遺構 (図82・83, 写真55・56)

本住居跡は、調査区の中央やや南寄りのS12-49・50・59・60グリッドにわたって検出された。本住居跡が立地する場所は、標高207.4m前後の南向き緩斜面で、自然堤防の頂部から少し下がった地点である。検出面はLⅢ上面で、褐灰色土で埋没した落ち込みとして検出された。本住居跡は25号住居跡と重複しており、新旧関係では本住居跡の方が新しい。

遺構内には、褐灰色と灰黄褐色の砂質土が3層堆積している。これらはレンズ状に堆積していることから、自然埋没状態と思われる。

本住居跡は、ほぼ全体形を把握することができた。平面形は東西方向に長い長方形を呈している。カマドと南壁を結ぶ主軸は、真北から西に30°傾いている。規模は、現況の上端で東西長6.4m、南北長5.4mである。本住居跡の床面はLⅢで形成されている。若干凹凸があるものの、ほぼ平坦で、全体的に堅固で安定している。遺存する壁はいずれも床面から急角度で立ち上がり、壁面の状態は硬い。現況での壁高は、西壁で最大59cmを測り、東壁・南壁が11~15cmと低くなっている。

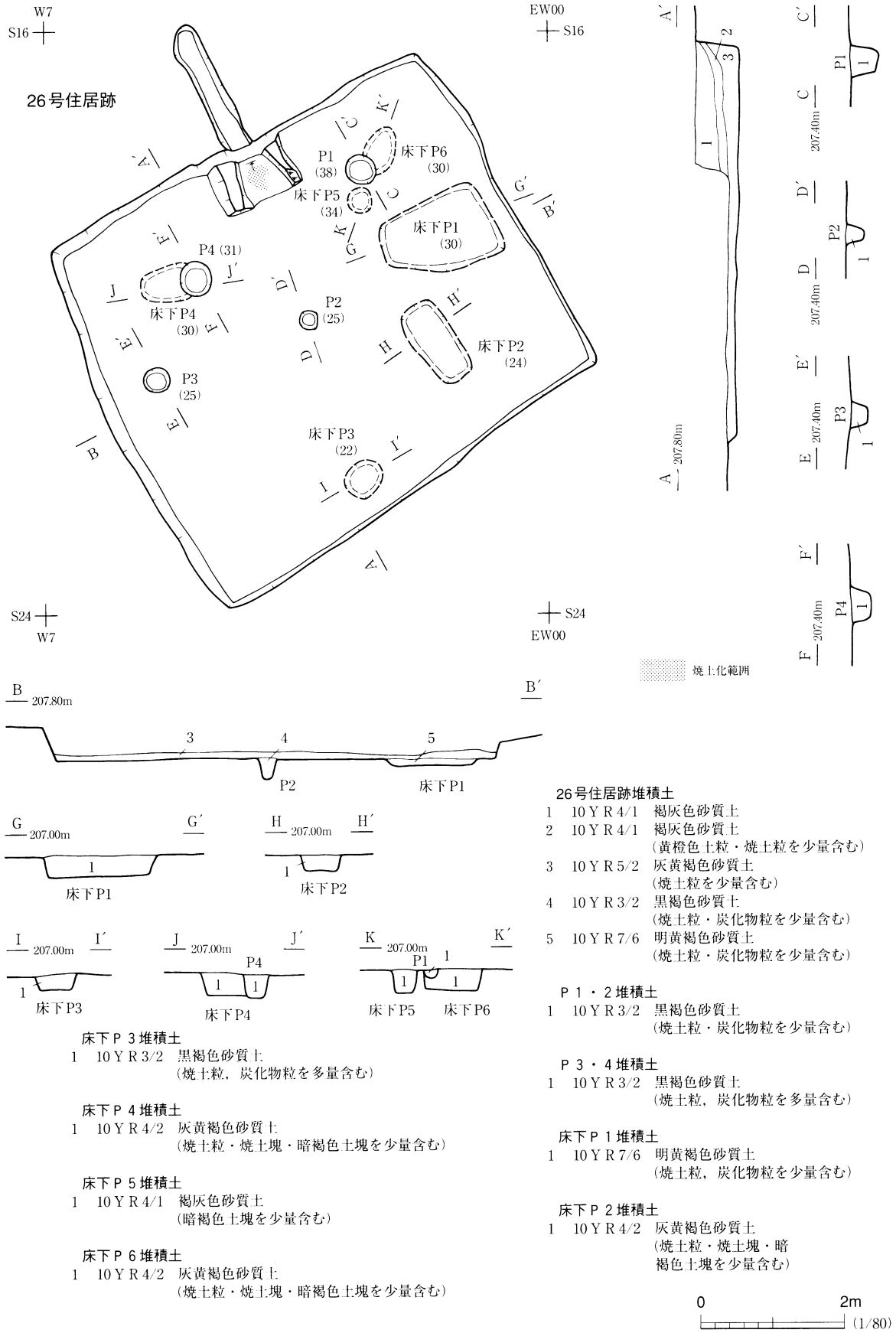


図82 26号住居跡

カマドは北壁のほぼ中央に付設され、両袖・燃焼部・煙道が遺存していた。燃焼部は、暗黄橙色土を積み上げて構築されている。袖部の遺存長は北壁から約70cmあり、床面からの遺存高は約15cmを測る。燃焼部は、この両袖に挟まれた位置に認められ、焚口幅77cm、奥行65cm、奥壁幅45cmの不整な台形を呈している。燃焼部の底面は、部分的に強く焼土化し、赤変硬化していた。焼土化した部分の厚さは最大で5cmに及んでいることが、断ち割りによって確認された。燃焼部の奥壁はほぼ直立して、煙道につながっている。煙道は長く、北壁から約180cm伸びている。幅は煙道の中央で35cmあり、深さは最大12cmを計測した。南から北に向かって緩やかな傾斜を持ち、先端部が最も深くなっている。カマド内の堆積土は2層に分かれる。①は燃焼部から煙道にかけて堆積していた灰黄褐色土で、混入物を含まない流入土である。②は主に燃焼部に堆積しており、多量の焼土を含んでいるため、天井崩落土と思われる。

ピットは床面上から4個検出され、これらをP1～4とした。直径30～50cmの不整な円形ピットで、床面からの深さは25～38cmを計測した。住居跡の北側を中心として不規則に配置されており、上屋を支える柱穴と考えられる。

また、床面下からも6個のピットが確認された。床下P1～6は古い柱穴と思われるピットである。床下P3・5は平面円形を呈し、それぞれ直径は56cm、32cm、深さは22cm、34cmを測る。床下P4・6は床面上の柱穴とほぼ同じ位置で重複しており、平面形は不整な楕円形で、規模は短径約

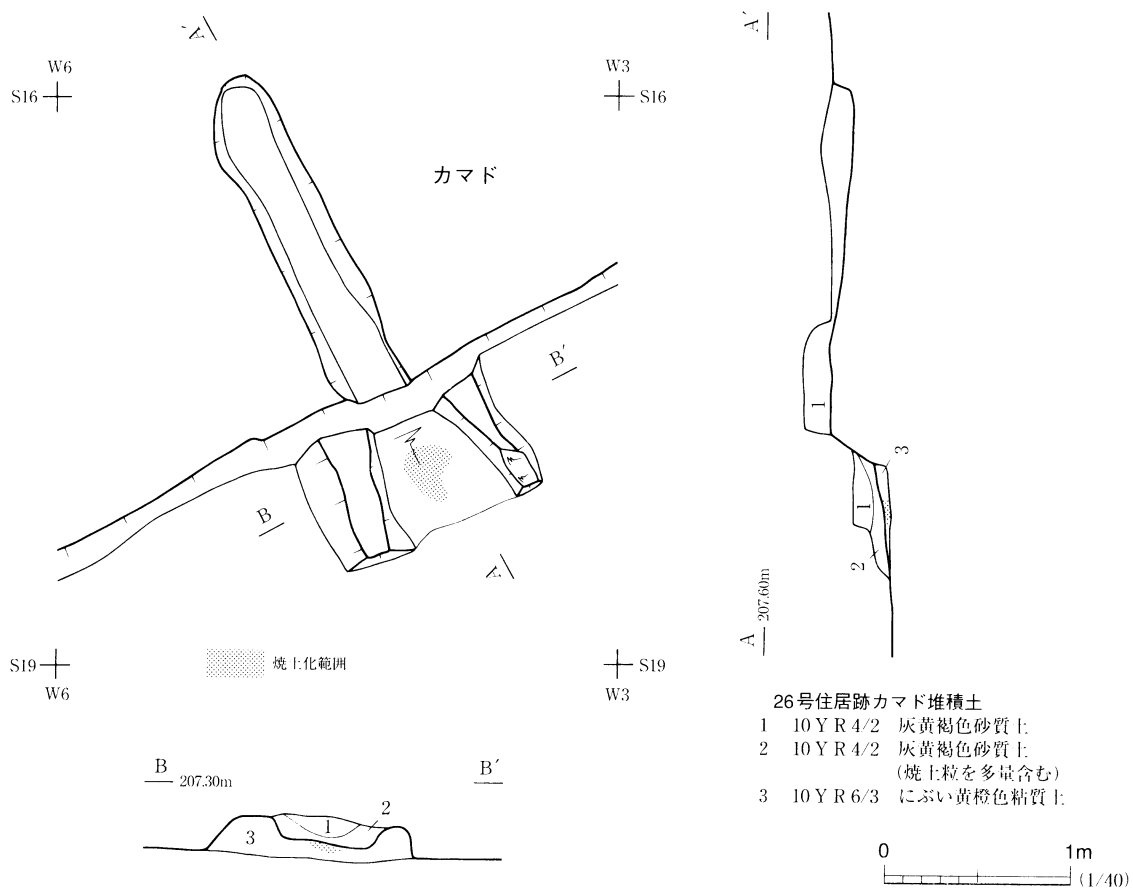


図83 26号住居跡カマド

40cm, 深さ約30cmである。床下P1・2はいずれも住居跡の東側に位置している。P1は長軸160cm, 短軸108cm, 深さ30cmの不整な五角形, P2は長軸120cm, 短軸60cm, 深さ24cmの不整な長方形を呈している。

遺物 (図84)

本住居跡から出土した遺物は、縄文土器1点, 土師器674点, 須恵器11点, 土製品5点, 羽口1点, 鉄製品5点である。そのうち, 土師器2点とカマドの支脚1点を図示した。

図84-1・2は土師器の杯である。いずれも口縁部が内湾して立ち上がっており, プロポーシオンが半円形になる。1は外面が口縁部ヨコナデ, 底部ヘラケズリで調整されている。口縁部のヨコナデは幅が狭く, 底部のヘラケズリは雑に施されているため, 器面が全体的に凹凸している。内面はヘラナデで平滑に仕上げられている。底面には木葉痕が観察された。2は外面が口縁部ヨコナデ, 底部ヘラケズリで調整され, 内面に黒色処理とヘラミガキが施されている。

図84-3は円筒形を呈する土製支脚である。中実であるため, 重量がある。外面はナデによって, 平滑に仕上げられている。

まとめ

本遺跡の中では, やや大型の部類に属する竪穴住居跡である。カマドは北壁に付設されていた。本住居跡は床面下より柱穴を検出していることから, 建て替えが行われた可能性を指摘できる。所属時期は, 8世紀中頃と推測される。

(小 暮)

27号住居跡 S I 27

遺構 (図85・86, 写真57・58)

本住居跡は調査区中央のT12-41・42・51・52グリッドに位置している。付近は標高207.0mの自然堤防後背地である。北に13号住居跡, 西に25・26号住居跡, 東に15号土坑が構築されていた。検出面はLⅢ上面である。

遺構内堆積土は4層からなる。ℓ1・2は, 遺構の中央付近がくぼむレンズ状の堆積状況を示すことから, 自然埋没状態と思われる。ℓ3・4は, カマド内堆積土である。

本住居跡は, 一辺が4m程のほぼ方形を呈し, カマドを通る軸線はN17°Wとやや西に傾いている。周壁は床面から, ほぼ垂直な角度で立ち上がり, 周壁の高さは11~38cmを測る。床面はほぼ平らに整地されている。踏み締まりのような硬化面は検出されなかった。

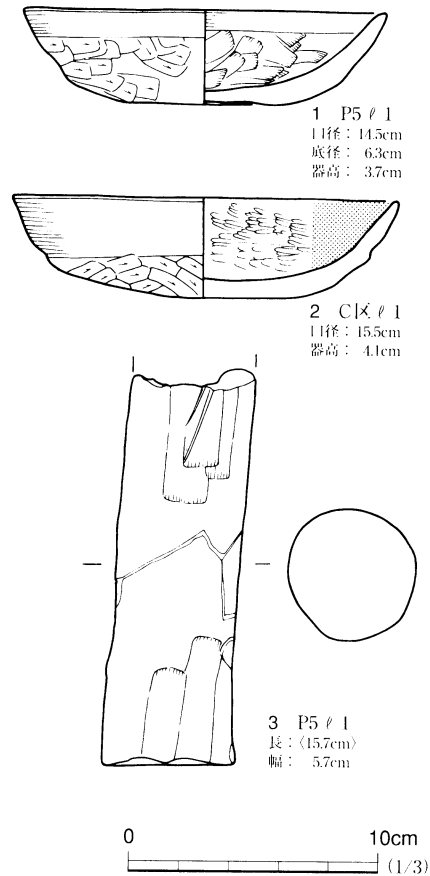


図84 26号住居跡出土遺物

カマドは、北壁のほぼ中央で1基検出された。形態は堅穴内に燃焼部を持ち、「ハ」の字に張り出した両袖を有するもので火を受け、焚口部付近が特によく酸化している。酸化面は5cmの深さにまで達していた。両袖によって確保された燃焼部の規模は、下端ラインで焚口幅約70cm、奥行き約80cmを測る。袖の長さは70~110cmで、高さは15~30cmを計測した。カマドの堆積土は3層に区分された。ℓ2は天井崩落土、ℓ1は天井崩落土後の流入土、ℓ3は袖部の構築土である。煙道部は流失しており、確認できなかった。

ピットは4個確認された。この不整な円形を呈したP1~4は、住居跡対角線上に等間隔で配列

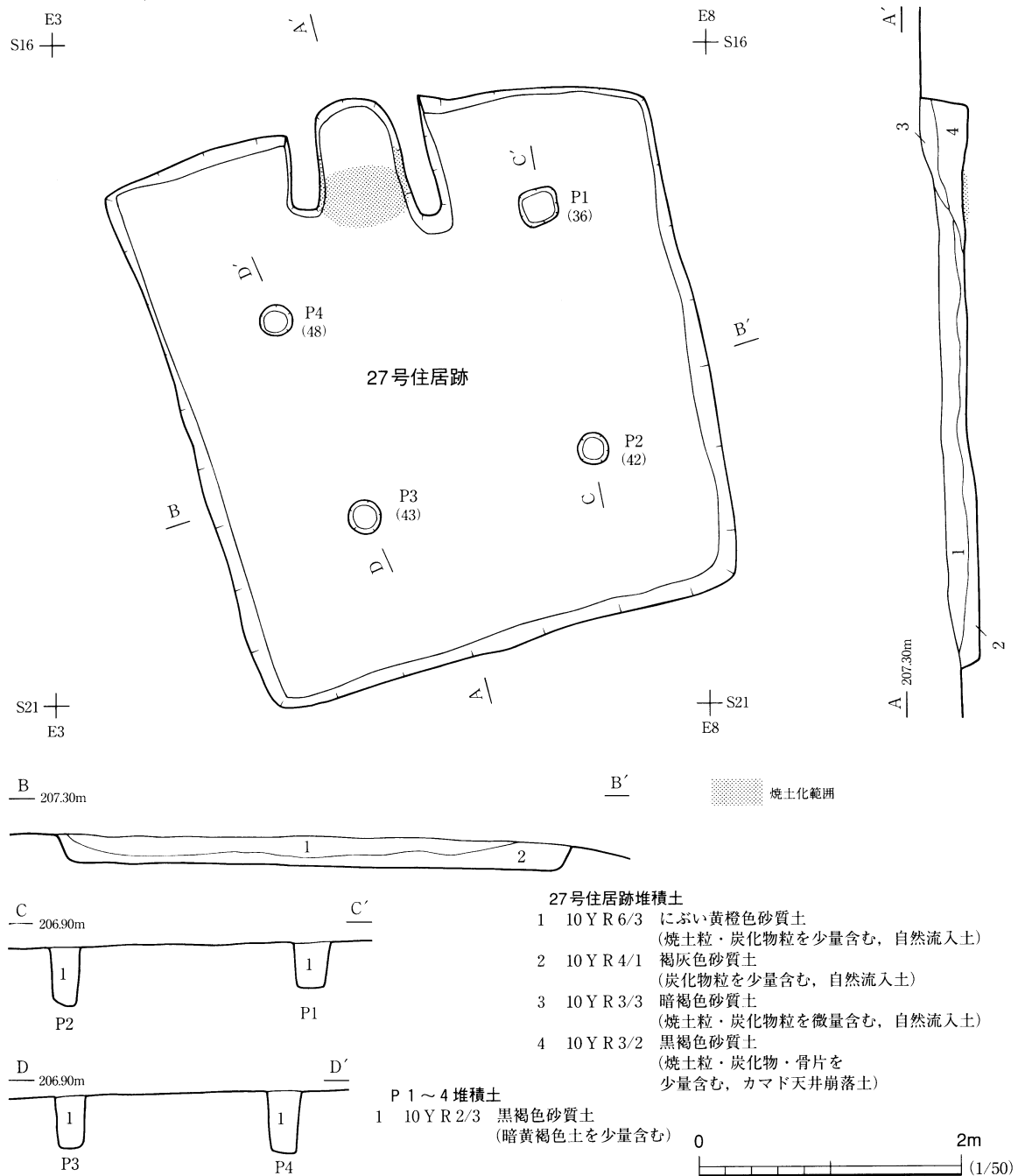


図85 27号住居跡

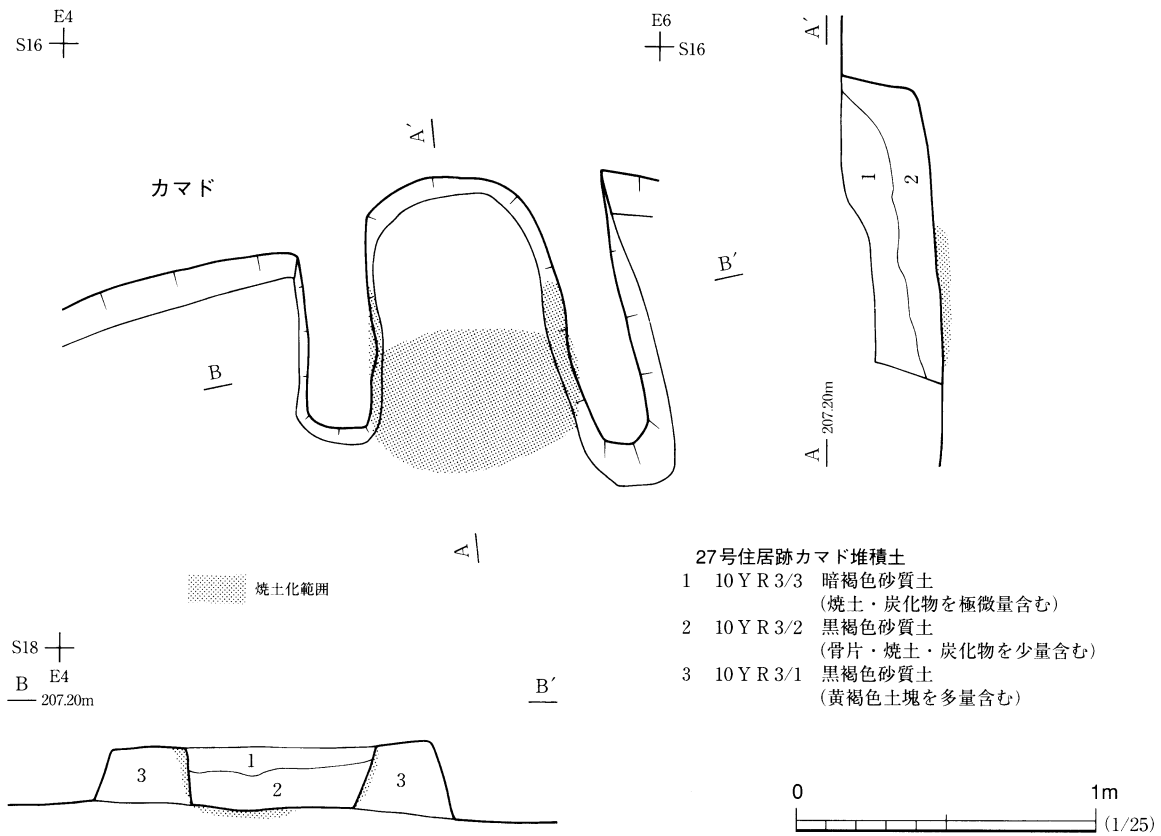


図86 27号住居跡カマド

されているため支柱穴と考えられる。規模は直径22~28cm, 床面からの深さ36~48cmを測る。ピット内の堆積土はいずれも自然流入土と考えられる。

遺物 (図87, 写真108)

本住居跡から出土した遺物は、土師器565点, 須恵器17点である。このうち, 実測可能な土師器4点, 須恵器5点を図示した。

図87-1は, 須恵器の同器形を模倣して作られた土師器の杯蓋である。ツマミは欠損しているが, 宝珠形のものが付いていたと思われる。天井部と口縁部の境界には, 弱い稜が形成されている。口縁端部は, 折れて下方に少し延びている。内外面とも黒色処理とヘラミガキが施され, 光沢がある。

図87-2・3は土師器の杯である。口縁部と体部の境界に段や稜は形成されていない。底部は, 2がやや膨らみをもつ平底, 3が平底である。内面には, 黒色処理とヘラミガキが施されている。外面は口縁部がナデ調整, 体部がヘラケズリ・ヘラミガキで仕上げられている。器面調整のあり方から, 3は金属器を模倣したものであると思われる。

図87-4は, 土師器の鉢である。杯を深くしたような器形を呈している。体部は, 平らに作られた底部から内湾して立ち上がり, そのまま, 口縁部にいたっている。内面には, 黒色処理と丁寧なヘラミガキ調整が施されている。外面は, 口縁部がヨコナデ, 体部がヘラケズリによって調整されている。

図87-5~9には, 大型甕の破片資料を示した。口縁部破片には, 端部を丸く仕上げるものと,

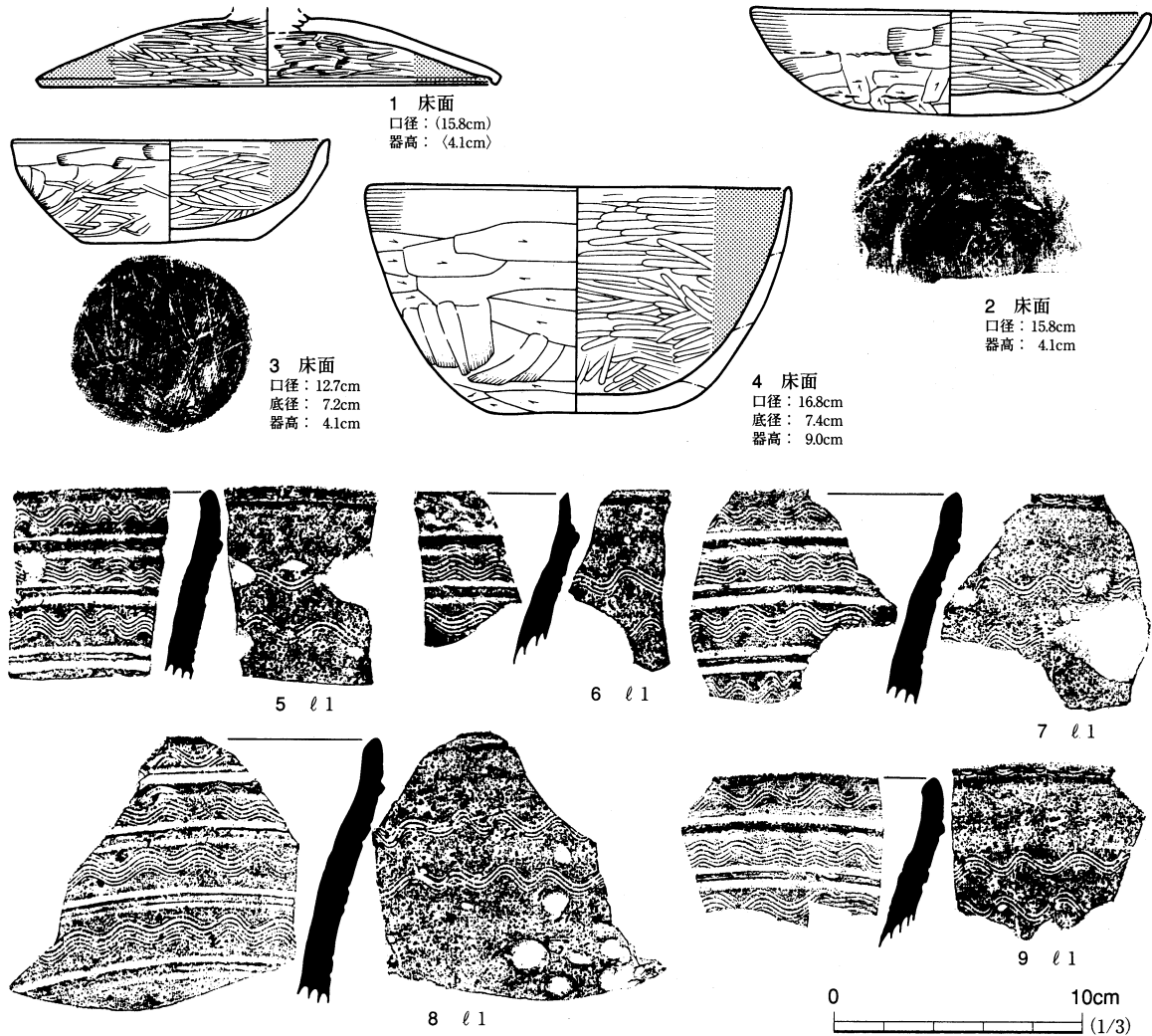


図87 27号住居跡出土遺物

内削ぎ状に平らに仕上げるものがある。文様は櫛描きの波状文を主体としている。これは、隆帯と組み合わせられ、平行して描かれている。波状文は内面にも観察された。

まとめ

本住居跡は、中型の規模に属する竪穴住居跡である。方形状に配置された柱穴を有し、しっかりした袖部を持つカマドが付設されていることから、本住居跡は、往時長期間の居住に耐えられる堅固な構造物であったと考えられる。所属時期は、出土した土師器・須恵器の特徴から、8世紀後半と推察される。

(堀川)

28号住居跡 S I 28

遺構 (図88・89, 写真59・60)

本住居跡は調査区中央やや南寄りのS12-47・48・57・58グリッドにわたって検出された。遺構が立地する地点は、標高207.6mの自然堤防上である。検出面はLⅢ上面で、暗黄褐色土で埋没した落ち込みとして確認された。34号住居跡と上下に重複し、新旧関係では、本住居跡の方が新しい。

遺構内堆積土は6層確認された。ℓ 1～5は、L IIに相当すると思われる暗褐色系の層であり、周囲から流れ込んだようなレンズ状の堆積をしていることから、自然埋没状態と思われる。ℓ 6は掘形内を埋める貼床土で、床面は本層の上面に形成されていた。

平面形は南北方向に若干長い方形を呈する。規模は現況の上端で東西長4.5m、南北長4.9mを測る。カマドと南壁を結ぶ南北方向の主軸は、真北より西に29°傾いている。貼床土で形成された住居跡中央から南東側にかけての床面は、踏み締まりもなく軟調である。その他の床面は、34号住居跡の堆積土に形成されており、おおむね平坦な状態であった。掘形は床面の南側の広い範囲に認められた。床面から掘形底面までの深さは約10cmを計測し、底面の状況は凹凸が目立つ荒掘りされた状態であった。壁は急峻に立ち上がっている。床面よりの壁の遺存高は、最大で34cmを測った。

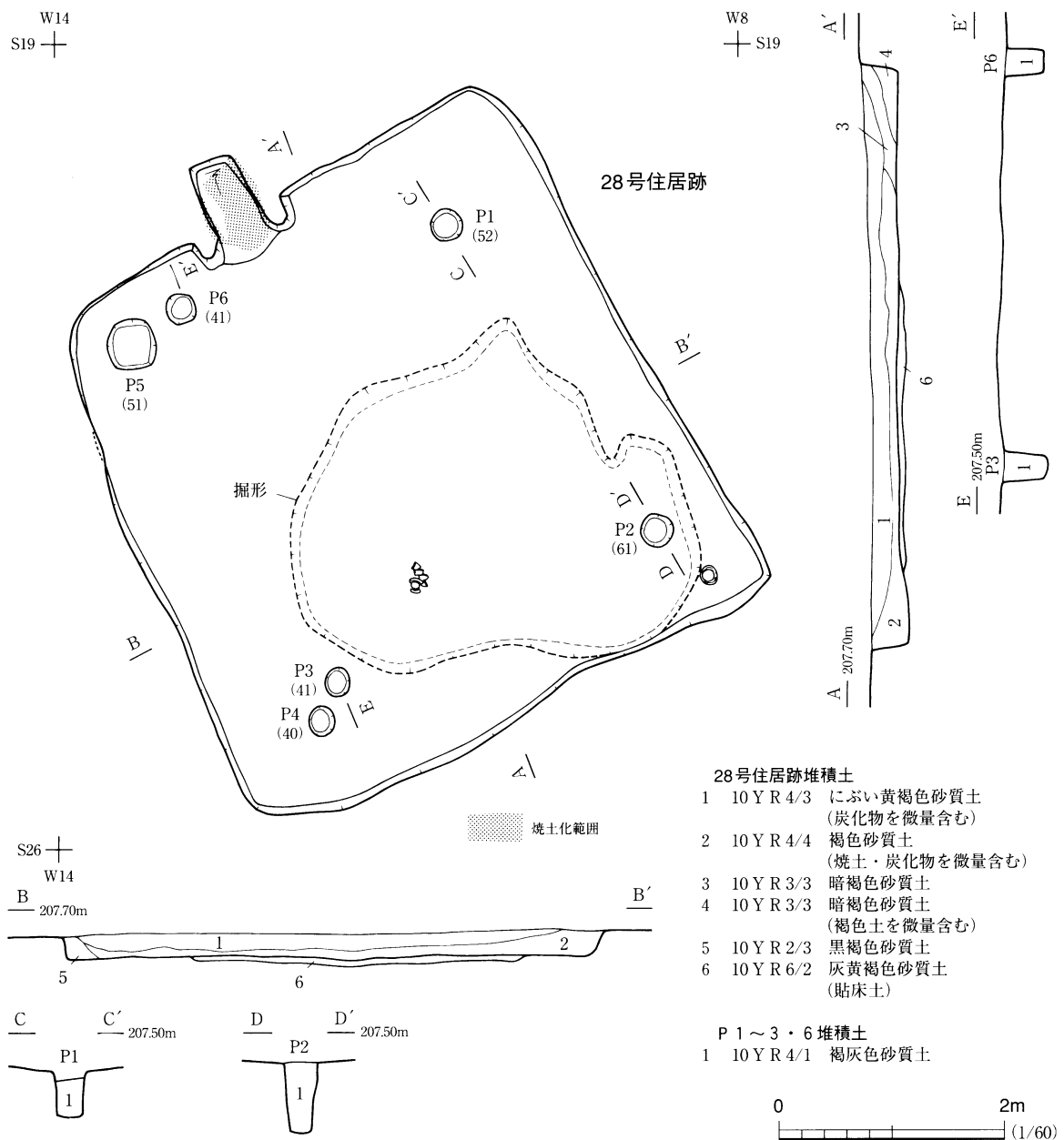


図88 28号住居跡

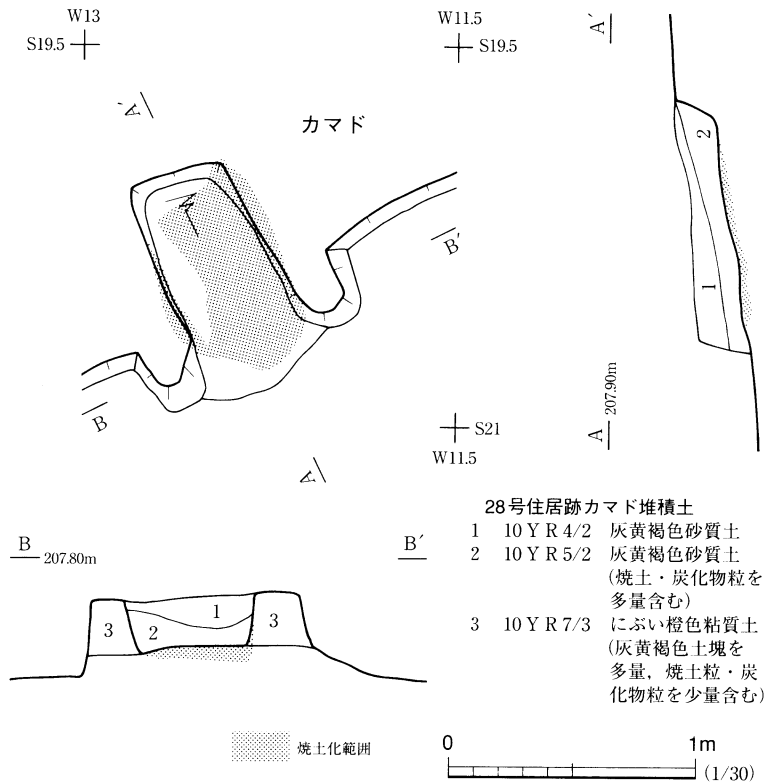


図89 28号住居跡カマド

カマドは北壁のほぼ中央に付設されていた。両袖と燃焼部が残っていたものの、煙道は完全に流失している。両袖は、床面に黄橙色の構築土を盛り上げて造られており、床面からの遺存高は約20cmを計測した。北壁からの長さは、左袖が28cm、右袖が30cmである。燃焼部は両袖の間で確認され、北半分はLⅢの堅い基盤層を掘り込んで構築されている。燃焼部の範囲は不整な台形を呈し、その規模は、焚口幅60cm、奥行90cm、奥壁幅40cmを測る。燃焼部の内壁には火熱を受けた痕跡が認められ、焼土化した部分は6cmの深さにまで達していた。燃焼部の底面は、焚口から奥壁に向かって緩やかに上り傾斜している。

柱穴と考えられるピットが5個ある。P 1～4・6とした。直径20～30cmの円形ピットで、断面形はU字状を呈し、深さは40～61cmを測る。これらは、床面の中央を囲んで方形状に配置されており、P 1－P 2間が320cm、P 2－P 4間が340cm、P 4－P 6間が380cm、P 6－P 1間が240cmある。床面の北西コーナー部で検出されたP 5は、平面形が不整な方形を呈し、規模は一辺が約40cm、深さが約50cmある。位置や形態から、貯蔵穴の可能性のあるものと判断している。

遺物 (図90, 写真107)

本住居跡から出土した遺物は、土師器1,130点、須恵器16点、鉄製品5点、鉄滓0.1kgである。このうち、土師器4点、鉄製品1点を図示した。

遺物 (図90, 写真107)

本住居跡から出土した遺物は、土師器1,130点、須恵器16点、鉄製品5点、鉄滓0.1kgである。このうち、土師器4点、鉄製品1点を図示した。

図90-1はロクロ整形された土師器の杯である。平底から口縁部が外傾して立ち上がる器形を有し、内面には黒色処理とヘラミガキが施されている。底面は切り離し後、ナデによる再調整が加えられているが、糸切り痕がかすかに観察される。

図90-2～4は土師器の甕である。2は底部付近の破片資料で、内外面ともヘラナデによる調整が施されている。3は緩やかに外反する口縁部と若干外側に膨らむ胴部を有する小型甕で、底部はやや外側に張り出している。外面は口縁部がヨコナデ、胴部がハケメによって調整され、内面は口縁部にヨコナデ、胴部にヘラナデが施されている。4も口縁部がやや外反する小型甕であるが、口縁部の立ち上がりは短い。器面調整は、外面が口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ、内面が全面ヘラナデ

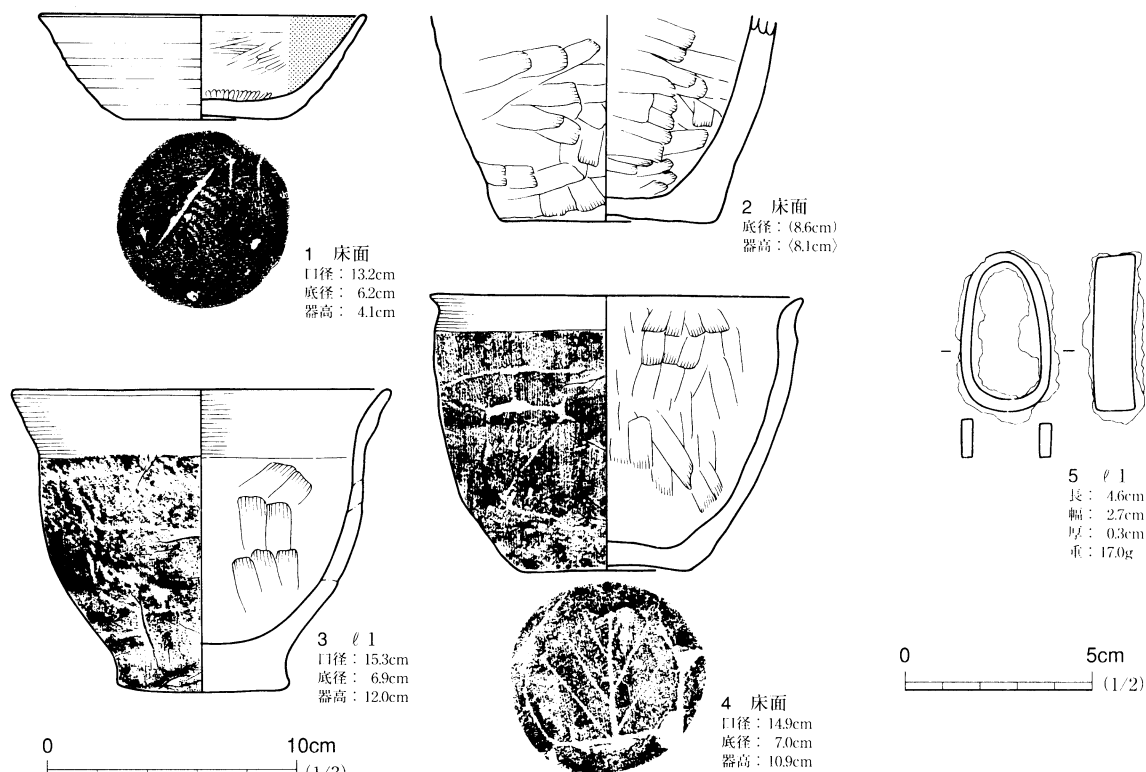


図90 28号住居跡出土遺物

である。底面には木葉痕が認められる。

図90-5は鉄製の金具である。偏平な楕円形の環を形作っている。

まとめ

本遺跡の中では、中型の部類に属する竪穴住居跡である。上屋は、方形に配置された5本の柱穴によって支えられた、しっかりとした構造物だったと推察される。カマドは北壁に付設されており、燃焼部の被熱具合から、長期間使用されたものと思われる。所属年代は、出土した土師器から8世紀後半～9世紀前半と思われる。

(小 暮)

29号住居跡 S I 29

遺 構 (図91～93, 写真61・62)

本住居跡は、調査区のほぼ中央T11-95, T12-4～6・14～16グリッドに位置する。地形的には、自然堤防の狭い平坦部上に立地している。遺構はLⅢ上面で検出した。本住居跡は、20号住居跡と重複関係にあり、本住居跡の方が新しい。また、南北壁の一部とカマド東袖は、下水管に削平されていた。

遺構内堆積土は、掘形埋土を加えると4層に区分できる。ℓ1・2は、壁際からの流入状態を示すため、自然堆積土と判断した。壁際に堆積するℓ3は、壁の崩落土と思われる。ℓ4は、掘形埋土である。方形状に掘り込んだ竪穴の底面の凹凸を、褐灰色粘土で平坦に整え床面を造っている。

本住居跡の平面形は、南北に長いゆがんだ方形を呈している。規模は南北で約6m, 東西で約

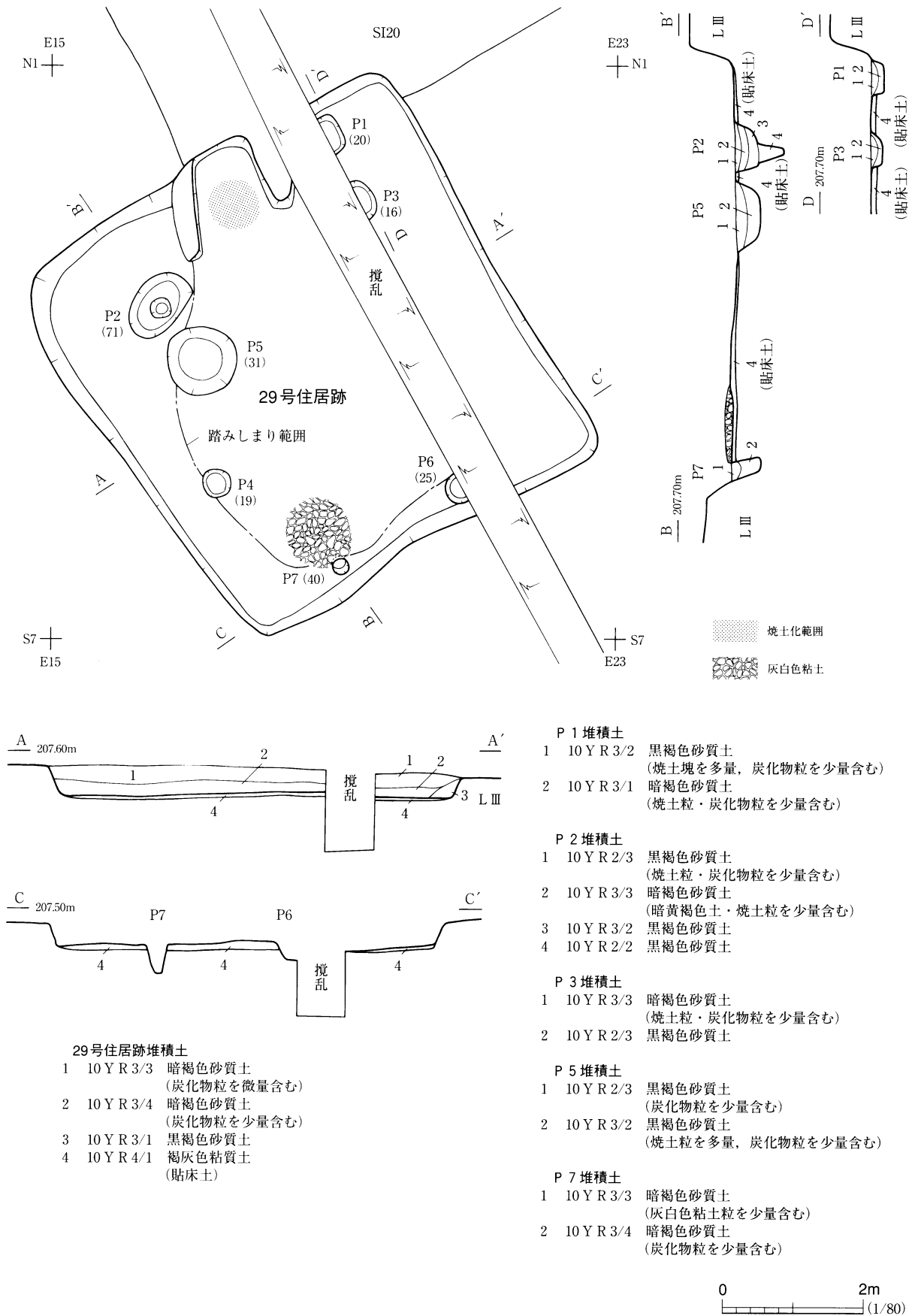


図91 29号住居跡 (1)

5.5mを測る。壁は、いずれも床面からほぼ垂直に立ち上がっている。検出面から床面までの深さは、最も残りの良い北側の壁で60cmを測る。床面はほぼ平坦に造られていたが、細かな凹凸が認められる。また、床面中央を中心として、強い踏み締まりが認められた。

住居内施設として、カマドとピット7個、粘土溜まり、床下ピットを検出した。カマドは住居跡の北壁中央に造られていた。カマドの袖は褐色砂質土を用いて構築されていた。東側の袖は北壁から1.2m、西側の袖は1.4mほど住居跡内部に張り出していた。袖の最大幅はいずれも40～45cmを測る。両袖に挟まれた燃焼部は最大長1.30m、最大幅は1.20mを測る。燃焼部底面は、カマド構築前の床面をそのまま使用していた。燃焼部底面中央は、4cmほど焼土化していた。カマド内堆積土は3層に区分した。いずれの堆積土も、カマド崩壊後のカマド上方からの流入土と判断した。

ピットは、7個を検出した。この内、カマド東側に隣接するP1・3、床面中央西寄りに位置するP5については、規模や位置から貯蔵穴と判断した。P2はカマド西側に隣接する。P2は、東西1m、南北65cm、深さ30cmほどの楕円形の土坑の底面に、直径25cm、深さ41cmの円形ピットが作られていた。P2の楕円形の土坑については、堆積土l1～3がいずれもレンズ状の堆積を示すことから、基本的に住居廃絶時には開口していたと考えられる。P2の機能については特定できない

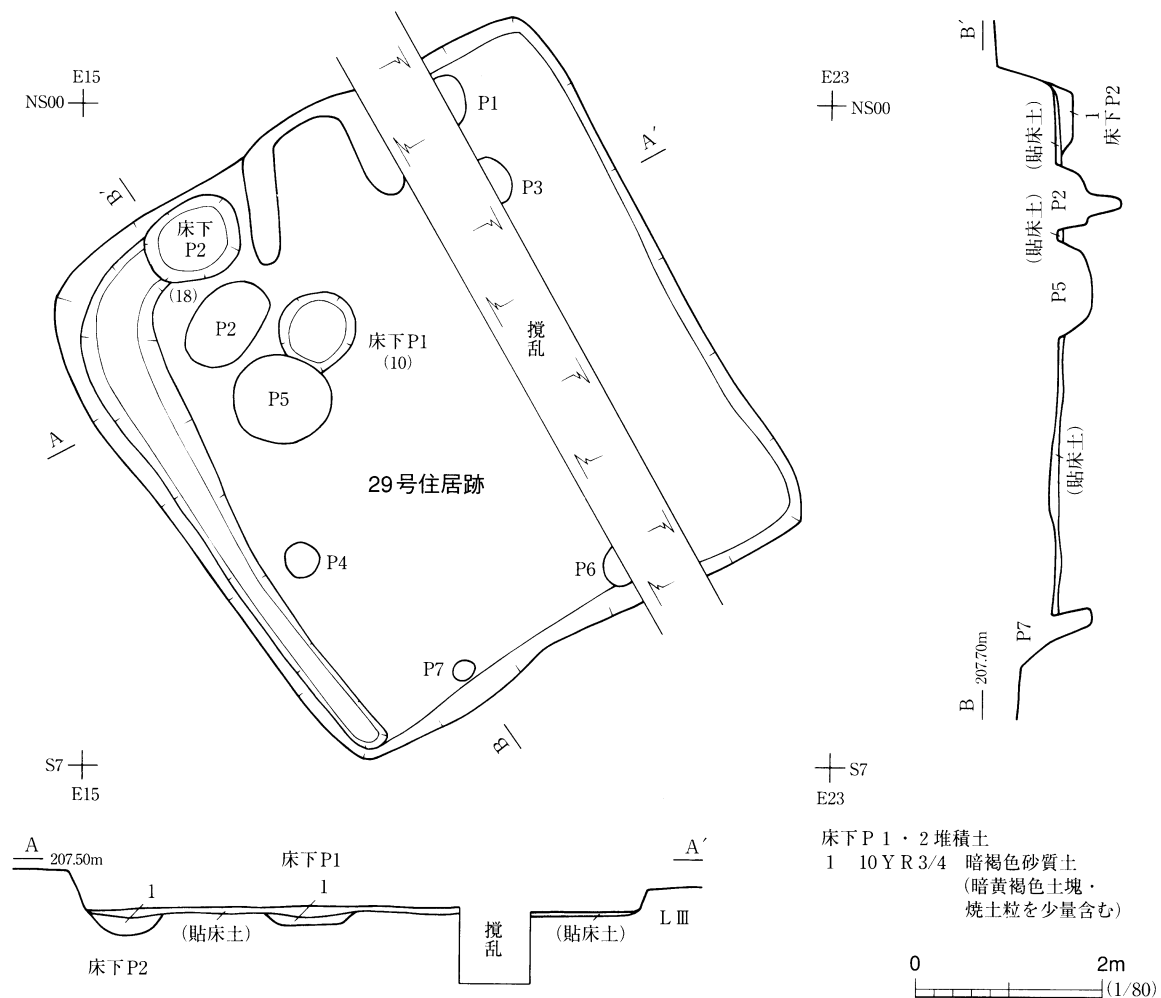


図92 29号住居跡 (2)

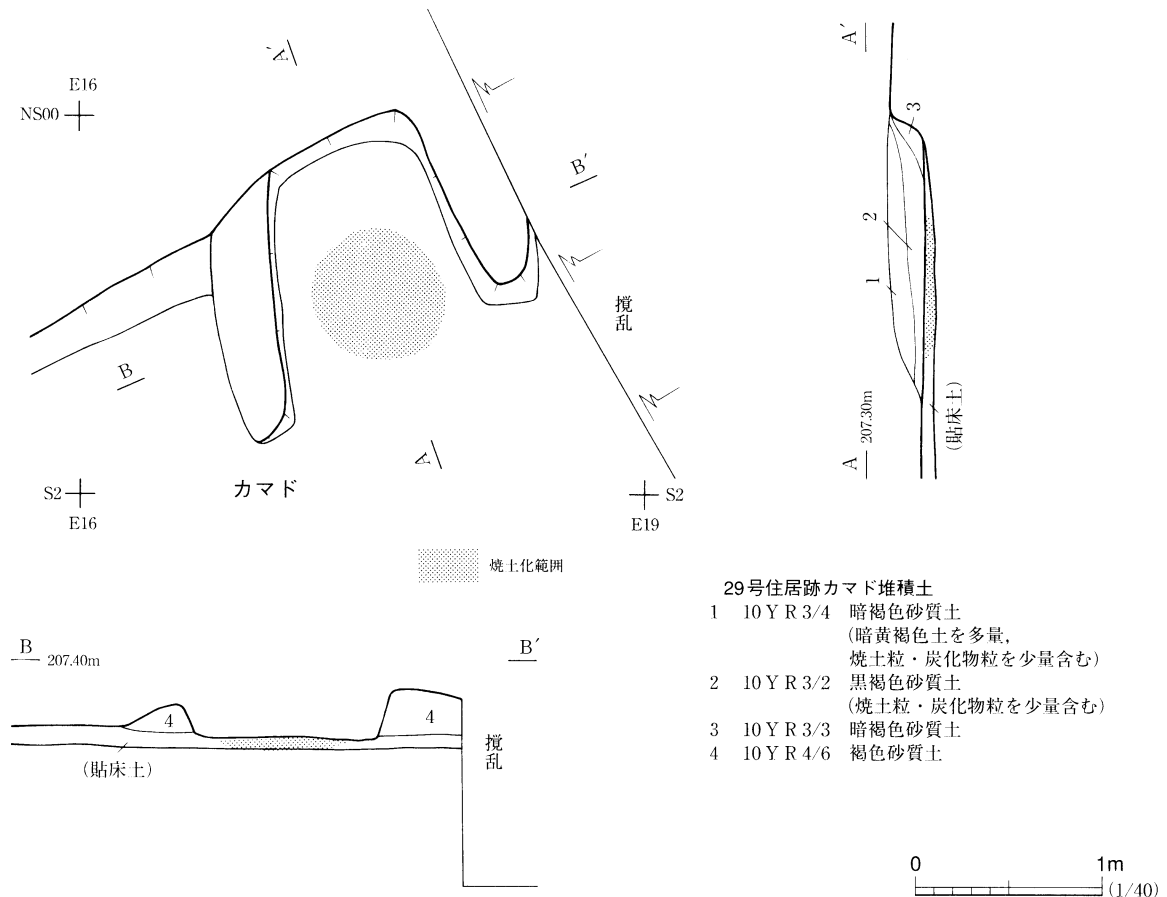


図93 29号住居跡カマド

が、断面形などからいわゆるロクロ状ピットの可能性も考えられる。その他のP4・6・7については、本住居跡の柱穴になるものと思われる。この内、南壁際中央に位置するP6・7については、位置などから、出入り口に関連する柱穴と考えられる。

また、南壁西寄り際の床面で、灰白色粘土の粘土溜まりを検出した。平面形は、直径50cmほどの円形を呈している。粘土の厚さは、検出した床面から約15cmを測る。粘土溜まりに伴う掘形などは確認されなかった。粘土溜まりの性格については特定できないが、P2がロクロ状ピットの形態をもつことから、P2に関連した施設の可能性も考えておきたい。

貼床除去後にカマド南側で床下P1、西側で床下P2を検出した。床下P2と連結して西側の壁で溝を検出している。報告では溝も床下P2として報告することとした。床下ピットは、にぶい黄褐色土塊と焼土粒を含んだ、暗褐色砂質土で埋め戻されていた。床下P1の平面形は、直径80cmの円形を呈している。深さは10cmを測る。床下P2は東西に長い楕円形を呈している。規模は、東西1.05m、南北85cm、深さ18cmを測る。また、床下P2に連結する溝は、幅35~80cm、深さ15~20cmである。これらの床下ピットは、カマドや貯蔵穴P5に隣接して造られていることから、主に除湿を目的として造られたものと考えている。

遺物 (図94, 写真109)

遺物は土師器片921点、須恵器片26点、土製品8点、鉄製品3点が出土しているが、いずれも小

片のみで、図示できたのは図94-1・2の2点のみである。1は、ロクロ整形の土師器杯である。底部から口縁部まで、ほぼ直線的に立ち上がる器形で、外面底部周辺に回転ヘラケズリ、内面には黒色処理とミガキが施されている。2は土鈴である。紐部分は、山形状に摘み出されている。

まとめ

本住居跡は、平面形が南北に長い不整な方形を呈し、規模が南北で6m、東西で5.5mと比較的大型の住居跡である。住居内施設としてカマドとピット、粘土溜まりなどを検出した。また、本調査区内で唯一、住居跡床面に伴う土鈴が出土している。本住居跡の所属時期は、出土した土器や20号住居跡との重複関係などから判断して、9世紀前葉に属するものと考えている。(大河原)

30号住居跡 S I 30

遺 構 (図95, 写真63・64)

本住居跡は調査区中央部南寄りのT12グリッドに位置し、ほぼ平坦な地形に構築されている。住居プランの南側が調査区外に伸びるため、北半部のみの調査となる。また、プラン検出時には床面がほぼ露出しており、カマドも消失し、周壁も南西壁の一部が残存するだけで遺存状態は良くない。29号住居跡と重複関係にあり、本住居跡の方が古い。周囲には、北西3.2mに20号住居跡が近接している。

検出面はLⅢ上面である。遺構内堆積土は4層に区分した。ℓ1はLⅡbに近似する褐色砂質土、ℓ2・3は壁側からの自然流入土で、ℓ3に多量に含まれる粘質土は消失したカマドの構築土が混入したものと考えられる。また、ℓ4は貼床土である

平面プランは、隅丸方形を呈すると推定される。規模は、南西壁の遺存値が2.2m、北東と南西を結ぶラインが6.3mを測る。南西壁の方向はN30°Wを示している。残存する南西壁は75°と急激に立ち上がり、遺存高は20cm程度を測る。床面はおおむね平坦で、貼床が施されているが強い踏み締まりは認められなかった。壁溝・壁柱は検出されなかった。

ピットは、床面から1個検出された。調査区外に伸びるため、平面形は明らかにできなかったが、隅丸方形を呈するものと推定される。遺存する規模は、長軸80cm、短軸70cm、床面からの深さ約15cmを測る。ピット内の堆積土も自然に流入したもので、規模から貯蔵穴ではないかと考えている。

本住居跡の床面からは、赤褐色に変色した焼土の分布が2箇所確認された。住居プランの北東隅から検出された焼土は、直径約70cmの円形を呈し、床面からの厚さは最大で8cmである。住居プラン

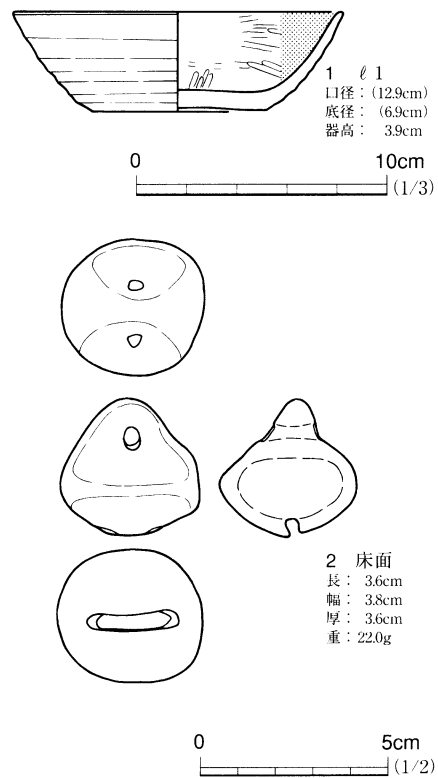


図94 29号住居跡出土遺物

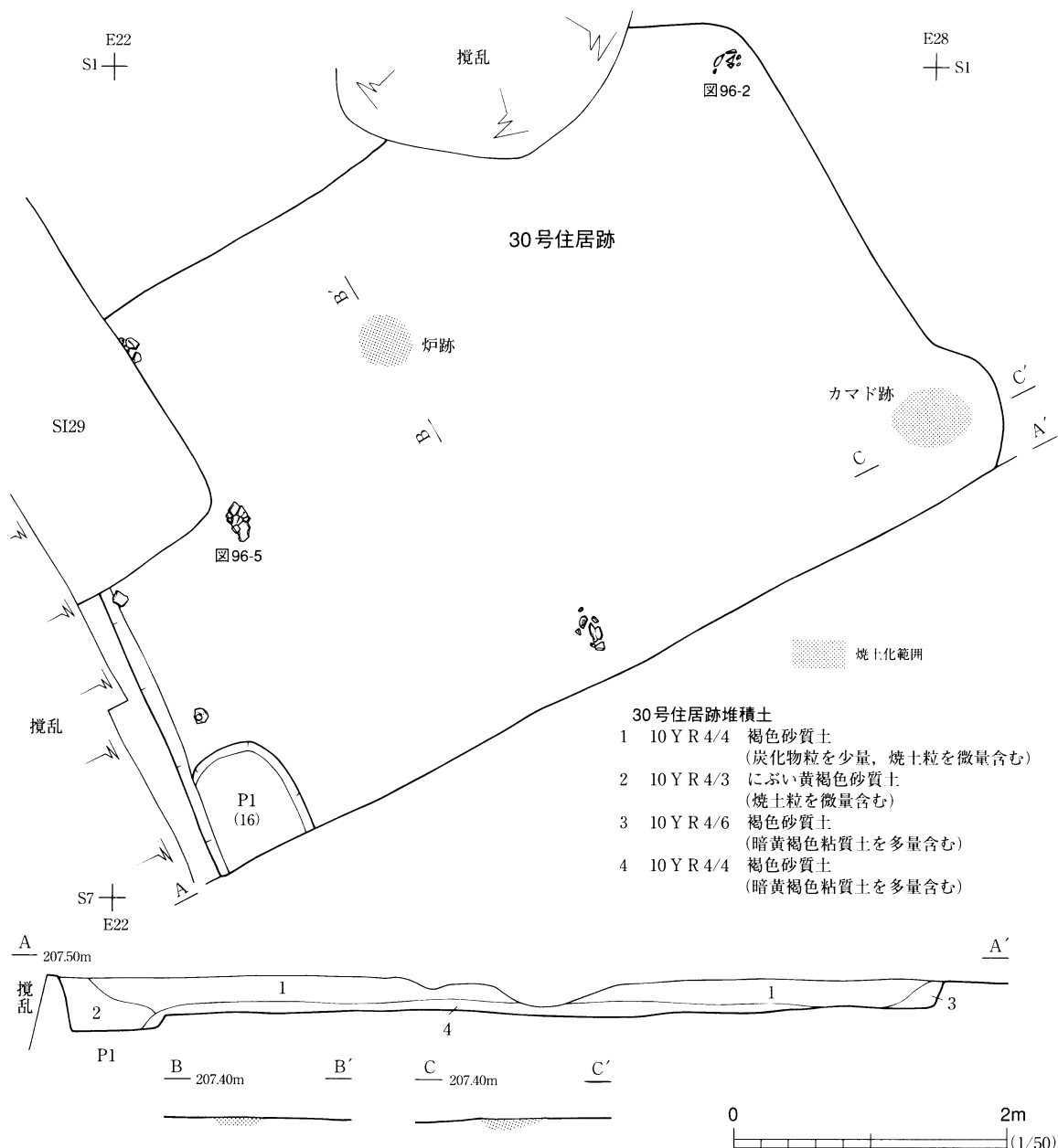


図95 30号住居跡

ンにおける位置から、消失したカマドの痕跡ではないかと考えている。もう1箇所は、住居プラン北西辺から約1 m内側に入った位置にある。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸70cm、短軸55cm、厚さ約6 cmを測る。カマド以外に火を使用した痕跡で、炉跡の可能性が考えられる。

遺物 (図96, 写真109)

本遺構から土師器313点、石製品1点が出土している。図96-1～3は土師器杯で、いずれも有段丸底の器形を呈し、内面にはヘラミガキ後に黒色処理が施されている。1は口縁部と体部の段がくびれる特徴を有する。外面の調整は、口縁部にヨコナデ後に一部ハケメ、体部にヘラケズリが施されている。2・3は口縁部が直線的に外傾する器形を呈し、外面の調整は、口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施されている。3の口縁部外面には粘土紐の積み上げ痕が観察される。

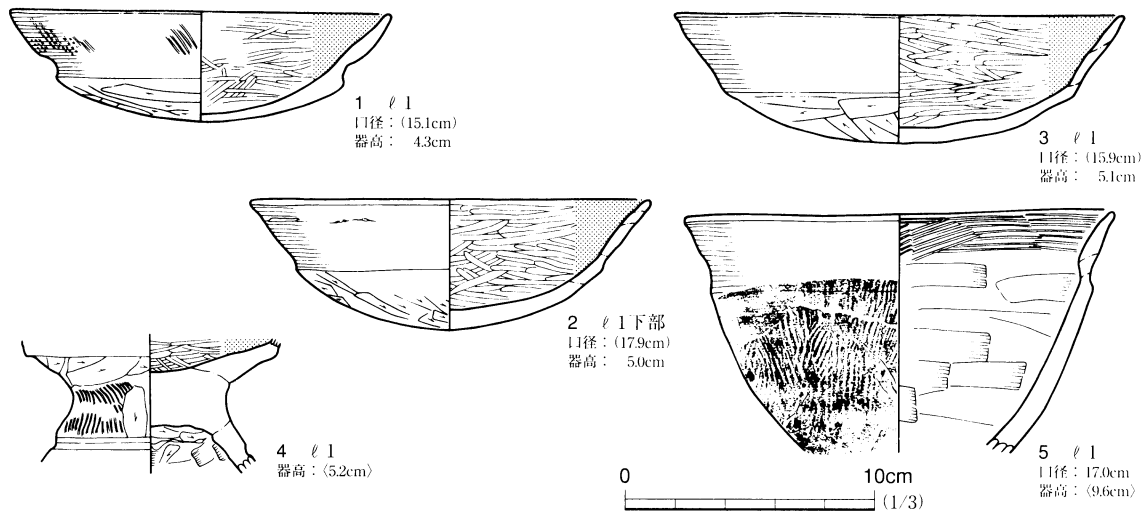


図96 30号住居跡出土遺物

図96-4は高杯の脚部で、脚部と底部の境に沈線による段を有する。外面の調整は、脚部上半にヘラケズリ、下半にハケメが施されている。杯部内面にはヘラミガキ後に黒色処理がなされ、底部内面にヘラケズリとヘラナデが施されている。

図96-5は口縁部に最大径を有する中型の土師器甕で、底部を欠損している。器形は、胴部で緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部と胴部の間にくびれを有し、口縁部が外反する。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、胴部にハケメが施されている。内面は、口縁部にハケメ、胴部にヘラナデが施されている。

まとめ

本遺構は、床面と周壁の一部が残存する遺存状態の悪い竪穴住居跡である。南半部が調査区外に伸びるため全体は明らかにできなかった。所属時期は、出土遺物の特徴から6世紀後半から7世紀後半にかけてと考えている。

(成田)

31号住居跡 S I 31

遺構 (図97, 写真65)

本住居跡は、調査区のほぼ中央T11-85・95グリッドに位置する。地形的には、自然堤防の狭い平坦部に立地している。20号住居跡の貼床を除去した後、同住居跡北壁周辺で暗褐色土の不整な方形の広がりとして検出した。本住居跡は20・32号住居跡と重複関係にあり、20号住居跡より古く、32号住居跡より新しい。

遺構内堆積土は、掘形埋土を加えると2層に区分できる。ℓ1の堆積過程については断定出来ないが、不自然な混入物などが入っていないことから、基本的には自然堆積と考えている。ℓ2は、掘形埋土である。

本住居跡の平面形は、一辺が約2.9mのゆがんだ正方形を呈している。壁は、南北側の壁でやや急に、東西側の壁で比較的緩やかに立ち上がっている。検出面から床面までの深さは、15~20cmを

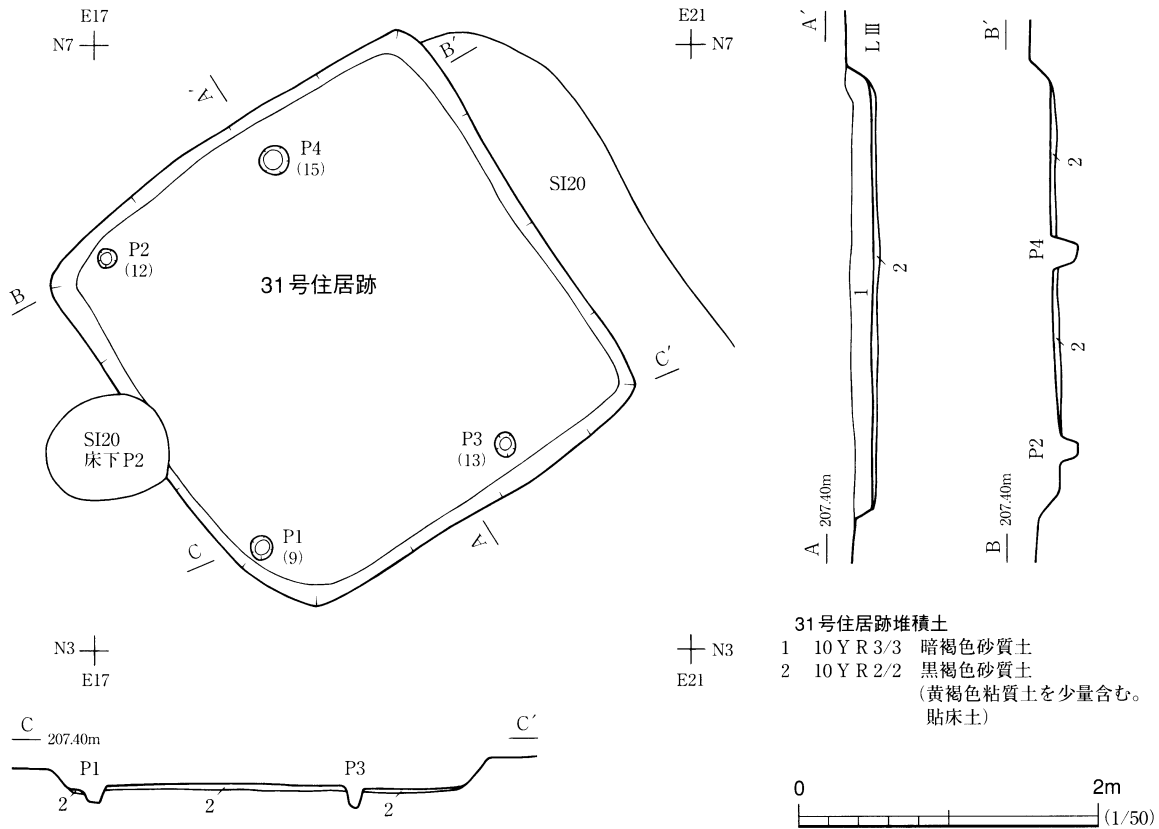


図97 31号住居跡

測る。床面はほぼ平坦に造られていたが、床面中央で細かな凹凸が認められる。

住居内施設として、南・北・西壁際でピット4個を検出した。ピットの平面形は、直径10~20cmの円形を呈している。床面からの深さは9~15cmである。これらのピットについては、規模もほぼ同一で、ほぼ方形に配置されていることから柱穴と考えている。その他の施設は検出されなかった。

遺物

遺物は縄文土器片1点、土師器片52点、土製品1点が出土しているが、いずれも細片のみで図示できなかった。

まとめ

平面形がほぼ正方形を呈した住居跡である。住居内施設として、柱穴と考えられるピット4個を検出した。その他、本住居跡に伴う施設は確認出来なかった。本住居跡の所属時期は、出土遺物がいずれも細片であったため特定できないが、重複関係などから20号住居跡より古く、32号住居跡より新しく位置付けられる。

(大河原)

32号住居跡 S I 32

遺構 (図98・99, 写真67・68)

本住居跡は、調査区中央T11-85・86・95グリッドに位置する。地形的には、阿武隈川右岸沿いに形成された自然堤防の狭い平坦部に立地している。遺構は31号住居跡の貼床を除去した後、同

住居跡の掘形底面を精査した時に、黒褐色土の方形の広がりとして検出した。本住居跡は20・31号住居跡と重複関係にあり、本住居跡が最も古く位置付けられる。

遺構内堆積土は、掘形埋土を加え3層に区分した。壁際からの流入状態を示す ℓ 1・2については、いずれも自然堆積土と判断した。 ℓ 3は掘形埋土である。竪穴を方形に掘り込み、暗黒褐色砂質土で、掘形底面の凹凸を埋め戻し住居の床を整えている。

本住居跡の平面形は、東西に長い方形を呈している。規模は、南北約2.9m、東西約3.5mを測る。壁はいずれもほぼ垂直に立ち上がり、床面からの高さは20~30cmを測る。床面はほぼ平坦に造られ、カマド周辺を中心に強い踏み締まりが認められた。

住居内施設として、カマドとピット、床下ピットなどを検出した。カマドは住居跡の東壁北端に造られていた。カマドの袖は暗褐色粘質土に褐色粘質土を積み上げ構築されていた。袖の長さは北側で86cm、南側の袖で75cm、最大幅は北側で30cm、南側で25cmを測る。燃焼部は最大長90cm、最大幅35cmを測る。燃焼部底面は、カマド構築前の床面をそのまま使用していた。燃焼部底面と両袖

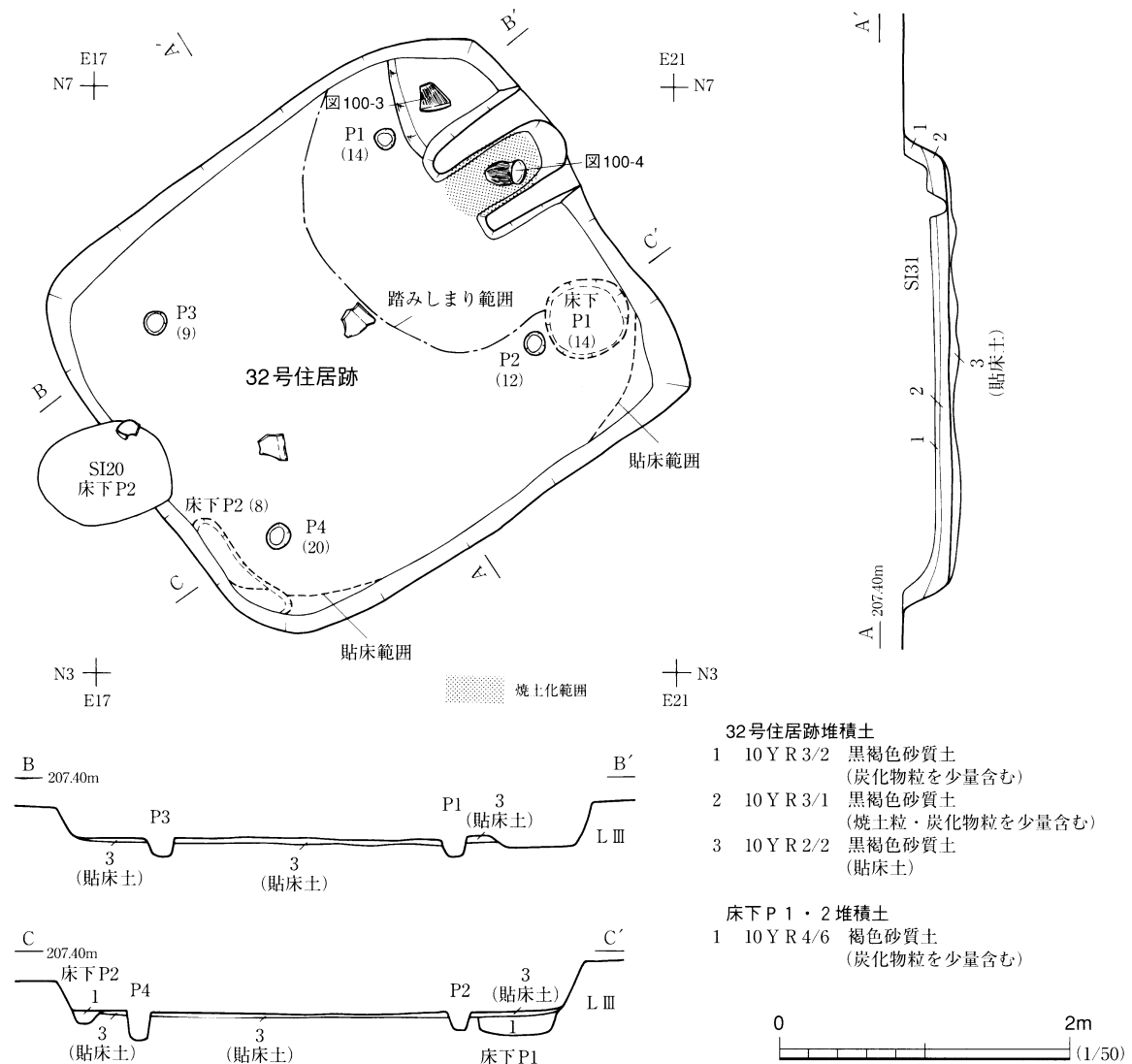


図98 32号住居跡

の内側が最大で、5cm程焼土化していた。

カマド内堆積土は2層に区分した。ℓ1はカマド崩壊後の流入土で住居内堆積土ℓ2に相当するものと思われる。ℓ2については、黄褐色粘土を多量に含むことなどから、天井崩落土と判断した。また、ℓ2上面～燃焼部底面で横倒し状態で甕(図100-4)が出土している。出土状況から、カマド天井に据え置かれたものではなく、カマド廃棄に伴う儀礼に関する土器と判断した。

ピットは、全部で4個検出した。ピットの平面形は直径15cm前後の円形を呈し、深さは9~20cmを測る。これらのピットは、深さにばらつきはあるものの、ほぼ住居跡各隅の対角線上に位置し、ほぼ方形に配置されている。また、南北に対峙するP1・2間とP3・4間で1.7m、東西に対峙するP1・3間とP2・4間で2mと等間隔に配置されていることなどから、本住居跡の上屋を支える柱穴と判断した。

また、カマド北側の袖に隣接して、浅い掘り込みが確認された。底面からは甕(図100-3)が出土している。この掘り込みについては、掘り込みが10cmと比較的浅いものの、位置や規模などから本住居跡の貯蔵穴と考えている。

貼床除去後に東西の南壁隅で床下ピットを検出した。床下P1は、東壁の南隅に位置する。平面

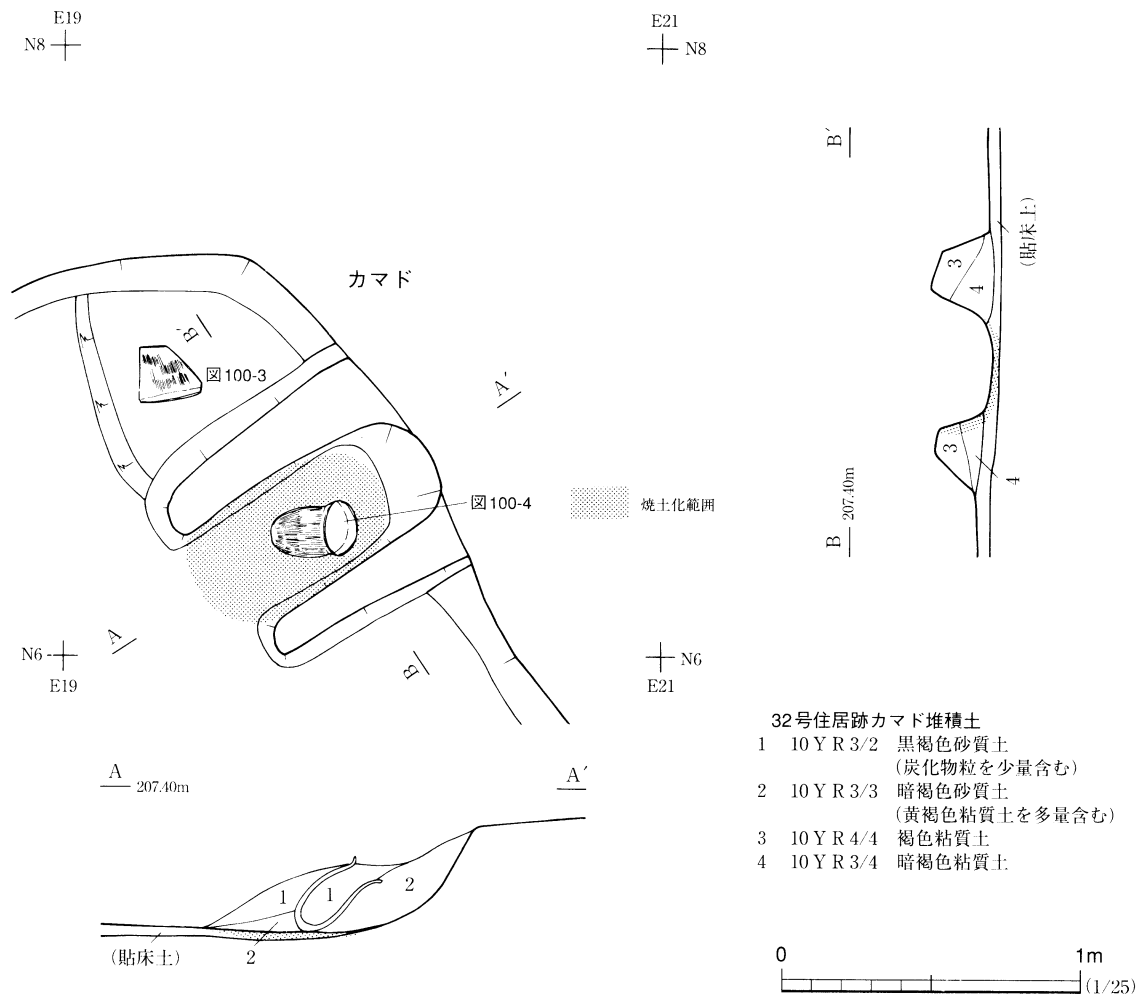


図99 32号住居跡カマド

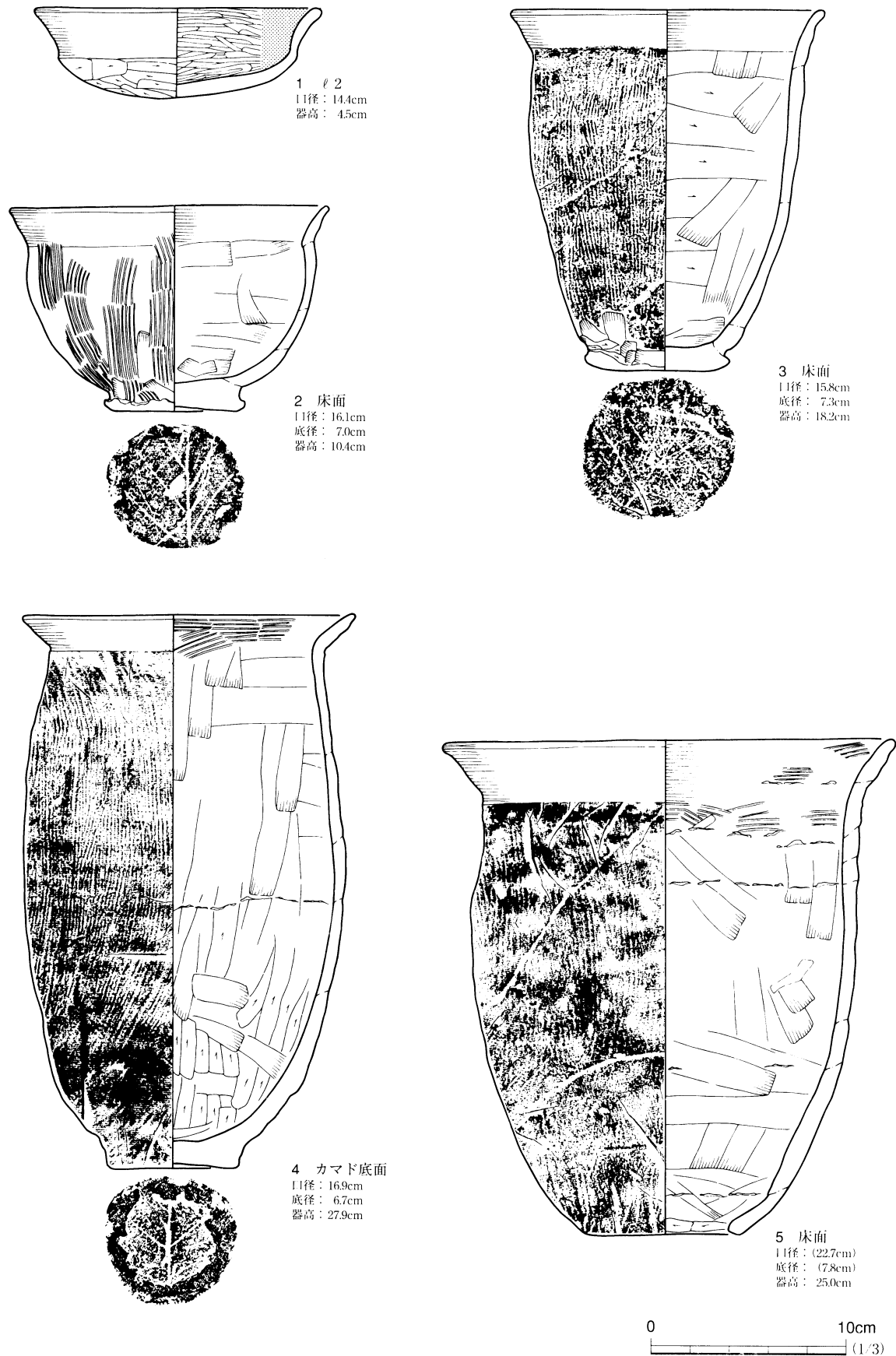


図100 32号住居跡出土遺物

形は、直径50cmの円形を呈している。深さは14cmを測る。床下P2は、西壁の南隅沿いに位置する溝状のピットである。規模は長さ90cm、幅10～18cm、深さ8～10cmを測る。これらの床下ピットの機能については、主に除湿を目的としたものと考えられる。

遺物 (図100, 写真109)

遺物は土師器片281点、須恵器片4点、土製品2点が出土している。図100-1は非ロクロ整形の土師器杯である。底部はケズリで丸底に仕上げられ、体部中央にケズリによる段が形成される。口縁部外面にナデ、内面には黒色処理とヘラミガキが施されている。

図100-2～3は非ロクロ整形の甕、図100-5は非ロクロ整形の甑である。これらの土器の器面の調整は主に、口縁部の内外面にヨコナデ、体部の外面に条線状のハケメ、内面にヘラナデが施されるものが多い。また、底面に木葉痕を残す。図100-2は小型の甕である。胴部上半に膨らみを持ち、口縁部が緩やかに外反して立ち上がる器形となる。図100-3は中型甕である。底部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がり、口縁部が緩やかに外反する器形である。図100-4は大型の甕である。胴部中央に緩やかに膨らみを持ち、口縁部が「く」字状に外反する器形である。

図100-5は、床面中央で出土した甑である。器形は、胴部が直線的に立ち上がり、口縁部が緩やかに外反する。また、底部付近が丸みを帯びてすぼまっている。

まとめ

本住居跡は、平面形が東西に長い方形を呈している。他の住居跡のカマドが北・西壁に付随するのに対し、本住居のカマドは東側の壁に造られているのが特徴的である。その他、柱穴と考えられるピットなどを検出した。本住居跡の所属時期は、遺構内から出土した土器などから判断して、7世紀初頭頃に位置付くものと考えている。 (大河原)

33号住居跡 S I 33

遺構 (図101, 写真66)

本住居跡は、調査区南端S12-68・69・78・79グリッドに位置する。地形的には、阿武隈川右岸沿いに形成された自然堤防の平坦部上に立地している。遺構は22・23号住居跡の貼床を除去した後、掘形底面の精査をした時に、黄褐色土の広がりとして検出した。2軒の遺構と重複しているため、検出できたのは床面のみである。また、20・32号住居跡との重複関係では、本住居跡が最も古く位置付けられる。

遺構内堆積土は、掘形埋土1層である。①は掘形埋土である。黄褐色粘土で掘形底面の凹凸を埋め戻し、住居の床を整えている。本住居跡の平面形は、遺存する床面から判断して方形を呈していたと考えられる。遺存する床面は、遺存値で南北約3.5m、東西約1.85mを測る。遺存する床面は、ほぼ平坦に作られ、床面北側に位置するP1周辺で強い踏み締まりが認められた。住居内施設として、ピット、床下ピットを検出した。ピットは、全部で2個検出した。P1は、床面北側に位置している。平面形はゆがんだ楕円形を呈している。規模は東西1m、南北90cm、深さ31cmを測る。

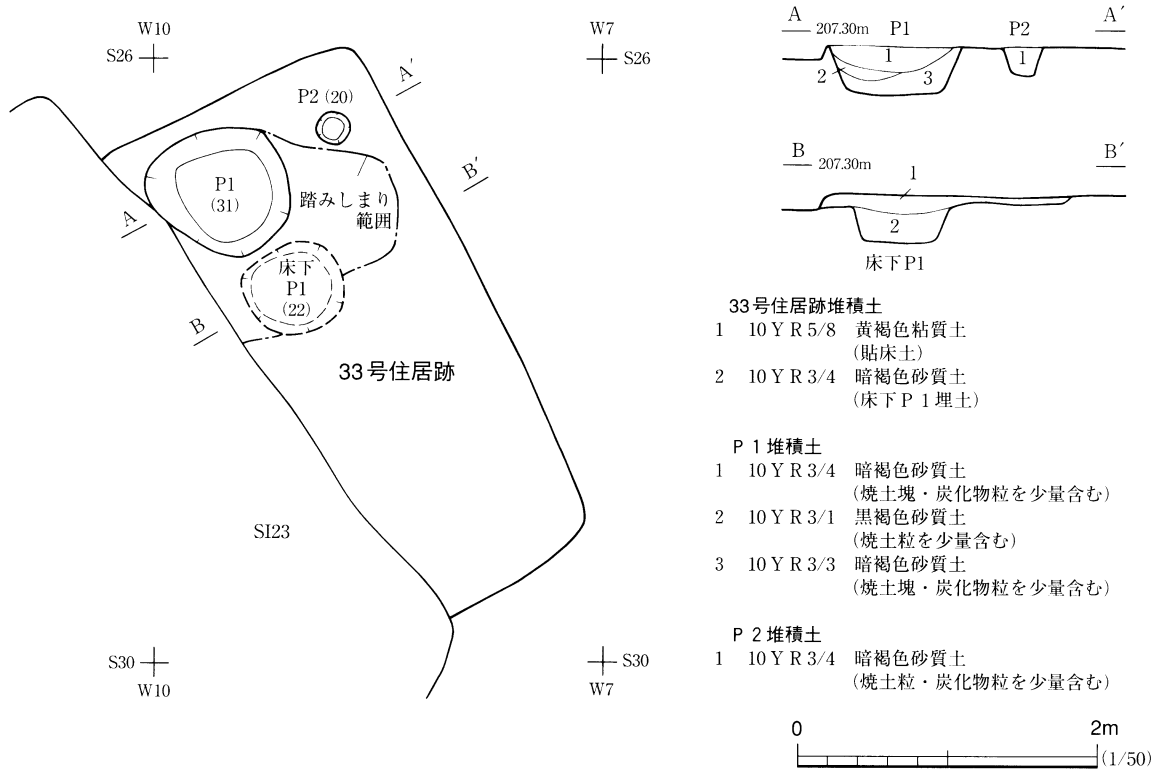


図101 33号住居跡

P 1 は、焼土塊を含むものの、堆積過程が自然堆積を示すことから、住居機能時には開口していたと考えられる。P 1 の機能については、規模などから貯蔵穴的機能をもった施設と考えられる。P 2 は、P 1 の東側に隣接して位置する。ピットの平面形は、直径22cmの円形を呈している。深さは20cmを測る。P 2 の機能については不明である。

また、貼床除去後に P 1 の南側で床下ピットを検出した。平面形は、直径70cmの円形を呈している。深さは20cmを測る。床下 P 1 については、住居内の除湿などを目的にしたものと考えられる。

遺物

遺物は土師器片30点を出土しているが、いずれも細片であったため、図示できなかった。

まとめ

本住居跡は、22・23号住居跡と重複しているため、検出できたのは床面のみである。また、住居内の施設はピット2個と床下ピットを検出しただけである。本住居跡の所属時期は、出土遺物がいずれも細片であったため時期を特定できないが、重複関係などから判断して、22・23号住居跡より古く位置付くものと考えている。 (大河原)

34号住居跡 S I 34

遺構 (図102, 写真69・70)

調査区中央よりもやや南西に位置する S 12-47・48・57・58グリッドで検出された竪穴住居跡である。本住居跡は、標高207.6mの自然堤防上に立地し、周囲には遺構が密集している。東に約4

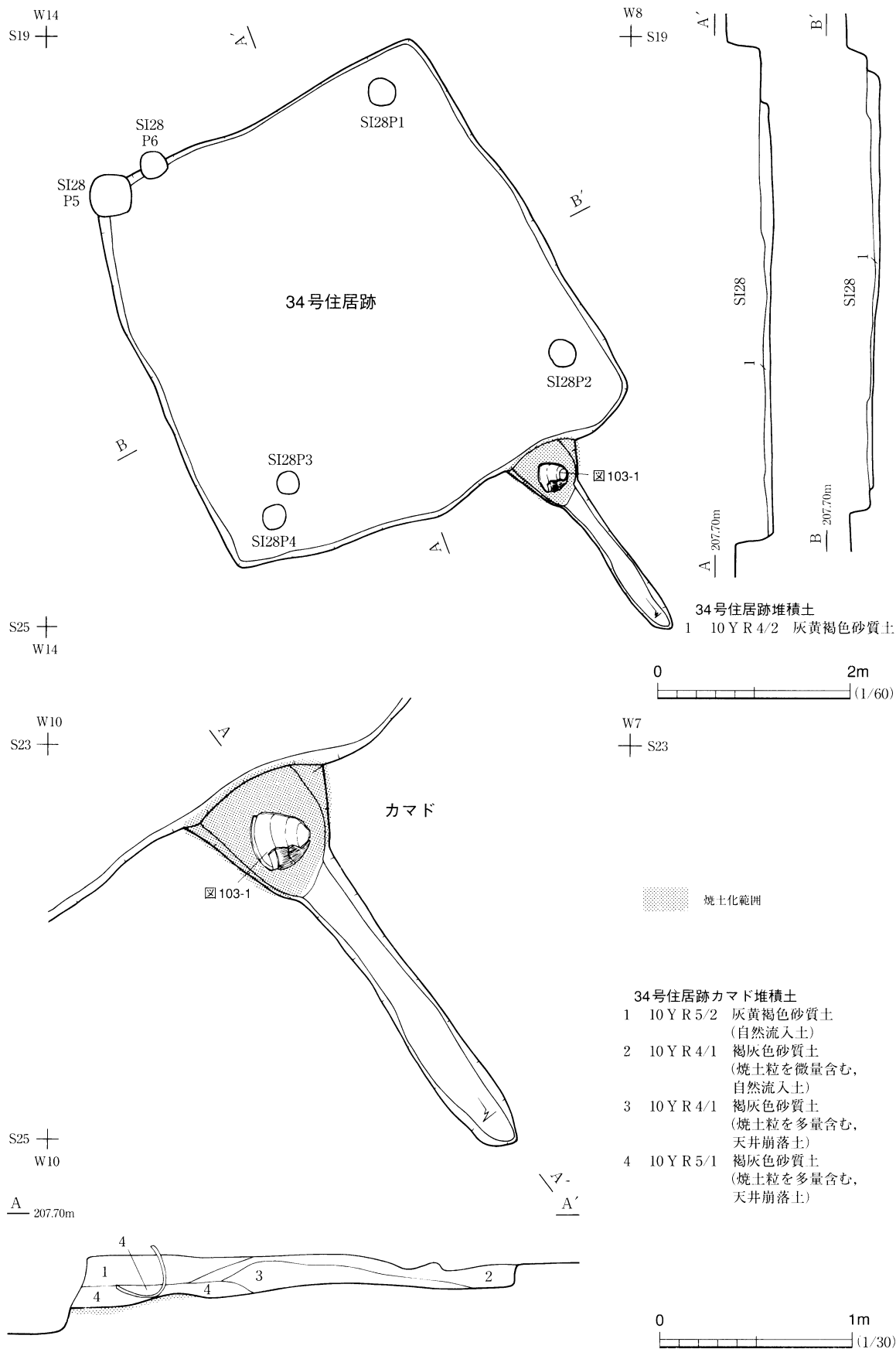


図102 34号住居跡

m離れた地点に25・26号住居跡，南に約2m離れた地点に22・23号住居跡がある。また，西側に隣接して3号建物跡が検出された。本住居跡は，28号住居跡と上下に重複しており，新旧関係では本住居跡の方が古い。検出されたのは，28号住居跡の床面で，灰黄褐色土で埋没した不整形の落ち込みとして確認された。

遺構内堆積土は1層で，LⅡに該当する灰黄褐色系の砂質土が堆積している。この層は，層中に混入物を含まない純粋な単層であることから，自然埋没状態と思われる。

遺構の上部が28号住居跡によって攪乱を受けて削平されているものの，ほぼ全体形を把握することができた。平面形は，南北方向に若干長い不整な長方形を呈する。規模は現況の上端で東西長4.2m，南北長4.4mを測る。

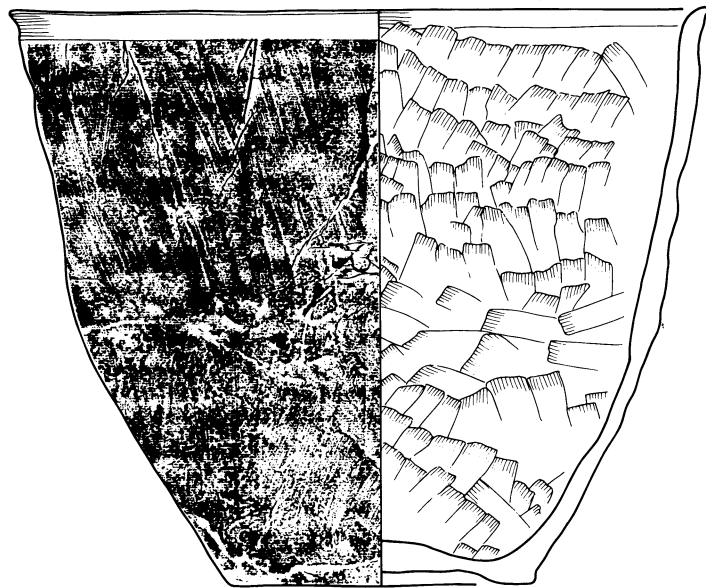
床面は純粋なLⅢで形成されていることから，堅固で安定している。若干の凹凸が認められるものの，ほぼ平坦な状態であった。壁は南壁が緩やかに立ち上がり，北壁が急角度で立ち上がっている。床面からの壁の遺存高は，場所によってかなり異なっており，カマド付近が35cmと最も残りがよく，その他は5cm前後と低くなっている。

カマドを1基，南壁の南東コーナー付近で検出した。袖部は遺存していなかったが，燃焼部と煙道を確認することができた。確認できた燃焼部は，幅77cm，長さ60cm程で，非常に堅く締まった赤褐色の焼土化範囲として検出できた。被熱痕跡は4cmの深さにまで達していた。燃焼部の底面はほぼ平坦で，奥壁は緩やかに傾斜して煙道に続いている。燃焼部に堆積した土は，天井崩落土と流入土で，焼土を含んでいた。煙道はその大部分が遺存し，LⅢをトンネル状に掘り抜いて構築されている。現況では溝状を呈し，規模は上端幅が21～27cm，燃焼部南端から先端部までの長さが170cm，煙道底面からの高さが16cmを計測する。カマドの燃焼部からは，土師器の甕が1個横倒しの状態で出土した。

遺物 (図103)

本住居跡から出土した遺物は，土師器171点，須恵器2点である。このうち，土師器1点を図示した。

図103-1は大型の甕である。器



1 カマド底面
口径：27.9cm
底径：12.2cm
器高：22.7cm



図103 34号住居跡出土遺物

形は口縁部が短く外反し、胴部があまり膨らまない。外面の調整は口縁部がヨコナデ、胴部がハケメである。内面は口縁部にヨコナデ、胴部にヘラナデが施されている。

まとめ

本遺構は、南壁にカマドを有する中型の竪穴住居跡である。カマドの被熱具合から、長期間にわたって居住が行われていたものと推測される。所属時期は、出土した土師器の年代観や28号住居跡との重複関係から、8世紀後半以前と思われる。(小 暮)

35号住居跡 S I 35

遺 構 (図104・105, 写真71・72)

本住居跡は調査区の中央から、やや南に寄ったS12-75・76・85・86グリッドに位置している。本住居跡が立地する地点は、標高207.6m前後の自然堤防上で、比較的平坦な場所である。検出面は、LⅢ上面で、暗黄褐色土で埋没した不整形の落ち込みとして確認できた。本住居跡の北東側は、1号溝跡によって大きく破壊されている。

遺構内堆積土は4層に分層できた。ℓ1～3はLⅡに該当すると思われる暗褐色系の層で、堆積状況は自然埋没状態を示している。ℓ4は掘形内を埋める貼床土で、床面の一部は、本層の上面に形成されていた。

平面形は不整な方形を呈するものと思われる。規模は現況の上端で、東西遺存長3.4～4.7m、南北長6.2mを測る。床面は遺構の中央が貼床土、その他が基盤層のLⅢで形成されている。全体的に堅固で安定しており、平坦な状態であった。掘形は床面のほぼ中央で認められた。床面から掘形底面までの深さは約5cmを計測し、底面の状況は凹凸のある荒掘りされた状態であった。壁は急峻に立ち上がっており、床面から検出面までの遺存高は、最大で34cmである。

カマドは北壁に付設されていた。両袖・燃焼部を遺存しているが、煙道は完全に流失していた。袖部は、黄褐色系の土を積み上げて構築されていた。両袖の遺存長は左袖が64cm、右袖が70cmあり、床面からの遺存高は左袖が26cm、右袖が22cmを測る。燃焼部の規模は、焚口幅65cm、奥行70cmで、奥壁に向かって幅が狭くなる平面台形を呈している。焚口付近は強く焼けており、赤褐色の被熱痕跡は底面、袖部とも約4cmの深さにまで達していた。底面は焚口から奥壁に向かって緩やかに上り傾斜している。燃焼部に堆積した土は、天井崩落土と流入土で、焼土と炭化物を含んでいた。燃焼部の中央からは土師器の甕が2個並んだ状態で出土し、焚口付近からはカマドの天井を支えていたと考えられる円筒形の土製品が出土している。また、左袖の脇では土師器の甕が1個、横倒しの状態で出土した。

本住居跡の床面上では、ピットが4個検出された。P2・3は形態や規模、検出された場所を考えると、支柱穴の可能性が高い。平面形はP1が不整楕円形、P2が不整円形を呈し、断面形はともにU字状をなしている。P1は長軸60cm、短軸50cm、深さ32cmを測り、P2は直径42cm、深さ39cmを計測した。P1-P2間は380cmある。P3・4は、カマドの西側に付属して設けられ、深さ

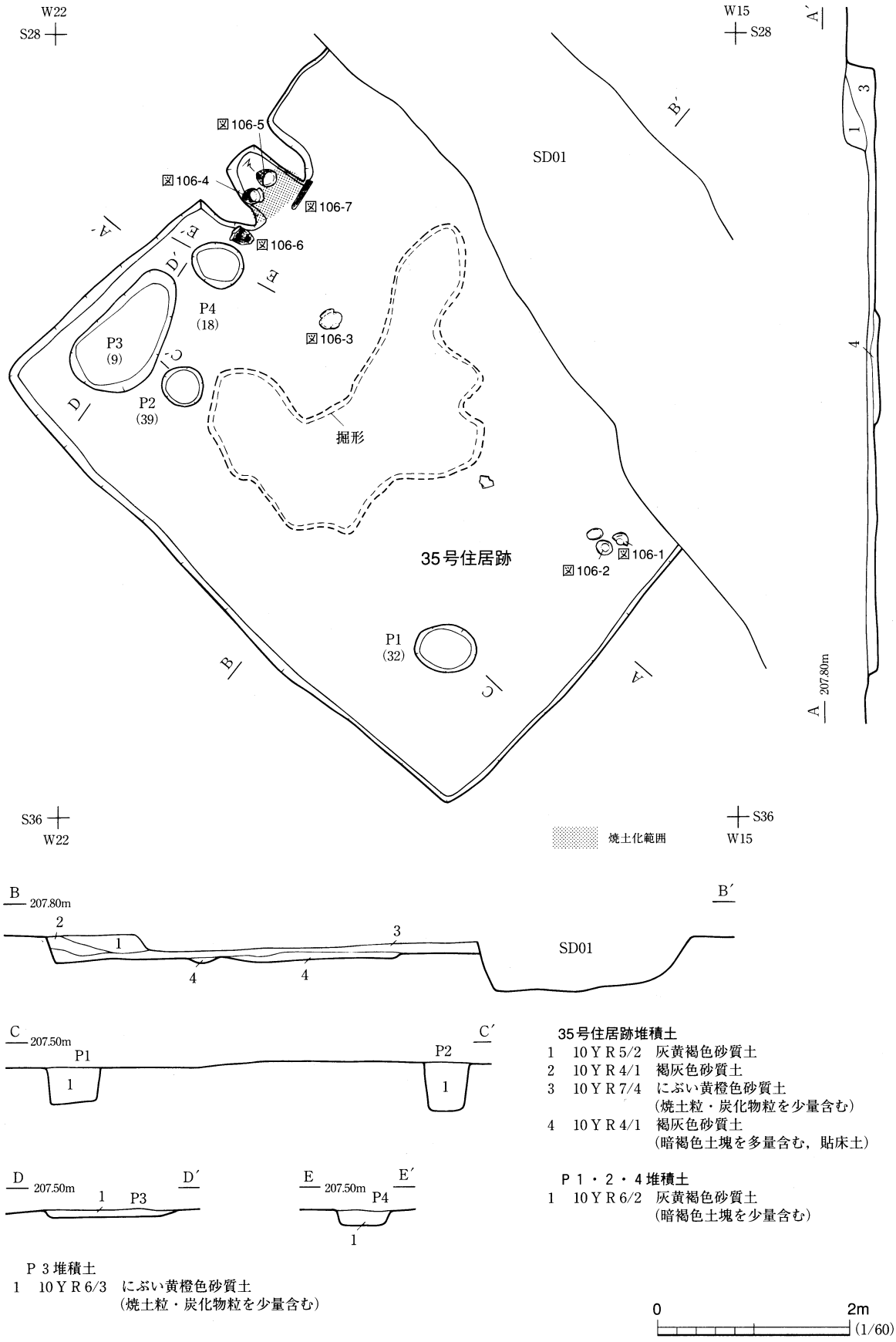


図104 35号住居跡

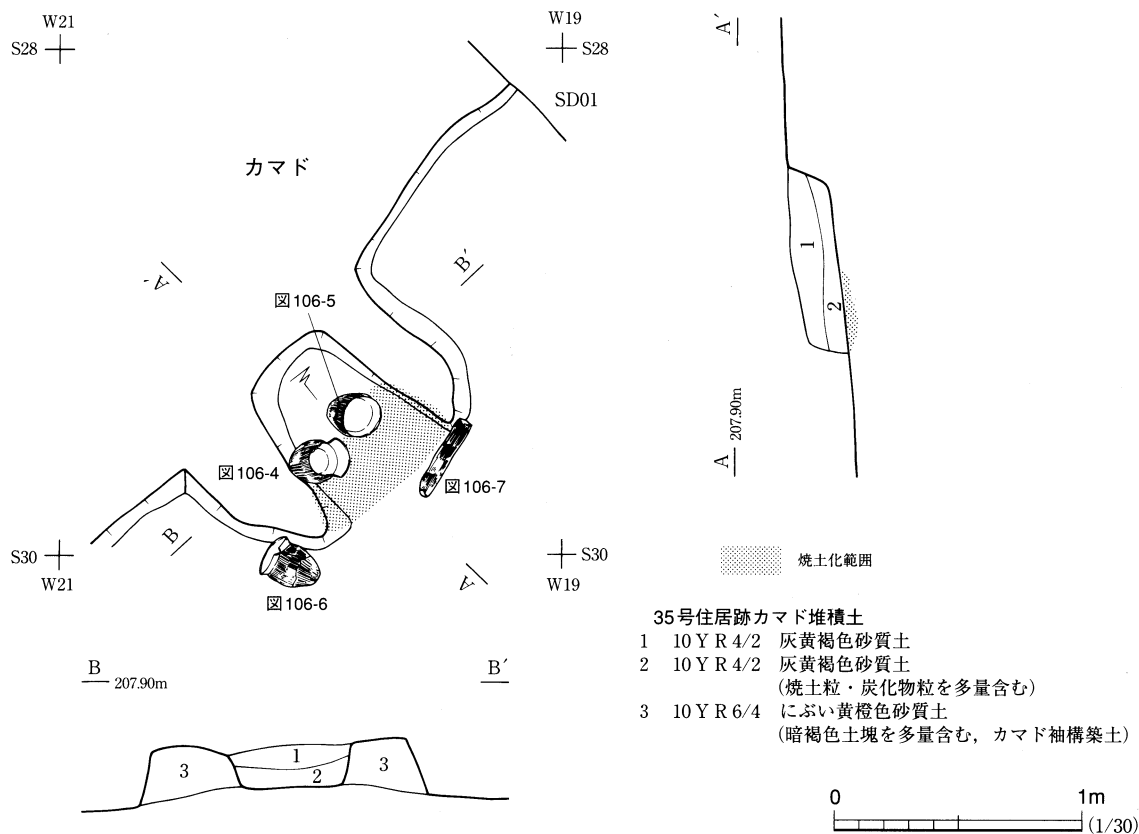


図105 35号住居跡カマド

が柱穴に比べると浅いことなどから、貯蔵穴の可能性が高いと思われる。P 3は、長軸140cm，短軸80cm，深さ9cmを測る不整楕円形のピットである。P 4は不整楕円形をなし，長軸54cm，短軸46cm，深さ18cmを計測した。

遺物 (図106, 写真109・110)

本住居跡から出土した遺物は，土師器281点，土製品1点，石製品1点である。そのうち，土師器6点，円筒形土製品1点，石製紡錘車1点を図示した。

図106-1は土師器高杯の杯部資料である。ちょうど有段丸底の杯に，脚部を取り付けたような器形になると思われる。口縁部は外傾し，底部との境界には明瞭な段が形成されている。杯部の内面には黒色処理とヘラミガキが施され，外面は口縁部がヨコナデ，底部がヘラケズリによって仕上げられている。杯部と脚部の接合面から下は，ハケメが施されている。

図106-2は土師器の椀である。底部は台状の平底になり，底部から口縁部にかけては半球形で，口縁部がやや外反して立ち上がる。外面は口縁部がヨコナデ，口縁部下端から底部にかけてがハケメ，底部付近がヘラナデによって調整されている。内面の調整は，口縁部がヨコナデ，胴部がヘラナデである。

図106-3は土師器の球胴甕である。口縁部は外側に大きく開いている。器面調整は外面が口縁部ヨコナデ，胴部ハケメ，内面が口縁部ハケメ，胴部ヘラナデである。

図106-4～6は土師器の長胴甕である。口縁部は外反し，胴部は下方が膨らんでいる。外面は

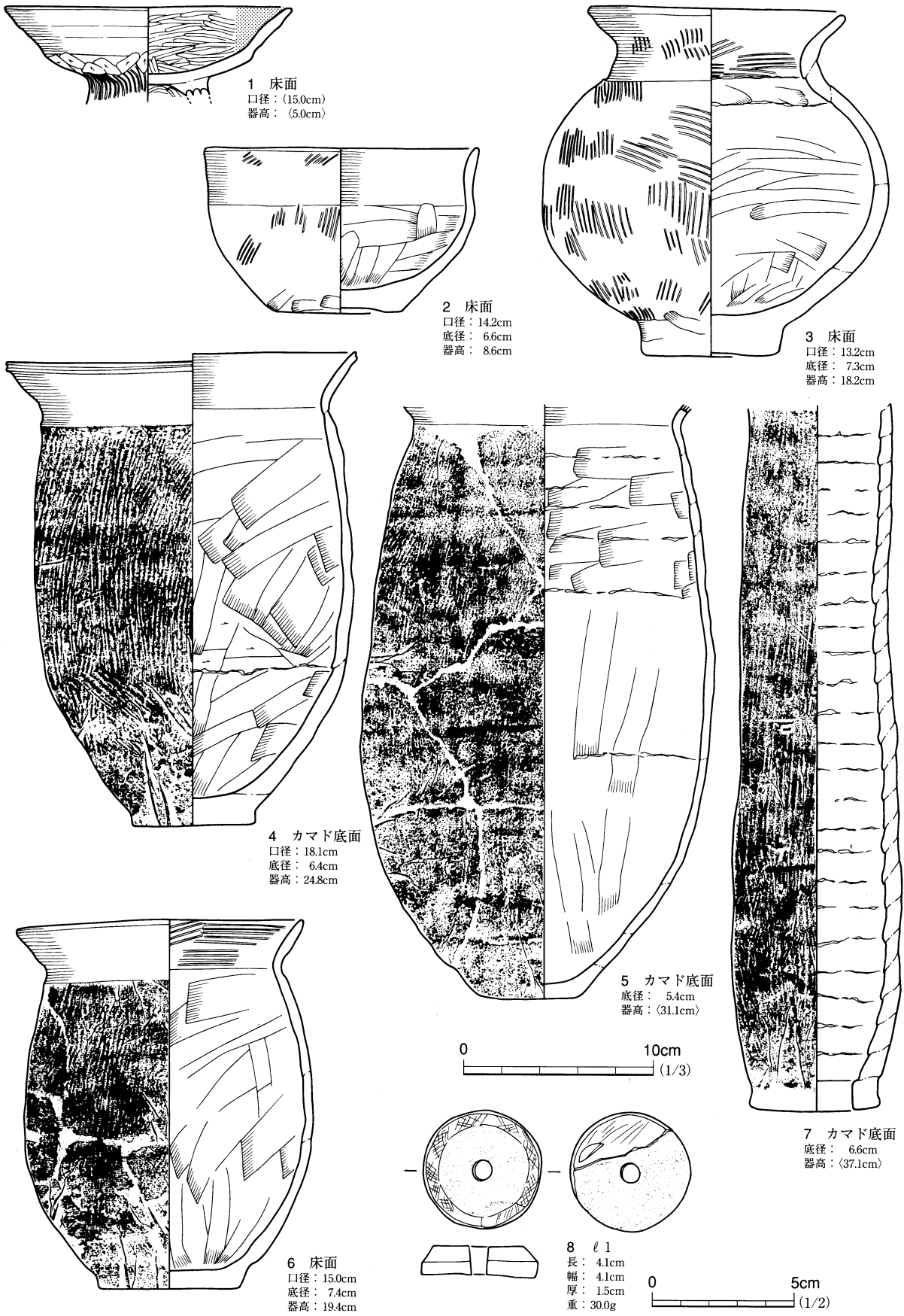


図106 35号住居跡出土遺物

口縁部がヨコナデ、胴部がハケメで調整され、内面は口縁部がヨコナデかハケメ、胴部がヘラナデで仕上げられている。

図106-7はカマドの焚口付近で出土した円筒形土製品である。焚口の天井を補強する目的で、両袖の間に渡されるように設置されていたと推測される。粘土紐を何段も積み重ねて作られており、外面には粘土紐の接合部分を補強するためだろうか、ハケメによる調整が施されていた。内面には積み上げ痕がそのまま残されている。

図106-8は石製の紡錘車である。紡輪の中央には貫通孔が穿たれ、断面は台形基調である。中央の貫通孔は、直径7mmの正円形で垂直に穿たれ、孔内面は丁寧に仕上げられている。表裏面および側面は丁寧に磨かれており、側面には格子状の線刻が加えられている。

まとめ

本遺跡の中では、やや大型の部類に属する竪穴住居跡である。上屋は規則的に配置された主柱穴によって支えられた、しっかりとした構造物だったと推察される。カマドは北壁に付設されており、燃焼部の被熱具合から、長期間使用されたものと思われる。所属年代は、出土した土師器の年代観を考慮して、6世紀後半から7世紀後半と判断している。 (小 暮)

36号住居跡 S I 36

遺 構 (図107・108, 写真73・74)

本住居跡は調査区北西部のU10・11グリッドにまたがって位置し、調査区全体の中で最も北東端に所在する住居跡である。小丘陵状に形成された自然堤防頂部付近に立地し、南から北に向かってごく緩やかに傾斜する地形上に構築されている。試掘時のトレンチによって住居跡プランのほぼ西半分が削平され、遺存状態はあまり良くない。重複関係にある遺構はなく、周囲には、北東約5mに37号住居跡、北西約8mに2号焼土遺構が所在する。

検出面はLⅢ上面である。遺構内堆積土はLⅡbに近似する褐色砂質土の単層で、混入物などがないことから自然堆積と判断した。

住居跡の平面プランは、方形基調を呈すると推定される。規模は、残りの良い東壁で5m、北壁の遺存値が3.5m、南壁の遺存値が2.2mを測る。カマドを通る軸線は、真北から約25°西に傾いた方向を示している。

周壁は床面から60~65°の急な角度で立ち上がり、周壁の高さは斜面上位の南壁で約20cm、下位の北壁で約7cm、東壁で約10cmを測る。本来の壁高は、現況より少し高かったものと思われる。

床面は凹凸があまりない平坦な状態であった。踏み締まりや貼床など、明瞭な長期間居住の痕跡は確認されなかった。

壁柱・壁溝やピットは検出されていない。したがって、住居の上屋を支える柱は、痕跡をとどめない程の比較的浅い屋外柱穴であった可能性を考えておきたい。

カマドは、北壁と東壁より新旧2基検出された。新カマドは北壁の北東隅から約2m中央側に位

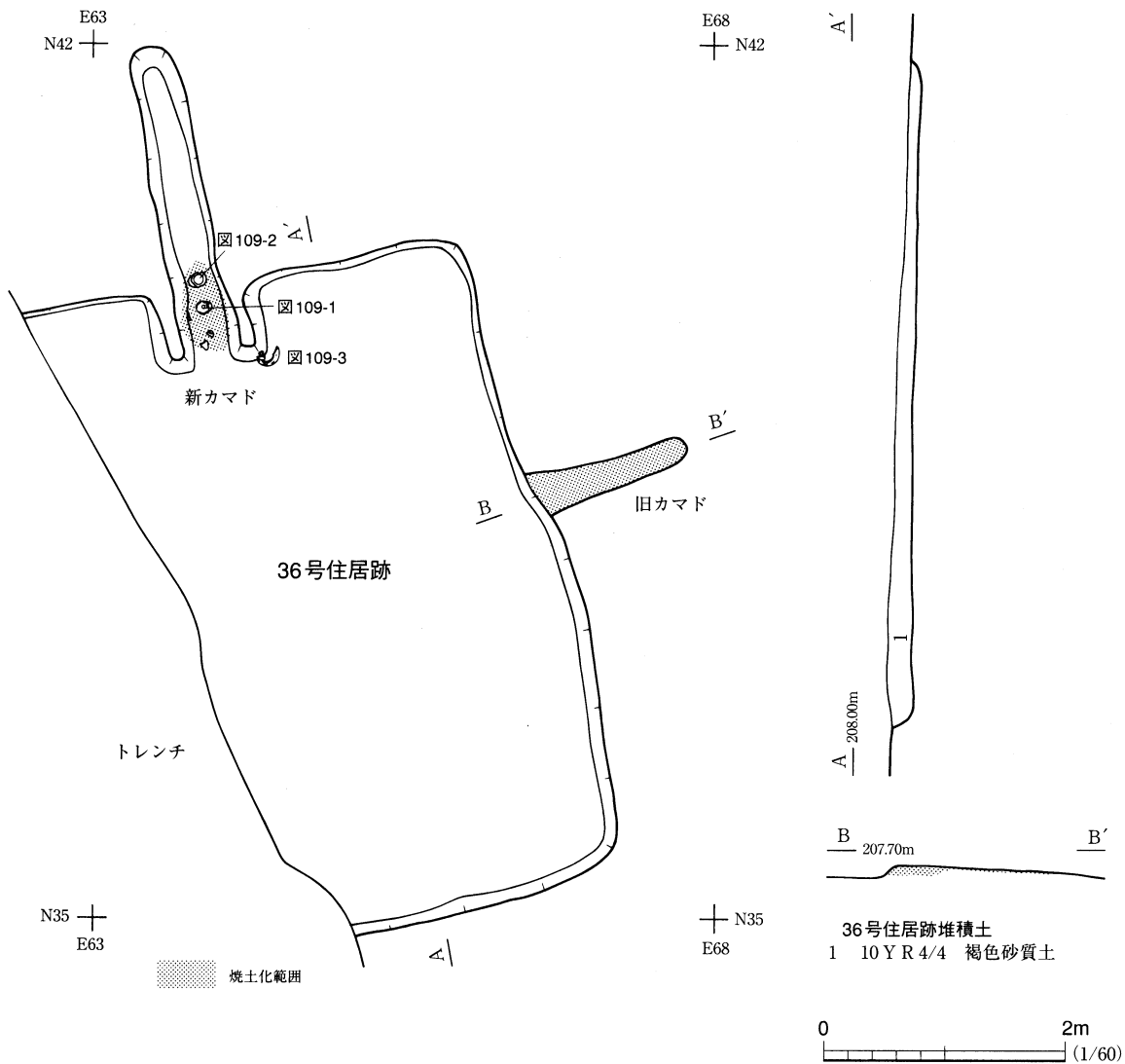


図107 36号住居跡

置し、地山を掘り残して両袖を構築している。両袖によって確保された燃焼部の規模は、下端ラインで焚口幅約30cm、奥行き約90cmを測り、袖の高さは20cm程度遺存している。煙道部は、下端ラインで20~30cmの幅で約1.6m外方へ向かって伸びている。なお、煙道部の底面は、燃焼部の底面から連続して緩やかに掘り下げられ、検出面から最大約20cmの深さを測る。燃焼部の底面から側壁にかけて最大で厚さ10cmの酸化面が確認された。カマド内堆積土は3層に区分した。ℓ1は住居跡堆積土のℓ1に近似する褐色砂質土で、焼土粒を含むことからの天井崩落土と考えられる。ℓ2・3は、天井崩落前にカマド底面より深い煙道部に自然流入した土である。なお、燃焼部からは2個体の土師器甕がほぼ直立した状態で出土した。また、東側の袖の先端部には1個体の土師器甕が据えられていた。

旧カマドは、東壁のほぼ中央に位置し、煙道部の酸化面のみが確認された。酸化面の範囲は、25~30cmの幅で東壁より約1.2m外方へ伸びている。厚さは最大で7cmである。

本住居跡は、旧カマドが壊されて新カマドに造り替えられていたことや、新カマドの被熱具合か

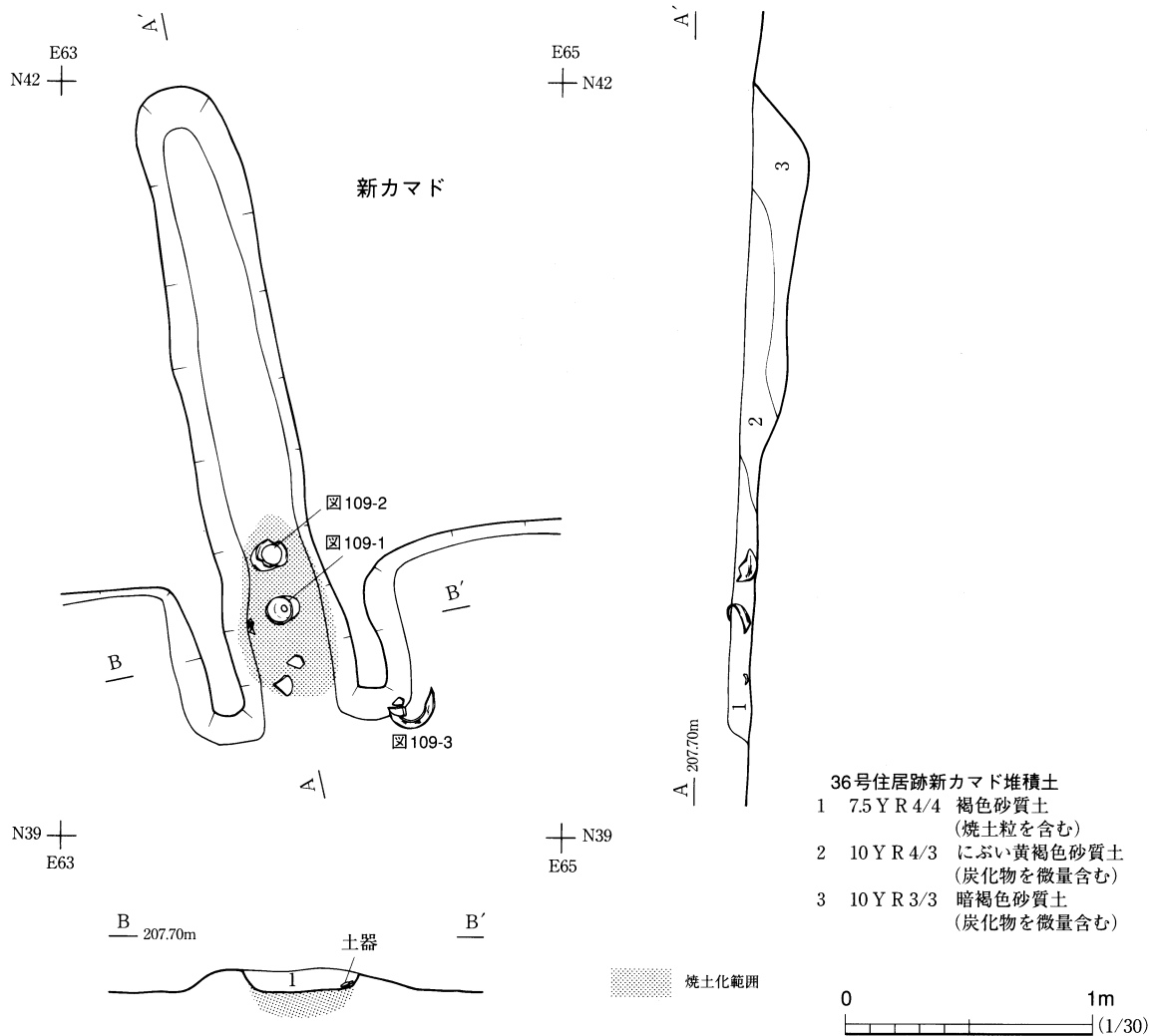


図108 36号住居跡カマド

ら考えて、居住期間が比較的長かったものと思われる。また、屋内に支柱穴を確認することはできなかったが、じっくりとしたカマドの構造を見ると、往時は堅固な上屋をもつ構造物だったことが想像できる。

遺物 (図109, 写真110)

本遺構から土師器96点、須恵器1点が出土している。図109-1・2はカマド底面からほぼ直立した状態で出土した中型の土師器甕である。1は平底から内湾ぎみに立ち上がり、ほぼ直線的に口縁部に至る器形を呈する。器面調整は、口縁部外面にヨコナデ、胴部外面にハケメ、胴部内面にヘラナデが施されており、粘土紐の積み上げ痕が数段観察される。2は火を強く受けてもろくなっており、口縁部を欠損している。外面調整はハケメとヘラナデ、内面はヘラナデが施されており、底部には木葉痕が観察される。

図109-3は、口縁部に最大径を有する土師器甕で、カマド袖の先端部から出土した。外面の調整は、口縁部にヨコナデとハケメ、胴部にハケメが施されている。内面は、口縁部にハケメとヘラナデ、胴部にヘラナデが施されている。内面には粘土紐の積み上げ痕が観察される。

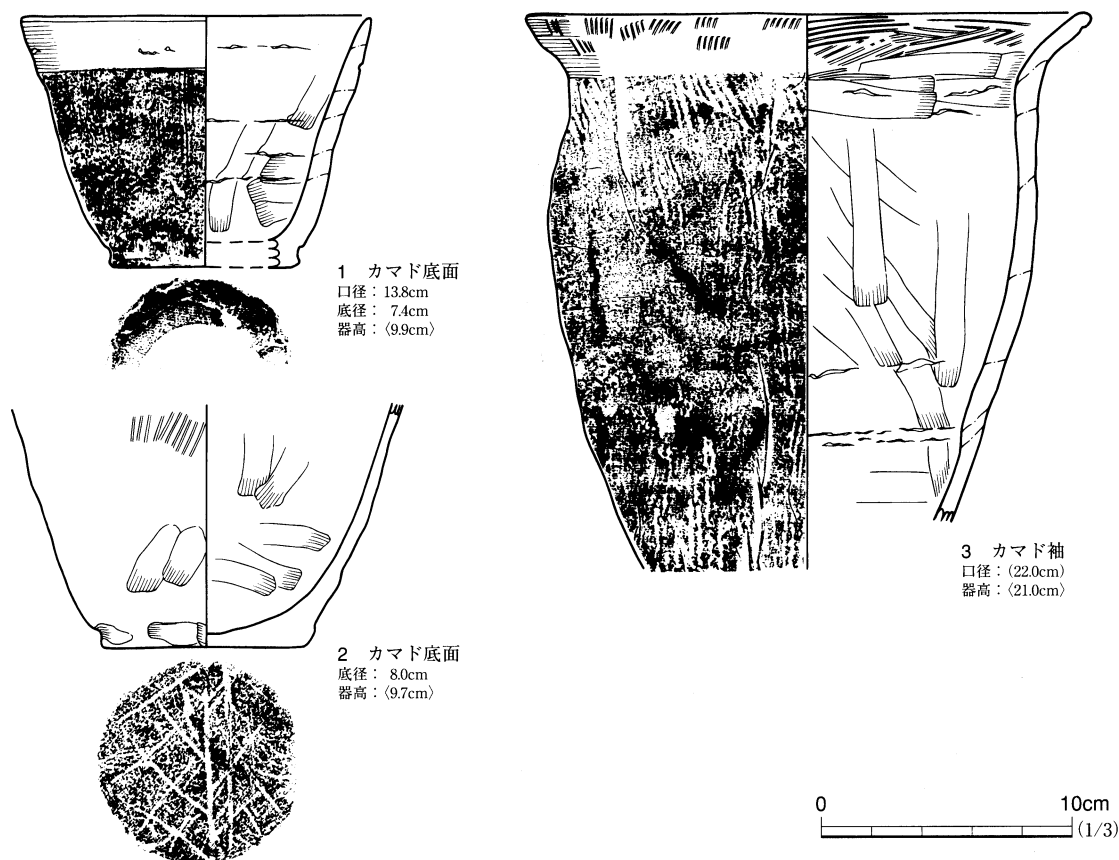


図109 36号住居跡出土遺物

まとめ

本遺構は、削平により全体のおよそ半分を失っている竪穴住居跡である。残存する範囲から、1辺約5mの方形基調を呈すると推測される。所属時期は、カマドから出土した遺物の特徴から6世紀後半から7世紀後半にかけてと考えている。(成'田)

37号住居跡 S I 37

遺 構 (図110, 写真75・76)

本住居跡は、調査区北端U10-98グリッドに位置する。地形的には、自然堤防の狭い平坦部上に立地している。遺構はLⅢ上面で検出したが、遺存状況は悪く、検出段階で既に削平されてしまい、検出できたのはカマドだけである。

カマドは、遺存状況から住居の北壁に位置していたと考えられる。遺存するカマドの袖はLⅢをそのまま掘り残して構築されていた。両袖は、遺存値で85cm程南側に張り出していた。袖の最大幅は東側で26cm、西側で33cmを測る。両袖に挟まれた燃焼部は最大長70cm、最大幅は55cmである。また、燃焼部の底面中央付近と両袖内側が、最大で4cm程焼土化していた。

遺存するカマド内堆積土は、焼土粒を含む暗褐色砂質土1層で、堆積過程は不明である。カマド燃焼部底面からは、大型の甕が横倒しの状態で2個(図111-10, 図112-2)出土した。いずれの土

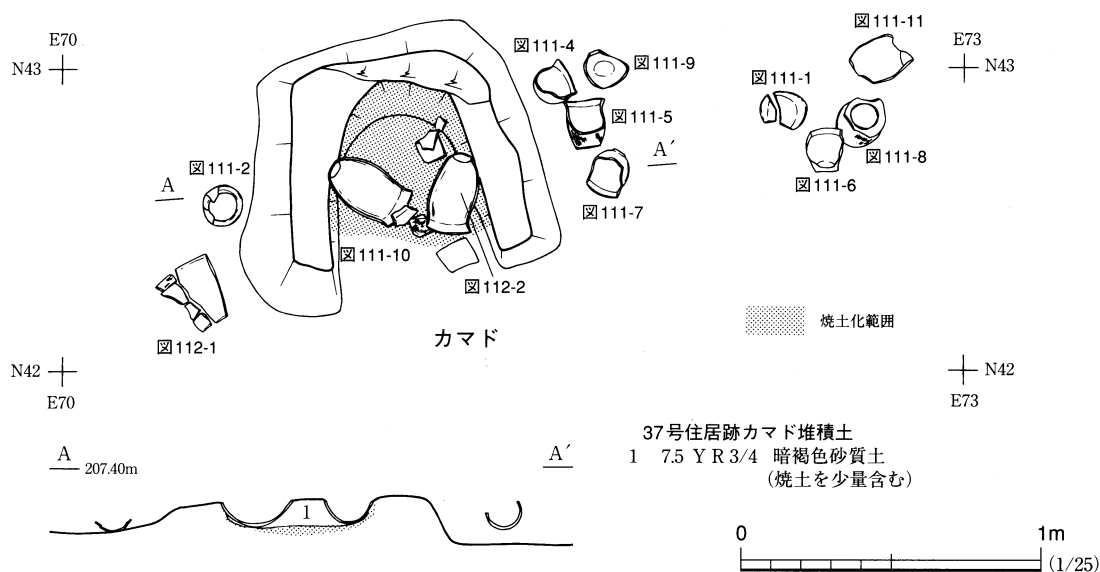


図110 37号住居跡カマド

器も、片側の胴部中央から口縁部にかけて割れた状態で出土している。これらの土器については、燃焼部底面に直に横倒して置かれていることなどから、カマド天井に据え置かれたものや、天井構築材などではなく、カマド廃棄に伴う儀礼行為に使用されたものと考えている。その他、本住居跡に伴う施設は確認できなかった。

遺物 (図111・112, 写真110)

遺物は、カマド周辺からまとまって出土した。カマド西袖側で甑 (図112-1) と杯 (図111-2), 東袖側でまとまって小型の甕 (図111-4・5・7・9) が、カマド東側で杯 (図111-1), 小型の甕 (図111-6), 大型の甕 (図111-8, 11) が出土している。出土した遺物の内訳は非クロ土師器片 317点である。以下器種ごとに説明を行う。

図111-1～3は杯である。これらの土器は、大きさに多少相違があるが、丸底で体部中央にケズリによる段を持ち、口縁部が緩やかに外反する器形となる。また、器面の調整は、口縁部外面にナデ、内面には黒色処理とヘラミガキが施される。2の内面中央には、先の尖った工具で突き刺したような痕跡が認められる。

図111-4～7・9は小型の甕である。器形を見ると4・7の底部から緩やかに外傾しながら立上がり口縁部が外反するも、6・9の胴部がやや丸み、口縁部が直立気味に立ち上がるもの、5の直線的に立ち上がる胴部と外反する口縁部を持つものが認められる。器面の調整は、口縁部外面にヨコナデ、内面にはハケメ、体部外面には条線状のハケメ、内面にヘラナデが施されるものが多い。4の口縁部内面にはハケメ、5の体部内面にはケズリが認められる。また、4の体部外面は、熱を受け器面がアバタ状にはせている。これらの土器の底部は、ケズリ調整によりやや上底に仕上げられているが、7のように木葉痕を残すものも認められる。

図111-10・11, 図112-2は大型の甕である。いずれも口縁部が「く」字状に外反するが、胴部は図111-10の胴部中央に膨らみを持つもの、図111-11の膨らみが少ない長胴型になるもの、図

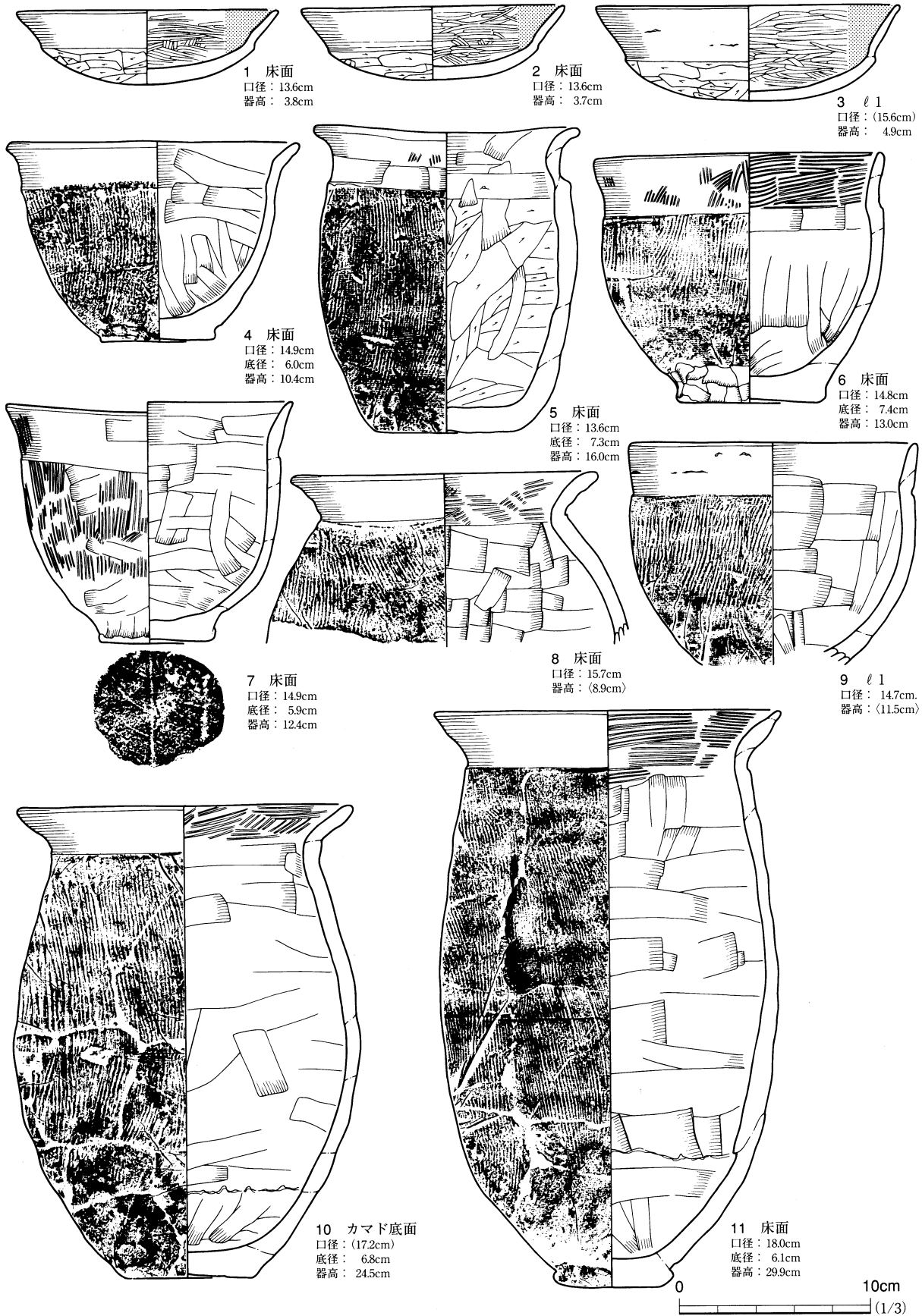


図111 37号住居跡出土遺物（1）

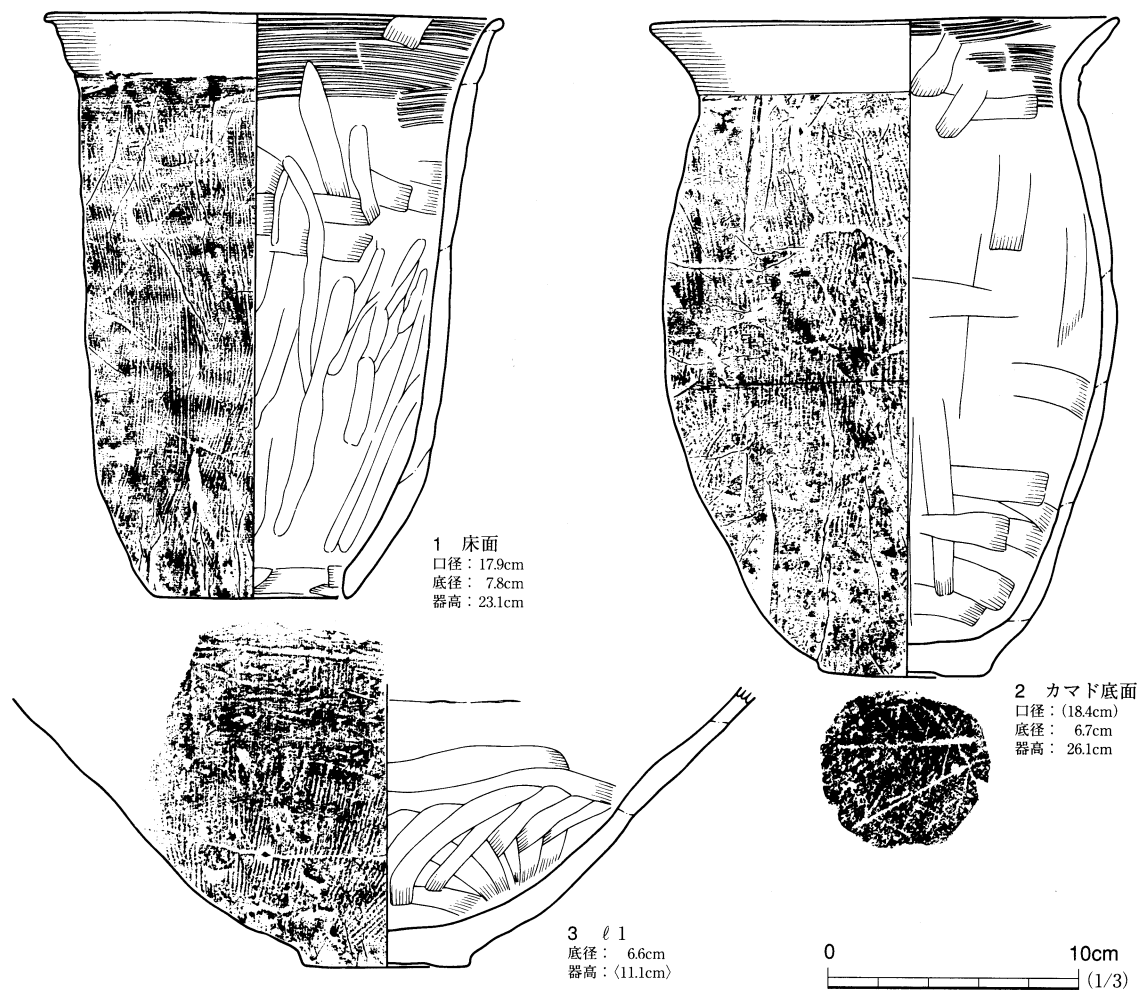


図112 37号住居跡出土遺物（2）

112-2の胴部上半に膨らみを持つものが認められる。また、図111-8については、全体の器形を知ることは出来ないが、外反する口縁部と丸みを帯びた胴部を持つと思われる。器面の調整は、口縁部外面にナデ、外面にはハケメ、体部外面には条線状工具を使い細かいハケメ、内面にヘラナデが施される。また、図111-10の体部外面は、アバタ状にはぜた痕跡が認められる。土器の底部は、ケズリ調整が施され上底状に仕上げられているが、中には図112-2のように木葉痕を残すものもある。

図112-1は甕である。底部付近がすぼみ、胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる器形となる。器面の調整は、口縁部外面にヨコナデ、内面にはハケメとヘラナデ、体部の外面に条線状のハケメ、内面にヘラナデが施される。外面の底部周辺は、はぜた痕跡が著しく残る。

図112-3は、甕の底部の破片資料と思われる。体部の外面にはハケメ、内面にはヘラナデが施されている。

まとめ

調査区北端で検出された住居跡である。遺存状況が悪く、検出できたのはカマドだけである。遺存状況から、カマドは住居跡の北側の壁に付随していたものと考えられる。周辺を精査したが、本

遺構に伴う施設などは確認できなかった。また、遺物はカマド周辺からまとまって出土している。

本住居跡の所属時期は、カマド内やカマド周辺から出土した土器などから判断して、7世紀前葉に位置付くものと考えている。(大河原)

第2節 掘立柱建物跡

今回の調査では、4棟の掘立柱建物跡が確認された。そのうち、3棟は調査区南西部のR13・S12・13グリッドに隣接しており、軸方向も近似している。柱穴の配列や規模に規格性はなく、それぞれの建物の用途に適した構造になっていたものと思われる。

1号建物跡 S B01

遺 構 (図113, 写真77・78)

本遺構は調査区南西部のR13, S12・13グリッドにまたがって位置し、標高207.5m前後のほぼ平坦な地形上に構築されている。6・7号住居跡と重複関係にあり、どちらよりも本遺構の方が新しい。周囲には、北方約2mに3号住居跡、北東約4.5mに1号住居跡、東方約1mに2号住居跡、南東約2mに8号住居跡、南西約2.3mに2号建物跡が近接している。遺構検出面はLⅢの黒褐色砂質土上面である。

柱穴の平面配置は3間×3間で、ほぼ正方形を呈する。遺存状況は良好で、北東側柱列の柱痕の中心を通る軸線の傾きはN45°Wを示す。各柱痕を通る柱列の総長は、北東側柱列のP1-P4が6.9m、南西側柱列のP7-10が7.0m、南東側柱列のP4-P7が7.5m、北西側柱列のP1-10が7.6mを測る。各柱間寸法は、北東側柱列北西から2.2m+2.3m+2.4m、南西側柱列北西から2.3m+2.4m+2.3m、北西側柱列北東から2.6m+2.7m+2.3m、南東側柱列北東から2.7m+2.4m+2.4mである。

柱穴掘形の平面形は、隅丸方形または楕円形を呈し、その規模は長軸70~95cm、短軸68~75cm、検出面からの深さ36~65cmを測る。P2・8・9以外の柱穴からは柱痕が確認できた。柱痕の径は23~36cmで、丸柱を使用していたと考えられる。柱痕は、にぶい黄褐色砂質土を基調としている。P2・8・9の掘形内の堆積土は、上層にLⅡに近似する褐色基調の砂質土が、下層にLⅢに近似する暗褐色砂質土が堆積している。その他は、人為的な埋土と思われる。

遺 物 (図113, 写真110)

本遺構から土師器214点、須恵器4点、縄文土器13点が出土している。そのうち図示できたのは1点だけである。

図113-1は、P2の堆積土から出土したミニチュアの手捏ね土器である。厚めの平底から外傾ぎみに立ち上がり、口縁部で強く外反する器形を呈する。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリ後にヘラナデが施されている。内面は、口縁部にヨコナデ、胴部にヘラナデが施され

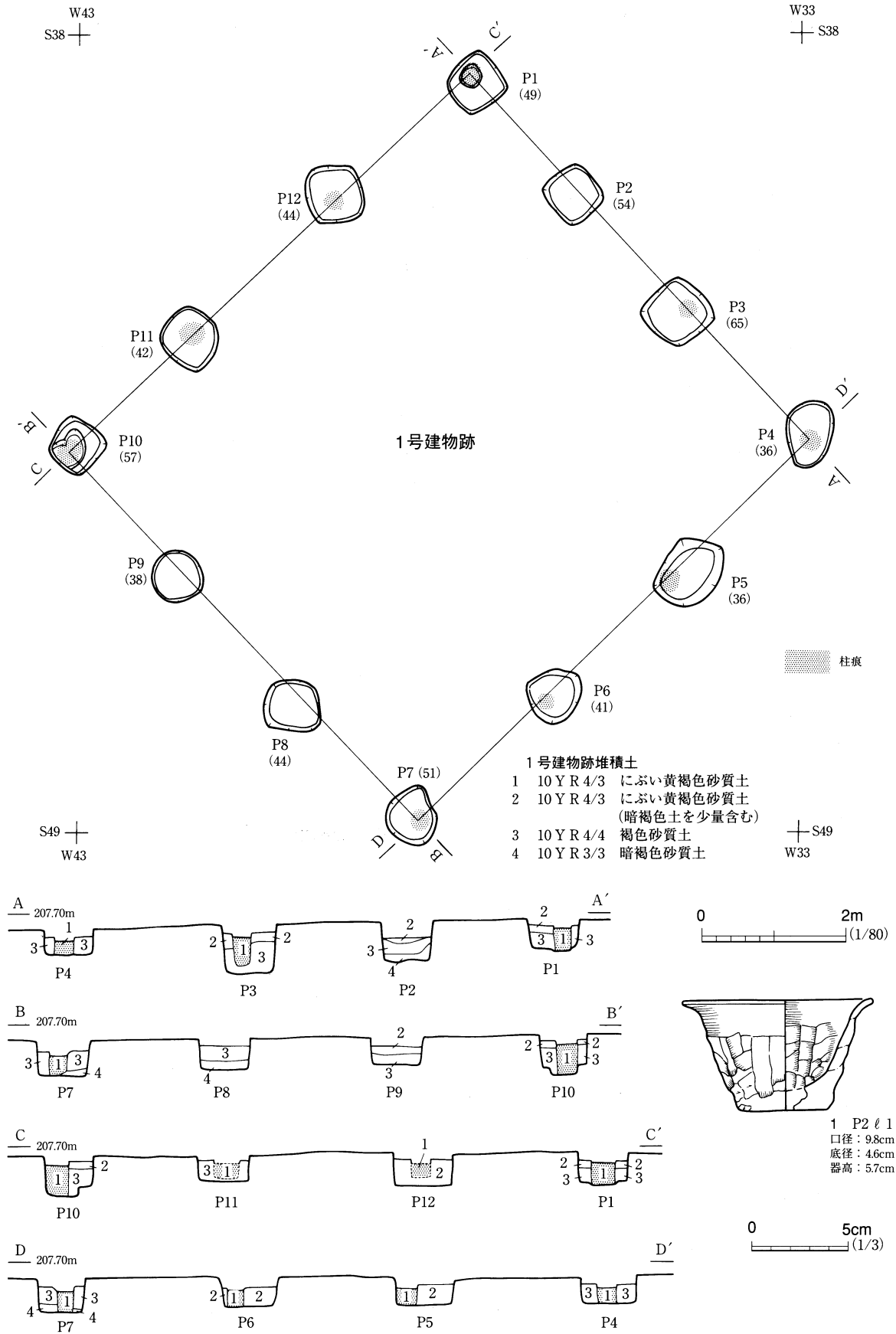


図113 1号建物跡と出土遺物

ている。

まとめ

本遺構は、3間×3間のほぼ正方形を呈する掘立柱建物跡である。所属時期については、出土遺物や6・7号住居跡との関連から8世紀頃と考えている。本遺構の機能については、判断材料に乏しく、特定することはできないが、倉庫と考えられている2号建物跡よりも規模が大きいことから、居住施設の可能性がある。(成田)

2号建物跡 SB02

遺構 (図114, 写真79・80)

本遺構は調査区南西端のR13グリッドに位置し、標高207.5m前後のほぼ平坦な地形上に構築されている。本遺構の立地する場所は、阿武隈川に沿って形成された自然堤防のほぼ中央にあたる。ここは他に比べて標高が高く、洪水などによる浸水の可能性が最も低い場所である。後述するような遺構の機能を考慮すると、それに見合った選地がなされたものと思われる。本遺構に重複する遺構はないが、周囲には北方約1.3mに6号住居跡、南東約3mに2号土坑、東方約1mに7号住居跡、同じく東方約2.5mに1号建物跡が近接している。本遺構の検出面は、LⅢの黒褐色砂質土上面である。

本遺構は2間×2間の総柱建物跡で、各柱穴を結んだ平面プランは、ほぼ正方形を呈する。遺存状況は良好で、北東側柱列の柱痕の中心を通る軸線の傾きはN55°Wを示す。

本建物跡の規模は四隅の柱穴の芯々間距離でみると、P1-P3が3.8m、P7-5が3.6m、P3-P5が3.4m、P1-P7が3.5mを測る。それぞれの柱穴の芯々間距離は、P1-P2が2.1m、P2-P3が1.7m、P8-P9が1.9m、P4-P9が1.8m、P6-P7が1.8m、P5-P6が1.8m、P1-P8が1.6m、P7-P8が1.9m、P2-P9が1.6m、P6-P9が1.4m、P3-P4が1.9m、P4-P5が1.5mである。北西-南東方向の芯々間距離が若干長い。

柱穴掘形の平面形は、円形基調を呈し、その規模は長径50~70cm、短径43~68cm、検出面からの深さ39~72cmを測る。概して四隅の柱穴が大きくて深い。

いずれの柱穴からも柱痕は確認できなかった。柱穴内の堆積土は、暗褐色あるいはにぶい黄褐色の砂質土で、上層に炭化物粒・焼土粒を含むものが多い。下層にLⅢに相当する暗褐色砂質土が堆積している。

遺物

本遺構から土師器38点が出土しているが、いずれも小片で図示できる資料はない。

まとめ

本遺構は2間×2間の総柱建物跡である。機能については、総柱構造にしてかなりの床上荷重に耐えられるようにしていたと推察されることから、倉庫などの貯蔵施設が考えられる。所属時期については、近接する6・7号住居跡との関連や、1号建物跡と軸方向が近似することから、8世紀

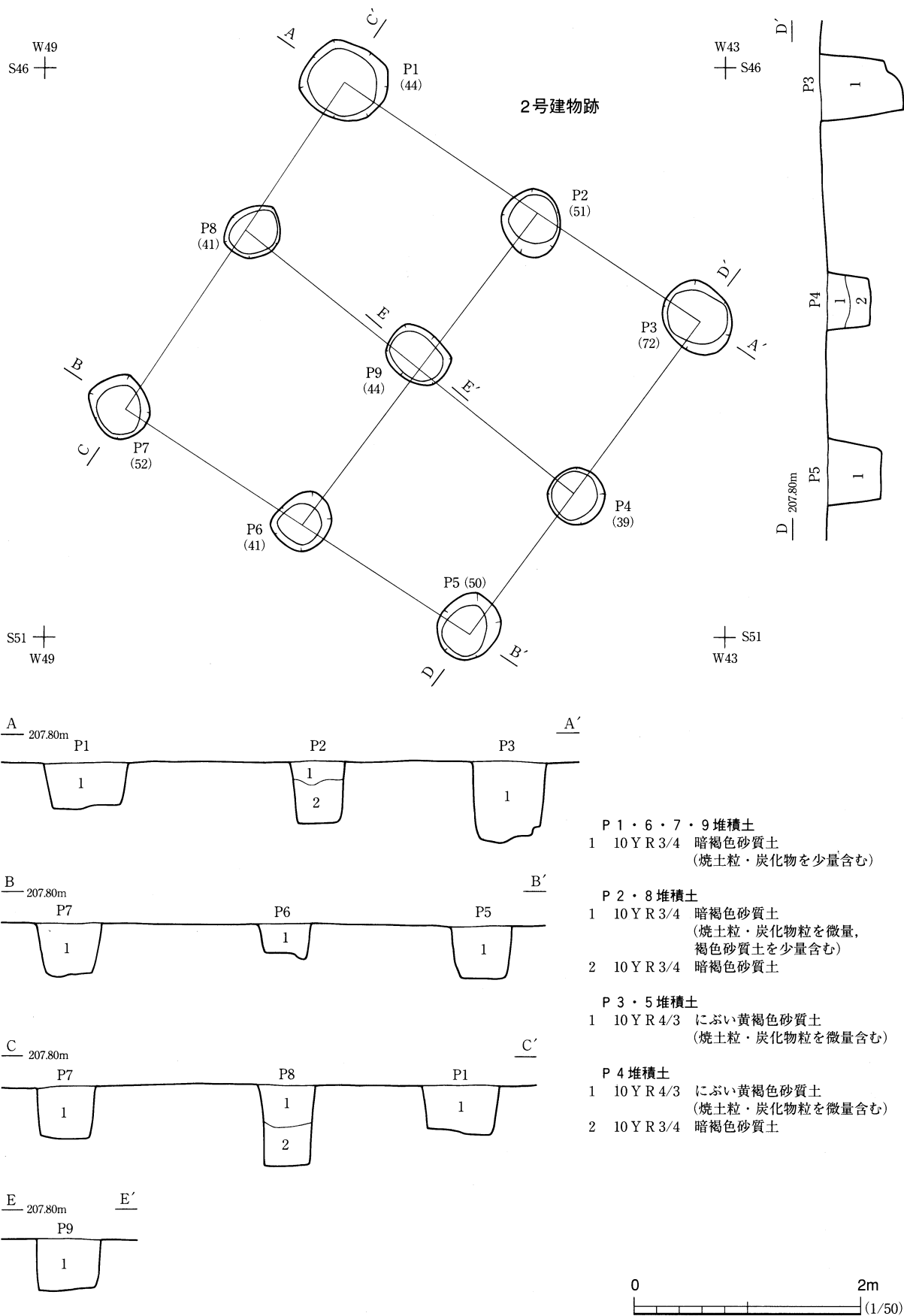


図114 2号建物跡

頃の所産と判断している。

(成 田)

3号建物跡 S B03

遺 構 (図115, 写真81)

本遺構は、調査区南側のS12-45・46・55・56・65・66グリッドに位置する掘立柱建物跡である。遺構が立地する地点は、標高207.6m前後の自然堤防上で、周囲は比較的広い平坦面になっている。LⅢ上面で、8基からなる南北2間×東西2間の柱穴の全部を検出した。柱穴内の埋土は暗褐色系

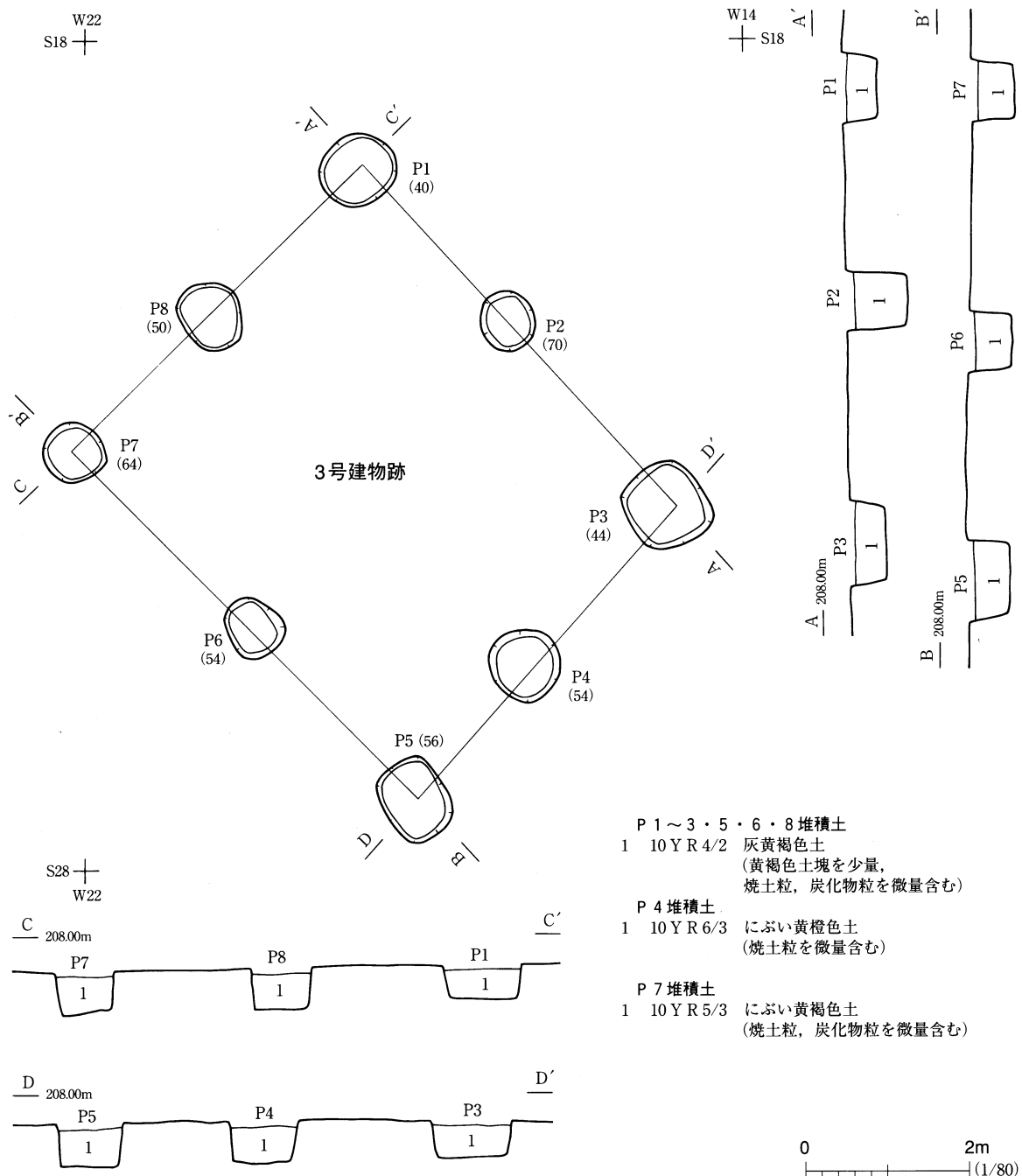


図115 3号建物跡

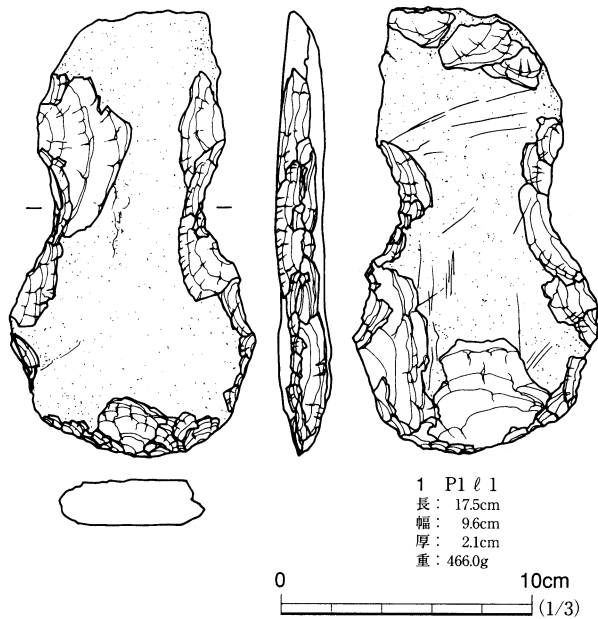


図116 3号建物跡出土遺物

の砂質土で、黒褐色を呈するLⅢとの区別が
つきにくく、検出作業は困難であった。本建
物跡は1号溝跡と重複しており、新旧関係で
は、本建物跡の方が新しい。

8基の柱穴の中心を結んだ線の平面形は、
南北方向に若干長い長方形を呈している。建
物跡の示す方位は、東側柱列を基準とすると、
真北から西に42°傾いている。全体の規模は、
四隅の柱の中心間で、北側柱列が5.0m、東
側柱列が5.6m、南側柱列が4.7m、西側柱列
が6.0mを測る。また、各柱穴間の距離は、
P1-P2間が2.6m、P2-P3間が3.0m、
P3-P4間が2.6m、P4-P5間が2.1m、

P5-P6間が2.8m、P6-P7間が3.2m、P7-P8間が2.3m、P8-P1間が2.7mで、南
北方向の柱穴間の方が若干広く造られている。

柱穴の規模・形態に規格性はあまり見られない。平面形は、隅丸方形もしくは円形を呈している。
P3・5は隅丸方形で、一辺の長さが約90cm、深さがそれぞれ44cm、56cmを測る。その他の柱穴は
円形で、直径68~92cm、深さ40~70cmを計測した。底面の標高は、P1とP3が207.20m前後とや
や浅い他は、207.50m前後にそろえられている。

柱穴堆積土はいずれも1層で、柱痕は見られない。P4とP7がそれぞれ、暗黄橙色土、暗黄褐
色土であった他は、灰黄褐色土が堆積していた。

遺物 (図116, 写真111)

本建物跡から出土した遺物は、土師器66点、土製品1点、石器1点である。そのうち、石器1点
を図示した。本建物跡は縄文時代後期の遺物包含層の上に構築されているため、壁面の崩落に伴っ
て、柱穴内に落ち込んだものと思われる。

図116-1は、分銅形の打製石斧である。扁平な自然礫を素材とし、側縁部と刃部に大きな剥離
を加えて、形を整えている。刃部には、さらに細かい調整剥離が施されている。

まとめ

本遺構は、長辺が北西から南東方向に向くように造られた2間×2間の長方形建物跡である。1
号溝跡と重複し、周辺には28・34・35号住居跡が存在するが、それらとの間に規制がかかっていた
形跡は特に感じられない。

所属時期は、1号溝跡との重複関係から、8世紀中頃~9世紀と判断している。機能については、
床下荷重に耐えるような総柱構造にはなっていないが、前述の2号建物跡とほぼ同じ規模を有する
ことから、倉庫などの貯蔵施設が考えられる。 (小 暮)

4号建物跡 SB04

遺 構 (図117, 写真82)

本建物跡は、調査区北側U11-62・63グリッドに位置する。地形的には、自然堤防から後背地へ向かう緩斜面の裾部に造られている。LⅢ上面で、本建物跡を構成するP1～5と溝を検出した。また、本建物跡P5と1号鍛冶遺構の廃滓層の末端が重複し、本遺構のほうが古い。

本建物跡は、P1-P5の間でピットが検出されなかったが、基本的には東西2間、南北1間の建物跡になると考えられる。平面形は、東西に長いゆがんだ長方形を呈している。規模は、それぞれのピットの中心と中心を結んだ距離で、北側柱列P1-P5間が2.32m、東側柱列が1.76m、南側柱列が2.30m、西側柱列1.40mを測る。また、南側柱列の各ピット間の間隔は、西から1m+1.3mを測る。

柱穴の平面形は、円形を基調とする。規模は直径24cm～30cm、遺構検出面からの深さは、4cm～22cmを測る。柱穴の規模はほぼ一定であるが、深さにばらつきが見られる。柱穴内の堆積土は、いずれも黒褐色砂質土が堆積していた。

また、西側柱列の東西の両側で溝を検出した。溝は、いずれも西側柱列に平行している。規模は、東側の溝で、長さ1.66m、幅18cm、深さ6cmを測る。西側の溝は、長さ1.40m、幅23cm、深さ8cm

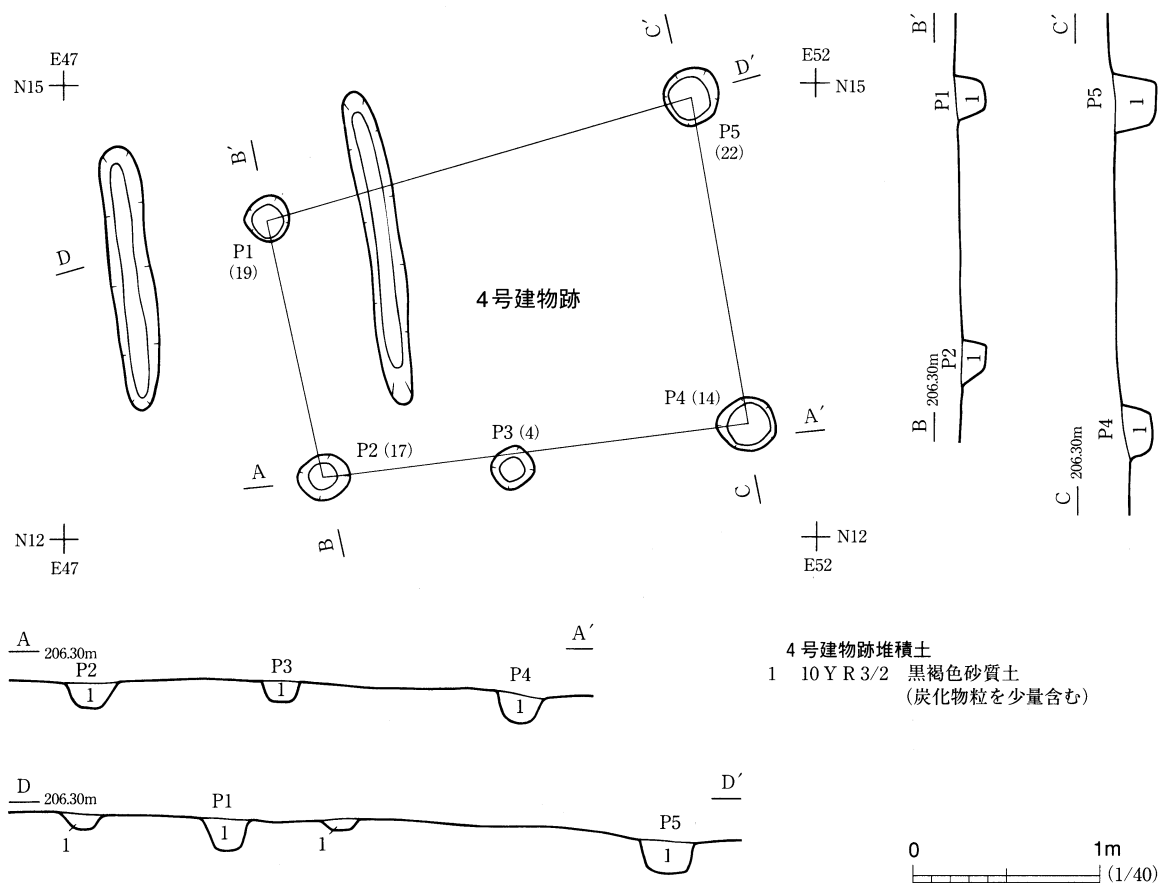


図117 4号建物跡

を測る。溝内には、建物跡の柱穴内と同じ黒褐色砂質土が堆積していた。溝については、当初建物跡とは別の遺構と考えたが、検出面や遺構内の堆積土、建物跡と同一の軸線方向を示すことなどから、本建物跡に付属する施設と判断した。本建物跡からは、遺物は出土しなかった。

まとめ

本建物跡は、東西2間、南北1間の建物跡で、平面形はゆがんだ長方形を呈している。また、付属施設として、西側柱列に平行する2本の溝を検出している。所属時期は、遺構に伴う遺物がないことから特定できないが、重複関係などから、1号鍛冶遺構より古く位置付けられる。(大河原)

第3節 土 坑

今回の調査によって検出された土坑は18基である。分布傾向は竪穴住居跡とほぼ同じで、出土遺物や堆積土の性状などから、すべて古墳時代の所産と考えられる。

1号土坑 SK01

遺 構 (図118, 写真85)

本土坑は3号住居跡の東方、S12-73グリッドに位置している。重複する遺構はない。西方約2mの地点には3・4号住居跡、南方約3mの地点には1号住居跡が構築されている。

検出面はLⅢの上面である。平面形は円形を呈し、規模は直径180cm、深さは最深部で17cmを計測した。底面は、緩やかな起伏をもつ船底形を呈している。周壁の立ち上がりは、急峻である。

遺構内堆積土は、暗褐色砂質土の単層で混入物は認められなかった。堆積土が純粋な単層であるという状況を考えると、自然堆積の可能性が高い。

遺 物

本住居跡から出土した遺物は、土師器7点である。図示できるものはなかった。

まとめ

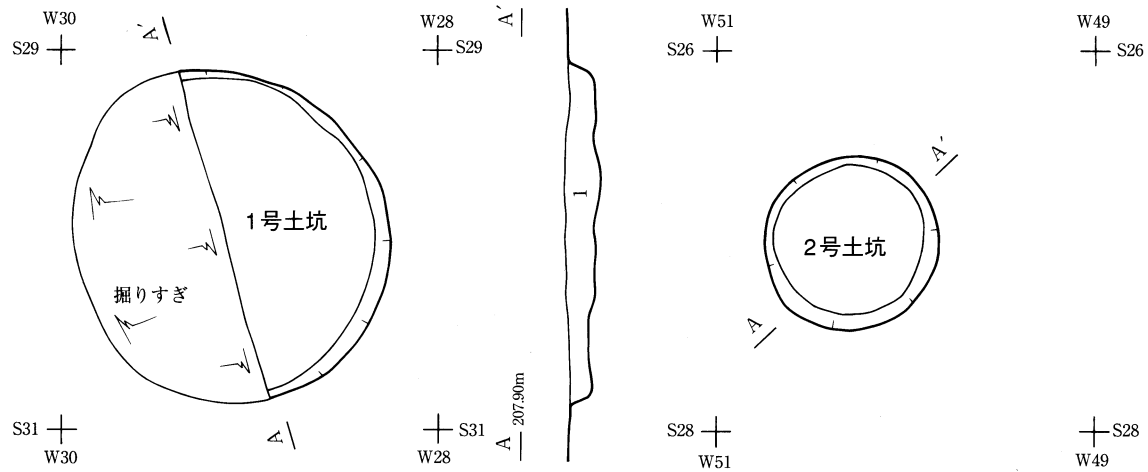
本土坑は、年代の判る遺物が出土していないが、堆積土の性状が竪穴住居跡に近似していることから、古墳時代後期に位置付けられるものと推察される。(堀 川)

2号土坑 SK02

遺 構 (図118, 写真85)

調査区西側R13-68グリッドのLⅢ上面で検出された。他遺構との重複はない。遺構内堆積土は2層に細分され、レンズ状の自然埋没状態を示している。

平面形は不整な円形を呈し、規模は直径90cmを測る。底面は凹凸のない平坦な状態であった。周壁は底面から急角度で立ち上がり、よく整っている。壁高は約20cmを計測した。本土坑から遺物は出土していない。

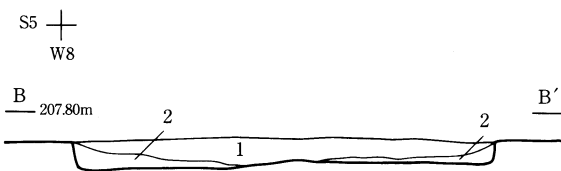
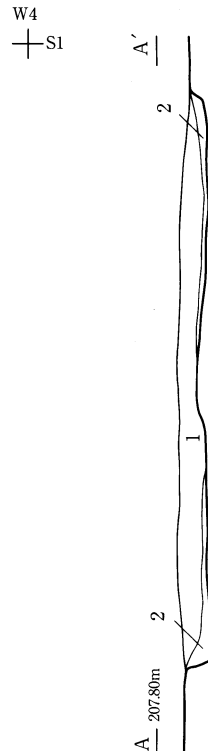
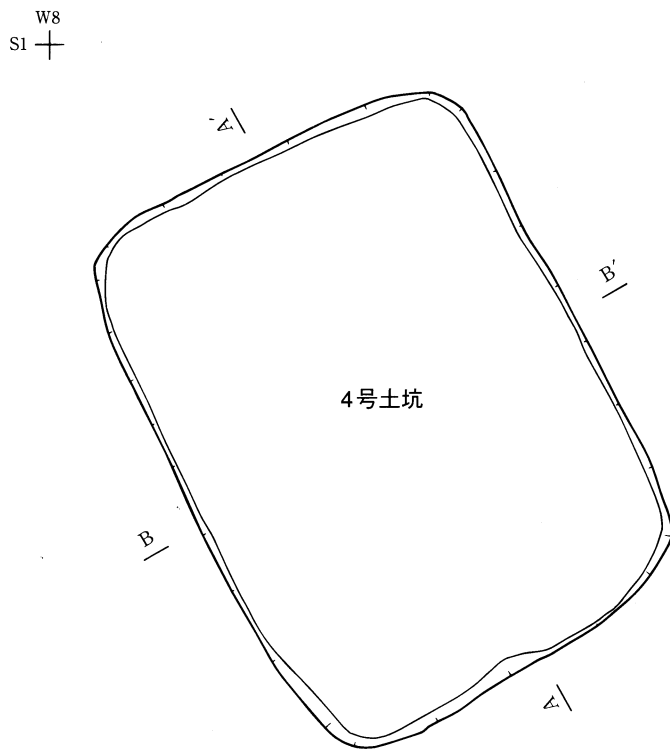


1号土坑堆積土

- 1 10 Y R 3/3 暗褐色砂質土

2号土坑堆積土

- 1 10 Y R 3/3 暗褐色砂質土
- 2 10 Y R 3/2 黒褐色砂質土 (暗褐色土を少量含む)



4号土坑堆積土

- 1 10 Y R 3/2 黒褐色砂質土 (灰黄褐色土を少量含む)
- 2 10 Y R 3/3 黒褐色砂質土 (灰黄褐色土を少量含む)



図118 1・2・4号土坑

まとめ

本土坑からは、年代を特定するような遺物が出土していないため、明確な所属時期は不明である。しかし、堆積土の性状が竪穴住居跡に近似していることから、古墳時代後期の所産であると判断している。性格は不明である。(小 暮)

3号土坑 SK03

遺 構 (図119, 写真85)

調査区中央S12-18グリッドのLⅢ上面で検出された。他遺構との重複はない。遺構内堆積土は3層に細分され、レンズ状の自然埋没状態を示している。

平面形は東西方向に長軸をもつ不整な楕円形を呈し、規模は長径216cm, 短径96cmを測る。底面は、凹凸のない平坦な状態であった。周壁は底面からほぼ直立して立ち上がり、よく整っている。壁高は約30cmを計測した。本土坑から、遺物は出土しなかった。

まとめ

本土坑からは、年代を特定するような遺物が出土していないため、明確な所属時期は不明である。しかし、堆積土の性状が竪穴住居跡に近似していることから、古墳時代後期の所産であると判断している。性格は不明である。(小 暮)

4号土坑 SK04

遺 構 (図118, 写真85)

本土坑はS12-9・19グリッドに位置している。重複する遺構はなく、付近には3号土坑, 9・13・14号住居跡が位置している。

検出面はLⅢの上面である。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸3.1m, 短軸1.3m, 深さ16cmを測る。底面には顕著な凸凹がなく、全体的に平坦である。周壁の立ち上がりは急峻で、残存高は8～19cmを測る。遺構内堆積土は、2層に分層される。炭化物などの混入物は見られなかった。堆積状況に壁際の三角堆積が見られるので、自然堆積の可能性が指摘できる。

遺 物

本住居跡から出土した遺物は、土師器13点である。図示できるものはなかった。

まとめ

本土坑は、所属時期の判る遺物が出土していないものの、堆積土の性状から判断して、古墳時代後期の所産と考えられる。性格は不明である。(堀 川)

5号土坑 SK05

遺 構 (図119, 写真85)

調査区中央やや東側T11-36グリッドに位置する。地形的には自然堤防の狭い平坦部上に立地す

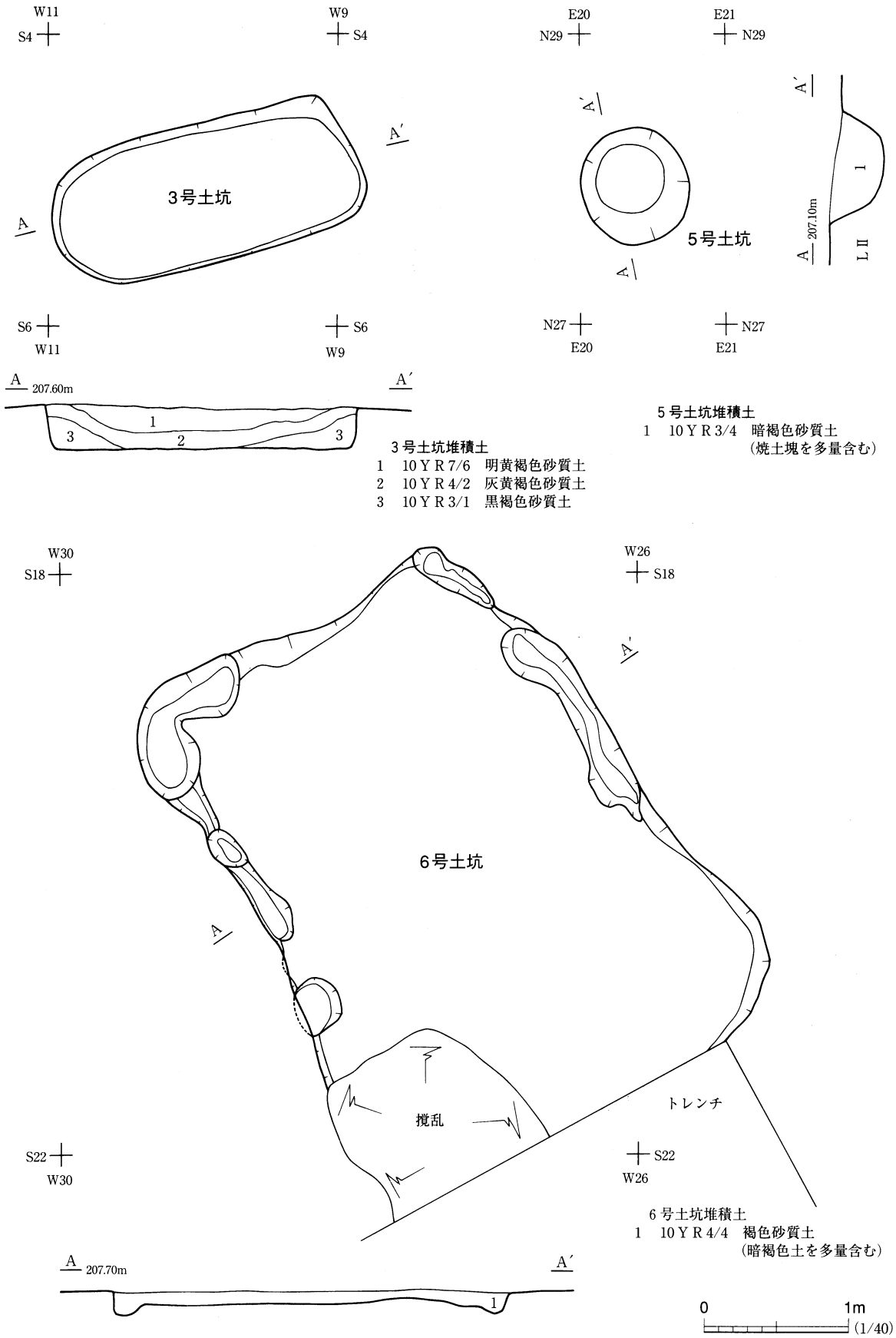


図119 3・5・6号土坑

る。検出面は、LⅡ上面で暗褐色土の落ち込みとして検出された。他の遺構との重複関係は認められないが、土坑の東側には16号住居跡が位置している。

堆積土は暗褐色砂質土1層であるが、焼土塊を多量に含むことから人為堆積と判断した。平面形は、直径約80cmの円形を呈している。断面形は鍋底状を呈し、検出面から底面までの深さは、30～35cmを測る。本土坑から、遺物は出土しなかった。

まとめ

本土坑の所属時期は、遺物が出土していないため特定できないが、遺構検出面や周囲の遺構の分布状況から、古墳時代の所産と考えている。(大河原)

6号土坑 SK06

遺 構 (図119, 写真85)

調査区の中央から少し南に寄ったS12-43・44・53・54グリッドのLⅢ上面で検出された。遺構の南側は、試掘調査時のトレンチや攪乱によって一部が破壊されている。12号住居跡と上下に重複し、新旧関係では本土坑の方が新しい。遺構内堆積土は1層のみ確認された。l1は、2種類の土が混じり合って形成されており、一気に埋め戻したような状況を呈することから、人為的に投棄されたものと考えられる。

平面形は南北方向に長い不整な長方形を呈する。長軸方向は真北から31°西に傾いている。規模は長軸410cm、短軸330cmを測り、検出面からの深さは最大15cmある。LⅢとした硬質の砂質土を掘り込んで周壁としているため、よく整っている。壁の立ち上がりは急峻で、ほぼ直立している。東壁と西壁の直下からは、幅16～40cm、深さ2～8cmの溝が見つかった。底面は東側が若干高くなるものの、おおむね平坦な状態である。

遺 物

本土坑から出土した遺物は、土師器16点である。図示できるものはなかった。

まとめ

本土坑は形態や規模から、造りかけの堅穴住居跡と推察される。東壁・西壁の直下で見つかった溝は、堅穴の形を方形あるいは長方形に整えようとした痕跡と思われる。構築途中で何らかの不都合が生じ、埋め戻されたのであろう。年代を特定するような遺物は出土していないが、12号住居跡よりも新しいことから、7世紀後半以降の所産と考えられる。(小暮)

7号土坑 SK07

遺 構 (図120, 写真86)

調査区西端R13-39・49グリッドのLⅢ上面で検出された。他遺構との重複はない。遺構内堆積土は3層に細分され、レンズ状の自然埋没状態を示している。

平面形は東西方向に長い不整な長方形を呈している。規模は東西長114cm、南北長88cmを測る。

底面は凹凸のあまりない平坦な状態であった。周壁は底面から急角度で立ち上がり、よく整っている。壁高は約20cmを計測した。

遺物

本土坑から出土した遺物は、土師器25点である。図示できるものはなかった。

まとめ

本土坑からは、年代を特定するような遺物が出土していないため、明確な所属時期は不明である。しかし、堆積土の性状が竪穴住居跡に近似していることから、古墳時代後期の所産であると判断している。性格は不明である。 (小 暮)

8号土坑 SK08

遺構 (図120, 写真86)

調査区中央のやや東側U11-61・71グリッドに位置し、地形的には自然堤防南側に形成された後背地の裾部に立地する。LⅢ上面で黒褐色土の落ち込みとして検出した。他の遺構との重複関係は認められないが、土坑の東側の壁は斜面の傾斜に変化なく移行し、遺存していない。また、本土坑の東側には4号建物跡が近接している。

堆積土は2層で、①・②いずれも壁際からレンズ状の堆積を示すことから、自然堆積と判断した。遺存する平面形は、長径約310cm、短径約270cmの南北に長い楕円形を呈す。遺存する壁は、いずれも急角度で立ち上がっている。検出面から底面までの深さは、残りの良い西側で約20cmを測る。底面はほぼ平坦に造られていた。

遺物

遺物は、堆積土内から土師器片99点、須恵器片2点が出土しているが、いずれも小片で図示できなかった。

まとめ

本土坑の年代は、明確な時期の判る遺物が出土していないため、特定することはできない。しかし、遺構検出面などから、古墳時代に属する可能性が高いと考えている。 (大河原)

9号土坑 SK09

遺構 (図120, 写真86)

調査区中央やや東側U11-42グリッドに位置する。地形的には東西に延びる自然堤防の南側に形成された後背地に続く斜面に立地する。検出面は、LⅢ上面で黒褐色土の落ち込みとして検出された。他の遺構との重複関係は認められないが、土坑の東側には1号鍛冶遺構が位置している。

堆積土は2層で、①・②いずれもレンズ状の堆積を示すことから、自然堆積と判断した。平面形は、直径約80cmの円形を呈している。断面形は鍋底状を呈し、検出面から底面までの深さは、20～25cmを測る。遺物は出土しなかった。

まとめ

本土坑の所属時期は、出土遺物がないため特定できないが、遺構検出面や周辺の遺構の分布状況から判断して、古墳時代のものと考えている。(大河原)

10号土坑 SK10

遺 構 (図120, 写真86)

調査区中央やや東側U11-2グリッドに位置する。地形的には東西に延びる自然堤防の狭い平坦面に立地する。トレンチ調査の断面観察の際に確認されたため、遺存状態は極めて悪く、検出されたのは、土坑の北半分だけである。他の遺構との重複関係は認められないが、土坑の南西側には19号住居跡が近接している。

遺存する堆積土は2層で、 $\phi 1 \cdot 2$ いずれも壁際からのレンズ状堆積を示すことから、自然堆積と判断した。土坑の規模は、遺存値で長径約100cm、短径約60cmを測る。遺存する壁は急角度で立ち上がり、壁高は約20cmを測る。遺存する底面は、ほぼ平坦に造られている。

遺 物

遺物は、本土坑の堆積土中から土師器片が23点出土したが、細片のため図示できなかった。

まとめ

本土坑の所属時期は、遺構検出面や周辺の遺構の分布状況から判断して、古墳時代のものと考えている。(大河原)

11号土坑 SK11

遺 構 (図120, 写真86)

調査区中央やや東側U11-62グリッドに位置する。地形的には東西に延びる自然堤防の南側に形成された後背地に続く斜面に立地する。検出面は、LⅢ上面で黒褐色土の落ち込みとして検出された。他の遺構との重複関係は認められないが、土坑の北側には1号鍛冶遺構、南側には4号建物跡が近接している。

堆積土は黒褐色砂質土1層で、堆積過程は判断できない。平面形は、長径約90cm、短径約60cmの長方形を呈している。検出面から底面までの深さは、15cmを測る。壁はいずれも底面から急角度で立ち上がり、底面は細かな凹凸が認められるもののほぼ平坦に造られていた。遺物は出土しなかった。

まとめ

本土坑の所属時期は、遺構検出面などから古墳時代に属するものと考えている。(大河原)

12号土坑 SK12

遺 構 (図121, 写真86)

本土坑は12号住居跡の西側、S12-62グリッドで検出された。12号住居跡と重複し、新旧関係で

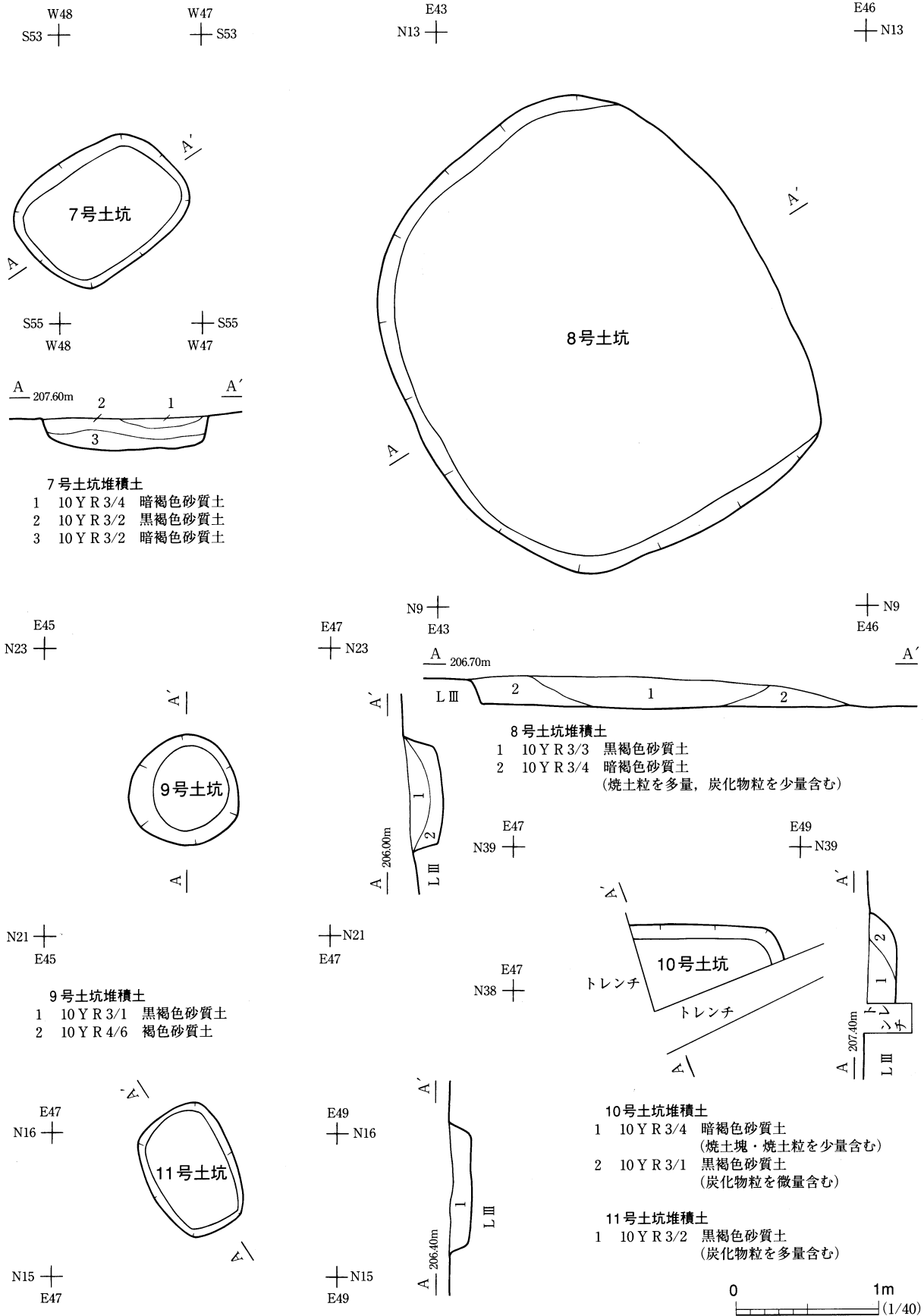


図120 7～11号土坑

は、本土坑の方が新しい。

検出面はLⅢと12号住居跡の堆積土上面で、平面形は直径80cmの円形を呈している。深さは、最深部で約30cmを計測した。底面は凸凹のない平坦な状態であった。周壁の立ち上がりは急峻である。

遺構内堆積土は2層からなり、堆積状況がレンズ状を呈していることから、自然堆積の可能性が指摘できる。

遺物 (図123, 写真111)

本土坑から出土した遺物は、土師器18点である。そのうち、土師器1点を図示した。

図123-1は土師器の杯である。口縁部が短く外反し、内面には稜を形成している。体部は碗形を呈している。調整は外面が口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、内面が口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ・ヘラミガキである。

まとめ

本土坑は、出土した遺物から、古墳時代中期に帰属するものと推察される。遺構の性格は不明である。 (堀川)

13号土坑 SK13

遺構 (図121, 写真87)

本土坑は、調査区南西部のR12グリッドに位置する。重複する遺構はないが、周囲には東方2.2mに4号住居跡、南西3.4mに5号住居跡、南方3.4mに6号住居跡が近接している。遺構検出面はLⅢの黒褐色砂質土上面である。遺構内堆積土はLⅡaに近似する暗褐色砂質土の単層で、堆積状況から自然堆積と判断した。

平面形は円形を呈し、規模は上端ラインの直径が約80cm、検出面からの深さが最大で15cmを測る。周壁は、北東側を除いておおむね緩やかな曲線で立ち上がっており、全体として鍋底状を呈している。底面に起伏は認められず、おおむね平坦である。なお、本土坑から遺物は出土しなかった。

まとめ

本土坑は遺物が出土しておらず、明確な時期や機能については不明である。近接する4・5号住居跡との関連が想定される。 (成田)

14号土坑 SK14

遺構 (図121, 写真87)

調査区中央T11-82・92グリッドのLⅢ上面で検出された。他遺構との重複はない。遺構内堆積土は、焼土や炭化物を含む灰黄褐色系の層で、自然流入土と思われる。遺構の東半分は掘りすぎてしまったため、西半分しか記録することができなかった。

平面形は南北方向に長軸をもつ不整な楕円形を呈し、規模は長径190cm、短径134cmを測る。底面は、ほぼ平坦な状態であった。周壁は底面から緩やかに立ち上がり、壁高は約5cmを計測した。本

土坑から、遺物は出土しなかった。

まとめ

本土坑からは、年代を特定するような遺物が出土していないため、明確な所属時期は不明である。しかし、堆積土の性状が竪穴住居跡に近似していることから、古墳時代後期の所産であると判断している。性格は不明である。 (小 暮)

15号土坑 SK15

遺 構 (図121, 写真87)

調査区中央やや南寄りT12-33・43グリッドのLⅢ上面で検出された。遺構の立地する地点は、阿武隈川に沿って形成された自然堤防の後背地にあたる。他遺構との重複はない。

遺構内堆積土は2層で、周囲から流れ込んだような堆積状況を示すことから、自然埋没状態と思われる。

平面形は南北方向に長軸をもつ不整な楕円形を呈し、規模は長径190cm、短径152cmを測る。底面は、ほぼ平坦な状態であった。周壁は、底面から直立気味に立ち上がり、壁高は50～69cmを計測した。本土坑から、遺物は出土しなかった。

まとめ

本土坑からは、年代を特定するような遺物が出土していないため、明確な所属時期は不明である。しかし、堆積土の性状が竪穴住居跡に近似していることから、古墳時代後期の所産であると判断している。性格は不明である。 (小 暮)

16号土坑 SK16

遺 構 (図121, 写真87)

調査区中央やや東側T11-80グリッドに位置する。地形的には東西に延びる自然堤防の南側に形成された後背地に続く斜面に立地する。

本土坑はトレンチ調査の断面観察の際、確認されたため、遺存状態は悪く、検出されたのは土坑の北半分だけである。他の遺構との重複関係は認められない。

遺存する堆積土は2層に分層できた、いずれも壁際からのレンズ状堆積を示すことから、自然堆積と判断している。土坑の規模は、遺存値で長径約80cm、短径約40cmを測る。断面形は鍋底状を呈し、検出面から底面までの深さは、20～25cmを測る。

遺 物

遺物は、堆積土内から土師器片2点が出土しているが、小片のため図示できなかった。

まとめ

本土坑の年代は、明確な所属時期の判る遺物が出土していないため、特定することはできない。しかし、検出状況などから判断すると、古墳時代の所産である可能性が高い。 (大河原)

第2章 遺構と遺物

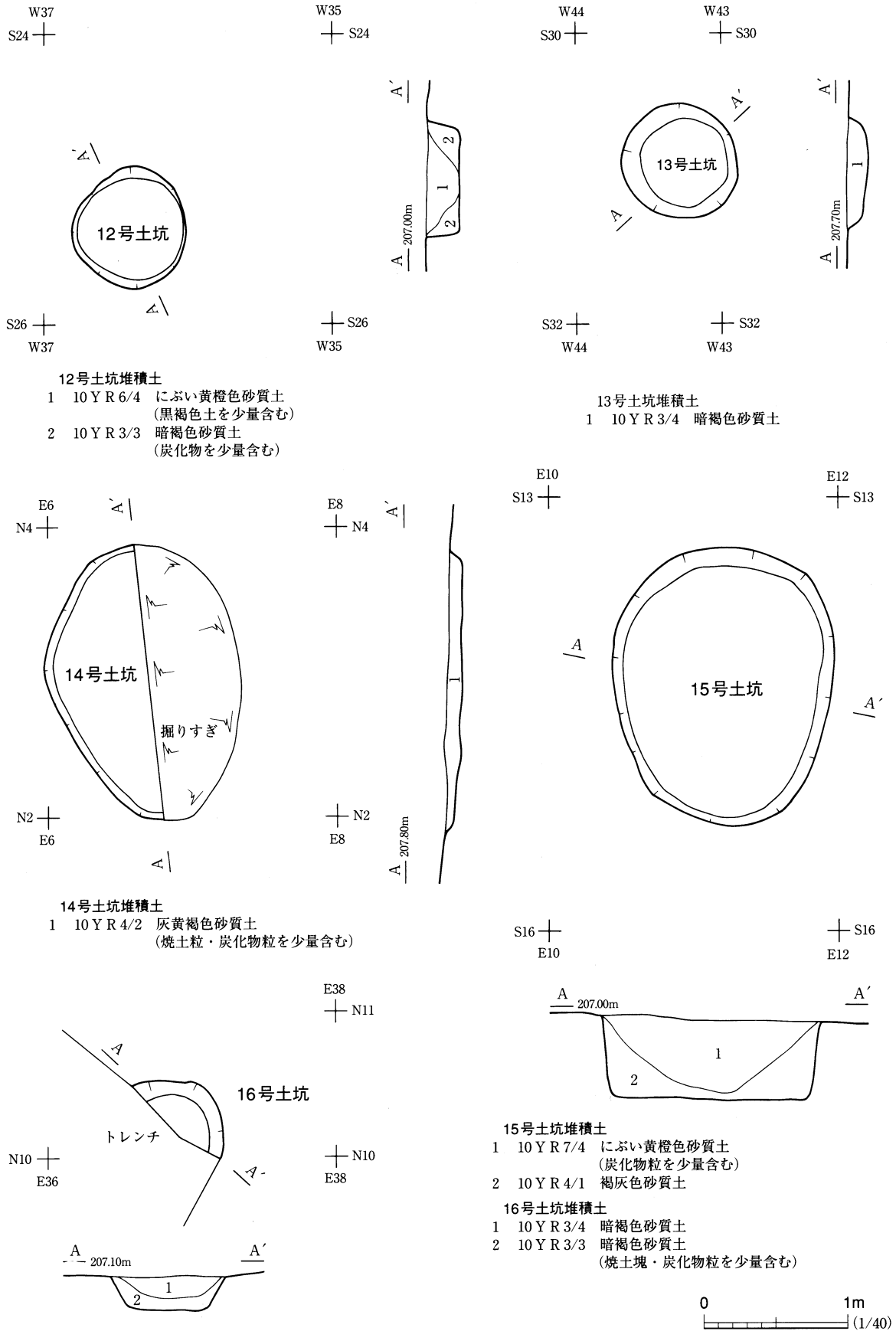


図121 12～16号土坑

17号土坑 SK17

遺 構 (図122, 写真87)

本土坑は、調査区南西部のS13グリッドに位置する。重複する遺構はないが、北西約5mに2号住居跡が近接している。遺構検出面はLⅢ上面である。遺構内堆積土は3層に区分した。l1・2ともLⅡbに近似する褐色砂質土で炭化物粒・焼土粒を含む。l3はLⅢに近似する暗褐色砂質土である。レンズ状の堆積を示すことから、自然堆積と判断した。

平面形は調査区外に伸びるために明確な形状は把握できないが、おおむね楕円形を呈するものと推測される。確認できる規模は、長軸85cm、短軸90cmで、検出面からの深さが最大で23cmを測る。周壁はやや急な立ち上がりを示し、底面は南東方向にごく緩やかに傾斜している。なお、本土坑から遺物は出土していない。

ま と め

本土坑は遺物が出土しておらず、所属する時期は特定できない。機能についても、判断材料が乏しく不明といわざるをえない。 (成 田)

18号土坑 SK18

遺 構 (図122, 写真87)

本土坑は、調査区南西寄りのS12グリッドに位置する。重複する遺構はないが、3・4号住居跡と隣接している。遺構検出面はLⅢ上面である。遺構内堆積土は4層に区分した。l1・3・4は

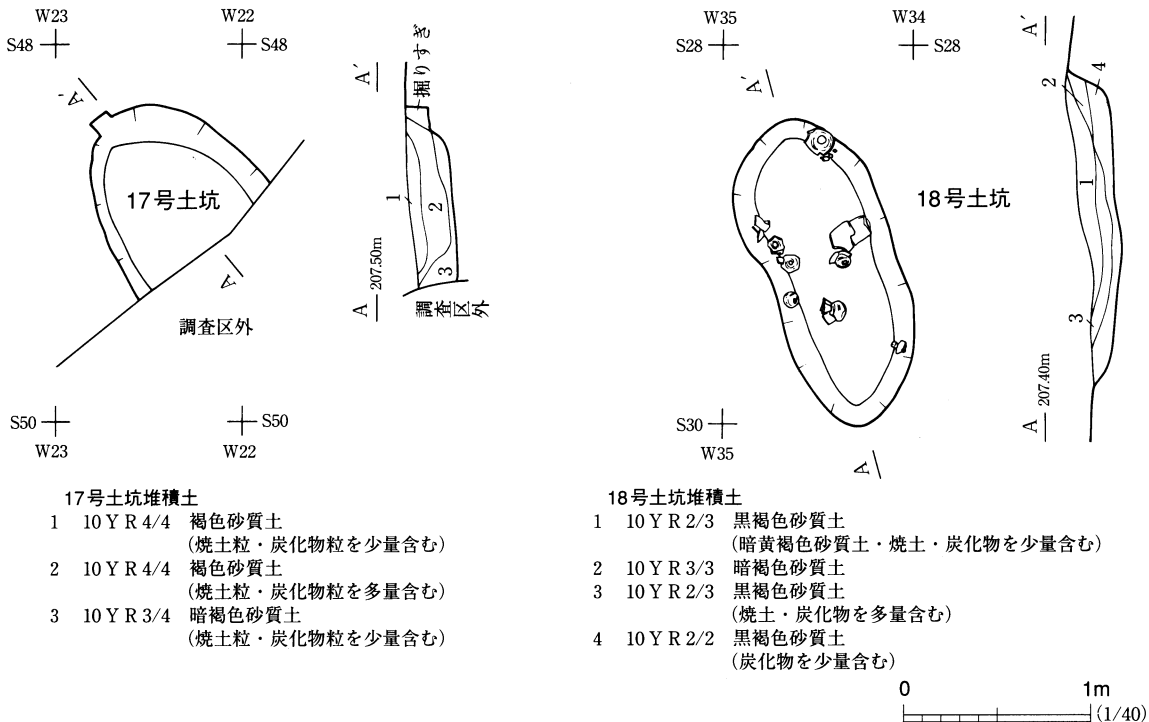


図122 17・18号土坑

L II c に近似する黒褐色土を基調とし、炭化物・焼土を含む。ℓ 2 は壁側からの流入土である。なお、ℓ 1 からは多数の土師器片が投棄されたような状態で出土しており、炭化物や焼土が混入していることから、人為的な堆積と判断した。

平面形はわらじ形を呈し、長軸方向はN15°Wを示す。規模は長軸163cm、短軸67cm、検出面からの深さは最大で24cmを測る。周壁は、おおむねやや急な立ち上がりを示し、全体として鍋底状を呈する。底面には緩やかな起伏があるものの、おおむね平坦である。

遺物 (図123, 写真111)

本土坑の堆積土から土師器383点が出土している。図123-2・3は土師器の杯あるいは鉢である。2は扁平な平底から半球状の胴部を経て、頸部が直立し、口縁部で外反する。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施されている。内面は、口縁部にヨコナデ、胴部にヘラナデが施されている。3は2に類似する器形であるが、底部を欠損しており、全体の遺存度も40%程度である。器面調整は、内外面ともに口縁部にヨコナデ、胴部にヘラナデが施されている。

図123-4~8は、土師器の高杯である。4は杯部の破片で、口縁部に向かって内湾ぎみに開く器形を呈する。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリ後にハケメが施されている。内面は、ハケメとヘラケズリが施されている。5も杯部の破片で、口縁部及び脚部を欠損している。体部下半に稜を持ち、口縁部に向かって外傾する器形を呈する。外面の調整は、ヘラケズリ後にヘラミガキとハケメが施されている。内面は、ヘラミガキとハケメが施され、粘土紐の積み上げ痕が観察される。6は中空長脚の高杯で、遺存度は60%である。杯部の下半に緩やかな稜を持ち、口縁

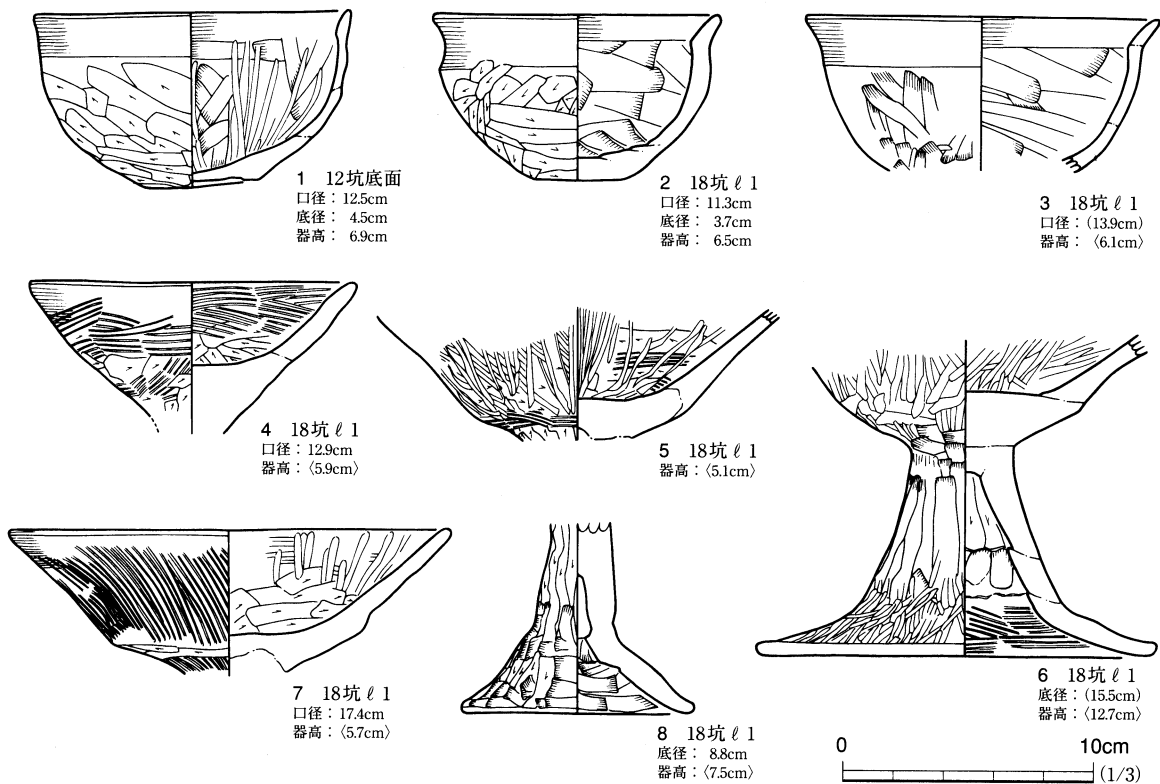


図123 12・18号土坑出土遺物

部が緩やかに外傾し、脚部は裾部が強く広がる形態を呈する。外面の調整は、杯部にヘラミガキ、脚部上半にヘラナデ、脚部下半にヘラミガキ、裾部にヨコナデが施されている。内面は、杯部にヘラミガキ、脚部上半にヘラケズリとヘラナデ、脚部下半にハケメ、裾部にヨコナデが施されている。7は杯部の破片で、杯部の下端に稜を持ち、外湾ぎみに外傾する器形を呈する。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、体部にハケメ、杯部下端にヘラケズリとハケメが施されている。内面は、口縁部にハケメとヘラミガキ、下半にヘラケズリが施されている。8は中空長脚の高杯の脚部破片である。外面の調整は、上半にヘラケズリ、下半にヘラケズリ後にヘラナデが施されている。内面は、下半にヘラナデが施されている。

まとめ

本土坑から多数の遺物が投棄されたような状態で出土したことから、その性格は廃棄に関連したものであったと考えている。所属時期は、出土遺物の特徴から5世紀末から6世紀初頭にかけてと考えている。

本遺跡において堅穴住居跡を主体とした集落が成立するのは、6世紀後半以降のことである。それ以前に、本土坑のような遺構が存在することは、今回の調査区を除く別の地点で、該期集落が営まれていた可能性が高いことを示唆している。(成田)

第4節 鍛冶遺構

今回の調査によって検出された鍛冶遺構は1基である。鍛冶炉については、遺存状態が悪く、検出できたのは炉底面と考えられる酸化面だけである。作業場や鍛冶炉に付属するピットから鍛造剥片や湯玉が採取され、また、作業場の下に廃滓場が形成されていることなどから、鍛冶遺構として報告する。本鍛冶遺構は、同時期の堅穴住居跡の分布状況から、集落の外れに営まれていたようである。

1号鍛冶遺構 SWK01

遺構 (図124・125, 写真83・84)

本鍛冶遺構は、調査区北側U11-42・43・52~54・63グリッドにまたがって位置する。地形的には、自然堤防から後背湿地へ向かう谷地形の南向き緩斜面部に造られている。操業に伴って排出される鉄滓類の処理や日照条件などを考えての選地と思われる。

本遺構は、包含層掘り込み作業時に、羽口や多量の鉄滓を含む層を検出、この鉄滓を含む層は廃滓層の可能性が高いと考え、土層観察用のベルトを残して検出作業を行った。その結果、緩斜面上方でふい黄褐色土の方形の広がりを確認した。ベルトで土層の観察を行ったところ、堅穴状の掘り込みを確認し、鉄滓を含む層はこの堅穴状の掘り込みの下位から流出していることが判った。このことから、鉄滓を含む層を廃滓層、堅穴状の掘り込みを作業場と仮定して調査を行うことにした。

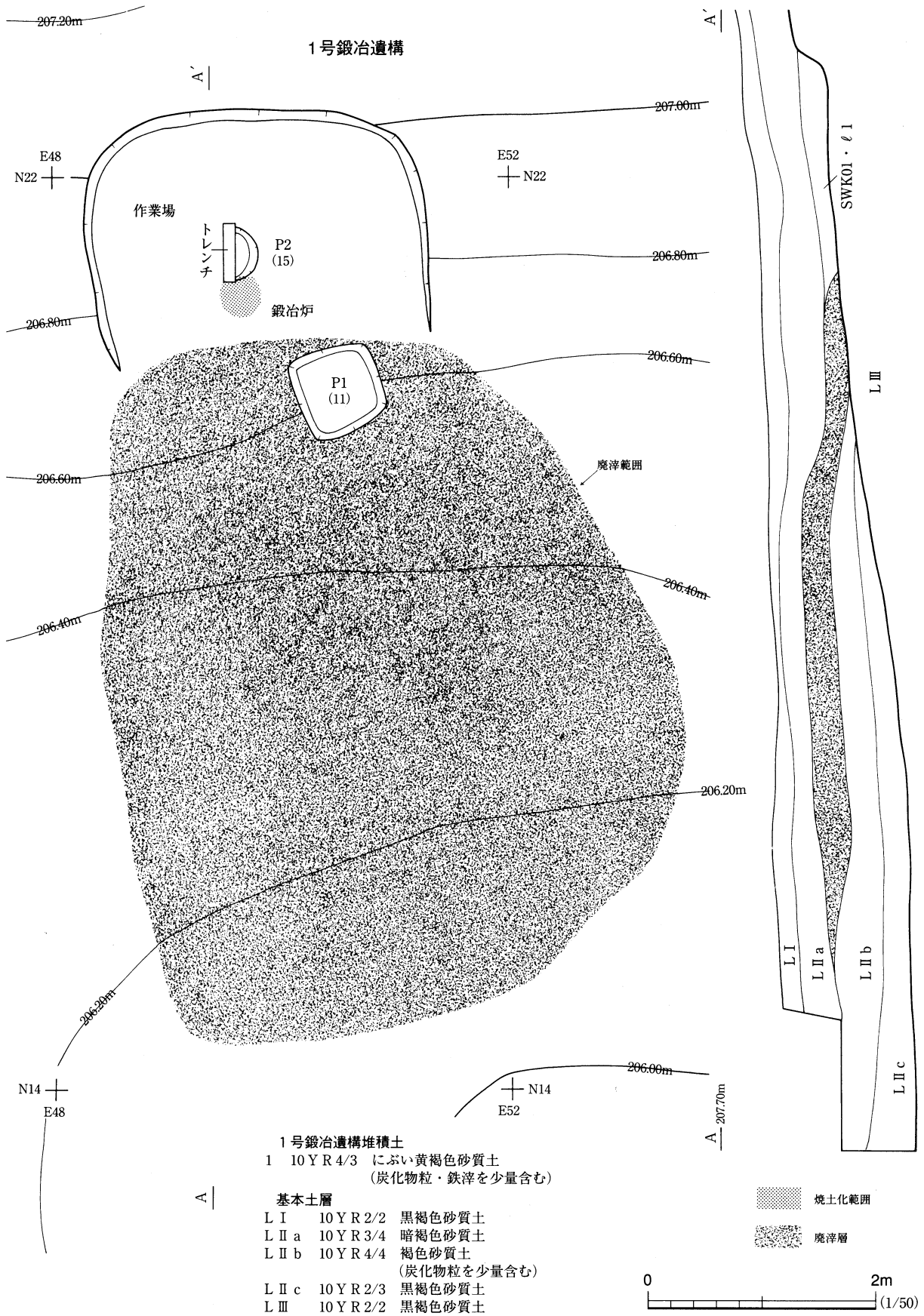


図124 1号鍛冶遺構 (1)

なお、廃滓層に含まれる鉄滓については、各グリッドごとに取り上げを行っている。また、本遺構の廃滓場の末端と4号建物跡のP5とが重複し、廃滓層の下で4号建物跡のP5を検出していることから、本遺構のほうが新しく位置付けられる。

1号鍛冶遺構として検出した遺構は、作業場と考えられる竪穴状の掘り込みと、作業場内の鍛冶炉の残欠、ピット2個と作業場下位に形成された廃滓場である。鍛冶炉については、遺存状況が悪く検出できたのは炉底面と考えられる酸化面だけであった。酸化面周辺を精査した結果、少量の鉄滓、鍛造剥片や湯玉が採取された。

本鍛冶遺構は、緩斜面に竪穴を掘り込み作業場としている。斜面上位の北壁は遺存しているが、斜面下位の南側は床面がそのまま斜面に移行している。作業場の規模は、遺存値で東西3.0m、南北2.0m、深さは最も残りの良い北壁で25cmを測る。床面は、ほぼ平坦に造られている。作業場内の堆積土は、にぶい黄褐色砂質土が1層堆積していた。

鍛冶炉本体は、作業場のほぼ中央に位置している。遺存状況が悪く、炉底と思われる酸化面だけを検出した。遺存する鍛冶炉の平面形は直径40cmの円形を呈し、検出面から4cm程の深さまで酸化していた。

また、鍛冶炉の北側に隣接してP2を、南側でP1を検出した。P1は廃滓層を除去した後に検出している。平面形は、一辺が70cmの正方形を呈している。検出面からの深さは11cmを測る。堆積

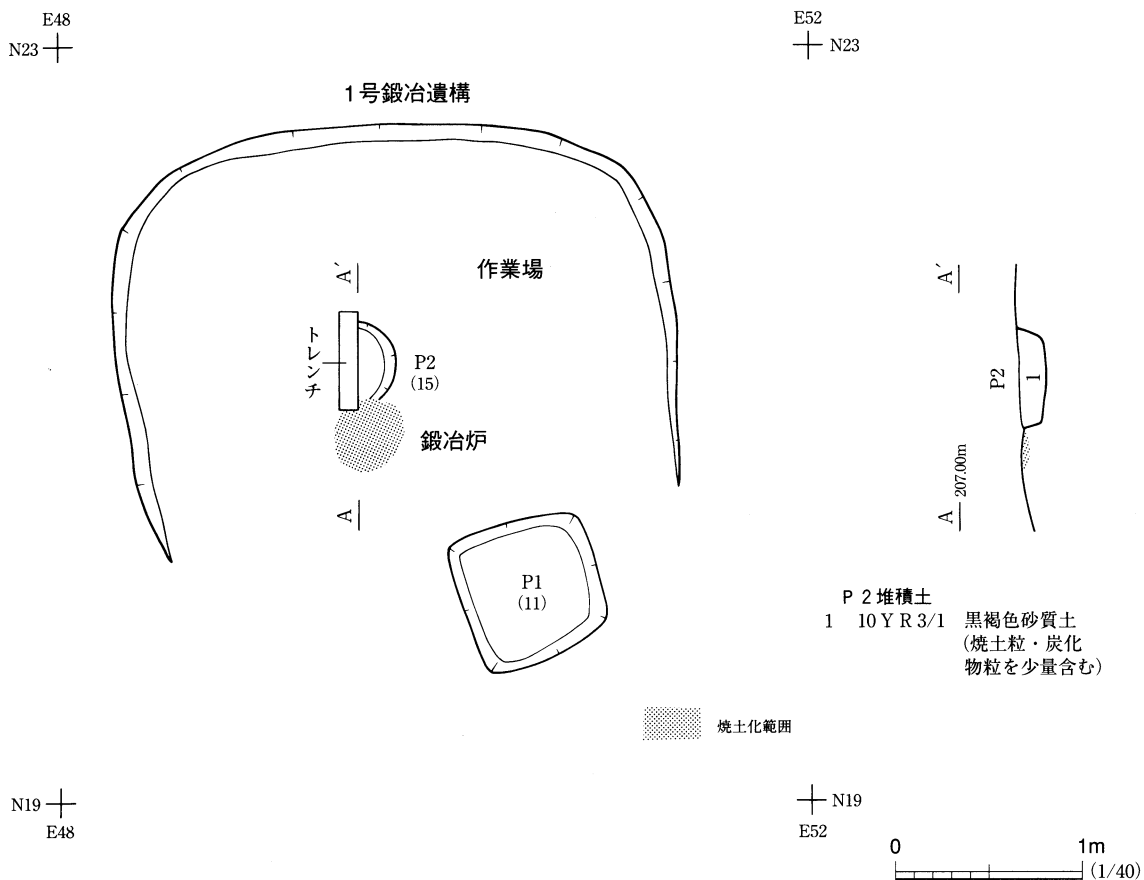


図125 1号鍛冶遺構 (2)

土は1層である。堆積土中から、鉄滓が検出されなかったことから、作業時には既に埋まっていたと考えられる。P2は、鍛冶炉の北側に隣接して検出された。西側は、トレンチで削平したため遺存していない。規模は遺存値で、南北50cm、東西20cmを測る。検出面からの深さは、15cmである。堆積土は、黒褐色砂質土である。P2の堆積土上面の一部が酸化していたことから、P2についても、鍛冶炉作業時には埋め戻されていたものと考えられる。したがって、鍛冶炉に対する除湿効果をねらった付属施設の可能性が推測される。

廃滓場は、作業場の下に形成されていた。鉄滓類は、廃棄しやすい作業場下に投棄されていたようである。鉄滓類は南北に長いゆがんだ楕円形の範囲に広がって廃滓場を形成し、その規模は、最大長6.1m、最大幅5.0mである。この廃滓場から出土した鉄滓は、約90kgを測り、出土分布を見ると作業場から廃滓場中央にかけてまとまって出土している。また、グリッド別に見ると、鍛冶炉作業場東側、鍛冶炉と標高があまり変わらないU11-55で、まとまって出土している。この場所は、包含層として掘り込んでしまったため、土層観察のベルトや平面図を作成していないが、鉄滓の出土量などからこの場所にも鉄滓類を投棄した可能性が考えられる。この他、鍛冶炉本体と廃滓場の周辺からも少量の鉄滓が出土している。

遺物 (図126, 写真112)

出土遺物は土師器748点、須恵器48点、羽口111点、鉄滓91.8kg、鍛造剥片200gである。このうち、土師器2点、須恵器3点を図示した。

図126-1は、非ロクロ整形の土師器杯である。丸みを帯びた底部から、緩やかに内湾して口縁部が立ち上がる器形となる。口縁部外面にヨコナデが、体部外面にはヘラケズリ、内面にはヘラナデが施されている。

図126-2は、土師器甕の底部資料と思われる。外面にヘラケズリ、内面には、黒色処理とヘラ

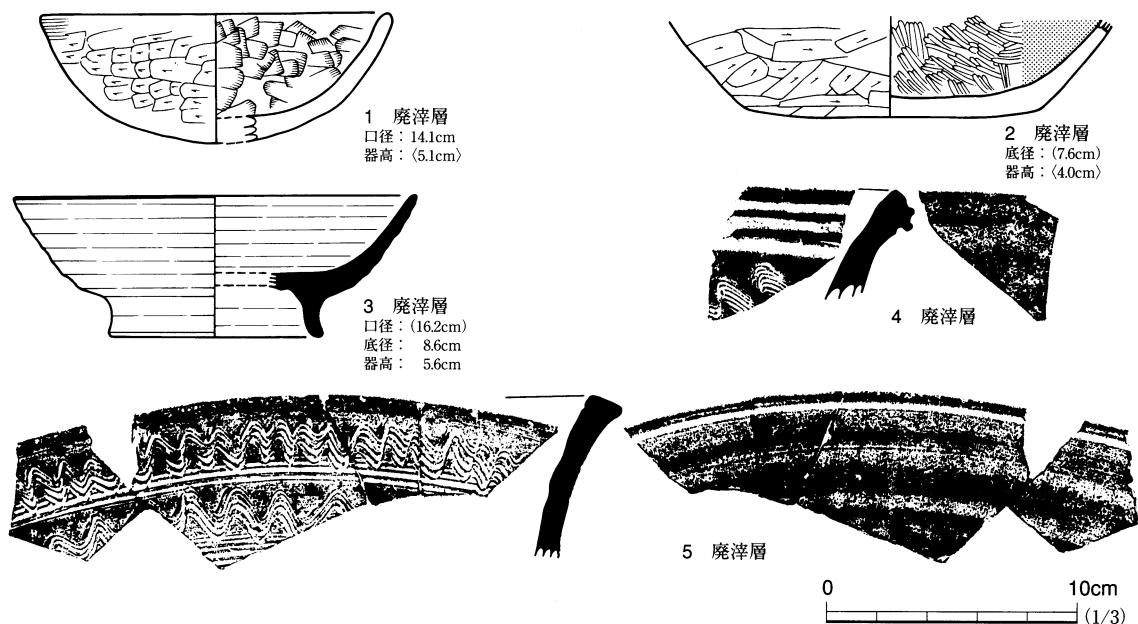


図126 1号鍛冶遺構出土遺物

ミガキが施されている。

図126-3は、須恵器高台付杯である。図126-4・5は、須恵器甕の口縁部資料である。いずれも口縁部直下に櫛描きの波状文と横線文が施される。

本鍛冶遺構から出土した鉄滓類には、外観の特徴から判断して、炉内滓、流出滓、椀形滓と思われるものがある。これらについては、鍛冶炉の操業状態の復元や始発原料の特定を行う目的でサンプリングを行い、成分分析に供している。その分析結果の報告については、付編2に収録してあるので参照されたい。

まとめ

鍛冶遺構の施設として、作業場と作業場内の鍛冶炉の残欠、ピット2個と廃滓場を検出した。このうち、鍛冶炉については、遺存状況が悪く、検出できたのは炉底面と考えられる酸化面だけである。また、廃滓場は、作業場下の緩斜面に形成されていたが、グリッドから出土した鉄滓の分布状況から、鍛冶炉東側にも鉄滓を投棄していたようである。本鍛冶遺構の所属時期は、廃滓層から出土した遺物などから判断して、8世紀後葉に位置付くものと考えている。また、同時期の竪穴住居跡の分布状況から、本鍛冶遺構は集落の外れに営まれていたようである。(大河原)

第5節 焼土遺構

今回の調査によって検出された焼土遺構は2基である。これらは、いずれも古墳時代に属するものと考えられる。以下、これらの焼土遺構について遺構番号順に報告する。

1号焼土遺構 SG01

遺 構 (図127, 写真89)

調査区北部やや東寄りのT11-20グリッドに位置する。地形的には、東西に形成された自然堤防の狭い平坦部に立地する。遺構検出面はLⅡ上面である。他の遺構との重複関係は認められないが、東側に19号住居跡が位置している。

焼土遺構の平面形は、長径45cm、短径33cmの南北に長いゆがんだ楕円形状を呈している。焼土化は、焼土上面から2～8cm下まで及んでいた。強い火熱を受けているため、焼土化した部分は赤褐色に色調が変化し、硬化した状態であった。

遺 物 (図127)

遺物は、検出面から散在的に出土している。内訳は、土師器片146点、須恵器片2点である。このうち、実測可能な4点を図示した。

図127-1は丸味のある体部から口縁部が外反する土師器杯である。内面はヘラミガキと黒色処理、体部下半にはヘラケズリ、口縁部はヨコナデが施されている。

図127-2は土師器甕で、底部付近の資料である。内面にヘラナデ、外面には条線の細かいハケ

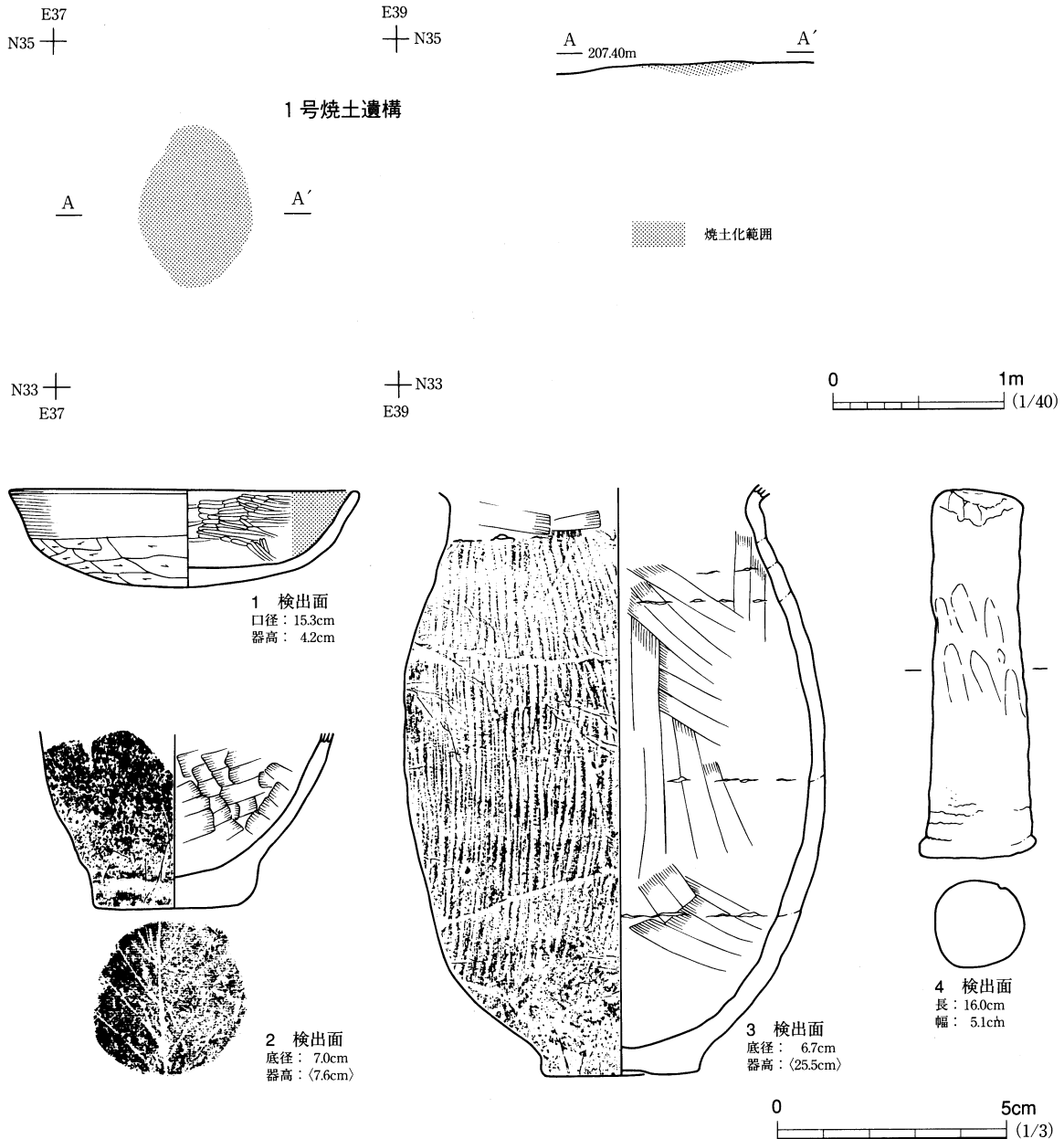


図127 1号焼土遺構と出土遺物

メが縦方向に施されている。

図127-4は棒状の土製支脚である。カマドの火熱や一定の荷重に耐えられるようにするためだろうか、きめ細かくて緻密な、精選された粘土を使用して、堅く焼き上げられている。整形はヘラケズリの後、ナデが加えられて平滑に仕上げられている。

まとめ

本遺構の所属時期は、検出面から出土した遺物などから7世紀前半と考えている。また、焼土遺構の性格としては、検出時に出土した遺物や周辺の遺構の分布状況から判断して、カマドの残欠と考えている。

(大河原)

2号焼土遺構 S G02

遺 構 (図128, 写真89)

調査区北端U10-85グリッドに位置する。地形的には、阿武隈川右岸沿いに形成された自然堤防の狭い平坦部に立地する。遺構検出面はLⅢ上面である。他の遺構との重複関係は認められないが、遺存状況は悪く、焼土遺構の東半分は攪乱を受け、削平されていた。

堆積土は、検出段階で既に流失していたため、記録することができなかった。

焼土遺構の規模は、遺存長で南北27cm、東西15cmを測る。遺存状況から南北に長い楕円形状を呈していたと思われる。焼土化は、焼土上面から3cm程下まで及んでいた。1号焼土遺構と同様に、強い火熱を受けたため、焼土化した部分はLⅡが赤褐色に色調変化し、硬化した状態であった。

遺 物 (図127)

遺物は、焼土遺構の南側で土師器の甕が出土しているが、本遺構に直接伴うものか不明である。

ま と め

本遺構の所属時期は、直接遺構に伴う遺物がないことから特定できないが、検出面や周囲の遺構などから、古墳時代終末頃と考えている。 (大河原)

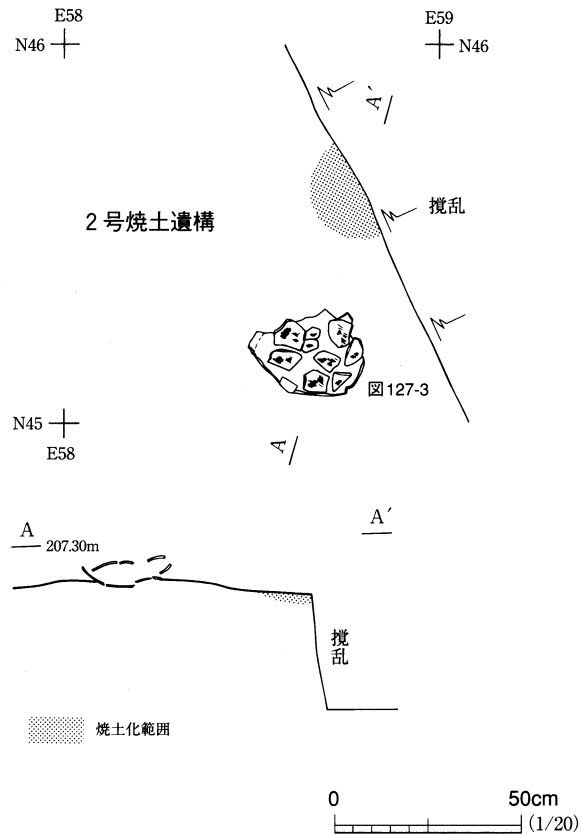


図128 2号焼土遺構

第6節 溝 跡

1号溝跡 S D01

遺 構 (図129・130, 写真88)

本遺構は調査区南西寄りのS12グリッドのLⅢ上面において検出した。溝跡の南東端は調査区外に向かって伸び、そこからN40°Wの傾きでほぼ一直線に伸びている。重複関係は、35号住居跡より新しく、3号建物跡、6号土坑よりも古い。周囲には、10号住居跡、12号住居跡、22・23号住居跡が隣接している。

遺構内堆積土は5層に区分した。ℓ1はLⅡaに近似する暗褐色土、ℓ2～5はLⅢに近似する

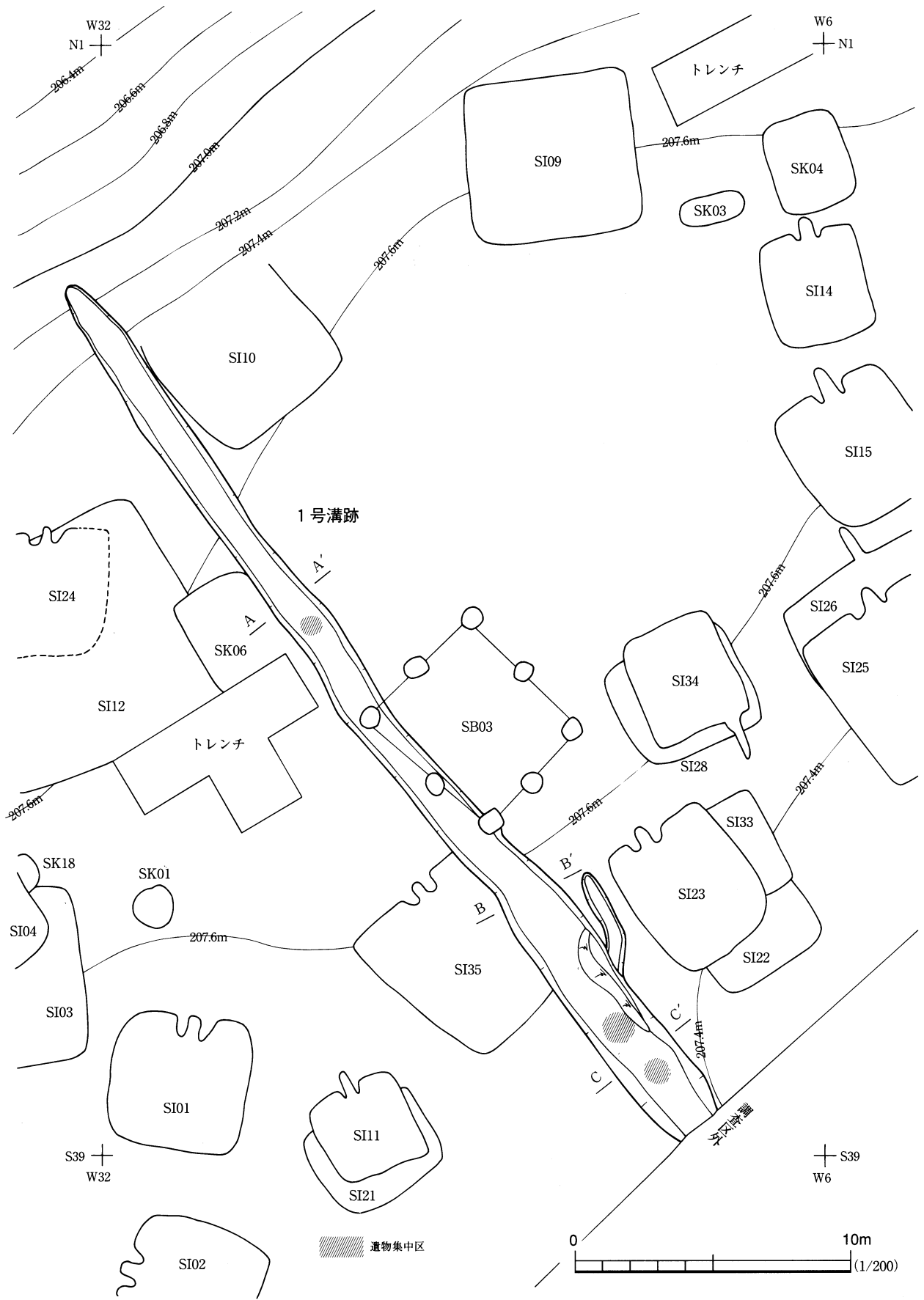


図129 1号溝跡 (1)

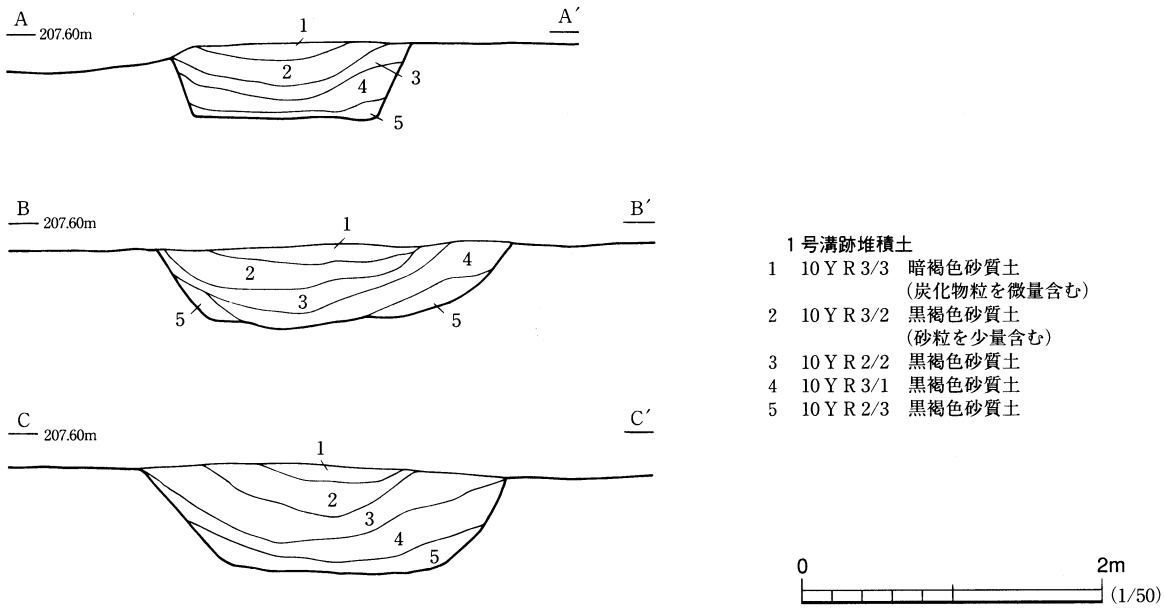


図130 1号溝跡(2)

黒褐色土である。レンズ状の堆積状況を示すことから、自然堆積と判断した。なお、 ℓ 2からは遺物が投棄されたような状態で、集中的に出土している。本遺構が埋没する過程で、何らかの廃棄行為が行われたこと示している。出土した遺物は、土師器や須恵器などの日常什器類が中心で、宗教的な用途に使用されたものは含まれていない。また、遺物が集中して出土した区域には、焼土跡や集石、石組といった儀礼的な行為を裏付けるような痕跡は確認されていない。

溝跡の規模は、調査区内の全長37.8m、最大幅2.4m、検出面から底面までの深さは最大で72cmを測る。底面はほぼ平坦で、北西端と南東端のレベル差は18cmを測り、中央から南東側がやや低い傾向がみられる。周壁は50~70°で立ち上がり、底面からの断面形はおおむね逆台形を呈する。

なお、本溝跡は南東端から7mのところでは北々西方向に分岐する。その支脈の規模は全長4.0m、最大幅70cm、深さは最大で27cmを測る。

遺物(図131, 写真111)

本遺構から土師器1,963点、須恵器42点、縄文土器7点、土製品15点、羽口1点、石製品1点、鉄製品2点が出土している。

図131-1は高台付きの土師器杯で、内外面ともにヘラミガキ後に黒色処理が施され、同器形の須恵器を模倣したものと考えられる。底部から体部下半にかけては緩やかに内湾して立ち上がり、低めの高台部は外傾して開き、安定感がある。

図131-2は土師器の椀で、丸底から内湾ぎみに立ち上がり、口縁部がやや外反する器形を呈する。外面の調整は、口縁部にヨコナデとヘラナデ、胴部にヘラケズリ後にヘラナデが加えられている。内面は、ヘラミガキ後に黒色処理が施されている。

図131-3は中型の土師器甕で、球胴状の胴部を呈し、頸部に稜を持つ。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、胴部にハケメ、底部周縁にヘラケズリが施されている。内面は、口縁部にヨコナデ、

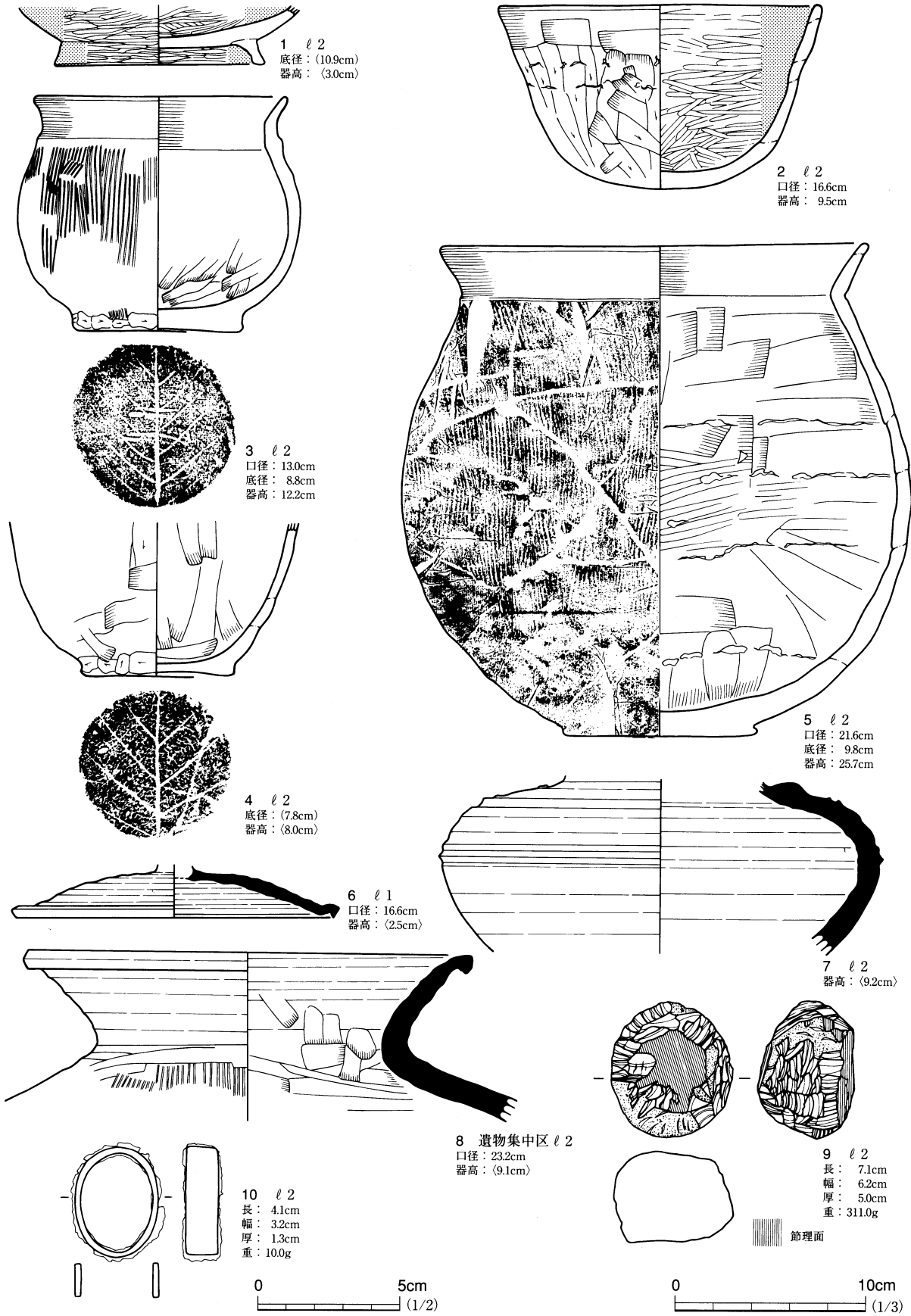


図131 1号溝跡出土遺物

胴部下半にヘラナデが施され、底部には木葉痕が観察される。

図131-4は土師器甕の底部で、平底から緩やかに内湾して立ち上がる器形を呈する。外面の調整はヘラケズリとヘラナデ、内面はヘラナデが施され、底部には木葉痕が観察される。

図131-5は大型の土師器甕で、平底から球胴状の胴部を経て、口縁部が「く」の字に外反する器形を呈する。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、胴部にハケメが施されている。内面は、口縁部にヨコナデ、胴部にヘラミガキとヘラナデが施されており、粘土紐の積み上げ痕が観察される。

図131-6は須恵器の杯蓋である。天井頂部は欠損し、やや膨らみを持って端部にいたる。内外面ともにロクロナデで調整されている。

図131-7は須恵器の壺あるいは長頸壺の肩部である。上半には2本の凸帯が2箇所回っており、上端部には深緑色の釉が観察される。内外面ともにロクロナデで調整されている。

図131-8は大型の須恵器甕の頸部から口縁部にかけての破片で、「く」の字に外反する器形を呈する。外面の調整はロクロナデとタタキが施され、内面にはロクロナデ後にヘラナデが施されている。

図131-9は石製紡錘車の未成品である。表裏面には、節理面が大きく残されている。側面には、ノミ状工具による成形痕が無数に残されている。

図131-10はリング状の鉄製品である。幅1.3cmの薄い鉄片を楕円形に加工している。刀装具の可能性のあるものと考えている。

まとめ

本遺構は、調査区において遺構が集中する地域を、阿武隈川に向かってほぼ直交するように構築された溝跡である。堆積状況や、底面に顕著な傾斜が認められないことから、排水溝というよりも区画溝の意味合いが強いと考えられる。

また、遺物が集中的に出土する箇所は、廃棄に関係するものと考えられる。所属時期は、重複する遺構との関係や出土遺物の特徴から、8世紀と考えている。(成田)

第7節 ピット群

山王川原遺跡では、竪穴住居跡や掘立柱建物跡などと一緒にピット（小穴）が多数検出されている。これらは、個々の住居跡や建物跡に付属するピットとして認識できなかったものである。また、個々のピットを相互に関連する同一の遺構として積極的に認定する確証もないが、ここでは、便宜的に検出された地点ごとにピット群を大きく3つに区分し、調査区の南側から順次報告する。

R13-7・8・17・18グリッドのピット群

遺構(図132)

R13グリッドは調査区最南端に位置し、中でも最も北東側に13個のピットが存在する。遺構が立

地する場所は、自然堤防の頂部平坦面で、標高は207.4~207.6mである。ピット群の南西には2号建物跡、北東には6号住居跡が位置しているが、重複関係はない。住居跡・建物跡の遺構検出作業の際に、あわせて検出された。各ピットの検出面はLⅢ上面である。

グリッド単位の内訳は、R13-7グリッド1個、R13-8グリッド4個、R13-17グリッド5個、R13-18グリッド3個である。これらは散漫に分布しており、建物跡あるいは柱列跡としての配列は明確にできなかった。また、各ピット間の心点間距離も規則性は認められない。

ピットの平面形は、円形から楕円形を基調とするものが多く、規模は長径30~94cmで、おおむね径60cm前後のものが多い。検出面から底面までの深さは8~32cmである。各ピット底面の標高には、バラツキがあり、建物跡の柱穴とは異なったあり方を示している。

ピットの堆積土は、いずれも暗褐色系の砂質土を基調としており、柱痕は確認されなかった。本

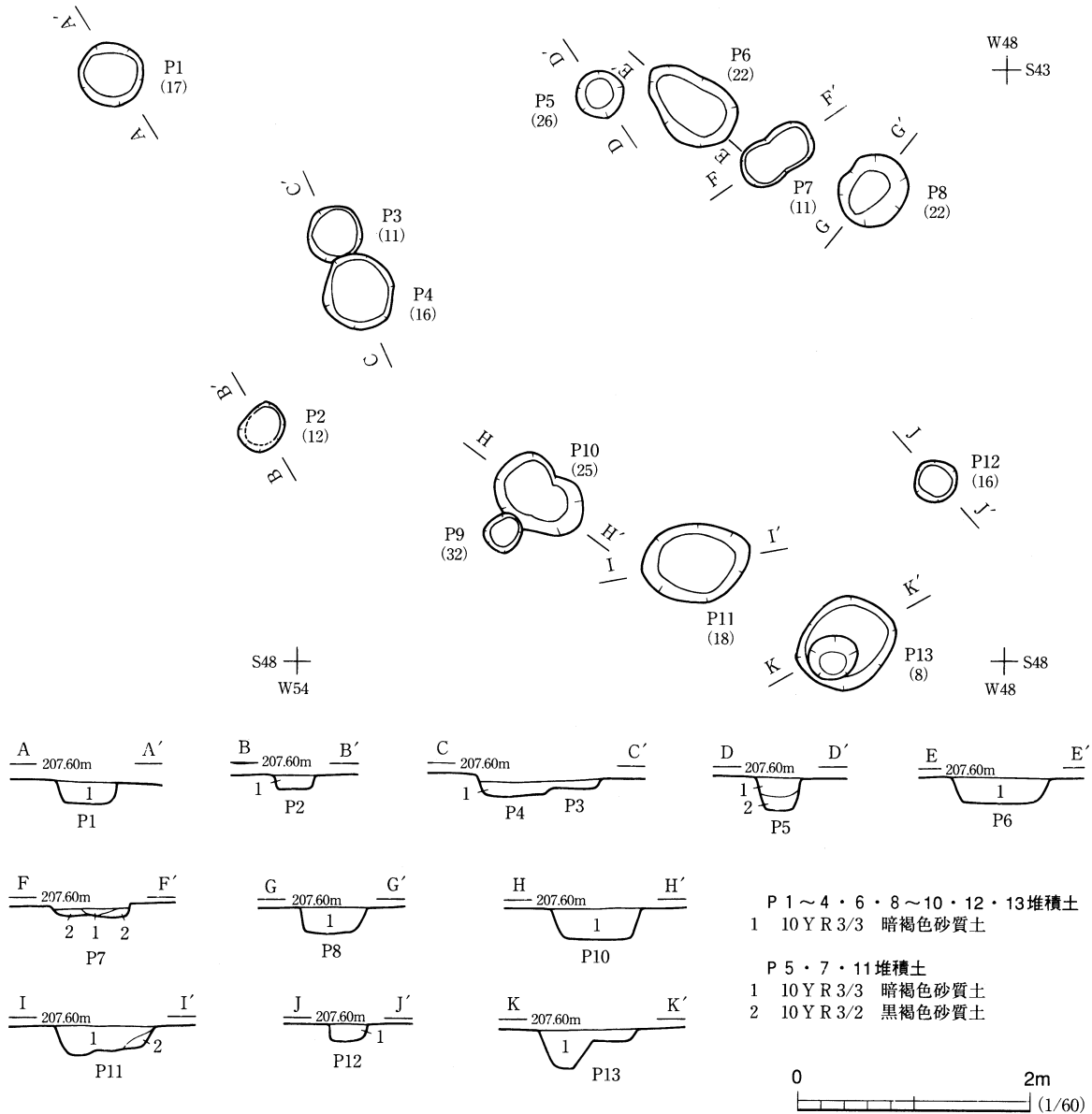


図132 R13-7・8・17・18グリッドのピット群

ピット群から遺物は、出土していない。

まとめ

本遺構は、明確な時期の判る遺物が出土しておらず、また他遺構との重複関係もない。したがって、遺構の年代を特定することはできないが、堆積土が2号建物跡に近似していることから、ほぼ同時期の7世紀後半以降の所産と考えたい。性格は不明である。 (小 暮)

R13-39・40グリッドのピット群

遺 構 (図133)

調査区の最南端に位置するR13グリッドの北東部で検出された3個のピットからなる遺構である。標高207.5m前後の自然堤防上にあり、2号建物跡や18号住居跡に近接しているが、重複関係はない。住居跡や建物跡の遺構検出作業の際に、あわせて検出された。各ピットの検出面はLⅢ上面である。

グリッド単位の内訳は、R13-39グリッドが2個、R13-40グリッドが1個である。これらは散漫に分布し、規則的に配列された状態ではなかった。また、各ピット間の心間距離には規則性が認められず、建物跡、あるいは柱列跡である可能性は低い。

ピットの平面形は楕円形を基調としており、規模は長径34~62cmで、検出面から底面までの深さは13~48cmを測る。各ピット底面の標高はバラツキがあり、建物跡の柱穴とは異なったあり方を示している。

ピットの堆積土は、いずれも暗褐色系の砂質土を基調としており、柱痕は確認されなかった。本ピット群から遺物は出土していない。

まとめ

本遺構は、明確な時期の判る遺物が出土しておらず、また他遺構との重複関係もない。したがって、遺構の所属年代を明言することはできないが、堆積土が2号建物跡に近似していることから、

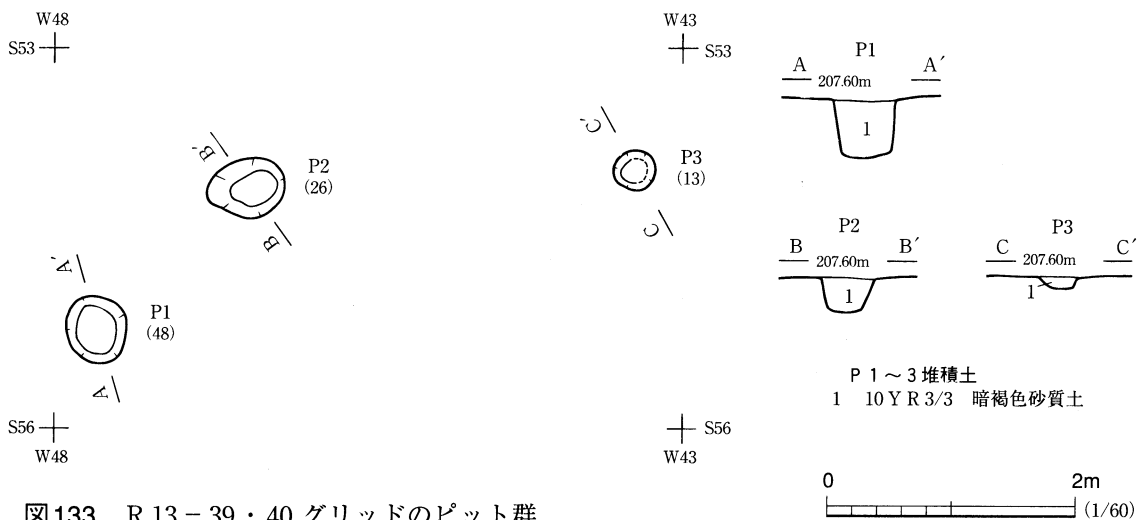


図133 R13-39・40グリッドのピット群

ほぼ同時期の7世紀後半以降の所産と推察される。性格は不明である。

(小 暮)

S11-100, S12-10・11, T11-91, T12-1・11グリッドのピット群

遺 構 (図134)

調査区中央のS11・12グリッド東側, T11・12グリッド西側で検出されたピットは、合計14個である。当地点は阿武隈川に沿って形成された自然堤防の頂部平坦面に位置し、標高は207.6mである。各ピットは13号住居跡西側に存在し、住居跡・建物跡の遺構検出作業の際にあわせて検出された。重複する遺構はなく、検出面はLⅢ上面である。

グリッド単位の内訳は、S11グリッド2個, S12グリッド5個, T11グリッド2個, T12グリッド5個である。配置は不規則で、建物跡としての配列は明確にできなかった。また、各ピットの心間距離にも規則性は認められない。

ピットの平面形は、円形を基調とするものと長方形を基調とするものがある。円形ピットの規模は、直径52～76cmで、おおむね直径60cm前後のものが多く、検出面から底面までの深さは12～59cmを測る。長方形のピットはP4とP5で、それぞれ長軸が56cm, 132cm, 短軸が48cm, 100cm, 深さが16cm, 22cmを計測した。各ピット底面の標高はバラツキがあり、建物跡の柱穴とは異なったあり方を示している。

ピットの堆積土は、黄橙色系、褐色系の砂質土で、柱痕が確認されたものはない。本ピット群から遺物は出土しなかった。

ま と め

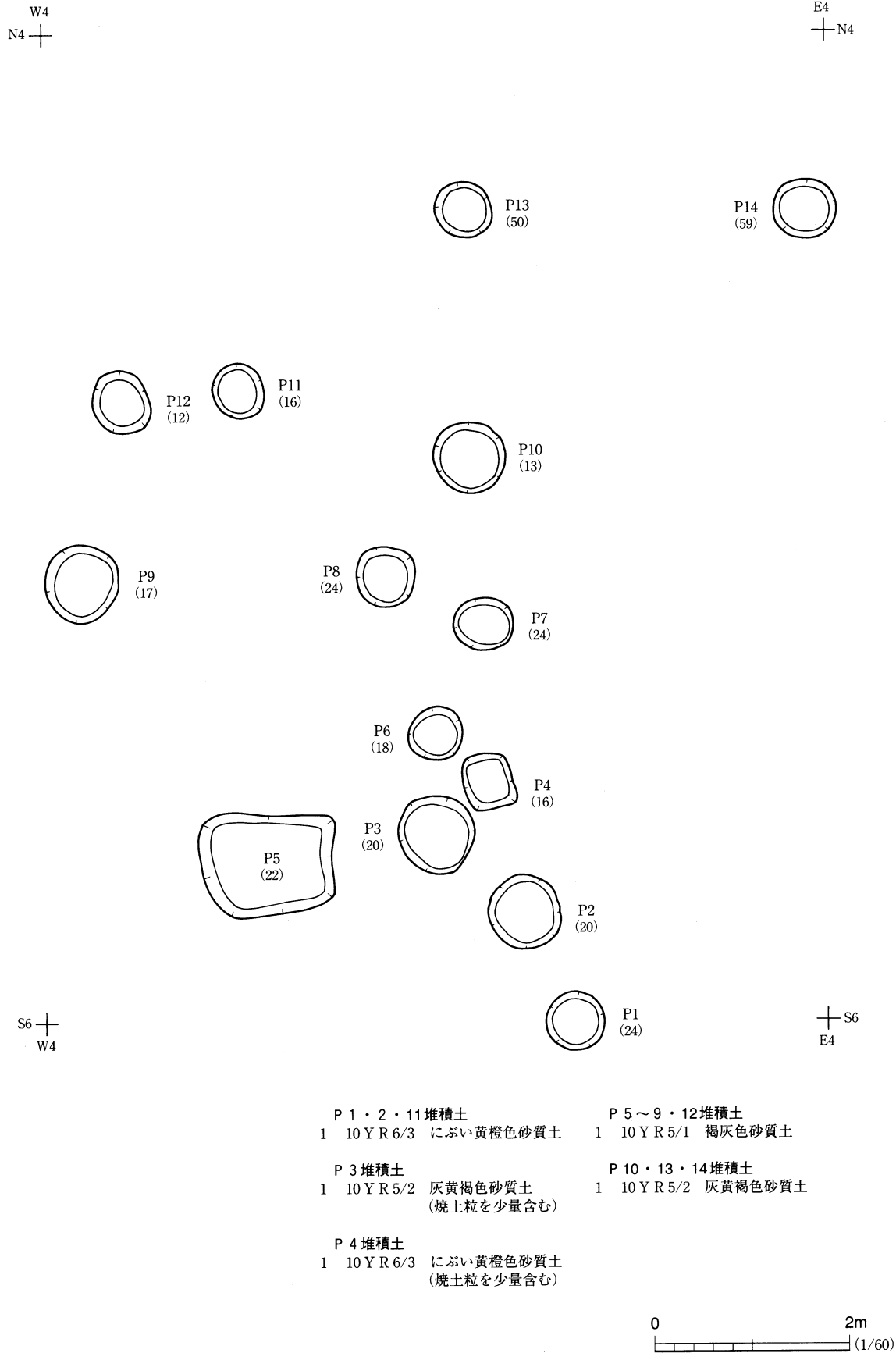
本遺構は、13号住居跡のすぐ西側に位置していることから、風よけのための塀か柵の柱穴である可能性が考えられる。ピットの平面形には、円形基調と長方形基調があるため、時間差を想定することができる。明確な時期の判る遺物が出土しておらず、また他遺構との重複関係もないため、所属年代を明言することはできないが、13号住居跡との関連性を考慮すると、6世紀後半以降の所産であると推測される。

(小 暮)

第8節 遺構外出土遺物

本遺跡の遺構外からは縄文土器555点, 弥生土器7点, 土師器37,622点, 須恵器1,062点, 石製品22点, 土製品161点, 陶磁器159点, 羽口302点, 鉄製品39点, 石器16点, 銃弾1点が出土した。遺物の出土傾向を模式的に示したのが図135・136である。縄文・弥生時代の遺物出土地点は、調査区の南西側全体に散らばる傾向にあるが、S12グリッドの北側にやや集中する区域が認められる。ここでは、縄文時代後期の遺物がまとまって出土した。

古墳時代以降の遺物は、同時代の集落が確認された自然堤防上から南側の後背地にかけて多く出土した。自然堤防の北側は阿武隈川に直面しているため、遺物包含層が形成されていたとしても、



- | | |
|--------------------------------------|----------------------|
| P 1・2・11 堆積土 | P 5～9・12 堆積土 |
| 1 10 Y R 6/3 にぶい黄橙色砂質土 | 1 10 Y R 5/1 褐灰色砂質土 |
| P 3 堆積土 | P 10・13・14 堆積土 |
| 1 10 Y R 5/2 灰黄褐色砂質土
(焼土粒を少量含む) | 1 10 Y R 5/2 灰黄褐色砂質土 |
| P 4 堆積土 | |
| 1 10 Y R 6/3 にぶい黄橙色砂質土
(焼土粒を少量含む) | |

図134 S 11 - 100, S 12 - 10・11, T 11 - 91, T 12 - 1・11 グリッドのピット群

流失してしまった可能性が高い。遺物の出土地点は、S12グリッドの東側からT12グリッドの西側にかけての区域と、T11グリッドの東側からU11グリッドの西側にかけての区域にまとまる傾向が見られる。これは自然堤防上の堅穴住居群が、T11グリッド付近の谷地形を挟むように営まれているため、遺物包含層もそれに対応する格好で形成されたことを示している。

図示した遺物は、縄文土器が17点、弥生土器が2点、土師器が107点、須恵器が30点、石製品が7点、土製品が9点、羽口が3点、鉄製品が4点、石器が6点、銃弾が1点である。

土師器 (図137~144, 写真112~114)

図137・138, 図140~144に古墳時代から奈良時代にかけての土師器を示した。古墳時代後期後半以降の資料が大半を占めるが、中期に比定される資料も少数含まれている。

図137-1~20, 図138-1~19は杯である。図138-15・19は古墳時代中期に普遍化する碗形の杯で、半球形の底部・体部をもち、口縁部が短く開いている。外面はナデで器面を整え、底部はヘラケズリで丸く仕上げられている。図138-19の口縁部には、比較的まばらなヘラミガキが観察される。

図137-4~7, 10・11, 図138-13・14は有段丸底の杯である。外傾・外反する口縁部の下端には、段や稜が作り出されている。内面には黒色処理とヘラミガキが施されるものが多く、外面は口縁部をヨコナデ、底部をヘラケズリで仕上げたものが多い。図137-6・7の外面には、一部ヘラミガキが観察される。また、図138-13は内外面ともヘラミガキが施され、口縁部の内面にはヨコナデが観察される。

図137-1~3・8・12~18, 図138-2・7・11・17は、内面のくびれがほとんど消失し、断面形が半円形に近くなった杯である。器形はナデとヘラケズリによって整えられたものが多い。内面は黒色処理とヘラミガキで仕上げられている。図137-1・13の外面には、まばらなヘラミガキが認められ、図137-12の底面には、「+」の線刻が観察される。

図137-9・20, 図138-1・3・4・6・10は平底風の杯である。内面は黒色処理とヘラミガキで、外面は口縁部ヨコナデ・ヘラナデ、体部・底部ヘラケズリで調整が仕上げられたものが多い。口縁部の下端に段や稜は見られない。

図138-5・18は体部・底部が半球形をなし、口縁部がそのまま内湾する杯である。5の内面には黒色処理が施されている。内面・外面とも調整はヘラミガキで仕上げられ、外面底部はヘラケズリによって器形が整えられている。

図137-19, 図138-8・9・12・16は内外面黒色処理、ヘラミガキされた杯である。図137-19, 図138-8・9・12は浅い碗形の器形をもち、底部は平らに作られている。図138-16は直立する口縁部を有している。これらは、金属器の影響を受けて作られたものと考えられる。

図138-20は平底, 図138-21は平底風丸底の碗で、器形は体部から口縁部にかけて内湾しながら開いている。内面は丁寧なヘラミガキと黒色処理が施され、外面はヘラケズリとヘラミガキによって器面調整が行われている。図144-6・7は碗の口縁部と思われる資料である。内面は黒色処理

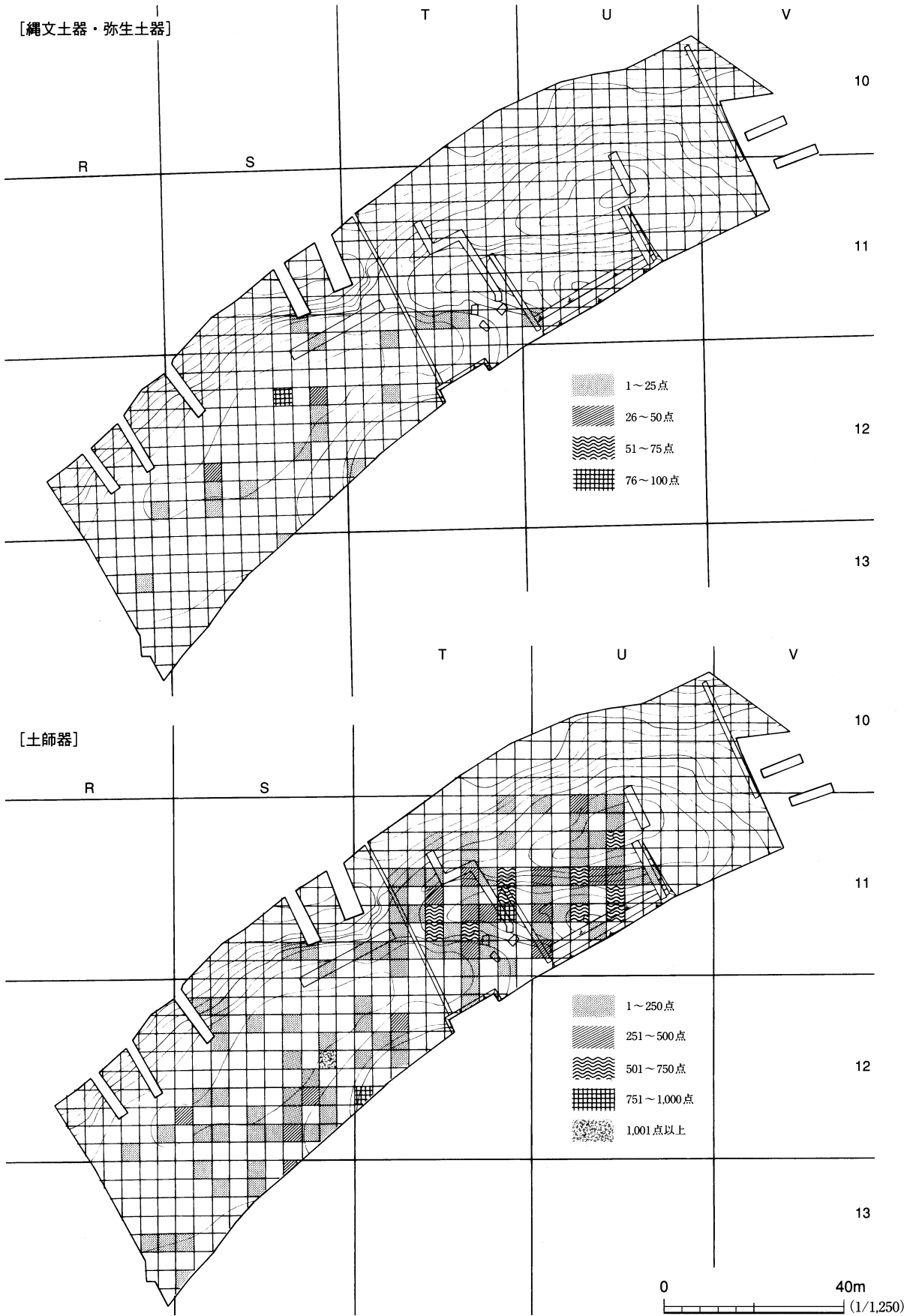


図135 遺構外出土遺物分布図(1)

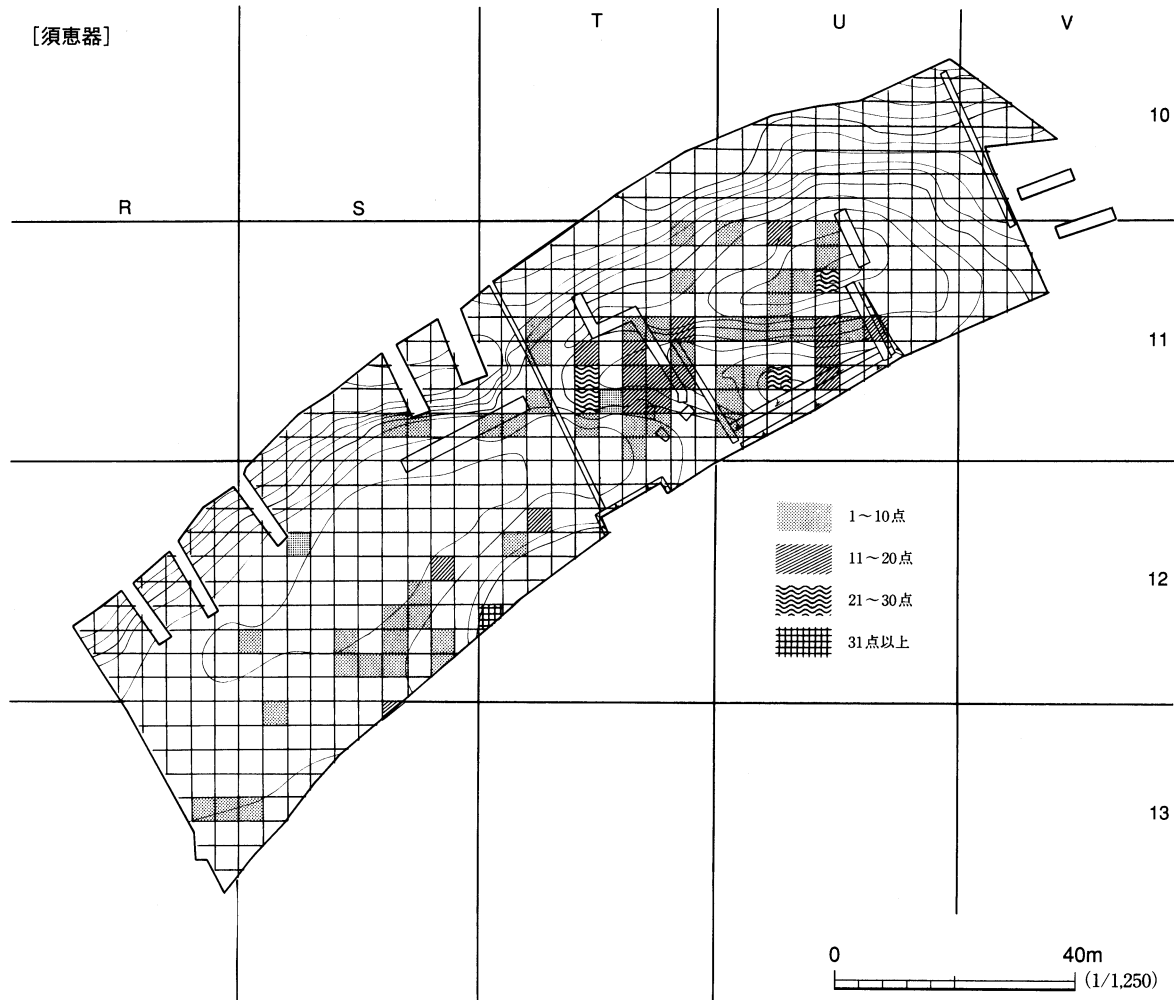


図136 遺構外出土遺物分布図(2)

とヘラミガキが施され、外面は口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ・ヘラナデ・ヘラケズリによって調整が加えられている。

図138-22は丸底で、口縁部が外反する鉢である。内面はヘラミガキと黒色処理が施され、外面は口縁部がヨコナデ、体部がハケメ・ヘラケズリによって調整が仕上げられている。

図140-8~14は古墳時代中期に特徴的な高杯である。大きく外反する口縁部に中空で長い円筒形の脚部が付く。脚部の裾はラップ状に開いている。杯部の内面は横方向のヘラナデ・ハケメ、外面はハケメ・ヘラナデ・ヘラケズリによって器面が整えられ、脚部の成形は主にヘラケズリとヘラナデによって行われている。

図140-1~7, 15~17は古墳時代後期後半の高杯である。有段丸底の杯部に、ラップ状に短く開く脚部が付く。杯部内面には、いずれも黒色処理とヘラミガキが施され、外面は主にヨコナデで器面が整えられている。杯底部から脚部にかけてはハケメ・ヘラナデ・ヘラケズリが施されている。

図140-18~20, 図141-1・2は小型の甕である。図140-18・19は半球形の胴部と内傾する口縁部を有している。内面は口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデによって調整され、外面は口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデで仕上げられている。図140-18の口縁部には、円孔が1つ穿たれている。図140

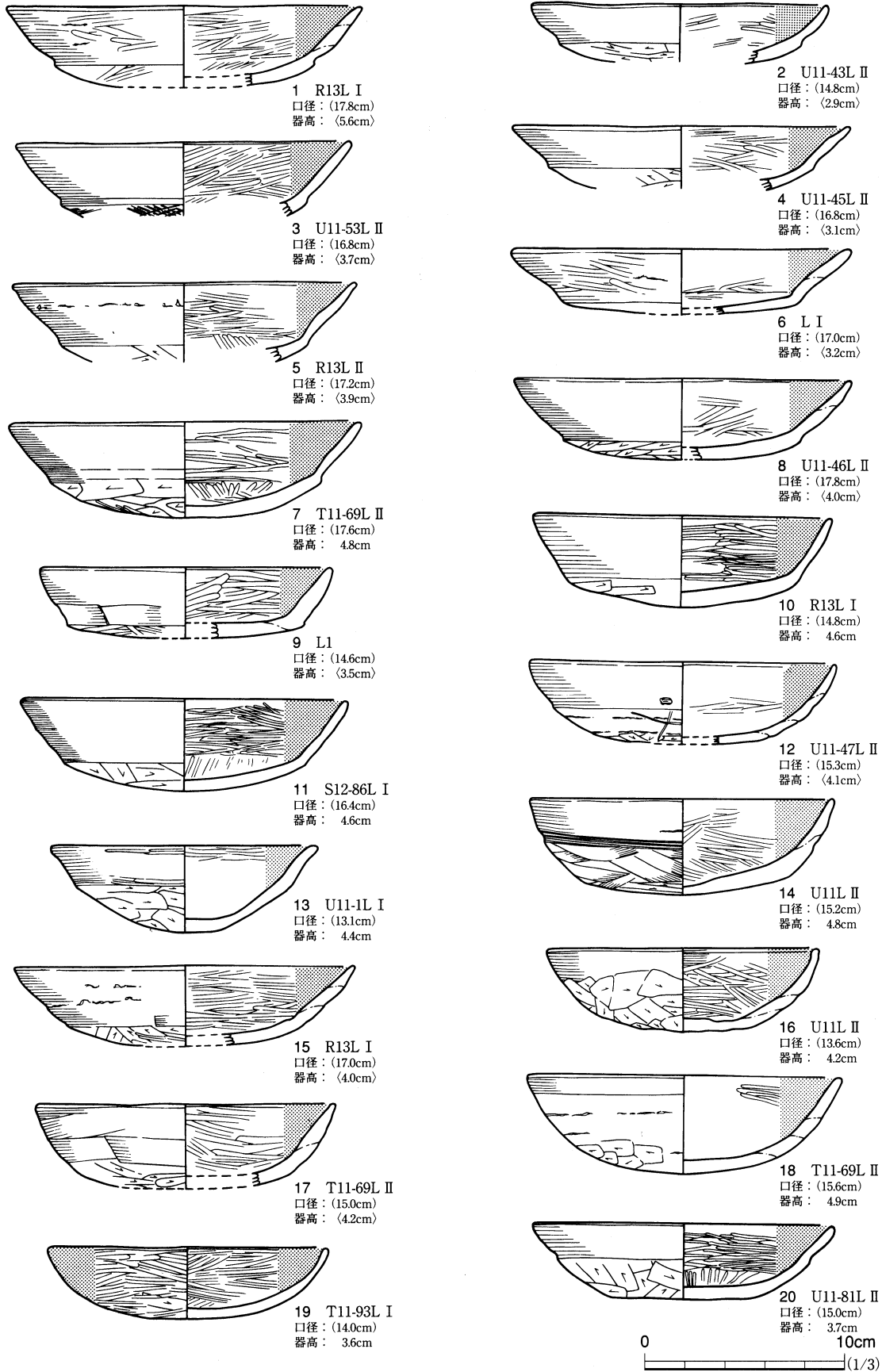


图137 遺構外出土遺物 (1)

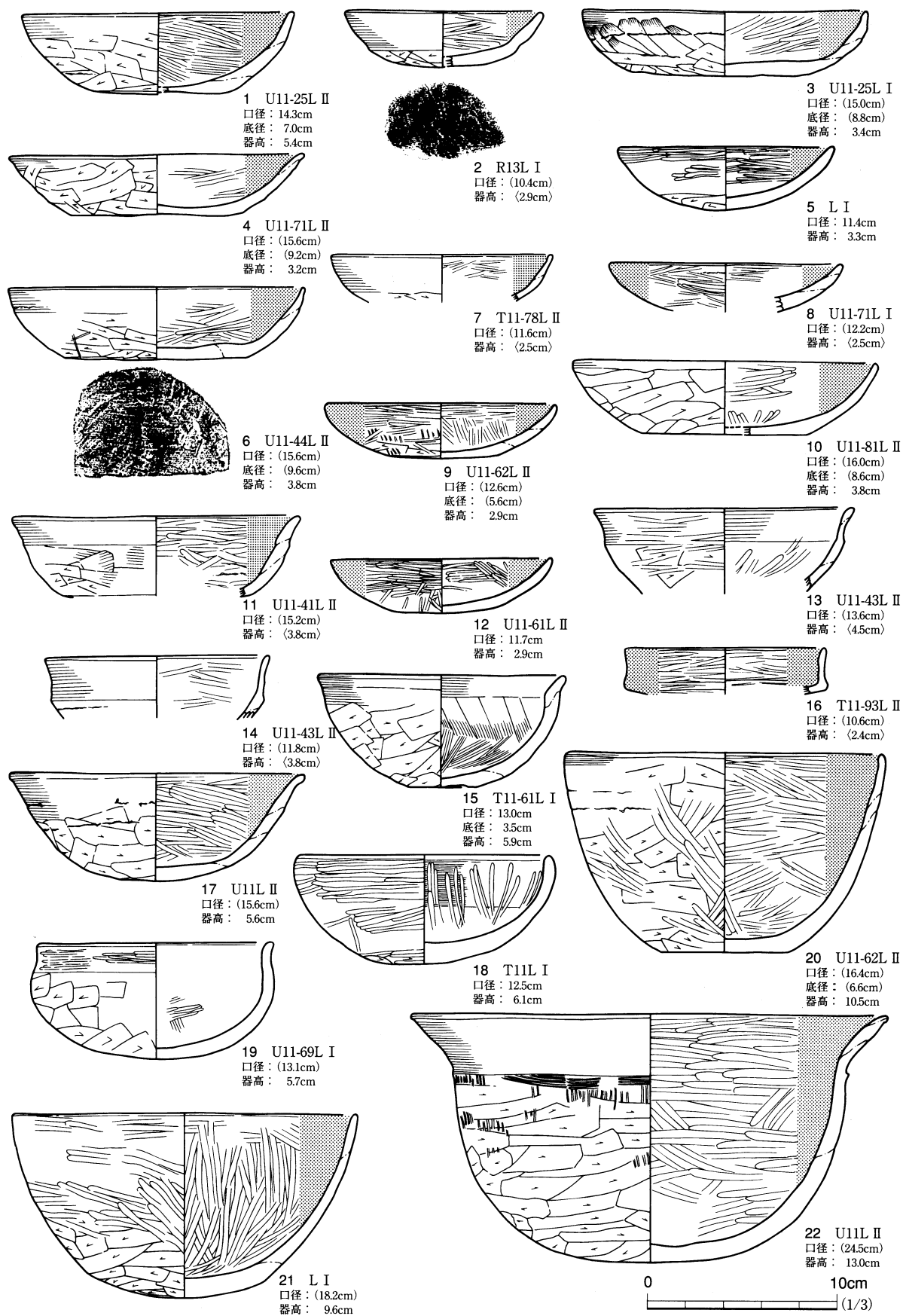


図138 遺構外出土遺物 (2)

—20, 図141-1・2は胴部が膨らむ球胴形の甕である。内外面ともに口縁部はヨコナデ, 胴部はハケメとヘラナデで調整が仕上げられている。

図141-3~8に中型の甕を示した。図141-3は胴部下半が膨らみ, 口縁部が大きく外反する球胴甕である。内面は口縁部がヨコナデ・ハケメ, 胴部上反がヘラナデ, 胴部下半がヘラケズリによって調整されている。外面の調整は口縁部がヨコナデ, 胴部上半がハケメ, 胴部下半がヘラケズリである。図141-4~6は胴部があまり膨らまず, 口縁部が外反する器形である。内面は口縁部がヨコナデ, 胴部がヘラナデで調整され, 外面は口縁部がヨコナデ, 胴部がハケメ・ナデによって仕上げられている。図141-7・8は胴部下半がやや膨らみ, 口縁部が外反する器形を有している。内面は口縁部がヨコナデ, 胴部がヘラナデによって仕上げられ, 外面は口縁部がヨコナデ・ハケメ, 胴部がハケメによって調整されている。

図142-1~4, 図143-2・3は大型の長胴甕である。口縁部は外反し, 胴部は円筒形を呈し, 胴部中央から下半に膨らみがある。内面の調整は口縁部がヨコナデ・ハケメ, 胴部がヘラナデ・ヘ

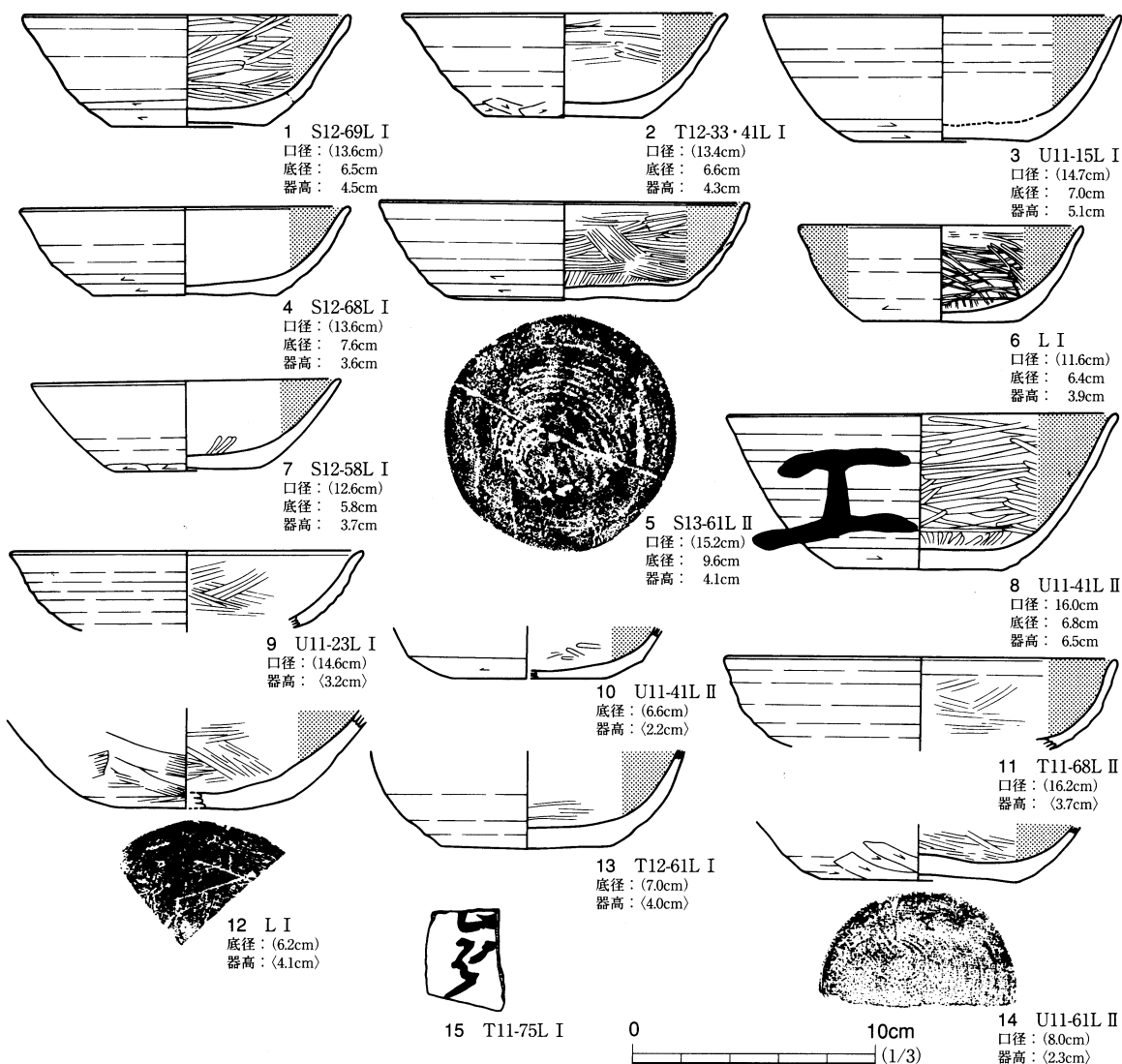


図139 遺構外出土遺物 (3)

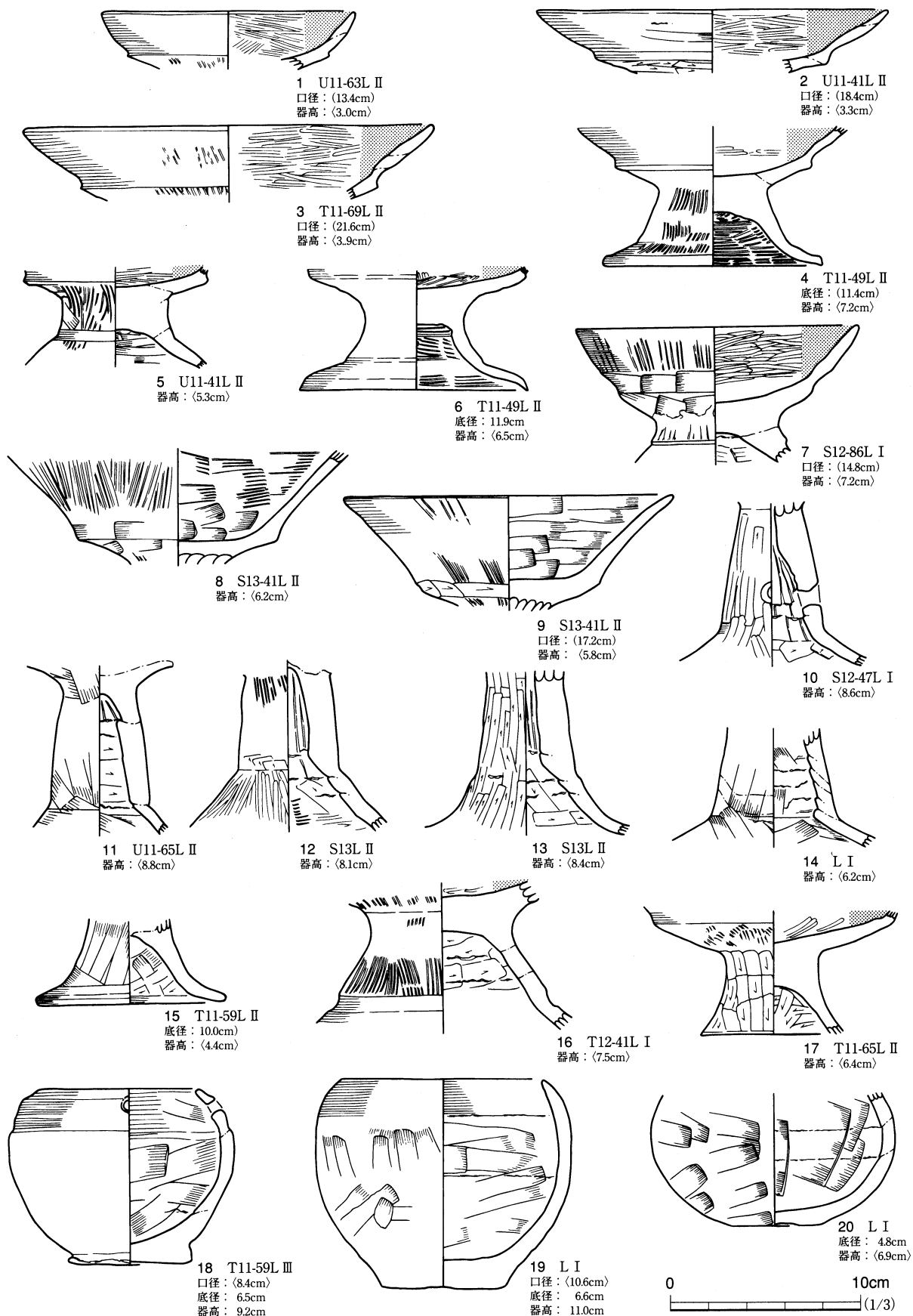


図140 遺構外出土遺物(4)

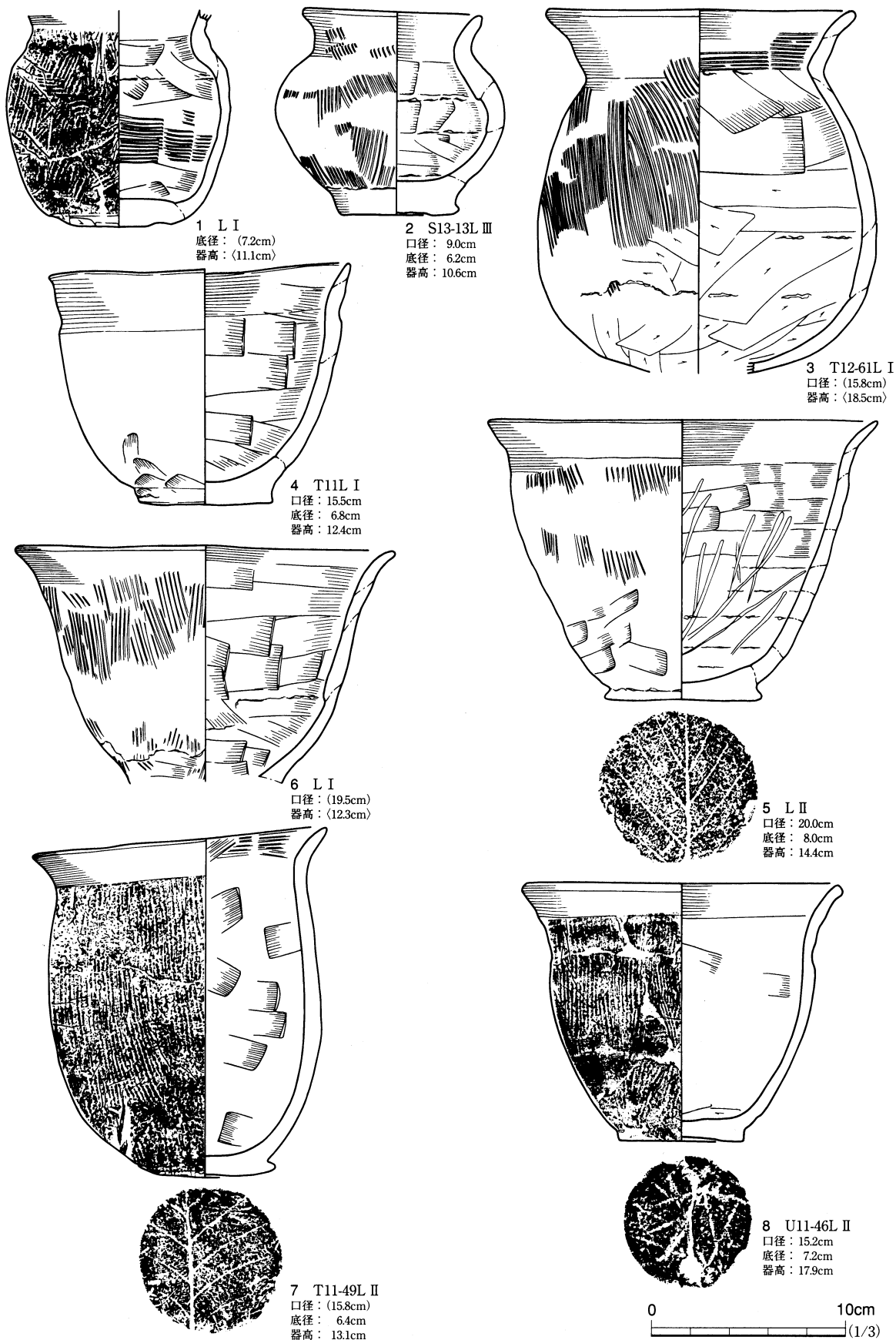
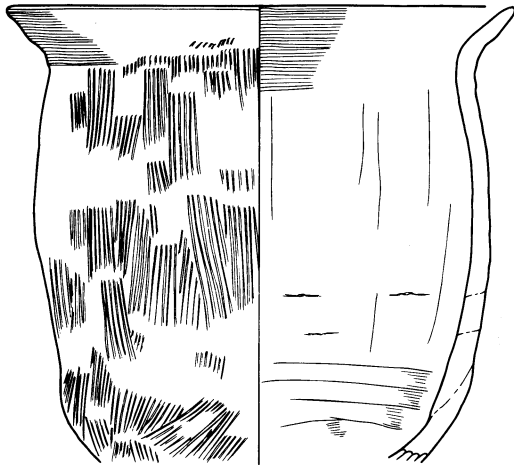
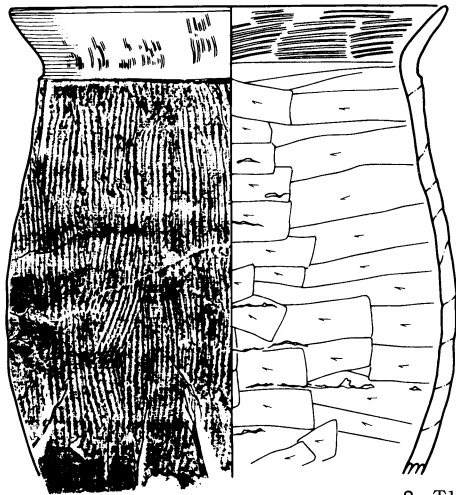


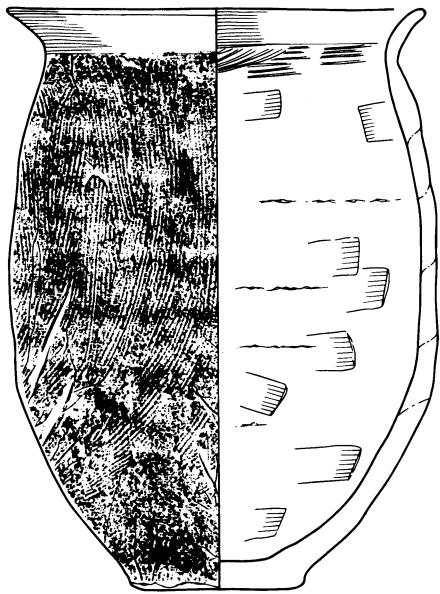
图 141 遺構外出土遺物 (5)



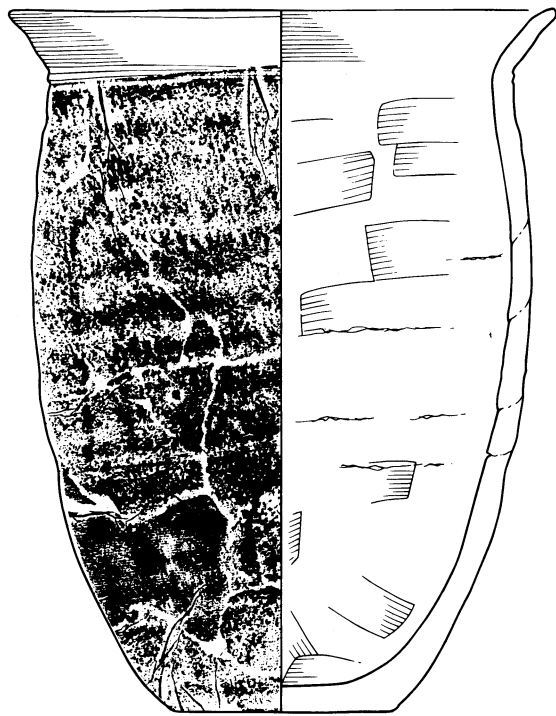
1 T11-55L I
底径：20.2cm
器高：(18.0cm)



2 T12L II
底径：(17.1cm)
器高：(18.3cm)



3 T11-45L II
口径：16.6cm
底径：6.8cm
器高：23.0cm



4 U11-51L II
口径：(20.2cm)
底径：(8.8cm)
器高：27.6cm

0 10cm (1/3)

図142 遺構外出土遺物 (6)

ラケズリである。外面は口縁部がヨコナデ、胴部がハケメによって整えられている。図143-4～6には、長胴甕の底部資料を示した。外面にはハケメ、内面にはヘラナデ・ハケメによる調整が施されている。

図144-1・3は大型の球胴甕で、胴部下半にあたる資料である。内面はヘラナデ・ヘラケズリで整えられ、外面は胴部上半がハケメ、胴部下半がヘラケズリで調整されている。

図143-1は無底の大型甕である。口縁部は外反し、胴部は長い円筒形を呈している。内面は口縁部ハケメ、胴部ヘラナデで調整され、外面は口縁部ヨコナデ、胴部ハケメで仕上げられている。

図144-2・4・5は小型甕である。図144-2は口縁部が外傾して開き、胴部がほとんど膨らまない器形である。底部には直径2.3cmの円孔が穿たれている。図144-4・5は底部資料である。図144-4は無底で、底部付近が膨らむ器形を有している。内面はヘラナデ、外面はハケメによって調整されている。図144-5は底部から内湾気味に立ち上がる胴部資料で、底部には直径2.2cmの円孔がある。内面の調整は口縁部がヨコナデ、胴部がヘラケズリである。外面は口縁部ヨコナデ、胴部上半ハケメ、胴部下半ヘラケズリによって形が整えられている。

図144-8～13はミニチュアの手捏ね土器である。器形には口縁部が外反する壺あるいは甕のようなもの、口縁部が外傾する杯のようなもの、口縁部が内湾する碗のようなものが見られる。

図139-1～11・13・14にロクロ整形された杯を示した。内面には黒色処理とヘラミガキが施されたものが多い。図139-1～8は体部上半から口縁部にかけて膨らみがなく、外傾しながら開く器形を有している。底部は平底で、体部下端は回転ヘラケズリで形が整えられているものが多い。図139-9・11は体部から口縁部にかけて内湾しながら開く器形である。図139-5・14の底面には回転糸切り痕が観察される。また、図139-7の底面には線刻で「○」が描かれている。墨書は図139-8の体部と、図139-15の底面に認められた。図139-8は「工」という文字が読み取れるが、図139-15は判読できない。

須恵器 (図145・146, 写真114)

図145・146は古墳時代後期以降の須恵器である。

図145-1～8に杯の蓋を示した。図145-6～8はツマミのないドーム形天井の蓋である。天井部と口縁部の間は、外面に小さな段を有し、天井部の上面には回転ヘラ切り痕が観察される。図145-2は小型の蓋で、天井頂部と口縁部の境界には小さな段が作り出されている。端部内面のカエリは、口縁部よりも下方に突き出している。図145-1・3～5は天井に宝珠形のツマミを有する蓋である。3のツマミはかなり扁平化した宝珠形を呈している。天井部と口縁部の境界は段をなし、端部は短く下方へ屈曲する。図145-3・5の端部内面はわずかに膨れている。

図145-11～15に杯を示した。体部が平底から外傾して立ち上がり、そのまま口縁部にいたる器形を呈している。口縁端部は丸く仕上げられ、図145-14・15の底部には糸切り痕が残されている。図145-13の体部下端は、回転ヘラケズリによって器形が整えられている。図145-15の内面には、墨の付着が観察される。

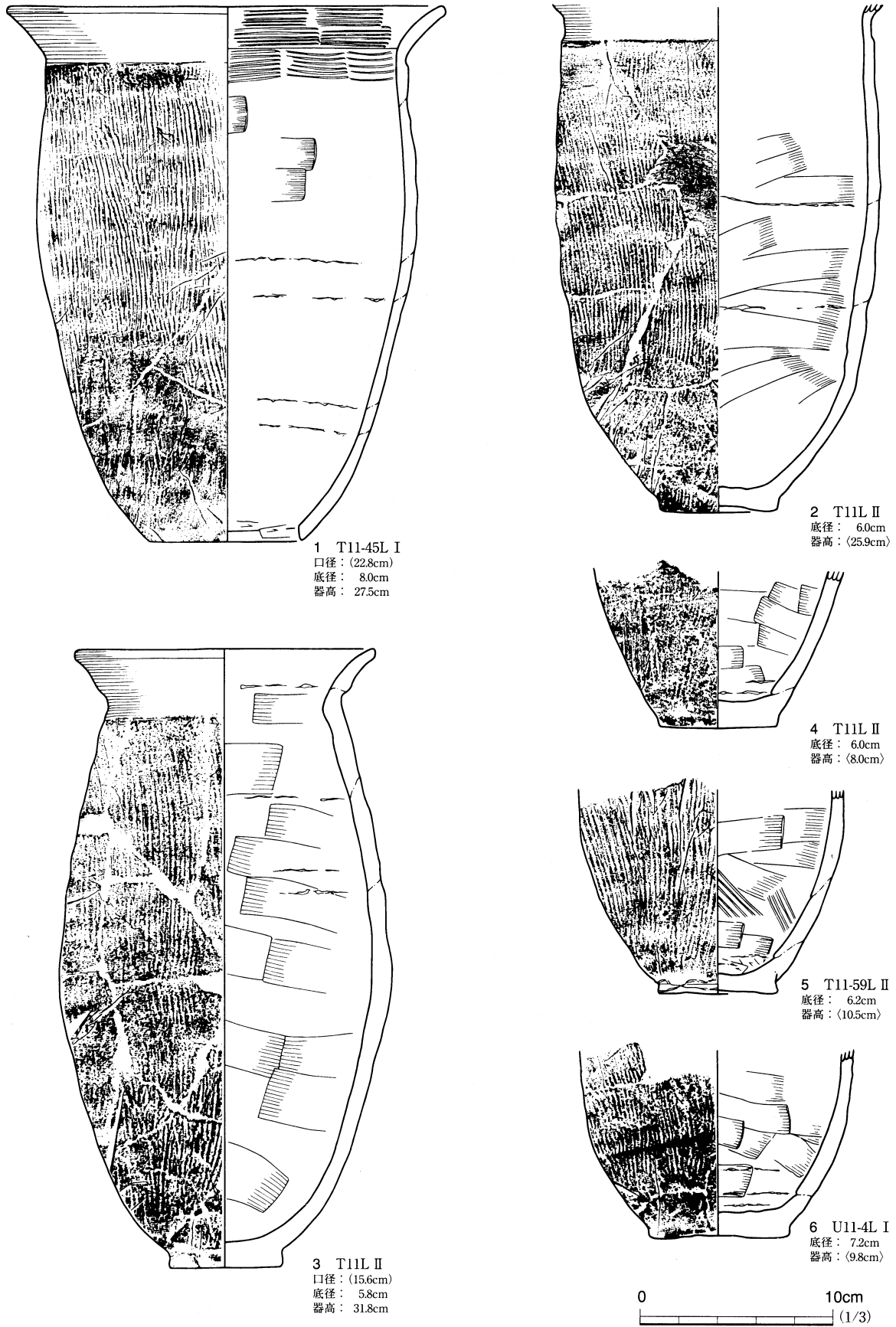


図143 遺構外出土遺物 (7)

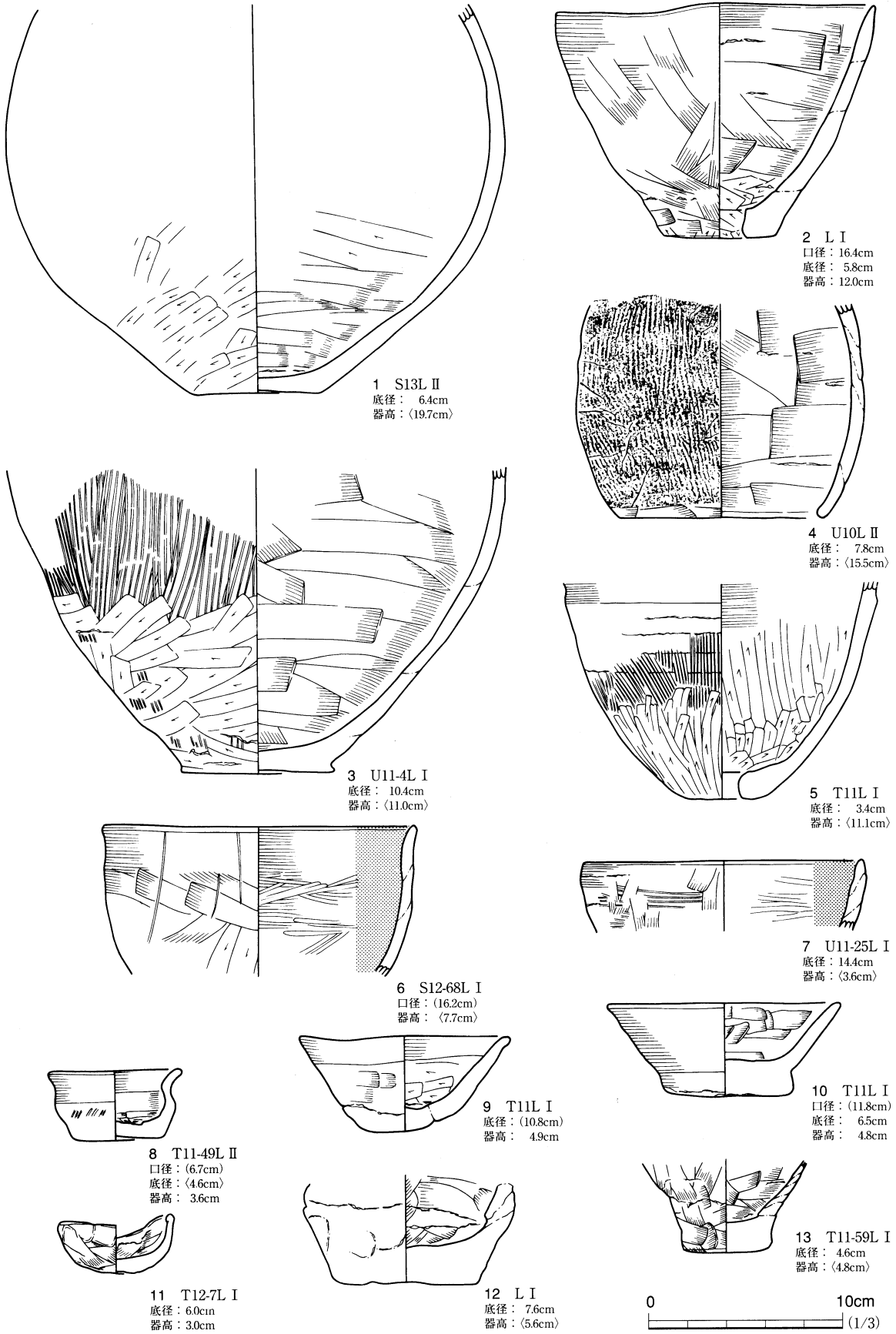


圖144 遺構外出土遺物 (8)

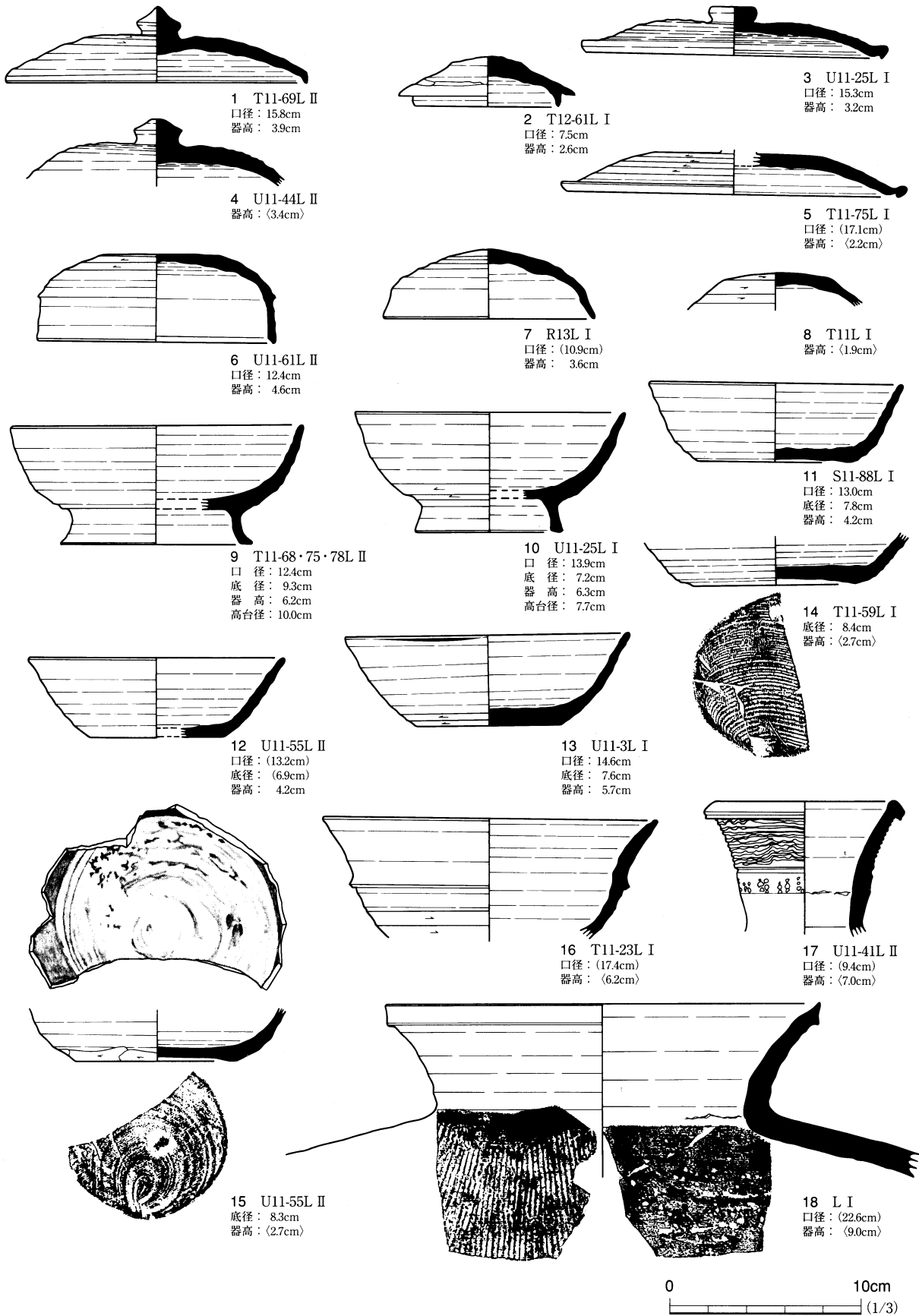


図145 遺構外出土遺物 (9)

図145-9・10は高台を有する杯である。口縁部が外傾する平底の杯部に外側に踏ん張った高台が付く。高台は高く、杯部とのバランスが取れており、安定感がある。

図145-16は高杯の杯部資料である。口縁部は外上方へ開く。杯部は深く、口縁部と底部は稜によって分けられている。この稜以外に、飾りらしきものは認められない。

図145-17は瓶類もしくは壺の口頸部資料と推測される。口頸部は短く外反し、端部は段をなしている。外面には櫛描きの波状文と列点文が見られる。

図145-18は大型甕の口縁部から肩部にかけての資料である。口頸部は外反して立ち、端面は上下にわずかにのびて稜を作っている。肩部の外面には、平行タタキによる調整痕が残されている。

図146-1～11には大型甕の破片資料を示した。口縁部破片には、端部に段を形成するもの、端面が上下にのびて稜を作るもの、端部が丸く仕上げられるものがある。文様は櫛描きの波状文を主体としており、ヘラを浅く押し引きした縦長の刺突文も認められる。これらは櫛描きやヘラ描きによる凹線と組み合わされ、平行して描かれる場合が多い。図146-11は肩部から胴部下半にかけての資料で、外面には平行タタキによる調整痕が見られ、内面には同心円状のアテ具痕が観察された。

土製品・羽口 (図147・148)

図147-1～3はカマドで使用された土製の支脚である。図147-1はヘラナデによって丁寧に器面が整えられている。製作時は細い棒を芯にして粘土を貼り合わせたのだろうか、中央に直径10mm程の貫通孔が残されていた。図147-2・3は底部付近の資料である。指オサエで成形されており、底部は安定性を増すために外側に張り出している。

図147-4～6はカマドの構築材と思われる板状の土製品である。全面がハケメ調整されている。図147-7～9は鍛冶遺構で使用されたと考えられる羽口である。円筒形の土製品で、火熱を受けているため、器面はもろくなっている。図147-8の先端部には溶着滓が付着している。

図148-1・2は土製の勾玉である。丁寧にナデで仕上げられている。

石製品 (図148, 写真114・115)

図148-3・4に石製紡錘車を図示した。断面形は台形をなし、全面が丁寧に研磨されて仕上げられている。中央には直径8mmの円孔が穿たれ、その内面は平滑である。図148-5は石製紡錘車の未成品で、形割りをして円形に形を作り出している段階の資料である。側面は面取りをして削り出しているが、上下両面はまだ自然面のままである。

図148-6は円板状の石製品で、約2/3が遺存している。表裏面には研磨痕が顕著に認められる。中央には直径9mmの円孔が穿たれ、その内面は平滑に仕上げられている。本遺跡の上流に所在する百目木遺跡の1号住居跡では、土製の類似品が出土している。

図148-7は薄い短冊形の石製品で、直径3mmの円孔が1つ穿孔されていた。表面は研磨され、平滑に仕上げられている。

図148-8・9は砥石である。図148-8は欠損品であるため、本来の形状は不明である。直径4mmの円孔が1つ認められることから、携帯用の下げ砥石と思われる。図148-9の形態は直方体に

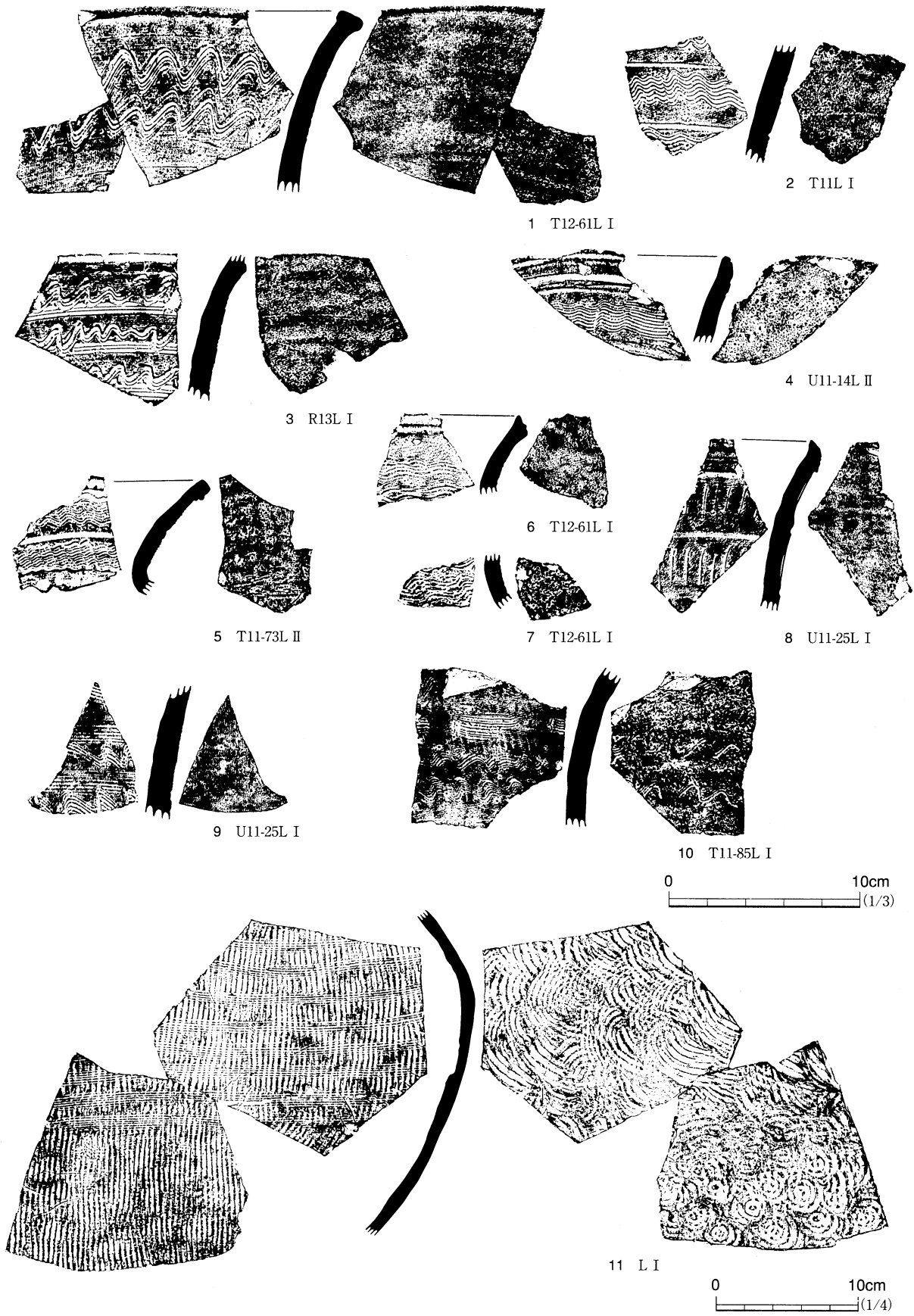


図146 遺構外出土遺物 (10)

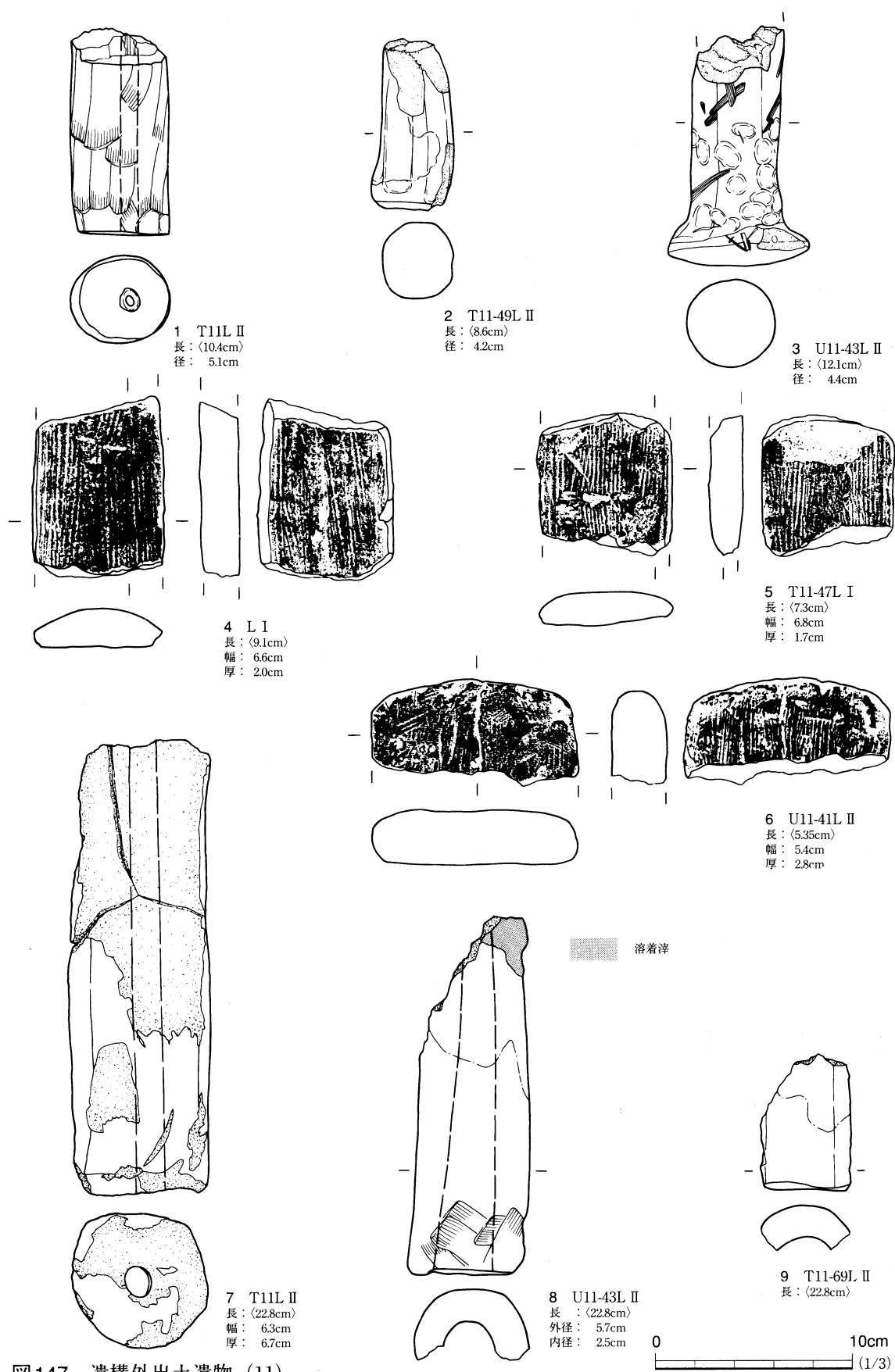


图147 遺構外出土遺物 (11)

近く、各面に研磨による使用痕が観察される。

鉄製品・銃弾 (図148, 写真114・115)

図148-10は五角形を呈した無茎の鉄鏃である。基部はえぐれ、中央には直径3mmの円孔が開けられている。図148-11は長三角形を呈した無茎鉄鏃である。基部はえぐれ、両側縁は緩やかな曲線をなし、先端部が尖っている。表裏面とも中央が少し高くなり、鑄が作り出されている。

図148-12・13は鉄製刀子と鎌である。図148-12は茎部から刃部にかけて最大10.1cm, 図148-13は10.8cmが遺存している。

図148-14は鉛製の銃弾である。直径は13mmを計測した。

縄文土器 (図149, 写真115)

図149-1~17に縄文土器を示した。図149-1は波状口縁部の破片で、大木9式あるいは大木10式に該当する資料である。口縁直下には沈線が1条巡り、その下には沈線に縁取られた縄文帯が観察される。

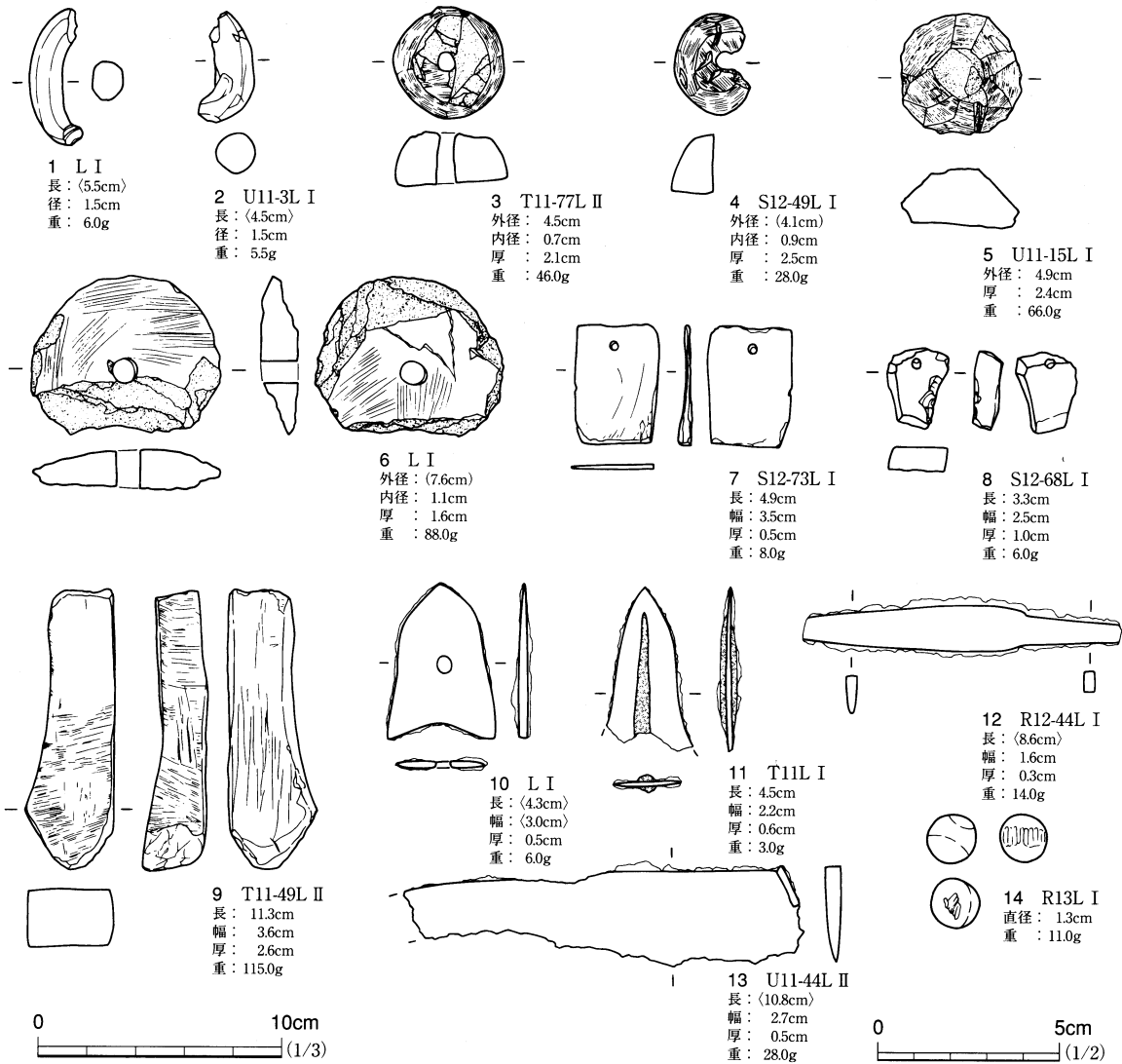


図148 遺構外出土遺物 (12)

図149-2・3は口縁部に幅広い無文帯が巡り、その下端を隆帯が縁取る綱取1式に相当する資料である。胴部には縄文や櫛歯文が施されている。図149-4～6は胴部破片である。

図149-7～10は綱取2式の前段階に該当する資料で、胴部に磨消縄文を多用して文様を描いている。図149-7～9の胴部には蕨手文が観察される。図149-11～17は綱取2式の後段階に該当する資料で、多条平行沈線によって渦巻文や同心円文が描かれている。

弥生土器 (図149)

図149-18・19は弥生土器を示した。図149-18は壺の頸部破片である。4本の平行沈線を巡らし、その下に「J」字状の文様を描出している。図149-19は壺の胴部上半で、2本の平行沈線による渦巻文が観察された。弥生時代中期の所産と思われる。

縄文時代の石器・土製品 (図150, 写真115)

図150-2～7に石器を示した。いずれも縄文時代の所産と推測される。

図150-2・4は欠損品であるが、石槍か石鏃であろう。実際に狩猟で使われ、先端部が折れたために廃棄されたものと考えられる。調整剥離は全面にわたって施されているため、断面形は整った流線形を呈している。基部は製作過程の最後に、入念に調整されている。4の基部は棒の先端に縛り付けるためだろうか、基部の縁辺が若干内側にえぐり込んでいる。石材は堅いものが選ばれ、縁辺部が鋭利な刃になるよう、配慮されている。

図150-3・5は微細な剥離痕をもつ剥片である。縦長剥片を素材とし、その縁辺に調整剥離が施されている。石材は刃が付くように、堅いものが選ばれている。3の表面は、左側の縁辺に細かくて入念な調整剥離が施されているが、右側は先端部に若干の剥離が認められるだけである。裏面は調整が施されておらず、主要剥離面がそのまま残されている。このように全面が調整されているわけではないので、断面形は流線形にはならず、三角形を呈している。おそらくは調整剥離を加える段階で不都合が生じ、廃棄されたものと考えられる。形状から判断すると、石槍などの未成品であろう。5の表面は、縁辺部と端部に微細な剥離痕が認められる。特に上端部は素材の厚みを減ずるため、数回の剥離が加えられ、薄く仕上げられている。一方、裏面はほとんど手が加えられず、主要剥離面がそのまま残されている。打点部は、少し盛り上がっているが、表面に調整が加えられているため、厚みはない。縦断面を見ると、下端部が裏面側に少し屈折しているため、小型の搔器の可能性が高いと判断している。おそらく、縦長剥片の素材の段階で下端部が屈折していたため、調整をほとんど加える必要がなかったと推測される。

図150-6は撥形の大型搔器である。調整剥離は刃部と側縁に施されている。調整剥離は主に表面に加えられているため、裏面には主要剥離面が大きく残され、刃部の断面形は主要剥離面に対して鈍角に作り出されている。石材は堅くて緻密なものが選ばれており、重量感がある。

図150-7は分銅形の打製石斧である。片面には自然面が大きく残されている。側縁の中央をえぐるように、大きな剥離を加えて全体の形を整えている。

図150-1は石皿を模した土製品である。全面に単節の斜縄文が施され、装飾されている。表面

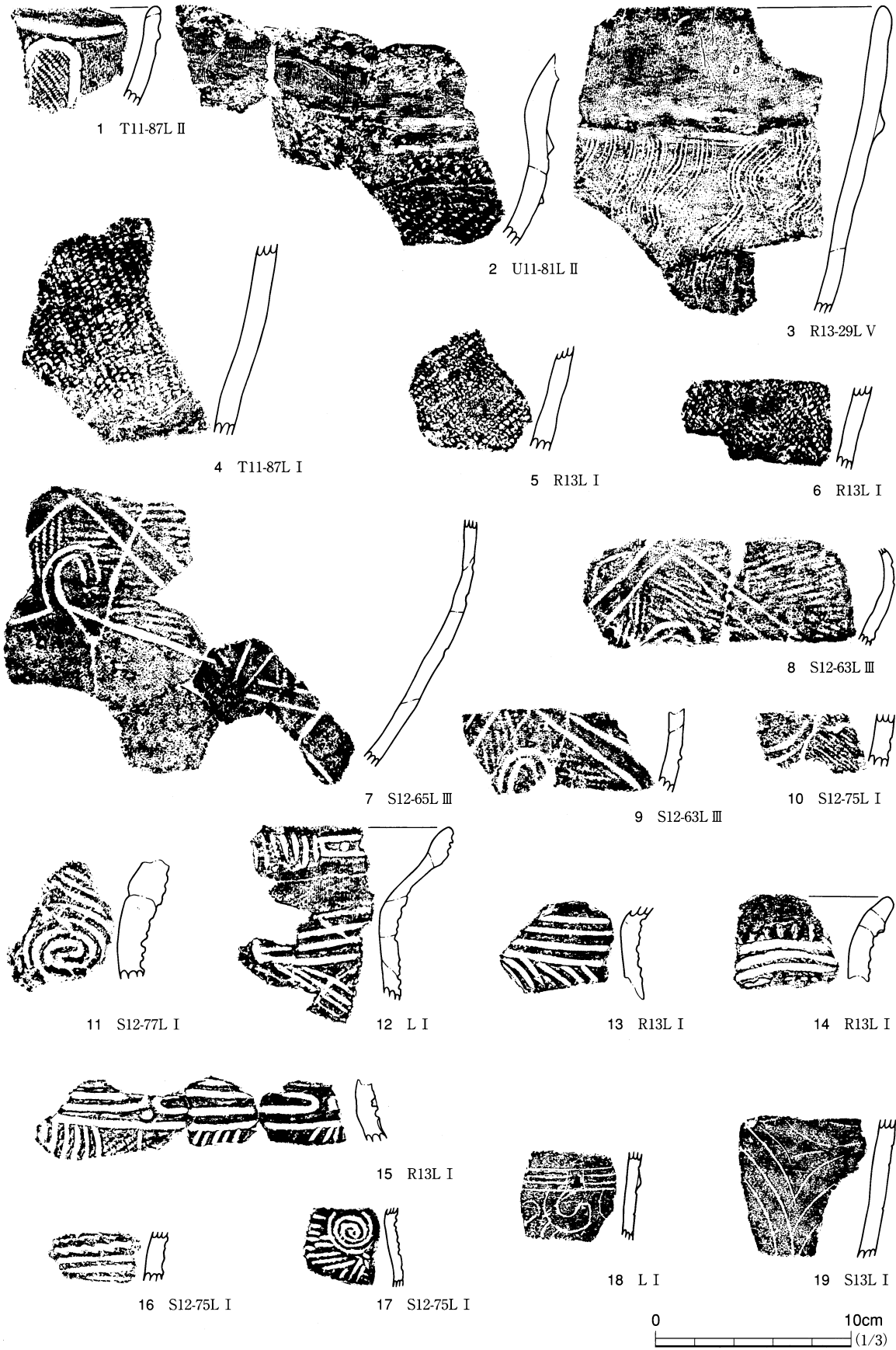


図149 遺構外出土遺物 (13)

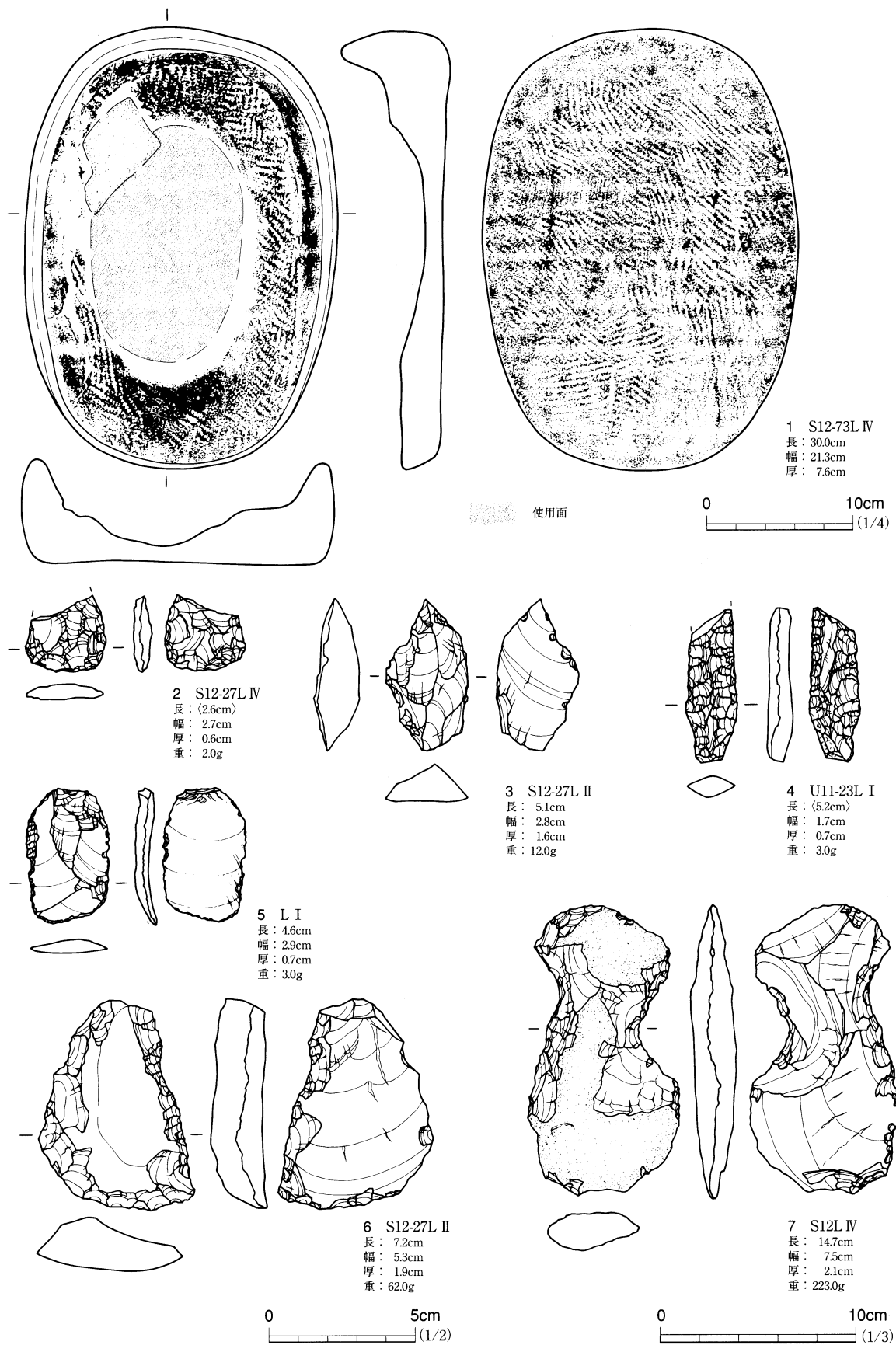


圖150 遺構外出土遺物 (14)

の中央には、磨石などで作られた楕円形の凹みがある。もう少しで裏面に達するほど凹んでいるため、繰り返し使用されたものと思われる。土製であることから、堅果類を粉状に加工するなどの実用に供されたものではなく、儀礼的な使われ方をした「第二の道具」であったと推測される。福島県内では、いわき市愛谷遺跡などに類例がある。

(小 暮)

第3章 考察

第1節 遺物について

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器699点、弥生土器8点、土師器64,187点、須恵器1,516点、土製品230点、石器18点、羽口415点、陶磁器164点、石製品27点、鉄製品78点、鉄滓91.8kg、鍛造剥片200g、銃弾1点と多くの種類にわたっている。その中で、土師器と須恵器の占める割合は97.5%と圧倒的に多く、特に古墳時代後期から奈良時代にかけての資料が充実している。しかも、竪穴住居跡に伴う明確なセット関係が把握できたことから、該期の土器群の様相を知る上で良好な事例になるものと思われる。ここでは、その土師器と須恵器を取り上げて、若干の分析を行う。

土師器 (図151～154)

本遺跡から出土した土師器を従来の型式に対比するならば、引田式・栗田式・国分寺下層式・表杉ノ入式に相当し、その中でも栗田式の範疇に入る資料が大半を占めている。この古墳時代中期から平安時代にかけての土師器は、中通り地方中南部において、遺構内一括出土という形で資料の蓄積が進んできている。このような動向を受けて、既存の型式的枠組みの中身を細分化し、土師器編年の精度をより向上させる研究(高橋;1983・1985)(柳沼;1989)や、既存の型式的枠組みにとらわれないことなく、共存関係にある各器種の時間的消長を重視し、より実態に則した土師器の変遷を考えていこうとする研究(石本;1995)(青山;1999)などが見られるようになった。本遺跡における土師器の変遷過程を通観するにあたっては、これらの研究成果を参考にしていきたい。また、実年代を推定する際には、共伴関係にある須恵器を用いた。

ところで、福島県内では該期土器と須恵器が共伴して出土した事例がまだ少ない現状にある。したがって、本稿では同一時期における各器種のセット関係や須恵器との対応関係を把握するため、原則として、竪穴住居跡の床面やカマド、貯蔵穴などの付属施設から出土した共伴資料を基準に土器群を設定している。その他の遺構内遺物や遺構外遺物については、必要と思われるもののみ、補足資料として各土器群に加えた。

[第I群土器]

18号土坑からまとまって出土した土器群である。この他、12号住居跡・12号土坑からも出土が確認されている。器種は杯・高杯がある。

図151-I群1～3は口縁部がくびれて短く外反し、体部が半球形を呈する碗形の杯である。外反する口縁部の内面には稜が形成されている。底部は平底である。外面は主にヘラケズリ、内面は主にヘラナデによって形が整えられ、口縁部はヨコナデされて丁寧に仕上げられている。1の内面には、さらに、まばらなヘラミガキが施されている。図151-I群4～6は高杯である。杯部は口

縁部が直線的に外傾し、口縁部下端は、4のようにそのまま直線的に脚部へ移行するものと、5・6のように稜を形成するものがある。脚部は中空で、裾は屈曲して開いている。調整は内外面ともハケメを多用する傾向にある。5・6には、仕上げの段階でヘラミガキが加えられている。

本群で見られる杯の形態は、古墳時代中期初頭に出現するものである。図151-I群1～3は、口縁部の発達に伴い、内面に形成された稜が強くなり、体部の張りがなくなっている。また、器面のヘラミガキ調整はあまり目立たない。こうした特徴から、引田式の古い段階に該当する資料と思われる。また、18号土坑で共伴した高杯は、南小泉式で盛行する形態である。この器形は本群の段階まで確実に残存している。

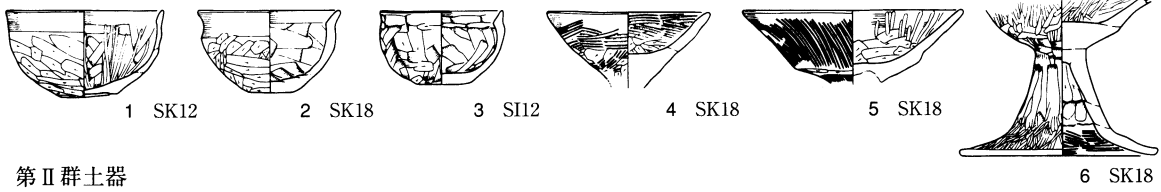
[第II群土器]

8・13・17・35・37号住居跡からまとまって出土した土器群である。器種は杯・高杯・鉢・甕・甑がある。杯を主体とした食膳形態には、内面を黒色処理する技法が定着している。また、甕や甑を主体とした煮炊形態では、口縁部をヨコナデ、胴部をハケメ調整する技法が普及し、頸部には段が目立つようになっている。法量的には中型甕と中型甑、大型甕と大型甑がセット関係を持ち、形態的には球胴形の甕が存在するなど、機能分化している様子がうかがえる。こうした状況の中で、カマド専用形態変化してきたとされる大型の長胴甕が、組成の中で安定した割合を占める。法量の違う土器を目的によって使い分けるといった特徴は、後述するIII～V群土器の煮炊形態に引き継がれていく。

図151-II群2～4・6は有段丸底の杯である。口縁部は外傾・外反し、体部との境界には器面をえぐるような強いナデが加えられて、段や稜を作り出しているものが多い。図151-II群5・7・8は高杯である。杯部の形態には、5のような有段丸底、7のような深い椀形がある。脚部は短く、ラッパを伏せたような形をしている。図151-II群9は、有段丸底の杯を横に広げたような形の鉢である。図151-II群10～20は甕で、中型と大型の2種類に分けられる。口縁部は弱く外反するものが多い。11～15は中型甕である。11・13は外反する口縁部と胴部中位に膨らみを持つ形態、15は直立する口縁部と少し膨らみのある胴部を持つ形態、12は内湾する口縁部と半球形の胴部を持つ形態、14は底部から口縁部にいたるまでスムーズに開く形態を呈している。10・16～20は大型甕である。16・19は、外反する口縁部と球形の胴部からなる甕で、10は同形態の胴部下半の資料と思われる。17・18はラグビーボールのような胴部を持ち、口縁部は外反している。20は胴部下半に膨らみを持つ長胴甕である。図151-II群21～25は甑で、甕と同様に中型と大型の2種類が認められる。21～23は中型甑で、いずれも口縁部は外反している。胴部はあまり膨らみを持たず、21・22のようにスムーズに底部にいたるものと、23のように底部付近が急にすぼまるものがある。底部は無底のものも多く、21のような単孔式は稀である。24・25は大型の無底甑で、形態は長胴甕に近いが、胴部の膨らみは顕著ではない。

本群は杯の口縁部形態など見ると、栗田式の前段階に相当すると思われる。図151-II群2は、口縁部の内面が他の杯に比べて大きく外反しており、本群の中でも古い時期の所産であろう。本群

第I群土器



第II群土器

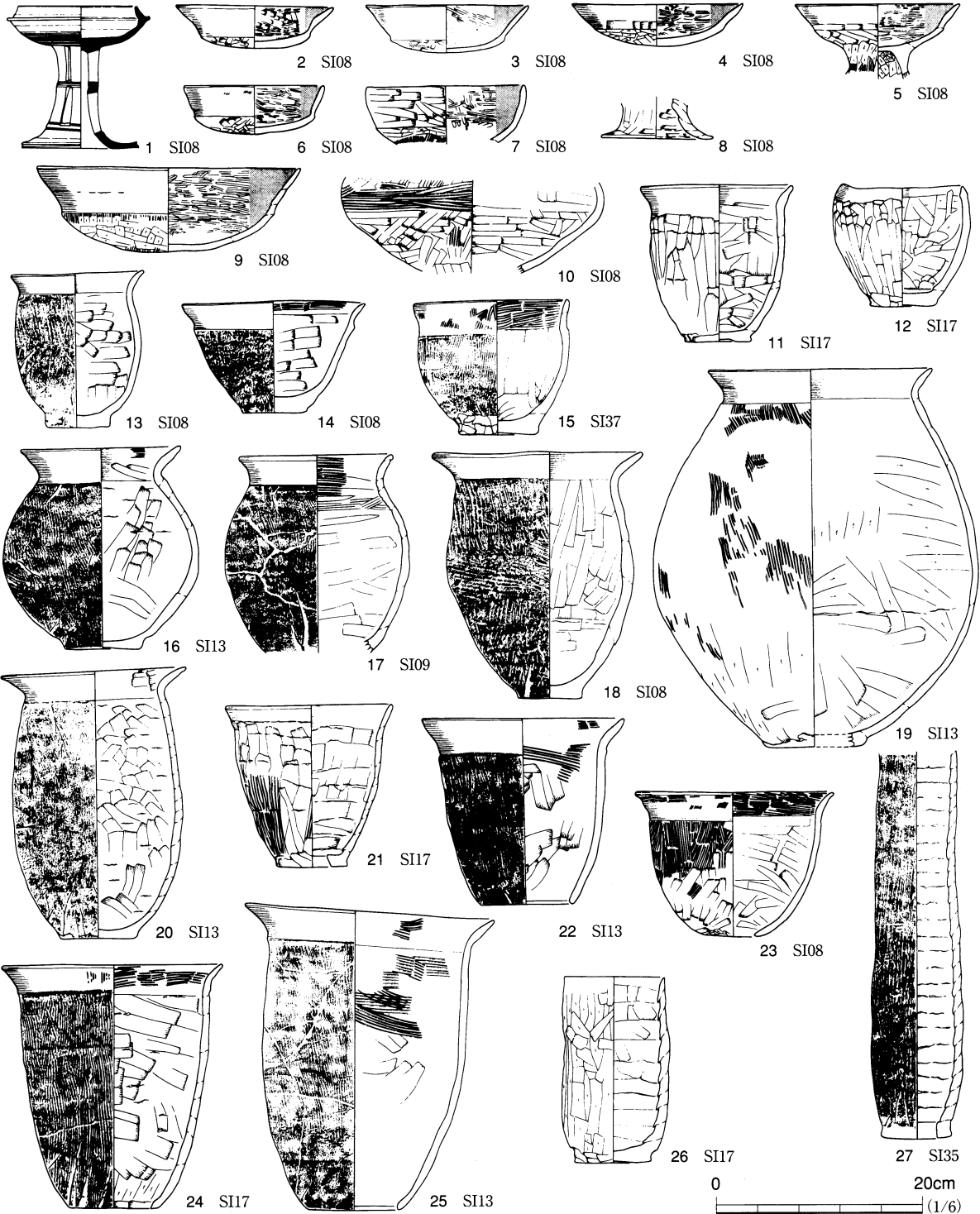


図151 土師器の変遷 (1)

の実年代は、8号住居跡で供伴した図151-Ⅱ群1の須恵器高杯から推測することが可能である。この高杯は、陶邑編年（田辺；1966）のTK43型式に相当するため、6世紀後半～7世紀前半頃に製作されたものと考えられる。

ところで、図151-Ⅱ群26・27は、長野・山梨県以東の東日本を中心に分布している円筒形土製品である。その用途については「カマドの構築材」とする見解が多いようである（山口；1998）。35号住居跡出土資料も出土状況から、同じ用途を推定することが可能である。本遺跡では、円筒形土製品とともに、6・19号住居跡出土の板状土製品もカマドの構築材として使用されていた。

[第Ⅲ群土器]

2・6号住居跡から出土した土器群である。器種は杯・高杯・鉢・甕・甑・小壺がある。食膳形態の内面黒色処理、煮炊形態のハケメ調整は、完全に定着した感がある。器面調整技法は、ほぼ画一化されたと言える。

図152-Ⅲ群2～4は有段丸底の杯である。口縁部形態は外傾するものに加えて、3・4のように内湾し始めるものが出現している。口縁部下端には、段を明瞭に作り出している。図152-Ⅲ群5は直立気味に立ち上がる口縁部と、厚みのある底部が特徴的な杯である。器形にはゆがみがあり、実用品ではなかった可能性が高い。図152-Ⅲ群6は高杯である。杯部は有段丸底で、脚部は短く、裾がラップのように広がっている。図152-Ⅲ群7は鉢である。口縁部は外反し、体部は碗形を呈している。底部は厚みがあり、平らに作られている。図152-Ⅲ群8～10は甕で、図152-Ⅲ群11・12は無底の甑である。Ⅱ群土器と同じように、それぞれ中型と大型の2種類がある。8は中型甕、9・10は大型の長胴甕、11は大型甑、12は中型甑である。形態・調整技法は、Ⅱ群土器と変わらな

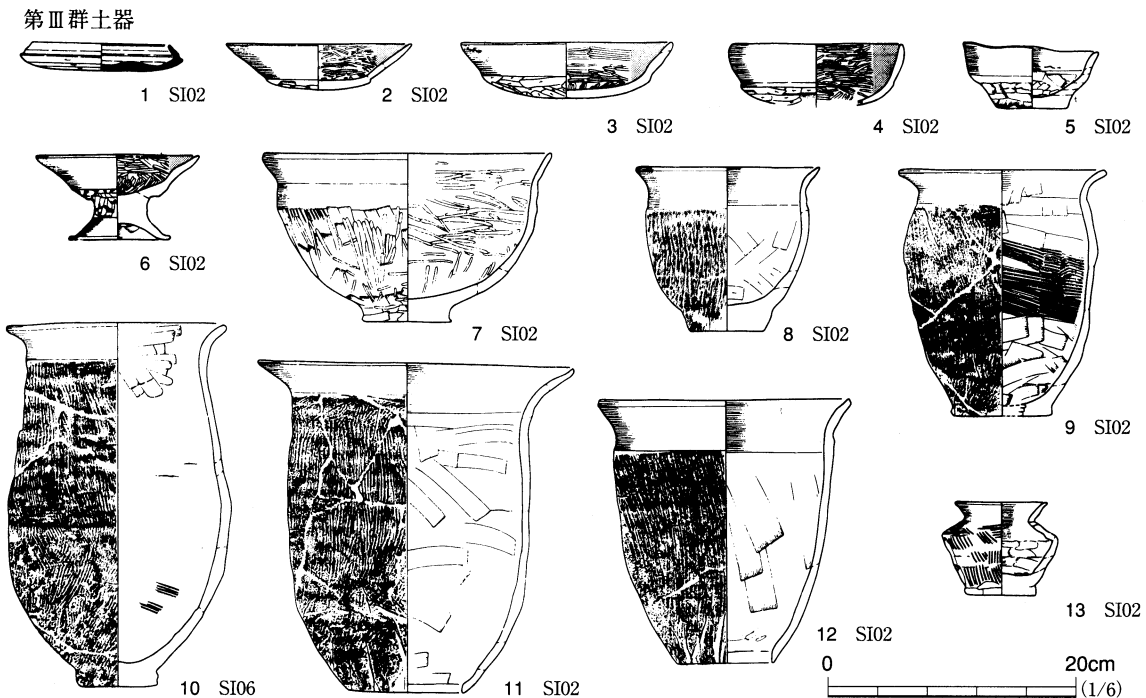


図152 土師器の変遷（2）

い。図152-Ⅲ群13は小壺である。頸部に1対の貫通孔が認められる。

本群は杯の口縁部形態から、栗田式の前半から後半にかけての過渡期に相当する資料と思われる。実年代は、2号住居跡で共伴した図152-Ⅲ群1の須恵器杯から推測することができる。この杯は、陶邑編年のTK43型式～TK209型式に相当するため、Ⅱ群土器と大差のない、6世紀後半～7世紀前半頃の所産と考えられる。この時期の須恵器は、後述するように祭具としての性格が強いため、図152-Ⅲ群1のような優品は伝世した可能性が高い。したがって、本群は、Ⅱ群土器より若干新しい時期に位置付けられると思われる。

[第Ⅳ群土器]

7・19号住居跡からまとまって出土した土器群で、器種は杯・高杯・甕・甌がある。杯は、大小の2種類に分けられる。

図153-Ⅳ群1は有段丸底の杯である。口縁部は内湾しながら開くため、断面形が半円形を呈している。外面の口縁部の下端には、段や沈線が認められる。一方、内面に段や稜は形成されていない。図153-Ⅳ群2は大型の杯である。口縁部は半球形を呈する体部からスムーズに立ち上がっている。図153-Ⅳ群3は高杯である。杯部は不明であるが、脚部は短く、ラップを伏せたような形をしている。図153-Ⅳ群4～9は甕で、小型・中型・大型の3種類がある。口縁部は、強く外反するものが目立つ。4は小型甕で、非常に浅く実用向きではないため、儀礼用と思われる。6～8は中型甕である。口縁部はいずれも外反しており、胴部は6・7のようなラグビーボール形、8のような球形を呈している。5・9は大型の長胴甕である。頸部は強く屈曲し、胴部下半に膨らみを持っている。図153-Ⅳ群10は大型の無底甌、図153-Ⅳ群11は、多孔式の甌である。

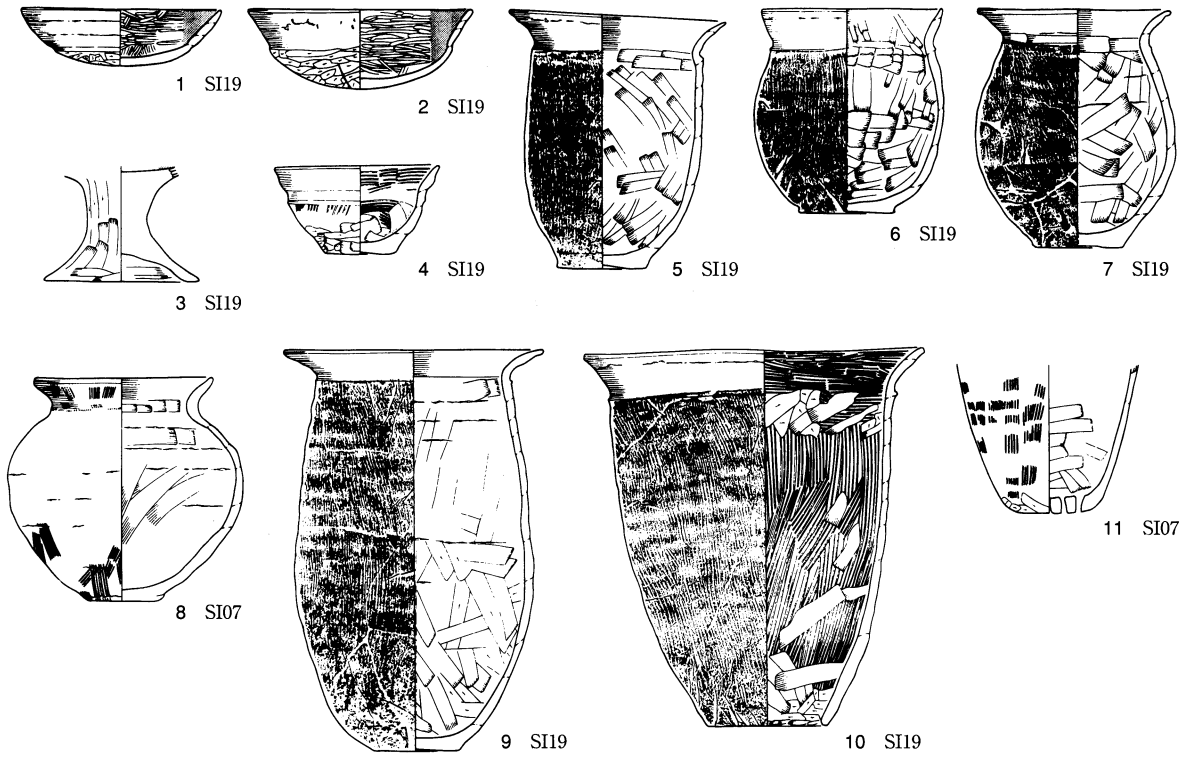
本群は杯の口縁部形態を見ると、栗田式の後半段階に相当すると思われる。本群の実年代は共伴する須恵器がないため、Ⅲ群土器とⅤ群土器の実年代を参考に推測するしか方法がない。7世紀後半～8世紀前半に比定されるものと考えている。

[第Ⅴ群土器]

4・18・23・27号住居跡からまとまって出土した土器群である。器種は杯・高台付杯・杯蓋・碗・甕・甌・ミニチュア土器があり、高杯は姿を消している。食膳形態の杯は、器形がバラエティーに富み、法量分化する傾向にある。また、金属器や須恵器を模倣して内外面を黒色処理、ヘラミガキ調整した資料も見られる。

図153-Ⅴ群2・4・5・7～9は杯である。法量は口径13.0cmを境にして、大型と小型に大別される。底部には平底、丸底、膨らみを持った平底などがあり、口縁部は内湾して開くものや直線的に外傾するものが見られる。口縁部下端に段や稜を作るものは認められない。外面の調整は口縁部がヨコナデ、胴部がヘラケズリで仕上げられるものが多い。このヘラケズリ調整は、5のように口縁部にまで及んでいるものがある。図153-Ⅴ群3・11～13・15は、金属器を模倣して作られたと考えられる杯で、内外面とも黒光りしている。3の外面は黒色処理されていないが、丁寧にヘラミガキされて、器面が滑らかに整えられている。器形は口縁部が内湾して開く碗形を呈するものが

第Ⅳ群土器



第Ⅴ群土器

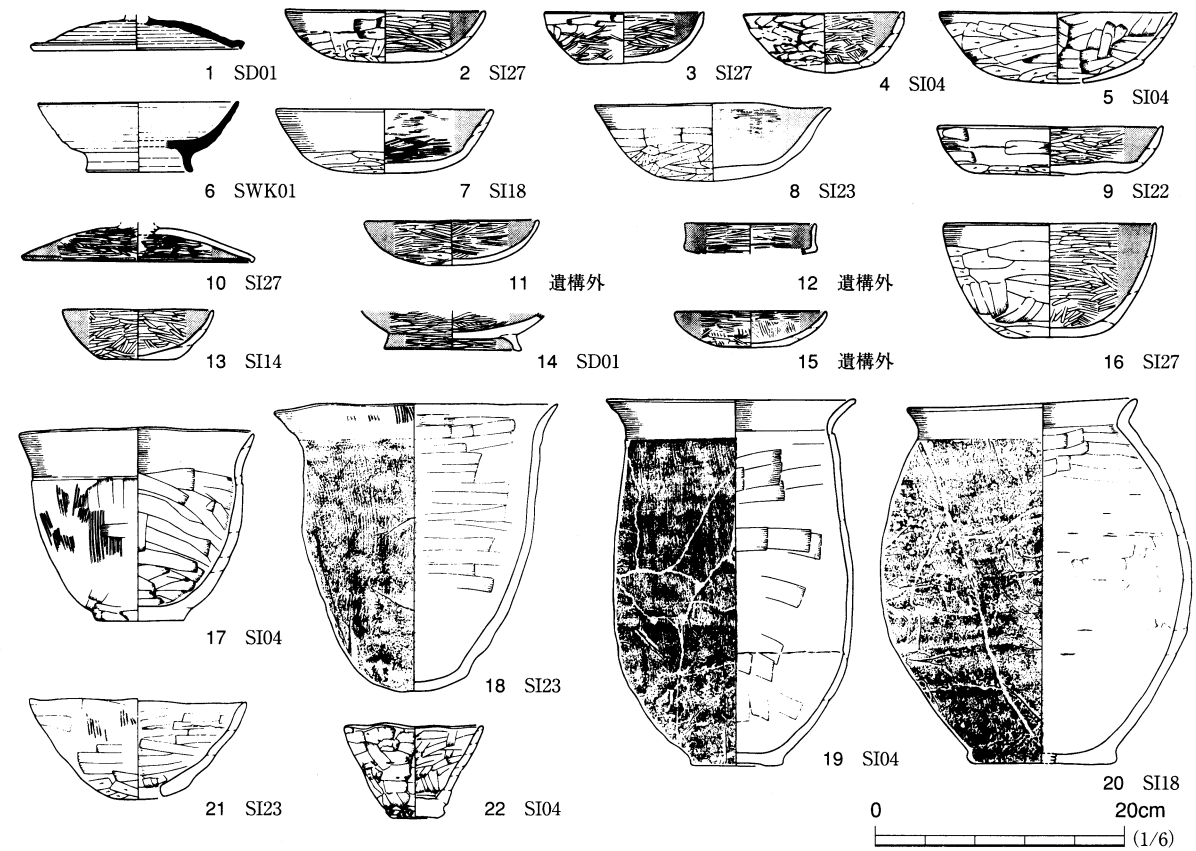


図153 土師器の変遷 (3)

多く、底部は平底が目立つ。図153-V群10・14は杯蓋と高台付杯で、金属器模倣の須恵器と同じ器形を呈している。図153-V群16は椀で、本群の杯を深くしたような形をしている。図153-V群17は中型甕，18・19は大型の長胴甕，20はラグビーボール形の胴部を持つ大型甕である。図153-V群21は浅い小型甗で、儀礼用の非実用品と思われる。図153-V群22はミニチュアの手捏ね土器である。

本群は杯の形態が多様であり、また、平底化がある程度進んでいることから、国分寺下層式段階に相当すると思われる。昭和63年度の本宮町第1次調査（本宮町；1989）で発見された7号住居跡出土資料よりは、古い時期に位置付けられる。本群の実年代は、竪穴住居跡からの出土ではないものの、1号溝跡から出土した図153-V群1の須恵器杯蓋，1号鍛冶遺構から出土した図153-V群6の須恵器高台付杯が参考になる。これらは伊達町伊達窯跡の出土資料に近いと思われ、8世紀中葉を中心に時期比定される。

[第VI群土器]

28・29号住居跡や遺構外から出土している。器種は杯が多い。ロクロで整形されており、体部下端は、回転ヘラケズリ，手持ちヘラケズリで調整されるものが目立つ。底面には糸切り痕が見られる。内面には、黒色処理とヘラミガキが施されている。

図154-VI群1～4を見ると、1・3のように口縁部が外傾する形態，2・4のように口縁部が内湾する形態の2種類に分類できることが判る。

本群は、杯のロクロ整形が認められていることから表杉ノ入式に相当する資料で、実年代は9世紀前半頃を中心とした時期が推定される。

本遺跡から出土した土師器は、以上の6群に分けて把握することが可能である。これらの変遷過程については、既述のように、土師器杯の形態や共存する須恵器の実年代などに着目して分析を試みた。それを裏付ける層位的事実として、断片的ではあるが、下記の遺構の新旧関係を挙げておきたい。

- ・ 6号住居跡（第III群土器）→5号住居跡（第IV群土器）
- ・ 12号住居跡（第II群土器）→24号住居跡（第IV群土器）
- ・ 15号住居跡（第II群土器）→26号住居跡（第V群土器）
- ・ 30号住居跡（第IV群土器）→29号住居跡（第VI群土器）
- ・ 32号住居跡（第II群土器）→31号住居跡→20号住居跡
→29号住居跡（第VI群土器）

このように、I～VI群土器の変遷過程を通観すると、V群土器の中に先行するそれまでの土器群には見られなかった、新しい要素を見出すことができる。それは杯の法量分化と平底化の進行であり、金属器を指向した器種の存在である。

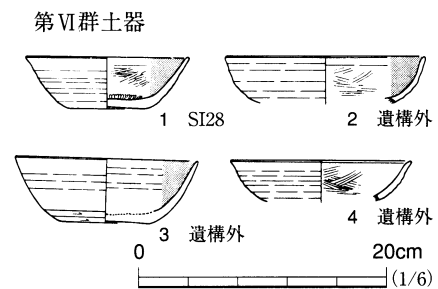


図154 土師器の変遷（4）

西弘海は、杯が法量分化する要因として、官人層の形成に伴う特殊な生活形態が普及したことを挙げている(西;1982)。また、石本弘は、杯が平底化する背景に、地方官衙の整備に触発された掘立柱建物跡の普及を想定している(石本;1996)。本遺跡でも、掘立柱建物跡はV群土器の段階で出現しており、この見解に矛盾していない。一方、金属器を模倣した器種は、仏教文化に対する強いあこがれが契機となって出現したもので、主に仏器など特定の用途に使用されたと考えられている(西;1982)。このような諸説を参考にすると、本遺跡を取り巻く社会情勢は、V群土器の時期に大きく変化したことが判る。それが本遺跡に居住した人々の生活にも少なからず影響していたのであろう。

今回は、阿武隈川の右岸に形成された複数の遺跡からなる大集落のごく一部を調査したに過ぎないが、本遺跡における土器群の変遷を見た限りでは、辻秀人が「第3の画期」(辻;1990)と呼んだ東北地方南部の古墳時代後期社会に起きた変革の波が本集落にも押し寄せ、土器群の内容を変化させていた様子をうかがい知ることができる。(小 暮)

須恵器 (図155・156)

山王川原遺跡出土の須恵器は総破片数1,516点を数え、土師器を含めた全体破片数からすると約2%を占めるのみである。器種の内訳としては杯が390点、甕が969点、その他が157点であるが、この数値は各時期のものが混在した状況でのものであり、おおまかな傾向としてしか把握できないものである。そこで、ここでは第2章で報告した須恵器を各時期の代表として取り上げ、若干の検討を加えることにしたい。

図155・156が報告した集成図で、器種には杯・蓋・高台杯・高坏・壺・甕があり、形態によって時間幅が認められる。

図155-1は最も古い様相を呈する杯蓋で、形態及び口径などから陶邑古窯跡群におけるTK208~23型式に相当するものと考えられる。本宮町付近における当該期須恵器の出土例は郡山市に少数例認められ、南山田遺跡・永作遺跡・正直A遺跡の住居跡から杯身・杯蓋・高坏・甕が出土している。それらの様相からすると、当期の集落には少量ではあるものの畿内との関連を持って須恵器を入手する体制があったことが知られ、本遺跡近辺においても例示遺跡と同格程度の集落の存在が予想される。なお、本遺跡18号土抗の出土土師器は古墳時代中期の資料であり、当該期の関連遺構とすることができる。

図155-2~16はTK43~209型式に相当するものと考えられるが、在地産と思われるものが多く含まれている。特に2・5・8・9・12は大粒の石英粒を含み、焼成温度が低く断面がセピア色を呈するものが多く、在地産と考えられる。2は杯身であるが極端に扁平な体部に比して高めのたちあがりをも有するものである。形が崩れている割には体部全面を回転ヘラケズリしており古い要素となっている。3も杯身であるが、たちあがりが低くなり、遺存部では回転ヘラケズリが認められないなどやや時期の下る様相を帯びている。4・5は蓋としたが使用時は杯として使用した可能性も

考えられる。特に5は逆転すると平城京分類杯Gに近い形態であり、新しい要素といえるかも知れない。6は有蓋の高杯で、最もよくこの時期の特徴を表しており、杯部のたちあがりからするとTK43に近似すると考えられる。しかし、TK43からTK209への高杯の変化がいまひとつ明確にできないことから、どちらとも決しがたい資料である。7～10は無蓋の高杯と考えられるもので9と10は胎土から同一個体である可能性が高い。8は畿内ではあまり例が拾えないが、東海地区の資料に類似資料が見受けられる。13～16は壺あるいは瓶類と考えられるもので、13・14は蓋、16は大型の長頸瓶であろう。なお、16も胎土からすると東海産の可能性もある。

以上この段階の製品は葬祭供献用として発達波及していくとされ、当資料もその中で捉えられるものと考えられる。県内においては集落遺跡からの出土例は少なく、横穴古墳において目立つもので、泉崎村泉崎横穴・鹿島町江垂横穴・白河市郭内横穴などに高杯・提瓶・横瓶などが見られ、供献品としての位置付けを確認することができる。したがって当集落においても祭儀に使用された可能性が高いと推測され、集落内資料としては貴重である。

図155-17～29は8世紀以降のものであると考えられる。中でも古手と考えられるのは17・25で、回転ヘラケズリ調整や宝珠ツマミの形態などから8世紀前半が推定される。18・22・23は伊達町の伊達窯跡群の資料に近く8世紀後半、それより底径の小さい19・24は9世紀に入るものであろう。20・21は底部に糸切り痕を残しているが、底径が大きいことから極端に新しくはできないと考えら

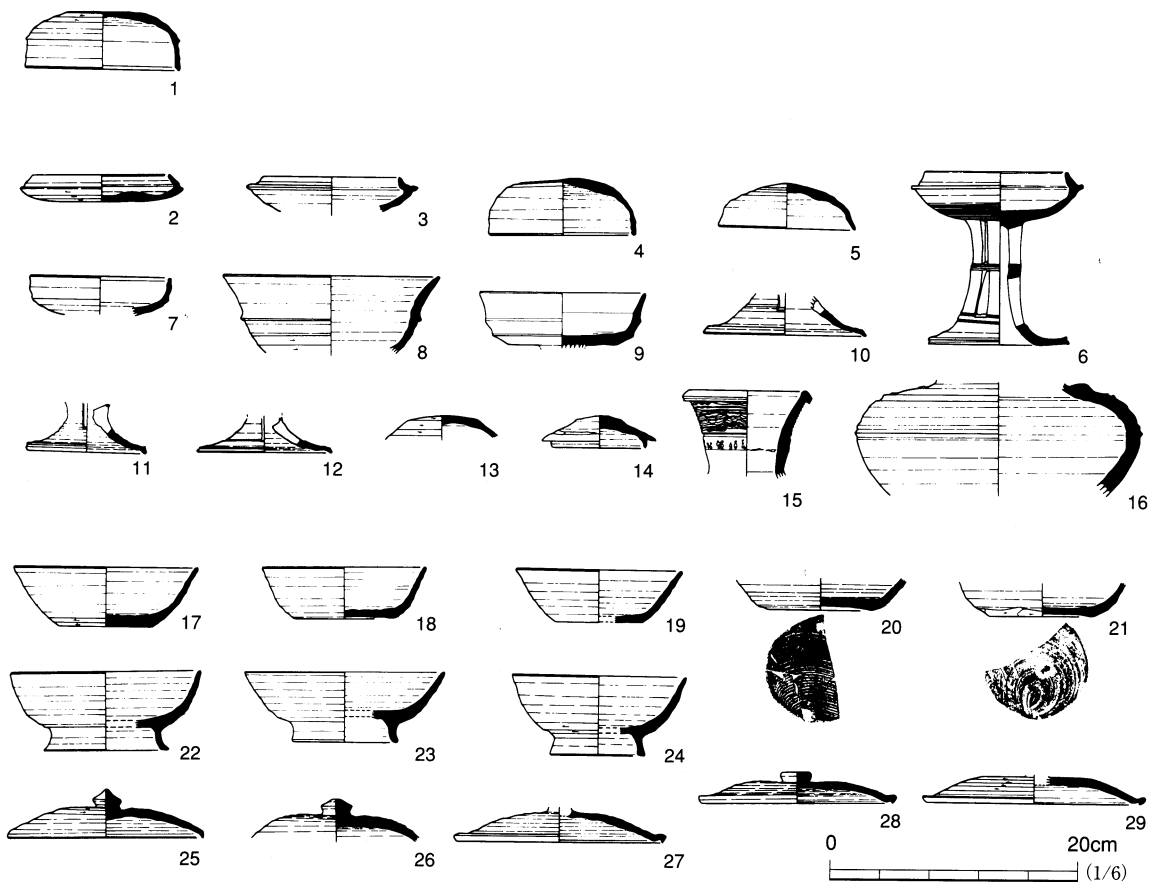


図155 山王川原遺跡出土須恵器(1)

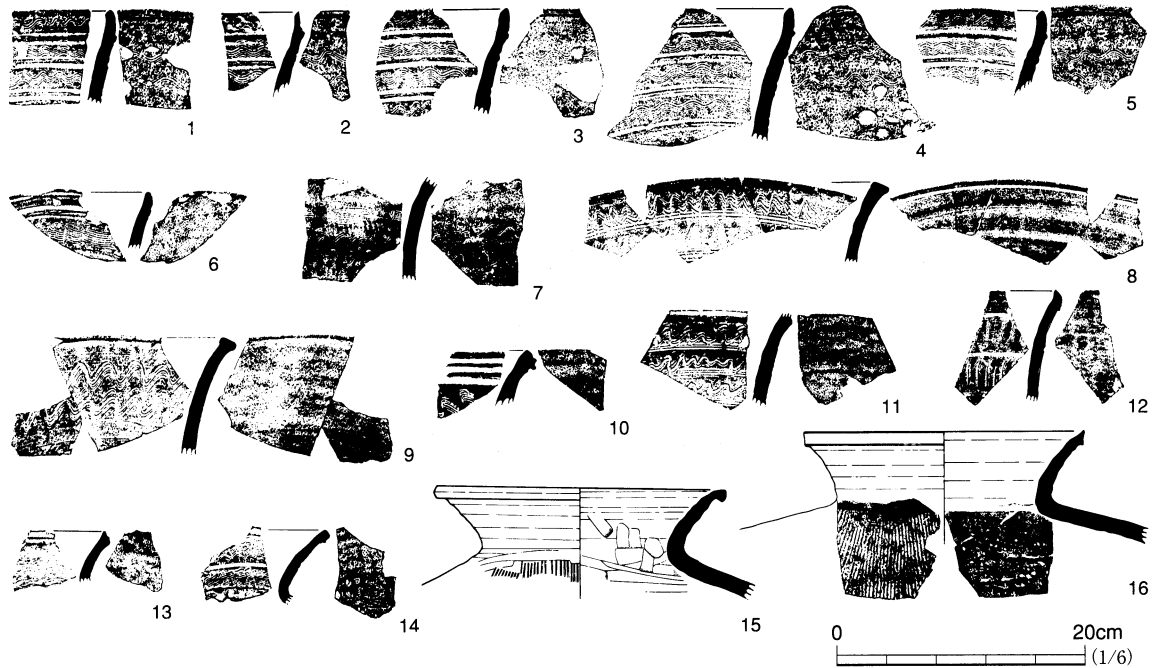


図156 山王川原遺跡出土須恵器（2）

れる。27～29の蓋は8世紀後半以降のものであろう。なお、17・18は焼きゆがんでいることから近在窯の製品、19は胎土から会津大戸窯の製品であると推測される。以上8世紀以降と考えられる資料はすべて供膳具であり、前段階において祭儀用の製品が主流であったことと比較するとその様相差は大きいとすることができる。少量の資料ではあるが社会変動の一端をうかがうことができる。

最後に甕について簡単に触れておくことにしたい。甕の口縁部資料の主なものを図156に掲げた。上記の器種に比べて把握しづらいが口縁端部の形態から大きく3分類が可能である。図156-1～6が口縁端部を内湾気味に立ち上げる1類、図156-8・9が口縁端部を肥厚させ内面に沈線が見られる2類、図156-10～16が口縁端部を外側に折る形態の3類である。1類は内面に波状沈線が描かれることから関東の例などからすると7世紀の中で考えられる資料であり、口縁部の形態も下る時期にはあまり見られないとも思われる。2・3類は時期の位置付けが困難で、特に3類は長い時期を通して確認することができる。ただ、図156-8・10は1号鍛冶炉の廃滓層の出土であり、同層出土の土師器からすると8世紀頃が推定される。(安田)

第2節 遺構について

山王川原遺跡調査3区（以下調査3区）において検出した遺構は、竪穴住居跡37軒、掘立柱建物跡4棟、土坑18基、鍛冶遺構1基、ピット群などがある。これらの遺構は、出土遺物や遺構の重複関係などから判断して、6世紀後半～9世紀前半に営まれたものと考えている。

これらの遺構については、本章第1節の土器変遷を基準とし、遺存状況の良好な住居跡を中心に5期にわたる変遷を想定した（図158～160）。この集落変遷の各時期については、出土した土器群の

名称にちなんで「Ⅱ～Ⅵ期」と呼称した。以下、調査3区の集落の復元を行なっていきたい。なお、山王川原3区で検出された竪穴住居跡の規模は南北長、東西長の比率から、大きくA～Dの4タイプに分類することができた(図157)。このため、遺存状況の良い竪穴住居跡については、集落変遷図中及び報文中では、住居跡A～Dとして報告できたが、遺存状況の悪い竪穴住居跡については、集落変遷図に図示しなかった。

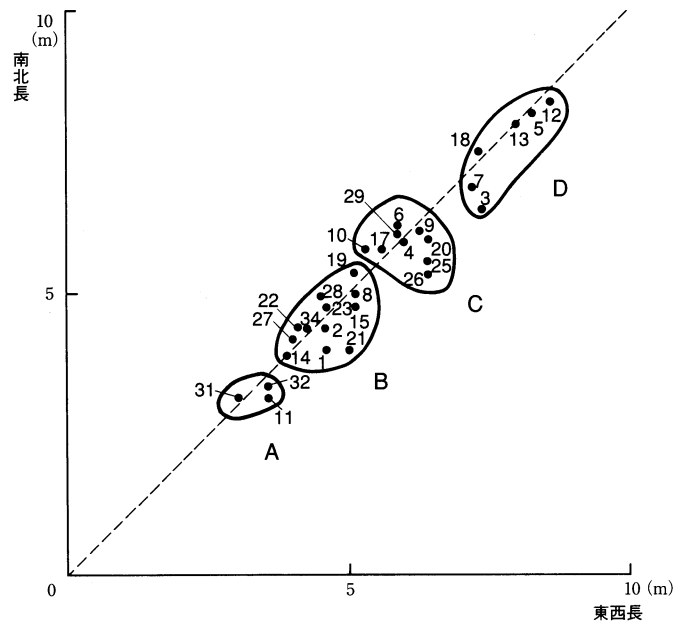


図157 竪穴住居跡の規模

Ⅱ期の遺構群(図158)

Ⅱ期に該当するものは、Ⅱ群土器が出土した8・9・10・12・13・15・17・21・32・35・36・37号住居跡である。Ⅱ期の遺構群の年代観は、Ⅱ群土器の検討から6世紀後半～7世紀前半に属するものと考えている。

Ⅱ期の竪穴住居跡の規模は、小規模な住居跡A(一辺が4m未満)が32号住居跡、住居跡B(一辺が4～6m程度)が8・15号住居跡、住居跡C(一辺が5.5m～7m)が9・17・35号住居跡、住居跡D(一辺が6.5m以上)が12・13号住居跡に該当し、竪穴住居跡の規模はバリエーションに富んでいる。

竪穴住居跡の分布状況は、調査3区内の南西側、自然堤防上の平坦部に比較的まとまって分布する傾向にある。このうち、北側にカマドが位置し、同一方向に軸線をもつ、8・12・15号住居跡と西側にカマドが位置し、同一方向に軸線をもつ、13・17号住居跡については、多少の時間差をもって、それぞれ同時期に存在していたと考えられる。また、調査3区で検出された竪穴住居跡のカマドの多くが北壁、あるいは西壁に造られているのに対し、最も小規模な32号住居跡は東壁に造られ、Ⅱ期の中でも特異である。

Ⅱ期は、調査3区内での集落形成期にあたる。当時期に該当する住居跡は、8軒と考えられるが、このうち、8・12・15号住居跡の3軒と13・17号住居跡の2軒については、軸線やカマドの位置の相違から、多少の時間差をもって営まれていたと考えられ、少なくともⅡ期内において、2時期の集落の推移が考えられる。また、他の住居跡についても、軸線方向やカマドの位置などが異なるため、同時期に営まれていたとは判断できず、Ⅱ期内においては、多少の集落の前後関係があるものと考えたい。

Ⅲ期の遺構群(図158)

Ⅲ期に該当するものは、Ⅲ群土器が出土した2・6号住居跡であり、図示しなかったが、11・16

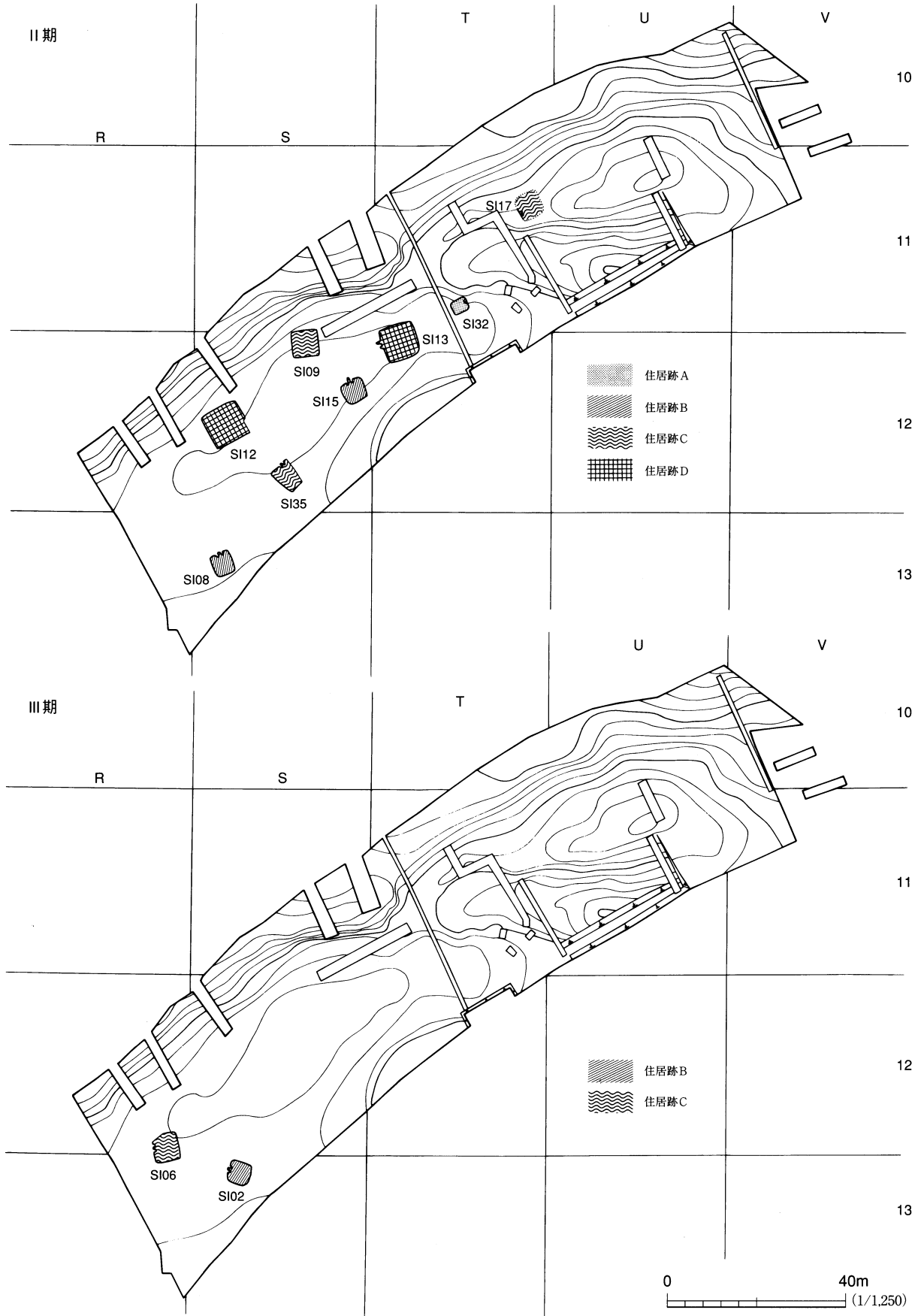


图158 集落变遷図(1)

号も当期の可能性が高い。Ⅲ期の遺構群の年代観は、Ⅲ群土器の検討から7世紀中頃に属するものと考えている。Ⅲ期の竪穴住居跡は、16号住居跡を除き、いずれも調査3区内の南西側に位置している。Ⅲ期は、集落形成期であるⅡ期に比べ、竪穴住居跡の数も4軒と少ない。これらの竪穴住居跡は、カマドの位置が北壁、西壁と異なり、軸線方向が違うことから、この時期、調査3区で営まれていたのは、1ないし2軒と考えられる。このような、調査3区内における、竪穴住居跡の営みの現象は、集落の衰退によるものか、集落の中心が下流域に推移した結果と考えられる。

Ⅳ期の遺構群 (図159)

Ⅳ期に該当するものは、Ⅳ群土器が出土した3・5・7・19・24・25・30・31・33号住居跡である。Ⅳ期の遺構群の年代観は、Ⅳ群土器の検討から7世紀後半～8世紀前半に属するものと考えている。住居跡の分布状況を見ると、調査区南西側にまとまって分布、自然堤防上の平坦部に立地しており、ほぼⅡ期の遺構群の分布状況に等しい。

竪穴住居跡の規模は、住居跡Aに該当するものが31号住居跡、住居跡Bが19・24号住居跡、住居跡Cが25号住居跡、住居跡Dが3・5・7号住居跡に当たり、竪穴住居跡の規模はⅡ期と同様に大小様々である。このうち、住居跡Dに該当する5・7号住居跡と住居跡Cの25号住居跡については、同一方向に軸線をもち、カマドの位置などが同じであることから、同時期に営まれていたと考えている。また、住居跡Aに当たる小規模な31号住居跡や、西壁にカマドをもつ19号住居跡が、他の住居跡から少し離れた、集落のやや外れた場所に分布している点においてもⅡ期とほぼ同じ遺構配置である。

Ⅳ期においても、出土遺物からは大きく竪穴住居跡の時間差を想定できないため、軸線やカマドの位置などが異なる竪穴住居跡については、Ⅱ期と同様に集落に多少の前後関係をもつものと考えている。

Ⅴ期の遺構群 (図159)

Ⅴ期に該当するものは、Ⅴ群土器が出土した4・14・18・20・22・23・26・27・34号住居跡、1・2号建物跡、1号溝跡、1号鍛冶遺構である。Ⅴ期の遺構群の年代観は、Ⅴ群土器の検討から8世紀中葉頃に属するものと考えている。

Ⅴ期では、これまで竪穴住居跡で構成されていた集落に掘立柱建物跡と溝跡、鍛冶遺構が加わり、集落全体の構造がやや複雑化している。調査3区内での集落変遷の中では、大きな画期になると思われる。

遺構の分布状況を見ると、大きく3つに分けることができる。1号溝跡を挟んだ西側に掘立柱建物跡、東側に竪穴住居跡、竪穴住居跡からやや距離を置いて鍛冶遺構がそれぞれ分布している。

このうち、1号建物跡、4・23・26号住居跡、1号溝跡はほぼ同一の軸線をもつ事などから、Ⅴ期内でもほぼ同時期に機能していたものと考えられる。また、14・18・27号住居跡の3軒もカマドの位置や軸線方向から、同時期に存在していたものと考えられ、Ⅴ期においても、少なくとも2期にわたる遺構の変遷が考えられる。

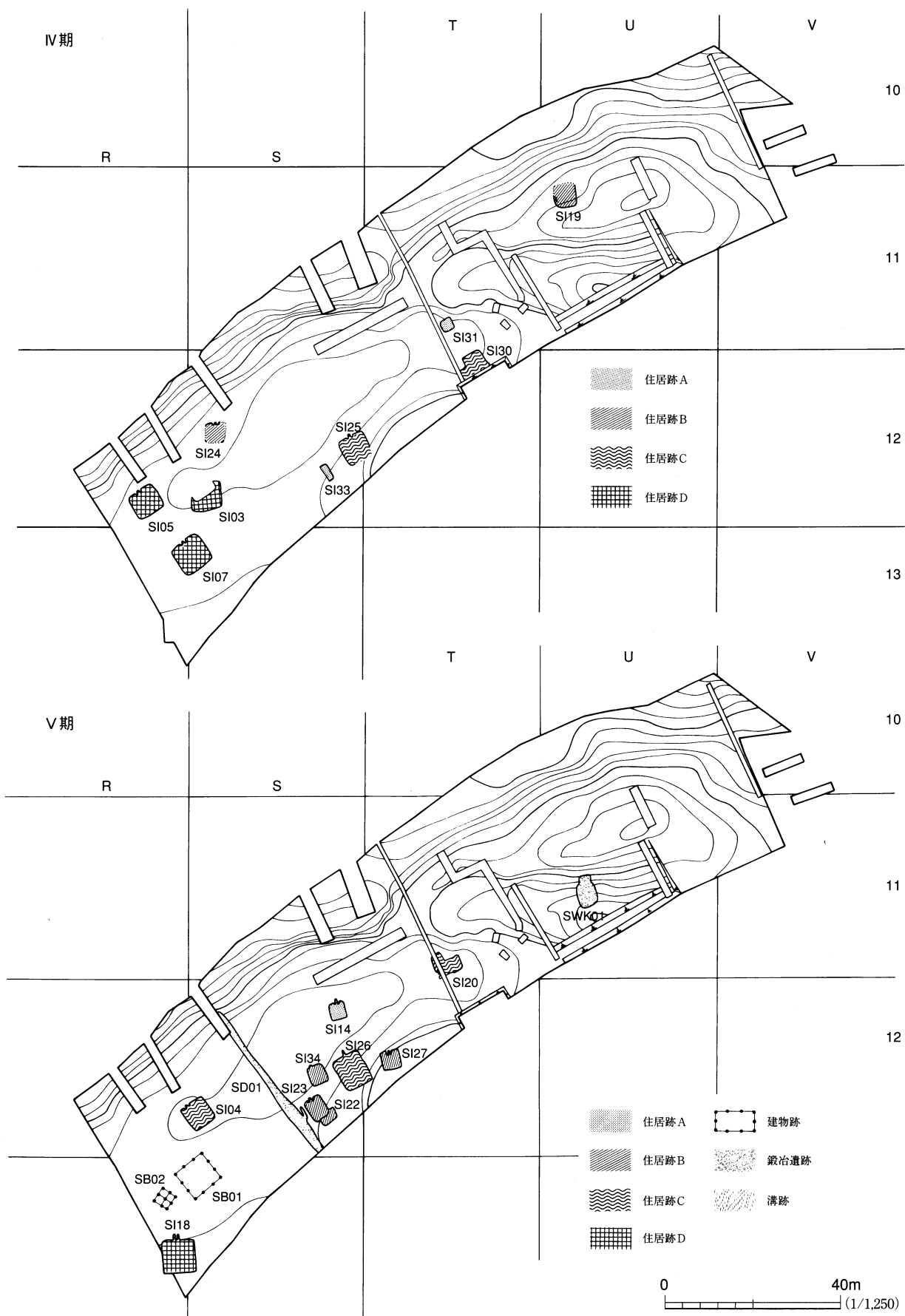


图159 集落变迁图(2)

Ⅵ期の遺構群（図160）

Ⅵ期に該当するものは、Ⅵ群土器が出土した28・29号住居跡、3号建物跡である。Ⅵ期の遺構群の年代観は、Ⅵ群土器の検討から9世紀前半に属するものと考えている。

Ⅵ期は、集落の最盛期であったⅤ期に比べ、竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟と減少し、閑散とした集落の景観を呈している。これらの遺構は、ほぼ同じ軸線方向をもち、竪穴住居跡のカマドはいずれも北壁に造られていることから、ほぼ同時期に機能していたものと考えられる。調査3区では、この後、新たに集落が営まれた形跡が認められず、調査3区の集落はⅥ期で廃絶を迎える。

以上、山王川原遺跡調査3区における遺構の変遷を概観した。調査3区ではⅡ期に集落が形成され始めるが、Ⅰ群土器が出土した12・18号土坑が調査区内で確認されており、生活の痕跡は稀薄なもの、Ⅱ期以前にも営みはあったと考えられる。これについては、隣接して調査が行われた山王川原遺跡調査2区、北ノ脇遺跡、高木遺跡、百目木遺跡の発掘調査の報告と合わせて考えなければならない。この事は、以下報告するⅡ期以降の集落構造や集落の生業についても言える事であろう。

Ⅱ期は前述したように、集落形成時期にあたる。遺跡の微地形を詳しく概観すると、小さな沢によって自然堤防の平坦部が南北に分断されている。Ⅱ期の竪穴住居跡は、自然堤防の平坦部頂部に立地している。分布状況を見ると竪穴住居跡の多くが南側の自然堤防の平坦部に営まれているのに対し、17・36・37号住居跡は他の住居跡から離れ、北側の自然堤防の平坦部に立地している点で特異である。

Ⅱ期では、カマドの位置や住居跡の軸線方向の違いから、この時期集落内で同時期に営まれていた竪穴住居跡は1～3軒と思われ、少なくとも2時期の集落の推移があると考えた。このうち、8・12・15号住居跡は、大型な竪穴住居跡である12号住居跡を中心に等間隔に「L」字状に住居跡が配置する状況が認められ、「L」字状に囲まれた南側に広場的空間が作り出されている。

Ⅲ期は集落衰退期あるいは、集落全体が阿武隈川下流域に推移した結果、調査3区内における竪穴住居跡の軒数の減少を示すものと思われる。原因については、Ⅲ期に該当する2号住居跡が川砂に含まれる雲母を多量に含んだ暗褐色砂質土1層で埋没していることから、洪水による自然災害に起因し、集落が移動したとも考えられるが、前述した阿武隈川沿いに形成された他の遺跡の集落の変遷や当該期の遺構の廃絶状況、また、当時の歴史的背景も合わせて調査3区の集落の変遷を考えなければならない。

Ⅳ期は竪穴住居跡が再び調査3区全域に営まれ、集落が阿武隈川上流域に拡大する。Ⅳ期の竪穴住居跡は、自然堤防の平坦部の肩に造られている。カマドの位置や住居跡の軸線方向の違いから、同時期に機能していたのは、1～3軒と思われる。このうち、同時期に機能していたと考えられる5・7・25号住居跡は、「L」字状に分布し、「L」字状に囲まれた北側に広場的空間が作り出されている。また、Ⅳ期に該当する竪穴住居跡の多くが南側の自然堤防の平坦部に営まれているのに対して、19号住居跡だけが唯一北側の自然堤防の平坦部に立地している点においても、Ⅱ期とほぼ同じ分布状況にある。Ⅳ期は竪穴住居跡の立地と広場的空間がややⅡ期に比べ異なる意外、規模や分

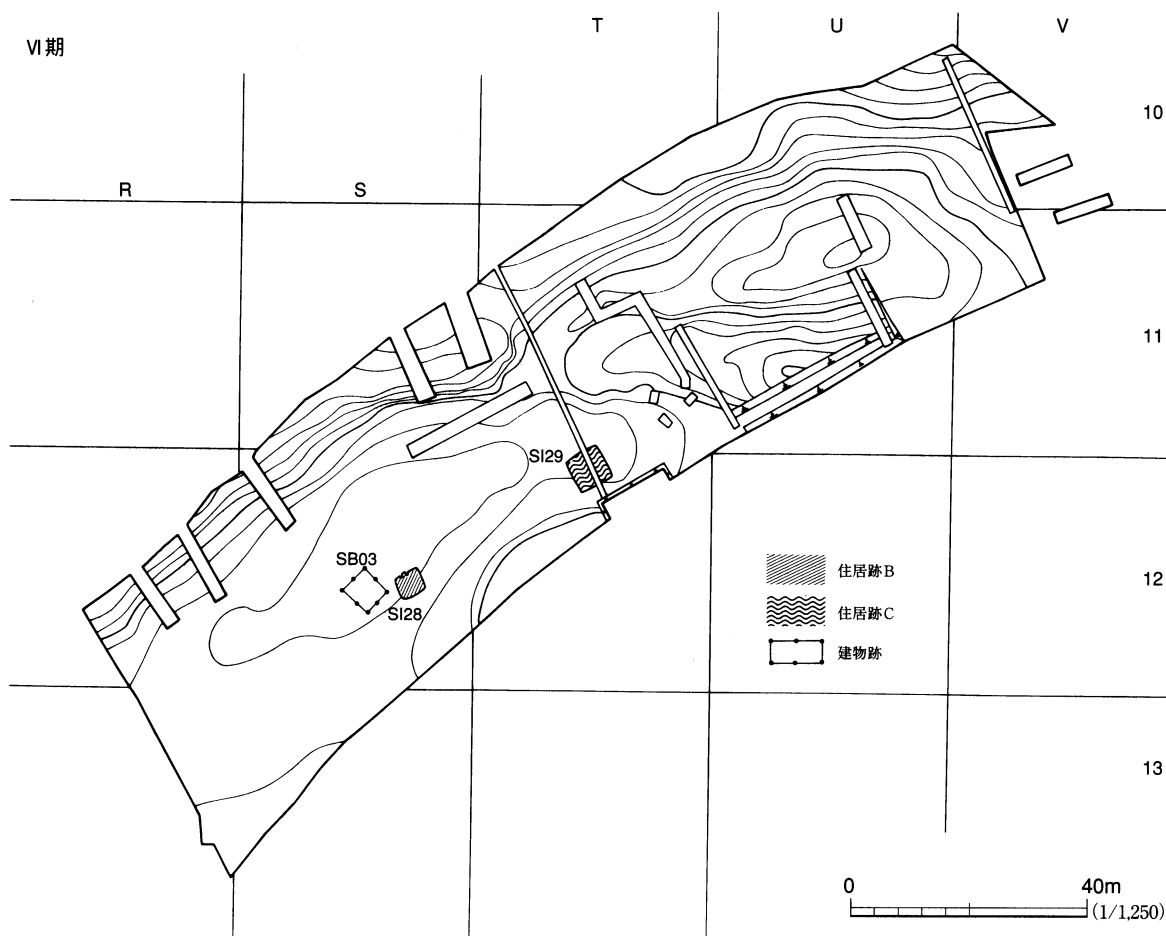


図160 集落変遷図（3）

布状況や配置など、ほぼⅡ期の集落構造（集落形成期）をそのまま踏襲する形となる。

V期は集落の最盛期にあたり、竪穴住居跡で構成されていた従来の集落に掘立柱建物跡と溝跡、鍛冶遺構が加わり、集落全体が計画的に整備され始める。

これらの遺構分布状況を見ると、溝跡を境に掘立柱建物跡と竪穴住居跡、鍛冶遺構の3つのブロックに分けることができる。この中で、遺構の軸線方向やカマドの位置などから、同時期に機能した遺構を考えてみる。ほぼ同一の軸線をもつ遺構は、1号建物跡、4・23・26号住居跡、1号溝跡である。これらの遺構で、V期の集落の景観を想定してみる。集落は、1号溝跡を境に4号住居跡と1号建物跡、23・26号住居跡に二分される。溝跡の南側は、掘立柱建物跡を中心とした地域で、1号建物跡の前方に4号住居跡が配置され、1号建物跡の周囲は、4号住居跡を除き広場的空間が作られている。溝跡北側は、竪穴住居跡を中心とした地域で、23・26号住居跡が配置される。

これらの遺構の中で、1号建物跡については、居住のための建物跡か、倉庫的建物跡か特定するのは難しく、隣接する調査2区の遺構の分布状況と比較検討した上、性格付けを行う必要がある。

また、1号建物跡とは軸線が異なることから、多少の時間差をもつと思われる2号建物跡についても隣接する調査2区の遺構の分布状況と比較検討しなければならないが、2号建物跡は総柱の建物跡になることから、高床式の建物跡になる可能性が強く、規模も小さい事から、居住施設よりは

倉庫的な貯蔵施設と考えたい。

V期においては、集落内に鍛冶遺構も認められる。鍛冶遺構は、集落からやや離れた場所に営まれている。廃滓層の観察などから、短期間の操業であると考えられる。IV期までの集落の生業については特定できないが、V期は鍛冶遺構の出現により、集落の生業が鉄生産にあった事が伺える。

また、手工業生産に関係する遺物として、調査区内で石製品紡錘車なども出土していることから、V期以前には、織物生産への関与も考えられる。IV期からV期への集落の推移は、集落の構造及び、生業の変換が大きく行われた時期と考えられる。

VI期において調査3区は、衰退～廃絶期を迎えることになる。遺構数も激減し、住居跡2軒と掘立柱建物跡1棟のみである。このうち、集落の外れに位置する29号住居跡からは、土鈴や粘土溜り、ロクロ状のピットなどが確認されていることから、生産関連の住居跡（工房跡）の可能性も考えられる。VI期は、集落衰退期であるが、生産関連の施設などは、V期と同様に集落の外れに設けられていたようであり、堅穴住居跡、掘立柱建物跡、生産施設で構成されるといった集落構造は、V期の基本的な集落構造を継承する形となっている。

以上、山王川原3区の遺構について、若干のまとめを行ってみた。今回は、集落の限られた範囲のまとめに過ぎなかった。今後の課題として、阿武隈川右岸沿いに形成された山王川原遺跡を始めとする、北ノ脇遺跡、高木遺跡、百目木遺跡などの古代集落跡について、各遺跡の調査成果と併せ、阿武隈川右岸に形成された大集落の変遷と各遺跡個々の性格の検討が必要である。（大河原）

第3節 総括

山王川原遺跡の調査前の現況は、阿武隈川河畔に開かれた畑地である。現況でも小片の土師器が少なからず表採され、多くの遺構の存在が推測される地区である。調査区からは遺構として堅穴住居跡・掘立柱建物跡・土抗・溝跡・鍛冶遺構が確認され、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・鉄製品・鉄滓などの遺物が出土している。また、同年度に調査を実施した、上流河畔に位置する高木・北ノ脇遺跡は、本遺跡から連綿と続く遺跡であり、本遺跡と密接な関連を有していると考えられる。以下では確認された遺構と遺物について、時期ごとに概観することにした。

今回の調査で最も古い出土遺物は縄文時代中期末葉から後期にかけての縄文土器である。出土状況としては遺構検出作業中にLⅡより散発的に出土するものがほとんどであるが、下層遺構確認のためのトレンチにおいてもLⅣ・Ⅴから微量出土している。縄文土器を伴う遺構は確認されていないことから、遺物の出土要因を明確にすることは難しいが、上記の高木遺跡では集落の形成が確認されており、縄文時代の生活域が当地区まで及んでいたことを推測しても良いと思われる。さらに度重なる河川の氾濫も、遺物の広域散布の要因となるであろう。

弥生時代の遺物は中期と考えられる破片が極少量出土している。出土層位は土師器同様LⅡであるが遺構の検出はなく、出土要因は定かではない。ただし、同年度に本宮町で発掘調査を行った高

木遺跡より上流の百目木遺跡では遺物を伴う土坑が調査されており、自然堤防上に活動痕跡が残されている。

古墳時代は遺物としては前期から見られるが、弥生時代以前と同様に前期の遺構の確認はできていない。ただし高木・百目木遺跡では数軒の住居跡が調査されており、確実に集落が展開し始めたことを知ることができる。今のところ近在に前期の古墳は見つかっていないが、阿武隈川左岸から本宮低地内には築かれていた可能性があり、双子塚古墳はその候補のひとつであろう。古墳時代中期は18号土坑の遺物によって確認することができ、高杯の比率が高く中期でも早い時期のものと思われる。土坑以外の遺構は見られず、当期の集落の様子を知るには資料不足であるが、本宮町では形象埴輪を有す天王壇古墳の調査があり、着実な社会の発展が知られるところである。おそらく当地区周辺にも前期から発展した集落が存在すると推測される。

古墳時代後期から終末期にかけては多くの住居跡が検出され、調査区においては集落の出現展開期とすることができる。以前までに比較すると遺物・遺構数の増加は爆発的であり、当該期の住居跡は26軒の検出である。ただ、平成11年度全体（百目木遺跡・高木遺跡・北ノ脇遺跡・山王川原遺跡）の調査面積は約50,000㎡で、その中におよそ500軒の竪穴住居跡が重複して確認されており、当調査区の検出数はその一部である。おそらく阿武隈川右岸の自然堤防上に大規模な移住計画がなされた結果と考えられ、後背湿地には集落を支える水田が整備されたものと予想される。このような大規模な動きを生じさせた要因を明確にすることはできないが、出土遺物は一つの画期とされる時期（辻；1990）のものであり、この時期に社会変革があったことが推測されている。古墳で言えば前方後円墳の築造が終焉を向かえつつあり、内部主体では横穴式石室が採用され、横穴墓が出現し始める時期である。このことから読みとれる体制の変換は少なからず集落にも影響を与えたと思われ、当遺跡に見られた新たな展開もこのような背景が考慮されるべきと思われる。

古墳時代以降としては、奈良時代と考えられる住居跡9軒、平安時代と考えられる住居跡が2軒検出されている。古墳時代からの順調な集落の発展をうかがうことができ、本宮町全体でも当時期の散布地が増加していることから、律令制の下で集落の再編成があったものと思われる。当遺跡でも、その一端が知られるが、本宮町付近は時代のやや下った延喜6（906）年に安積郡から安達・入野・佐戸の3郷を分離して安達郡を建郡した際の安達郷ではないかとされる向きがあり、集落の充実ぶりが予想される。

（安 田）

引用・参考文献

- 田辺 昭三 1966 『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
- 小林 清治・山田 舜 1970 『福島県の歴史』山川出版社
- 田辺 昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
- 西 弘海 1982 「土器様式の成立とその背景」『小林行雄博士古希記念論文集 考古学論考』
- 高橋 信一 1983 「阿武隈川流域における古墳時代中期の土師器とその問題」『しのぶ考古8』
- 高橋 信一 1985 「阿武隈川流域における古墳時代後期の諸問題」『九郎五郎内遺跡』長沼町教育委員会
- 本宮町教育委員会 1988 『阿武隈川右岸地区埋蔵文化財分布調査報告書』
- 柳沼 賢治 1989 「福島県中通り地方の土師器」『シンポジウム 福島県における古代土器の諸問題』
- 本宮町教育委員会 1989 「山王川原遺跡」『阿武隈川右岸地区遺跡調査報告Ⅰ』本宮町文化財調査報告書第11集
- 小林 清治 1989 『図説 福島県の歴史』河出書房新社
- 福島県教育委員会 1990 「上ノ台A遺跡（第2次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告XⅣ』
- 辻 秀人 1990 「東北古墳時代の画期について（その2）」『伊東信雄先生追悼考古学古代史論攷』伊東信雄先生追悼論文集刊行会
- 本宮町教育委員会 1991 「高木遺跡」『阿武隈川右岸地区遺跡調査報告Ⅱ』本宮町文化財調査報告書第14集
- 本宮町教育委員会 1992 「高木遺跡（第2次）」『阿武隈川右岸地区遺跡調査報告Ⅲ』本宮町文化財調査報告書第16集
- 本宮町教育委員会 1993 「高木遺跡（第3次）」『阿武隈川右岸地区遺跡調査報告Ⅳ』本宮町文化財調査報告書第18集
- 仲田 茂司 1994 「東北地方におけるロクロ土師器の受容とその背景」『考古学雑誌79-3』
- 本宮町教育委員会 1994 「高木遺跡（第4次）」「百目木遺跡」『阿武隈川右岸地区遺跡調査報告Ⅴ』本宮町文化財調査報告書第19集
- 石本 弘 1995 「福島県における律令制成立以前の土器様相とその背景」『東国土器研究4』
- 石本 弘 1996 「丸底から平底へ -福島県におけるロクロ導入時期の土師器-」『論集しのぶ考古』論集しのぶ考古刊行会
- 本宮町教育委員会 1995 「百目木遺跡（第2次）」『阿武隈川右岸地区遺跡調査報告Ⅵ』本宮町文化財調査報告書第20集
- 本宮町教育委員会 1996 「百目木遺跡（第3次）」『阿武隈川右岸地区遺跡調査報告Ⅶ』本宮町文化財調査報告書第21集
- 福島県教育委員会 1996 『福島県遺跡地図 中通り地方』
- 本宮町教育委員会 1997 「百目木遺跡（第4次）」『阿武隈川右岸地区遺跡調査報告Ⅷ』本宮町文化財調査報告書第24集
- 小森 俊寛 1998 「Ⅳ陶邑」『古代の土器5-2 7世紀の土器』古代の土器研究会
- 山口 耕一 1998 「古墳時代後期の円筒形土製品 -栃木県下の事例を中心に-」『研究紀要6』(財)栃木県文化振興事業団 埋蔵文化財センター
- 青山 博樹 1999 「古墳時代中～後期の土器編年 -福島県中通り地方南部を中心に-」『福島考古40』
- 本宮町教育委員会 1999 「高木遺跡（第5次）」『阿武隈川右岸地区遺跡調査報告Ⅹ』本宮町文化財調査報告書第29集

付 編

山王川原遺跡

付編 1 山王川原遺跡の動物遺存体鑑定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

山王川原遺跡は、阿武隈川により形成された自然堤防上からその後背地にかけて位置し、6世紀後半から7世紀後半にかけて竪穴住居跡・掘立柱建物跡・鍛冶遺構などの遺構、古墳時代後期の栗田式土器などが検出されている。本遺跡は、同自然堤防上にある北ノ脇遺跡や高木遺跡とともに同一の集落を形成していたと考えられている。

本遺跡の住居跡では、カマドから化石獣骨が出土した。これらは、当時の食材や調理方法を反映している可能性が高いと考えられた。今回、当時の食生活に関する情報を収集する目的で骨同定を実施した。なお、骨の同定は、早稲田大学金子浩昌先生にお願いし、若干のコメントをいただいた。

1. 試料

骨同定を実施した試料は、16号住居跡のカマド天井崩落土の中から散らばった状態で出土した8点 (No.1～8)、17号住居跡のカマド袖構築土から採取された1点 (No.9)、25号住居跡のカマド天井崩落土から採取された1点 (No.10)、27号住居跡のカマド天井崩落土から採取された1点 (No.11) である。

2. 分析方法

試料を肉眼で観察し、その形態的特徴から種類・部位を同定する。

3. 結果および考察

結果を表1に示す。試料は、全て被熱した獣骨片で灰白色に白灰化している骨であり、破片となっている。中でも3区S I 25カマドから出土したNo.10は細片であり、特徴的な形態が確認できないため種類および部位の特定ができない。

3区S I 16カマドから採取されたNo.1・2・4～8は、イノシシ (*Sus scrofa*) に同定された。No.1・6・7は右脛骨の破片であり、No.1とNo.6が接合する。No.2は、右上顎骨の破片である。また、No.4とNo.5の上顎骨は、同一の骨の破損したものと考えられる。No.8の上顎骨もこれらと同じ部位の可能性がある。No.3は肋骨であったが、イノシシとシカ (*Cervus nippon*) の区別がつかない。

3区S I 17カマドで採取されたNo.9は上顎骨に同定された。また、3区S I 27カマドで採取されたNo.11は部位を特定することができなかった。しかし、両種類ともイノシシの可能性はある。

付編

これら出土した骨は、当時の狩猟獣であり、解体・調理中に骨の一部がカマド内に入ったものであろう。

表1 骨同定結果

遺物番号	遺構名	層位	種類	部位	個数	備考
1	3区SI 16 カマド	ℓ3	イノシシ	右脛骨	1	破片, No 6 と接合
2	3区SI 16 カマド	ℓ3	イノシシ	右上顎骨	1	破片
3	3区SI 16 カマド	ℓ3	イノシシ又はシカ	肋骨	1	破片
4	3区SI 16 カマド	ℓ3	イノシシ	上顎骨	1	破片, No 4・5・8 は同じ部位か?
5	3区SI 16 カマド	ℓ3	イノシシ	上顎骨	1	破片
6	3区SI 16 カマド	ℓ3	イノシシ	右脛骨	1	破片, No 1 と接合
7	3区SI 16 カマド	ℓ3	イノシシ	右脛骨	1	破片
8	3区SI 16 カマド	ℓ3	イノシシ	上顎骨	1	破片
9	3区SI 17 カマド	ℓ3	イノシシ?	上顎骨	1	破片
10	3区SI 25 カマド	ℓ2	不明	不明	1	破片
11	3区SI 27 カマド	ℓ2	イノシシ?	不明	1	破片

付編2 山王川原遺跡出土鉄滓の分析・調査

川鉄テクノリサーチ株式会社

分析・評価センター

埋蔵文化財調査研究室

岡原 正明

小川 太一

1. はじめに

(財)福島県文化センター殿が、平成11年度に福島県中通り地方の中央部、安達郡本宮町高木字山王川原に所在し、阿武隈川によって形成された標高207~208mの自然堤防上に位置する6世紀後半から7世紀後半にかけての竪穴住居跡37軒、掘立柱建物跡4棟、鍛冶遺構1基などを中心とした山王川原遺跡を発掘調査され、自然堤防の南側斜面に作られた竪穴状の作業場と作業場下の斜面に投棄された廃滓場から出土した鉄滓について、学術的な記録と今後の調査のための一環として化学成分分析を含む自然科学的観点での調査の依頼があった。

調査の観点として、

①製鉄原料の推定、②製鉄工程上の位置付け、③観察上の特記事項など、

を中心に調査した。その結果について報告する。

2. 調査項目および試験・検査方法

(1) 調査項目

表1参照

(2) 重量計測と着磁力調査

計重は電子天秤を使用して行い、小数点2位以下で四捨五入した。着磁力調査については、直径30mmリング状フェライト磁石を使用し、官能検査により「強・やや強・中・やや弱・弱」の5ランクで、個別調査結果の文中に表示した。

(3) 外観の観察と写真撮影

上記各種試験用試料を採取する前に、試料の両面をmm単位まであるスケールを同時写し込みで撮影した。また、試料採取時の特異部分についても撮影を行った。

(4) 化学成分分析

化学成分分析はJ I Sの分析法に準じて行った。分析方法および分析結果は表2・3に示した。

表1 調査項目

試料No F B I	出 土 遺 構	種 別	重 量	着 磁 力	M C 反 応	外 観 写 真	科 学 成 分	組 織 写 真	X 線 回 折
1. 990001	3区1号鍛冶遺構 廃滓層	炉底滓→ 精錬鍛冶滓	48.8	中	無	○	○	○	
2. 990002	3区1号鍛冶遺構 廃滓層	炉底滓→ 精錬鍛冶滓	110.0	やや弱	無	○	○	○	○
3. 990003	3区1号鍛冶遺構 廃滓層	流出滓→ ガラス質流出鉄滓	21.4	中	無	○	○	○	
4. 990004	3区1号鍛冶遺構 廃滓層	流出滓→ 精錬鍛冶滓	7.5	中	無	○	○	○	
5. 990005	3区1号鍛冶遺構 ℓ1	流出滓→ 精錬鍛冶滓	21.6	弱	無	○	○	○	○
6. 990006	3区1号鍛冶遺構 ℓ1	鉄滓→ 精錬鍛冶滓	15.0	やや弱	無	○	○	○	
7. 990007	3区1号鍛冶遺構 ℓ1	鉄滓→ 精錬鍛冶滓	16.4	やや強	無	○	○	○	
8. 990008	3区1号鍛冶遺構 廃滓層	鉄滓→ 鍛冶滓	108.7	やや強	無	○	○	○	
9. 990009	3区1号鍛冶遺構 廃滓層	鉄滓→ 鍛冶滓	88.9	強	無	○	○	○	

註(1) 遺構および試料の種類は文化センターの試料に準拠した。→後は弊社検討の結果である。

(2) MC反応は金属探知機(メタルチェッカー)による残存金属の反応の有無を現す。

この調査は、化学成分から鉄を作るために使用した原料の推定と、生産工程のどの部分で発生した鉄滓かの判断用データを得るために行った。分析項目は、18成分とした。

(5) 顕微鏡組織写真

試料の一部を切り出し樹脂に埋め込み、細かい研磨材などで研磨(鏡面仕上)する。その後、顕微鏡で観察しながら代表的な断面組織を拡大して写真撮影し、熔融状況や介在物(鉱物)の存在状態等から製鉄・鍛冶過程での状況を明らかにする。原則として100倍と400倍で撮影を行う。

(6) X線回折測定

試料を粉碎して板状に成形し、X線を照射すると、試料に含まれている化合物の結晶の種類に応じて、それぞれに固有な反射(回折)されたX線が検出されることを利用して、試料中の未知の化合物を観察・同定する。多くの種類の結晶についての標準データが整備されており、ほとんどの化合物が同定される。装置の仕様や測定条件、測定結果を別頁に添付した。

3. 調査および考察結果

試料毎の調査および考察結果を次に述べる。

(1) 試料番号 F B I - 990001 炉底滓→精錬鍛冶滓

長さ33mm, 幅28mm, 厚さ25mmで, 上部は熔融面と砂礫の詰まった空洞を持ち側面に割欠面が1つある。下部は火床材が剥離し黒色発泡粗鬆な滓で, 軽石状に細かな孔がある。水酸化鉄はあまり生成されていない。全体に着磁力は中程度で, MC反応はない。総重量は48.8gである。

滓断面の100倍と400倍の顕微鏡写真を後頁に示した。顕微鏡組織には, 滓中に丸い空孔が点在しているのが認められる。鉱物組成は, 鉄とチタニウムとの酸化化合物である白色多角形のウルボスピネル($2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)および鉄とシリカとの酸化化合物である幅広短冊のややくずれた青灰色のファイヤライト($2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)結晶, 基地のガラス質スラグなどから構成され, 砂鉄原料特有の成分であるチタニウム(酸化チタニウムで表示: TiO_2)の高いことが想定される鉄滓である。

化学成分分析の結果によると, 全鉄(T.Fe)は47.0%に対して, 酸化第一鉄(ウスタイト: FeO)は48.3%と高い値である。一方, 酸化第二鉄(ヘマタイト: Fe_2O_3)は13.2%と相対的に少ない。また, 金属鉄(M.Fe)は0.27%と少なく, 滓中の成分の指標となる所謂造滓成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O}$)は28.9%であった。砂鉄原料に含まれていたと考えられるチタニウム(酸化チタニウムで表示: TiO_2)はやはり7.89%と多く, バナジウム(V)も0.050%存在するが, 鉱石に含有される成分の一つである銅(Cu)は0.007%と非常に少ない。したがって, 本試料は砂鉄を始発原料とする製鉄工程で生成した可能性の高い鉄滓である。また, C.W.の値は0.52%なので, 酸化第二鉄と水との化合物で鉄錆の一種であるゲーサイト等のオキシ水酸化鉄($\alpha\text{-FeOOH}$ 等)が少々存在するものと推定される。

一方, 本試料の製鉄工程上の位置づけを特定するために, 本試料とこれまでの福島県下の製鉄関連遺跡¹⁾より出土した砂鉄を始発原料とする鉄滓類(約320点)との比較分析を行った結果(図1~6), 図3のT.Fe-TiO₂分布図では, 本試料は製錬滓と精錬鍛冶滓とが重複する領域に位置したが, 図6のT.Fe-造滓成分分布図では, その位置づけが鍛冶滓に帰属されることから, 本試料の製鉄工程上の位置づけは精錬鍛冶滓に帰属されるものと考えられる。また, 脈石成分を多く含むことから, 精錬工程の前期段階に排出された精錬鍛冶滓と推定される。

付編

以上の結果を総合すると、

- ①この試料は精錬鍛冶滓で、
- ②鉄源には砂鉄が使用された可能性が高い、
ものと推定される。

(2) 試料番号 F B I - 990002 炉底滓→椀形精錬鍛冶滓

長さ62mm, 幅58mm, 厚さ35mmで、坩堝内から脱落したような滑らかな下部を持つ重量感のある滓である。割欠面は2面あり、上部は溶融痕があり、凹凸の頂部は薄く水酸化鉄が付着している。空孔部には砂礫が詰まっている。全体に着磁力はやや弱く、MC反応はない。総重量は110.0gである。

滓断面の100倍と400倍の顕微鏡写真を後頁に示した。鉱物組成は、白色粒状および背骨状のウスタイト (FeO) 結晶および幅広短冊のややくずれた青灰色の大きなファイヤライト ($2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) 結晶と基地のガラス質スラグなどから構成される。他の鉱物質の結晶は特に認められず酸化鉄主体の滓と考えられる。

別頁にX線回折チャートを示した。ウスタイトとファイヤライトの強いピークが検出される他、中程度の鉱物のシリカとマグネタイトのピーク、少量のオキシ水酸化鉄のゲーサイトと思われるピークが検出されている。なお、金属鉄の存在ピークは検出されない。

化学成分分析の結果によると、全鉄 (T.Fe) は50.9%に対して、酸化第一鉄 (ウスタイト: FeO) は48.2%と高い値である。一方、酸化第二鉄 (ヘマタイト: Fe_2O_3) は18.8%と相対的に少ない。また、金属鉄 (M.Fe) は0.23%と少なく、滓中の成分の指標となる所謂造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O}$) は28.8%であった。砂鉄原料に含まれていたと考えられるチタニウム (酸化チタニウムで表示: TiO_2) は3.01%と比較的高く、バナジウム (V) も0.021%存在する。一方、鉱石に含有される成分の一つである銅 (Cu) は0.003%と非常に少ない。したがって、本試料は砂鉄を始発原料とする製鉄工程で生成した可能性の高い鉄滓である。また、C.W.の値は0.66%なので、酸化第二鉄と水との化合物で鉄錆の一種であるゲーサイト等のオキシ水酸化鉄 ($\alpha\text{-FeOOH}$ 等) が少々存在するものと推定される。

一方、本試料の製鉄工程上の位置づけは、図3と図6の結果から、先のF B I - 990001試料と同様に図3のT.Fe-TiO₂分布図では、本試料は製錬滓と精錬鍛冶滓とが重複する領域に位置したが、図6のT.Fe-造滓成分分布図では、その位置づけが鍛冶滓に帰属されることから、本試料の製鉄工程上の位置づけは精錬鍛冶滓に帰属されるものと考えられる。

以上の結果を総合すると、

- ①滓の形状をも加味し、この試料は椀形精錬鍛冶滓で、
- ②鉄源には砂鉄が使用された可能性が高い、

ものと推定される。

(3) 試料番号 F B I - 990003 流出滓→ガラス質流出鉄滓

長さ52mm, 幅37mm, 厚さ14mmで, 上部は黒色熔融面のある肉薄な流出滓状の試料である。割欠面は2面あり, 流出滓にしてはやや軽量な感じである。下部は砂礫を巻き込み発泡粗鬆な面を持っている。全体に着磁力は中程度で, MC反応はない。総重量は21.4gである。

滓断面の100倍と400倍の顕微鏡写真を後頁に示した。顕微鏡組織には, 滓中に多くの丸い空孔が存在する。鉱物組成は, 一様に熔融した基地のガラス質スラグが主体で, 小さな白色粒状のウスタイト (FeO) 結晶と灰白色多角形のウルボスピネル ($2\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$), そして100倍の顕微鏡写真では白色のゲーサイト等のオキシ水酸化鉄 ($\alpha\text{-FeOOH}$ 等) などが少々点在していることが観察される。

化学成分分析の結果によると, 全鉄 (T.Fe) は13.0%と少なく, 酸化第一鉄 (ウスタイト: FeO) 5.2%に対して, 酸化第二鉄 (ヘマタイト: Fe_2O_3) は12.5%と相対的に高い。また, 金属鉄 (M.Fe) は0.22%と少なく, 一方滓中の成分の指標となる所謂造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O}$) は79.3%と非常に高い。総じて鉄分の少ないガラス質成分の多い鉄滓である。砂鉄原料に含まれていたと考えられるチタニウム (酸化チタニウムで表示: TiO_2) を1.42%含み, バナジウム (V) も0.014%存在する。一方, 鉱石に含有される成分の一つである銅 (Cu) は0.009%と少ない。したがって, 本試料は砂鉄を始発原料とする製鉄工程で生成した可能性の高い鉄滓である。また, C.W.の値は0.61%なので, 酸化第二鉄と水との化合物で鉄錆の一種であるゲーサイト等のオキシ水酸化鉄 ($\alpha\text{-FeOOH}$ 等) が少々存在し, 先の顕微鏡観察結果を反映する。

一方, 本試料の製鉄工程上の位置づけは, 図3のT.Fe-TiO₂分布図と図6のT.Fe-造滓成分分布図では, 本試料は製錬滓の領域に位置づけられるが, 同一遺構から出土した先の精錬鍛冶滓の存在を考慮すると, 一般に“けら”など素材的に完成されたものからの加工では, ウスタイト (FeO) の晶出した比重大の鉄滓を伴うが, 素材的に未完成なものを対象とする精錬工程では高温状態で行うために, 比較的比重の小さなガラス質の鉄滓を排出すること²⁾が示唆される。したがって, 本試料は恐らく精錬工程の過程で排出されたガラス質流出鉄滓と推定される。

以上の結果を総合すると,

- ①滓の形状をも加味し, この試料は精錬工程で排出されたガラス質流出鉄滓で,
 - ②鉄源には砂鉄が使用された可能性が高い,
- ものと推定される。

(4) 試料番号 F B I - 990004 流失滓→精錬鍛冶滓

長さ31mm, 幅22mm, 厚さ9mmで, 割欠面は2面あり, 上面は流出滓状で水飴が固まった様相を呈する小片試料である。下部は木炭微粉と赤橙色の水酸化鉄が固着し, その断面下部は緻密で上部には気泡の多い状態が観察される。全体に着磁力は中程度で, MC反応はない。総重量は7.5gである。

滓断面の100倍と400倍の顕微鏡写真を後頁に示した。顕微鏡組織には, 滓中に大小多くの空孔が存在する。鉱物組成は, 灰白色の繭状および背骨状のウスタイト (FeO) 結晶と短冊のややくずれた青灰色のファイヤライト ($2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) 結晶が主として観察される。チタニウムと鉄の酸化化合物や他の鉱物質の結晶は特に認められず酸化鉄主体の滓と考えられる。

化学成分分析の結果によると, 全鉄 (T.Fe) は56.1%に対して, 酸化第一鉄 (ウスタイト: FeO) は55.0%と高い値である。一方, 酸化第二鉄 (ヘマタイト: Fe_2O_3) は18.6%と相対的に少ない。また, 金属鉄 (M.Fe) は0.33%と少なく, 滓中の成分の指標となる所謂造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O}$) は21.6%であった。砂鉄原料に含まれていたと考えられるチタニウム (酸化チタニウムで表示: TiO_2) は3.33%と比較的高く, バナジウム (V) も0.024%存在する。一方, 鉱石に含有される成分の一つである銅 (Cu) は0.001%と非常に少ない。したがって, 本試料は砂鉄を始発原料とする製鉄工程で生成した可能性の高い鉄滓である。また, C.W.の値は0.40%なので, 酸化第二鉄と水との化合物で鉄錆の一種であるゲーサイト等のオキシ水酸化鉄 ($\alpha\text{-FeOOH}$ 等) が少々存在するものと推定される。

一方, 本試料の製鉄工程上の位置づけは, 図3のT.Fe-TiO₂分布図と図6のT.Fe-造滓成分分布図の結果から, 精錬鍛冶滓に帰属されるものと考えられる。

以上の結果を総合すると,

- ①本試料は精錬鍛冶滓で,
 - ②鉄源には砂鉄が使用された可能性が高い,
- ものと推定される。

(5) 試料番号 F B I - 990005 流出滓→精錬鍛冶滓

長さ39mm, 幅28mm, 厚さ24mmの黒光りした根付状の試料である。滴り落ちて重なったような様相である。折損部や凹部は細かな発泡孔が観察される。着磁力は弱く, MC反応はない。総重量は21.6gである。

滓断面の100倍と400倍の顕微鏡写真を後頁に示した。鉱物組成は, 大きな幅広短冊のややくずれた青灰色のファイヤライト ($2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) 結晶とその粒間に微細なマグネタイト (Fe_3O_4) 結晶および基地のガラス質スラグなどから構成される。他の鉱物質の結晶は特に認められず酸化鉄主体の滓と考えられる。

別頁にX線回折チャートを示した。ファイヤライトの強いピークが検出される他、少量のウスタイトが検出されている。なお、金属鉄の存在ピークは検出されない。

化学成分分析の結果によると、全鉄 (T.Fe) は45.1%に対して、酸化第一鉄 (ウスタイト: FeO) は42.9%と高い値である。一方、酸化第二鉄 (ヘマタイト: Fe₂O₃) は16.6%と相対的に少ない。また、金属鉄 (M.Fe) は0.16%と少なく、滓中の成分の指標となる所謂造滓成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+Na₂O+K₂O) は38.6%と高い値であった。砂鉄原料に含まれていたと考えられるチタニウム (酸化チタニウムで表示: TiO₂) は0.31%存在し、バナジウム (V) も0.004%とやや低めであった。一方、鉱石に含有される成分の一つである銅 (Cu) は0.005%と少ない。したがって、本試料は砂鉄を始発原料とする製鉄工程で生成した可能性の高い鉄滓である。また、C.W.の値は0.17%なので、酸化第二鉄と水との化合物で鉄錆の一種であるゲーサイト等のオキシ水酸化鉄 (α -FeOOH等) はほとんど存在しないものと推定される。

一方、本試料の製鉄工程上の位置づけは、図3のT.Fe-TiO₂分布図と図6のT.Fe-造滓成分分布図の結果から、精錬鍛冶滓に帰属されるものと考えられる。

以上の結果を総合すると、

- ①本試料は精錬鍛冶滓である。
- ②鉄源には砂鉄が使用された可能性が高い、
ものと推定される

(6) 試料番号 F B I - 990006 鉄滓→精錬鍛冶滓

長さ35mm, 幅26mm, 厚さ15mmで、三面に割欠面のある凹凸の激しい鉄滓小片である。溶融した部分もあり、凹部には錆化した剥片状のものや木炭微粉らしき物も観察される。着磁力は弱く; MC反応もない。総重量は15.0gである。

滓断面の100倍と400倍の顕微鏡写真を後頁に示した。顕微鏡組織には、滓中に空孔が点在しているのが認められる。鉱物組成は、灰白色の繭状および背骨状のウスタイト (FeO) 結晶と基地のガラス質スラグが主として観察される。結晶瘤は肥大化しており、ゆっくりと冷えて固まったものと推定される。他の鉱物質の結晶は特に認められず酸化鉄主体の滓と考えられる。

化学成分分析の結果によると、全鉄 (T.Fe) は49.1%に対して、酸化第一鉄 (ウスタイト: FeO) は45.2%と高い値である。一方、酸化第二鉄 (ヘマタイト: Fe₂O₃) は19.5%と相対的に少ない。また、金属鉄 (M.Fe) は0.31%と少なく、滓中の成分の指標となる所謂造滓成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+Na₂O+K₂O) は32.2%と比較的高い値である。砂鉄原料に含まれていたと考えられるチタニウム (酸化チタニウムで表示: TiO₂) はやはり1.41%と多く、バナジウム (V) も0.017%存在するが、鉱石に含有される成分の一つである銅 (Cu) は0.006%と非常に少ない。したがって、本試料は砂鉄を始発原料とする製鉄工程で生成した可能性の高い鉄滓である。また、C.W.の値は

0.52%なので、酸化第二鉄と水との化合物で鉄錆の一種であるゲーサイト等のオキシ水酸化鉄 (α -FeOOH等) が少々存在するものと推定される。

一方、本試料の製鉄工程上の位置づけは、図3のT.Fe-TiO₂分布図では、本試料は製錬滓と精錬鍛冶滓とが重複する領域に位置したが、図6のT.Fe-造滓成分分布図では、その位置づけが鍛冶滓に帰属されることから、本試料の製鉄工程上の位置づけは精錬鍛冶滓に帰属されるものと考えられる。

以上の結果を総合すると、

- ①この試料は精錬鍛冶滓で、
 - ②鉄源には砂鉄が使用された可能性が高い、
- ものと推定される。

(7) 試料番号 F B I - 990007 鉄滓→精錬鍛冶滓

長さ33mm、幅18mm、厚さ17mmの礫状小片試料である。割欠面は3～4面あり、錆化鉄と砂礫に覆われているために、内部の判定はしにくい。凸部は黒光りして滑らかで、割欠面には多くの気泡がある。全体に着磁力はやや強く、MC反応はない。総重量は16.4gである。

滓断面の100倍と400倍の顕微鏡写真を後頁に示した。顕微鏡組織には、滓中に多くの小さな空孔が存在する。鉱物組成は、灰白色の粒状および背骨状のウスタイト (FeO) 結晶と青灰色盤状のフエイヤライト ($2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) 結晶が主として観察される。チタニウムと鉄の酸化化合物や他の鉱物質の結晶は特に認められず酸化鉄主体の滓と考えられる。

化学成分分析の結果によると、全鉄 (T.Fe) は54.9%に対して、酸化第一鉄 (ウスタイト: FeO) は50.4%と高い値である。一方、酸化第二鉄 (ヘマタイト: Fe₂O₃) は21.7%と相対的に少ない。また、金属鉄 (M.Fe) は0.53%と少なく、滓中の成分の指標となる所謂造滓成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+Na₂O+K₂O) は15.8%で比較的少ない値であった。砂鉄原料に含まれていたと考えられるチタニウム (酸化チタニウムで表示: TiO₂) は9.78%と非常に高く、バナジウム (V) も0.077%存在する。一方、鉱石に含有される成分の一つである銅 (Cu) は0.005%と非常に少ない。したがって、本試料は砂鉄を始発原料とする製鉄工程で生成した可能性の高い鉄滓である。また、C.W.の値は0.77%なので、酸化第二鉄と水との化合物で鉄錆の一種であるゲーサイト等のオキシ水酸化鉄 (α -FeOOH等) が少々存在するものと推定される。

一方、本試料の製鉄工程上の位置づけは、図3のT.Fe-TiO₂分布図と図6のT.Fe-造滓成分分布図の結果から、精錬鍛冶滓に帰属され、また、脈石成分を含むことから、精錬工程の前期段階に排出された精錬鍛冶滓と推定される。

以上の結果を総合すると、

- ①本試料は精錬鍛冶滓で、
 ②鉄源には砂鉄が使用された可能性が高い、
 ものと推定される。

(8) 試料番号 F B I 990008 鉄滓→鍛冶滓

長さ62mm, 幅45mm, 厚さ40mmで, 砂礫と水酸化鉄瘤があり, 重量感のある鉄滓である。割欠面から水酸化鉄と土の固着した赤茶色の瘤が生成されており, 水との接触が長かったものと思われる。全体に着磁力はやや強く, MC反応はない。総重量は108.7gである。

滓断面の100倍と400倍の顕微鏡写真を後頁に示した。鉱物組成は灰白色の繭状および背骨状のウスタイト (FeO) 結晶と短冊のややくずれた青灰色のファイヤライト ($2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) 結晶が主として観察される。チタニウムと鉄の酸化化合物や他の鉱物質の結晶は特に認められず酸化鉄主体の滓と考えられる。

化学成分分析の結果によると, 全鉄 (T.Fe) は56.9%に対して, 酸化第一鉄 (ウスタイト: FeO) は54.3%と高い値である。一方, 酸化第二鉄 (ヘマタイト: Fe_2O_3) は20.5%と相対的に少ない。また, 金属鉄 (M.Fe) は0.33%と少なく, 滓中の成分の指標となる所謂造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O}$) は23.3%であった。砂鉄原料に含まれていたと考えられるチタニウム (酸化チタニウムで表示: TiO_2) は0.48%存在し, バナジウム (V) は少なく0.005%であった。一方, 鉱石に含有される成分の一つである銅 (Cu) は0.002%と非常に少ない。したがって, 本試料は砂鉄を始発原料とする製鉄工程で生成した可能性の高い鉄滓である。また, C.W.の値は0.72%なので, 酸化第二鉄と水との化合物で鉄錆の一種であるゲーサイト等のオキシ水酸化鉄 ($\alpha\text{-FeOOH}$ 等) が少々存在するものと推定される。

一方, 本試料の製鉄工程上の位置づけは, 図3のT.Fe-TiO₂分布図と図6のT.Fe-造滓成分分布図の結果から, 精錬鍛冶滓と鍛錬鍛冶滓の重複する領域に位置づけられ, 鍛冶滓に相当すると考えられるが, 更なるその区別は困難であった。

以上の結果を総合すると,

- ①本試料は鍛冶滓で、
 ②鉄源には砂鉄が使用された可能性が高い、
 ものと推定される。

(9) 試料番号 F B I - 990009 鉄滓→鍛冶滓

長さ72mm, 幅43mm, 厚さ36mmで, 三方に割欠面のある肉厚な鉄滓である。下部に水酸化鉄の丸い瘤とその脇の黒褐色部分から割れが発生している試料である。金属鉄があった形跡を示しているがMC反応はなく, 全体に着磁力は強い。総重量は88.9gである。

滓断面の100倍と400倍の顕微鏡写真を後頁に示した。顕微鏡組織には, 滓中に比較的大きな空洞が存在する。鉱物組成は灰白色の繭状および背骨状のウスタイト (FeO) 結晶と青灰色短冊状のフエイヤライト ($2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) 結晶が主として観察される。この試料も結晶が肥大化している様子が観察される。チタニウムと鉄の酸化化合物や他の鉱物質の結晶は特に認められず酸化鉄主体の滓と考えられる。

化学成分分析の結果によると, 全鉄 (T.Fe) は56.8%に対して, 酸化第一鉄 (ウスタイト: FeO) は55.5%と高い値である。一方, 酸化第二鉄 (ヘマタイト: Fe_2O_3) は19.4%と相対的に少ない。また, 金属鉄 (M.Fe) は0.06%と少なく, 滓中の成分の指標となる所謂造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O}$) は23.9%であった。砂鉄原料に含まれていたと考えられるチタニウム (酸化チタニウムで表示: TiO_2) は0.25%存在し, バナジウム (V) は少なく0.003%であった。一方, 鉱石に含有される成分の一つである銅 (Cu) は0.005%と微量であった。したがって, 本試料は砂鉄を始発原料とする製鉄工程で生成した可能性の高い鉄滓である。また, C.W.の値は0.45%なので, 酸化第二鉄と水との化合物で鉄錆の一種であるゲーサイト等のオキシ水酸化鉄 ($\alpha\text{-FeOOH}$ 等) が少々存在するものと推定される。

一方, 本試料の製鉄工程上の位置づけは, 図3のT.Fe-TiO₂分布図と図6のT.Fe-造滓成分分布図の結果から, 精錬鍛冶滓と鍛錬鍛冶滓の重複する領域に位置づけられ, 鍛冶滓に相当すると考えられるが, 更なるその区別は困難であった。

以上の結果を総合すると,

- ①本試料は鍛冶滓で,
 - ②鉄源には砂鉄が使用された可能性が高い,
- ものと推定される。

表2 化学成分分析結果(1)

%(%)

試料No	T・Fe	M・Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	K ₂ O	Na ₂ O
1	47.0	0.27	48.3	13.2	19.2	3.95	2.27	2.05	1.02	0.40
2	50.9	0.23	48.2	18.8	20.1	5.01	1.50	0.83	0.78	0.54
3	13.0	0.22	5.2	12.5	54.8	13.0	4.28	1.61	3.19	2.45
4	56.1	0.33	55	18.6	15.1	3.78	0.96	0.70	0.64	0.40
5	45.1	0.16	42.9	16.6	28.8	5.05	1.48	0.58	1.87	0.77
6	49.1	0.31	45.2	19.5	19.6	5.24	4.49	1.01	1.21	0.61
7	54.9	0.53	50.4	21.7	9.52	2.65	1.35	1.49	0.55	0.21
8	56.9	0.33	54.3	20.5	16.1	3.84	1.45	0.56	0.94	0.43
9	56.8	0.06	55.5	19.4	16.2	3.52	1.85	0.56	1.30	0.50

表3 化学成分分析結果(2)

%(%)

試料No	MnO	TiO ₂	Cr ₂ O ₃	CW	P ₂ O ₅	C	V	Cu	造滓成分/T・Fe	TiO ₂ /TFe
1	0.32	7.89	0.088	0.56	0.32	0.14	0.050	0.007	0.975	0.168
2	0.12	3.01	0.030	0.66	0.14	0.04	0.021	0.003	0.930	0.059
3	0.15	1.42	0.074	0.61	0.25	0.10	0.014	0.009	0.988	0.109
4	0.12	3.33	0.040	0.40	0.42	0.08	0.024	0.001	0.637	0.059
5	0.09	0.31	0.016	0.17	0.54	0.05	0.004	0.005	1.461	0.007
6	0.09	1.41	0.035	0.72	0.25	0.14	0.017	0.006	0.963	0.003
7	0.28	9.78	0.100	0.77	0.16	0.06	0.077	0.005	0.436	0.178
8	0.06	0.48	0.008	0.72	0.17	0.06	0.005	0.002	0.667	0.008
9	0.06	0.25	0.005	0.45	0.22	0.04	0.003	0.005	0.674	0.004

[分析方法] : JISに準拠し、次の方法で行った。

T・Fe : 三塩化チタン還元-ニクロム酸カリウム滴定法

M・Fe : 臭素メタノール分解-EDTA滴定法

FeO : ニクロム酸カリウム滴定法

Fe₂O₃ : 計算

C.W. : カールフィッシャー法

C : 燃焼-赤外線吸収法

CaO, MgO, MnO, Cr₂O₃, Na₂O, V, Cu : ICP発光分光分析法

SiO₂, Al₂O₃, CaO, MgO, TiO₂, P₂O₅, K₂O : ガラスビート蛍光X線分析法

※但し, CaO, MgO, MnOは含有率に応じてICP分析法または蛍光X線分析法

4. 参考文献

- (1) 相馬開発関連遺跡調査報告 (1991年3月, 1997年3月)
原町火力発電所関連遺跡調査報告 (1997年3月, 1998年2月, 1998年3月)
常磐自動車道遺跡調査報告 (1995年2月, 1999年3月, 1996年7月)
いわき市平バイパス清水遺跡 (1994年7月, 1995年3月)
郡山市妙音寺遺跡 (1996年1月)

等々の福島県下出土鉄滓関連の分析調査報告書, 川鉄テクノリサーチ (株)。

- (2) 『日本古代の鉄生産』たたら研究会, P70, (1991)

5. 参考

- (1) 鉄滓の発生を鉄の生産工程から大きく分類すると,

- ①製錬滓 砂鉄や鉄鉱石を木炭等の炭素で還元して, 酸素を取り除き, 金属鉄を取り出す時に発生するもので, 炉内滓や炉底滓および炉外流出滓などがある。
- ②精錬鍛冶滓 (大鍛冶滓) ①で出来た鉄塊から, さらに不純物を取り出して加工しやすい状態の鉄素材 (鉄塊) にする時に生成するもので, 成分的には①の製錬滓に近い。
- ③鍛錬鍛冶滓 (小鍛冶滓) ②で出来た鉄素材や製品の鉄を加熱・鍛打して, 鉄製品を作っていく過程で生成する鉄滓で, その生成過程により碗形鍛冶滓, 鍛造剥片や粒状鉄滓 (通称湯玉) 等の形となる。
- ④鋳物滓 鉄を融解し, 鋳型に流し込んで鋳物を作る時に生成するもの。
等がある。

(2) 本報告では, 本遺跡出土試料の製鉄工程上の位置づけを特定するために, 本試料とこれまでの福島県下の製鉄関連遺跡¹⁾より出土した砂鉄を始発原料とする鉄滓類の分析データ (約320点) と合わせて, T.Fe-TiO₂分布図 (図1~3参照) とT.Fe-造滓成分分布図 (図4~6参照) の作成を行った。その結果を以下に示した。

鉄は再加工 (いわゆるリサイクル) の可能な素材として利用できるもので, 鍛冶場には各地で新規に生産された鉄と同時にリサイクル品が持ち込まれてきた可能性もあると, 考えるのが妥当である。

素材である鉄や鉄塊がどこで生産されたものか, 製鉄技術の進歩の状況はどうであったか等については, 特定製鉄遺跡に付随する鍛冶工房や, 製品としての鉄器類の追跡調査研究を進めていく過程で更に解明出来るものと思われる。

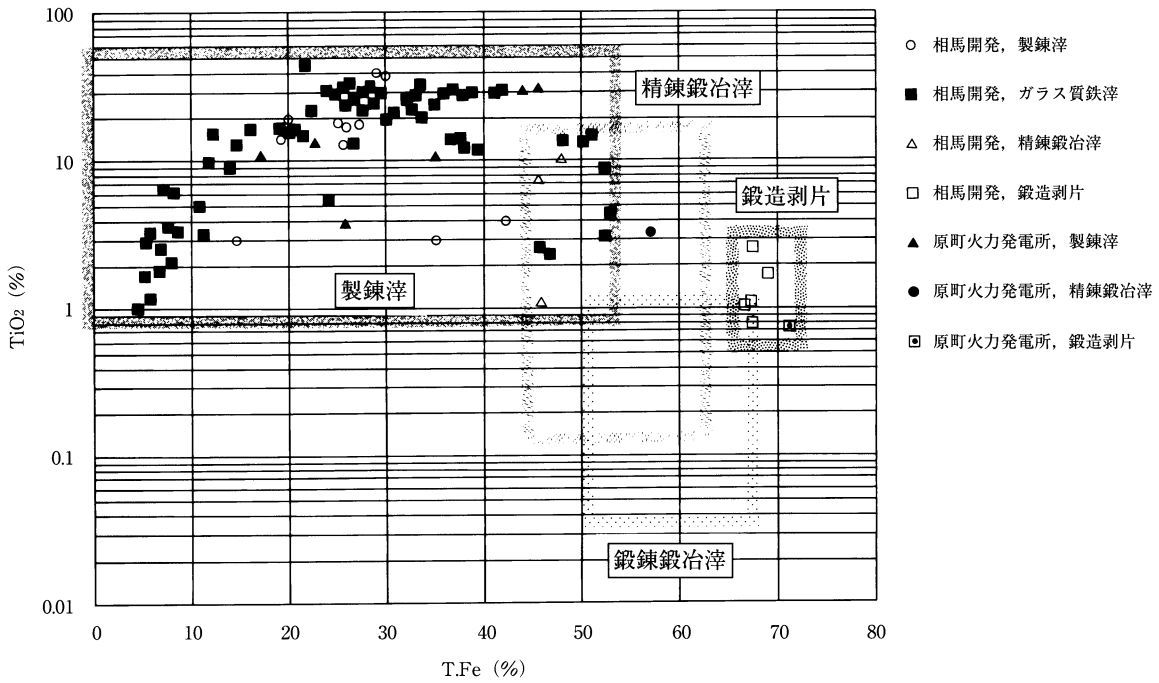


図1 福島県下出土鉄滓のT.Fe - TiO₂分布図 (1)

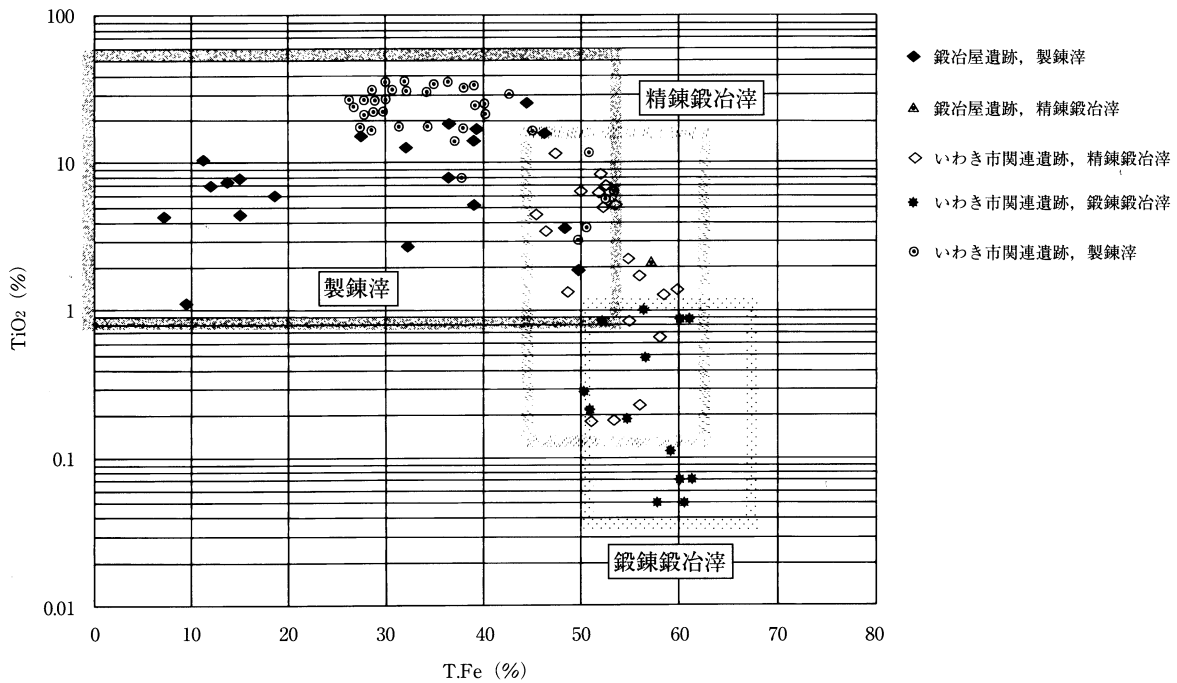


図2 福島県下出土鉄滓のT.Fe - TiO₂分布図 (2)

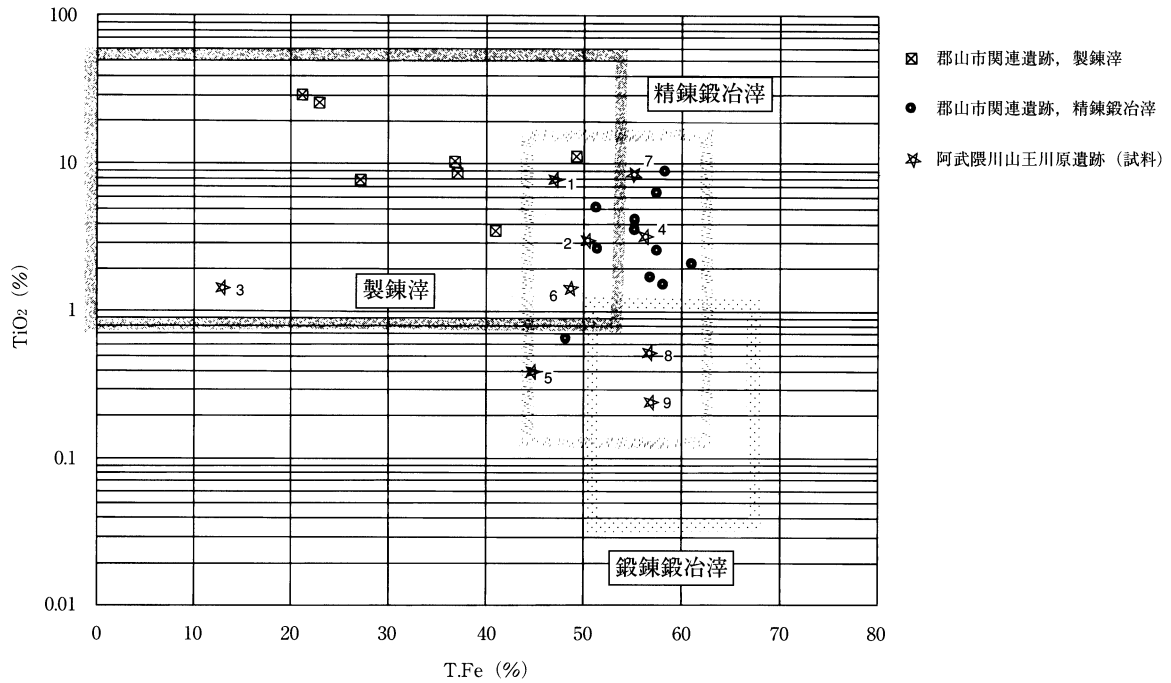


図3 福島県下出土鉄滓のT.Fe - TiO₂分布図 (3)

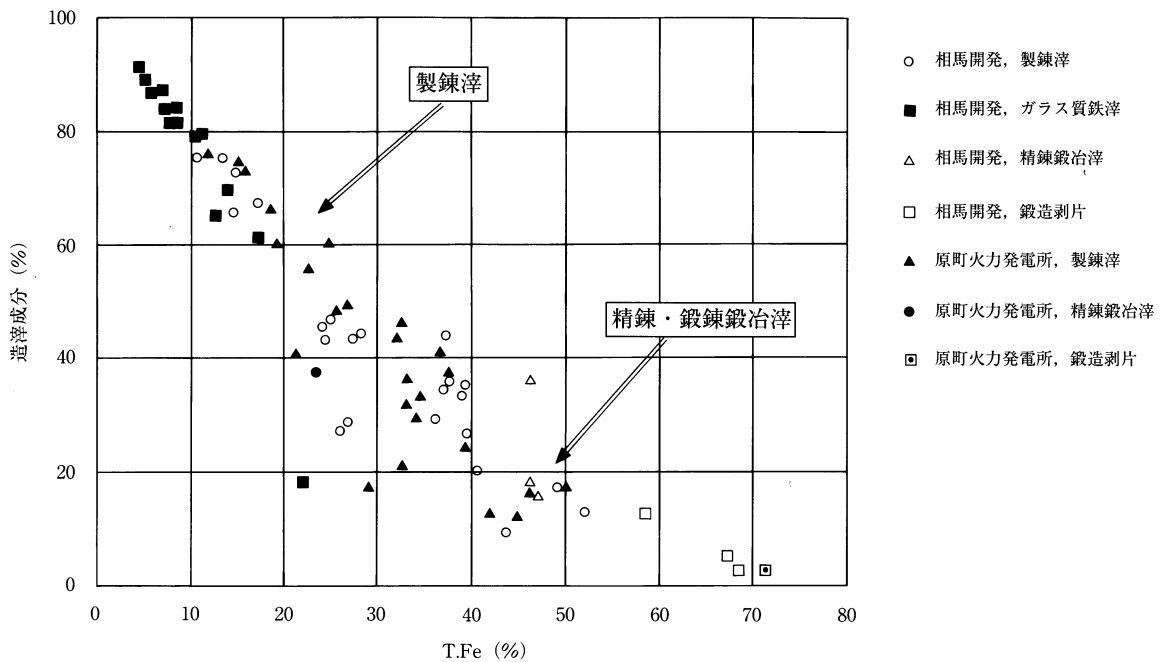


図4 福島県下出土鉄滓のT.Fe - 造滓成分分布図 (1)

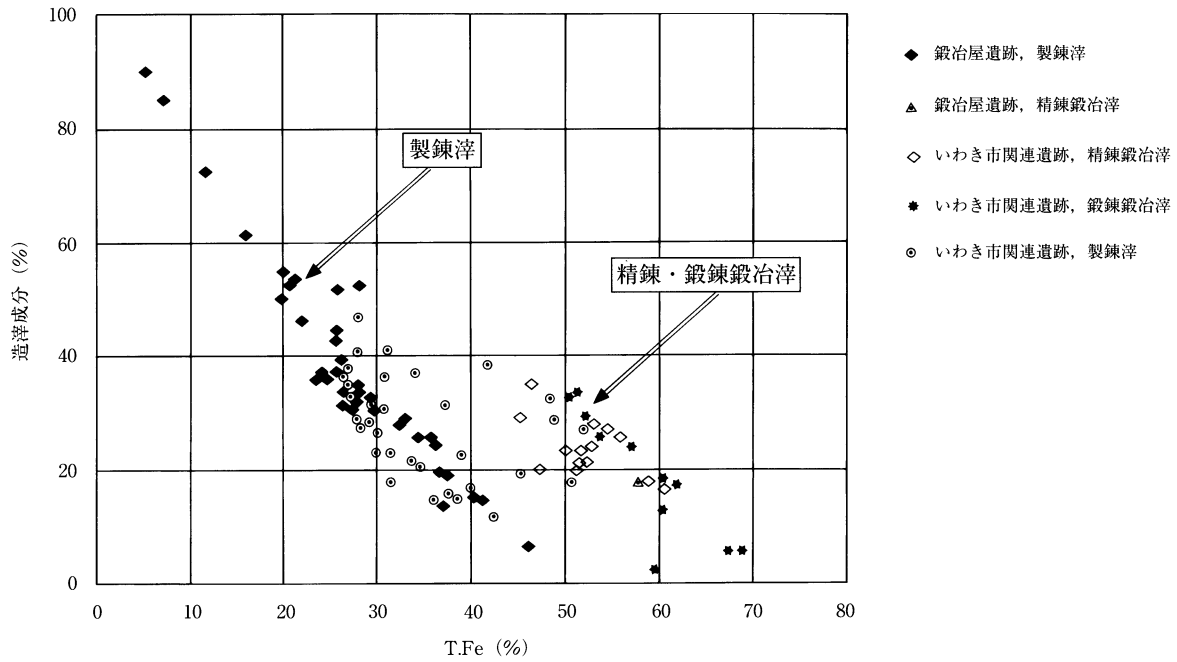


図5 福島県下出土鉄滓のT.Fe - 造滓成分分布図 (2)

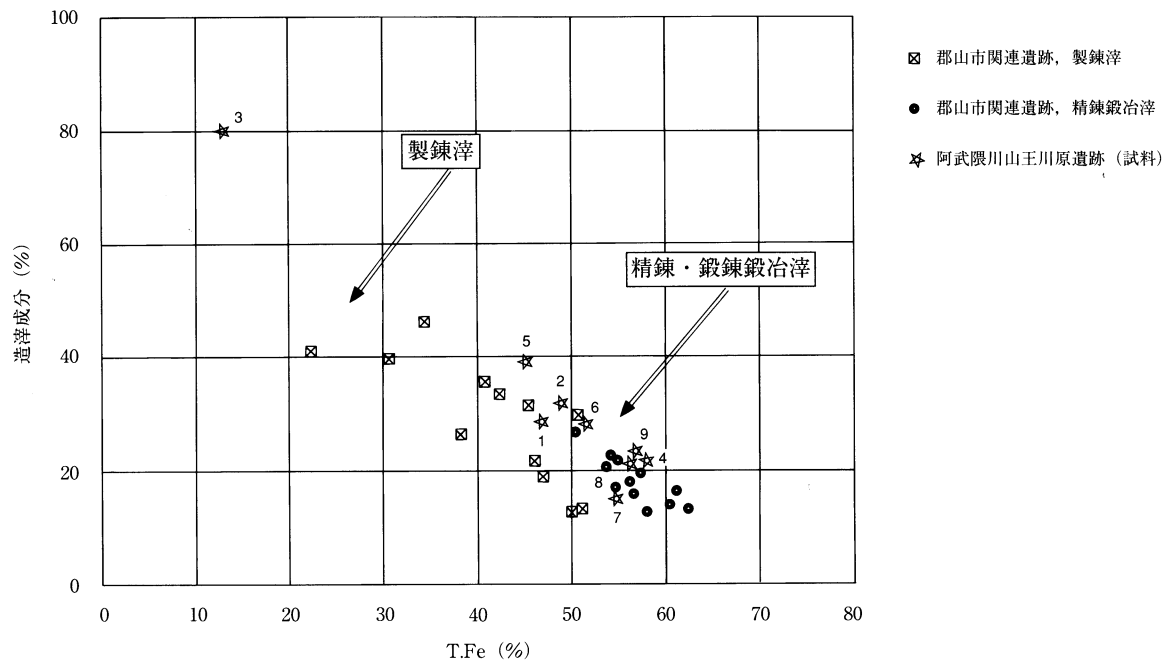


図6 福島県下出土鉄滓のT.Fe - 造滓成分分布図 (3)

(3) 鉄の分析結果について

分析結果表に記載されている全鉄分 (TotalFe=T.Feと表示) の量と、その後に記載されている金属鉄 (MetallicFe=M.Fe), 酸化第一鉄 (FeO) および酸化第二鉄 (Fe_2O_3) との関係は簡単に述べると、後者の二つは酸化鉄 (鉄と酸素の化合物) を示しており、それらの中の鉄 (Fe) の量とM.Feの量とを合計したものが前者のT.Feとなる。

したがって、分析値を合計する場合には全鉄分を除外して集計する必要がある。

また、酸化鉄にはこの他にもいろいろな形態をしたものがあり、鉄滓中の鉄の成分量を見る場合には、全鉄分 (T.Fe) が重要になる。

なお、酸化鉄の他の化合物としては四三酸化鉄 ($\text{FeO} \cdot \text{Fe}_2\text{O}_3 = \text{Fe}_3\text{O}_4$) があるが、化学成分分析から直接含有量は求められない。

また、水分との接触が多い鉄器や鉄滓の場合、水分 (C.W.) と酸化第二鉄とが結合したオキシ水酸化鉄 ($\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{H}_2\text{O} = 2\text{FeOOH}$) が一般的に認められる。そのときの鉄錆の形態は、ゲーサイト [Goethite: α -FeOOH], アカゴナイト [Akagonite: β -FeOOH], レピッドクロサイト [Lepidocrocite: γ -FeOOH] の3種であり、生成環境や条件により変化する。

(4) 鉄滓の化合物について

鉄滓を構成する化合物は一般に次のようなものであり、顕微鏡写真およびX線回折の結果によると、原則としてこれらの存在がいずれかの組み合わせで認められる。なお、このほかにガラス質の化合物も存在する。

ウスタイト	: Wustite	(FeO)	白色の繭玉または葡萄の房状結晶
ファイヤライト	: Fayslite	($2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)	短冊状やレース状の長い結晶
マグネタイト	: Magnetite	(Fe_3O_4)	多角盤状または樹枝状の結晶
ヘマタイト	: Hematite	(α - Fe_2O_3)	赤褐色～赤紫色
マグヘマタイト	: Maghemaite	(γ - Fe_2O_3)	赤褐色～黒紫色
ウルボスピネル	: Ulvospinel	($2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)	淡褐色, 角尖状～六角形状結晶
イルメナイト	: Ilmenite	($\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)	褐色針状の長い結晶
シュードブルックイト	: Pseudobrookite	($\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{TiO}_2$)	針状または板状結晶
ゲーサイト	: Goethite	(α -FeOOH)	黄赤色, 不定型
アカゴナイト	: Akagonite	(β -FeOOH)	黄色, 不定型
レピッドクロサイト	: Lepidocrocite	(γ -FeOOH)	橙赤色, 不定型
ヘーシナイト	: Hercynite	($\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$)	ウスタイト中に多く析出, 胡麻粒状

この他、石英=クォーツ (Quartz: SiO_2), ルーサイト (Leucite: KAlSi_2O_6), プラギオクレーゼ [Plagioclase: (Na,Ca) (Al,Si) $_4\text{O}_8$], ドロマイト [Dolomite: $\text{CaMg}(\text{CO}_3)_2$] 等の鉱物やガラス質の物がある。なお、色調は前記したものと若干異なる場合もある。

試験報告書

1. 件名

X線回折による鉄滓の定性分析

2. 試料記号

No. 2 No. 5

3. 測定装置

理学電機株式会社製ガイガー・フレックス (RAD-II A型)

4. 測定条件

① 使用X線	Co-K α (波長 = 1.79021Å)
② K β 線の除去	Fe
③ 管電圧・管電流	50kV・35mA
④ スキャンング・スピード	2°/min
⑤ サンプリング・インターバル	0.020°
⑥ D. S. スリット	1°
⑦ R. S. スリット	0.3mm
⑧ S. S. スリット	1°
⑨ 検出器	シンチレーション・カウンター

5. 測定結果

同定された物質はチャートに記入しましたので御参照下さい。

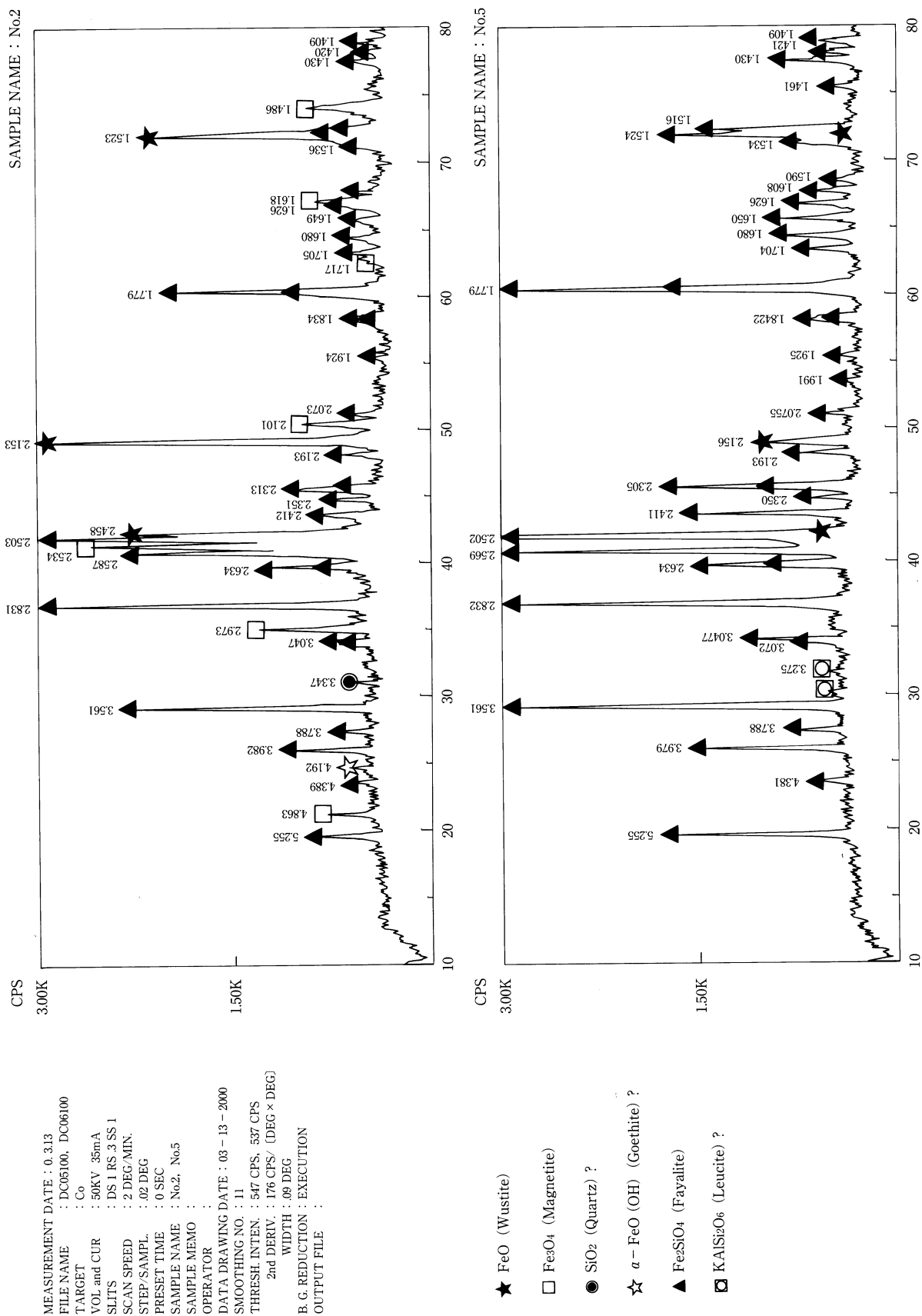
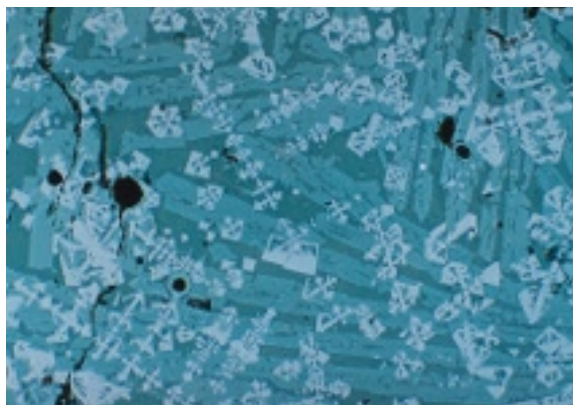


図7 各試料のX線回折



× 100

試料 1	種 別
FBI990001	精錬鍛冶滓



× 400

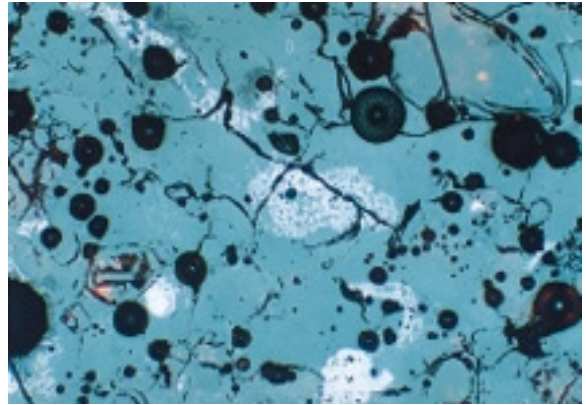


× 100

試料 2	種 別
FBI990002	精錬鍛冶滓

写真1 各試料の顕微鏡写真(1)

× 400
 (倍率を示した写真は60%に縮小している)

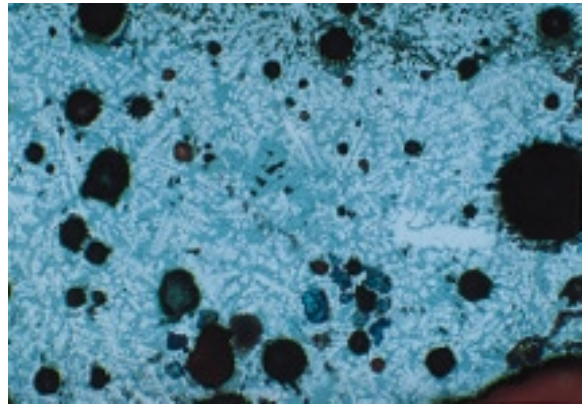


× 100

試料 3	種 別
FBI990003	ガラス質流出鉄滓



× 400



× 100

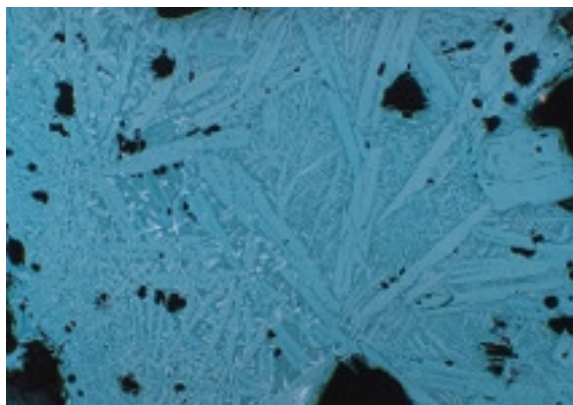
試料 4	種 別
FBI990004	精錬鍛冶滓



× 400

写真2 各試料の顕微鏡写真(2)

(倍率を示した写真は60%に縮小している)

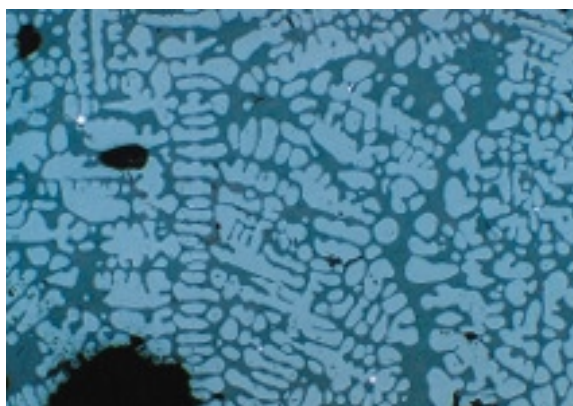


× 100

試料 5	種 別
FBI990005	精錬鍛冶滓

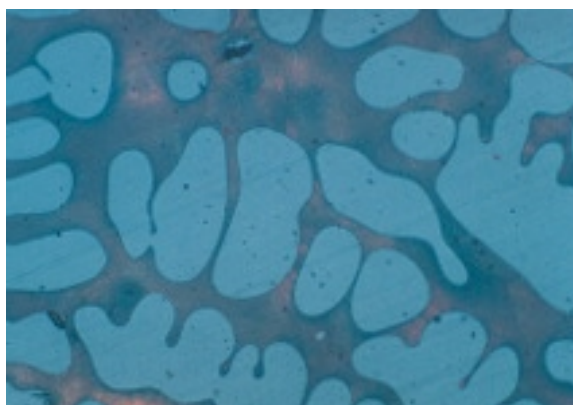


× 400



× 100

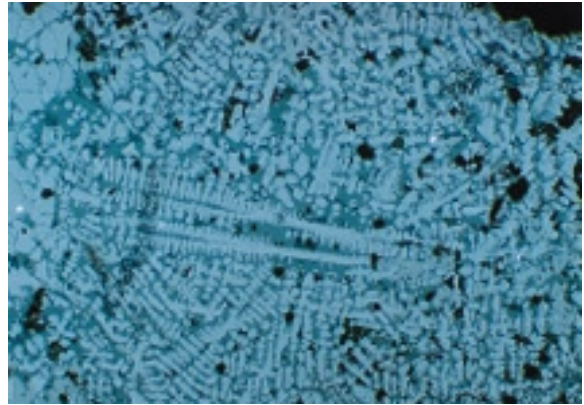
試料 6	種 別
FBI990006	精錬鍛冶滓



× 400

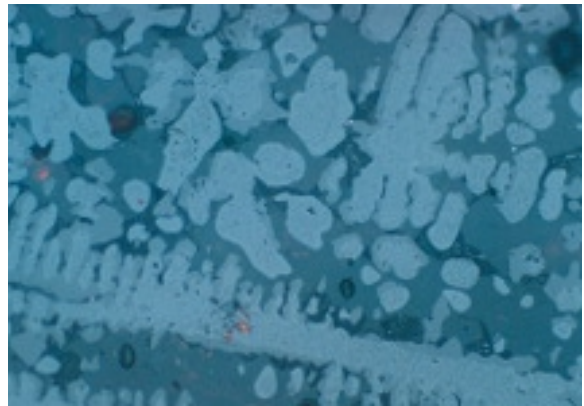
写真3 各試料の顕微鏡写真(3)

(倍率を示した写真は60%に縮小している)



× 100

試料 7	種 別
FBI990007	精錬鍛冶滓

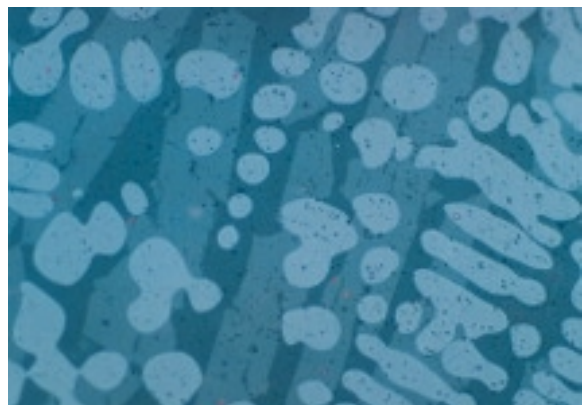


× 400



× 100

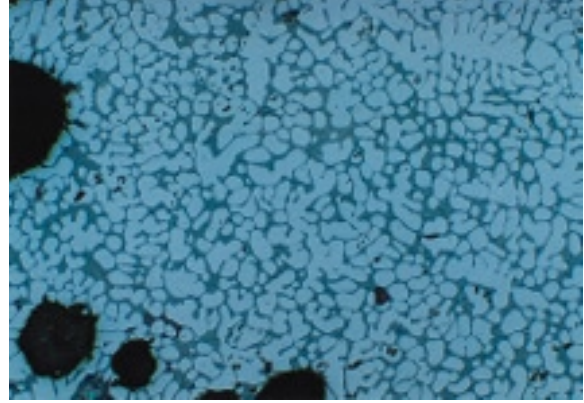
試料 8	種 別
FBI990008	鍛冶滓



× 400

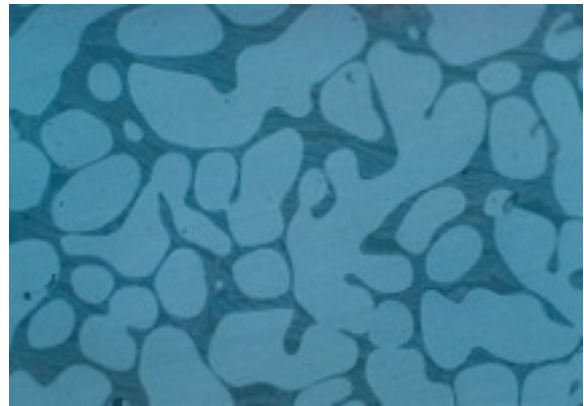
写真4 各試料の顕微鏡写真(4)

(倍率を示した写真は60%に縮小している)



× 100

試料 9	種 別
FBI990009	鍛冶滓



× 400

(倍率を示した写真は60%に縮小している)

写真5 各試料の顕微鏡写真(5)

写 真 図 版

山王川原遺跡



1 調査3区全景（北より）



2 調査3区全景（上空より）



3 調査3区近景（北より）



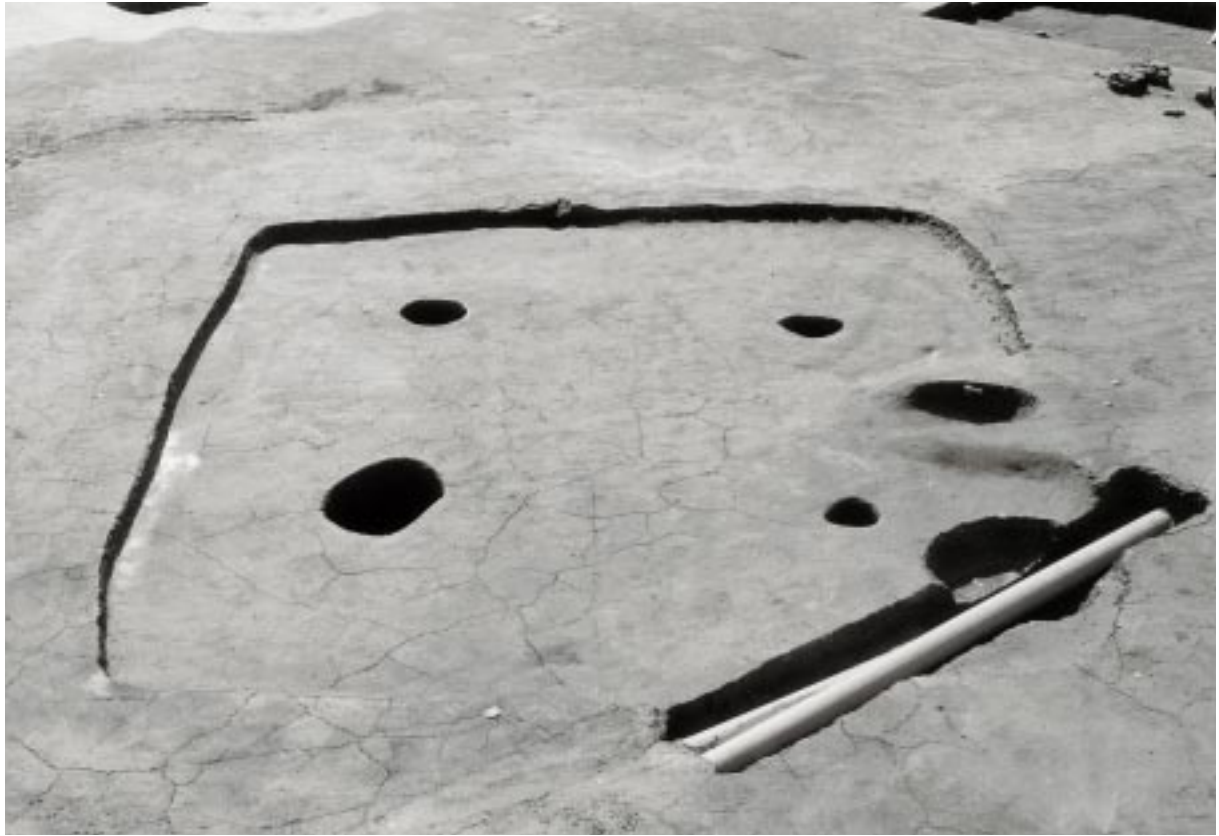
4 調査3区近景（北より）



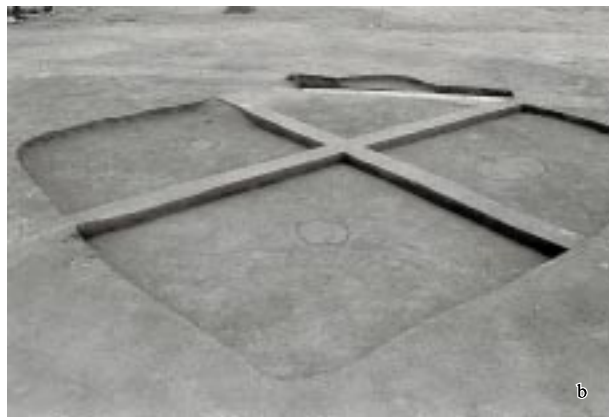
5 調査3区南側基本土層全景（東より）



6 調査3区南側基本土層全景（南より）

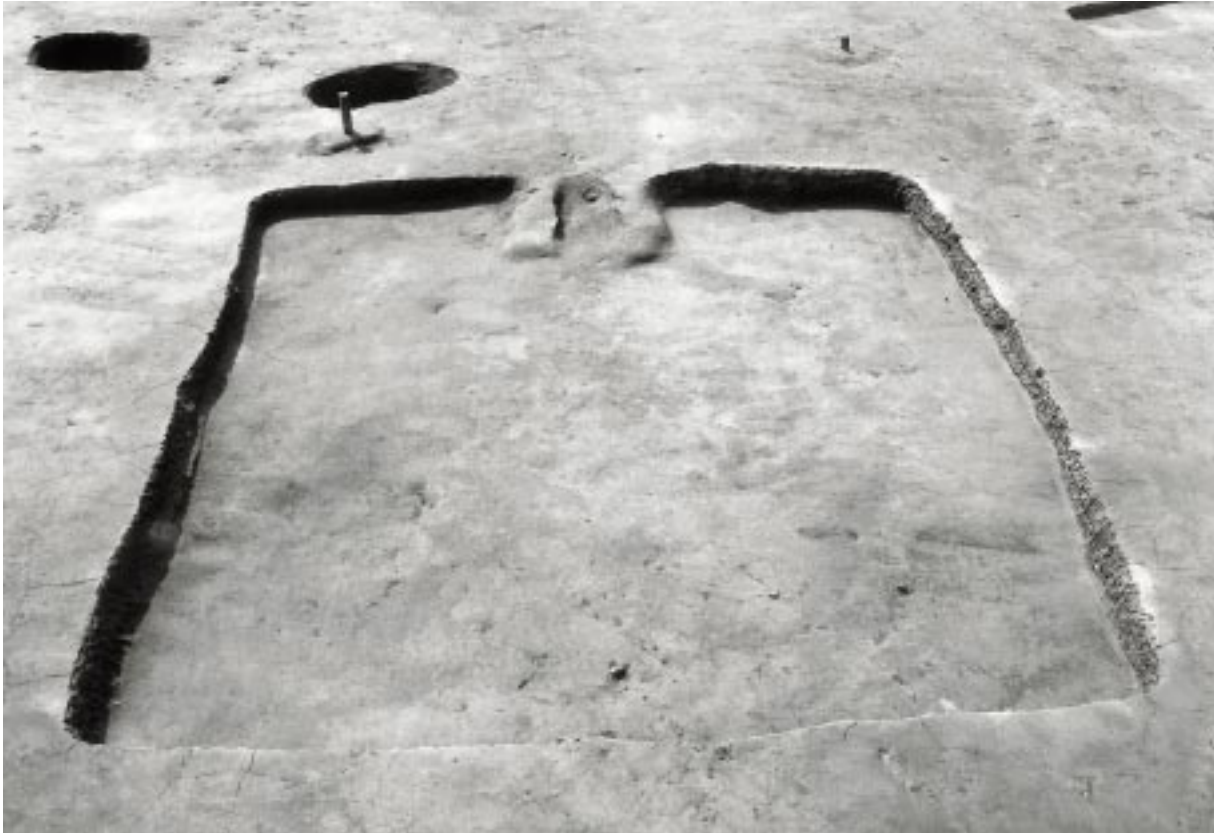


7 1号住居跡（東より）



8 1号住居跡細部

a 検出状況（東より） b 遺構断面（西より）
c カマド（南西より） d カマド断割状況（南より）



9 2号住居跡（東より）



10 2号住居跡細部

a 検出状況（東より） b 遺構断面（南より）
c カマド（東より） d カマド遺物出土状況（東より）

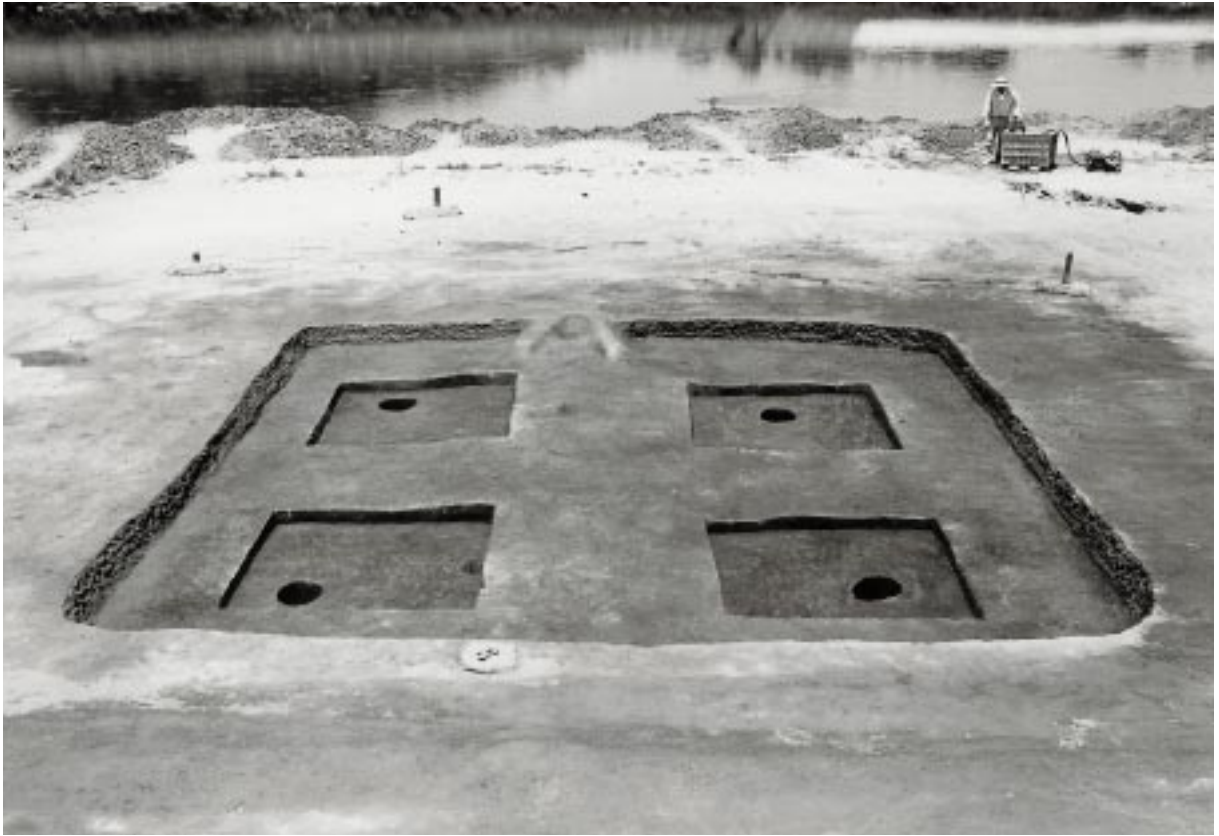


11 4号住居跡（南より）

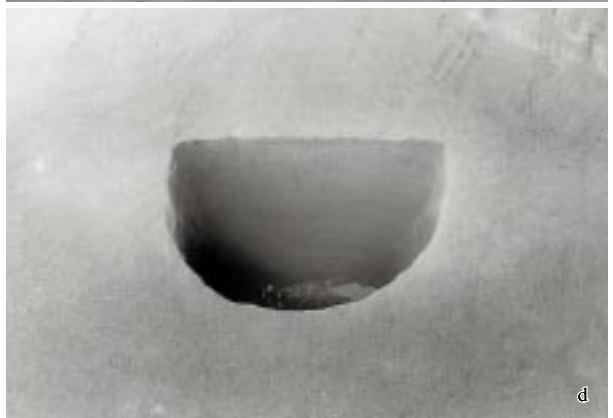
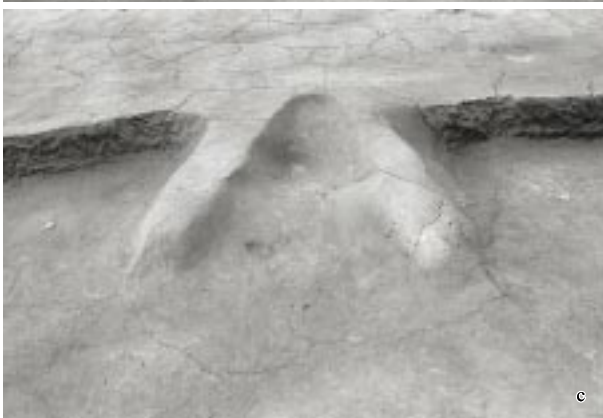


12 4号住居跡細部

a S I 03重複状況（東より）
b 遺構断面（東より）
c カマド（南より）
d カマド断面（東より）



13 5号住居跡(南より)



14 5号住居跡細部

a 検出状況(西より) b 遺構断面(東より)
c カマド(東より) d P1断面(南東より)



15 6号住居跡（東より）



a



b



c



d

16 6号住居跡細部

a 遺物出土状況（南より） b 遺物出土状況（北より）
c カマド（北より） d P3断面（東より）



17 7号住居跡（東より）



a



b



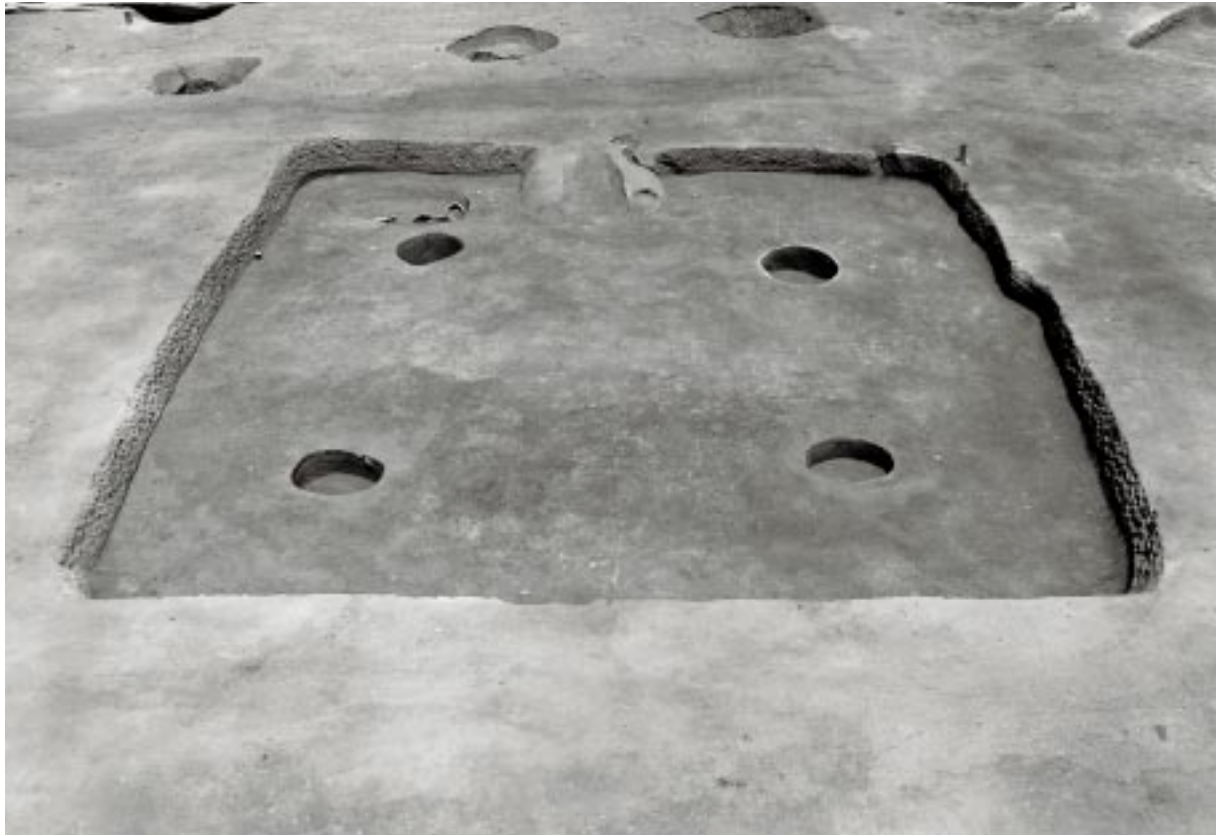
c



d

18 7号住居跡細部

a 検出状況（南より） b 遺構断面（西より）
c カマド（東より） d 遺物出土状況（南より）



19 8号住居跡（南より）



a



b



c



d

20 8号住居跡細部

a 遺構断面（南より） b カマド（南より）
c P5遺物出土状況（北より） d 遺物出土状況（東より）



21 9号住居跡（西より）



a



b



c



d

22 9号住居跡細部

a 検出状況（北西より） b 遺構断面（東より）
c カマド遺存状況（南より） d 遺物出土状況（南東より）



23 10号住居跡（東より）



a



b



c



d

24 10号住居跡細部

a 検出状況（西より） b 遺構断面（南より）
c 遺物出土状況（西より） d 遺物出土状況（西より）



25 11号住居跡（南より）



a



b



c



d

26 11号住居跡細部

a 検出状況（東より） b 遺構断面（東より）
c カマド（東より） d カマド断割状況（南東より）



27 12号住居跡（東より）



a



b



c



d

28 12号住居跡細部

a 遺構断面（西より） b P1遺物出土状況（北より）
c 遺物出土状況（南より） d カマド遺存状況（南より）



29 13号住居跡（北より）



30 13号住居跡細部

a 遺構断面（南より） b カマド（東より）
c 遺物出土状況（東より） d 遺物出土状況（東より）



31 14号住居跡（南より）



a



b



c



d

32 14号住居跡細部

a 検出状況（南より） b 遺構断面（南より）
c カマド（南より） d カマド断割状況（南より）



33 15号住居跡（南より）



a



b



c



d

34 15号住居跡細部

a 検出状況（西より） b 遺構断面（北より）
c カマド（南より） d カマド断面（東より）



35 16号住居跡（東より）



36 16号住居跡細部

a 遺構断面（南より） b 遺物出土状況（南より）
c カマド（東より） d カマド断割状況（南より）



37 17号住居跡（北より）



38 17号住居跡細部

a 遺物出土状況（北より） b P1遺物出土状況（北より）
c カマド検出状況（東より） d カマド断割状況（北西より）



39 18号住居跡（東より）



40 18号住居跡細部

a 検出状況（北より） b カマド（南より）
c 柱穴掘り込み状況（東より） d 新・旧カマド煙道（南より）



41 19号住居跡（東より）



a



b



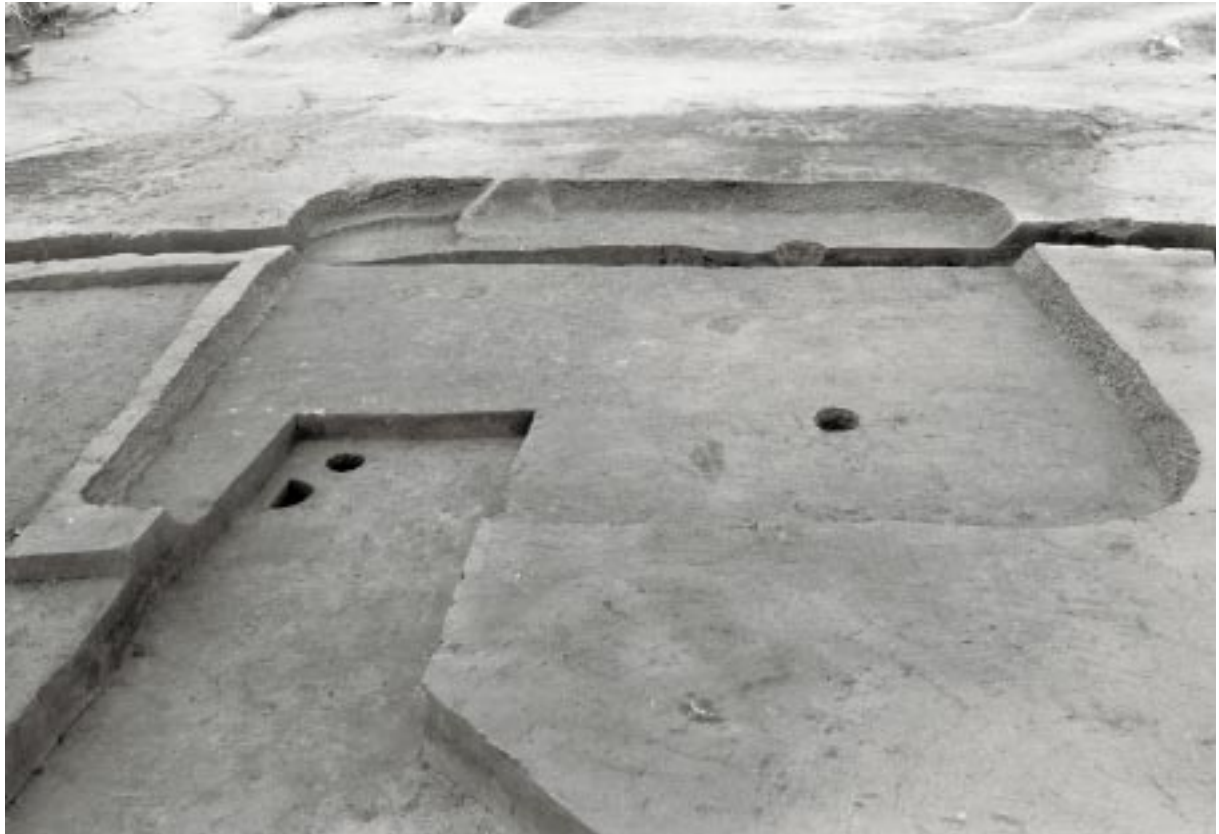
c



d

42 19号住居跡細部

a 遺構断面（東より） b 遺物出土状況（東より）
c カマド（北より） d カマド断面（東より）



43 20号住居跡（東より）



44 20号住居跡細部

a 検出状況（東より） b 遺構断面（東より）
c カマド（東より） d カマド断割状況（東より）

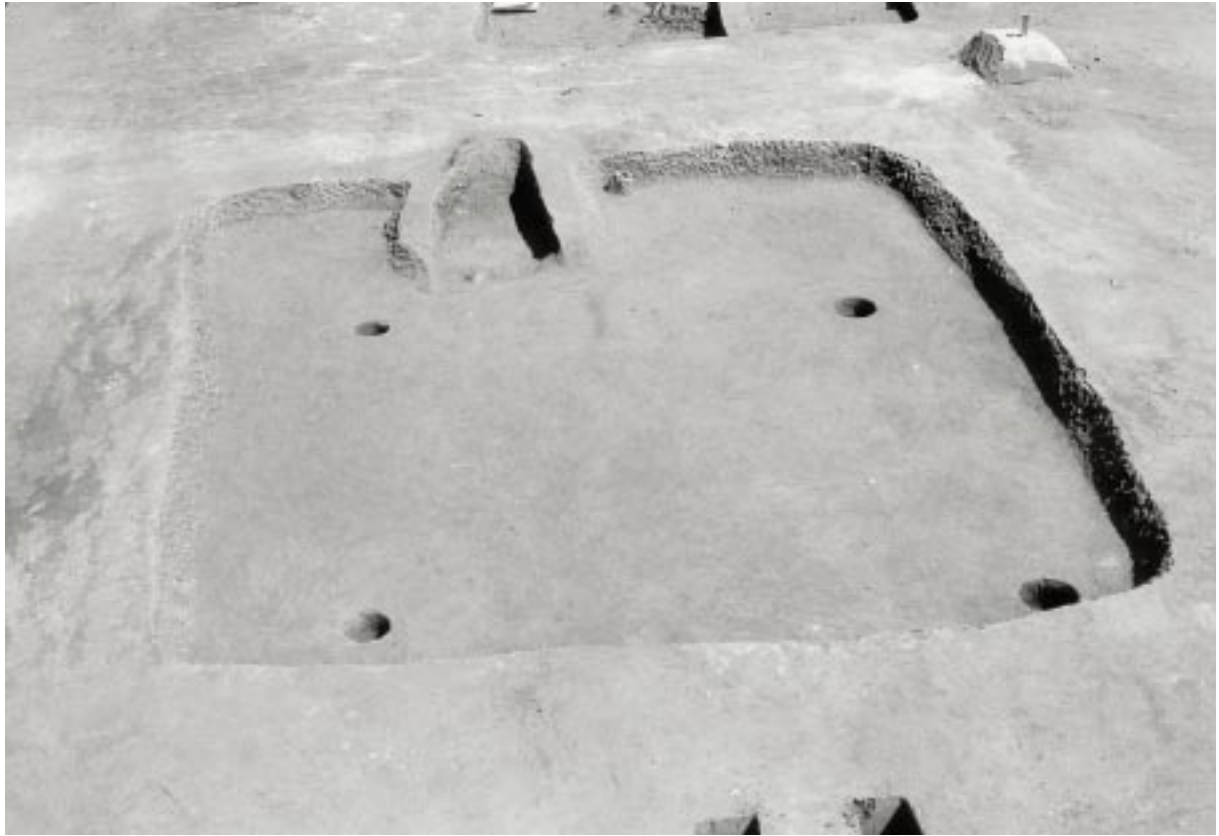


45 21号住居跡（東より）



46 21号住居跡細部

a 検出状況（東より） b 遺構断面（南より）
c 遺構断面（南より） d P3断面（北より）



47 22号住居跡（南より）



a



b



c



d

48 22号住居跡細部

a 遺構断面（南より） b 遺構断面（西より）
c カマド（南より） d カマド断割状況（南より）



49 23号住居跡（南より）



a



b



c



d

50 23号住居跡細部

a 遺構断面（西より） b カマド（南より）
c カマド（南より） d カマド袖材出土状況（南より）



51 24号住居跡（南より）



52 24号住居跡細部

a 遺物出土状況（南より） b カマド（南より）
c カマド断面（北東より） d P1断面（東より）



53 25号住居跡（南より）



a



b



c



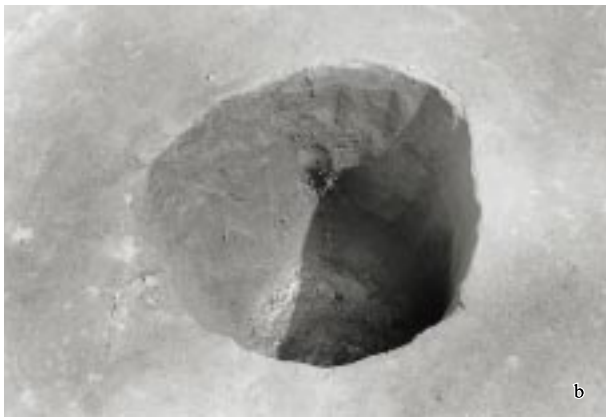
d

54 25号住居跡細部

a 遺構断面（北西より） b P2（南より）
c カマド（南より） d カマド断割状況（南より）



55 26号住居跡(南より)



56 26号住居跡細部

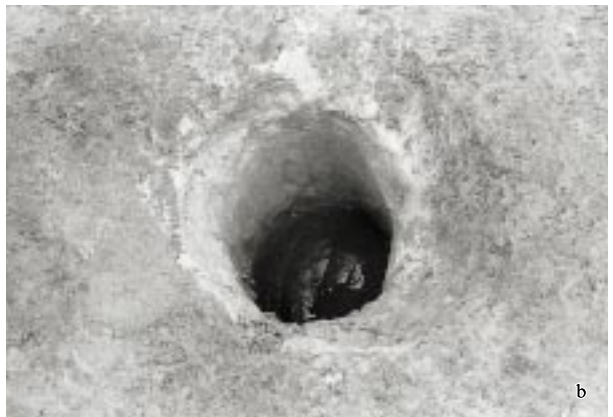
a 遺構断面(南より) b P1(南より)
c カマド(南より) d カマド断面(南東より)



57 27号住居跡（南より）



a



b



c



d

58 27号住居跡細部

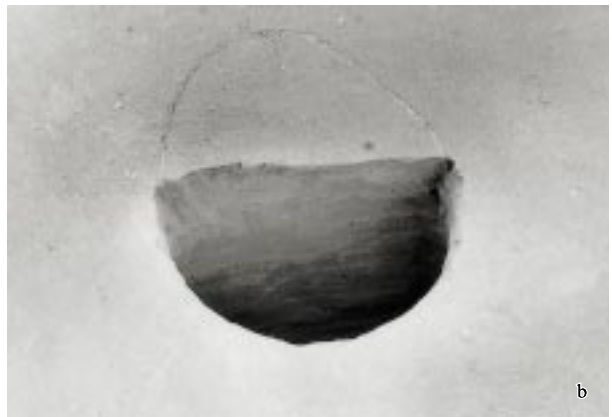
a 遺構断面（南西より） b P4（南より）
c カマド（南より） d カマド断面（南より）



59 28号住居跡（南より）



a



b



c



d

60 28号住居跡細部

a 遺構断面（北より） b P1断面（東より）
c カマド（南より） d カマド断割状況（南より）



61 29号住居跡（南より）



a



b



c



d

62 29号住居跡細部

a 粘土だまり断割状況（東より） b P2断面（西より）
c カマド（南より） d カマド断面（西より）



63 30号住居跡（西より）



64 30号住居跡細部

a 遺構断面（南より） b 遺構断面（西より）
c 床面焼土断割状況（西より） d P1（北より）



65 31号住居跡（南西より）



66 33号住居跡（南より）



67 32号住居跡（西より）



68 32号住居跡細部

a 遺構断面（西より） b カマド断面（北より）
c カマド遺物出土状況（北より） d カマド断割状況（北より）



69 34号住居跡（北より）



70 34号住居跡細部

a 遺構断面（南東より） b 遺構断面（東より）
c カマド（北より） d カマド断面（北東より）



71 35号住居跡（南より）



72 35号住居跡細部

a 遺構断面（東より） b 遺物出土状況（西より）
c カマド（南より） d カマド断割状況（南より）



73 36号住居跡（南より）

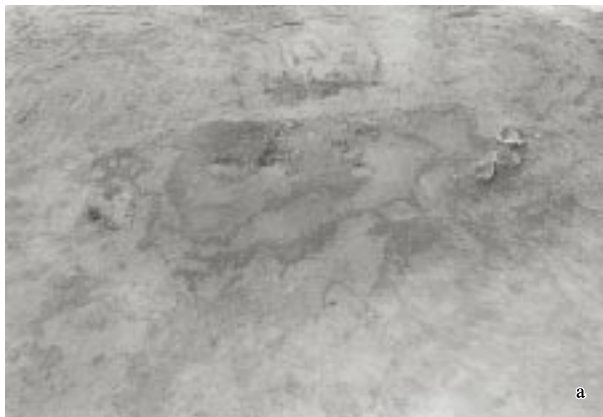


74 36号住居跡細部

a 検出状況（南より） b 遺構断面（東より）
c カマド（南より） d カマド断面（南より）



75 37号住居跡（西より）



a



b



c



d

76 37号住居跡細部

a 検出状況（南より） b 遺物出土状況（南より）
c カマド（南より） d カマド断割状況（南より）



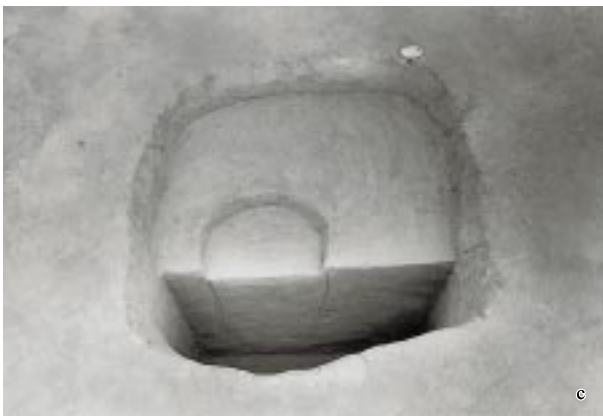
77 1号建物跡（西より）



a



b



c



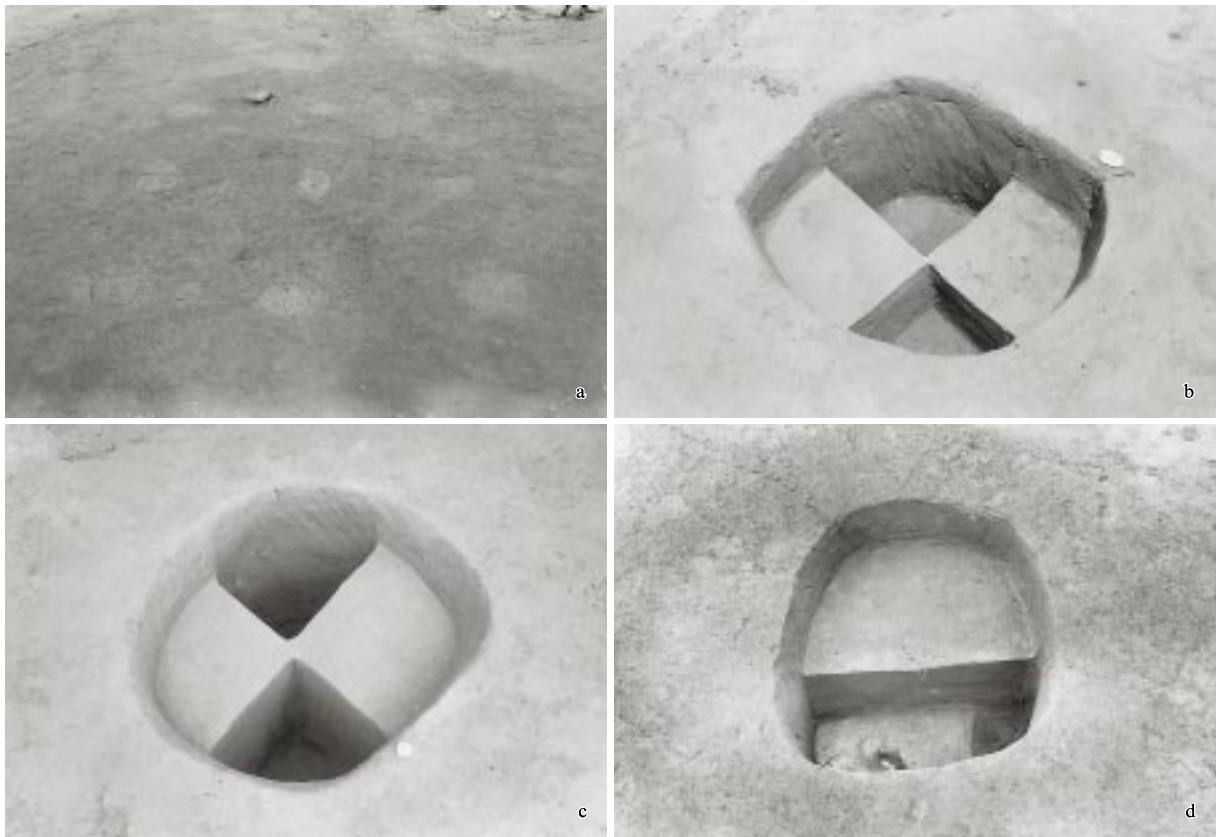
d

78 1号建物跡細部

a 検出状況（南より） b P1断面（南より）
c P3断面（東より） d P5断面（南より）



79 2号建物跡（南東より）

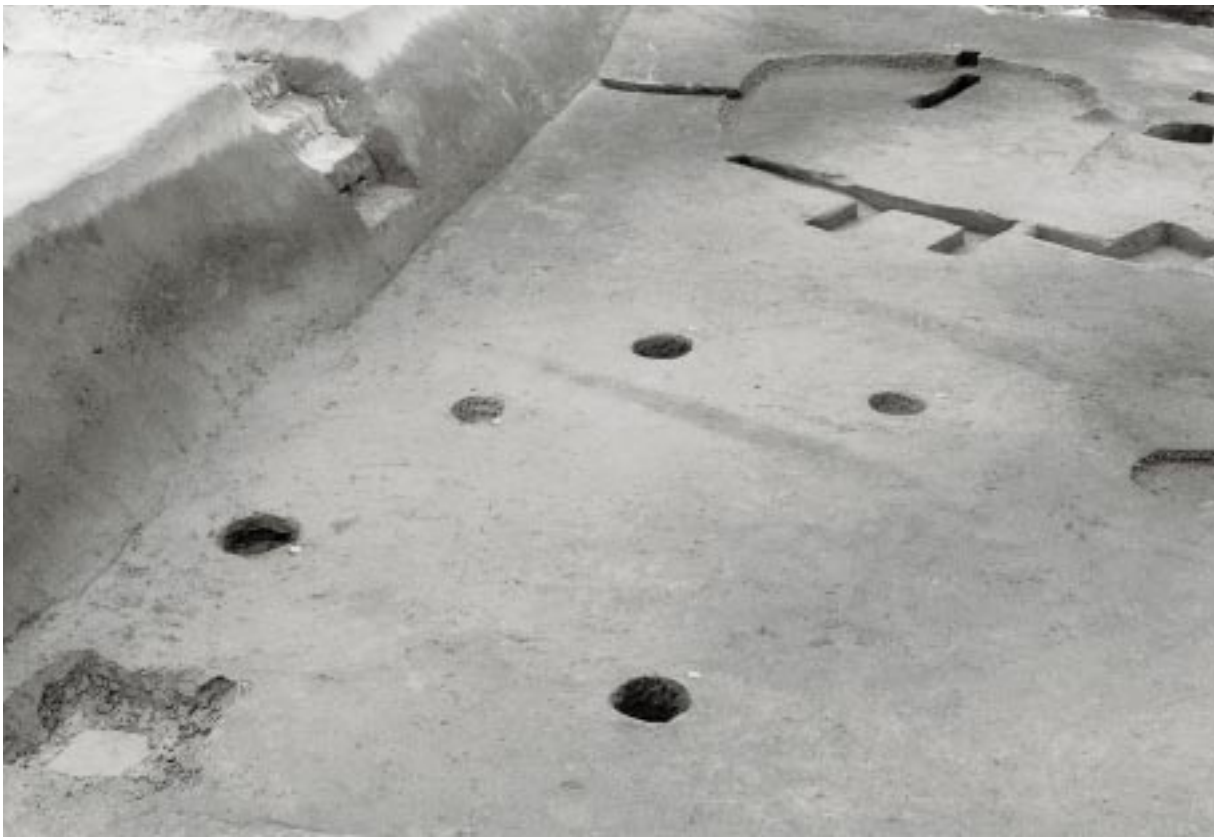


80 2号建物跡細部

a 検出状況（東より） b P1断面（南より）
c P3断面（東より） d P6断面（西より）



81 3号建物跡（南より）



82 4号建物跡（東より）



83 1号鍛冶遺構（南より）



a



b



c



d

84 1号鍛冶遺構細部

a 廃滓層（西より） b 廃滓層（西より）
c 鍛冶炉断割状況（西より） d P1断面（西より）



a



b



c



d



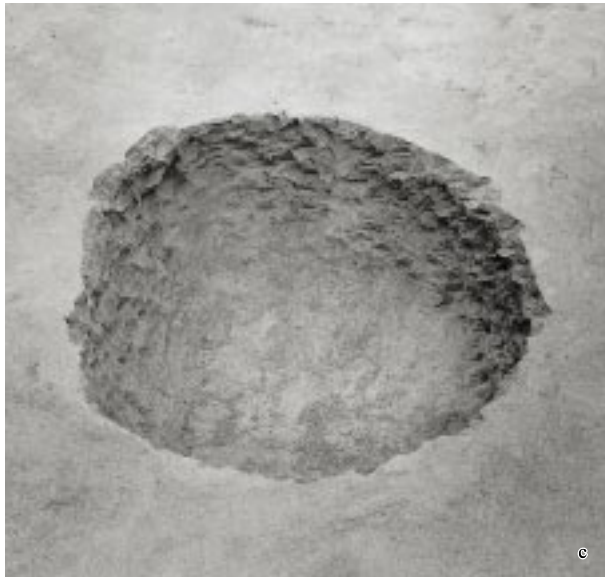
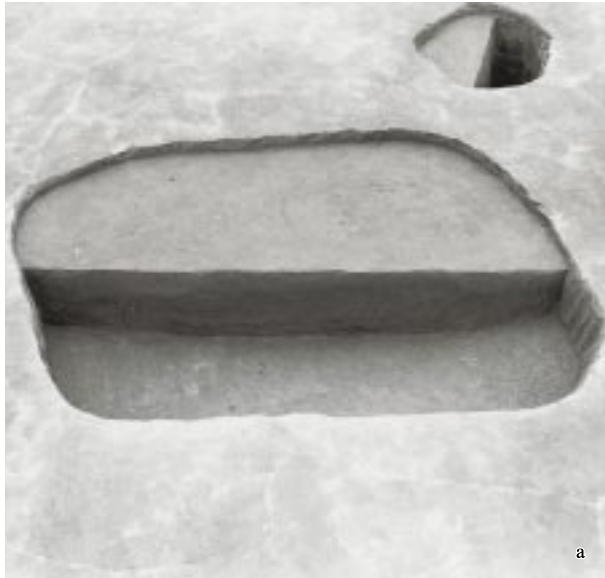
e



f

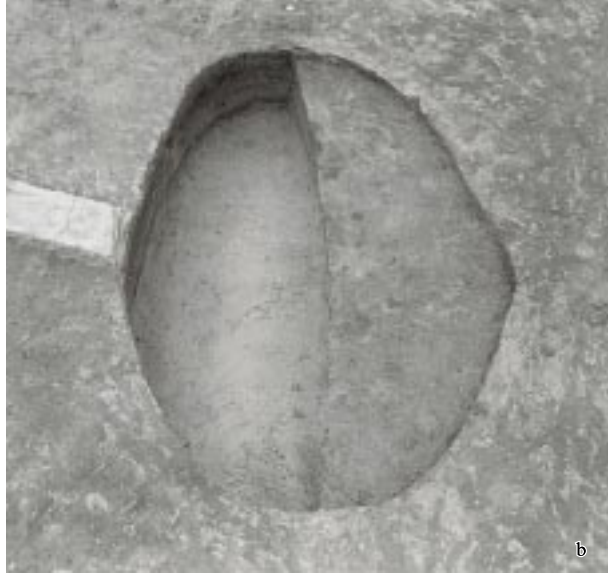
85 1～6号土坑

a 1号土坑(南より) b 2号土坑(西より) c 3号土坑(東より)
d 4号土坑(東より) e 5号土坑(南より) f 6号土坑(南より)



86 7～12号土坑

a 7号土坑(西より) b 8号土坑(南より) c 9号土坑(南より)
d 10号土坑(南より) e 11号土坑(南より) f 12号土坑(東より)



87 13 ~ 18号土坑

a 13号土坑 (西より) b 14号土坑 (北より) c 15号土坑 (南より)
d 16号土坑 (南より) e 17号土坑 (西より) f 18号土坑 (東より)



88 1号溝跡（南より）



89 1・2号焼土遺構



a 1号焼土遺構（南より） b 2号焼土遺構（東より）



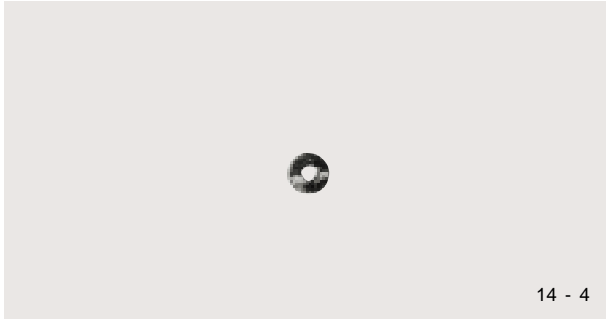
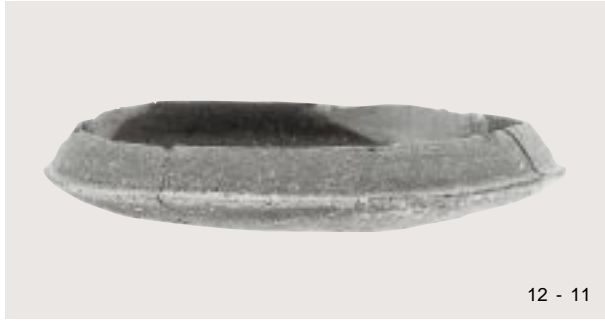
90 調査風景



a 調査前現況（南より） b 五百川小学校見学風景



91 2号住居跡出土遺物



92 2・3・4号住居跡出土遺物



93 4・5号住居跡出土遺物



94 5・6号住居跡出土遺物



25 - 1



25 - 5



25 - 4



25 - 2



25 - 3



25 - 6

95 6号住居跡出土遺物



28 - 5



28 - 7



28 - 4



28 - 9



31 - 7

96 7・8号住居跡出土遺物



32 - 1



32 - 5



32 - 2



32 - 4



32 - 3

97 8号住居跡出土遺物



98 2・8号住居跡出土遺物



41 - 3



41 - 5



41 - 4



41 - 6

99 12号住居跡出土遺物



45 - 1



45 - 4



45 - 5



45 - 6



45 - 7

100 13号住居跡出土遺物



101 13号住居跡出土遺物



102 16号住居跡出土遺物



54 - 2



54 - 4



57 - 1



54 - 3



57 - 3

103 16・17号住居跡出土遺物



57 - 4



57 - 8



63 - 2



60 - 12

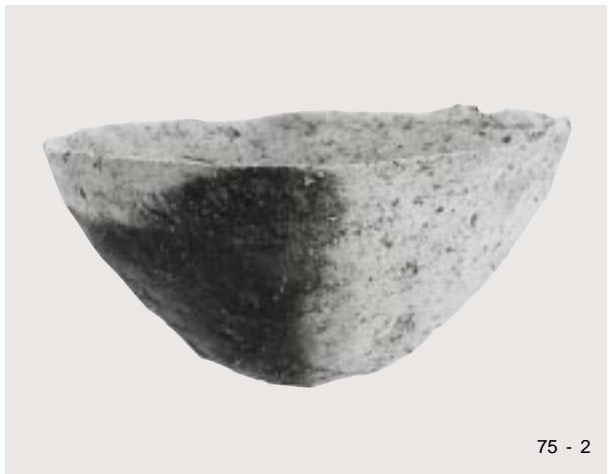


63 - 5

104 17・18・19号住居跡出土遺物



105 19号住居跡出土遺物



106 19・23号住居跡出土遺物



75 - 3

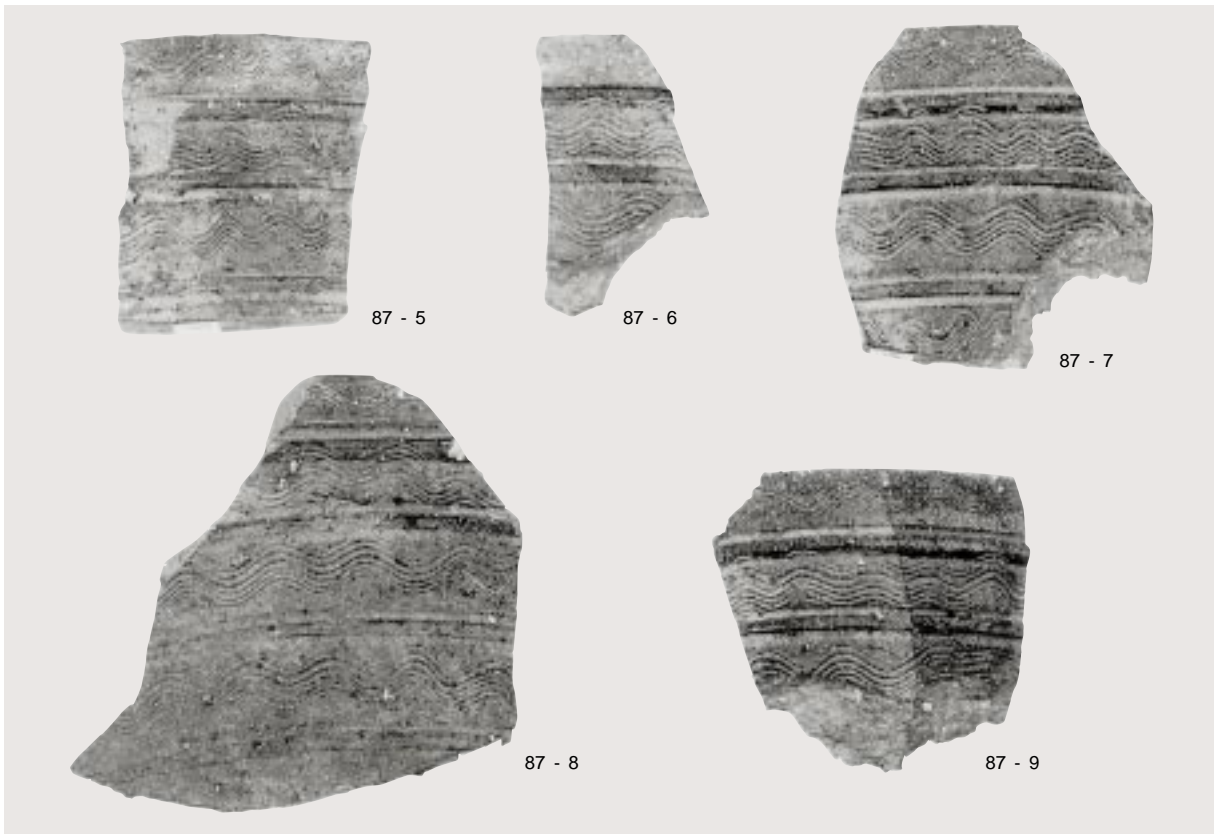


78 - 3



90 - 5

107 23・24・28号住居跡出土遺物



87 - 5

87 - 6

87 - 7

87 - 8

87 - 9

108 27号住居跡出土遺物



94 - 2



100 - 3



96 - 5



106 - 3



106 - 2

109 29・30・32・35号住居跡出土遺物



106 - 6



109 - 1



111 - 1



106 - 8



111 - 2



106 - 7



113 - 1

110 35 ~ 37住居跡, 1号建物跡出土遺物



116 - 1



131 - 10



123 - 1



131 - 9



123 - 2



131 - 5



131 - 2

111 3号建物跡, 12・18号土坑, 1号溝跡出土遺物



126 - 5



138 - 5



138 - 19



138 - 9



139 - 5



138 - 12



139 - 15



138 - 15

112 1号鍛冶遺構，遺構外出土遺物



141 - 3



141 - 7



141 - 5



142 - 3



144 - 9

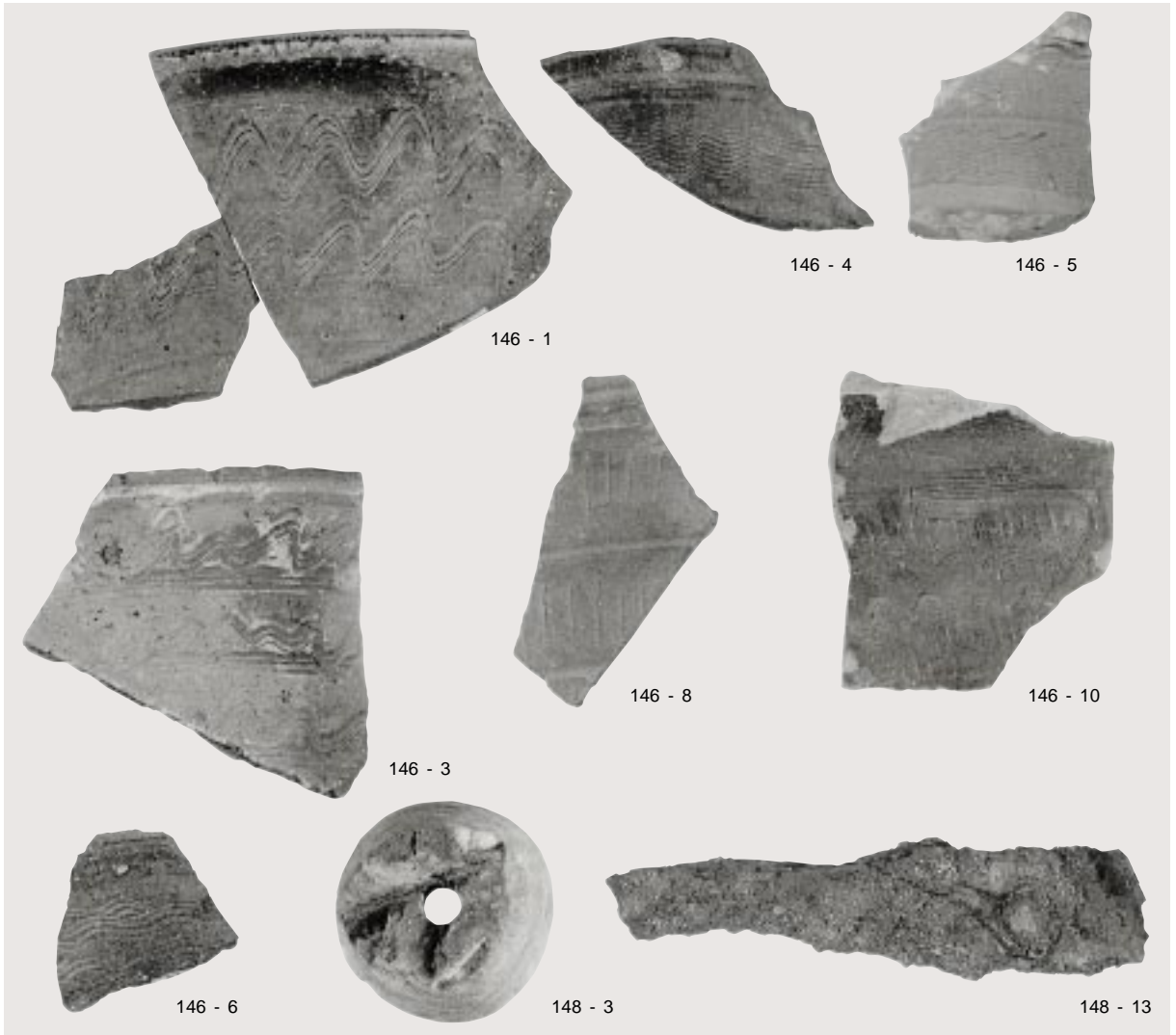
113 遺構外出土遺物



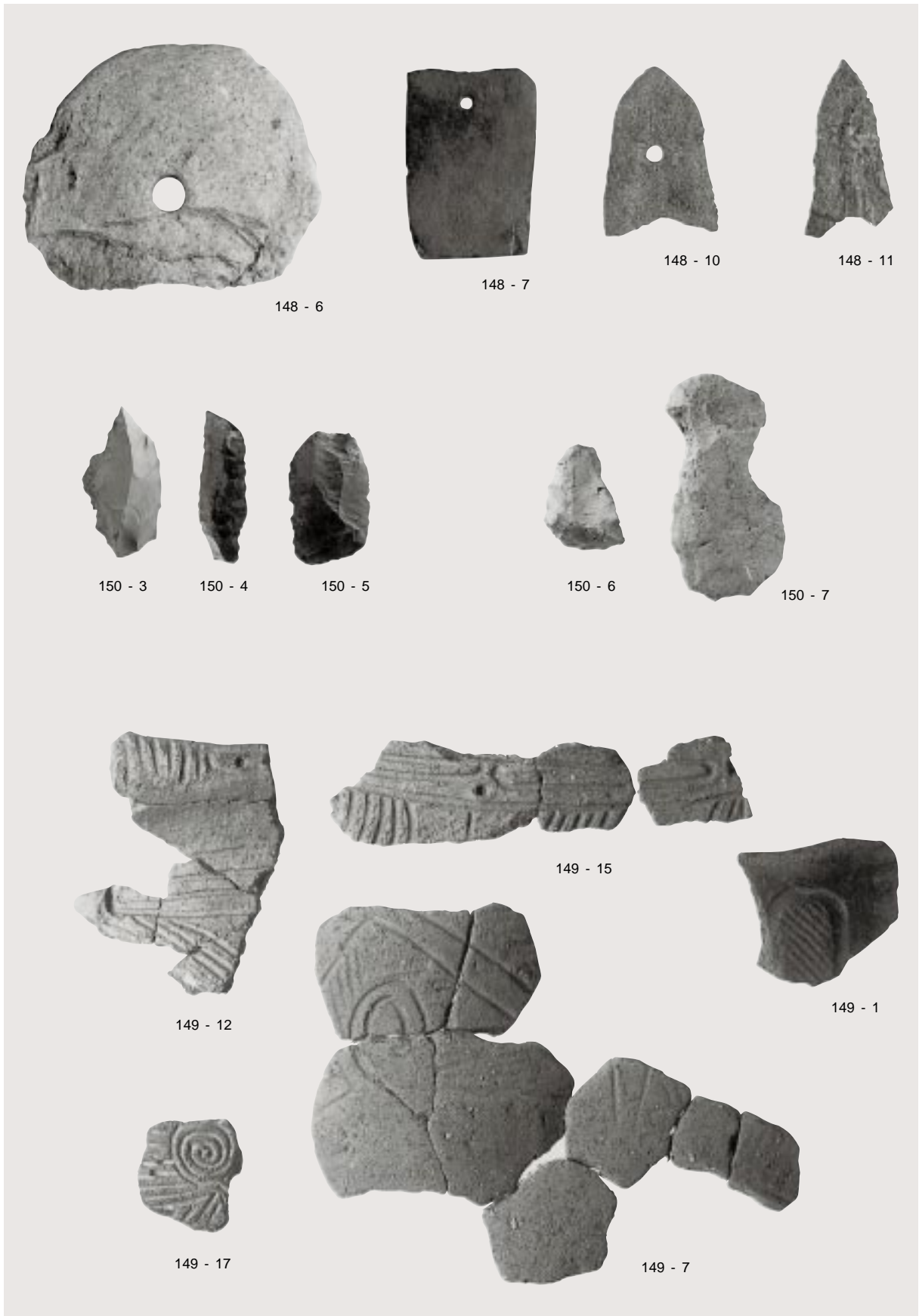
139 - 8



139 - 8



114 遺構外出土遺物



115 遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	あぶくまがわうがんちくていいせきはくつちようさほうこく							
書名	阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査報告							
副書名	山王川原遺跡							
巻次	1							
シリーズ名	福島県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第380集							
編著者名	安田 稔・成田有策・小暮伸之・大河原 勉・堀川雄二							
編集機関	財団法人 福島県文化センター 〒960-8116 福島県福島市春日町5-54 TEL 024-534-9191							
発行機関	福島県教育委員会 〒960-8065 福島県福島市杉妻町2-16 TEL 024-521-1111							
発行年月日	平成13年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド 市町村 遺跡番号		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査機関	調査面積 m ²	調査原因
さんおうがわら 山王川原	ふくしまけん あだちぐん 福島県安達郡 もとみやまちなか きあざ 本宮町高木字 さんおうがわら 山王川原	07323	0087	37度 30分 57秒	140度 24分 48秒	19990414 ～19990906 19991130 ～19991201	9,000 m ²	阿武隈川右岸 築堤に伴う事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
山王川原	集落跡 散布地	縄文 弥生 古墳 奈良 平安	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑 焼土遺構 鍛冶遺構 溝跡 ピット群	37軒 4棟 18基 2基 1基 1条 3箇所	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 土製品 石器 羽口 陶磁器 石製品 鉄製品 鉄滓 鍛造剥片 銃弾	699点 8点 64,187点 1,516点 230点 18点 415点 164点 27点 78点 91.8 kg 200 g 1点	古墳時代後期～奈良時代の自然堤防上の竪穴住居跡・掘立柱建物跡を中心とした遺跡。遺物は縄文土器・弥生土器が少量と古墳時代から平安時代までの土師器・須恵器が多量出土。	

福島県文化財調査報告書 第380集

阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査報告 1

山王川原遺跡

平成13年3月31日

編集	財団法人 福島県文化センター（遺跡調査課）		
発行	福島県教育委員会	〒960-8065	福島市杉妻町2-16
	財団法人 福島県文化センター	〒960-8116	福島市春日町5-54
	建設省東北地方建設局福島工事事務所	〒960-8584	福島市黒岩榎平36
印刷	(有)平電子印刷所	〒970-8024	いわき市平北白土字西ノ内13

本書は中性紙を使用しています。

本文 年史用紙 80kg

写真 アート 110kg